

ラブライブ×イナイレ ～世界への挑戦～

松浦果南の自称兄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公、大海龍也は自身の強すぎる才能故にサッカーを諦めた元プレイヤー。そんなかれにある報せが届く「はあ!? 俺が日本代表!!?」龍也は自身のサッカーを取り戻す事が出来るのか？

この話にはラブライブキャラとイナイレキャラが選手として出てきます。

そして、日本代表イレブンはオリ主、ラブライブキャラ、イナイレキャラの混合となります。

この話にはスクールアイドルと言う単語はでてきません。

目次

第一章：開幕!! FFIアジア地区予選	
第1話：開かれる世界への扉	2
第2話：失われた天才、大海龍也の過去	
第3話：結成!! 日本代表イレブン!!	12
第4話：仲間達	21
第5話：抽選会	35
第6話：開幕アジア予選!! vs オーストラリア代表「ビッグウェーブス」!!	42
第7話：オーストラリアの誤算	
第8話：戦後休息	50
第9話：カターンル戦に向けて・・・	64
第10話：vs カターンル代表「デザートライオン」!!	68
第11話：決着！ 準決勝!!	76
第12話：強襲!! 「ネオジャパン」!!	84
第13話：「正義の鉄拳」の限界	93
第14話：決着!! 「ネオジャパン」!!	100

	第15話：韓国戦に向けて	106		第22話：親善パーティー（前編）	
	第16話：韓国戦	112		第23話：親善パーティー（後編）	158
	第17話：神の闘いアフロデivsス	117		第24話：開戦！！ vs 「ナイツ・オブ・クイーン」！！	168
	サノオ			第25話：激闘！！ vs 「ナイツ・オブ・クイーン」！！	173
	〈松浦果南〉誕生日編：私の大好きな人	123		第26話：後半戦開始	181
	第18話：キャプテンの役割	131		第27話：決着！！ vs 「ナイツ・オブ・クイーン」！！	188
	第19話：決着！！ 韓国戦!!!	138		第二章：来たぜライオコット島 FFI	181
	第二章：来たぜライオコット島 FFI			世界大会開幕！	
	世界大会開幕！			第20話：世界への旅立ち	143
	第20話：世界への旅立ち	143		〈園田海未〉誕生日編：仲間	194
	第21話：開幕！！ 世界大会!!			第28話：暗雲	205
151					200

	第29話：芽生えた友情	213		第37話：開戦!!	v s 「ユニコーン」	264
	第30話：共同戦線!!	v s 「チームK」!!	219			
	第31話：狙われた龍也	225		第38話：激闘!!	v s 「ユニコーン」	269
	第32話：帝国の反逆	231		!!!		
	第33話：決着! 「チームK」そして…	238		第39話：後半戦。そして…		275
	第34話：v s 「ジ・エンパイア」	245		第40話：一之瀬 一哉		280
	第35話：イギリス v s イタリア戦	253		番外編：ガールズトーク		286
V観戦				〈渡辺 曜〉誕生日編：浦の星女学院		292
第36話：幼馴染、そしてアメリカ戦に向けて…	260		サッカー部	〈西木野真姫〉誕生日編：思い出	298	
			第41話：記者会見			302

	第42話：予選リーグ最終戦に向けて	308
	第43話：特訓だ!!	313
	第44話：数日前に遡り・・・	319
	第45話：闇からの解放	325
	第46話：覚醒のイタリア。キャプテ	
	ンの帰還	331
	第47話：イタリア戦クライマックス	339
	!!	
	第48話：決着!!	347
回	番外編：システイと龍也、約束のデー	353

	幕間章：天界・魔界編	
	第49話：天界と魔界	362
	第50話：天空の使徒	370
	第51話：vs「天空の使徒」決着!!	379
	第52話：「魔界軍団Z」	390
	第53話：龍也の怒り!!「ラストリゾ	
	トD」!!	400
	第54話：ダークエンジェル	408
	第55話：「世界連合・真」vs「ダ	
	クエンジェル」	417
	第56話：激闘!! vs「ダークエン	
	ジェル」!!	424

	第72話：打ち砕け!! ガルシルドの 野望!!!	537	第78話：決勝戦vs「リトルギガン ト」!! キックオフ!!	584
	第73話：闇に染まる龍也	545	第79話：1つのことを極め抜け	591
	第74話：闇を照らす2つの光		第80話：前半戦終了	598
	第75話：40年の戦いの終幕		〈高海千歌〉誕生日編：笑顔のち災難と きどき笑顔	602
557	第76話：勝利の代償と想いの決着		第81話：絶望	607
564	最終章：世界一の栄冠は誰の手に		第82話：希望の光	613
	第77話：最終決戦前日	571	第83話：決勝戦決着!! 世界一は：	620
	〈矢澤にこ〉誕生日編：仲間との1日先	577	最終話：世界大会閉会。そして新たな	628
生			伝説へ・・・	

A f t e r s t o r y : 浮き彫りに
なってくる実力 700
A f t e r s t o r y : 2回戦開始
!! 705
A f t e r s t o r y : 力の差
710
A f t e r s t o r y : 果南の選手
としての人気。そしてファンの恐ろしさ
714
A f t e r s t o r y : メンバーの
危機!! 718
A f t e r s t o r y : 新たなる時
代の幕開け 723

A f t e r s t o r y : 飛び立つ火
龍 728
A f t e r s t o r y : 白熱する前
半戦!! 731
A f t e r s t o r y : v s 浦の星
前半終了 735
A f t e r s t o r y : v s 浦の星
後半開始!! 738
A f t e r s t o r y : 武神の新た
な武器 742
A f t e r s t o r y : 海原の女神
746
A f t e r s t o r y : 俺を誘惑す

る果南が可愛い

750

ム

776

After story:アジア予選

After story:準決勝決着

の約束 龍也の内浦での初ダイビング

781

753

After story:静岡選手権

After story:苦戦の予感

決勝 沼津vs磐田

786

After story:果南の頭を

After story:技術(わざ)

792

よぎる龍也の過去

と技術(わざ)のぶつかり合い

792

After story:再点火!!

After story:決勝戦 前

799

After story:再点火!!

After story:沼津vs磐

799

After story:vs磐田中

田 後半開始!!

804

After story:vs磐田中

After story:静岡選手権

811

After story:ハーフタイ

決着 そして再び・・・

811

After story:ハーフタイ

決着 そして再び・・・

811

After Story:プロの舞台上で

!! W杯編

After story:日本A代表

結成!! 819

After story:アジア予選

開幕! vsベトナム(その1)

825

After story:アジア予選

開幕! vsベトナム(その2)

834

After story:ベトナム戦

後半戦

After story:決着! ベ

843

トナム戦!!

After story:予選リーグ

2戦目に向けて

After story:オーストラ

リア戦前日

After story:vsオース

トラリア 試合開始(キックオフ)!!

870

After story:壁 |

After story:松浦果南

ゴールへの道筋

After story:夫才(エゴイ

スト)

892

885

877

852

A f t e r	s t o r y : 代表の意地	900	後半戦開始!!	945
(プ	ライド)	—	A f t e r	s t o r y : 得点ラッ
A f t e r	s t o r y : v s オース	910	シュ	951
トラリア	試合終了	—	A f t e r	s t o r y : イラク戦決
A f t e r	s t o r y : 日本代表	919	着!!	956
3戦	目前の練習風景	—	A f t e r	s t o r y : アジア予選
A f t e r	s t o r y : イラク戦開	924	4戦目に向けて	962
始!	—	—	A f t e r	s t o r y : 韓国戦前日
A f t e r	s t o r y : 日本	932	練習	968
代	のストライカー	—	A f t e r	s t o r y : 韓国戦開始
A f t e r	s t o r y : イラク戦	939	!	972
前半	終了	—	A f t e r	s t o r y : 韓国戦前半
A f t e r	s t o r y : イラク戦	—	終了	980

After story: V S 選抜 1018
 After story: 同点 1012
 After story: 巻き返し? 1006
 After story: 選抜戦開始 1001
 After story: 再会 994
 !!
 After story: 韓国戦決着 987
 醒
 After story: 立向居の覚

! 最強のシュート技 1070
 After story: 防衛不可能 1062
 開始!!
 After story: カタール戦 1057
 After story: 選抜戦終了 1049
 カ
 After story: ストライ 1042
 After story: 激戦 1034
 使
 After story: 覚醒の墮天 1026
 チーム 前半終了

	A f t e r	s t o r y : 本戦グループ	
	1177	プステージ1戦目vsクロアチア	
	A f t e r	s t o r y : 電撃カウン	
	ター	ー	1183
	A f t e r	s t o r y : 激闘	
	1190		
	A f t e r	s t o r y : クロアチア	
	戦、前半終了	ー	1198
	A f t e r	s t o r y : クロアチア	
戦	後半開始	ー	1206

第一章：開幕!! FFIアジア地区予選

第1話：開かれる世界への扉

く 6年前 く

? : 「またお前俺の努力を泥棒しやがったな!!」

? : 「もうお前とはやりたく無い・気分悪いんだよ!!」

・・・何で俺はこんなクソみたいな才能持ちちまったんだ：コイツのせいで：：：：つ

!!

ピピピッ ピピピッ

? : 「夢か・・・嫌な夢見たな・・・」

母 : 「龍也く? 起きないと遅刻するわよ? 高校サッカー協会の会長さんから」

0 : 00に雷門高校に来てくれって言われてるんでしょ?」

龍也 : 「・・・分かった」

俺の名前は^{おうみりゅうや}大海龍也とある事情で小5からサッカーから離れていた元サッカープレ

イヤー。

因みに今は高2だ。でも、サッカー協会の会長さんが俺に何の用だ？ とても俺の記録が残ってるとは思えないが・・・。

そして雷門高校に向かい到着した俺を待っていたのは同じ様に会長さんに呼び出された日本トップレベルの選手達だった。

雷門高校のキャプテンでGKの円堂守に、エースストライカーの豪炎寺修也。天才ゲームメーカーと言われるMFの鬼道有人に、DFの風丸一郎太。

同じく東京の音ノ木坂学院のFW高坂穂乃果に星空凜。MFの矢澤にこ。

また東京からUTXのキャプテンでエースストライカーの綺羅ツバサに、DFの優木あんじゅ。

北海道の名門、函館聖泉のDF鹿角聖良。

同じく北海道の白恋高校のエースストライカー、吹雪士朗

静岡の今年のインターハイ優勝校の浦の星女学院のFW黒澤ダイヤ。MFの松浦果南に高海千歌そして渡辺曜。最後にDFの津島善子。

福岡の陽花戸高校のGK立向居勇氣。

沖縄の大海原高校のDF綱海条介に土方雷電。

他にも、木戸川清修高校の武方勝。

王帝月ノ宮高校の「戦術の皇帝」と呼ばれる天才MF野坂遊馬。

そして俺の計22人が集められていた。

善子：「あの人誰？」

果南：「さあ？ 見たこと無いけど・・・？」

あんじゅ：「でもここにいて事は選手何じゃない？」

？：「全員揃ったな」

声のした方を見ると現サッカー協会長の響木正剛ひびきせいじろうさんが居た。

響木：「これより、お前たちを世界と戦う日本代表候補選手に任命する!!」

円堂：「え？」

全員：『『『『『ええー！』』』』』

龍也：（マジか・・・）

響木：「今年からフットボールフロンティア世界大会「フットボールフロンティアインターナショナル」通称「FFI」が開催される。高校サッカーの世界一を決める大会だ。お前たちはその代表候補だ」

円堂：「よっしゃーっ!! 次は世界だー!!」

響木：「まだここにいる22人は候補だ。ここから16人まで絞りこむ。その為の選考試合を1週間後に行く。まずはそのチーム分けを発表する」

龍也：「あのお、そう言うことなら俺辞退しても・・・」

響木：「大海、他のやつならともかくお前が抜けるのだけは許さんぞ。我々はお前のあの才能をここに居る誰よりも高く評価してるんだ」

全員：『『ピクツ（キツ）』』

龍也：「ええ〜？」

あーこれ完全に俺の過去知ってますね。つーかそう言う言い方止めてくれませんか？俺に対して何か睨んでる人とか居るんですけど……。

響木：「では、チーム分けを発表する」

Aチーム

GK ☆ 円堂 守 男

DF 優木 あんじゅ 女

DF 鹿角 聖良 女

DF 土方 雷電 男

MF 矢澤 ニコ 女

MF 高海 千歌 女

MF 渡辺 曜 女

MF 野坂 遊馬 男

FW 武方 勝 男

	F W	吹雪	士朗	男
	F W	高坂	穂乃果	女
	B チーム			
	G K	立向居	勇気	男
	D F	津島	善子	女
	D F	綱海	条介	男
	D F	風丸	一郎太	男
	M F	松浦	果南	女
	M F	☆鬼道	有人	男
	M F	黒澤	ダイヤ	女
	M F	星空	凜	女
	F W	綺羅	ツバサ	女
	F W	豪炎寺	修也	男
	F W	大海	龍也	男
〈	B チーム練習中			
〉				

することに、俺は河川敷に来た。が、俺は6年前の事もあるので「代表になれなく
A チームは雷門高校グラウンド、B チームは近くの河川敷のフィールドで別れて練習

ても良いか・・・」と、練習に参加しなかった。だが、当然真面目にやっている人たちはご立腹だ。

鬼道：「大海!! やる気がないのか!？」

龍也：「だつて俺が本気出したらアンタらサッカーやるのバカらしくなりますよ?」

善子：「どういう意味よ!!」

龍也：「自分で考えてください」

凜：「待つにや!! 練習中にや!!!」

風丸：「何でアイツが代表候補なんだ?」

俺だつて何でここに呼ばれたか知りてえよ・・・

ダイヤ：「鬼道さん、どう思われますか?」

鬼道：「分からん。あいつ見てるだけで何もしないからな」

ツバサ：「ちよつと大海くん!!! 皆代表に選ばれようと必死にやつてるのよ! 貴方が何故候補に選ばれたかは知らないけど、選ばれた以上はちゃんとやつて!!」

龍也：「やれやれ・・・折角アンタらが傷つかない様にしたのに・・・分かりました。じゃあ俺と勝負して勝てたら練習真面目にやりますよ」

ツバサ：「望むところよ!!」

はあ・・・仮に代表に選ばれたとしてもどうせ俺の力を知ったら除け者にされるのは

変わらないし、なら早い方が良いか。

龍也：「勝負内容は1vs1。相手を完全に抜いてからじゃないとシユートは駄目。必殺技有りで、先に3本決めた方の勝ちでどうですか？」

ツバサ：「やってやろうじゃない!!」

そして俺と綺羅さんは位置に着く。

鬼道：「両者準備は良いか？ 始め!!」

ドンッ

果南：「嘘でしょ!! ツバサさんが追い付けない!？」

龍也：「・・・どうぞ」

ツバサ：「なっ!? 貴方、私を舐めてるの!!」

貴女が先攻になっただけでしょう?」

ツバサ：「後悔させてやるわ!! 「ライトニングアクセル・V2」!!!」

風丸：「抜いた!!」

ツバサ：「流星ブレード」!!」

バシユウン

ツバサ：「まずは1点!!」

鬼道：「2本目始め!!」

果南：「やっぱり速い!!」

龍也：「実力はもう分かっただし、日本代表候補に選ばれるくらいだから期待してたけどやっぱり駄目だ。このチームの実力じゃあ前の二の舞になるのは目に見えてるし、嫌われとけば万が一の事があっても辞められるかもだしちよつとだけ使うか・・・本当はサッカーやりたいけど、自分を押さえ続けてやるのなんか苦しいだけだし」

俺は、俺の能力の40%程を解放する事にした。全開にすれば最終進化で返せるが、同じレベルにしておこう。

龍也：「先に言っとくぞ? 此処からもうアンタがゴールを決める事はない。そして絶望を味わうことになる」

ツバサ：「やってみなさい」「シユンツ」へ?」

龍也：「ライトニングアクセル・V2」!! からの」

風丸：「ヤバイ抜かれた!!」

龍也：「流星ブレイクエドツ」!!」

バシユウン

鬼道：「さ、3本目開始!!」

龍也：「・・・」

ツバサ：「今度は止める!! 「無理だな・・・」シユンツ」

ツバサ：「また!?!」

龍也：「流星ブレード!!」

バシユウン

ツバサ：「そんな・・・」「流星ブレード」と「ライトニングアクセル」は私の技の筈よ!?!」

綺羅さんは訳が分からないという顔をしている。そしてそれは他のメンバーも同じだった。

善子：「どうなってるの!?!」「ライトニングアクセル」と「流星ブレード」は、ツバサさんの技じゃないの!?!」

凜：「凜も分からないにや!!」

鬼道：「4本目始め!!」

龍也：「さて、これであっさり終わりと言うのも面白く無いんで、少し面白い物見せませよ!」

俺がボールと一緒にジャンプして空中からボールを地面に踏み埋め込むと、そこから水柱が発生。綺羅さんに迫っていき吹き飛ばした。

龍也：「松浦果南ドリブル技!!」「ウォーターボール!!」

ツバサ：「キヤアアアアアアアッ!!」

果南：「!? なんて私の技を!!」

そして俺はシュート体勢に入る。背後に炎のマジンが現れ、マジンの両手でボールごと空に放られる。回転しながら跳び上がり、左足で思い切りシュート。その瞬間マジンが炎の嵐を纏った左手でボールを殴る。

龍也：「豪炎寺修也シュート技!! 「爆熱ストーム」!!」

豪炎寺：「何!? あれは俺の!!」

バシユウン

はい3本決めた、俺の勝ちだ。さつき俺は練習を見ているだけと言ったな? 俺にはそれだけで十分なんだよ・・・残念ながら・・・な。

そして俺がグラウンドから出ようとしたら

果南：「待つて!! まさか・・・貴方の能力は・・・」

龍也：「響木さんに聞けば答えあわせしてくれるでしょ? 安心してください。選考

試合には出ますから、メンバー不足は心配しないでください」
「そういい残して俺はグラウンドから出た。」

— 続く —

第2話：失われた天才、大海龍也の過去

～ Bチームside (果南) ～

私達は今響木さんの所に来ていた。理由はBチーム最強クラスの選手であるツバサさんが手も足もでない上に、その彼女や私のドリブル技、そして豪炎寺君のシュート技を使った彼が気になり響木さんの言っていた彼の才能を聞こうと思ったからだ。

私の思った通りなら、多分彼の才能と言うのは……

響木：「ほう。ツバサが手も足もでない上にこっぴどくやられたか」

ツバサ：「次は勝つわよ!!」

果南：「それで、大海君の才能って、もしかして……」

響木：「ああそうだ。大海は相手の技を「たった一度見ただけで一瞬でコピーし自身の物に出来る。」しかもその技の本来の持ち主よりも強力な威力でだ」

それを聞いて、私達は声が出なかった。

響木：「そんな才能を持ったために、大海は昔のチームメイトに「努力泥棒」だの「お前とやると気分が悪い」だの色々言われてな。小5から今回招集されるまでの6年間サッカーから離れてたんだ。お前たちがアイツの名前を聞いたことが無かったり、見た

ことが無かったのはその為だ」

全員：『『えっ!?!』』

嘘でしょ? 6年もサッカーやってなかったのにあれだけ上手いの・・・?

響木：「俺が今回アイツを招集したのは、世界と戦う為にはアイツの力が必要だったというのもあるが、アイツの才能を活かす為には周りに実力は勿論だが精神的にも優れた選手が大勢必要だ。お前たちならアイツを救ってくれるんじゃないかと思ったんだ」

果南：「そう・・・だったんですね・・・」

響木：「大きすぎる才はやがて自らにも牙を剥く。」それが今のあいつだ」

鬼道：「分かりました。ありがとうございます」

そして響木さんの所から出た私たちは、大海君の事を話し合う事にした。

果南：「皆、どう思った?」

善子：「正直信じられないわ。その人が必死の努力でやつと身に付けた技を、たった一度見ただけでコピーするなんて普通じゃないわよ」

ダイヤ：「でも、コピーと言っても彼にとつては、出来ることをやっている」だけで、自分の実力以上のスキルが要求される事は出来ないと思うんです」

果南：「つまり彼にとつて私達のプレーは、」一度見れば真似出来る程度のレベルしか無い」つてことだね」

風丸：「差、あるな・・・」

ツバサ：「でも・・・私は見てもいいわ。彼の本当の実力を!!」

果南：「私もそう思った。彼の力は、代表の大きな武器になる。私も彼と全力でサッカーしてみたい!!」

それに私には、彼も心のそこでは本気でサッカーしたいと思ってると思うんだよね。でも私達が彼の本気を受け止められると示さなければ、彼は一生このまま埋もれてしま

う。
皆も領いてくれた。どうやら皆も同じ気持ちみたいだ。

鬼道：「よし選考試合まで特訓だ!! 少しでも大海を見返すぞ!!」

Bメンバー：『オオオオオオオオオオオオ!!』

—————

そして選考試合の日、大海君は約束通り来てくれた。

審判：「それではこれよりAチーム vs Bチーム日本代表選考試合を始めます!!」

全員：『宜しく願います!!!』

先ずはAチームのキックオフで試合開始

キックオフと同時に相手のMFの野坂がゲームを組み立て、ボールは吹雪に渡り、高坂とのワンツーパスで一気に切り込んできた。

吹雪：「行くよ立向居君!!」 「ウルフレジエンド・G2」!!」

狼の遠吠えとともに、「鋭い爪」のようなシュートがゴールを襲う。

立向居：「止める!!」 「ムゲン・ザ・ハンド・G3」!!」

立向居の背後に、「千手観音のように」オーラで構成された無数の手”が現れそれが一斉にボールへ向かいガツチリとキャッチした。

吹雪：「腕を上げたね立向居君!!」

立向居：「流石は吹雪さんだ・・・シュートを止めた手がまだビリビリしてる・・・」

鬼道：「立向居! カウンターだ!!!」

立向居：「津島さん!!」

立向居のゴールキックからボールは津島に渡る。

善子：「ほっ! 果南!!」

果南：「大海君!!」

龍也：「!？」

そしてボールは俺に繋がった。真面目にやる気が無いことは分かっている筈なのになんて・・・

果南：「大海君!! あなたの過去の過去はもう聞いた!! 私達なら貴方の本気を受け止められる!! だから全力をだして!!」

っ！ 簡単につ．．．知った様な口をつ．．．!!

龍也：「そんなの無理に決まってるでしょ!? ここにいる誰も、俺の本気を受け止められやしませんよ!!」

豪炎寺：「ふざけるな!! いいか、ここにいるのは、日本中から集められた最強の選手達」。そして代表に選ばれば、敵は世界だ!! 俺達は世界と戦い、勝つために此処にいるんだ!!」

鬼道：「大海、此処にはお前の力を妬んだり、邪魔だと感じるヤワな奴は一人もいない」
っ! ．．．なら、この試合で貴方たちの覚悟を見せて貰う!!

龍也：「．．．分かりました、本気でやります。そう言うって事は、勿論覚悟は出来るんですよね?」

果南：「勿論!! 見せて? 貴方の本当の力を!!」

あんじゅ：「隙あり!!」

俺は優木さんのスライディングをジャンプで避けた。

龍也：「分かりました、見せてやりますよ。俺の本気を!!」（これで駄目なら、その時こそスツパリとサツカーへの想いと未練を断ち切る。それしか残らないしな．．．）」
ぐっ ドンツツ!!

千歌：「速い!!」

曜：「追い付けないであります!!」

聖良：「任せて下さい!!」 「アイグランド・改!!」

鹿角さんがスケートのトリプルアクセルからの着地した瞬間、地面がパキパキと音を立てて凍って行く。これ俺を氷漬けにする気だな。

龍也：「邪魔だあああああつ!!」 「真・ヒートタツクル!!」

炎を纏ったタツクルで鹿角さんを技諸とも吹き飛ばした。

龍也：「行くぞ円堂!!」 「ウルフレジエンド・G5!!」

吹雪の物よりも”遥かに鋭い爪”の様なシュートが円堂を襲う。

吹雪：「そんな!! あれは僕の技!?」 しかもG5つて!!」

円堂：「くっ! 止める!!」 「正義の鉄拳・G2!!」

円堂が左足を振り上げて一気に踏み込んで右手をグーにして突き出す。するとオーラでできた巨大な拳が高速回転しながらシュートを正面から迎え撃つ。しかし、俺の「ウルフレジエンド」は円堂の技を意図も簡単に粉碎しゴールへと突き刺さった。

俺の「ウルフレジエンド」が決まり、Aチームボールのキックオフから試合再開。ボールは矢澤さんに渡り、ダブルで攻め上がってくる。

にこ：「凜退きなさい!!」 「トリックボール・V2!!」 曜!!」

矢澤さんから渡辺にパスが通るが、そこに風丸がディフェンスに入る。

風丸：「行かせない!!」

曜：「スプリントワープ・G2」!!」

ビュン ビュン ビュン

渡辺は、デیفエンスに入った風丸を陸上のスプリンター顔負けの超加速で抜き去った。

龍也：「貰いつ!!」

俺は、「スプリントワープ」の発動終了直後の隙を付いてインターセプトしボールをかつ拐った。そこに高海がデیفエンスに入る。

曜：（っ、巧い!!）

千歌：「ボールを返せええええっ!!」

渡部がボールを奪われた事で、高海がすかさず取り返しに来る。

龍也：「スプリントワープ・G5」!!」

ビュンツ!! ビュンツ!! ビュンツ!!

しかし渡辺のドリブル技を最終進化で返し高海を抜き去る。渡辺は驚愕の表情を浮かべている。

高海：（!?!）

曜：「嘘!?! しかも私より速い!!」

土方：「行かせねえ!!」

土方がデイフェンスに入るが、今度は矢澤さんの技を最終進化で返してやる。

龍也：「トリックボール・V3」!!」

にこ：「何でにこの技まで!？」

今度は矢澤さんの驚きの表情。相手のデイフェンスラインを突破した俺は、綺羅さんの技を借りる事にする。

龍也：「綺羅さん!! 技借ります!!」

ツバサ：「えっ!! ちよつ、ちよつと待って!？」

俺は背中に天使のような翼を出現させ飛び上がりオーラを全てボールに注ぎ込む。

龍也：「喰らええっ!!」「真・ゴッドノウズ」!!」

神々しいエネルギーの塊を纏ったシュートが、円堂を襲う。

円堂：「正義の鉄拳・G2」!!」

円堂が再び左足を振り上げ、腰を入れて上体の動きと連動させて右拳をつき出す。すると背後から黄金色の巨大な拳が高速回転しながらシュートに激突。「ゴッドノウズ」を迎え撃つ。

円堂：「グウウウウウウッ!!」

円堂も必死に耐えるが、俺のシュートは円堂の鉄拳を粉々に粉碎してゴールネットに

突き刺さり2―0になった所で前半終了。

現在

Aチーム 0 ― 2 Bチーム

Bチームリード

〈 続く 〉

第3話：結成!! 日本代表イレブン!!

選考試合は前半を終了。2-0で俺達Bチームがリードし、審判のホイッスルと共に今度はBチームのキックオフで後半戦開始。

ボールを鬼道に戻しゲームメイクを任せる。

鬼道：「黒澤!!」

パスは黒澤さんを通りすかさず高海と渡辺がディフェンスに来る。

千歌：「ダイヤさん行かせません!!」「フレイムダンス・改」!!」

高海のダンスが炎に包まれ炎の舞いとなり行く手を阻む。しかし黒澤さんはドリブルをストップし、ギリギリフレイムダンスの守備範囲の外で止まる。

曜：「今だっ!!」「ウォーターフォール」!!」

渡辺が大量の水が流れ落ちる滝を呼び出し、流れ落ちた水が止まっている黒澤さんを襲う。

ダイヤ：「果南さん!!」

寸前でのパスは松浦さんに繋がり、優木さんがディフェンスに来た。しかし松浦さんは自身のドリブル技、「ウォーターボール」で優木さんを吹っ飛ばして豪炎寺にパスを出

した。

豪炎寺：「ナイスパス!!」「真・ファイアトルネード!!」

豪炎寺が回転しながら飛び上がり炎を纏い高速回転するボールをシュートした。

円堂：「止める!!」「ゴッドハンド・改!!」

しかし、円堂は自身の“オーラで構成された巨大な右手”でシュートをガツチリとキヤッチし、完璧に止めた。

円堂：「鹿角!!」

円堂からのパスを受けた鹿角さんは、技の発動に入った。

聖良：「氷の矢!!」バシユウン

氷付けになったボールはキラキラとダイヤモンドダストを撒き散らしながら、綺麗な放物線をを描き前線の高坂へと繋がった。

穂乃果：「ナイスパス聖良さん!!」「サンシャインストーム・V2!!」

高坂のシュートは“太陽のような熱さと輝き”を纏いゴールを襲う。しかしそこに俺がゴール前まで戻って来ており、シュートブロックに入る。

龍也：「真・ウオーターフォール!!」

俺の呼び出した滝は、誰が見ても渡辺の物より水の総量が多く破壊力があると分かる物だった。当然あっさりと高坂の「サンシャインストーム」のブロックに成功する。

曜：「そ、そんな・・・」

渡辺が呆然とする中、シュートをあつさり止めた俺は続けて鹿角さんと全く同じモーシヨンで技を発動した。

聖良：「なっ!! それは私の!?!」

龍也：「氷の矢・V3」!!」バシユウウン

氷漬けになったボールはキラキラとダイヤモンドダストを撒き散らしながら、ツバサの足元へと綺麗に繋がった。

ツバサ：「ナイスパス!!」

そして綺羅さんは背中に天使のような翼を出現させ飛び上がりエネルギーを込めたボールをシュートした。

ツバサ：「ゴッドノウズ・改」!!」ドカアアン

神々しい神の一撃が円堂を襲う。しかし綺羅さんのそれは、俺が撃った物より明らかに威力が低かった。

円堂：「正義の鉄拳・G2」!!」

三度円堂は左足を振り上げ、腰を入れて上体の動きと連動させて右拳をつき出す。すると背後から黄金色の巨大な拳が高速回転しながらシュートに激突。綺羅さんの「ゴッドノウズ」を迎え撃つ。

円堂：「ぐうううううっ?!?!」

円堂も必死に堪えるが、それでも綺羅さんのシュートは「正義の鉄拳」を砕きゴールネットを揺らした。

そして3-0になりAチームのキックオフで試合再開。

野坂：「高海さん!!」

ボールは高海に渡り、ドリブルで攻め上がって来るが、そこに俺がディフェンスに入る。今度は高海さん自身のディフェンス技を倍返しする。

龍也：「真・フレイムダンス!!」

千歌：「私の技も!?!」

龍也：「それだけじゃないぜ!!」

俺はハーフラインの辺りでシュートモーションに入る。ボールに暑い日差しが当たり、太陽の如く燃え盛る。そのボールを、俺は右足で思い切りボレーで撃ち出した。

豪炎寺：「まさかそんな所からシュート!?!」

穂乃果：「しかもそのモーションは!!」

龍也：「喰らえ!!」「サンシャインストーム・V3!!」

俺の「サンシャインストーム」は高坂の「サンシャインストーム」よりも熱く破壊力があつた。シュートは一直線にゴールへと向かって行き……

円堂：「これ以上入れさせるか!!」〔正義の鉄拳・G3〕!!」

円堂の技はG2からG3に進化し、威力が上がったにも関わらず粉々に粉碎され、シュートはゴールに突き刺さった。

円堂：「くそっ!!」次はこそは止める!!」

そして4-0になり後30秒でタイムアップという所で野坂から高坂へのパスが通り、Aチームは絶好のシュートチャンスを迎えた。

穂乃果：「このまま終わる訳には行かない!!」〔プロミネンスドライブ・G2〕!!」

高坂の撃った初めて見るシュートは「サンシャインストーム」なんかより遥かに破壊力があった。何で最初から出さなかったんだ・・・ああ、俺にコピーされるからか・・・。

高坂のシュートは超高温の炎を纏いゴールに襲いかかる。

立向居：「止めてやる!!」〔ムゲン・ザ・ハンド・G4〕!!」

立向居の技が、「プロミネンスドライブ」に掴み掛かる。しかし高坂のシュートは止めに入った立向居の技をドロドロに焼きつくし、ゴールへと突き刺さった。

そしてここで試合終了ホイッスルが鳴り、4-1になった所で試合終了。

~~~~~

響木：「さて、お前たちの力見せて貰ったぞ。ここから運命の選択をしなければならん。その前に・・・日本代表監督を紹介する」

そして、校舎の方から一人の男性が歩いてきた。

? : 「私が監督の、久遠道也だ。くどうみちや宜しく頼む」

全員 : 「『宜しくお願ひします!!』』」

久遠 : 「早速だが・・これより、日本代表イレブンを発表する」

久遠 : 「まずはF W、吹雪士朗、豪炎寺修也、綺羅ツバサ、高坂穂乃果」

四人 : 「「はい!!!」」

久遠 : 「続いてM F、松浦果南、高海千歌、鬼道有人、野坂悠馬、矢澤にこ」

五人 : 「「はい!!!」」

久遠 : 「そしてD F、鹿角聖良、優木あんじゅ、風丸一郎太、綱海条介」

四人 : 「「はい!!!」」

久遠 : 「続いてG K、立向居勇氣、キャプテン円堂守」

二人 : 「はい!!」

久遠 : 「最後にポジション不定、オールラウンダーとして、大海龍也」

龍也 : 「はい!!」

久遠 : 「以上! 16名だ」

善子 : 「くつ、何でよ・・・」

凜 : 「にゃー!! 落選かにゃー!!」

武方：「俺も落選・・・みたいな？」

土方：「綱海!! 俺の分まで暴れてこいよ？」

綱海：「おう!!」

ダイヤ：「果南さん、千歌さん頑張ってください!!」

曜：「千歌ちゃん、果南ちゃん、頑張ってください!!」

千歌・果南：「うん!!」

響木：「選ばれた者は、選ばれなかった者の想いを背負うのだ」

マネージャー：「それでは日本代表の宿舎に案内します!!」

こうして代表に選ばれた俺。この仲間を今は無理でも少しずつ、一歩ずつ、信じてみようかと思いはじめていた。

果南：「大海君!! 一緒に頑張ろうね？」

龍也：「あ、ああ・・・」

この年上の女の子が、俺に、信じる勇気の欠片をくれたから。後は自分の手でその欠片を大きくして行くだけだ。

— 続く —

## 第4話：仲間達

日本代表、通称「イナズマジヤパン」が結成され代表メンバーは宿舎の中へ。そして選考試合で相手チームだったメンバーが俺に事情聴取と言い問い詰めてきた。

穂乃果：「大海君どういこと!! 何で私達の技が使えるの!？」

吹雪：「うん・・・しかも最終進化で打ってたよね？」

少し怖くなっていたら、松浦さんが間にはいつて皆を落ち着かせて代わりに事情を話してくれた。

――― 事情説明中 ―――

果南：「くというのが私達が響木さんから聞いた話だよ。」

やはり相手チームだったメンバーも戸惑っている。

龍也：（皆黙りこくってる。やっぱり・・・受け入れては・・・）

円堂：「・・・す、」

龍也・果南：「す？」

円堂：「凄えええつ!!! お前そんな凄い奴だったのか!？」

龍也：「!？」

すごい勢いで来た円堂に軽く引きながらも、俺は戸惑っていた。だって俺の力を知った奴らの今までの反応と、全く違うから。

聖良：「確かに凄い……」

吹雪：「試合になつて大海君の実力が広まれば相手は恐らく大海君1人に2人以上人数を割かなきゃいけないだろうから有利にはなるね」

円堂：「それつてキーパー技も出来るのか?！」

龍也：「キーパー自体をやったことないけど、出来るとおもうぞ?　ちよつと確かめて見るか・・吹雪、シユート頼む。(もしかして・・受け入れてくれるのか?)」

俺はそんな淡い期待をしながら、皆グラウンドに出て円堂にキーパーグローブを貸してもらい俺がキーパー、吹雪がキツカーに入る。

龍也：「来い!!」

吹雪：「ウオオオオオツ!!」 「ウルフレジエンド・G3」!!

吹雪のシユートはG2からG3に進化し、より鋭さを増したシユートがゴールを襲う。

俺は左足を大きく振り上げ、その足を一気に踏み込み腰から上体の動きを連動させて右腕をグーでつき出した。

龍也：「正義の鉄拳・G5」!!

俺の背後から、円堂の物よりも巨大な黄金色の拳が虹色の光を放ち高速回転しながらシュートに激突。俺の「正義の鉄拳」は吹雪のシュートを軽々と吹き飛ばした。

円堂：「俺の「正義の鉄拳」より強い……!!」

龍也：「吹雪!! もう一本頼む!!」

吹雪：「行くよっ!」「エターナル・ブリザアアアドツ・V2!!」

ボールは氷づけになり激しい吹雪を纏いながら向かって来た。

龍也：「ムゲン・ザ・ハンド・G5!!」

俺の「ムゲン・ザ・ハンド」は立向居のそれより手の本数が多くかつ一本一本が力強かった。手はガシガシとボールを掴み「エターナルブリザード」を楽々止めた。

そしたら、皆が黙りこくっていることに気付いて不安になった。「やはり駄目なのか?」と。

円堂：「なあ? 一つ聞いて良いか?」

龍也：「な、何?」

円堂：「俺たちがつと力をつけて技のレベルも上がれば、此処までの威力になるのか?」

龍也：「それはもちろん。むしろ俺の正規ポジションはキーパーじゃないから円堂の「正義の鉄拳」がG5になったら俺より強いと思う……」

立向居：「つまり大海さんのコピー技は俺たちの技の可能性ってことですか？」

龍也：「平たく言えばそうだけど・・・」

千歌：「それを聞いたら寧ろワクワクしてきたよ!!」

あんじゅ：「もつともつと力をつけるわ!!」

円堂：「大海！ お前がこのチームに居てくれてよかったぜ!!」

龍也：「っ!？」

俺が・・・居てくれて良かった? この人たちは俺を必要としてくれるのか?

果南：「大海君? 泣いてるの?」

龍也：「へ? あ、あれ!？」

必死に涙を拭うが俺の両目からはボロボロと涙が溢れていた。

果南：クスッ「良かったね? 皆、宿舎に戻ろう?」

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

さて、代表メンバーは各々2人1部屋なのだが、メンバー16人中7人が女子で9人が男子。男子と女子が1人ずつ余ってしまった。

マネージャー：「本当にスママセン!! 女子の余りが「大海君と一緒にじゃなきややだ!!」と言つて聞かないんです。部屋数は人数ぴったりで余り部屋も無いですし・・・」

龍也：「・・・分かったけど誰?」

マネージャー：「この人です」

果南：「大海くくん!!」

ハグウツ

龍也：「ちよっ……松浦さん何やって?！」

果南：「何って……愛情表現のハグだよ?」

こ、この人は……もう少し自分の魅力を理解して貰えないだろうか。こんなグラマラスな女性にハグなんかされたら、そこらの男は野獣化してもおかしく無いというのに……。

果南：「それにね? 響木さんからも頼まれたんだ。大海の心を支えてやってくれて」

龍也：「……あの協会長は」

仕方無いので諦める事にした。そしたら松浦さんのハグの力が強くなった。

果南：「今まで辛かったよね? 全部私に吐き出してくれて良いんだよ?」

そう言いながら俺の頭を優しく撫でる松浦さん。俺はこの6年間の気持ちをごみ上げ、耐えきれず松浦さんの腕の中で思いきり泣き、今までの想いを吐露した。

仲間「に邪険にされたこと。」

それでもサッカーがやりたかったこと。



しかしまた同じ目に遭うのが恐くて出来なかったこと。俺の中でくすぶっていた気持ちも全部。

それを松浦さんは嫌な顔一つせずにくげとめてくれた。この人・・・母性の塊みみたいな人だな・・・

―― 2時間後 ――

龍也：「すみません・・・」

果南：「良いよ？ 大海君の気持ちは良く分かったから」  
ヤバイ・・・また泣きそう。

果南：「そろそろ夕飯行く？」

龍也：「・・・うん」

く 食堂 く

龍也：「おばちゃん!! 塩チャーシュー麺大盛り!!」

果南：「私は焼き魚定食お願いします」

おばちゃん：「はいよ・・・はいお待ちどう様」

食事を受け取り2人で一緒に食べようと空いている席につく。

果南：「大海君ラーメン好きなの？」

龍也：「はい、結構好きですね。松浦さんは魚好きなんですか？ 焼き魚」

果南：「実は私の実家が淡島っていう島でダイビングショップやっててさ、海の仕事だから自然とそういう食事が多いんだよね」

龍也：「なるほど。しかしダイビングですか、俺もやってみたいな」

果南：「是非来てよ！ 大海君ならサーブスするよ？」

龍也：「分かりました。大会が終わったら行きますね？」

果南：「だからってわざと負けたら駄目だからね？」

龍也：「当たり前です」

そしてその日の夜、お互いに別のベッドで寝ていた筈なのに、朝起きたら松浦さんは俺をハグした状態で一緒に寝ており、それをマネージャーに見つかり誤解を解くのに1時間要したのは別の話。

俺、生き残れるかな？ 精神的にも社会的にも……

— 続く —

## 第5話：抽選会

代表になって初めての朝、部屋数とメンバーの男女数が合わなくて俺と同室になった松浦さんがマネージャーさんに怒られていた。

龍也：（……どうしてこうなった？）

マネージャー：「まったく果南さんは!! 年頃の女の子が男の子の布団に潜り込むなんて何を考えてるんですか!？」

果南：「い、いや……そのお……大海君……あったかそうだな……って思って……」  
龍也：「松浦さん、あんなこと每晚されたら俺には「絶対に襲わない!!」と言い切る自信が無いから止めてください」

果南：「はい……」シユン  
シユンとする松浦さん。不覚にも可愛いと思ってしまった。まあ松浦さん素っぴんでもはつきり言っつてめっちゃくちや美人だしなあ……

あんじゅ：「果南も大胆なことするわね」

豪炎寺：「松浦……お前は今何のために自分がここに居るのかわすれたのか?」

果南：「忘れて無いよ!! サッカーで世界の強豪達と戦って勝って世界一になる為だ」

よ!!!」

円堂：「まあ、何も無くて良かったよ。それより皆速く飯食ってサッカー協会行こうぜ？ 今日にはアジア予選の組み合わせ抽選会だろ？」

そして俺達は急いで朝飯を食べて、サッカー協会に向かった。

　　AM10:00 日本サッカー協会

司会：「お待たせしました。此より、FFIAアジアAブロック予選の組み合わせ抽選会を始めます。では此より各チームの監督さんにクジを引いていただきます」

アナウンサー：「まずはアジア最強と呼び声たかい韓国代表「ファイアードラゴン」：

1ーA」

アナウンサー：「続けてサウジアラビア代表「ザ・バラクーダ」・・・2ーB」

アナウンサー：「そして「アラブの獅子」カタール代表「デザートライオン」・・・4ーA」

アナウンサー：「次にこちらにも優勝候補、オーストラリア代表「ビッグウェイブス」：

3ーA」

司会：「続いていよいよ日本代表、「イナズマジャパン」の抽選です。果たして相手は韓国かサウジアラビアか、はたまたカタールかオーストラリアか!!」

アナウンサー：「日本代表「イナズマジャパン」・・・3ーB」

TV：決まりました!! 日本の初戦の相手は、オーストラリア代表「ビッグウェイブス」です!!」

そして残った国の抽選も終わり、俺達は宿舎に帰ってきた。すると見馴れない外国人が4人宿舎の管理人のおじいさんと口論していた。

?:「だから!! Ms. 松浦は何処かって聞いているんだよ!!」

管理人：「組み合わせ抽選会に行ってるよ?」

果南：「あのか? 松浦は私ですけど?」

?:「え? 貴女が「イナズマジャパン」の松浦果南さん?」

果南：「はい」

?:「これは・・・体力雌ゴリラと聞いていたんだが、実に美しいお嬢さんじゃない

か。誰だ? あんな噂流したのは?」

果南：「ちよつ!! 誰が雌ゴリラよ失礼な!! 私そんな噂流れてるの!」

鬼道：「オーストラリア代表のメンバーが、試合前に何のようだ?」

全員：『え!?!』

野坂：「オーストラリア代表キャプテン「ニース・ドルフィン」。サッカーだけでなく、サーファーとしても有名な選手だと聞いています。そして「ビッグウェイブス」というチーム名には、「海の戦士たち」という意味も込められているとか?」

果南：「へえ。私もたまにサーフィンするし海大好きだよ？ 今度一緒に海について話さない？」

綱海：「俺もサーフィン大好きだぜ？ 良かったら今度一緒にどうだ？」

ニース：「ハッ、冗談はよしてくれ。オーストラリアのビッグな波で鍛えた俺達が、日本のちんけな波を相手にするわけ無いだろ」

龍也：（あ？ コイツ今なんつった？）

果南：「ちよつと!! 私の故郷の海を馬鹿にしないでよ!! 許せない!!!」

綱海：「俺もだ！ 沖繩の海をバカにすんじゃねえ!!」

ニース：「やれやれ、お前たち！」

3人：「「おう!!」」

相手の4人は四角形に松浦さんと綱海を包囲した。なんだ・・・あのディフェンス？

あれが世界のレベルなのか？

ニース：「まあレディをイジめるのは俺たちの流儀に反するんでね。今日はこの辺で失礼させてもらうよ。試合で会おう」

そう言い残し、4人は帰っていった。俺は急いで松浦さんに駆け寄った。

龍也：「松浦さん？ 大丈夫？」

果南：「あいつらっ・・・!! 海は私にとって、大切な場所なのに・・・なんで馬鹿にさ

れなきやならないの・・・？」ポロポロ

龍也：「っ!!」

見ると、松浦さんは泣いていた。それを見た瞬間、俺のなかで何かプツンと音を立ててキレた。

鬼道：「松浦、奴らのディフェンスはどうだった？」

果南：「凄く息苦しい感じで・・・まるで密閉された箱の中に入れられたかのような」  
鬼道：「とにかく、あのディフェンスを破る練習が必要だな」

久遠：「集合!! これからオーストラリア戦までの練習方針を伝える。・・・全員、練習禁止だ」

全員：「ええーっ!!」

龍也：「成る程な。そういうことか」

久遠：「宿舎から出る事も許さん」

鬼道：「待つてください!! 俺達はオーストラリアのディフェンスを見ました。あのディフェンスは、生半可なオフENSスでは破れません!! 試合までオフENSス力強化の練習をするべきです!!」

久遠：「言うことを聞けないなら、代表をやめろ」

鬼道：「くっ!!」

龍也：「分かりました。部屋同士の行き来は良いんでしょうか？」

久遠：「それは許可する」

龍也：「じゃあ俺は宿舎入りますね？」

円堂：「お、おい大海!？」

聖良：「行つてしまいましたね」

風丸：「アイツも監督も、何を考えているんだ？」

↳ 部屋 ↳

私が部屋に戻ると、大海君は部屋の中でボールを蹴り、壁に当たって跳ね返ってきたボールを別方向に蹴りを繰り返して練習? をしていた。

果南：「大海君? 何やってるの? 練習禁止だつて・・・」

龍也：「ああ大丈夫です。だってこれが監督が俺達にやらせたい対オーストラリアの練習なんですから」

果南：「え!？」

私には、大海君の言ってる意味が分からなかった。

龍也：「部屋を見渡してみてください。ヒントがありますから」

私の目に写るのは、2つのベッドに2つの机。前後左右の壁に、床に天井。考えたが全く分からなかった。



龍也：「松浦さんもやれば？ あいつらにギャフンと言わせたいでしょ？」

果南：「ううん。それだけじゃあ足りない!! 試合で地べたを舐めさせてやらないと気が済まない!!!」

暫くして、他の部屋からも壁にボールが当たる音が聞こえてきた。でも、大海君は理解してみたいんだけど、一体監督の意図って？

— 続く —

# 第6話：開幕アジア予選!! v s オーストラリア代表 「ビッグウェイブス」!!

あの練習禁止の指示が出て4日、いよいよアジア予選開幕の日がやって来た。日本は式の終了後開幕戦で試合となる。

久遠：「よし、全員揃ったな。それでは開幕式が行われる、「フットボールフロンティアスタジアム」に出發する」

全員：「『はい!!』」

鬼道：「結局この3日間、連携の練習はおろか必殺技の練習すら出来なかった・・・。本当に大丈夫なのか・・・?」

「フットボールフロンティアスタジアム」

長つたらしいお偉いさんの挨拶は割愛し、いよいよ試合だ。監督からスターティングメンバーが発表される。

久遠：「G K 円堂

D F 鹿角 風丸 綱海 優木

M F 高海 松浦 鬼道 矢澤

F W 豪炎寺 綺羅

以上だ。」

そして両チーム選手がフィールドに出て持ち場に着く。審判が片腕を上げ笛を吹く。日本ボールのキックオフで試合が始まった。

しかし、直後にオーストラリアの必殺タクテイクス、ヘボックスロックデイフェンスに鬼道が捕まりボールを奪われてしまった。

鬼道：「っ!?! (なんだ今のオーストラリアの動きは!!)」

そこから海で鍛えたフィジカルを使い、ドリブルで上がるオーストラリア。デイフェンスに入った風丸が正面からスライディングを仕掛けるが、ジャンプであっさり躲かれる。

綱海：「っ、止める!!」

ジョーズ：「まずは1点だ!」

相手しかし綱海の間合いに入る前にF Wはシュート体勢に入る。フィールドが大海原へと変わり巨大なサメが現れた。

ジョーズ：「メガロドン・改」!!」

ドツゴオオン

シュートはサメと共に、日本ゴールに襲いかかった。

猛然と向かってくるオーストラリアのシュート。円堂は左足を振り上げ、踏み込みと同時に腰を入れて上体の動きと連動させて思い切り右拳をつきだした。円堂の背後から、巨大な黄金色の拳が高速回転しながらシュートに激突。「メガロドン」を迎え撃つ。

円堂：「はあああつ!!」「正義の鉄拳・G3」!!」

技同士が激突し、必死に踏ん張る円堂。しかし・・・、

円堂：「ぐっ!（何だよこのパワー!?) うわあああああつ!!」

シュートは円堂の技を粉碎し、ゴールネットを揺らした。

実況：「ゴオオオオオオオオオオ!! 先制したのはオーストラリア!!!」

解説：「凄まじい威力のシュートでしたね。日本ここから立て直して欲しい所です」

鬼道：「今の失点は、ちゃんと練習出来てたら防げたかもしれない・・・やはり練習出来なかったのが響いてるのか・・・!!」

日本ボールで試合再開。だがまたしてもオーストラリアのディフェンスに捕まってしまった。捕まったのは松浦さんだ。

果南：「くっ!! キープするだけで精一杯!! 必殺技を出す暇も無いよ!!」

鬼道：「?、あのディフェンスを受けてボールをキープ出来る? 必殺技を出す暇も無い?」

よく見ると、オーストラリアはボールを獲れないことに焦っていた。

その時フィールドの外から大海くんの声が聞こえた。

龍也：「お前らまだ気付かないのか!? 部屋での練習をおもいだせ!! 部屋の壁は4枚!! 〈ボックスロックディフェンス〉も4枚の壁!! ここまで言えば分かるだろ!」

久遠：「そろそろ、特訓の成果を見せてくれないか?」

鬼道：「部屋・・・四枚の壁・・・そうか!! 皆、〈ボックスロックディフェンス〉を部屋の壁だとイメージしろ!! 味方がディフェンスの内側に入り壁に当たって跳ね返るボールを再現するんだ!!」

すると、味方がディフェンスの内側に入り、松浦さんは味方にパスを出し受け取った味方は直ぐ様松浦さんにリターン。そして別の味方に蹴り、ソイツは別の味方にパスを出し松浦さんにリターンを不規則に繰り返す。

まるでボールが部屋の中を跳ね回り踊っているかのようなパス回し。オーストラリアのディフェンスは不規則なボールの動きに着いていけず、遂にディフェンスが崩れ松浦さんは一瞬の隙をつきディフェンスを突破した。

鬼道：「監督は初めからこれを狙っていたのか。必殺技の練習をさせなかったのは、〈ボックスロックディフェンス〉に捕まったら、そもそも技を出せないから・・・だからまずは確実に〈ボックスロックディフェンス〉を破るために部屋での練習を・・・そ

して大海は、監督の意図に気づいていた……

果南：「走って!!」 ドツ!

果南からゴール前へと内回インサイドスピン回転クロスが上がり、

ウオーター：「甘めえ!!」 ガツ!

オーストラリアのディフェンスに弾かれた。

豪炎寺：「くっ! (決定的なチャンスで!!)」

だが、

ツバサ：「いや? 甘いのはアナタたちよ!!」

遅れてファーサイドから走ってきていたツバサの足元に、ボールが転がった。

ツバサ：「行くわよ!!」

シユート体勢に入るツバサ。天使の羽を翻し、上空へと登っていく。

ツバサ：「行けえええええっ!!」 「ゴッドノウズ・改」!!

綺羅さんのシユートは、神々しいエネルギーの塊を纏いながら、オーストラリアゴールに迫っていく。

ジンベイ：「ふん!!」 「グレートバリアリーフ・改」!!

ボールは、相手キーパーの技で現れた水の壁に突入し、完全に勢いを流されキーパーの手に収まった。

ジンベイ：「こんな物か…？」

にこ：「ちよつと!! 何よあの技!?!」

するとここで、

久遠：「選交代!! 綺羅ツバサに代わり、大海龍也!!」

実況：「おおつと!! 日本早くも1人目の選交代です!! 大海選手は日本の中でも

名が知られていない選手です。果たしてどれ程の選手なのか!!」

龍也：「監督からの伝言だ。「シユートは大海に任せろ」だつてさ」

鬼道：「お前にボールを集めろと言うことか？ 破れるのか「分かった」松浦!?!」

果南：「私は大海君を信じる」

鬼道：「分かった。皆、大海にボールを集めるぞ」

全員：『『分かった!!』』

オーストラリアのゴールキックで試合再開。しかしボールを受けた相手が振り向いた瞬間、俺はインターセプトでボールをかつ拐った。

シユリンプ：「なに!?!」

ニース：「くそつ!! <ボックスロックディフェンス>だ!!」

直ぐ様オーストラリアのディフェンス4人が俺を包囲。

鬼道：「大海!!」

龍也：「来るな!! こんな奴ら、俺1人で充分だ!!」

アングラー：「舐めるなよ!!」

しかし、いくらやつてもオーストラリアは4人掛かりで俺1人からボールを奪えない。むしろ遊ばれている感じすらする。

ニース：「一体どうなってるんだ!?!」

龍也：「終わりだ」ビュンッ

千歌：「それは曜ちゃんの!!」

龍也：「スプリントワープ・G5」!!」ビュン ビュン ビュン

俺は超加速でへボックスロックデイフェンスを置き去りにして抜き去り、1人でデイフェンスを崩した。

ニース：「何だと!?! ジンベイ止めてくれ!!」

ジンベイ：「任せろ!!」

龍也：「悪いが、お前らは自分たちの技にやられることになる」

俺がシュート体勢に入ると、フィールドが大海原へと変わり、相手のものより更に巨大なサメが現れた。

オーストラリア：「!?!?!」

龍也：「真・メガロドン」!!」



ジンベイ：「なっ!!」「グレートバリアリーフ・改!!」

シュートは超速で「グレートバリアリーフ」に突っ込み勢いを殺・・・されず、シュートはサメとともに水の壁の中を泳いで突き破り、ゴールネットを揺らした。

龍也：「魚に水の壁が通じるかよ。バーカ・・・」

日本 1ー1 オーストラリア

ー 続く ー

## 第7話：オーストラリアの誤算

ビッグウェイブスのメンバーは、激しく動揺していた。へボックスロックデیفエンスが破られただけでなく、日本の選手に自分たちのシュート技「メガロドン」を使われ、あまつさえ「グレートバリアリーフ」までもが破られてしまったからだ。

ニース：「何でジャパンの選手が「メガロドン」を!!」

ジョーズ：「しかも俺のより威力がたかかったぞ!」

リーフ：「とは言え、まだ「グレートバリアリーフ」はアイツにしか破られてない。アイツにシュートを打たせるな!!」

オーストラリア：「『おう!!』」

オーストラリアのキックオフで試合再開と同時に、FWのジョーズが先程同様大柄な身体から生まれる屈強なフィジカルを生かして、日本のデیفエンスを吹き飛ばしながらドリブルで攻め上がってくる。

ジョーズ：「ジャパンのキーパーは俺のシュートを止められない!! 点を取るの易い!!」

あんじゅ：「さつきは不意をつかれたけど、今度は止める!!」 「アステロイドベルト・

改」!!!」

優木さんとジョーズの周りが宇宙空間に変わり、優木さんの合図とともに一齐に隕石の大群がジョーズに直撃していき、吹っ飛ばしてボールを奪った。

ジョーズ：(くっ!!)

ニース・リーフ：「なにっ?」

鬼道：「優木!! 高海にパスだ!!」

ボールを奪ったあんじゅへと、鬼道が指示を飛ばす。

あんじゅ：「りよ〜かい!! 千歌ちゃん!!」

ボールは高海に渡ったが、俺はオーストラリアのマークが2人付いている。豪炎寺にはあのキーパー技を破れる技はない。

豪炎寺：「高海!! こっちだ!!」

千歌：「豪炎寺君!!」

高海の斜め後方からのパスは豪炎寺に渡った。破れるのか?

豪炎寺：「はああああああああつ!!」

豪炎寺が炎を纏い、回転しながら飛び上がる。「ファイアトルネード」か? と思ったが、熱量も回転量も、「ファイアトルネード」とは比べ物にならない。

豪炎寺：「喰らえ!!」 「爆熱スクリュー!!」

豪炎寺の新必殺シュートは、凄まじい炎とスピンでオーストラリアゴールに襲い掛かる。

ジンベイ：「そんな技!!」「グレートバリアリーフ・改」!!」

豪炎寺のシュートが水の壁に突入した瞬間、水がどンドン蒸発していく。

ジンベイ：（ぐうううううううっ!!）クソおっ!!）

そしてボールの回転が、周囲の水を吹き飛ばして貫通。キーパーを吹っ飛ばしてゴールに突き刺さった。

ニース：「なんだと!？」

龍也：「やるじゃん」

ここで前半終了。2-1の日本リードで折り返しだ。両チームベンチに戻り後半戦の作戦を練る。

久遠：「後半は矢澤をベンチに下げて、そこに吹雪を入れる」

全員：『『はい!!』』

久遠：「それと綱海、お前は私の言うことを聞かずに外で練習していたな?」

綱海：「あ、やっぱりバレてた?」

久遠：「お前には罰として点を取って貰う。新しい必殺技でな」

円堂：「え? そんな技があるのか!？」

綱海：「気づいてたのか？ でも、あと一歩つてとこまで来てるんだけど、完成してないんだよな」

久遠：「それは、お前の頭のなかにイメージが無いからだ。あの波を乗りこなすのに、どんな必殺技が必要かイメージしてみる。さあ行ってこい綱海、松浦!! 海は自分たちのものだと証明してこい!!」

果南・綱海：「はい（おう）!!」

両チーム、メンバーがフィールドに出る。

実況：「さあ！ 後半戦の開始です!!」

解説：「おや？ 日本は矢澤選手下げで、代わりに吹雪選手をMFに投入してきましたね。果たしてどんな意図があるんでしょうか？」

そして後半戦開始のホイッスルが鳴り、オーストラリアボールで後半戦開始。

オーストラリアは前半とはうってかわり、パス回しでボールを前線に運ぶスタイルに切り替えた様だ。

リーフ：「喰らえ!!」「メガロドン」!!

ジョーズの物より小さいサメと共に、シユートが日本ゴールを襲う。

円堂：「止める!! はあああああつ!!」「正義の鉄拳・G4」!!「バチイツ!

進化して威力を増した円堂の鉄拳が、「メガロドン」を迎え撃つ。今度は円堂も、完璧

に「メガロドン」を止めて見せた。って言っても無進化だからなあ・・・。

鬼道：「よし……（どう組み立てるか……）」

ボールは鬼道に渡ると、ここでDFの綱海がサイドラインギリギリを走ってオーバーラップしてきた。

綱海：「鬼道!! こっちだ!!!」

鬼道：「綱海!! よし、行け!!」ドッ!

鬼道からのパスが綱海にとぶ。綱海はトラップしてボールを足元に収め、そのままドリブルで上がる。しかしオーストラリアのディフェンスが2人で止めに来る。

吹雪：「綱海くんこっち!!」

綱海：「っ、吹雪!!」パスッ

パスを受け取った吹雪にターゲットを変更し、オーストラリアのディフェンスが迫る。

吹雪：「絶対に取らせない!! 「オーロラドリブル」!!!」

吹雪の周りが極寒地帯に変わり、上空にオーロラが現れる。それに相手が見とれている間に吹雪はディフェンスを突破した。

綱海：「吹雪こっちだ! 俺に撃たせてくれ!!」

吹雪：「よし、綱海くん!!」

そして、ボールを受け取った綱海はシュート体勢に入る。

綱海：「沖繩のサーファーとして、俺も日本の海をバカにされてムカついてんだよ!!」  
綱海の周りが嵐で大シケの海に変わり、ボールをサーフボードのようにしてその荒波を乗りこなす綱海。上がった水柱とともに上昇し、台風の目に沿い嵐を纏ったボールを蹴りこむ。

綱海：「見えたぜ!! あの波を乗りこなす為の技が・行くぜ!! これが俺の新しい技、  
「ザ・タイフーン」だあああああつ!!」

綱海の必殺シュートがオーストラリアゴール目掛けて蹴り落とされる。ジンベイも必殺技で対抗する。

ジンベイ：「これ以上入れられてたまるか!!!」「グレートバリアリーフ・改!!」チャポントツ!

水の壁に突入する綱海のシュート。しかし、綱海のシュートは相手の水の壁を風圧で吹き飛ばし、轟音とともにゴールネットを揺らした。

ジンベイ：「くつ、クソツタレ!!」

綱海：「へへっ、あの波を乗りこなしてやったぜ!!」

綱海のゴールで3ー1と日本が更に突き放し、オーストラリアキックオフから試合再開。

相手がパスをまわした所を、松浦さんがインターセプトして奪い、ドリブルで上がって行く。

ニース：「くそっ!!」 〈ボックスロックディフェンス〉だ!!!」

オーストラリア：『『おう!!』』

果南：「ムダだよ!!」

日本：『必殺タクティクス!!!』 〈ダンシングボールエスケープ〉!!!」

日本のタクティクスはオーストラリアのタクティクスをブレイクし、松浦さんはゴール前に到達。シュート体勢に入る。すると松浦さんの周りを水の竜巻が包みぐるぐる上昇。水のエネルギーが込められたボールをおもいつきりオーストラリアゴール目掛けて蹴り落とした。

果南：「私の怒りを喰らええええええっ!!」 「激流ストーム・G2」!!!」

ジンベイ：「くそっ!!」 「グレートバリアリーフ・改」!!!」

ドツパアアアアアアアアン!!

しかし、ボールが水の壁に当たった瞬間、大きな水飛沫が上がり暫く見えなくなる。次第に見えてくるとボールはキーパー諸ともゴールの中だった。

4-1で日本リード。オーストラリアのキックオフで試合再開したが、そこからはお互いに点が入らず、後20秒程で試合終了という所で俺にボールが渡った。



龍也：「さて、ビッグウェイブス。お前たちは2つ罪を犯した」

ニース：「何？」

龍也：「1つ。松浦さんにとって大事な海をバカにしたこと」

果南：「大海君……」

龍也：「そしてもう1つは松浦さんを……果南を泣かせた事だあああああああ  
ああっ!!!」

俺が飛び上がると武神の様なオーラが出現し、武神が刀を振り上げると同時に左足を振り上げ、刀を降り下ろすとともに渾身の力で足を振り抜いた。

龍也：「スサノオブレード・G5」!!!」

ジンベイ：「真・グレートバリアリーフ」!!」

今までの日本のシュートとは比べ物にならない威力の俺のシュートは、せつかく進化した威力が上がった水の壁をあつかりと両断し、ゴールに突き刺さった。

龍也：「俺の大切な人を傷つけるヤツは、誰であろうと許さん!!」

果南：「っ!?!／／／」

ピッピッピッ!!!

実況：「試合終了のホイッスル!! 5-1で、日本がオーストラリアを下しましたー!!!」

ニース：「Mr. 綱海、Ms. 松浦、済まなかった。どうやら日本の海も、捨てたものでは無いらしい」

綱海：「へへっ、分かりや良いんだよ!! 今度一緒にサーフィンしようぜ!!」

ニース：「ああ、勿論だ!!」

〽 宿舎 〽

果南：「大海君？」

夜、私が部屋に戻ると大海君は寝ていた。

果南：「大海君・・・いや、龍也、ありがとう／＼／」

チュツ

私は龍也の頬に優しくキスした。

― 続く ―

## 第8話：戦後休息

オーストラリアを大差で破り、俺達イナズマジヤパンのメンバーは監督に1日休みをやると言われて、各々自由に行動していた。そして俺は松浦さんと一緒に、映画館が併設された大型ショッピングモールに来ていた。

果南：「龍也!! どの映画見る?」

龍也：「あつ、えつと・・・松浦さ「ムスウ」へ?」

松浦さんは頬つぺたを膨らませてあからさまに不機嫌そうな顔に。つていうか「ムスウ」つて自分で言うんだ? なんか可愛い・・・／／／

果南：「オーストラリア戦の最後に果南って呼んでくれたじゃん!!!」

龍也：「えっ!?! そ、それはその・・・場の勢いと言うか・・・」

果南：「呼んで欲しいな?」

龍也：「か、果南・・・／／／」

果南：「くっつ!!／／／♡」

松浦さんは顔を真っ赤にしているが、凄く嬉しそうだった。

果南：「龍也!!」

龍也：「か、果南!!」

果南：「よろしい!!! じゃあ、これからは名前呼びね? 敬語も無しで!!」

龍也：「は、ハイ……」

とんでもない約束をさせられてしまった、これからどうしよう。と、考えていると松  
u・・果南が〈君〇届〇〉というまあまあ有名なアニメの実写映画のリバイバル上映を  
観たいと言うのでそれを観ることに。

—————

映画館に入るとカップルばかりで正直居心地が悪い。……リア充爆発しろ。(↑お  
前が言うな)

映画が始まり暫くして果南の方を見たら、涙を流しながら観ていた。

そして映画が終わわり、館から出てフードコートに入り昼飯を食べる事にした。

果南：「さっきの映画、私感動しちゃったよ。」グスツ

龍也：「だなあ……」ズズツ

そう。俺も最初は平気だったのだが、話が進むにつれて感動して涙を流してしまっ  
たのだ。

果南：「私もあんな素敵な彼氏が出来たらなあ……」チラツ

龍也：「っ!!」

果南：「龍也はどんな女性が好みなの？」

龍也：「!?」ブツ

果南の言葉で俺は飲んでいたお茶を嘔き出してしまった。それよりも今の果南の質問で脳裏に浮かんだのは目の前の女の子、果南の顔だった。

果南：「ちよつと!! 大丈夫？」

龍也：ゲホツ ゲホ「だ、大丈夫・・・」

果南：「もう、何を想像したの？」

「お前だよ!!」とはさすがに言えなかった。

果南：「もしかして・・・私、だったり？」

ブホオツ!! 俺はまたしても嘔き出してしまい、真っ赤になっているであろう顔を見られたくなくて顔を背けた。

果南：「へ!? 嘘・・・本当に・・・?」

龍也：「は、はい・・・」

果南：「ウレシイ・・・／／。♡」

龍也：「へ? 聴こえなかった。なんて?」

果南：「嬉しいって言ったんだよ!! 私も・・・龍也の事・・・好きだよ?／／／」

龍也：「へ!? それは・・・異性として?」

果南：「そう．．．だよ．．．？／＼／＼／＼」  
ハグウ

そう言うとき果南は俺にハグしてきた。

果南：「私は言ったよ？ 1人の男の子として龍也が好きだって。龍也はどうなの？」  
龍也：「俺も、果南の事好きだよ。1人の女の子として。でも、果南めちやくちや美人だし．．．俺みたいなのが釣り合うのかな？ って」

果南：「他人の目何か関係ないよ？ 大切なのは、私達自身の気持ち!! 龍也は釣り合わないだろうからって、諦められるの？」

龍也：「諦められる訳無いだろ!! やつと見つけた．．．俺を理解してくれる人なんだから．．．」

果南：「私も同じだよ？ 龍也の事諦められない」

龍也：「俺、何かしたっけ？」

果南：「『ビッグウェイブス』に私の大切にしている物をバカにされた時、龍也は本気で怒ってくれたでしょ？ 私のために怒ってくれて、嬉しかったんだよ？」

龍也：「そう、だったんだ」

果南：「だから．．．お願います!! 世界一になれたら、私と．．．お付き合ってください!!!」

龍也：「こ……こちらこそ、宜しくお願いします!!」

二人：「……プツ　クスクス　アハハ!!　なる（ぞ）よ！　世界一!!」  
こうして2人は世界一への思いを新たにし、絆を深めた。

― 続く ―

## 第9話：カタール戦に向けて・・・

俺達イナズマジャパンの準決勝の相手がカタール代表「デザートライオン」に決まり、俺達は監督の指示のもと走り込みで基礎体力、および身体能力強化の練習をしていた。

龍也：ハア ハア「果南!! そろそろ息が・・・上がってきた・・・んじゃないか?」

果南：ハツ ハツ「龍也、こそ!! 息が乱れてるよ!!」

他メンバー：ゼエ ハア「お前ら（あなたたち）（君たち）速すぎぃー!!?!?」

俺と果南が監督に言われたグラウンド20周を終わらせた時、皆はやつと16周目に入つた所だつた。

久遠：「・・・・・・・・ふむ」

監督はその様子を見て、何やら考えていた。

久遠：「大海、松浦、次の試合、お前たち2人は後半から投入する。そのつもりで準備しておけ」

果南：「え? 普通なら体力のある人は前半からなんじゃあ・・・・・・・・?」

久遠：「今度の試合の相手に限って言えば、そうではない」

果南：「? 分かりました」



円堂：「走り込み終わりました〜!!」

ハア ハア ゼエ ゼエ

息が切れて肩で息をする皆。おいおい・・・こんな体力で大丈夫なのか・・・?

龍也：「お前ら・・・いくらなんでも体力無さすぎだろ」

果南：「うん。ちよつとびつくりした」

千歌：「果南ちゃん達が速すぎるんだよ!! 果南ちゃんが毎朝淡島神社の階段を走ってたのは知ってるけど、何で大海君まで!」

龍也：「俺、サッカーから離れてた間も走り込みはしてたからな。朝5:00頃起きて後学校終わったらすぐ帰って、また走って」

穂乃果：「ち、因みにどのくらい?」

龍也：「朝晩20kmくらい?」

皆：『『はああああああああつ?!?!』』

果南：「龍也ってそんなに走れるんだ?」

吹雪：「あれ? 2人とも呼び方変わってない?」

円堂：「あ!! そう言えば!!」

全員の目が俺達2人に集まる。

千歌：「もしかして・・・付き合い始めたり!」



鬼道：「ストロップ!! お前たちさつきと言ってることが違うぞ!」

龍也・果南：「は!!」

俺と果南は鬼道の言葉で我に帰り、

龍也：「ゴ、ゴメン」

果南：「わ、私こそ・・・」

皆：((((((((大丈夫か？ こいつら・・・))))))

龍也・果南：シユン

そして翌日、そのまた次の日も走り込みで体力強化して3日後、カターンル戦の朝を迎えた。

ー 続く ー

## 第10話：v s カタール代表「デザートライオン」!!

ついにアジア予選準決勝当日。しかし今日・・・メチャクチャ暑い!!!

実況：「さあ、日本の皆さんお待ちせしました!! いよいよFFIアジア地区Aブロック予選準決勝第1試合、日本代表「イナズマジヤパン」対、カタール代表「デザートライオン」まもなくキックオフです!!!」

円堂：「暑ちー・・・気温何℃だ？」

マネージャー：「35℃です」

龍也：「これ・・・北海道組にはキツイんじゃないかね？」

一年間寒いか涼しい気温がほとんどの北海道組はこの暑さはなれてないだろ・・・  
沖縄出身の綱海も暑いつて言ってるぞ・・・

聖良：「大丈夫です」

吹雪：「問題ないよ」

久遠：「では、スターティングメンバーを発表する。

G K

円堂

D F

優木

綱海

鹿角

風丸

M F 高海 鬼道 高坂 矢澤

F W 豪炎寺

吹雪

以上だ」

日本：『『はい!!!』』

すると、カタル代表のキャプテンへビヨン・カイルへ選手が挨拶に来た。

ビヨン：「日本の皆さん、オーストラリア戦拝見しました。今日はお互い、全力で戦いましょう」

円堂：「ああ!! 俺達も敗けないぜ?」

ビヨン：「ふっ．．．それでは」

吹雪：「そろそろ時間だよ?」

そうしてスタートメンバーはフィールドへ．．．だが鹿角は、

聖良：「．．．．．」

龍也：「どうしました?」

聖良：「あの人、汗一つかいてなかった。こんなに暑いのに．．．何で?」

龍也：「気づきましたか?」

聖良：「とりあえず行ってきました」

そして両チームがスタートポジションにつき、

試合開始のホイッスルが鳴り、日本ボールのキックオフで試合開始。ボールは鬼道に戻され、そこから高海に渡る。

ザック：「ボールをよこせえっ!!」

ドカッ!!

千歌：「ッ!!」

相手FWの高海への激しいチャージング。おいおい・・・相手女の子だぞ？

千歌：「(女の子に遠慮も無し!?) くっ、鬼道君!!」パスッ

千歌さんはなんとか鬼道にパスを戻し、受け取った鬼道がゲームを組み立てる。

鬼道：「よし・・・」こっちよ鬼道!!」！ 行け矢澤!!」ドッ！

左サイドラインギリギリを、矢澤が走ってくる。鬼道は矢澤に内<sup>イン</sup>回<sup>サイドスピン</sup>転での高速パス

を撃ち、矢澤に繋げる。

にこ：「任せなさい!!」トッ!

矢澤がパスを難なくトラップ。しかし直ぐ様相手がディフェンスに入る。

ジャメル：「行かせない!!」

ドガアッ!!

相手MFの激しい<sup>ショルダーチャージ</sup>背肩奪取。しかしにこさんは何とか踏ん張り、吹雪にパスを出す。

にこ：「くっ、吹雪!!」

にこさんから吹雪にパスが繋がり、吹雪はシュート体勢に入る。

吹雪：「ナイス矢澤さん!! 行くよ!!」「ウルフレジエンド・G3」!!」

狼の遠吠えとともに鋭い爪のようなシュートがカタールゴールに迫る。

ナセル：「止めてやる!!」「ストームライダー・V2」!!」

相手GKがアクロバティックな動きで砂嵐を巻き起こし、吹雪のシュートを飲み込んだ。しかし吹雪のシュートは砂嵐を突き破り、ゴールに突き刺さった。

吹雪：「あ、あれ? 入った・・・?」

豪炎寺：「ナイスシュート」

吹雪：「う、うん・・・」

カタールボールで試合再開し、FWのマジデイがドリブルで突っ込んでくる。

マジデイ：「どけえっ!!!」

聖良：「させませんよっ! 奪取!!!」

ドガアアアツ!!

しかし、ダイフェンスに入った聖良さんはボールと選手の間を身体を滑り込ませて背中越しにブロックする。

マジデイ：「ぐっ!!!」

聖良：「今度はこっちの番です!!」「氷の矢・V2」!!」

バシユウウン

V2に進化して飛距離とキレを増した聖良さんのパスは、綺麗なアーチを描き豪炎寺へ。

豪炎寺：「ナイスだ鹿角！これなら直ダイレクトで接撃てる!! 「爆熱スクリユー」!!」

豪炎寺の爆炎と高回転力の直蹴撃弾が、カタールゴールに迫る。

ナセル：「今度こそ!!」 「ストームライダー・V2」!!」 「ゴオオオオおおおつ!

しかし、シュートはあつさり砂嵐を突き破り2-0。

立向居：「? 何か皆さんの動き鈍くなつてませんか?」

ツバサ：「この暑さだからね。まあ「デザートライオン」もよく走るけど・・・」

バシユウウン

あつ、話してる間に高坂さんが3点目を入れた。

ビヨン：「そろそろだな。さあ獅子たちよ!! 狩りの時間だ!!」

デザートライオン：『『おう!!』』

カタールボールのキックオフで試合再開。それと同時に相手FWのザックがドリブルで攻め上がってくる。

ザック：「オラアアアッ!」

ドガアアッ



穂乃果：「キャアツ!!」

高坂さんを容赦のないタツクルで吹き飛ばす相手。尚もドリブルで進む。

綱海：「高坂!! 野郎!!!」

しかし仲間をやられて綱海が怒り、ボールを奪おうとディフェンスを仕掛ける。しかし……

ザツク：「どけえっ!!」

ドガアアツ!!

綱海：「ぐわあっ!?!」

フィジカル任せの乱暴なタツクルに綱海までもが吹き飛ばされ、ザツクはシュート態勢に入る。

ザツクがボールを足元で激しくスピンさせて小さな砂嵐を巻き起こして陽炎を生み出。そして渾身の力でシュートした。

ザツク：「喰らえ!!」「ミラージュシュート・改!!」

陽炎でボールが2つになったように見えるシュートか……。あれじゃあどちらが本物か分からんぞ……

円堂：「止めてやる!!」「正義の鉄拳・G4!!」

円堂の鉄拳が、シュートを真正面から迎え撃つ。幸い円堂の技は守備範囲の広い技

だったため両方止めた。しかし・・・

グググッ バリイイイインツ!!

円堂：「ぐわああああああつ?」

実況：「ゴオオオオオオオオオオ!! カタールが1点を返しました!!」

鬼道：「まさか!? 奴らの動きは、全く衰えていないのか!!」

ザツクニ当たり前だ。赤道近くの俺達の国、更に砂漠でサッカーして足腰を鍛えてきた俺たちにとって、この程度の暑さはむしろ当たり前!!」

マジデイ：「更に俺達のラフプレーでお前たちは更に体力を奪われ、もはや虫の息同然!!!」

マネージャー：「さつきまでのラフプレーはその為に!? 日本の体力を削る事が目的だったのね!!」

ビヨンニさあ、もつと暑くなれ!! そして砂漠に迷い混んだ者達に、哀れな敗北を!!」  
そして日本ボールでの試合再開直後にボールを奪われ、そのままパスを繋いで攻め上がるカタール。そしてFWのマジデイがシュート体勢に入る。

マジデイ：「もう1点いただきだ!! 「ミラージュシュート」!!」

円堂：「やらせるか!! 「正義の鉄拳・G4オオオオオオ」!!!」

円堂が左足を振り上げ、踏み込みと同時に腰を入れて上体の動きと連動させて思い切

り右拳を前に突き出す。すると背後から、巨大な黄金色の拳が高速回転しながらシュートに激突。「ミラーージュシュート」を迎え撃つ。

円堂：「ぐううううううっ!!!」

必死に耐える円堂。しかし、

円堂：「ぐっ、ぐわあああああっ!!?」

カタルの強靱な足腰から放たれたシュートは、「正義の鉄拳」を粉々に粉碎し、ゴールに突き刺さった。そこで、前半戦終了のホイッスルが鳴った。

3-2で後半戦へ。

1 続く 1

## 第11話：決着！ 準決勝！！

前半戦が終わりハーftimeに入る。しかし吹雪と鹿角さんの2人に熱中症の疑いがあるらしい。

久遠：「後半はメンバーとポジションを変える。DFは優木、綱海、風丸のスリーバック。MFは高海、鬼道、松浦、矢澤のフォーハーフ。FWは豪炎寺、綺羅、大海のスリートップで行く」

全員：『はい！！』

実況：「さあ、いよいよ後半戦の開始です！！」

解説：「日本はフォーメーションとメンバーを変えて来ましたね。松浦選手と大海選手がどこまで食らいつけるか、注目したいところですよ！！」

そして審判のホイッスルと共に、カタールボールで後半戦開始。

マジデイ：「オラアツ！！ どけえええつ！！」

そう言いながら俺に突っ込んでくるFWマジデイ。しかし・・・、

龍也：「退かねえよ！！ 奪取！！」

ドガアアアアツ！！

マジデイ：「ぐあああつ!!」

龍也：「この程度か？ デザートライオン!!」

ザラ：「野郎!! 行かせるか!!」

スツ トンツ

デイフェンスにくるカタールDF。しかし俺はヒールリフトで相手の頭上を抜いた。

ジャメル：「まだだ!!」 『デザートストーム・V2』!!」

続く相手のデイフェンス技で砂が巻き上げられる。しかしその砂が晴れた時には、そこに俺の姿は無かった。

ジャメル：「なに!? どこにいった!! . . .?! 上か!!」

空中に飛び、技を躲わしていた俺は空中から空いているスペースにパスを出す。そこに走りこんで来てパスを受け取ったのは . . . .、

果南：「ナイスパスだよ龍也!!」

フリーでボールを受け取った果南がシュート態勢に入ると、オーストラリア戦の時よりも激しい水流が果南を包み水の竜巻となってぐんぐん上昇。水のエネルギーが凝縮されたボールをカタールゴールに向かって蹴り落とした。

果南：「激流ストーム・G4』!!」

俺との練習により、格段にパワーアップした果南の「激流ストーム」。その溢れでる水

のエネルギーは、相手キーパーの技で発生した砂嵐の砂を一瞬で地に落とし、ゴールに突き刺さった。

龍也：「ナイシユ果南！！」

果南：「うん！！」

カタールボールのキックオフから試合再開。FWのザックがドリブルで攻め上がる。

ザック：「くそっ！！ 絶対に点を取ってやる！！」

綱海：「鬼道、高海！！」

鬼道・千歌：「ああ（うん）！！」

デیفエンスに入った3人と相手フォワードを中心に、フィールドが密林に変わる。デیفエンスの3人は、ターザンロープで相手の周りをグルグルと周り、3方向から同時にアタックした。

綱海・千歌・鬼道：「「「デープジャングル」！！」」

ドガアアツ！

ザック：「ぐあつ、まだこんな力を！？」

綱海：「松浦！！」

ボールを奪った綱海から果南に縦のパスが飛ぶ。しかしカタールがダブルチームでデیفエンスを掛ける。

ザラ・ビヨン：「行かせん!!」

果南がドリブル技を発動した瞬間、果南と相手デイフェンス2人の周りが海の中に変わる。果南はボールを両足で挟み、その状態で綺麗なドルフィンキックで水中で上手く動けない相手の周りを高速で泳ぎまわり、あざ笑うかのように抜き去った。

果南：「マーメイドダイブ」!! 龍也!!」

ここでボールは俺に渡ったが、カターのデイフェンス4人に囲まれた。しかしカターのラフなデイフェンスをヒラヒラと躲し、時には正面から身体をぶつけデイフェンスを挑発しながらキープする。

龍也：「おいおい!! そんなにラフなデイフェンスで、しかも4人がかりなのに、たった1人からボールを奪えないのか?」

スライ：「くそっ!! 何なんだコイツ!」

龍也：「つまらんな・・・」パスッ

俺は脇から走って来た果南にパスを出し、ワン・ツーパスでデイフェンスを抜き去った。

ビヨン：「つ、マズイ!! ナセル止めてくれえ!!」

ナセル：「ああ!! 来い!!」

俺が飛び上がると同時に、背後に刀を持った武神のようなオーラが出現。そのオーラ

が刀を振り上げると同時にシュート態勢に入り、振り下ろすと同時に左足で思い切りボールを蹴り抜いた。

龍也：「喰らええええええつ!!、「スサノオブレード・G5」!!」

ナセル：「くそつ!!」「ストームライダー・V2」!!」

龍也：「無駄だよ・・・」

ズバアアアアン!!!

俺のシュートは、砂嵐をあつさりと一刀両断。ゴールに突き刺さった。

5-2。点差は3点に広がり、焦るカタール。何とかFWまでボールを繋いでも、

風丸：「優木、矢澤!! 行くぞ!!」

あんじゅ・にこ：「はくい（任せなさい）!!」

風丸・あんじゅ・にこ：「「ハリケンアロー」!!!」

3人が相手の周りをグルグルと走り回り、相手を中心とした竜巻を起こして相手を動けなくした所を、矢のような3連続の鋭い蹴りでボールを奪う。

風丸：「大海、松浦!!!」

聖良：「なんか皆さんの動きにキレが戻って来てませんか？」

久遠：「大海と松浦のおかげだ。あの2人は、日本の中でも並外れた体力を持ってい



る。

だが、カターの体力はおそらく全員がそれと同等。

しかし、相手も人間だ。前半の間あれだけ走り回れば疲れない筈がない。

だから大海と松浦を後半から投入し、大暴れさせる。

そしてあの2人の中には、まだ知り合って間もないとは思えない程の強固な信頼がある。強固な信頼は、コンビネーションをより強力にする。それによつて相手は更に体力を奪われた。

そして2人が暴れている間に、他の者には適度にサボつて体力を回復するように指示を出した。大海と松浦には、出来るだけ2人で攻めろとな

野坂：「でも、大海さんと松浦さんの体力はどうなんですか？」

久遠：あの2人は、あれでも必要最小限の動きしかしていない。任せる所は任せ、自分で行く所は自分でと、お互いに理解してやっている。

おそらくあの2人の体力は半分も減っていないだろう」

マネージャー：「アディショナルタイム入りしました。2分です。」

ボールを風丸から受け取った果南と俺は、2人で練習していた連携シユートを出す事にしました。

俺たち2人がシュート体勢に入ると、「激流ストーム」よりも更に激しい水流が俺と果南の二人を包みこみ、水の竜巻となってぐんぐん上昇。すると水流が龍のような姿に変化していく。

龍也：「果南!!」

果南：「龍也!!」

龍也・果南：「「海龍の咆哮」!!! 行つけええええええええええつ!!!」

凶暴な破壊力を持ったシュートが、カタールディフェンスを風ぎ払いながらカタールゴールを襲う。

ナセル：「絶対に止める!! 「ストームライダー・V3」!!!」

相手の砂嵐と、こちらの海龍が激突。相手の砂嵐はレベルアップし威力が上がったが、俺と果南の連携シュートを防げるような物ではなく、シュートはゴールに突き刺さった。そして、

ピッ、ピッ、ピイイイイーッ!!!

実況：「ここで試合終了のホイッスル!! 6-2で、イナズマジヤパンの勝利です!!」  
 ビヨン：「バカな!! 我々がこんなところで敗れるなんて!!」

!!!  
 円堂：「そつちが砂の獅子なら、こつちには水の龍いるんだ!! 飛びつきり強いのがさ!!!」

ビヨン：「ふっ、我々の完敗ですね・・・これからの活躍をお祈りしております。イナズマジヤパン」

こうしてアジア地区Aブロック予選の決勝に進んだ俺達イナズマジヤパン。決勝の相手は韓国代表「ファイアードラゴン」か、サウジアラビア代表「ザ・バラクーダ」か！！

— 続く —



校が破壊されて……でも、結局エイリア学園は特殊な石で身体能力を強化された地球人で、宇宙人何かじゃ無かつたんでしょ？ 正しく言えば強化人間で……. 当時中学生の円堂君達雷門中イレブンが倒したって聞いたけど？」

マネージャー：「あの女性の名前は吉良瞳子きらひとみこさん。当時私達雷門中イレブンを率いていた方です」

龍也：「ふーん……」

？：「久し振りだな円堂」

円堂：「あー!! お前、「イプシロン」のデザームか!？」

？：「その名はもう捨てた。私の本名は砂木沼治さぎぬまおさむだ」

円堂：「そうだったの?」

砂木沼：「円堂!! 私はお前との決着を付ける為に再び戻って来たのだ! 覚悟して

貰う!!!」

久遠：「……………」

瞳子：「久遠監督、私達は、イナズマジパンに挑戦します。真の日本代表の座を賭けて!!」

イナズマジパン：「『ええええええええええつ!!?』」

砂木沼：「円堂!! お前達には分かるまい!! 代表選考にも呼ばれず、世界と戦うチャ

ンスすら与えられなかった者の悔しさを!! 仲間ですら置いていかれた悔しさを!!  
無名選手にすら負けた屈辱を・・・耐え難き敗北感、決して忘れはしない!!」

龍也：「ん? 無名選手って俺の事?」

ネオジャパン：『『お前だ!!』』

穂乃果：「海未ちゃん・・・、希ちゃん・・・」

聖良：「理亞・・・」

理亞：「いくら相手が姉様でも遠慮はしない。容赦なく叩き潰すから」

英玲奈：「私達の挑戦、受けますよね?」

ツバサ：「あんじゅ：「英玲奈・・・」

久遠：「分かりました。お受けしましょう」

イナズマジャパン：『『監督?!?!』』

瞳子：「ありがとうございます。では試合は明日、このグラウンドで」

穂乃果：「まさか、海未ちゃんと希ちゃんが・・・」

にこ：「穂乃果、気持ち分かるけど・・・あの2人は今は敵よ!! 負けたら代表じゃな

くなるんだからね!」

円堂：「とりあえず明日に備えて今日は休もう」

——翌日——

審判：「これより、「イナズマジヤパン」VS「ネオジヤパン」の試合を始めます」  
 全員：『宜しくお願いします!!』

スターティングメンバー

ネオジヤパン

G K 統堂

D F 東條 鳴上 牧屋 凍地

ボランチ 園田

M F 熱波 砂木沼 瀬方

F W 幽谷 鹿角（理）

イナズマジヤパン

F W 大海 綺羅 豪炎寺

M F 松浦 鬼道 矢澤

D F 鹿角（聖） 綱海 優木 風丸

G K 円堂

そして試合開始のホイッスルが鳴り、イナズマジヤパンボールで試合開始。しかしキックオフとほぼ同時に、鹿角妹にボールを奪われてしまう。

ツバサ：「早い!?!」

砂木沼：「行け鹿角妹!! ゴールを奪え!!!」

理亞：「任せなさい!!」 「グングニル・V2」!!

相手がシュート態勢に入ると足元に宇宙空間に繋がる穴が空き、その中に吸い込まれた。そしてその空間で相手がシュートしたボールは紫色に光る槍となり、こちらの空間に出てきてイナズマジャパンゴールを襲う。

円堂：「くっ!!」 「正義の鉄拳・G4」!!

円堂が左足を振り上げ、踏み込みと同時に腰を入れて上体の動きと連動させて思い切り右拳を前に突き出す。すると背後から、巨大な黄金色の拳が高速回転しながらシュートに激突。「グングニル」を迎え撃つ。

円堂：「ぐっ、パワーが!?!」

バガアアンツ!!

円堂：「ぐわあっ!?!」

「グングニル」は「正義の鉄拳」を粉々に粉碎し、ゴールを決められてしまった。

鬼道：「今のはエイリア学園時代の砂木沼の技!?! まさか他の選手の技をマスターし

てるのか!?!」

龍也：「おい!!」



豪炎寺・ツバサ：「?」

イナズマジャパンボールで試合再開。

豪炎寺：「大海!!」

俺はボールを貰った瞬間ロングシュートの態勢に入る。先程のシュートと全く同じ  
モーションで。

龍也：「喰らえ!!」「グングニル・V3」!!」

俺の《パーフェクトコピー完全無欠の模倣》がネオジャパンに牙を剥く。自分たちの技を返されてネオ  
ジャパンは驚愕している。

砂木沼：「何だと!? 止めろ統堂!!」

英玲奈：「鳴上、牧屋!!」

3人：「真・無限の壁」!!」

3人のフォーメーションで石造りの城壁が現れ、シュートを迎え撃つ。しかし、俺の  
シュートは相手の技を容易く粉々にしてゴールに突き刺さった。

ネオジャパン：「『?!』」

龍也：「振り出しだな。おーい!! どんどんボール回してくれ!! ガンガン入れてや  
る!! コイツらの上からな!!」

ネオジャパン：ブチッ！

ネオジャパンボールで試合再開。鹿角妹にボールが渡り、そこに矢澤がディフェンスに入る。

理亞：「退きなさい！、「フレイムベール」!!」

地面に蹴りこまれたボールから火柱が迫っていき矢澤を吹き飛ばした。

綱海：「今のはエイリアのマスターチーム、「プロミネンス」のドリブル技じゃねーか!!」

果南：「まあ私の「ウオーターベール」もエイリアのマスターチーム、「ダイヤモンドダスト」のドリブル技だけどね」

理亞：「喰らいなさい!!」「ノーザンインパクト・V2」!!」

鹿角妹のシュートが、イナズマジヤパンゴールに迫る。しかしそこに風丸がシュートブロックに入る。

風丸：「少しでも威力を!!」「エアバレット・V2」!!」

ガカアッ！

風丸のシュートブロックにより威力は減衰。そのボールを・・・

円堂：「正義の鉄拳・G4」!!」

円堂は今度はしっかりとセーブに成功。弾いたボールは前線の果南に飛ぶが、熱波と

競り合いになる。

熱波：「はあああつ!!」ガッ

果南：「っ! この程度!!」

果南はギリギリ競り勝ち、俺にヘディングでパスを出した。

果南：「龍也!!」

パスを受け取った俺はトラップしてシュート態勢に入る。

龍也：「スサノオブレード・G5」!!」

ドツガアアアアアン!

ネオジャパンゴールに迫る俺のシュート。統堂は右手に高速回転する巨大なドリルを出現させてシュートの威力を削り取るうとする。

英玲奈：「今度は止める!!」「ドリルスマツシャー・V2」!!」

ガガガガガガガッ!!

英玲奈：「ぐううううううっ!!」

海未：「堪えて下さい英玲奈さん!!」

必死に堪える統堂。しかし無情にもドリルには次々亀裂が入って行き……、

バガアアン!!

英玲奈：「うわああああ!!」

シュートは統堂の巨大ドリルを叩き割り、ゴールに突き刺さった。  
2ー1イナズマジャパンリード。

― 続く ―

## 第13話：「正義の鉄拳」の限界

前半残り15分。イナズマジヤパン1点差リードでネオジヤパンボールのキックオフで試合再開。

するとネオジヤパンMF、園田海未がドリブルで攻めこんでくる。

海未：「大海龍也ああああっ!!」

龍也：「来い!!」

俺と園田は激しい攻防を繰り返す。園田がフェイントで抜きにかかれば、先読みで本命の方向に回り込む。ヒールで抜く素振りを見せれば半歩下がり、園田は完全に攻めあぐねていた。

海未：「くつ、やりますね・・・（全部読まれて先手で潰される・・・）」

龍也：「その程度か？もしそうなら高坂さんや矢澤さんの方がよほど上手いぜ？」

海未：「っ！その余裕を無くしてあげます!!」「ウオーター・・・「今だ!!」っ!」

園田が技の発動モーションに入った瞬間、電光石火の早技でボールを奪った。

海未：「な!」

するとすぐさまDFの東條がディフェンスに入る。

希：「フローズンステイル・改」!!」

しかし、俺は相手の氷のスライディングをジャンプで躲わして豪炎寺にパの頭上にパスを出した。意図を理解した豪炎寺は、直接で必殺シュートダイレクトを放つ。

豪炎寺：「!! ナイスだ大海!!」 「爆熱・スクリューツ」!!!」

豪炎寺の炎のシュート必殺直蹴撃弾ダイレクトシュートが、ネオジャパンゴールに迫る。

英玲奈・牧屋・鳴上：「真・無限の壁」!!」

ガカアアアツ バチイイイン!!

豪炎寺のシュートは相手の技を破るには破ったが完全ではなく、クロスバーに直撃し跳ね返った。

牧屋：「危ない!!」

跳ね返ったボールはネオジャパンが抑え、ロングパスから前線の鹿角妹に渡った。

豪炎寺：今の「爆熱スクリュー」では相手の技は破りきれない。もっとパワーがないと……」

ボールを受け取った鹿角妹は駆け上がり、砂木沼、園田と共に3人でシュート体勢に入る。

理亞・砂木沼・海未：「喰らえ（いなさい）!!!」 「真・トライアングルZ」!!」

現在の木戸川清修高校の最高火力の必殺シュートがイナズマジパンゴールを襲う。

円堂：「今度こそ止める!!」 「正義の鉄拳・G5」!!

思い切り振り上げた足を踏み込み右拳をつき出す円堂の動きのタイミングでオーラで構成された神々しい輝きを放つ巨大な拳が超高速回転しながら相手のシュートに激突し迎え撃つ。

円堂：「ぐぐぐうううっ・・・!!」

バリイイイン!!

円堂：「ぐわああああああっ!!」

しかし相手のシュートは、最終進化した円堂の究極奥義を粉碎し、ゴールネットに突き刺さった。

そしてここで前半終了のホイッスル。2―2でハーフタイムに入る。

立向居：「そんな・・・最終進化した円堂さんの究極奥義でも止められないなんて・・・」

龍也：「監督、後半はキーパーを立向居に代えてください」

イナズマジャパン：「『?!?』」

龍也：「俺の見た感じ、無進化状態での素の威力が、「正義の鉄拳」より「ムゲン・ザ・ハンド」の方が強いです。恐らく段階の違いが二段階位なら、「ムゲン・ザ・ハンド」の方が止められる可能性が高いです」

風丸：「おい大海!! 何言ってるんだ!!」

龍也：「より相手に対抗出来る可能性がある方を使うのは当然だろ?」

円堂：「分かった・・・」

鬼道：「円堂!？」

円堂：「悔しいけど大海の言う通りだ・・・今の俺じゃあ何点取られるか分からない」

豪炎寺：「円堂・・・」

久遠：「よし。立向居、準備しろ」

立向居：「は、はい・・・」

イナズマジャパン

円堂 O U T

立向居 I N

そして後半戦。ネオジャパンボールのキックオフで後半戦開始。

砂木沼：「ほう? キーパーを代えてきたか。控えのキーパーに我らの技が止められ

る物か!! 園田、鹿角!!」

理亞・砂木沼・海未：「[[真・トライアングル乙]]!!」

ネオジャパンのシユートが立向居に迫る。すると立向居が必殺技の構えに入りシユートを迎え撃つ。立向井の背後に、千手観音のようなオーラで構成された無数の手



が出現し、それが一気にシュートへ向かう。

立向居：「ムゲン・ザ・ハンド・G4」!!」

ガシ ガシ ガシ ガシ ガシ バシイイツ!!

砂木沼：「何!! 止めただど!?!」

立向居：(何だろう?) やけにあつさり止められた・・・こんなシュートを円堂さんは止められなかったのか?)

果南：「立向居くん! こっち!!」

立向居：「松浦さん!!」

果南：「ホッ、ナイスパス!! (さてと・・・龍也はマークが激しい。なら・・・) 豪炎寺君!!」

パスは豪炎寺に富んだ。相手は「爆熱スクリュー」では最終進化した「無限の壁」を破りきれないと踏んでいるためボールはフリーの豪炎寺の頭上に。

英玲奈：「来い!!」

豪炎寺：「行くぞ!!」

豪炎寺は再び直接で、現時点での己の最強シュート、「爆熱スクリュー」の体勢に入る。しかしここで全員異変に気付いた。先程の「爆熱スクリュー」の時よりも回転量も熱量も激しいのだ。

豪炎寺：「喰らええええっ!!」 「爆熱・スクリューツ・改!!」

英玲奈・牧屋・鳴上：「[[真・無限の壁]]!!」

進化し技の威力が増した豪炎寺の必殺直蹴撃弾に、ダイレクトシュートまたしても日本最強のディフェ

ンスと言われる千羽山高校のキーパー技が立ち塞がる。しかし・・・

ゴオオオオ ドッガアアアアア!!

豪炎寺の進化したシュートは、相手の技を粉々に破碎し、ゴールに突き刺さった。

豪炎寺：「よし!!」グッ!!

豪炎寺の渾身のガッツポーズ。珍しいな。

円堂：「やった!! さすが豪炎寺!!」

ネオジャパンボールで試合再開。

幽谷：「くそっ!!」 「リフレクトバスター・改!!」

相手がシュートモーションに入るとフィールドの地面の一部が塊となり複数浮かび上がる。そしてその塊に向かってシュート。すると塊に当たったボールが跳ね返り、別の塊に当たり跳ね返り反射反射を繰り返す。あれではいつどこからどんな軌道でシュートが飛んで来るか分からない。

ドガアアア!!

シュートが飛んできた。「ムゲン・ザ・ハンド」ではモーションが長くて間に合わない。

しかし・・・

立向居：「止める!!」「真・マジン・ザ・ハンド!!」

立向居の背後に青色の魔神が現れ片腕でシユートをつちりキヤツチした。

イナズマジャパン3―2ネオジャパン

― 続く ―

## 第14話：決着!! 「ネオジャパン」!!

幽谷の「リフレクトバスター」を、立向居が「マジン・ザ・ハンド」でしっかりセーブしゴールキック。

立向居：「あんじゅさん!!」

立向居のゴールキックからボールはあんじゅさんに飛び、受け取ったあんじゅさんに園田がディフェンスに入る。

海未：「行かせません!!」

あんじゅ「おっと……（どうしようかしら……）」

聖良「あんじゅさんこつち!!」「聖良ちゃん? お願いね。パスツ」よし!

あんじゅさんと園田の激しい攻防。しかし一瞬の隙を突き味方の聖良さんにパスを出す。

聖良：「氷の矢・V2」!!

氷漬けになったボールはキラキラとダイヤモンドダストを撒きながらアーチを描きツバサさんの頭上に飛ぶ。

ツバサ：「ナイスパス!」ダイレクトで直接行くわ! 「流星・ブレエエエドツ・V2」!!

ツバサさんの進化した流星の直蹴撃弾が、ダイレクトシュート空気を震わせながらネオジャパングールに迫る。

英玲奈・鳴上・牧屋：「[[真・無限の壁]]!!」

ドガアアアア!!

ツバサさんの放った流星と統堂の城壁が激突する。周りにはビリビリと衝撃が伝わり力が拮抗している事が分かった。

英玲奈：「ぐうううっ……負けて……たまるかあああああつ!!!」

バチイイイイイン!!

最後は流星が力を失い地に落ちた。

英玲奈：「はぁ、はぁ……。海未!!」

キーパーのゴールキックから園田にボールが渡る。そして園田、砂木沼、瀬方の三人で駆け上がりシュート態勢に入る。

園田が指笛を吹くと、地面から宇宙服を着たペンギンが現れ園田のキックで飛んだボールと共にペンギンも飛び最後に空中で砂木沼と瀬方のツインシュート。

園田・砂木沼・瀬方：「[[スペースペンギン・V2]]!!」

エイリア学園最強のマスターチーム、「ザ・ジェネシス」の最強の必殺シュートがイナズマジャパングールに迫る。

立向居：「絶対に止めてやる!!」 「ムゲン・ザ・ハンド・G5」!!

立向居の進化した「ムゲン・ザ・ハンド」は、手の本数や一本一本の力強さが格段に増し、そこに神々しさが加わり、俺が以前コピーして見せた「ムゲン・ザ・ハンド・G5」より明らかに威力が高かった。イナズマジヤパンメンバーは「止めた!!」と確信した。

ガシ ガシ ガシ シュルルル

園田：「そんな・・・っ!? 止められた・・・?」

立向居：「鬼道さん!!」

立向居のゴールキックからボールは一気にカウンターで前線の鬼道に飛び、東條との競り合いになるが鬼道は空中で身体をぶつけて東條を弾き飛ばしボールを確保。ツバサさん頭上にパスを出す。

そしてツバサさんは、先程よりもゴールに近い位置で必殺技での直蹴撃弾態勢ダイレクトシュートに入る。

ツバサ：「行くわよ!!」 ダイレクト 直接・「流星ブレエエエドツ・V3リイイイイツ」!!

進化し、特大の流星となったツバサさんのシュートはビリビリと空気を震わせながらネオジャパンゴールに迫る。

英玲奈・鳴上・牧屋：「絶対に止める!!」 「真・無限の壁」!!!

ドガアアアアツ!!

再び流星と城壁が激突。しかし今度は流星の威力が上がっている上に距離も近い。統堂も必死に堪えているが、

ビシ!

英玲奈：「!?」

ビシ ビシ ビシ ビシ

威力に耐えられなくなった壁がどんどん崩壊していく。そして……ドガアアアアアツ!!

ツバサさんのシュートは壁を粉碎しゴールネットを揺らした。

そしてここで、

ピッ、ピッ、ピイイイーッ!!!

試合終了のホイッスルが鳴り、4ー2でイナズマジャパンが勝利した。

理亞：「敗けた……」

英玲奈：「悔しいが勝負は勝負だ。代表として恥じる鬨いはするなよ? ツバサ、あん

じゅ!!」

ツバサ・あんじゅ：「ええ（分かってるわ）」

海未：「悔しいですけど完敗です。穂乃果、にこ、絶対に世界大会に進んで優勝してく

ださいね?」

にこ・穂乃果：「ええ（もちろん）!!」

海未：「後……大海さん」

龍也：「何?」

海未：「貴方を認めます。皆を世界に連れていって上げてください……日本のエースとして」

龍也：「え? 俺がエースなの?」

穂乃果：「どう見てもそうじゃん!!」

龍也：「はあ、分かったよ」

砂木沼・円堂!!：「お前たちは我らだけではない、日本人全員の代表だと言うことを肝に命じておけ!! 気を抜いた試合をすれば、直ぐにでも代表の座を奪い取るからな!!」

円堂：「ああ、分かっている」

瞳子：「じゃあ皆、撤収するわよ。ありがとうごさいました!!」

ネオジャパン：「『ありがとうごさいました!!』」

試合を終えれば礼を忘れない気持ちのいい奴らだったな。

円堂：「何だ大海? 話って」



龍也：「単刀直入に言う。円堂、今のお前には日本のゴールを任せられない。今日だけじゃない、今までの試合で、シュートブロック無しではほとんどのシュートが止められなかっただろ？」

円堂：「悪い……言い返せないや……」

龍也：「今日の試合で気付いただろ。世界に、「正義の鉄拳」は通用しない。これからレギュラーで居たければ、新しい技を身に付ける。今のお前と立向居じゃあ、立向居にゴールを任せられた方が安心できる」

円堂：「確かに今日の試合、俺が止められなかったシュートを、立向居はあっさり止めてたからな……」

龍也：「そう言うことだ。これからどうするかはお前に任せる」

ガチャ バタン

円堂：「……やってやる!! 「正義の鉄拳」を超える技!! 必ず編み出してマスターしてやる!!」

く 続く く

## 第15話：韓国戦に向けて

久遠：「お前たちも知つての通り決勝の相手が韓国に決まった。よつて、それに合わせた練習をする。全員着いてこい。」

そうして監督に連れてこられたのは何と「泥」のフィールドだった。

久遠：「今日から韓国戦までの間、この泥のフィールドで練習してもらおう。」

イナズマジヤパン：『『はあああああああつ!?!』』

皆が戸惑っているなか俺は泥の中に入った。

果南：「龍也!?!」

皆が驚く中で1人でリフティングを始める。

あんじゅ：「……つて言うか……凄くない?」

ツバサ：「何が?」

あんじゅ：「こんなぬかるんで足下も覚束ないフィールドで、ボールを落とさずリフ

ティング出来てる所がよ」

豪炎寺：「確かに……俺もあそこまで安定させてはできないと思う」

果南：「私も……」

改めて分かる．．．彼と私達の差。でも、絶対に追いついて見せるよ!!!

果南：「よし！ 私は行くよ!!!」

バシヤ バシヤ

果南：「龍也!! パス!!!」

龍也：「果南!!」

円堂：「俺たちも行くぞ!!!」

そして俺たちは練習を始めた。

バシヤアツ

千歌：「ぶわあつぷ!!」

綱海：「馬鹿!! 体に直接パスするんだよ!!! こんなフィールドで転がる訳ねえだろ

!!!」

円堂：「．．．．．」

鬼道：「どうした？」

円堂：「大海に言われたんだ。世界には、「正義の鉄拳」は通用しないって。だから新しい技を考えてるんだけど．．．．．」

鬼道：「ふむ．．．．．」

円堂：「正義の鉄拳」は、シユートの真正面から力をぶつける技だ。これが一番パワーが伝わる筈なんだけど……」

~~~~~

豪炎寺：「行くぞ立向居!!」

立向居：「はい！　お願いします!!」

豪炎寺：「爆熱スク……うわっ!?!」

豪炎寺は跳ぶときに足を滑らせあらぬ方向に「爆熱スクリュ」を撃ってしまった。

その方向には……

風丸：「円堂!?!　危ない!!」

円堂：「へ？　うわっ!?!」

円堂は避けようとしたがふらつき前のめりに倒れてしまう。その時に豪炎寺のシユートを右拳で思い切り地面に叩きつけるようになり、盛大な泥飛沫が上がる。

鬼道：「円堂!?!　大丈夫か!!」

円堂：「それより……今の!!　こう……上から叩きつけるようになって、気づいたら止めてた!!　これなら……行けるかも!!」

龍也：（やつと気付いたか……キャプテンのお前が弱いままじゃ困るからな。もつと

強くなれ!!!)

それから夕方5時迄練習し、

マネージャー：「今日の練習は終了です!!!」

穂乃果：「はあ、疲れた・・・お風呂入りたい・・・」

聖良：「同感です。泥だらけで気持ち悪いです・・・」

龍也：「果南、行こうぜ?」

果南：「・・・ねえ? 「海龍の咆哮」をパワーアップさせておきたいから、付き合っ

てくれない?」

龍也：「俺は良いぜ?」

果南：「よし決まり!」

~~~~~

円堂：「豪炎寺!! 撃つてくれ!!!」

豪炎寺：「爆熱スクリュー・改」!!」

ドツガアアアアン!!

円堂：「はあああああつ!!!」

ドゴオオツ!!! ビリビリ バチインツ!!!

円堂：「ぐあつ!」

風丸：「大丈夫か？」

円堂：「まだまだ!! 次、鬼道と風丸頼む!!」

鬼道がボールを上に乗せ、蹴り上げ、風丸がそれをヘディングでダイレクトで下に落とす。それを鬼道がダイレクトシュート。

鬼道・風丸：「真・ツインブースト」!!」

円堂：「はあああああつ!!」

ドッゴオオツ!! ビリビリビリ バチイイイインツ!!

ザシュツ

円堂：「くそつ!!」

風丸：「焦るなよ円堂。まだ1週間あるんだからさ？」

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

龍也：「どうすんだ？」

果南：「今日は止めておこっか？」

龍也：「そうだな」

そうしてその日は風呂で念入りに泥を落として夕飯を食べて就寝・・・した筈なのだが、朝起きたら果南が俺のベッドで一緒に寝ていた。

正直女の子特有のいい臭いがして理性がヤバかった。

― 続く ―





? : 「長くて退屈したぜ。決勝戦への道のりは」

鬼道 : 「バーン」!? 「ガゼル」まで!!」

龍也 : 「誰?」

豪炎寺 : 「最初の奴は俺達雷門メンバーが中学二年の時の全国大会決勝で戦った世子(ぜうす)中のキャプテン亜風焔照美、通称アフロデイ。後の2人は髪の毛が白い方は元エイリア学園マスターチーム「ダイヤモンドダスト」のキャプテンのガゼル。赤い方は同じくマスターチーム「プロミネンス」のキャプテンのバーンだ」

龍也 : 「ふーん……」

風丸 : 「何でお前らがここに?」

アフロデイ : 「不思議ではないだろう? 僕が母国の代表にえらばれても」

は? コイツ韓国人なの? 照美って完全に日本人の名前だけど……。

アフロデイ : 「そしてガゼルこと涼野風介バーンこと南雲晴矢彼らもまた僕のチームメイト。僕たちが韓国代表「ファイアードラゴン」だ!!」

マネージャー : 「確かにこの大会は、必ずしも代表となる国と自分の国籍が同じである必要はない。だから日本人の涼野さんと南雲さんと韓国に……」

アフロデイ : 「そしてこのチームにはチェ・チャンスウがいる」

鬼道 : 「なっ!? チェ・チャンスウだと!!」

果南：「誰？」

鬼道：「知らないのか？ 奴の編み出す戦術は一切の無駄が無く〈完全なる戦術〉と呼ばれている稀代の天才ゲームメイカーだ」

チャンスウ：「初めまして、日本の皆さん。今日はお互いに全力で戦いましょう」

円堂：「ああ!! もちろん!!!」

チャンスウ：「ふっ、ですが気をつけて下さい。フィールドには・・・」龍「がいますので」

韓国チームは訳のわからない中二発言を残して自分たちのベンチに戻っていった。そして間もなく試合開始と言うときに久遠監督は円堂を呼んだ。

久遠：「・・・円堂!! この試合、イナズマジパンは勝てると思うか？」

円堂：「へ？ 勿論です監督!! 皆、この日の為にレベルアップして来ました。絶対勝てます!!」

久遠：「・・・お前には、何も見えていない様だな。キャプテンでありながら」

円堂：「へ？」

久遠：「今のままで、イナズマジパンは勝てない。大海、立向居!! 来い」

龍也・立向居：「はい？」

久遠：「立向居、今日の試合キーパーはお前だ。キャプテンは大海!! お前に任せる」

イナズマジヤパン：『『ええっ?!』』

風丸：「何で大海がキャプテンなんですか!？」

久遠：「少しでも勝率を上げるための判断だ。この試合、円堂は出さない」

鬼道：「なっ!!」

豪炎寺：「円堂……」

久遠：「スターティングメンバーを発表する!!」

G K 立向居

D F 風丸 優木 綱海 鹿角

M F 矢澤 松浦 鬼道 高海

F W ☆大海 高坂

以上だ」

審判：「それでは、試合を始めます!!」

韓国スタートメンバー

4 | 3 | 3

男女比 8 : 3

G K ジョンス (男)

D F ウミヤン (男) ヨナ (女) ミラ (女) ソンジョ (男)

M F ウンヨン(男) チャンスウ(男) ★ ソヨン(女)

F W ガゼル(男) アフロディ(男) バーン(男)

日本スタートメンバー

4 | 4 | 2

男女比 5 : 6

F W 高坂(女) 大海(男)

M F 高海(女) 鬼道(男) 松浦(女) 矢澤(女)

D F 鹿角(女) 綱海(男) 優木(女) 風丸(男)

G K 立向居(男)

ピイイイーローツ!!!

そして、試合開始のホイッスルが鳴った。

— 続く —

## 第17話：神の闘いアフロデイvsスサノオ

韓国ボールのキックオフと同時に上がる韓国オフエンス陣はボールをチャンスウに渡して日本陣内に切り込んでくる。が、そこに高坂さんが立ち塞がる。

穂乃果：「私達の世界への道は、誰にも邪魔させない!!」「ダンス・オブ・サラマンダー」  
!!」

高坂さんの「フレイムダンス」よりも広範囲に灼熱という言葉がふさわしい熱量の炎の舞が荒れ狂う。その炎舞はチャンスウを熱量と衝撃で吹っ飛ばしボールを奪った。

バーン：「何い!?!」

その瞬間、俺は韓国陣内に攻め上がる。

穂乃果：「大海くん!!」

ボールを受け取った俺に韓国デイフェンスが向かって来る。

龍也：「行くぜ!!」「スプリントワープ・G5」!!」

ビュン ビュン ビュン!!

高速移動のドリブル技で完全にデイフェンスをまとめて置き去りにしてキーパーと1vs1になり相手キーパーが身構える。





スゝ発動!!」

韓国：『『了解!!』』

すると韓国は3人で常に三角形の距離を保ちながら右回りの円形にぐるぐると俺の回りを走り始めた。更にその外側には四角形の距離を保ちながら4人が左回りに回っている。

龍也：「なんだこれ!? パスが出せない!!」

ドカッ

龍也：「ぐわっ?!」

パスもドリブルも封じられた俺は、簡単にボールを奪われ最悪な事にボールはアフロディへ。

アフロディ：「カオス・・・」

龍也：「させるかああああああっ!!!」

奪われて直ぐに「スプリントワープ」を応用し、ゴール前まで戻った俺は、「カオスブレイク」が放たれる瞬間、「ササノオブレイド」でブロックした。

ドツガアアアアン ビリ ビリ ビリ

凄まじいまでのパワーとパワーが激突する。しかし相手は3人掛かりであるにも関わらずたった1人に堪えられてる事が信じられないと言う顔をしていた。





大爆発と同時に物凄く大きな水飛沫が起こった。だがシュートは止められ、弾かれたボールはそのままチャンスウに渡ってしまった。

チャンスウ：「今です三人とも!!」

チャンスウからのパスはアフロディに繋がる。

アフロディ・バーン・ガゼル：「『カオスブレイク』!!!」

立向居：「ムゲン・ザ・ハンド・G5」!!!」

パキヤアアアン!!

ボールが日本ゴールに突き刺さり1ー2。ここで前半終了のホイッスルが鳴り、日本が追いかける形で前半終了。

— 続く —

## 〈松浦果南〉誕生日編：私の大好きな人

F F I 世界大会が終わり年が明け今日は2月10日。俺の愛しの彼女の誕生日なので俺は現在実家のある神奈川県から彼女の家がある静岡県沼津市に電車で向かっていた。彼女は日本代表候補に選ばれ雷門高校に行った時に出会い、俺のつらい過去を優しく包み込んでくれて、世界の強豪達との激しい闘いや苦楽を共にした戦友でもある。

今では彼氏彼女の関係になり、神奈川県と静岡の遠距離恋愛だが彼女以上の女はいないと俺は自信を持って言える。

アナウンス：「沼津駅へ。沼津駅へ。お降りの方はお忘れ物の無いようご注意ください」

龍也：「来たぜ沼津!!」

俺が叫んだら周りの人がジロジロ見てきたので俺はさっさと改札を出て内浦行きのバスに乗った。

く 果南 side く

私は現在3年生の最後の大会である冬の選手権が終わり高校サッカーを引退した。

しかし4月から地元沼津を拠点とするプロチームに入団内定を貰っており、4月から晴れてプロサッカー選手なのだが、今日は来年に向けてサッカー部の後輩を鍛えるために学校に来ていた。

曜：「果南ちゃん、選手権は残念だったね……？」

果南：「うん。サッカー部に入ったのは聞いてたけど、まさか対戦校に居るとは思わなかったよ」

そう……1月の選手権で、私たち「浦の星女学院」はトーナメントを勝ち上がって行ったのだが準々決勝で神奈川の「竜星学園」と激突した。しかし竜星はなんと龍也の学校だったらしく。私が驚いていると龍也は「真剣勝負だぞ？」と言ってきたので「勿論!!」と返してやったままでは良かったのだが、龍也1人に私たちのディフェンスは崩壊。更には1人で4得点も奪われ結果は5-1の大敗を喫した。

そりゃあ手加減何かしたら相手に失礼だけどさ？ 普通自分の彼女をここまでボコボコにする!?

そしてその大会は竜星の優勝で幕を閉じたのだが私は複雑な気持ちだった。

千歌：「果南ちゃん!! 私のドリブル技術を一から叩き直して!!」

果南：「オツケー。ビシバシ行くよ?」

そして暫く千歌の練習を見てみると、

部員：「スミマセン・・・果南先輩ちよつと良いですか？」

果南：「？ どうしたの？」

部員：「校門のところに男の人がいて、松浦果南っていう3年生に用があるんだけど女子高だから入れないって」

果南：「名前とか言ってた？」

部員：「大海龍也って言っていました」

ガタツ

千歌：「ちよつと!! 果南ちゃん!？」

私は名前を聞いた瞬間走り出していた。校門のところで話を聞き付けたダイヤと龍也が話していた。

果南：「龍也!!」

龍也：「果南!! .....へ？」

ドッシーン!!

私は龍也の胸に向かって思い切りジャンピングハグで突撃した。龍也は支えきれずに倒れた。

龍也：「痛ててて.....」

果南：「龍也くっ♡／／」ハギユくっツ!!!

私が龍也を地面に押し倒すような形で抱きついてしていると傍にいたダイヤが話を戻してくれました。

ダイヤ：「所で、大海さんは何故浦の星に？」

龍也：「果南の家に会いに行ったら学校に行ってるって言われたからだけど……」

果南：「何で会いに来てくれたの？」

龍也：「今日お前の誕生日だからだけど？」

っ!? 龍也、覚えててくれたんだ／／

果南：「ありがとう!! 良かったら練習見て行ってよ？」

龍也：「えっ……? 良いのか？」

ダイヤ：「果南さん!! ダメですわよ手の内を明かす様な真似をしたら!!」

龍也：「そうだよ。ここで待ってる」

ダイヤ：「大海さん、ここだと他の生徒に怪しまれるので生徒会室にどうぞ?」

龍也：「入って良いの？」

ダイヤ：「これを首からかければ怪しまれませんか」

そう言つてダイヤは〈特別入校許可証〉と書かれた札を龍也に渡した。

果南：「じゃあ練習片付けてくるから待っててね」

（ 果南 side out ）

そして1時間後、案内してくれた黒澤と生徒会室で待っていると部屋の扉が開き、果南が入ってきて俺を見つけるや否や飛び付いてディスクホルドしてきた。

ムギユツ

龍也：「その・・・当たってるんだが・・・？／／／」

果南：「つ／／／　うう・・・バカ・・・／／／」

あーくそ!!　可愛いなあ!!!

果南：「そ、その・・・帰るけど・・・家、来る?」

龍也：「い、行かせて頂きます・・・」

―― 松浦家 ――

家に帰ったらお父さんの龍也に対する威圧感が凄かった。お母さんは微笑ましい物を見る目で見てきたが、

果南：「じゃあ・・・着替えるからちよつと待っててね?」

そう言っって私は部屋で着替え始めた。

〽 龍也 side 〽

果南の部屋の外で果南が着替え終わるのを待っていると、果南のお母さんが階段下から俺を手招きして呼んでいた。

松浦母（以降：母）：「ちよつと？ 大海くんだったけ？」

龍也：「な、何ですか？」

母：「ねえ？ 果南の彼氏って貴方？」

龍也：「は、はい。一応」

松浦父（以降：父）：「何いい!! 許さn「黙りなさい？」はい・・・」

お母さんに一睨みされて縮こまってしまったお父さん。もしかしたらお母さんの方が怖いかもしれない。

母：「果南ね？ いつも世界大会の時の事を嬉しそうに話してくれるのよ？ それでこの間私たちに、「初めて彼氏が出来た」、「彼の事を誰にも渡したく無い」って嬉しそうに話してくれてね。どんな人なのかと会う時を楽しみにしてたのよ」

父：「俺は会いたくなk・・・骨3本位で良いかしら？」スマメンでした・・・」

母：「だから大海くん？ 果南の事を宜しくね？」

龍也：「はい!! 果南さんを何があろうと絶対に守ります!!」

父：「俺は許さn・・・だ・ま・り・な・さ・い？」は、はい・・・」



すると果南が着替え終わり俺が居なかったの下に下りてきて

果南：「龍也？ 良いよ？」

龍也：「おう。分かった」

母：「(づ)ゆつくり？」

~~~~~

果南：「お母さんたちと何話してたの？」

龍也：「ナイシヨ。それより果南、これ・・・誕生日プレゼント・・・選んでみた」

果南：「あ、ありがとうっ!!」

ハギユ~~~~ツ!! ムニユウツ

果南は号泣しながら俺に抱きついてきた。そしてそのまま俺を二人で座っていたベッドの上に押し倒した。

果南：「龍也あゝ♡／／」ハムツ チュツ クチャツ レロオ

果南は、俺の唇にこれでもかとキスしてきた。俺も負けじと舌を動かす。

龍也：「果南、プレゼントを開けてみて？」

果南が箱を開けると中には目の部分がエメラルドになっているイルカのチャームが付いたペンダントが入っていた。

果南：「龍也あゝっ♡／／ ありがとう・・・大好き!!♡」

龍也：「果南・・生まれてきてくれてありがとう／＼」
俺はこの子と出会えた奇跡に感謝しながら、お母さんがご飯に呼びに来るまで再び果南と唇を重ねた。

） 果南 Happy Birthday ）

第18話：キャプテンの役割

久遠：「後半はメンバーを代える。高海、交代だ。代わりに野坂が入る」

風丸：「そうか!! 今まで一度も試合に出ていない野坂は、おそらく韓国にもデータが無い筈」

円堂：「流れをこつちに戻せるかもしれない!!」

野坂：「鬼道さん、日本が誇る〈フィールドの絶対指揮者〉と〈戦術の皇帝〉の連携を見せてやりましょう」

鬼道：「ああ!!」

日本

高海 千歌 OUT

←

野坂 悠馬 IN

そしてイナズマジャパンボールのキックオフで運命の後半戦が始まった。しか高坂さんが韓国テイフエンスにボールを奪われてしまう。

チャンスウ：「ソヨン!」 パスツ

にここ：「行かせないわ！」

ソヨン：「退きなさい!!」 「導火線・改」!!

相手のミッドフィルダーは思い切りボールにバックスピンを掛けて矢澤さんの足元へ蹴る。すると矢澤さんがトラップした瞬間大爆発が起こり矢澤さんは吹っ飛ばされた。

風丸：「止める!!」 「スピニングフェンス」!!

風丸が複数の竜巻を発生させて壁を作り相手の進路を塞ぐ。そして相手が身動きを取れない所で突風を起こし相手を吹き飛ばしボールを奪う。

チャンスウ：「ヘパーフェクトゾーンプレス」!!

韓国：「『了解!!』」

韓国の必殺タクティクスに囲いこまれ、風丸はパスもドリブルも封じられる。

風丸：「っ！ くそ、どうすれば・・・」 風丸さん上です！ 相手の頭上を越えるルーブ気味のパスで繋いで下さい!!」 っ！ そうか、地上は包囲されてても、上はから空きだ」

風丸は、ヘパーフェクトゾーンプレスの上を通るループパスで野坂にパス。脱出に成功する。

チャンスウ：「何っ!!」

そして、ボールを受け取った野坂がロングシュート態勢に入るとランスを持った騎士型マシンが現れ、野坂のシュートと共にランスをつきだした。

野坂：「行きます!!」「キングスランス・V3」!!

野坂の鋭利な槍のシュートが、韓国ゴールに襲い掛かる。

野坂：「大海さん!!」——シュートチェイン——です!!」

龍也：「任せろ!!」

俺は野坂のシュートを後押しする様に、18連撃の蹴りをボールに叩き込んだ。

龍也：「剣撃乱舞・V3」!! 行けええええええええつ!!」

ズツバシューウウウウウン!!

キングスランスのパワーも加わり、「スサノオブレード」よりも威力が高くなった斬撃シュートが韓国ゴールに迫る。

ジョンス：「そんなもの!!」「大爆発張り手・改」!! ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ!!」

相手キーパーが最後の張り手を叩き込むと同時に大爆発が起こるが、俺と野坂のチェインシュートは爆風を貫き韓国ゴールに突き刺さった。

アフロデイ：「同点か・・・」

チャンスウ：「中々やりますね日本は・・・」

バーン：「だが勝つのは俺たちだ!!」

ガゼル：「勝負が楽しくなるのはここからさ!!」

試合再開し、高坂さんがボールを奪いドリブルで攻め上がるがへパーフェクトゾーンプレスに捕まった。しかし……

穂乃果：「もう対処法は分かってるよ!! 大海くん!!」ポーン

高坂さんもへパーフェクトゾーンプレスの上を通して脱出に成功。パスは俺に繋がる。

龍也：「ナイス!! ……と、見せかけて!! 高坂さん!!」

俺にボールが行ったのを見て韓国ディフェンスは急いで俺の方に来たのだが、意表を付く高坂さんへのリターンを読みきれず、高坂さんがフリーでボールを受けとる。

韓国：「『何!?!』」

ボールを受け取った高坂さんはシュート体勢に入る。

穂乃果：「行くよ!!」『プロミネンスドライブ・G4!!』

代表選考試合で見たときよりも進化し強力になっている高坂さんのシュート。そのまま決まるかと思っただがキーパーに阻まれボールはチャンスウヘ。

久遠：「どうする円堂……？ このままでは日本は負けるぞ。私がなぜ勝てないと言ったか、分かったか？」

円堂：「分かりません。ただ……」

久遠：「ただ……、何だ？」

円堂：「前半の松浦のシュートも、さっきの高坂のシュートも、何かいつもより威力が弱かった気がするんです。後、前半の高海も、今出ているメンバーも、大海以外の動きがチグハグな気がします」

ツバサ：「言われてみれば……さすがキャプテン、よく見てるわねえ……」

円堂：「え……？ ……あ!? そうかそうか……俺はチームを見る事を忘れていた!! キャプテンなのに!! 自分の新技にばかり考えがいつて、周りに目を向けていなかった!!」

久遠：「分かった様だな円堂。自分のやるべき事が」

円堂：「はい!! 俺、キャプテンなんです。あいつらの……」

久遠：「ならば行ってこい!! お前の手であいつらを、世界の舞台へ連れて行ってやれ!! 選手交代!! ゴールキーパー、立向居に代わりに円堂守!!」

そう監督が宣言した瞬間スタジアムは歓声に包まれた。

風丸：「円堂!!」

鬼道：「円堂!!」

円堂：「皆!! 何を焦ってるんだ? 試合中に!!」

鬼道：「焦ってる? 俺たちがか?」

円堂：「大方、原因は大海と自分達の実力差だろ? 今までの試合も、得点のほとんどや、日本のチャンスを演出したのは大海だった。だからお前たちの中で、「早く追い付かない」という焦りを生んでしまった。そのせいで試合に集中出来ない」

風丸：「それは……」

円堂：「ベンチから見てたけど、お前たちの技は本来の威力の6割程しか出ていない。1つ1つのプレーに集中して、本来の力が出せれば必ず通用する!!」

穂乃果：「そこまで集中出来ていなかったんだね……私たち」

円堂：「相手のシュートは何としても俺が止める!!! だから全力でぶつかってこい!!」

日本：「『おう!!』」

そして韓国のスローインから試合再開。

アフロデイ：「待ってたよ円堂君。果たして止められるかな?」

アフロデイ・バーン・ガゼル：「カオスブレイク!!」

円堂：「絶対に……止める!!」

円堂がジャンプして右拳を思い切り振りかぶり「カオスブレイク」の上から力一杯叩

ドッパアアアアアン!!

本来の威力を取り戻した果南のシュートは、例え技が進化しようともこの程度のキーパーに止められる様な物ではなく、キーパー諸ともボールはゴールに押し込まれた。

アフロデイ：「まだだ!!」

アフロデイ・バーン・ガゼル：「カオスブレイク」!!

円堂：「止める!!」「怒りの鉄槌」!!

円堂が跳び右拳を振りかぶると同時に、背後に現れたマジンも右拳を振りかぶる。

ドッゴオオオオオン!!

マジンと共に拳を叩きつけ、円堂はまたしても「カオスブレイク」を叩き潰した。

ガゼル：「くっ、さっきのはマグレじゃなかったのか!？」

円堂：「大海いよいよ!!」

円堂からのロングパスが俺に繋がった。

チャンスウ：「っ、止めるおおおおおお!!」

韓国ディフェンスが全員で、死に物狂いで俺を止めにかかる。

龍也：「遅い!!」「スプリントワープ・G5」!!

ビュン ビュン ビュン

俺は超加速で韓国のディフェンスをこぼう抜きし、キーパーとIvoryに。

ジヨンス：「くそ!! うおあああつ!!」

相手キーパーはボール目掛けて突進してきた。どうやら撃たれる前に止める気がらしい。

龍也：「……真・モグラフェイント」

ボールにスピンを掛けて地面に埋める。するとボールは地面の下をまるでモグラの様に進んで行きキーパーの真下を通りゴールの中で地上に出てきた。

ボールは、ゴールの中に……。

実況：「……ハッ!! ゴ、ゴオオオオオルツ!!」

ピツ、ピツ、ピイイイイイーツ!!

実況：「ここで試合終了のホイッスル!! 5-2で、イナズマジパンの勝利!! 日本

代表、世界大会進出決定です!!」

穂乃果：「勝った……の?」

聖良：「勝ちました……ね」

するとベンチから綺羅や高海に立向井、吹雪そして豪炎寺が飛び出してきた。

龍也：「フウ……」

豪炎寺・吹雪：「ナイスプレー」

龍也：「フツ」 パアアアアン!!

俺は吹雪と左手、豪炎寺と右手でハイタッチした。

千歌：「果南ちゃん!! 穂乃果さん!! ナイスシュート!!」

果南・穂乃果：「ありがとう千歌（ちゃん）!!」

皆で喜びあっていると、チャンスウ、アフロデイ、バーン、ガゼルが歩いてきた。

チャンスウ：「私たちの完敗です。さすがですね・・・イナズマジヤパンは・・・」

アフロデイ：「今回は僕たちの負けだ。だが次闘う時は僕たちが勝つ」

バーン：「そう言うことだ!! 調子に乗って世界でアジアの恥晒すんじゃないぞ!!」

ガゼル：「負けたが、いい勝負だった。思わず熱くなっちゃったよ。この私が

ね・・・」

円堂：「ああ。お前らの分まで闘って来るよ!!」

アフロデイ：「円堂くん・・・」 ガシッ

円堂とアフロデイは握手を交わし韓国チームは退場していった。

円堂：「次は世界だ!! いくぞ皆!!」

イナズマジヤパン：『『オオオオーッ!!』』

『 第一部：アジア予選編・完 』

第二章：来たぜライオコット島　FFI世界大会開幕！ 第20話：世界への旅立ち

俺たちイナズマジャパンはアジア地区のAブロック予選で優勝し、アジア代表4チームの内の1つに入る事が出来た。その後の2日間一時解散し、一度自宅に戻り世界大会への準備をした後で再集合し、世界大会が開かれる《ライオコット島》に出発するため《大江戸国際空港》に集まっていた。

久遠：よし、揃ったな。これより、ライオコット島に向かう。だがその前に、日本代表追加補充メンバーを発表する」

龍也：「そんなのあるのか？」

鬼道：「世界大会からだがな。試合メンバーに登録出来るのは16人だが、1試合毎に登録メンバーを変えられるんだ」

久遠：「その通り。メンバーは6人だ。来い」

そして出てきた六人は……

曜：「久し振り!!　千歌ちゃん、果南ちゃん!!」

ダイヤ：「私も曜さんも代表選考で落とされはしましたが、諦めずに特訓してパワー

アップして戻って参りましたわ!!」

千歌：「曜ちやくん!! 嬉しいよおく!! (泣) 曜ちゃんと一緒に闘えるなんてええく!!」

曜：「私もー!! (泣)」

果南：「頼むよダイヤ!!」

ダイヤ：「こちらこそ、宜しくお願いします!!」

ことり：「穂乃果ちゃん!! 世界の舞台で一緒に闘えるなんて嬉しいよ!!」

海未：「ネオジャパンからは私一人ですが：：穂乃果!! ことり!! 音ノ木坂サツカ一

部最強幼馴染の力を、世界に見せつけてやりましょう!!」

穂乃果：「ことりちゃん!! 海未ちゃん!!」ギユウウツ!!

ことり：「苦しいよく穂乃果ちゃん：：」ギユウウツ!!

穂乃果：「だつてえく!! (泣) 嬉しいんだもくん!!」

佐久間：「久し振りだな鬼道、円堂」

龍也：「誰？」

円堂：「こいつは鬼道の「帝国学園」時代のチームメイトの佐久間次郎さくまじろう」

佐久間：「お前が大海か、話は聞いている。宜しくな」

龍也：「宜しく。で？ もう一人は誰？」

佐久間：「それなんだが・・・」

不動：「久しぶり、鬼道クン？」

鬼道：「お前は、不動明王ふどうあきお!! よくのうのうの俺たちの前に顔を出せたな!!」

ん？ 不動・・・明王？ もしかして・・・

龍也：「ひよつとして・・・アキ？」

円堂・鬼道・佐久間：「「!?」」

不動：「ああ。久しぶりだな・・・大海」ニヤツ

鬼道：「ちよつと待て!! お前不動と知り合いなのか!？」

龍也：「ああ・・・俺小3まで愛媛にいてきアキとは同じチームに居たんだ。俺が今の神奈川に引つ越すまではよく一緒にサッカーしてたよ。周りが俺を仲間外れにする中で、アキだけは何度も一緒に練習したからな。俺の方が上手かったんだけど、アキだけは必死に食らい付いてきてき、結果チーム内で俺とアキだけメチャクチャな実力になったのを覚えてるよ。いやゝあの頃は張り合いあつて楽しかったなゝ」

鬼道：「そ、そうか・・・（あの勝つために佐久間と源田の体をボロボロにさせた不動が!?!）」

円堂：「真・帝国」の中で不動の實力がやたらと高かったのはそういう・・・と言うより不動にもちゃんとそのいう時期があったのか・・・」

不動：「・・・そのアキつていうのは止めてくんない？」

龍也：「じゃあ・・・普通に不動でいいか？」

不動：「ああ。それでいい」ニヤツ

久遠：「そしてチームドクターとして西木野冬真先生、助手に娘の真姫さんを加えたメンバーが、日本代表となる」

穂乃果・ことり・海未・にこ：「真姫ちゃん!? (真姫!?)」

真姫：「にこちゃん、穂乃果、ことり、海未、私は選手には入れなかったけど、宜しくね？」

穂乃果・ことり・海未・にこ：「こちらこそ!!」

久遠：「それではライオコット島に出発する。行くぞ!!」

イナズマジヤパン：「はい!!!」

そして俺たちは飛行機に乗り込み、俺たちを乗せた飛行機は大勢のサポーターに見送られながら、ライオコット島に向かって飛び立った。

龍也：「円堂? 何を見てるんだ?」

円堂：「世界大会出場チームの選手名簿だよ。パンフレットと一緒に配られただろ？
結構他の国の代表チームに日本人がいて驚いた」

龍也：「例えぼ？」

円堂：「アメリカ代表で俺たち雷門の仲間の「イチノセ・カズヤ」と「ドモン・アスカ」。
ロシア代表の「アヤセ・エリ」に、イタリア代表の「ヒデ・ナカタ」に「オハラ・マリ」

穂乃果：「絵里ちゃん!？」

果南：「うそ?! 鞠莉が!!」

龍也：「因みに世界大会は4つのブロックに各5チームずつに分かれて総当たり戦を
行い各ブロックの勝ち点上位2チームが決勝トーナメント出場だつてさ」

果南：「アジア以外だとどんなチームがあるの？」

龍也：「ヨーロッパ地区が」

イタリア代表「オルフェウス」

ロシア代表「パーフェクトスパーク」

ドイツ代表「プロツケンボーグ」

イギリス代表「ナイツ・オブ・クイーン」

ベルギー代表「レッドデーモン」

フランス代表「ローズグリフォン」

オーストリア代表「パツシヨonzソナタ」

スペイン代表「レッドマタドール」

豪炎寺：「南北アメリカ地区が

アメリカ代表「ユニコーン」

アルゼンチン代表「ジ・エンパイア」

コロンビア代表「ナイトメアサウス」

ブラジル代表「ザ・キングダム」

チリ代表「ジ・エンシャント」

鬼道：「アフリカ地区が

エジプト代表「ラストフアラオ」

ウガンダ代表「ザ・グレイトホーン」

コトアール代表「リトルギガント」

龍也：「後コトアールの監督が日本人だ。名前は……「アラヤ・ダイスケ」って書

いてあるな」

円堂：「ダイスケ……」

果南：「どうしたの？」

風丸：「実はな、円堂の死んだお爺さんの名前が「円堂大介（えんどうだいすけ）」っ

て言うんだけど、大会前に亡くなった筈のお爺さんから「頂上にて待つ」って手紙が来たらしいんだ」

女子：『『ひいつ!?!?』』

鬼道：「そのお爺さんは亡くなる前にサッカーの特訓ノートを残してるんだが、そのノートと今回の手紙の字を比べるとそっくりなんだ。その・・・お爺さんの字はなんと言うか、個性的だな」

風丸：「恐ろしいくらいに汚い字で、読めるのは円堂だけなんだ」

果南：「そのお爺さんの字で書かれた手紙が届いたってこと?」

龍也：「まあ気にしなくても良いだろ。わざわざ言われなくても決勝まで進むつもりだし」

果南：「そうだね。元より優勝するつもりだし!!」

久遠：「お前たち!! シートベルトを締めろ。着陸するぞ」

龍也：「いよいよか!!」

果南：「どんな人たちがいるのかな!!」

ことり：「わくわくするね!!」

穂乃果：「うん!! 音ノ木坂サッカー部の力を見せてやろう!! にこちゃん!! ことりちゃん!! 海未ちゃん!!」

にこ：「ええ!!」

海未：「勿論です!!」

鬼道：「佐久間、頼むぞ？」

佐久間：「ああ」

龍也：「あつ、なあ？ 久々にアレを出来るかもな」

不動：「ああ、そうだな。アレなら世界にも通用するだろ」

） 続く ）

第21話：開幕!! 世界大会!!

俺たちイナズマジヤパンを乗せた飛行機は、ライオコット島の空港に到着した。

円堂：「着いたぞー!!」

久遠：「まずは手配していたバスに乗るため、へセントラルエリアの「セントラルパーク」に向かう」

く セントラルパーク く

ツバサ：「んくつ!! 南の島に来たって感じね!!」

ドンツ

ツバサ：「きやつ!? すつすみません・・・」

?：「・・・」

ぶつかつた男は何も言わずに無言でどこかへ行ってしまった。

龍也：「(ん?・・・まさか・・・) おい綺羅、財布はあるか?」

ツバサ：「え? 財布ならここに・・・ってアレ!? 無いわ!!!」

風丸：「まさかさっきの奴スリだったんじゃない!?」

円堂：「手分けして探そう!!!」

犯人捜索中

龍也：「あつ、いた!! 待ちやがれ!!」

スリ：「っ!!」ダツ

龍也：「逃がすか・・・よっ!!」ドカアアアアアツ!!

俺は持っていたサッカーボールを、スリ目掛けて思い切り蹴っ飛ばした。

スリ：ドカアツ「ぐあっ!? く、くそ!!」

スリは懐からナイフを取りだし俺に突っ込んで来た。俺はそれを避けると、さつき蹴ったボールを拾いスリ目掛けて、

龍也：「オラアアアアア!!!」**「剣撃乱舞・V3」!!**

俺は必殺技をスリの腹目掛けて、本気でぶちこんでやった。

ボグシヤアアアアアアツ!!

スリ：「ぐわあああああっ!!!」

スリは技をまともに食らい、気絶し時折ピクピクしている。

果南：「龍也!! 警察連れてきたよ!!!」

スリの男は逮捕されて警察に連行されていた。

?へえ? あれが噂のジャパンのFW「オオミ・リュウヤ」か。あの技、おれの「オ

「 DeinSord」よりもパワーがあった。世界は広いね」

— その場に居合わせた別の人 —

? : 「あれが話に聞く穂乃果達の新しいチームメイトね。ロシアもうかうかしてられないわ」

— また別の人 —

? : 「ジャパンの「オオミ・リュウヤ」か・・・面白くなりそうだね。ダイスケ?」
? : 「ああ・・・世界は広いな。だが世界の頂点に立つのは我々だ」

そして綺羅の財布を取り返し「ジャパンエリア」の日本代表宿舎に到着した。荷物を各自部屋に運び、予定を確認する。

龍也 : 「開会式は夕方からだったよな?」

果南 : 「楽しみだね」

そして夕方、世界大会決勝戦が行われる「セントラルエリア」の「タイタニックスタジアム」にやって来た。しばらく時間が空いた後、開会式が始まった。

~~~~~

実況 : 「さて、世界の皆さんお待ちいたしました!! いよいよ、《フットボールフロンティアインターナショナル》、開会式が始まります!! 尚この様子は、全世界生放送で

お送りしております!! いやいよ選手入場です!!」

実況：「まず入場してきたのは、イギリス代表「ナイツ・オブ・クイーン」!! 先頭はキャプテンの「エドガー・バルチナス」!!! 実力・人気、共に世界トップクラス。〈静かなる闘將〉の異名を持つストライカーです!!」

実況：「次に入場してきたのは、アルゼンチン代表「ジ・エンパイア」!! 先頭はキャプテンの「テレス・トルーエ」!! 果たして〈アングレスの不落の要塞〉と呼ばれる彼のディフェンスを破る者は現れるのか!？」

実況：「続いて入場してきたのは、アメリカ代表「ユニコーン」!! 先頭はキャプテンの「マーク・クルーガー」!!! そしてアメリカはF F I 予選大会の得点王「テイラン・キース」、そして〈フィールドの魔術師〉と呼ばれる天才日本人MF、「イチノセ・カズヤ」を擁しています!!!」

実況：「続いてイタリア代表「オルフェウス」!! 先頭は副キャプテンにして、〈イタリアの白い流星〉と呼ばれるエースストライカー「フィディオ・アルデナ」!! そして日本人女子DFにして、〈黄金の魔女〉と呼ばれる天才「オハラ・マリ」!! 攻守にバランスの取れたこの布陣を突破するのは困難です!!」

円堂：「いよいよ俺たちの番か．．．行くぞ皆!!」

イナズマジヤパン：『『おう!!』』

実況：「続いて入場してきたのは、日本代表「イナズマジヤパン」!! 先頭はキャプテンの「円堂守」!! アジア地区だからといって、侮ってはいけません!! 日本は、アメリカの「デイラン・キース」に続く、予選大会得点ランキング2位にして、MF、DF、GK、そしてFFW!! 全てのポジションを超高レベルでこなせる「パーフェクトオーラウンダー」、「大海龍也」を擁しています!!」

実況：「続いての入場は、ロシア代表「パーフェクトスパーク」!! 先頭はキャプテンの「フロイ・ギリカナン」!! そしてリベロの日本人女子「アヤセ・エリ」!! この二人の強烈なシュートを、世界のディフェンス陣はどう止めるのか!!!」

実況：「続いてはブラジル代表、「ザ・キングダム」!! 先頭はキャプテンの「マック・ロニージョ」!! ブラジル史上最強、ヘキング・オブ・ファンタジスタ」と呼び声高い、今大会最強クラスの選手です!!」

実況：「そしてコトアール代表「リトルギガント」!! 先頭はキャプテンの「ロココ・ウルパ」!! アフリカ地区予選全試合を必殺技を1度も使用せずに世界大会進出を決め、今大会ダークホースとなることでしょう!!」

そして他チームの入場等開会式は終了した。

— タイタニックスタジアム・ロビー —

? : 「……………」

豪炎寺 : 「?」

龍也 : 「豪炎寺? 行くぞ?」

? : 「あれがジャパンのFW 「ゴウエンジ・シュウヤ」……俺を鋭い目で睨んでいたな」

? : 「oh……それはユーが睨むからだよマーク……。でも、ミーはどちらかと言うと「オオミ・リュウヤ」の方が気になるけどね」

? : 「俺も驚いてるよ……。日本にまだあんな選手がいたなんてね」

マーク : 「カズヤ!!」

イチノセ : 「デイランに続く得点ランキング2位か……。イギリスやロシア、イタリアよりも得点している選手……。確かに手強そうだな」

デイラン : 「でも勝つのはミーたち、「ユニコーン」だよ!!」

イチノセ : 「ああ!! (円堂、試合をするのが楽しみだよ!!)」

いよいよ世界大会開幕!!

） 続く ）

## 第22話：親善パーティー（前編）

開会式が終わり次の日、各国の代表に予選グループリーグ表と、決勝トーナメントに勝ち上がった場合トーナメント表のどこに配置されるかの紙が配られた。

円堂：「日本はグループAか」

風丸：「同じ組は「アメリカ」、「アルゼンチン」、「イギリス」、「イタリア」だな」

龍也：「他のリーグはどうなってるの？」

豪炎寺：「グループBが

「UAE」

「ウガンダ」

「エジプト」

「コロンビア」

「ロシア」

グループCが

「ウズベキスタン」

「オーストリア」

「スペイン」

「チリ」

「ベルギー」

グループDが

「イラン」

「コトアール」

「ドイツ」

「ブラジル」

「フランス」だな。」

俺たちがトーナメント表を見て、あーでもないこーでもないと言っていると、監督とマネージャーがやって来た。

久遠：「お前たち、これを見ろ」

それは手紙のようだが普通の手紙とは何か違う気がした。

鬼道：「招待状ですか？」

久遠：「そうだ。イギリス主催でな、同じグループのチームで集まって交流しないかと。世界のプレイヤーを知る良い機会なので、承ける事にした」

龍也：「パーティーねえ．．．？」

不動：「メンドーだな」

ああ、何か胡散臭い気がすんだよな……ってか不動の言うように単純にめんどくさい。

果南：「女性はドレス、男性はタキシードを用意してありますだって。……ねえ、龍也？ 私のドレス姿……見たい？」

龍也：「果南のドレス姿……」ブフォオツ!!

俺は顔を真っ赤にして鼻血を出してしまった。

果南：「な、何を想像したの？」

龍也：「そんなことはどうでもいい!! 果南のドレス姿!? そんなの絶対見たい!!!」

行くぞパーティー!!

果南のドレス姿だと!? そんなもん見逃してたまるか!! 細部まで忠実に脳内保存して現物写真にも納めてやる!! ……え? めんどくさいって言ってなかったかって? ゴメン何10年前の話をしてるのかな?

不動：(こいつ……今度からかってやる) ニシシシ

イギリスエリア・パーティー会場

俺たちは招待状を持ってヘイギリスエリアにやって来た。するともうすでに準備がされており男子と女子に分かれて更衣室に入ると他の国の代表が来ていた。



? : 「おい、あれ」

? : 「ああ。「オオミ・リュウヤ」だ」

? : 「あの・・失礼ですが、「オオミ・リュウヤ」さんですよな?」

龍也 : 「あ? 誰だお前?」

? : 「申し遅れました。私は「ナイツ・オブ・クイーン」副キャプテン、「フィリップ・オーウエン」と申します」

龍也 : 「大海龍也」宜しく。つてか人の体をあんまりジロジロ見ても悪いけどよ、相当鍛えられてるなお前。イギリスのチーム内で実力的には上位の方なんじゃね?」

フィリップ : 「・・・・・体を見ただけでそこまで分かるんですか?」

龍也 : 「今この部屋に居るなかでお前より上と言うと・・・。そのイタリアの・・・「フィディオ」だっけ? とアメリカの「マーク」、「ディラン」、「イチノセ」、「ドモン」位じゃねえの?」

それを聞いた他国の代表はムツとした表情になった。

イチノセ : 「俺と土門のこと知ってるのか?」

龍也 : 「ああ。円堂達から聞いてるよ」

円堂 : 「一之瀬!! 土門!! 久し振りだな!!! なんだよ、こう言うことはちゃんと見えよな?」

土門：「悪い、ビツクリさせたくてよ」

一之瀬：「イナズマジヤパンと闘うのが今から楽しみだよ」

フィディオ：「イタリア代表の「フィディオ・アルデナ」だ。宜しく」

龍也・円堂：「宜しく」

風丸：「アルゼンチン代表は来てないな」

龍也：「来ねえだろ。見るからにガサツそうだったし」

フィディオ：「まあ確かにテレスはこういうところに来る柄じゃないけどね」

そう言ったら皆苦笑いしていた。

男子組が着替え終わり外に出て暫く談笑していると女子組が出てきた。

果南：「あつ！ 龍也!!」

つやばい!!! 果南が可愛過ぎて直視出来ない!! // //

果南：「? どうしたの?」

龍也：「い、いや・・・何でもない・・・ // //

すると他の女子の黄色い声が聞こえてきて見るとイギリス代表キャプテン「エドガー・バルチナス」が来ていて他国の代表女子たちと話していた。

曜：「どこが良いんだろうね? 確かに顔は良いけど・・・」

果南：「私は龍也がいるもんっ!! ♡」

っ／＼／＼／＼ パシヤツ うん!! 可愛い写真が取れ・・・「もう・・・写真撮りたいな  
ら言つてよ・・・」

龍也：「ゴメン・・・撮らせてもらえないかと思つて・・・」そのくらい良いもん・・・  
龍也だつたら／＼／＼／＼」

あのお果南さん? 非常に嬉しいんですが腕に抱きつきながらそんなことを言われ  
ると他の男子からの恨みと嫉妬のこもった目が痛いので・・・

果南：「無理!!」

龍也：「心を読まれた!?!」

エドガー：「こんにちは。あなた方がイナズマジャパンの皆さんですね?」

龍也：「宜しく・・・」

円堂：「宜しくな!?!」

エドガー：「フツ・・・」

あ!? 何だコイツ!?!

風丸：「おい!! 今のはさすがに失礼じゃないか!!」

エドガー：「失礼。ハッキリ言つてあまり強そうに見えなかった物ですから」

綱海：「何だと!?!」

龍也：「じゃあ・・・試してみるか?」

エドガー：「ほう？」

龍也：「日本のキッカーとGK、イギリスのキッカーとGKが出て、お互いに止めるか止められないかどうだ？ 日本からは俺と円堂が出る。良いよな円堂？」

円堂：「ああ!! 世界のシユートをこんな早く受けられるなんてワクワクしてきたぜ!!」

エドガー：フツ「良いでしょう。「フレディ」!!」

フレディ：「ハツ!!」

エドガー：「彼は「フレディ・マックイーン」。我々のキーパーです」

龍也：「じゃあ場所を変えようか」

エドガー：「先攻はイギリスで良いんですね？」

円堂：「来い!!」

ファイディオ：「鞠莉、どうなると思う？」

鞠莉：「多分これは入るわね。問題は日本のキッカーの方だと思うわ」

そして勝負が始まり、エドガーはシユート体勢に入る。エドガーが空中で縦に一回転し、左足を前方に振り上げると左足に長大な聖剣が出現。そのままボールに剣を踵落とす。しでぶちこんだ。

エドガー：「聖なる騎士の剣を受けるがいい!!」「エクスカリバー!!」  
ギシャアアン

衝撃波と共に地面を切り裂きながらのシュートがゴールに迫る。円堂は背後に金色のマジンを出現させて跳び上がると、そしてマジンとともに右拳を振りかぶってシュート目掛けてマジンとともに右拳を叩きつけた。

円堂：「怒りの鉄槌」!!」

ドグシャアアアアアアアアアアツ!!

しかし円堂は明らかに「エクスカリバー」にパワー負けしており、衝撃波に吹き飛ばされた。

ギシャアアアン!!

円堂：「うわあああつ!!」

そしてシュートはゴールに突き刺さった。

エドガー：「さあ、貴方の番ですよ?」

龍也：「面白い物を見せてやるよ」

俺がセットポジションにつきシュート体勢に入ると、他国の代表は息を飲んだ。

エドガー：「バカな!?! その技は!!!」

龍也：「エクスカリバー」!!」

ギシャアアアアア

エドガーの技と同じはずなのに威力は段違いのシュートがイギリスのキーパー目掛けて飛んでいく。

フレディ：「なっ!?」「ガラティーン!!」

キーパーが右手に光剣を出現させシュートを叩き斬ろうとするが・・・

ギシャアアアアアアアア!!!

フレディ：「ぐわあああああっ!!?」

シュートはそのままゴールに突き刺さった。

会場は騒然となった。

イタリヤ代表女子：『何で日本の選手がエドガーさんのシュートを!?!』

アメリカ代表女子：『信じられない!! 何で!?!』

果南：「出たー!!」 《パーフェクトコピー完全無欠の模倣》!!」

日本代表以外：『『『パーフェクトコピー完全無欠の模倣》!!?!』』』

果南：「あ・・・」

龍也：「はあ、果南・・・俺は相手の技を、1度見ただけで自分の物として習得出来

るんだよ」

日本代表以外：『『『なっ!!?』』』

龍也：「エドガーさん？」

エドガー：「っ！」

俺は挑発的な顔をしながら右手でエドガーを指し高らかに宣言した。

龍也：「エクスカリバー」!! 貫ったぜ!!」

その時・・・エドガーは初めて、自分の失策に気付いた。

） 続く ）

## 第23話：親善パーティー（後編）

フィリップ：「相手の技を、たった一度見ただけで習得出来る・・・だと・・・？」

イタリア代表女子：『そうか!! だからエドガーさんに先に蹴らせたんだ!!』 エド

ガーさんのシュートをコピーするために!!』

龍也：「正解。付け加えると見た技が無進化状態だったとしても俺はいきなり最終進化で撃てるな」

日本代表以外：『『はああああああつ!!?』』

果南：「言っておくけど龍也の言っていることは本当だからね？」

エドガー：「くつ、卑怯だぞ!!」

龍也：「卑怯？ 人の事散々見下してたような奴に、そんなことを言う資格があるとも?」

エドガー：「くつ!!」

フィディオ：「どうする？ これじゃあ試合で不用意に技を使えないぞ・・・?」

イタリア代表女子：「でも、技が使えないと圧倒的に不利になりますよ?」

マーク：「これは困ったな・・・」



龍也：「先に言っておくけど「日本vsアメリカ」とか「日本vsイタリア」の試合でも、あんたらにとっては闘ってる相手が日本の筈なのに「エクスカリバー」が飛んで来るからな？」

デイラン：「ホワッツ？ どうしてだい？」

龍也：「だって、たった今俺「エクスカリバー」覚えちゃったし」

日本代表以外：『『あ……あ……あ……』』

アメリカ代表：「おいエドガー!! なんて事してくれたんだ!!!」

イタリア代表：「オオミのシユート見た感じエドガーの老家よりもパワーがあったぞ!? 本物より贋作の方が凄いななんて有りかよ!？」

龍也：「まあいいや。飯食お」

果南：「私も」

不動：「俺も」

マーク：「アメリカ代表!! へアメリカエリアの宿舎に帰ったら急いで対策考えるぞ!!!」

アメリカ代表：『『はい!!』』

フィデリオ：「イタリア代表もへイタリアエリアへ戻ったら作戦会議だ!! 良いな!!!」

イタリア代表：『『おう（分かった）!!!』』

フィリップ：「キャプテン・・・」

エドガー：「まさか・・・」「エクスカリバー」がたった1度見られただけで・・・」  
ブツブツ

そしてパーティーは終了し、それぞれのチームは宿舎に帰って行った。

↳ 2日後（ウミヘビ島）「ウミヘビスタジアム」

実況：「お待たせしました!! いよいよF F I世界大会予選リーグ、グループA第1試合、日本代表「イナズマジヤパン」vsイギリス代表「ナイツ・オブ・クイーン」の試合が始まります!!」

久遠：「この試合の登録メンバーは

G K 円堂

D F 風丸 鹿角 大海 優木

M F 渡辺 鬼道 松浦

F W 豪炎寺 南 吹雪

ベンチメンバー

立向井 綱海 園田 高坂 不動、以上の16名だ」

千歌：「頼んだよ曜ちゃん!! 果南ちゃん!!」

曜：「次の試合は一緒に出ようね!!」

龍也：「俺がDFか・・・」

久遠：「大海、お前はイギリスのシュートを片っ端からお前の「エクスカリバー」で打ち返せ。通常のシュートとは全く違う、距離が離れば離れる程パワーが上がる「エクスカリバー」に、イギリスのシュートの威力を加えれば、ほぼ確実に決まるだろう」

龍也：「はい!!」

久遠：「鹿角、お前は大海が対処仕切れなかったシュートのカバー。お前のブロックと円堂の2人掛かりで止めろ」

聖良・円堂：「はい!!」

審判：「それでは選手整列してください!!」

円堂：「行くぞ!!」

イナズマジヤパン：『『おう!!』』

スタートメンバー

イギリス

G K フレディ (男)

D F ユーリ (女) ランス (男) ジョニー・G (男)

ポランチ ポール (男)

M F シシリー (女) ピーター (男) マリア (女)

F W オーグ（男） エドガー（男） フィリップ（男）

日本

F W 吹雪（男） 南（女） 豪炎寺（男）

M F 松浦（女） 鬼道（男） 渡辺（女）

D F 優木（女） 大海（男） 鹿角（女） 風丸（男）

G K 円堂（男）

審判：「それでは、試合を始めます!!!」

） 続く ）



聖良：「そう簡単には通しません!!」 「スノーマウンテン・V2」!!」

ドガアアアアアアツツ!!

直ぐに鹿角によるブロックが入る。しかし、オーラを凍結し威力を弱めてからブロックが入る性質の「スノーマウンテン」は、「エクスカリバー」の様な純粋なパワーのみのシュートとは相性が悪く、思ったよりパワーが奪えず「スノーマウンテン」は粉碎され「エクスカリバー」は尚も突き進む。

鹿角：「きやああああつ!!」 キャプテンツツ!!」 お願いします!!!」

円堂：「任せろ!!」 「怒りの鉄槌・V2」!!」

ドグシヤアアアン!!

円堂は背後に金色の魔神を出現させ、魔神と共に拳で「エクスカリバー」を叩き潰し、完璧に防いだ。その瞬間会場に溢れるイギリスサポーターのため息。そして日本サポーターの歓声。

円堂：「渡辺!!」

円堂のゴールキックからボールは曜さんに飛び、イギリスの女子MF、マリアとの競り合いになる。

曜：「ヨロソロオオオオオツツ!!」

マリア：「っ!?!」



相手キーパーのゴールキックからボールはディフェンスのランスへ。そこへ南が前線からプレッシャーを掛ける。が……

ランス：「そんなディフェンス!!」「ウルトラムーン・V2」!!」

まるで満月のように美しく綺麗な円形を描く前方宙返りで南を躲かしボールは前線のシシリーへ。

鬼道：「行かせるか!!」

シシリー：「無駄です!!」「ホーリー・レイ」!!」

天から神々しい光の帯がディフェンスに入った鬼道に降り注ぎ、鬼道は徐々に体の力を奪われ立っていらなくなり力無くひざまづいてしまった。

シシリー：「キャプテン!!」

龍也：「来い!!」

エドガー：「行くぞ!!」

するとエドガーは急にスピードを上げて俺に急接近してからシュート態勢に。

エドガー：「エクスカリバー・改」!!」

ギシャアアアン!!

龍也：「(っ?)! この距離はダメだ!!」 聖良さん頼みます!!!」

聖良：「分かりました!!」「スノーマウンテン・V2」!!」



すかさず聖良さんがシュートブロックに入る。が・・・  
ドガアアアアアン!!

聖良：「ぐうううううううっ!!! キャアアアアアアッ!!?」

必死に堪えたがあまりのパワーに吹き飛ばされる聖良さん。シュートは尚も突き進む。  
む。

円堂：「鹿角!!」 「怒りの鉄槌・V2」!!」

ドグシヤアア!!

円堂：「ぐううううううううっ!!」

円堂も必殺技を発動。魔神と共にシュートを上から叩き潰して応戦する。が・・・

ギシヤアアアン!!

円堂：「ぐわあああああああつ!!」

実況：「ゴオオオオオオール!! 先制は「ナイツ・オブ・クイーン」!!」

シュートは円堂も吹き飛ばし、ゴールネットに突き刺さった。

龍也：「悪い!!」

円堂：「何でブロックに入れなかったんだ?」

龍也：「問題なのは「エクスカリバー」の溜めの長さだ。あまり近づかれた状態で撃たれれば、溜めのモーシヨンの間にシュートは通過してしまう」

エドガー：「気付いた様ですね。貴方がDFだった瞬間、何をする気なのか直ぐに分かりましたよ。ですが!! 「エクスカリバー」は私の技です!! 長所と短所は私が一番良く知っている!!」

聖良：「くっ!!」

風丸：「おい、試合再開だ」

イナズマジヤパン：『『おう!!』』

ピイーローツ!!

イナズマジヤパンボールで試合再開のホイッスルが鳴り、ボールは鬼道へ。そこにエドガーとフィリップがディフェンスに入る。

鬼道：「松浦!!」

ユーリ：「行かせないわよ!!」

鬼道からのパスを受け取った果南にDFの「ユーリ・カールトン」がディフェンスに入る。が、果南はロングシュートの体勢に入る。

果南：「激流ストーム・G5」!!」

ドガアアアアアン!!

ユーリ：「こんな遠くから!?!」

果南の膨大な水のエネルギーを秘めたシュート。しかし果南のシュートはゴールで

はなく上空へ。

果南：「ことりさん!! シュートチェインお願いします!!」

ことり：「任せて!!」

なんと果南のシュートは南へのパスだった。南は背中にまるで翼人の様な純白の翼を出現させ、翼を羽ばたかせぐんぐん上昇していく。その姿はまるで神話に登場する翼人「イカロス」。そして南は太陽光をボールに収束させ、熱線の様なシュートをゴール目掛けて蹴り落とした。

ことり：「イカロスフオール!!」

ジュオオオオオオン!!

天から高温の火炎弾がイギリスゴールに襲い掛かる。キーパーも必殺技で応戦する。

フレディ：「止めてやる!!」 「真・ガラティーン!!」

ドガアアアアアツ!!

フレディ：「ぐっ!!」 パ、パワーが!?

「イカロスフオール」のパワープラスチェイン元の「激流ストーム」のパワーも加わる。予想外のシュートのパワーに虚を突かれたフレディ。必死に堪えようとするが、もうすでに手遅れな所まで勢いに押されてしまっており……

バシユウウン!!

黒焦げになったボールは、キーパーを吹き飛ばしてイギリスゴールに吸い込まれた。

実況：「ゴオオオオオオオ!! 日本同点!!!」

穂乃果：「ことりちゃんナイスシュート!!」

ことり：ブイッ!!

く く く く く く く く く く く

フレデイ：「すまん。あのシュート、信じられないパワーだった・・・」

マリア：「あの選手、アジア予選の映像には居ませんでしたよね?」

オーグ：「恐らく、世界大会からの追加招集メンバーだろうな・・・」

エドガー：「ですが勝つのは我々です。騎士ナイトの誇りにかけてイギリスに勝利を!!」

ナイツ・オブ・クイーン：『はい!!』

日本1ー1イギリス

く 続く く

## 第25話：激闘!!　　V S 「ナイツ・オブ・クイーン」!!

南が新技「イカロスフオール」を決めて1ー1の同点になりイギリスボールで試合再開。ボールはMFのマリアへ。そこに渡辺がディフェンスに入るが、

マリア：「ジグザグバーン・V2」!!

相手MFが左右に鋭いステップを踏みながらドリブルすると、足を踏み込んだ瞬間炎が上がり最後に大きくなった炎を地面を這わせて放ち渡辺にぶつけて吹っ飛ばした。

マリア：「ファイリツプ!!」

ファイリツプ：「はあああああああつ!!」ドガアアツ

マリアからのパスを受け取ったファイリツプはディフェンスに捕まる前にクイックでノーマルシュートを放つ。相手のシュートはゴールの右上隅に。

円堂：「うおおああああつ!!」バシイッ!!

ファイリツプ：「くっ!!　止められたか・・・」

円堂：「鬼道!!」

シュートをセーブした円堂からのゴールキックでのロングパスが鬼道へと繋がる。しかしここでイギリスは必殺タクティクスを仕掛けて来る。

エドガー：「行くぞ!! 必殺タクティクスへアブソリュートナイツン!!」

すると鬼道にイギリス選手1人がプレスに来てそれを躲した所に空かさず2人目。なんとかそれも躲した所に3人目。度重なる間髪入れない連続ディフェンスに鬼道がバランスを崩した所に4人目がボールを奪った。

鬼道：「くそ!! 戻れ!!!」

ポール：「キャプテン!!」

ポールはエドガーに渡った。

龍也：「来い!!」

エドガー：「何度やっても同じだ!!」

エドガーは先程同様、俺にある程度接近してシュート体勢に。

エドガー：「エクスカリバー・改!! . . . !?」

しかし、今度はエドガーの「エクスカリバー」の溜めのモーションの間に10メートル程バックステップで距離を取った。

龍也：「真・エクスカリバー!!」

ギシャアアアアアン!!

そして俺は、「エクスカリバー」で「エクスカリバー」を打ち返した。

実況：「なんと大海が「エクスカリバー」を発動!?! そしてエドガーの「エクスカリ

「バー」を打ち返したああ!!」

ナイツ・オブ・クイーン：『『うわああああああつ?!?!?』』

ナイツ・オブ・クイーンは必死に止めようとするが衝撃波だけで吹き飛ばされボールはゴール目掛けて一直線。

フレディ：「クソツ!!」「真・ガラティーン!!」

トガアアアアアアアツ!!!

キーパーもやられてたまるかと必殺技を放ち必死に堪える。が、

フレディ：「ぐぐぐぐぐ．．．!!」

ギシヤアアアアアアアン!!

フレディ：「ぐわああああああつ!!」

俺の「エクスカリバー」は相手の光剣をへし折りイギリスゴールに吸い込まれた。

実況：「ゴオオオオオオル!! 日本逆転!!」

その瞬間スタジアムに起こる日本サポーターの大歓声とイギリスサポーターの大ブーイング。

エドガー：(監督．．．) チラッ

イギリス監督：コクッ

さて試合再開だと思ったらイギリスのフォーメーションが変化していた。

龍也：「なんだ？ あんなに中央に選手を密集させて、サイドがから空きじゃねえか」  
果南：「そう見せかけて、サイドを狙ってるのかもしれないよ？」

ピイイーローツ!! ホイツスルと共にイギリスボールで試合再開。

実況：「なんとイギリス、DFだけ残して他は全員攻撃!!」

鬼道：「全員サイドも意識して守れ!! 裏を欠かれるなよ!!」

日本の意識がサイドに向いた瞬間、

エドガー：「必殺タクティクス!! 〈無敵の槍〉!!」

中心のエドガーを選手がひし形状に囲むとエドガーを含めた選手5人を守るように  
オーラの障壁が発生。そのまま進軍していきこちらのデイフェンスを次々と吹き飛ば  
していく。

鬼道：「これは!! エドガーを守っているのか!？」

龍也：「くそ!! 止めてやる!!」

トガアアアアアアッ!

龍也：「ぐああああああっ!？」

果南：「龍也!!」

ゴール前まで進んだ所で相手はタクティクスを解除。

エドガー：「ここはこの技だな。『パラディンストライク・改』!!」



騎士剣の突きのように鋭いトーキックから放たれたシュートが日本ゴールを襲う。

円堂：「止める!!」〔怒りの鉄槌・V2〕!!」

ドグシャアアツ!!

円堂：「ぐぐぐぐ．．．!!」

円堂はまた魔神を出現させて上からエドガーのシュートを叩き潰す。しかし．．．ズバアアアアン!!

円堂はまたもや吹き飛ばされてシュートは日本ゴールに突き刺さった。

龍也：「まだあんなシュートを隠し持ってたのか．．．」

実況：「ゴオオオオオオル!! イギリス同点!!」

エドガー：「君に私のシュートは止められない。勝つのは我々だ!!」

ここで前半終了のホイッスルが鳴りハーフタイムに入った。

— スタジアム内・廊下 —

円堂：「．．．．．」

?：「どうした? 変な顔して」

円堂：「誰? おじさん」

?：「わしのことは良いんだ。それよりもお前さん、イギリスのストライカーには勝てないと思ったか?」

円堂：「悔しいけど今の俺じゃあ、エドガールのシユートは止められない。俺の使える技のほとんどは、じいちゃんやんが遺してくれた技なんです。けどじいちゃんやんの技だけじゃ世界には通用しない。俺だけの何かが必要なんだ。新しい何かが」

？：「新しい何か・・か。まあそれに気づいただけでも一歩前進だな。．．止められないなら、止めなければいいのかもしれないな」

円堂：「えっ?」

？：「なに、年寄りの戯言だ。まあ頑張つてな」

円堂：「何だったんだ? あの人」

マネージャー：「円堂くん? ミーティング始まるわよ?」

———

久遠：「後半は、吹雪と渡辺をベンチに下げる。そして渡辺のポジションに園田。吹雪のポジションに高坂を入れて豪炎寺と高坂のFW位置を入れ替える」

ことり：「海未ちゃん、穂乃果ちゃん!! あの技を試してみない?」

海未：「そうですね。私たち音ノ木坂サッカー部最強のシユート技を」

ここ：「ああ。あれね」

久遠：「それ以外の選手交代は無しだ。後、大海、鹿角、〈無敵の槍〉の弱点、気づい

たか？」

龍也・聖良：「はい!!」

久遠：「よし。後半行くぞ」

イナズマジャパン：『はい!!』

後半戦開始!

— 続く —

## 第26話：後半戦開始

ハーフタイムが終わり両チームフィールドに出てイナズマジヤパンボールで後半戦開始。ホイッスルが鳴ると同時にボールは鬼道へ。

エドガー：「必殺タクティクス!! へアプソリユートナイツ!!」

先程同様に1人目がディフェンスに走ってくる。だが今度はディフェンスと鬼道が接触する瞬間鬼道が味方へバックパス。

果南：「ナイス!!」

すると果南に対して2人目が、

果南：「海未ちゃん!!」

横のロングパスで躲わしたところに3人目。

海未：「風丸さん!!」

園田から風丸へのバックパスで3人目を躲わしたところに4人目が。

風丸：「鬼道!!」

4人全て躲わして鬼道にボールが戻る。そして高坂、南、園田の三人がゴール前へと走っていた。

鬼道：「決めろ!! 高坂、南、園田!!」

穂乃果・ことり・海未：「「了解(はい)!!」」

まずは高坂さんと南さんが跳び、園田さんが二人にボールを蹴る。すると高坂は炎を左足、南は風を右足に纏い二人同時のツインシュートを真下へと蹴り落とす。そしてそこに園田の雷を宿した右足のボレーシュートが炸裂!!

穂乃果・ことり・海未：「「エポリユーション・G3」!!」

ドギユウウオオオン!!

音ノ木坂の幼馴染3人による息の合った連携シュートが放たれる。シュートは凄まじい勢いでイギリスゴールを強襲。キーパーフレディも必殺技で迎え撃つが...

フレディ：「止める!! 「真・ガラティーン」!!」

ドガアアアアツ!!

フレディ：「ぐぐぐぐううっ...!!!」

必死に堪えるフレディ。しかし明らかに押されていた。

バキイイイン!!

フレディ：「ぐわあああああつ!!?」

3人のシュートはキーパーを吹き飛ばし、ゴールに吸い込まれていった。

実況：「ゴオオオオオール!! 日本勝ち越しだああああ!!」

そしてイギリスボール試合再開

エドガー：「行くぞ!! 〈無敵の槍〉!!」

ナイツ・オブ・クイーンが猛進してくる。鬼道達は〈無敵の槍〉の外側を取り囲みながら戻って来る。そしてエドガーを俺と鹿角が待ち構える。

龍也：「鹿角!! 狙うのはシュートの瞬間だぞ!!」

聖良：「分かっています!!」

エドガー：「なんだ、デیفフェンスに来ないのか? なら思い切りいかせてもらう!!」

そしてエドガーのシュート前に、邪魔にならぬ様にイギリスは〈無敵の槍〉を解除。

龍也：「今だ!!」

龍也・聖良：「[「デスサイズミドル・G2」!!]」

エドガー：「何!?!」

ドガアアアツ!!

シュート直前の〈無敵の槍〉が解除される1番無防備な瞬間を狙い、鹿角と共に必殺デیفフェンス技を叩き込む。上手くエドガーの不意を突き、ボールを奪う事に成功する。

エドガー：「くっ!!」

実況：「何と日本、へアブソリュートナイツ」に続き〈無敵の槍〉も攻略してしまった

あ!!」

果南：「龍也、聖良さん!! いつの間にあんな技を!」

さすがにイギリスサポーターにも動揺の色が見える。

聖良：「穂乃果さん!!」

ジョニー・G：「行かせねえ!! 「ストーンプリズン・改」!!」

鹿角から前線の高坂さんへとボールが繋がる。しかしDFのジョニー・Gが必殺技を発動すると地面から石柱が高坂さんを囲う様に出現。それにぶつかり高坂さんはボールを奪われた。

ジョニー・G：「オーグ!!」

オーグ：「はああああつ!!」

あんじゅ：「やらせないわ!!」

オーグ：「っ!」

ドガアアアツ!

あんじゅさんのデイフェンスに捕まる前にクイックでシュートを撃ったオーグ。しかし体勢が崩れていたせいで、シュートはゴールの枠を外れてフィールド外へと飛んでいった。

オーグ：「くっ!! 外したか!!」

円堂：「ナイスディフェンスだ優木!! どんなシュートも、ゴールにさえ入らなければ得点にならないんだからな!!」

~~~~~

そこからボールは果南に渡りドリブルで攻め上がるが、

シシリー：「サイクロン・改」!!」

果南：「くっ!!」

相手の起こした竜巻に巻き込まれ果南はボールを奪われた。

シシリー：「キャプテン!!」

そしてシシリーからのパスがエドガーに繋がり、エドガーはシュート体勢に入る。

エドガー：「行くぞ!!」 「真・パラデインストライク」!!」

エドガーがシュートを撃ったとき俺はオーグを警戒していたためディフェンスに入れなかった。

龍也：「しまった!! 鹿角!!」

聖良：「任せてください!!」 「スノーマウンテン・V2」!!」

ドガアアアアツ!!

シュートブロックに入る鹿角。しかし、

聖良：「ぐうううううううっ!!」

ズバアアアン!!

聖良：「キャアアアアアアアアッ!？」

必死に堪えたが粉碎された鹿角さんの「スノーマウンテン」。そして尚も猛然と迫るエドガーのシュート。円堂は背後に金色のマジンを出現させ、マジンとともに跳び上がり右拳を振りかぶる。そしてマジンとともに右拳を渾身の力でシュートに叩きつけた。

円堂：「絶対に止めてやる!!」 「怒りの鉄槌・V3」!!

ドガアアアアアッ!!

円堂の技は最終進化し更にパワーを増した。だが、

円堂：「ぐぐぐぐぐ・・!!」

ズバアアアアン!!

円堂：「ゴオオオオオオル!! 3ー3!! イギリス同点に追い付いたああああ!!」

円堂：「くそっ!!」

エドガー：「我々は負けない!! 騎士ナイトの誇りにかけて!!」

円堂：「俺たちだって負けてたまるか!! 行くぞ皆!!」

イナズマジヤパン：『『おう!!』』

— 続く —

第27話：決着!! vs [ナイツ・オブ・クイーン]!!

エドガールの「パラディンストライク」が決まり3ー3の同点。日本ボールで試合再開。
ことり：「海未ちゃん!!」

キックオフから南さんはボールを園田さんに渡し、園田さんはドリブルで攻め上がる。

エドガー：「必殺タクティクス!! へアブソリユートナイツ!!」

ディフェンスが園田さん目掛けて走って来たので園田さんはディフェンスの範囲外へとパスアウトしてボールは鬼道へ。2人目がディフェンスに来た所で鬼道も横の果南へとパスアウト。3人目が走ってきた果南は俺に下げたところに4人目が。

オーグ：「もらった!!」

龍也：「ウルトラムーン・V3!!」

俺はイギリスの物よりも更にキレのある宙返りでディフェンスを突破。そこに連続でディフェンスが来る。

龍也：「ホーリーレイ・V3!!」

ディフェンスに来た相手選手、シシリーのドリブル技を本人に喰らわせてやり突破。

相手相当イラついているな。

龍也：「高坂さん!!」

俺は高坂さんにパスを出す。そして高坂さんはシュート体勢に入る。

穂乃果：「プロミネンスドライブ・G5」!!」

ユーリ：「ただでは通さないわ!!」「真・守護騎士の盾」!!」

シュートブロックに入った相手が技を発動すると相手の手に鋼の盾が出現しその盾で「プロミネンスドライブ」をガードした。

バチイン!!

「プロミネンスドライブ」は弾かれたが、そのセカンドボールを果南がフリーで押さえた。

マリア：「不味いわ!! フリーよ!」

果南：「はあああああ!!」「激流ストーム・G5」!

ドツガアアアアアン!!

果南の渾身の「激流ストーム」がイギリスゴールに撃ち落とされる。

エドガー：「やらせない!!」

しかし何とエドガーは自陣のゴール前まで戻って来ており、「エクスカリバー」の態勢に。まさか果南の「激流ストーム」を打ち返す気か!?

エドガー：「エクスカリバー・改」!!」

ガカアアアツ!!

エドガー：「ぐうううおおあああああつ!!」

エドガーの「エクスカリバー」と果南の「激流ストーム」が激突するパワーはほぼ互角で押し押されを繰り返し、そして・・・

ギシャアアアン!!

エドガーは、果南のシユートを打ち返した。

実況：「なんと松浦のシユートを打ち返したああつ!? 2つのシユートの相乗効果で、凄まじいパワーだ!! これは止められない!!」

聖良：「やらせない!!」 「スノーマウンテン・V3」!!」

ガカアアアツ!!

聖良：「ぐううううつ!!」

すかさず鹿角がシユートブロックに入る。堪えようとしますがパワーが凄すぎてあっさり「スノーマウンテン」は粉碎され鹿角は吹き飛ばされる。

ギシャアアアン!!

聖良：「キャアアアアアツツ!!」

円堂：「どうすれば・・・、どうすれば止められる?」

エドガー：「君に私のシュートは止められない!! 私の勝ちだ!!」

？：「止められないなら、止めなければいいのかもしれない」

~~~~~

円堂：「どんなシュートも、ゴールにさえ入らなければ得点にはならないんだからな!!」

円堂：「そうか!! 止める必要はない、ゴールに入れなければ良いんだ!! いろんなシュートも、ゴールにさえ入らなければ得点にはならない!!」

円堂が跳び上がり、拳を地面に叩きつけると衝撃波とオーラが混ざりあい半球体状のドームに変化し、そこにシュートが激突。シュートはドームを滑る様に上へと流れていき、クロスバーを越えてフィールドの外へと飛んでいった。

エドガー：「!? バカな!!」

実況：「外した!?! いや、外させたと言うべきか!!」

何と円堂はシュートを止めるのではなく、逸らす事でシュートを防いだ。これには俺もビックリだ。

円堂：「決めろ!! 大海、松浦!!」



ピツ、ピツ、ピイイイイーッッ!!

実況：「ここで試合終了のホイッスル!! 4ー3でイナズマジパンが、強豪ナイツ・

オブ・クイーンを下したー!!」

円堂：「よつしや勝ったぞー!!」

龍也：「果南!!」

果南：「龍也!!」

パアアアアアン!!

二人で思い切りハイタッチする。俺達、世界の舞台で1勝をもぎ取れたんだ!!

しかしイギリスは、今も負けたのが信じられないという顔をしている。

エドガー：（予選リーグはまだ始まったばかりだ。今は君たちの勝利を讃えよう。だ

が我々は必ず決勝トーナメントへ進みイギリスに優勝旗を持ち帰る。そして次こそ勝

つのは私たちだ!!）

審判：「4ー3でイナズマジパンの勝ち!! 礼!!」

選手一同：『『『ありがとうございました!!』『』』

そして勝利を掴んだ俺たちは、「ウミヘビスタジアム」を後にした。

— 続く —

## 〈園田海未〉誕生日編：仲間

F F I が終わり年が明け約3ヶ月後の3月15日。今は春休みであり今日は私、園田海未の誕生日です。

— 音ノ木坂グラウンド —

穂乃果：「海未ちゃんパス!!」

海未：「穂乃果!!」パスッ

穂乃果：「行くよヒデコ!!」 「サンシャインストーム・V3」!!」

ドツガアアアアン!!

ヒデコ：「真・爆裂パンチ」!!」

ドガガガガガ!!

ヒデコが目にも止まらぬ連続パンチをボールに叩き込む。そして、

ヒデコ：「ふぬあああああ!!」

バチイイイン!!

穂乃果：「止めた!?!」

ことり：「ボール取ってくるね!!」  
．．．あれ?あの人って．．．」



ボールを拾ったらしいその人と私たちがいる場所は25メートル位離れている。その人はボールを上に取り上げジャンプし、ボールに一瞬で20発近い蹴りを叩き込んだ。

ドガアアアアアン!!!

まるでレイピアのような鋭いシュートがゴールめがけて飛んでいく。

ヒデコ：「なっ!?」「カウンターストライク・V3!!!」

ドガアアアアアッ!!

ヒデコの拳がボールに激突。しかし、

バシユウウン

ボールはゴールネットに吸い込まれた。

海未：「今のシュートは・・・!!」

ことり：「剣撃乱舞」!? ってことは!!」

龍也：「よっ!!」

穂乃果：「大海君!!? 何で!!」

龍也：「いや西木野から昨日の昼頃ラインが来てさ。「明日海未の誕生日だから来れるイナズマジヤパンメンバーは音ノ木坂に来てくれ」って」

海未：「聞いてません?!」

真姫：「そりやあそうよ。言つてないし」

穂乃果：「にこちゃんにツバサさんにあんじゅさん!! 果南ちゃんにダイヤさん!! 千歌ちゃん曜ちゃん!! キャプテンに豪炎寺君に鬼道君に風丸君!」

龍也：「他のメンバーは住んでる所が遠くて来れないってさ」

海未：「ありがとうございます!! 嬉しいです!!」

穂乃果：「じゃあ皆でサッカーしよう!!」

メンバー：『おーっ!!』

果南：「にこさん!! そっち行きましたよ!!」

にこ：「鬼道! ボール寄越しなさい!!」

鬼道：「真・イリユージュンボール!! 黒澤!!」

ダイヤ：「行きますわよ!!」

黒澤がシュート体制に入るとボールがダイヤモンドに変化し、鋭い蹴りの連打でボールを磨いていく。

ダイヤ：「ダイヤモンドレイ・V3」!!」

白い極太の光線と化したシュートがゴールに迫る。

龍也：「任せろ!!」 「真・ダイヤモンドハンド」!!」

ガキイイイイイン!!

黒澤のシユート完璧に止め、ボールを豪炎寺に。

豪炎寺：「真・爆熱スクリユー」!!

円堂：「ゴツドキヤツチ・G5」!!

しばらくミニゲームをして休憩中、果南さんたちが私に、

果南：「海未ちゃん、はいこれ!! 私たちからの誕生日プレゼント!!」

海未：「ありがとうございます!! 開けても良いですか?」

鬼道：「ああ。もちろんだ」

開けると中には私が欲しいと言っていたスパイクが入っていました。

海未：「これ私が欲しかったやつじゃないですか!! しかもメンテナンスセットま

で……」

龍也：「俺たちから園田にな。使ってくれると嬉しい」

海未：「ありがとうございます!! 大切に使用させていただきます!!」

そしてもう一度しばらく皆でミニゲームをして、皆さんは帰って行きました。

穂乃果：「海未ちゃん!! 良かったね!!」

ことり：「海未ちゃん! これ、私と穂乃果ちゃんから!!」

見ると手縫いで作られたタオルで「穂乃果」、「ことり」、「海未」と刺繍がしてあった。穂乃果：「ことりちゃんに教えて貰いながら私も頑張ったんだ!!」海未：「ありがとうございます!! 穂乃果、ことり!!」私は、今日という日を一生忘れないだろう。

〈 海未ちゃん Happy Birthday 〉

## 第28話：暗雲

イギリス戦後、日本から響木さんがライオコット島に到着し、その提案で俺たちは次の日の午前中だけ休みをもらった。

不動：「キヤーキヤーはしゃいじやつてまあ」

龍也：「まだ予選リーグの第1試合が終わっただけなのにな・・・」

不動：「全くだ・・・ん？」

龍也：「どうした？」

何かに気付いた不動が振り返った方を見ると長身の金髪男性が誰かと話していた。

不動：「まさか!!?・・・アイツは!!」

龍也：「? どうした？」

果南：「あれ? 龍也と不動くん誰と話してるんだろう?」

— 〈ジャパンエリア〉・宿舎 —

休みが終わり、午後の練習の為に俺達が宿舎に俺たちが戻ると、見たことのないおじさんが監督と響木さんと話していた。

円堂：「あー!! 刑事さん!! どうしてここに!!」

?：「おう円堂か!! なに、ちよつとな」

龍也：「誰?」

?：「お? お前さんが大海か。活躍は見てたぞ。中々やるようだな」

龍也：「どうも。で、あなたは?」

?：「おおスマン。自己紹介がまだだったな。俺の名前は鬼瓦（おにがわら）。刑事をやってるんだ。」

? 警察?

龍也：「警察が何でここに?」

響木：「鬼瓦、コイツらには見せた方が良くないか?」

鬼瓦：「そうだな。これを見てくれ」

そう言つて刑事さんが取り出した写真には一人の男性が写っていた。あれ、さつき  
の……

鬼道：「!? こいつはまさか……影山!!」  
かげやま

鬼瓦：「鬼道、お前もそう思うか。この男はイタリア代表、「オルフェウス」の監督だ。元々イタリア代表監督は別のやつだったんだが、急にコイツに交代になつたらしい」

果南：「あれ? この人さつき龍也と不動くんと一緒にいた人だよな?」

雷門メンバー：「!!?」

すると円堂たち雷門メンバーが驚いた目で俺を見る。な、何？

龍也：「いや、確かに会ったけど・・・それがどうかしたのかよ・・・？」

円堂：「そうか、大海は知らないのか・・・」

龍也：「何を？」

鬼道：「影山は前のサッカー協会副会長だ。帝国学園監督に就任してからチームを40年間無敗で全国優勝させ続けた監督」

40年間無敗!? ヤバイな・・・

龍也：「話を聞くだけだとすごい人だけど？」

鬼道：「だがその裏には、ヤツの勝つたためには手段を選ばない卑怯なやり方があったんだ」

響木：「40年前、当時の雷門イレブンだった俺と仲間たちは、全国決勝で帝国と対戦することになった。だが、ヤツは俺たち雷門イレブンが乗ったバスに細工し、事故を起こさせて会場に来られなくする事で闘わずして勝利を手にいれた」

鬼道：「そして俺たちが中1のとき、俺が帝国学園にいた頃の全国決勝の対戦校のエースストライカーだった豪炎寺の妹を、人を使ってトラックにひかせて豪炎寺を試合どころでは無くして勝利させた」

その話を聞いた俺も他のメンバーも開いた口が塞がらなかつた。「そこまでして勝ちたいのか」と。

鬼道：「不動、お前がまだ影山と繋がっているのなら・・・」

不動：「だつたら？」

鬼道：「許さん。絶対に」

そして重苦しい府陰気のなか練習が始まるが鬼道と佐久間の動きがぎこちない。そりやそうか。元と現帝国メンバーだもんな。すると久遠監督は、

久遠：「練習中断!! 鬼道、佐久間!! なんだお前たちの練習態度は!! 集中出来ないのならフィールドから出る!!!」

すると鬼道は監督に一礼してフィールドから出る。

鬼道：「すみません。ちよつと頭を冷やして来ます」

円堂：「お、おい鬼道!!」

鬼道：「良いんだ円堂。監督の言ってることは正しい。ちよつと頭を冷やしてくる」

円堂：「監督すみません!! 俺も行きます!!」

不動：「じゃあ俺も行くかね」

龍也：「じゃあ俺も」

果南：「ちよつと龍也!?!」



円堂たちが気になり俺も行くことにする。監督に「良いですか？」と聞いたら意外とあつさり許可をくれた。

龍也：「ちゃんと明日には練習に戻るから心配するなよ。じゃあ行こうか」

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

― バスの中 ―

円堂：「で？ どこに行くん？」

鬼道：「さつきマネージャーから聞いたんだが〈アルゼンチンエリア〉にこの島のことなら何でも知ってる情報屋が居るらしい。その人を訪ねて見ようと思う」

そして、俺達は〈アルゼンチンエリア〉に向かった。

― 〈アルゼンチンエリア〉 ―

しばらく〈アルゼンチンエリア〉を歩いていると他国の代表チームが居た。

円堂：「あれってイタリア代表だよな？ 何で〈アルゼンチンエリア〉に？」

龍也：「さあ？ だけどその影山ってヤツはイタリア代表の監督なんだろ？ だったら話が早いんじゃないの？」

鬼道：「そうだな」

そして円堂がイタリア代表に話しかけると、鬼道を見たイタリア代表選手達は急に怒り出して鬼道にくっついてかかる。

? : 「あつ!! おい、コイツ!!」

? : 「間違いねえ!! おいテメエ、俺たちの監督をどこへやった!!」

鬼道 : 「な、なんのことだ!? 俺は知らんぞ!」

? : 「シラを切る気よコイツ!!」

ファイディオ : 「止めろ!!」

? : 「ファイディオ・・・」

ファイディオ : 「ブラージ!! イナズマジャパンはそんな卑怯なこととはしない!! プレーを見れば分かるだろ!!」

ブラージ : 「そ、それは・・・」

円堂 : 「なあファイディオ、何があつたんだ?」

ファイディオ : 「それが、今日の練習を始める時に、「ミスターK」と名乗る男性が来て、「今日から私がイタリア代表監督だ。そして、お前たちに代わる代表を用意した。お前たちはクビだ。」と言ってきたんだ」

ブラージ : 「それで俺たちが納得出来ないと言ったら、「ではこの新たな代表、”チームK”に勝つてみる」と言われたんだよ」

システイ : 「その時、ミスターKが連れてきたチームのキャプテンが、そのあなたたちの仲間のゴードルマントとそっくりだったのよ!!」

鬼道：「なんだと!? 俺に似てた!」

不動：「へー? 人にあんなことを言っておいて影山と繋がってるのは鬼道クンの方だったとはね」

鬼道：「ふぎけるな!! 俺は知らん!!」

ファイディオ：「俺たちはそのあとで、ミスターKについて調べたんだ。そしたらミスターKの正体が、「カゲヤマ」と言う日本人だと分かったんだ」

円堂：「やっぱりアイツは影山だったのか」

アンジエロ：「僕たちは今、前の監督だった「パウロ監督」を探してるんだ。それで情報屋の話を聞いて「アルゼンチンエリア」に・・・」

円堂：「そうだったのか。俺たちもちようど今影山の事で情報屋を訪ねる所だったんだ。良ければ一緒に探そうぜ。後さ、俺と豪炎寺と風丸と鬼道は同じ雷門っていう学校のメンバーなんだけども、中学生の頃から影山の悪事と戦ってたんだ。俺たちが知ってることは一応全部話すよ」

ファイディオ：「本当かい!! 助かるよ!!」

ブラージ：「おいファイディオ・「ブラージ!!」っ!!」

龍也：「じゃあまずは聴き込みだな」

そして俺たち五人とイタリア代表は協力? して情報屋を探すことになった。

↓  
続  
く  
↓

## 第29話：芽生えた友情

情報屋を探しながらへアルゼンチンエリアへを歩く俺たちとイタリア代表。その道中に影山がどういう男かについて円堂と鬼道がフィディオたちに詳しい話していた。

フィディオ：「そうか・・・影山零治、恐ろしい男だね」

システイ：「私たちの大好きなサッカーでそんなことをするなんて許せないわ!!」  
ブラージ：「そんな方法で勝って嬉しいなんてどうかしてるぞ!!」

鬼道：「今までの影山の傾向から言って、試合そのものを出来なくして不戦勝に持ち込む可能性が高い」

システイ：「そんなことは絶対にさせない!!」

龍也：「ん？　おい、あの人・・・」

皆が見ると明らかに一般人とは違うオーラ？　を漂わせている人がいた。

円堂：「すみません、貴方が情報屋さんですか？」

？：「・・・合言葉は？」

不動：「どうやらただでは話してくれないみたいだな」

？：「合言葉は「Y字ストリート」のマンホールにある。見つけられるかな？」

佐久間：「Y字ストリート」か。とにかく行ってみよう」

— 「アルゼンチンエリア北側・Y字ストリート」 —

ブラージ：「マンホール、マンホール」

システイ：「駄目。こっちには書いてないわ」

龍也：「手の込んだ事しやがって」ブツブツ

すると円堂が、

円堂：「ん？ これじゃないか!？」

見るとそこには「優勝はジ・エンパイア」と書かれていた。

ファイディオ：「これが合言葉なのか？ とりあえず戻ってみよう」

？：「よし！ よく合言葉を見つけてきたな。確かに俺が情報屋だ」

ファイディオ：「それじゃあ話を・・・」

情報屋：「言わなくても分かる。前のパウロとか言うイタリア代表の監督の事だろ？」

イタリア代表：『!?!? な、何で?』

情報屋：「と言うか、今俺たち情報屋界限ではその話題で持ちきりだぜ？」

鬼道：「そうなんですか？」

情報屋：「ああ。それで今のイタリア代表監督は確かにイタリアサッカー協会からの

正式な書類で交代になったらしい。話じやあ前監督はもうこの島には居ないらしいぜ？」

システイ：「そんな・・・」

情報屋：「後その新監督がよく会っていたという男がいてな。そう言えばそのゴールマントの君にそっくりだったな」

鬼道：「そうですね。ありがとうございます」

ファイディオ：「じゃあ円堂、俺たちはこれで」

円堂：「大丈夫か？」

ファイディオ：「ああ。イタリア代表の座は渡さない。君たちとはちゃんと試合をした  
いから」

円堂：「分かった。絶対に負けるなよ!!」

ファイディオ：「ああ!! 後さ、「マモル」って呼んで良いか？」

円堂：「もちろん!! ファイディオ!!!」

ファイディオ：「マモル!! じゃあ試合で!!」

そうして俺たちはヘジャパンエリアに戻り練習に合流。そして練習終了後、ファイディオたちイタリア代表が訪ねてきた。

円堂：「ファイディオ!? どうしたんだ？」

果南・ダイヤ：「鞠莉（さん）!?!」

フィディオ：「マモル・・・やられたよ。ミスターKに・・・」  
鬼道：「どういう事だ!?!」

鞠莉：「フィディオたちがあなたたちと別れてから、私たちは合流して影山に見つからない様に練習していたの。そしたらシステイを庇って、キーパーのブラーヂが上から倒れてきた木材の下敷きになって怪我しちゃったの」

果南：「どこまで卑怯な奴なの!?!」

円堂：「・・・フィディオ、俺たちに協力させてくれないか?」

フィディオ：「え?」

円堂：「そつちには6人しか残っていないんだろ? だったら俺と大海と鬼道と不動と佐久間がイタリアチームに入る」

龍也：「そうだな。これで11人だ。あれだけ卑怯な事をしたんだ。このくらいは認めてもらおう」

ダンテ：「いや・・・ありがたい話だけど君たちにそんな義理は・・・」

円堂：「俺、許せないんだ。あんな卑怯な事を平然とする影山が。それに俺たちがイタリア代表と試合するときにはフィディオたちと闘いたいから」

龍也：「そう言うこと。もしも俺たちに何かお礼とか考えてるんだったら俺たちとの



試合で手加減無しの本気の全力勝負してくれればそれでいい。な？ 皆？」  
皆は笑顔で頷いてくれた。

ルミア：「イナズマジヤパンの皆さん、ありがとうございます!!」

円堂：「せっかくだから泊まっていけよ。外にいとまた狙われると悪いからさ」  
ファイディオ：「何から何まですまない」

響木：「話は聞かせてもらった」

円堂：「響木さん!!」

響木：「我々としてはこのまま影山を放置することは出来ん。喜んで協力させてもらおう」

久遠：「5人は明後日の練習3倍で手を打とう」

龍也：「それで済むなら安いものですよ」

風丸：「ファイディオ!! ヨーロッパのサッカーについて聞かせてくれよ!!」

果南：「システイさん、ルミアさん!! 女の子同士で色々話さない? あと鞠莉はイタリヤ代表の話をチームメイトの私たちにも黙ってた罰を受けてもらうからね!! 弱い所をくすぐり倒してやるんだから!!」

システイ・ルミア：「ええ(ありがとう)!!」

鞠莉：「そんなあ〜!!」

そしてイタリア代表と協力してチームKと戦う事になった俺たち。そして翌日、試合の朝を迎えた。

— 続く —

# 第30話：共同戦線!! VS 「チームK」!!

響木：「俺と久遠は今日FFI大会本部に呼ばれている。一緒には行けんがくれぐれも気を付けてな？」

龍也・円堂・鬼道・不動・佐久間：「はい（へーい）!!!」

そして俺たち5人とイタリア代表はイタリアエリアのイタリア代表練習グラウンドに向かった。

― バスの中 ―

鬼道：「ではポジションは

FW                  ファイデオ                  佐久間

MF                  大海                  アンジエロ

ボランチ                  鬼道                  不動

DF                  ダンテ                  小原                  システイ                  ルミア

GK                  円堂                  でいいな？」

全員：「おおう!!」

鬼道：「相手は影山だ。何をしてくるか分からない。だが、真正面からぶつかって点を

取れるとしたら、ファイデオと大海の2人だけだと思おう。頼んだぞ?」

ファイデオ・龍也：「了解!!」

そう言っている間にイタリア代表練習グラウンドに着いた。

ミスターK：「来たか。イタリア代表の諸君」

ファイデオ：「ミスターK!! あなたとチームKにイタリア代表の座は渡さない!!」

ミスターK：「ふん。だがそいつらは何だ?」

ファイデオ：「負傷したメンバーの代理です。彼らが出てくれるそうです」

龍也：「散々卑怯な事をしたんだ。このくらいは認めてもらおうぞ!!」

ミスターK：「ふん、良いだろう」

?：「お前が「リュウヤ・オオミ」か。総帥に向かって無礼な。ちようどいい、今日の試合でお前も潰してやる」

俺たちがその声が見ると

円堂：「何だコイツ!? 鬼道にそっくりだぞ!!」

システイ：「そうなの。だから昨日イナズマジヤパンを疑ってしまったのよ」

ミスターK：「黙らせろデモニーオ」

デモニーオ：「はっ!!」

龍也：「危ない!!」

ガカアアアアッ

システイ：「キヤアッ!!」

間一髪の所でデモニーオの攻撃からシステイナーナさんを守った。

龍也：「危ね〜。10人になって試合出来なくなる所だったぜ」

デモニーオ：「ちっ、余計な事を」

龍也：「大丈夫か？」

システイ：「は、はい・・・／／／」

ん？ 何か顔が赤い気がするけどまあ良いか。

龍也：「とつとと試合を始めようぜ!! 叩き潰してやる!!」

デモニーオ：「ふん、威勢だけはいいな。だが同感だ。さっさと始めるぞ!!」

フオーメーション

チームK

G K

インディゴ(男)

D F ゴウ(男) イズカチャ(女) ヴイツターノ(男) ミラ(女)

ボランチ

ロツソ(男)

M F

アリア(女) デモニーオ(男) ゲラルト(男)

F W

ジャンゴ(男) ビオレテ(男)

日本・イタリア連合

F W                   ファイディオ（男）   佐久間（男）

M F                   大海（男）                   アンジェロ（男）

ボランチ                   鬼道（男）   不動（男）

D F   ダンテ（男）   マリー（女）   システイ（女）   ルミア（女）

G K                   円堂

そしてチームKボールで試合開始。審判が笛を吹くと同時にチームKのデモーニオがシュート体勢に入る。

デモーニオが指笛を吹くと、地面から黒いペンギンが現れ空中へと飛び出す。デモーニオが右足を後方に振り上げると、飛んでいたペンギンが振り上げた足に噛みつき、ボールを蹴るインパクトと同時に飛んで行く。更にペンギンがボールに後ろからぶつかり勢いを更に後押しし、ボールはゴールへ向かって行く。

デモーニオ：「皇帝ペンギンX」!!」

龍也：「円堂!! 止めろ!!!」

円堂：「止める!!」「イジゲン・ザ・ハンド」!!」

円堂が拳を地面に叩きつけるとドーム状のオーラが発生しそこにシュートは激突。しかしシュートの勢いが強すぎた為、シュートは「イジゲン・ザ・ハンド」を突き破り

ゴールへ吸い込まれた。

鬼道：「今の技は・・・」

不動：「『皇帝ペンギン1号』か・・・」

佐久間：「いや、威力はそれ以上だ・・・。それ以上の筈なのに、アイツは・・・」  
デモーニオ：「撃つだけで消耗する不完全な技と一緒にするな。これが究極のペンギン」  
「皇帝ペンギン X」<sup>エックス</sup>だ!!」

龍也：「切り換えろ!! まず1点返すぞ!!」

日本・イタリア：『『おう!!』』

そして日本・イタリアチームのキックオフで試合再開。ボールはフィディオから鬼道へと渡る。

フィディオ：「鬼道!!」

鬼道：「大海!!」

鬼道からのパスを受け取った俺はロングシュートの体勢に入る。こんな手前から放つシュートと言えば1つしかない。

龍也：「さっそく1点返させてもらうぜ!! フィディオ、シュートコースを空けろ!!」





## 第31話：狙われた龍也

デモーニオ：「くそ!! 今の技はイギリスの!!」

ロツソ：「あいつ、やはり・・・」

アリア：「即刻確かめる必要があるわね」

チームKボールで試合再開。

ジャンゴ：「どけえええ!!」

龍也：「真・イグナイトステイル」!!」

かつてネオジャパンとの試合で熱波からコピーした炎のスライディング技でボールを奪い取る。そしてたらチームKは何とシュートコースを空けてきた。

龍也：「撃つてくださいいってことか? 舐めやがって・・・なら遠慮なくぶちこんでやる!!」

俺はデモーニオご自慢のシュートの倍返ししの体勢に入る。

俺が指笛を吹くと地面から黒いペンギンが現れ空中を飛び回る。そして足を後方に振り上げると飛んでいたペンギンが振り上げた足に食らいつく。

龍也：「やられたらやり返す・・・倍返しだああああつ!!」 「皇帝ペンギンX・V3イ

「イイツ」!!!」

ドガアアアアアン!!

飛び回るペンギンに後押しされ加速したシュートがチームKゴールを襲う。

インデイゴ：「フルパワーシールド・V3」!!」

ドガアアアアアアツ!!

インデイゴ：「ぐあつ．．．!? なんなんだ．．．このとてつもないパワーは!?!」

キーパーインデイゴ、必死に堪えるが．．．

バリイイイン!!

インデイゴ：「うわああああああつ!!!?」

俺のシュートは相手の技をあっさり粉砕し、ゴールネットを揺らした。

ヴィツターノ：「間違いないな．．．」

デモーニオ：「総員!! 「オオミ・リュウヤ」を潰せ!!」

チームK：「『了解!!!』」

2ー1で日本・イタリアチームのリードでチームKボールのキックオフで試合再開。

デモーニオがドリブルで攻めあがって来たので俺がデフエンスに入る。

デモーニオ：「掛かったな」

俺が気づくとチームKの選手がデモーニオを含めて6人俺を取り囲んでいた。

デモニーオ：「喰らえ!!」

何と相手は俺めがけて本気で蹴ってきた。

龍也：「危ね!!」

割と余裕そうに軽々避ける。

ビオレテ：「この!!」

龍也：「あらら危ない!!」

ロツソ：「死ね!」

龍也：「スポーツ選手が試合中にそんなことを言っではいけません!!」

イズカチャ：「ふざけるな!!」

龍也：「残念ハズレ!!」

巧みな口撃でチームKを苛立たせる。相手が俺を潰そうとしているのは分かるのだ

が全く当たる気配が無い。

ジャンゴ：「このやろう!!」

龍也：「来たな。ファイディオ、走れえええ!!」

ドカアアア!

相手の蹴ったボールを微妙に角度調節し蹴り返しファイディオへの絶妙なパスになった。

チームK：「なに!？」

相手の動きが止まった瞬間俺は包围を抜け出した。

龍也：「ファイディオ!! お前、空中でシュート技を出せるか?」

ファイディオ：「オーディンソード」を? 多分出来る」

龍也：「なら同時に行くぞ!! 俺が「スサノオブレード」で合わせる」

ファイディオ：「合体技ってことか? ……面白い、やろう!!」

俺がボールを上蹴りファイディオが空高くバク宙で跳び上がる。そして俺は左足にスサノオブレードのオーラを纏わせて後ろ向きでバク宙し二人でボールに対して上下から「オーディンソード」と「スサノオブレード」を併せる。

龍也・ファイディオ：「ダブル・ゴッド・ブレード」!!」

ドギユオオオオオン!!

ギリシャ神話の戦神オーディン、日本神話の闘神スサノオ、2つの神の剣は1つになり全てを貫き切り裂き破壊する究極の剣となりチームKゴールを襲う。

インデイゴ：「フルパワーシールド・V3」!!」

バリエイイイイイン!!

相手のバリアはシュートボールが触れた瞬間砕けちりボールはゴールへ吸い込まれた。

システイ：「龍也さんとファイディオが・・・」  
 アンジェロ：「一緒にシュートを・・・」

俺は左手、ファイディオは右手を共に上げ人差し指を立てる。

龍也：「日本!!」

ファイディオ：「イタリア!!」

龍也・ファイディオ：「ファイツ!!!」

日本・イタリア：『『ウオオオオオオオオオオツツ!!!』』

日本・イタリア連合の士気が最高潮に高まる中、3-1でチームKボールで試合再開。

デモニーオ：「調子に乗るなよ!!」 「皇帝ペンギンX」!!!

システイ：「させないわ!!」 「バーリアンの盾・改」!!!

ガガアアアアツ!!!

ファイベルがシュートブロックに入るがやはり破られる。しかし威力は弱まった筈だ。

円堂：「イジゲン・ザ・ハンド」!!!

ボールはドーム状のオーラへ激突。しかしそれでも「イジゲン・ザ・ハンド」を突き破りボールはゴールの中へ・・・。

円堂：「くそおっ!!!」

デモニーオ：「勝つのは我々だ!!!」  
日本・イタリア連合3ー2チームK

― 続く ―

## 第32話：帝国の反逆

デモーニオのシユートが決まり3ー2だがまだリードしており、日本・イタリアボールのキツクオフで試合再開。

佐久間：「鬼道ー！」

鬼道にボールが渡るが鬼道のそっくりさんことデモーニオがディフェンスに来る。

デモーニオ：「どちらが総帥の最高傑作か思い知らせてやる」

鬼道が左右にフェイントで振るがすべてついており鬼道が攻めあぐねていた。

不動：「ったく、見てらんねえぜ!!」

不動が鬼道に向かって走り出した。

鬼道：「不動?！」

不動：「同時にボールに思い切り蹴りを入れる!!」

鬼道と不動が挟み込むように2人同時にボールを蹴ると2人のインパクトが衝撃波を起こしディフェンスを吹き飛ばした。

デモーニオ：「くっ!! 何だと?！」

鬼道：「不動・・・」

不動：「あのくらい1人で抜けよ」

鬼道：「ふ、礼は言わんぞ?」

不動：「別に良いぜ? 次1人で抜けばな」

ボールはそのまま俺に渡り、

龍也：「ファイディオ!!」

ファイディオにスルーパスを出す。

ファイディオ：「オーディンソード・改」!!」

地面に魔方陣が現れファイディオのシュートとともに魔方陣から黄金色の剣が飛んでいく。

インディゴ：「フルパワーシールド・V3」!!」

バチイイイン!

ファイディオのシュートは相手のバリアに弾き返されそのままボールはデモーニオに。

デモーニオ：「皇帝ペンギンX」!!」

デモーニオが渾身の力で必殺シュートを放つ。しかしシュートレンジ上にいた小原は当然シュートブロックを行う。

マリ：「アトランティスウォール・G3」!!」

ガカアアアッ!



マリ：「ぐぐぐぐつ．．．!!」

小原の呼び出した古代遺跡にシュートが激突!! 必死に押さえ込もうと踏ん張るが．．．

バガアアアン!!

マリ：「キヤアアアアアッ!!!」

小原はパワー負けて吹き飛ばされる。そして最後の円堂に託される。

円堂：「威力は弱まった!! 「怒りの鉄槌・V3」!!」

ドグシャアアアッ!!

「皇帝ペンギンX」を完璧に叩き潰して失点を回避し、ここで前半終了。

— ハーフタイム —

システイ：「龍也さん!! ドリンクをどうぞ!!」

ハーフタイムの給水でシステイーナさんがドリンクをくれたので遠慮なく貰う。ふふ、ちよつと疲れたな．．．

龍也：「貰うよ。ありがとう」ナデナデ

システイ：「ハウツ?!?!/!/」

龍也：「あつ悪い。いつも果南にやるクセでやっちゃまった」

システイ：「い、いえ／／、その．．う、嬉しかったです．．／／（松浦果南!!

いつも龍也さんによしよしして貰ってるの!? なんて羨ましい!!」  
ん? 最後よく聴こえなかったけどまあいいか。

ルミア：(システイひよつとして・・・?)

フィディオ：「だが、幾らなんでもおかしい・・・」

龍也：「なにがだ?」

アンジェロ：「確におかしい。チームKの選手の実力は全員僕たちオルフェウスと同等なんです。でもイタリア国内で僕たちは誰もあいつらの内の誰か一人の名前すら聞いたことがないんです」

鬼道：「それは確かに変だな。代表クラスの実力があるなら名前が通るのが普通なんだが」

ミスターK：「それには特別に私が答えてやろう」

鬼道：「影山!」

影山：「答えはチームKが身体能力特殊強化プログラムを受けた「強化人間」だからだ」

円堂：「強化人間だと!」

ミスターK：「ああ。そのプログラムを受ければサッカーの全くの素人がもの30分で代表クラスの身体能力を得る事が出来る。素晴らしいと思わんかね?」

システイ：「道理で。おかしいと思ったわよこの卑怯者!!」

龍也：「フィディオ、あいつらは世界中のサッカー選手やファンをバカにした。絶対に負けてはいけない相手だ」

フィディオ：「もちろんだ!! 皆、後半行くぞ!!」

日本・イタリア：『『おう!!』』

そして後半、日本・イタリアボールで試合開始。

鬼道：「不動、あの技をやるぞ!!」

不動：「ああ。影山のヤロウに見せつけるにはちょうどいいかもな!!」

そして鬼道は左足、不動は右足にオーラを込めてツインシュート。だがボールは枠外へ逸れていった。

佐久間：「!?!」

鬼道：「くつ、やはりダメか!!」

佐久間：「鬼道、今の技は!?!」

鬼道：「[皇帝ペンギン1号]のパワーと、[皇帝ペンギン2号]のバランスを併せ持ったシュートだ。だが、まだ完成していなくてな・・・」

不動：「この技なら、影山に一泡吹かせられるのによお!!」

佐久間：「不動、俺はどこかお前を疑っていた。いつか裏切るんじゃないかと・・・だが、今はもうそれは無い。鬼道、不動!! その技俺にも手伝わせてくれ!! 俺たち3人

ならきつと成功する」

チームKのゴールキックで試合再開。ボールはビオレテに飛ぶがルミアが空中でカットし、ファイディオにパスを出す。

ファイディオ：（あの3人の技は未完成なら俺が!!）

鬼道：「ファイディオ、あと1回だけでいい!! こっちに回してくれ!!」

ファイディオ：「!!」・・・分かった!!」パスツ

そしてボールは鬼道に渡った。

佐久間：「鬼道!! お前たちの技は、高さが足りないんだ!!」

鬼道：「高さ・・・高さか!!」

不動：「そう言うことかよ!!」

鬼道：「[皇帝ペンギン1号]と[皇帝ペンギン2号]が2次元なら・・・」

不動：「そこに高さを加えて・・・」

佐久間：「3次元に!!」

鬼道・不動・佐久間：「これが、[皇帝ペンギン3号]だあああああああつ!!」

ドツガアアアアン!!

3人の更なる進化を果たした皇帝ペンギンがチームKゴールに襲い掛かる。しかしそこにデモーニオが立ちはだかりシュートブロックに入る。

デモーニオ：「これ以上やらせるものか!!」「皇帝ペンギンX!!」  
ドガアアアツ!!

デモーニオ：「ぐぐぐぐぐぐぐぐわあああああつ!!」

インデイゴ：「デモーニオ!!? うわあああああつ!!」

ボールはデモーニオとキーパーの2人ごと、纏めてゴールに突き刺さった。

鬼道：「これが皇帝ペンギンの最終進化、「皇帝ペンギン3号」だ!! 影山、これが俺たちの答えだ!!」

日本・イタリア4ー2チームK

― 続く ―

## 第33話：決着! 「チームK」そして・・・

鬼道・不動・佐久間の「皇帝ペンギン3号」が決まり4ー2チームKボールで試合再開。

ビオレテ：「デモーニオ!!」

デモーニオ：(?)グニャアツ

ボールはそのままサイドラインを出てしまった。

ビオレテ：「デモーニオ?」

デモーニオ：「ボール・・・ボールは何処だ!?!」

!?! あいつまさか!!

ジャンゴ：「デモーニオ、お前・・・まさか目が!!」

ミスターK：「拒絶反応が出たか」

イズカチャ：「拒絶反応!?! それはどういう!!」

ミスターK：「言葉通りだ。お前たちに与えた強化人間プログラムは最初は誰でも大きな力を手に出来るが、時間が経てば適合する者としめない者が現れる。適合すれば問題無いが、しなければ力を失うだけでなく身体機能が徐々に低下していく」

ヴィッターノ：「な!？」

龍也：「お前ら……まさか……知らなかった……のか？」

アリア：「ええ。初耳よ……」

デモーニオ：「大丈夫です総帥!! まだやれます!!」

ミスターK：「……」

あいつ、見捨てやがった。自分の目的のためにコイツらを利用して、役に立たなくなったら簡単に捨てやがった。

デモーニオ：「そんな……総帥!!」

不動：「力を与えられた者の最後か。へっ、モロいねえ」

ビオレテ：「もういいデモーニオ、こんな力、俺たちには大きすぎたんだ」

ロツソ：「帰ろうデモーニオ。力なんて無かったけど、俺たちのサッカーが出来ていたあの頃に」

デモーニオ：「お前たち……」

龍也：「少なくともコイツらはお前を、仲間を見捨てないみたいだけど？ どつちに従

うんだ？」

デモーニオ：「……」

するとデモーニオはゴーグルとマントと髪を縛っていたゴムを投げ捨て、嘘偽りの無

い本当の姿になった。・・・それでいい。

龍也：「まだ試合は終わってない!! 気を抜くなよ!!」

日本・イタリア：『ああ!!』

デモーニオ：「挑む所だ!! 行くぞ・・・皆!!」

チームK：『おう!!』

そこからは先程までとはうってかわり実力のみの本当の勝負となった。そして時間  
はあとわずか。

鬼道：「ファイディオ!!」

ファイディオ：「決める!!」 「オーディンソード・改!!」

インデイゴ：「絶対に止めてやる!!」

ドガアアアツ!!

インデイゴ：「ふぬおあああつ!!、」

ズバアアアン!!

ボールは、ネットに吸い込まれた。

ここで試合終了になり6ー2で日本・イタリアチームの勝利となった。

ビオレテ：「敗けたか・・・」

デモーニオ：「でも、途中からは久しぶりに楽しかった」



フィディオ：「チームK・・・」

デモーニオ：「フィディオ・・・すまなかった。世界大会、頑張ってくれ。イタリア代表として、俺達だけじゃないイタリアのサッカープレイヤー皆の代表として」

フィディオ：「ああ!! 君たちの想いも、他の人たちの想いも全部背負って闘うよ。そして必ず、イタリアに優勝旗を持ち帰ってみせる!!」

フィディオとデモーニオは握手をかわし、そしてオルフェウスメンバーもチームKの想いを受け止めた。

鬼道：「デモーニオ」

デモーニオ：「鬼道・・・すまなかった。俺は・・・」

鬼道：「まずはしっかりと体を治せ。そして今度は正々堂々決着を着けよう世界の舞台で」

デモーニオ：「っ!!・・・ああ!! 今度は自分自身の力で代表になって見せる!!」

鬼道：「今度は世界大会で代表として会おう」

デモーニオ：「ああ、約束だ!!」

鬼道とデモーニオも和解し固い握手をかわす。

パチパチパチ

俺たちがそつちを見ると、影山が胸糞悪い笑みを浮かべていた。

鬼道：「影山!!」

ミスターK：「おめでとう。イタリア代表、オルフェウスの諸君。約束通りイタリア代表は君たちだ。だが・・・、イナズマジヤパンの君たちは、良いのかな？　こんなところにおいて」

龍也：「何!?! どういう意味だ!!」

トニー：「フィディオール!!」

フィディオ：「トニー、ユリウス!! 怪我はもういいのか!?!」

トニー：「そんなことより大変なんだ!! 今、大会運営委員から通達があつて、試合日程がくりあがつて日本対アルゼンチン戦が・・・今日になつたつて。もう試合が始まるみたいなんだ!!」

鬼道：「何だつて!?! そんな話聞いてないぞ!!」

ミスターK：「クツクツクツ。ハーツハツハツハツ!!」

鬼道：「影山あああああつ!!、」

龍也：「果南・・・っ!!」

フィディオ：「とにかく急いでスタジアムへ!! 急げば後半には・・・させませんよ」っ

!?! 誰だ!!」

まるで影のように急に4人の人間が現れ俺たちを包围した。

不動：「何だお前ら!?　そこをどけえ!!」  
 シュンツ

不動：「消えた!?　どこにいった!?!」

龍也：「不動!!　後ろだ!!」

ドガアアアツ!!

不動：「ぐわあああああつ!!」

龍也：「不動!!」

フィディオ：「これじゃあスタジオムへ行けないよ・・・!!」

――時は遡り1時間前――

↳ 〈ヤマネコ島〉・「ヤマネコスタジオム」↳

ツバサ：「どうするの?　大海くんも鬼道くんも不動くんも佐久間くんも、おまけに

キャプテンや監督まで居ないなんて・・・」

風丸：「仕方ない。今日の試合、俺達だけで戦うしか無い」

果南：「そんな・・・」

風丸：「登録メンバーを発表する。」

F W　吹雪　豪炎寺　黒澤

M F　松浦　野坂　矢澤

D F 優木 綱海 鹿角 風丸

G K 立向居

控えは南、綺羅、高海、高坂、渡辺の5人でいく」

イナズマジヤパン：『『分かった・・・』』

テレス：「あれ？ ジャパンのキャプテンとオオミ・リュウヤ来てないじゃん。エドガーを倒したって言うから楽しみにしてたのに、とんだ臆病者だな」

果南：「龍也は臆病者なんかじゃない!! 勝手な事を言うな!!」

エステバン：「おお怖!! まあ精々楽しませてくれよ?」

果南：「つ、アイツら・・・絶対勝つよ!!」

イナズマジヤパン：『『おう!!』』

く 続く く

## 第34話：VS「ジ・エンパイア」

スターティングメンバー

ジ・エンパイア

G K                      ホルヘ（男）

D F   バファロ（男）                      ゴルド（男）                      アリシア（女）                      テレス（男）

M F   ロベルト（男）                      エステバン（男）                      モンタナ（男）                      グレイス（女）

F W                      リン（女）                      アリス（女）

イナズマジャパン

F W                      吹雪（男）                      豪炎寺（男）                      黒澤（女）

M F                      松浦（女）                      野坂（男）                      矢澤（男）

D F                      優木（女）                      綱海（男）                      鹿角（女）                      風丸（男）

G K                      立向居（男）

審判：「それでは試合を始めます!!」

日本ボールで試合が始まった。しかしすぐに黒澤がボールを奪われてしまった。

アリス：「そんなトロい動きが私たちに通用すると思う!?」

にこ：「何こいつら!? 速い!!」

アルゼンチンの女子FW「アリス・コーナー」に次々と突破されていく日本ディフェンス。そしてあつという間に相手はゴール前でシュート態勢に。

アリス：「デスファイア・改!!」

ボールを軽くあげて両足で挟み捻って空中のボールにドリルのような回転を掛ける  
と空気を摩擦で着火。そのボールに渾身のソバットキックを放つ。驚いたのはその熱量  
が南さんの「イカロスフォール」や高坂さんの「プロミネンスドライブ」等の炎系必殺  
技よりも遥かに熱量が凄まじかった事だ。そのシュートがゴールに迫る。

立向居：「ムゲン・ザ・ハンド・G5!!」

立向居くんの必殺技が止めようとボールをつかむ。その瞬間オーラの手はドロドロ  
に融解し、シュートはゴールに突き刺さった。

—— 同時刻・大会本部 ——

響木：「どう思う久遠・・・?」

久遠：「明らかに出来すぎています。それに、一監督に過ぎない影山10人でここまで

の事が出来るとは思えません」

響木：「同感だ。恐らく、大会日程を弄れる程上の人間に協力者がいる。それでどうする？ 今から船をチャーターすれば、後半には間に合うと思うが・・・」

久遠：「・・・いえ、ここは彼らに任せましょう。今のイナズマジヤパンは円堂と鬼道に頼りすぎています。「円堂なら止めてくれる」、「鬼道なら勝利への確実なゲームメイクをしてくれる」と。それに何より一番大きいのは大海の存在です」

響木：「アイツに任せれば決めてくれる。アイツがいれば敗けない。確かにそう考えてしまっても不思議ではない。だが、これから勝ち進めば大海一人では限界がある。自分達が弱いままの良いわけが無いと教えると言う事だな」

久遠：「はい。それに、敗北を知らない者に本当の勝利は訪れない。例えこの試合敗けたとしても、彼らが自分たちの力で、アルゼンチンから1点をもぎ取ら無い限りは」

---

1-0になり、日本ボールのキックオフで試合再開。

リン：「遅いよ!!」

果南：「マーメイドダイブ・V2」!!」

リン：「わっ?! 何これ水中?!」

水中で上手く動けない相手を何とか突破してドリブルで上がる。

テレス：「ほう？ いい!! 撃たせろ!!」

何とアルゼンチンはシュートコースを開けてきた。絶対に決めてやる!!

私を激しい水の竜巻が包みぐんぐん上昇激しい水流エネルギーを纏ったボールを蹴り込んだ。

果南：「激流ストーム・G5」!!

テレス：「アイアンウォール・改」!!

ガガガガガアツ! バチイン!!

私の渾身のシュートは、あっさり止められてしまった。

テレス：「これはシュートなのか? 南米じゃあ小学生でももうちよつとマトモな

シュートを撃つぞ?」

そう言うのと相手は今度は豪炎寺くんにわざと撃たせた。

豪炎寺：「ナメるな!!」 「爆熱スクリュー・改」!!

テレス：「アイアンウォール・改」!!

ガガガガガアツ バチイン!!

豪炎寺もシュートを放つが、あっさりと防がれてしまう。

テレス：「ふん、次はお前だ」

ダイヤ：「私の新技で絶対に決めます!!」 「ダイヤモンドレイ」!!



テレス：「アイアンウオール・改」!!」  
ガガガガガ

テレス：「おっ!?! こいつは中々・・・」  
バチン!

テレス：「中々やるじゃねえかお前・・・」

リン：「キャプテーン!! こつちにも下さいよー!!」

テレス：「悪い悪い。ほらよ!!」

アルゼンチンのロングパスがFWに繋がった。

風丸：「止める!!」 「スピニングフェンス・改」!!!」

リン：「遅いよ!!」

風丸：「クソツ!! コイツらの動き・・・まるで野生の獣みたいだ!!」

リン：「デスファイア・改」!!」

相手のシュートがゴールに迫る。

立向居：「どうすれば・・・どうすれば止められる!?!」

綱海：「ビビるな立向居!! 失敗してもいい、お前の全部をぶつけるんだ!!!」

立向居：「俺の・・・全部・・・。これが、俺の全部だあああああつ!!」 「魔王・ザ・

ハンド」!!」

立向居の背後に、暗黒の魔王のオーラが出現。魔王と共に立向居は両手でシュートをがっちりキヤッチした。

リン：「なっ!! 止めた!？」

立向居：「やった・・・止めたぞおおおおおっ!!」

果南：「立向居くん!! こっち!!」

立向居：「松浦さん!!、」

果南：「行くよ!!! 吹雪くん、ダイヤ!!!」

吹雪・ダイヤ：「「「グラント・・・ッ」」

果南・吹雪・ダイヤ：「「ウエエエエエエブッ」!!!」」

ドッパアアアン!!

高さ20メートル以上の大津波とともにシュートはアルゼンチンゴールに襲いかかる。

テレス：「「アイアンウォール・改」!!」

ドガガガガガ!!

テレス：「ぐっ、なんだ!? このパワー!!」

ビシッ! ビシビシビシ バゴオオオオン!!

テレス：「ぐわあああああっ!!?」

ホルヘ：「テレス!? うわあああああつ!?」

シユートはアルゼンチンゴールに突き刺さった。

果南：「や、やった!!」

アリス：「そんな!? 私たちから点を取った!?」

果南：「まだまだ試合はここからだよ!! 行くよ皆!!」

イナズマジヤパン：『『『オオー~~~~~~~~ッ!!』』』

しかし、それから「グラランドウエーブ」は警戒され撃てず、アルゼンチンの猛攻の未  
 1点を奪われ、私たちは敗けてしまった。

円堂：「皆!!」

風丸：「円堂!!」

龍也：「悪い、足止めされて来れなかった・・・」

綱海：「足止め!? 影山にか!!」

鬼道：「いや、仲間では在るんだろうが、多分違うと思う・・・」

果南：「ゴメン・・・龍也・敗け・・・ちゃった・・・」

龍也：「何を言ってるんだ!! 俺たち抜きであるアルゼンチンから1点取ったんだぜ

!? 凄えよお前ら!!」

テレス：「その通りだぜイナズマジヤパン!!」

ツバサ：「何よ!!」

テレス：「次は負けねえぞ!!」

エステバン：「何言ってるんだテレス？ 勝ったのは俺たちだぜ？」

テレス：「そう言う問題じゃねえ!! 俺たちのライフエンスから、点を取りやがった・・・しかもキャプテンもエースも居ないのだ!! こんな屈辱は初めてだ!!」

龍也：「試合に勝って勝負に敗けた」ってやつか」

テレス：「そう言うことだ。お前ら、必ず決勝トーナメントへ勝ち上がれ!! そして世界一を決める決勝でもう一度闘え。今度はそっちもフルメンバーで来い!! その上で点はやらない!!!」

そう言い残し、相手は帰って行った。

鬼道：「よし皆、明日から更に厳しく特訓だ!!」

イナズマジヤパン：『『オオーーーーーッ!!!』』

響木：「戦えそうだな。このチームなら」

久遠：「ええ・・・」

― 続く ―



システイ：「フィディオ？ さっきの態度は何？」

フィディオ：「俺はもう少し様子を見たい。確かにあの人のやったことは許されないけど、あの人は悪意しかない訳ではない気がする」

ブラージ：「何を悠長なことを言ってるんだフィディオ!! 円堂たちが言ってただろ、アイツが今までやってきた悪さのことを!! それにこの間のチームKのときだって、アイツの策略で怪我を負わされたメンバーも居るんだぞ!?!」

システイ：「それにあの時イナズマジヤパンが・・・龍也さんたちが助けてくれなかったら、私たちは今頃!! 龍也さんたちは気にするなって言ってくれたけど、私たちを助けてくれたせいで、イナズマジヤパンは負けちゃったのよ!?! 私は申し訳なくて仕方ないわ!!」

ブラージ：「しっかりしろよ!! キャプテンが居ない今、副キャプテンのお前がチームを引っ張らないといけないんだぞ!!」

フィディオ：「分かっているよ・・・」

トニー：「頼むよ!!」

そして試合が始まり、

エドガー：「必殺タクティクス〈無敵の槍〉!!」

トニー・ユリウス・システイ：「二うわあああああつ（キヤアアアアアツ）!!?」

エドガー：「真・パラディンストライク!!」

そしてそのシュートが決まり1-0で前半終了。

ブラージ：「くそ!! あいつらのフォーメーションを破る方法誰か思い付かないのかよ!!」

ミスターK：「ふふふふふふ」

ユリウス：「何が可笑しい!!」

ミスターK：「失礼。君たちとの約束、破らせてもらっても良いかな?」

システイ：「アンタは黙って・・・スツーフイディオ!?」

フィディオ：「聞くだけ聞いてみよう」

ブラージ：「攻めの人数を増やしてDFを二人にする!? そんなこと出来るわけないだろ!!」

ミスターK：「〈無敵の槍〉が無敵なのはフォーメーションが崩れる前の話。その瞬間を狙うためのフォーメーション変更だ。そして攻める時はドリブルではなくパスを使え。前後左右ではなく高低差と緩急を意識したパスだ」

それからミスターKの指示通りに試合を進めると、恐ろしいくらいに戦いやすくなり、そのまま2点をもぎ取りイタリアが勝利した。

ブラージ：「まさか、アイツの指示が効いたのか・・・?」

エドガー：「ファイディオ、君たちの動きは何だ? 後半から見違えるようだった。これと同じチームかと言うくらいに・・・まるで私たちの動きが全て見抜かれている様だった。君たちの監督は何者なんだ?」

ミスターKを見ると、コートから出ていく所だったので俺は急いで追いかけた。

ファイディオ：「ミスターK!! 貴方にとって、サッカーとは何ですか!」

ミスターK：「・・・」

やはりあの人はサッカーを知っている。勝つということを知っている。なのになぜ貴方はあんな卑怯なやり方を・・・?

円堂：「鬼道、どう思う?」

鬼道：「間違いない。この試合、イギリスの動きを見抜きイタリアに勝利の策を授けたのは影山だ。アイツの指導者としての力は衰える処か益々強大になっている」

龍也：「よし練習だ!! 次からもう負けられないんだ、気合い入れてくぞ!!」

イナズマジヤパン：「『オオシツ!!』」

そして私たちはグラウンドで練習を始めた。

龍也：「行くぞ立向居!!」「スサノオブレード・G5!!」



立向居：「魔王・ザ・ハンド」!!!  
ギャルルルルル!!

立向居：「ぐぐぐぐ．．．っ!!」  
バチン!!

ボールはゴールの中に吸い込まれていった。

龍也：「やるじゃん立向居!! 止められるかと思っただぞ?」

立向居：「まだパワーが足りないか．．．次、松浦さんお願いします!!」

果南：「激流ストーム・G5」!!

立向居：「魔王・ザ・ハンド」!!

ギャルルルルル! バシィツ!!

果南：「止められた．．．」

龍也：「でもアルゼンチン戦の時よりだいぶパワー上がったじゃん」

果南：「全然駄目。これじゃあ「アイアンウオール」クラスのデیفエンスを破れない」

龍也：「なあ? 俺「グランドウエーブ」受けてみたいんだけど良いか?」

果南：「えっ!? 大丈夫? アルゼンチンのデیفエンスを破った技だよ?」

龍也：「大丈夫。立向居!! キーグロ貸してくれ!!」

立向居：「あっ、はい!!」

龍也：「よしっ!! 来い!!」

果南：「吹雪くん、ダイヤ!! 行くよ!!」

果南・ダイヤ・吹雪：「[[「グランドウェーブ」!!」

龍也：「真・ゴッドハンドV」!!」

ガカアツ!! シュウウウウウ・・・

果南・ダイヤ・吹雪：「[[「?」

ボールは俺の手に収まっていた。

龍也：「凄げえパワーだな。これならそう簡単には止められないだろ」

立向居：「龍也さん!! 今の技って!?!」

龍也：「ああ。円堂と立向井の「ゴッドハンド」を、俺なりに進化させた技だよ「ゴッ

ドハンドV」<sup>ブイ</sup>って名前」

立向居：「龍也さん、その技教えてください!!」

龍也：「良いけど・・・難しいぞ?」

立向居：「大丈夫です!! お願ひします!!」

豪炎寺・ツバサ・穂乃果・海未：「[[「私（俺）たちも負けていけない!!」

アメリカ戦まで後4日。

—  
続  
く  
—

## 第36話：幼馴染、そしてアメリカ戦に向けて・・・

♪ マネージャー's side ♪

マネージャー：「明日の練習の準備これで良いかな」

プルルルルルル

ん、電話？ 「着信：一之瀬 一哉」

ピッ「もしもし？」

一之瀬：「もしもし？ 秋？」

マネージャー（秋）：「一之瀬くん？ どうしたの？」

一之瀬：「明日、会えないかな？」

秋：「うん。良いよ？ 楽しみにしてるね？」

♪ 次の日 ♪

― 〈アメリカエリア〉 ―

秋：「一之瀬くん!!」

一之瀬：「秋!! 久し振り」

秋：「もう、急に連絡寄越すからビックリしちゃった。でも、ホント急にどうしたの？」

そう聞くと黙りこむ一之瀬くん。なんだろう？ 何か嫌な予感がする。

一之瀬：「俺さ、この大会が終わったらプロチームのユースに入る事になったんだ」

秋：「プロユース!? 凄いいじゃない一之瀬くん!! 良かったあ。急に黙りこむから暗い話なのかと思っちゃった」

一之瀬：「この大会での優勝を入団の手土産にするつもりさ」

秋：「そっか!! でも、イナズマジヤパンも敗けないからね?」

一之瀬：「ああ。今度の試合、俺の全てを出しきる!! . . . 最高の思い出になるように」ボソツ

秋：「え? ゴメン、最後何か言った?」

一之瀬：「いや、何でもない。それで . . . 秋!! この大会が終わったら、一緒にアメリカに来てくれないか?」

秋：「へ!? い、いきなり言われても . . .」

一之瀬：「ああ、違う違う。ユースのデビュー戦を観に来てくれていう意味だよ」

秋：「何だそういう意味か。もちろん行くに決まってるよ!! 大切な仲間だもん!!」

一之瀬：「ありがとう . . .」

秋：「話はそれだけ?」

一之瀬：「うん。一応」

？ まあいいか。

秋：「じゃあ練習あるから、私戻るね？」

一之瀬：「ああ。円堂たちにも宜しく言っておいてくれ」

マナージャー side out

一之瀬 side

イチノセ：「はああああああつ!!!」

ドオオオオオン!! ザシュツ!!

デイラン：「ナイスシュート、カズヤ!!」

オリビア：「イチノセさん気合い入ってますね!!」

イチノセ：「ああ!! 次の試合、絶対に敗けられないからね」

ドモン：「ああ」

マーク：「ああ、なるほど。昔の仲間には敗けられないって事か」

トール：「イチノセさん中心で連携の練習もしておきましょうか」

ドモン：「一之瀬、無茶だけはするなよ。こうしている間にも、お前の身体は・・・」

イチノセ side out

イナズマジヤパン side

鬼道・不動・佐久間：「『『皇帝ペンギン3号』!!』」

ドガアアアアアン!!

円堂：「イジゲン・ザ・ハンド」!!」

シュートは円堂の技と激突し、円堂の技を突き破りゴールの中へ。

円堂：「くそっ!!」

不動：「お前も立向居みたいに大海に「ゴッドハンドV」教えて貰えば?」

円堂：「確かにそれも1つの手かもな。おい、大海!! 俺にも教えてくれ!!」

~~~~~

豪炎寺・ツバサ・穂乃果：「「「「「「「「「「「「!!!」」」」」」

ザシュツ!

穂乃果：「出来た!! 出来たよーーー!!!」

ツバサ：「何とか間に合ったわね」

イナズマジヤパンは新技の開発、既に使える技の強化、基礎体力UPの練習を重点的に行い3日後、ついにアメリカ戦の日となった。

— 続く —

第37話：開戦!! vs 「ユニコーン」!!!

— クジャク島・クジャクスタジアム —

試合の日になり船でスタジアムのあるクジャク島へ向かいスタジアムのコートに入ると満員の日本、アメリカ両サポーターで埋め尽くされていた。

イチノセ：「円堂ー!! 「ペガサスショット」!!」

ドガアアアン!!

円堂：「うわっ!？」

円堂は咄嗟に反応しキヤツチしようとするが・・・。

ギヤルルルルル バチイイイン!!

円堂：「ぐわっ!!」

イチノセ：「挨拶がわりだよ!! どう? 俺の新技、「ペガサスショット」は!! 試合が始まったらこんな生易しい威力じゃないよ!!」

円堂：「へへっ、やっぱ凄げえや!!」

〜

試合が始まる前、俺はマネージャーと円堂の姿が無い事に気づき探していた。

「~~~~~!~~~~~、~~~~~。~~~~~!」

ん? 話し声?

ドモン:「昔の事故の影響が、まだ一之瀬の身体に残っていたらしいんだ。手術すれば治るかもしれない。けど、成功率は50%しかも時間が経てば経つほど成功率は下がっていく。それにもし成功しても、また今まで通りサッカーが出来るか分からない」

秋:「そんな・・・」

イチノセ:「だからこれが俺の最後の試合になるかもしれない。だからこそこの試合手は抜かないし、抜かないでほしい」

円堂:「分かった。手加減なんかしないぞ!!」

イチノセ:「円堂なら、そう言ってくれると思った」

そしてドモンとイチノセはアメリカの控え室に入ってしまった。

秋:「円堂くん?」

円堂:「何で・・・、何でアイツにばかり・・・こんな!!・・・もしこれが、アイツにとつて最後の試合になるなら、俺は思い切り全力で闘ってやりたい!!　それが、俺にできるアイツへの全力の友情だから!!」

龍也:「・・・」

~~~~~

— フィールド —

風丸：「あつ、大海。円堂居たか？」

龍也：「ああ。もうじき来るよ」

鬼道：「？」

久遠：「お前たち分かっているな？ 決勝トーナメントに進む為にはもうこれ以上の

敗けは許されない。決勝トーナメントに進みたければ死ぬ気で勝て!! 以上!!」

イナズマジヤパン：『『『はい!!!』』』

審判：「それでは試合を始めます!!」

イナズマジヤパン

F W 黒澤（女） 豪炎寺（男） 綺羅（女）

M F 吹雪（男） 松浦（女） 鬼道（男） 高坂（女）

ボランチ 大海（男）

D F 鹿角（女） 風丸（男）

G K 円堂（男）

ユニコーン

G K

キッド（男）



龍也：「真・ペガサスショット」!!

ドガアアアアン!!

ドモン：「させるか!!」 「ボルケイノカット・V3」!!

ドモンが右足を横風ぎに振ると真空波が地面めがけて飛び地面に激突・した場所から火山の様に炎の壁が吹き出しブロック。が、シユートはブロックを突き破り突き進む。

キッド：「フラッシュユアッパー・V2」!!

相手キーパーの強烈なアッパーカットがシユートに刺さる。だが、

ドガアツ!!

キッド：「ぐわあっ!?!」

ボールはゴールに吸い込まれていった。

イナズマジヤパン1 | 0ユニコーン

| 続く |

## 第38話：激闘!! vs 「ユニコーン」!!!

マーク：「くそ!! まさかカズヤの技を使ってくるなんて……!!!」

ドモン：「大丈夫、まだ1点だ。取り返すぞ!!」

ユニコーン：「オオー……!!!」

ユニコーンボールで試合再開。

デイラン：「カズヤ!!」

果南：「行かせないよ!!」

イチノセ：「っ!」クンッ

イチノセは果南をルーレットで躲かしデイランとマークにセンタリングを上げた。

デイラン：「サブライズだよ!! 行くよマーク!!!」

デイラン・マーク：「「ユニコーンブースト・改」!!」

聖良：「ただでは通しません!! 「スノーマウンテン・V3」!!!」

ガガアッ!!

鹿角が必殺技でシュートブロックを挟む。必死に堪えるが、明らかに勢いに押されて  
いる。

聖良：「ぐぐぐ．．．!!」

ドギヤアアアン!!

そして鹿角が呼び出した雪山は粉碎され、尚もシュートは突き進む。

聖良：「キヤアツ!? でも威力は弱まりました。頼みます!!」

円堂：「イジゲン・ザ・ハンド」!!」

ドガアアアアッ!

円堂の技に相手のシュートが激突。しかし威力が弱まったにもかかわらず円堂の技を突き破りゴールネットに吸い込まれていった。

デイラン：「ヒヤッホー!! ギンギンに決まったね!!」

マーク：「よし!! この調子で逆転だ!!」

黒澤がドリブルで上がるがイチノセが立ち塞がる。

イチノセ：「真・フレイムダンス」!!」

果南：「それは千歌の!」

イチノセ：「コピーじゃあないよ!! 俺も使えるんだよ!!」

龍也：「行かせねえ!!」

イチノセ：「っ!! 勝負だ!!」

イチノセはルーレットからのヒールリフト、切り返してシザース、チェンジオブペー  
スなど様々なテクニクを駆使して俺を抜きにかかる。

龍也：「っ!!」

イチノセ：「!! 今だ!!!」

今度は抜かれてしまいイチノセのシユートチャンス。

イチノセ：「ペガサスシヨット・改」!!」

ドガアアアン!!

円堂：「止める!!」「イジゲン・ザ・ハンド」!!」

ドガアアアアッ!

円堂：「ぐぐぐ．．．!!」

しかしイチノセの技は円堂の技を突き破りゴールの中へ。

イチノセ：「円堂!! まだまだ行くよ!!」

円堂：「来い!! 次は絶対止めてやる!!」

日本ボールで試合再開。

龍也：「果南、黒澤、吹雪!! 決めろ!!」

果南・ダイヤ・吹雪：「「「グラウンドウエーブ・G2」!!」!!」

進化し更に威力を増した大津波がアメリカゴールを強襲した。

ドモン：「ボルケイノカット・V3」!!」

ガガアツ

ブロックが入ったがほとんどパワーを奪えず・・・。

キッド：「フラッシュユアパー・V2」!!」

ドガアアアツ!!

キッド：「ぐわあああつ!!」

シュートはアメリカゴールに突き刺さった。

まさにと点の取り合い。ガード無視のインファイト状態が続き、ボールはドモンに渡る。

ドモン：「マーク!!」

マーク・ドモン：「「ジ・イカロス・V2」!!」

ドモンとマークは華麗なドリブル技で鬼道を抜き去ると、

マーク：「カズヤ!!」

パスはイチノセに繋がった。

イチノセ：「ペガサスショット・改」!!」



ドガアアアン!!

龍也：「やらせるか!!」

デイラン：「ホワッツ!? 何をする気だ!!」

俺はあの技の発射体制にはいる。距離が長ければ長いほど威力が上がるあの技の。

トール：「まさか!?!」

龍也：「真・エクスカリバー」!!」

ドガアアアアツ! ギシヤアアアアン!!

イチノセのペガサスショットを俺はエクスカリバーで打ち返した。これは止められないだろう。

ドモン：「くそ!!」 「ボルケイノカット・V3」!!」

ギシヤアアアアン!!

ドモン：「ぐああああああ!!」

オリビア：「止めます!」 「ラ・フラム・G3」!!」

ガガアツ! ギシヤアアアアン!!

オリビア：「キヤアアアアア!!」

キッド：「止める!」 「フラツシユアツパー・V2」!!」

ギシヤアアアアアアン!!!

キッド：「うわあああああ!!？」

シユートはゴールネットを揺らし3―2になり、ここで前半は終了した。

イナズマジャパン3 ― 2ユニコーン

― 続く ―

## 第39話：後半戦。そして・・・

— ハーフタイム —

マーク：「やはり強いな日本は・・・」

デイラン：「でもミールたちにはビッグサブライズがあるからね!!」

イチノセ：「ああ。皆、後半開始から出すぞ」

ユニコーン：「ああ（はい）!!」

く く く く く く く く く く く く く く

後半戦開始の笛が鳴るとアメリカの選手全員が日本コートに攻め混んできた。

豪炎寺：「なに!?!」

そのスピード、正に電光石火。あつという間に日本のゴール前まで攻め混まれGKとDF二人を内側に閉じ込める形で包围された。他のアメリカメンバーは日本選手がヘルプに行けぬよう身体でガードしている。

イチノセ：「ふっ!!」

聖良：「くっ!」

ミケーレ：「でりや!!」

風丸：「させるか!!」

マーク：「ふんっ!!」

聖良：「この!!」

デイルン：「くらえ!」

円堂：「くそ!!」

龍也：「くそ!! ヘルプ行けねえ!!」

イチノセ：「圧倒的な速さで敵陣に攻め込み相手の体制が整う前にゴール前で数的有利な状況を作り畳み掛けるように連続攻撃を食らわせる。これが俺たちアメリカの必殺タクティクス<ローリングサンダー>だ!!」

度重なる連続攻撃により、DF二人が交錯してしまい、ここぞとばかりに必殺シュートに入るアメリカ。

ボールはマークが持ち魔狼の雄叫びとともにキックしたボールをイチノセとデイルンがツインキックで真上へと蹴りあげ、ジャンプしていたマークがどめの一撃を放つ。

マーク・イチノセ・デイルン：「「グランフェンリル・G2」!!」

ワオオオオオオン!!!

魔狼の力強い雄叫びとともに強烈なシュートが日本ゴールに迫る。

円堂：「イジゲン・ザ・ハンド」!!」  
ガガアツ！ バリイーン!!

円堂の抵抗空しく、シュートは日本ゴールに突き刺さった。

円堂：「くそ!!」

不動：「監督さん？ 俺と龍也が居れば<ローリングサンダー>と『グランフェンリ

ル』は攻略出来るぜ？」

久遠：「気づいたか不動。よし、行ってこい!!」

ここで監督は選手を交代。DFの風丸を下げてそのポジションに俺が入り、空いたポ  
ランチに不動を入れる。

そして日本ボールで試合再開。

マーク：「もらった!!」

果南：「しまった!!」

イチノセ：「必殺タクティクス<ローリングサンダー>!!」

マーク：「でりゃ!」

龍也：「ふん!」

不動：「鹿角!! 一之瀬だ!!」

聖良：「分かった!!」

鹿角はボールをカットして不動に回した。

マーク：「なに!？」

不動：「お前たちのキックは正確だ。そして、お前たちはDFの構えから跳ね返りを計算して蹴っている。ならば話は簡単だ。跳ね返りを誘導して先回りすれば簡単にボールを奪える。そしてこのタクティクスは・・・、」

龍也・不動：「カウンターに弱い!!」

豪炎寺：「不動!! こっちだ!!」

不動：「ほらよっ!!」

そしてボールは前線の豪炎寺に繋がる。

豪炎寺：「ナイスパス!! 綺羅、高坂!! 準備は良いな?」

穂乃果：「もちろん!!」

ツバサ：「何時でも良いわよ!!」

豪炎寺：「行くぞ!!」

穂乃果：「グランド・・・ッ」

ツバサ：「・・・ファイアツ!!」

豪炎寺：「イグニツション!!」

ドガアアアアアアン!!

まるで火砕流のような高く幅広い爆炎を纏ったシュートがゴール目掛けて突き進む。オリビア：「天空雷・改」!!」

辺りが暗くなり何万Vというような高圧電流が天からボール目掛けて直撃しブロツク。だが尚もボールは突き進む。

キッド：「フラッシュアッパァ・V2」!!」

ドガアアアアアアン!!!

キッド：「ぐわああああああ!!」

ボールはゴールに吸い込まれ4ー3

ここでアメリカは選手を代える様だ。

イチノセ：「!?!」

表示されているのは9番。つまりイチノセの番号だった……。

―― 続く ――

## 第40話：一之瀬 一哉

イチノセ：「大丈夫です監督!! まだやれます!!」

アメリカ監督：「もう交代は認められた。お前はフィールドを出なければならぬ」

イチノセ：「そんな・・・こんなので・・・」

アメリカ監督：「私には、選手を守る責任がある」

イチノセ：「!? 監督まさか、俺の身体の事を知ってたんですか?」

アメリカ監督：「ああ」

イチノセ：「・・・分かりました」

円堂：「一之瀬・・・」

イチノセ：「これが・・・俺の最後だっていうのか!! 嫌だ、これが最後なんて!!」

俺はまだ、サッカーがしたいんだ!!!」

龍也：「円堂!! アイツの、一之瀬の想いはまだフィールドに残ってる!! 全力で闘う

と約束したのなら、それに応えろ!!」

円堂：「!? まさか大海!」

龍也：「悪い。偶々聴いてしまったんだ」



円堂：「大海・・・そうだよな!! 皆、まだ試合は終わってない!! 全部出しきれ!!」  
イナズマジャパン：「おう!!」

マーク：「敗けてたまるか!! 行くぞ皆!!」

ユニコーン：「オー!!」

それから試合は更にヒートアップし、日本、アメリカどちらも譲らず試合は膠着状態になった。

そしてその試合のラストプレーはアメリカのシュートだった。これが決まれば4-4の同点で試合終了になってしまう。

ディラン・マーク：「ユニコーンブースト・改!!」

一角獣とともにシュートが日本ゴール目掛けて突き進む。

聖良：「スノーマウンテン・V3!!」

ガキイイン!!

鹿角の技がオーラを凍らせブロック。だが尚もシュートは突き進む。

円堂：「絶対に止めてやる!!」「イジゲン・ザ・ハンド・改!!」

この土壇場で円堂の技は進化し、そこに激突したシュートはバリアの上に滑っていきゴールから外れた。

ここで試合終了のホイッスルが鳴り4-3で日本の勝利となった。

円堂：「よっしやー!! 勝ったぞー!!」

イチノセ：「円堂……」

円堂：「一之瀬……」

イチノセ：「俺、まだサツカーがやりたい。これで終わりなんて絶対に嫌だ。手術、絶対成功させて、またフィールドに戻って来る!!」

風丸：「ああ、待つてるぞ一之瀬!!」

鬼道：「お前は「不死鳥」と呼ばれた男なんだ。絶対成功するさ」

豪炎寺：「俺たちもまた、お前と一緒にサツカーできる日を楽しみにしてる」

秋：「一之瀬くん凄かった!! 今ままで一番輝いてた!!」

観客：「イチノセ! イーチノセ! イーチノセ!」

龍也：「凄いな。日本とアメリカのサポーターからイチノセコールだ」

マーク：「よし、アメリカ撤収だ。特にカズやお前は説教だ!! こんな大事な事をキャプテンの俺にも黙っていた事をな!!」

デイルン：「Oh!! ヤル気だねマーク!!」

オリビア：「私だつて言いたいことあるんですよ!」

イチノセ：「分かったよ……」

そう言い合いながら、アメリカチームは会場を後にした。

龍也：「こりや次やる時は一段と厳しそうだな」

円堂：「ああ。最高の選手だよ。一之瀬は」

久遠：「お前たちよくやった。次はイタリア代表「オルフェウス」だ。次で予選リーグ通過か否かが決まる。心してかかれ」

円堂：「次で予選リーグ最後か・・・」

鬼道：「影山・・・」

— 夜・日本代表宿舎 —

コンコン

龍也：「はい。どうぞ!!」

ガチャ

果南：「龍也?」

龍也：「果南か。どうした?」

果南：「寝付けなくて。何を見てたの?」

龍也：「リーグ表だよ。今のところ

日本 2勝1敗0分で勝ち点6の得失点差+1

アメリカ1勝2敗0分で勝ち点3の得失点差-1

イタリア2勝0敗1分で勝ち点7の得失点差+3

アルゼンチンが1勝0敗2分で勝ち点5の得失点差＋1

イギリスが0勝3敗1分で勝ち点1の得失点差－4

今度の日本vsイタリア、アルゼンチンvsアメリカ戦で俺たちが勝てば首位通過確定。引き分けてアルゼンチンとアメリカが引き分けかアメリカの勝ちで二位通過。負けだと必ず一点差でアメリカが一点差勝ちでアメリカと並ぶから後はフェアプレイポイントほしい。まあ早い話負けだけは駄目ってこと」

果南：「そつか」ギョツ

龍也：「果南？」

果南：「龍也、変わったね。代表選考の時は「代表になれなくて良い」って言ったのに」

龍也：「仲間に恵まれたお陰かな。あと、果南と出会えたから」

果南：「ありがとっ……／／／」

龍也：「果南？」

果南：「ん？」

龍也：「一緒に寝るか？」

果南：「っ！ うんっ!!」

そして俺と果南は同じベッドでスヤスヤと寝息を立てた。

—  
続  
く  
—

## 番外編：ガールズトーク

今日は練習が休みなので私、松浦果南は一人でセントラルエリアにあるショッピングモールでショッピングをしていた。

果南：「まったく龍也つてば、誘ったのに来てくれないなんて・・・!!」  
私は少し不機嫌になった気分を晴らそうとカフェに入った。

果南：「カフェラテ一つ」

店員：「畏まりました」

果南：「?」：「龍也(さん)・・・」

ん、龍也? 私は声が出した後ろを振り返ると綺麗な銀髪と碧眼が目に入った。

果南：「あっ!!」 イタリア代表の「システイーナ・フィーベル」さん!!」

システイ：「日本代表の松浦果南さん!!」

せっかくなので私たちは相席して二人で話すことにした。

果南：「システイさんつて龍也と仲良いの?」

システイ：「嫌われてはいないと思いますけど確実に意識はされてないと思います」

果南：「システイさんって龍也のこと好きでしょ？」ニヤニヤ

システイ：「フェエエツ!? そ、そんなことは・・・」

果南：「バレバレだよ？」

システイ：「そ、そう言う果南さんは？」

果南：「うん。好きだよ」

システイ：「そ、そうですか・・・」

果南：「システイさんと龍也が初めて普通に話したのってこの間のチームKのときだよね？」

システイ：「そうです。あの時私を助けてくれて・・・カッコ良くて・・・／／／」

あー成る程ね。ピンチを救われてそのい勢いで好きになっちゃったのか。

システイ：「果南さんが龍也さんと初めて会ったのって何時ですか？」

果南：「日本代表選考に呼ばれた時だね。龍也ってね？ 日本でまったく名前が知られてなくて、それなのに監督たちが凄い期待してたからよくわからなかつたんだよねえ」

システイ：「えっ？ あれだけ上手いのに無名？ どういうことですか？」

果南：「実はね？ 龍也、小学生のときにチームメイトから「努力泥棒」とか「お前と一緒にサッカーしたくない。気分が悪い」とか色々言われたらしくてね。それから今回

までサッカーやってなかったんだよ。ほら、龍也技を見ただけで真似しちゃうから」

確かに龍也さんの技コピーは反則級だけど・・・、っていうか私の大好きな龍也さんにそんなことを言った奴がいるの!?! もし会ったらとっちめてやる!!

システイ：「じゃあ龍也さん5〜7年位ブランクが?」

果南：「ある筈なんだけどねえ・・・全然感じなくて」

システイ：「確かに。それで果南さんはなんで龍也さんの事を?」

果南：「あれはアジア予選一回戦のオーストラリア戦のときだったね。私の実家ってダイビングショップをやってたね? 小さいときからすぐそばに海があったから、故郷の海が凄く大切な物だったの。それなのにオーストラリアのメンバーが「日本のチンケな海」ってバカにしてきて、私悔しくて泣いちゃったんだ。そしたら龍也が試合でオーストラリアをボコボコにしてくれて。「俺の大切な人を傷つける奴は誰であろうと許さん!!」って!! もうくくくくそんな風に言われたら一発だよくくく」クネクネ

システイ：「果南さん、動きが気持ち悪いです」

でもそっか。龍也さんが自分の為に怒ってくれて墜ちちやったのね。っていうか俺の大切な人!?! 私男子からそんなこと言われたこと無い!!

システイ：「確かにそれは嬉しすぎますね。あつ、そう言えば果南さん!! 龍也さんに頭をヨシヨシしてもらってるって本当ですか!?!」



果南：「どうしてそれを!？」

システイ：「いや、チームK戦の時 HALF タイムに私がどうぞってドリンク渡したらヨシヨシしてくれて「果南にやる癖でやっちゃった。ゴメン。」って。」

龍也そんなことを!? あれは私だけの特権なのに!! 帰ったらオシオキしてやるんだから!!

システイ：「龍也さんの手、暖かくて安心しますよねえ・・・気持ちよくなっちゃいましたよ」

果南：「そう!! そうなんだよ!! システイさんよく分かってるね!!」

そうだよ!! だから私だけの物にしたかったのに・・・龍也の奴!!

システイ：「本当果南さんが羨ましいです。ずっと近くに居られて・・・」

果南：「えっ?」

システイ：「ほら、私はイタリアの代表だからチームも違うし。だから龍也さんと一緒に闘ったり一緒に過ごせる果南さんが羨ましいです」

果南：「・・・」スッ

ピッ、ピッピッ

ブルルルル

システイ：「果南さん?」



システイ：「分かりました!! 正々堂々勝負しましょう!!」

果南：「うん!! 後さ、システイって呼んで良いかな? 丁寧なしゃべり方って苦手です」

システイ：「じゃあ私も果南って呼んで良い? 敬語も無しで!」

果南：「もちろん!! よろしくシステイ!!」

システイ：「よろしく果南!!」

それから二人でお買い物ものしてそれぞれの宿舎に帰った。そしてその日の夜、1人の男の断末魔が日本代表宿舎から聞こえてきたのは別の話だ。

— 終わり —

## 〈渡辺 曜〉誕生日編：浦の星女学院サッカー部

F F I 世界大会が終わり翌年の4月17日。今日は私、渡辺曜の誕生日です。今日は卒業した果南ちゃん、ダイヤさん、鞠莉さんと同級生の千歌ちゃん、梨子ちゃん、そして後輩たちとグラウンドでサッカーする約束をしており、今まさにグラウンドでミニゲームをしていた。

果南：「曜！千歌！梨子！決めて！」

果南ちゃんからのパスが梨子ちゃんに通る。

梨子：「行くわよ！千歌ちゃん！曜ちゃん！」

梨子・千歌・曜：「「ザ・フェニックス・V3」!!」

三人が一点を交錯して生み出された炎が不死鳥となり雄叫びをあげる。

曜：「ヨーソロー!!」

ドガアアアアアン!!

後輩1：「旋風陣・改」!!

逆立ち状態で高速回転してその回転の中にボールを巻き込み威力を削ろうとするがほとんど削れず尚もシュートは進む。

鞠莉：「アスタリスクロック・G5」!!」

鞠莉ちゃんのブロック技で発生した6つの岩石が多方向からシュートを押し潰してブロックして不死鳥を止めた。

鞠莉：「この程度のシュートじゃあまたリニューヤに手も足も出ないデースよ!!」

ダイヤ：「その通りですわ。果南さんの彼氏の神奈川の<竜星学園>のストライカー、そして私たちがFFIで共に闘った日本の絶対エース「大海龍也」さん。彼を止めない限り浦の星の優勝はありませんわ。一年生も冬の選手権、そしてFFIを見ていた方は彼の实力を知っているでしょう?」

一・二年生：「はい!」

果南：「じゃあ再開しようか。」

次はダイヤさんチームと鞠莉さんチームのゲームになり、

ダイヤ：「ダイヤモンドレイ・V3」!!」

ドツガアアアアン!!

花丸：「シュートイーター・G5」!!」

花丸ちゃんの右手にエネルギーボールが生み出され、それをシュート目掛けて投げつけるとエネルギーボールがシュートを包み込む様に覆い、威力を弱めていく。

バギアアアアアン!!

ダイヤモンドレイはゴールに吸い込まれていった。

花丸：「やつぱりダイヤモンドレイは止められなかったぞら。」

ルビィ：「でも花丸ちゃん技のパワーだいぶ上がったよね!!」

花丸：「でも間違いなく今のマルじゃあ龍也さんのシュートは止められないぞら……。」

果南：「大丈夫だよ花丸ちゃん。焦らずに努力を重ねていけば必ず力になるから!!」

花丸：「果南さん……はい!!」

果南：「じゃあゲームはここまでにして十千万行こうか!!」

そして千歌ちゃんの実家の温泉旅館「十千万（とちまん）」で私の誕生日を皆が祝ってくれた。

千歌：「ハッピーバースデー曜ちゃん!!」

曜：「ありがとう千歌ちゃん!!」

果南：「はい！これは私たち卒業生から。」

曜：「私が欲しかったけど高すぎて買えなかった限定品のスパイク!!しかもプレミアモデル!!?それ確か65,000円だった筈だよ!」

鞠莉：「曜？私たちはもう就職して働いてるのデスよ?」

ダイヤ：「それに三人ともプロになりましたし割り勘にすれば高い買い物ではありません

せんわ。」

ルビィ：「鞠莉さんがイタリアリーグの「フィオン〇エ」お姉ちゃんと果南さんが日本リーグでお姉ちゃんが「清水ファルコンズ」、果南さんが「アス〇クラ〇〇津」ですよね？」

果南：「うん。来年になったら龍也も入ってくるし楽しみだよ。」

ダイヤ：「まだ4月ですよ!?!もう入団内定出てるんですの!?!」

果南：「うん。なんか龍也が「果南と同じチーム以外お断りだ」って言ったらしくてね。沼津に即決で決まったらいい。」

花丸：「でもなんで果南さんは沼津にしたずら?もっと実力上位のチームでもやれた筈ずら。」

果南：「沼津なら練習場まで家から通えるしね。何より家の店と内浦の海から離れたくなかったから。」

鞠莉：「さすが海バカね!!」

果南：「誰が海バカよ失礼な!!」

梨子：「話が脱線しちゃったけどこれは私と千歌ちゃんの三年生から。」

曜：「あつ!サツカーボールにパワーアングル!!」

千歌：「曜ちゃんのボールポロポロだったしね。それにパワーアングル足につけてれ

ば日常生活してるだけで筋トレになるよ!!」

曜：「ありがとう千歌ちゃん梨子ちゃん!!」

花丸：「これはマルたち二年生全員からずら。」

ルビィ：「練習ウエアとソックスと試合用の脛当てです。」

曜：「ありがとう皆!大切にするね!!」

一年生：「渡辺先輩!これ私たちからです!!」

曜：「ありがとう!凄く嬉しいよ!!」

志摩：「皆々?ご飯出来たわよ?」

千歌：「分かったー!!皆準備手伝って!あつ、曜ちゃんは座っててね?今日の主役なんだから!!」

曜：「あはは・・・分かった。」

そして準備が整い、

千歌：「じゃあ曜ちゃんの誕生日を祝って、乾杯!!」

全員：「乾杯!!!」

そして皆で料理を食べながら浦女サッカー部のこれからを話したりや卒業生の近況報告を聞いたりして、その日はお開きになった。



|  
曜  
ち  
ゃ  
ん  
  
H  
a  
p  
p  
y  
  
B  
i  
r  
t  
h  
d  
a  
y  
  
|

## 〈西木野真姫〉誕生日編：思い出

F F I が終わり六年後、私は医者になるため医大へと進学し、今日は私の誕生日で久しぶりに音ノ木坂サッカー部の皆で集まろうと言う話になっていた。

真姫：(F F I には私は選手には選ばれなかったけどチームドクターに抜擢されたパの助手として参加したのよね・・・)

あの時得た経験は確かに今の私の役に立っている。私は懐かしみながら母校である音ノ木坂の門をくぐった。

— 音ノ木坂学院・グラウンド —

真姫：「皆！もう来てたのね。」

凜：「あつ！真姫ちゃん！真姫ちゃん!!!」

ハグウツ

真姫：「ちよつと！苦しいわよ凜？果南さんじゃないんだから!!」

絵里：「ほら凜、真姫が困ってるわよ？」

真姫：「べ、別に困ってはいないけど・・・。」

穂乃果：「じゃあ揃ったし、サッカーしようか!!」

ことり：「ふっふっふ。その事について皆に話があります！なんとママが連絡を取ってくれてUTXの卒業生と試合することになりました〜!!」

音ノ木サツカー部：「「えー！？」」「」

その時、

？：「穂乃果さん!!」

ドツガアアアアン!!

穂乃果：「え？うわっ!？」

バシイッ シュルルル

花陽：「ツバサさん！英玲奈さん！あんじゅさん!!」

英玲奈：「久し振りだな皆!!」

にこ：「凄いわね。相手にとって不足なしだわ!!」

希：「ウチも久しぶりにスピリチュアルに行かせて貰うで!!」

フミコ：「それで審判は？」

龍也：「俺だ!!」 シュタッ

真姫・穂乃果：「「大海さん（くん）!!」」

龍也：「初めましてのヤツも居れば久し振りのヤツも居るな。今日審判をやらせて貰う大海龍也だ。じゃあ早速始めるぞ。位置につけ!!」

そしてポジションにつき、

龍也：「開始!!」ピーー!!

ソコからは前半後半共に点の取り合い、必殺技の応酬の本気の勝負だった。

海未・凜：「「ブラックドーン・V3」!!」

英玲奈：「「ドリルスマッシュャー・V3」!!」

〽 〽 〽 〽 〽 〽

絵里：「「ノーザンインパクト・V3」!!」

英玲奈：「「ハイビーストフアング・G5」!!」

〽 〽 〽 〽 〽 〽

ツバサ・メンバー1：「「炎の風見鶏・V3」!!」

希：「「真・時空の壁」!!!」

結果は<音ノ木坂>5 ー 5<UTX>の引き分け

凜：「あー!引き分けにやー!?!」

ツバサ：「でも皆さすがね。全く衰えてない様で安心したわ。」

花陽：「絵里ちゃんとツバサさんとあんじゅさんは海外リーグだもんね。」

真姫：「皆！今日はありがとう！楽しかったわ!!」  
にこ：「じゃあ記念に皆で写真撮るわよ。」

龍也：「じゃあ俺が撮るよ。ほら西木野！今日の主役なんだからセンター行く!!」

真姫：「ヴェエエ!? 良いわよ別に！」

凜：「真姫ちゃん！速く来るにゃー!!」

真姫：「もう。」

龍也：「撮るぞー!!」カシヤッ

真姫：「ありがとう。」

龍也：「じゃあ今日は帰るよ。奥さん待つてるし。」

真姫：「果南さんに宜しくね。」

そしてその日はお開きになった。

— 真姫ちゃん Happy Birthday —

## 第41話：記者会見

円堂：「記者会見？」

マネージャー：「そう。先に終わったDブロックの決勝トーナメント進出を決めたブラジルとコトアールの記者会見がタイタニックスタジアムであるそうだから相手を知る意味で行って見たらどうかなくて」

にこ：「コトアール？ Dブロックには他にフランスやドイツがいたはずよ？」

鬼道：「気になるな。そのコトアールと言う国」

円堂：「監督!! 行っても良いですか？」

久遠：「・・・午後の練習もあるから昼飯迄には帰ってこい」

ツバサ：「分かりました」

そして俺たちはタイタニックスタジアムへ向かった。

く　く　く　く　く　く　く　く

風丸：「あつ!? 財前総理!!」

この人!! 日本の内閣総理大臣、「財前宗助（ぎいぜんそうすけ）」さん!!

財前：「やあ円堂くん、豪炎寺くん、鬼道くん、風丸くん、吹雪くん、綱海くん。三年

前は君たちには世話になったね。本当なら君たちの中学卒業式に私が祝いの言葉を送りたかつたんだが、側近に「特定の学校を鼻負していると思われる」と止められてしまつてね」

鬼道：「いえ、賢明な判断だと思います」

円堂：「あつ、総理!! 搭子は元氣にしていますか?」

財前：「ああ。代表候補にすら選ばれなかつたのが余程悔しかつたみたいで毎日猛練習してるよ。それに、私も娘と平和に過ごせる時間が楽しくてね。よく搭子の練習に付き合ってるよ」

曜：「でも何で総理大臣が居るんですか? よく見るとアメリカのケイン大統領や他の国の首脳陣の方々までいらつしやるし」

財前：「そりゃあこの会見の主催が「ガルシルド・ベイハン」氏だからね。来ないわけにはいかないさ」

果南：「ガルシルド?」

野坂：「オイルカンパニーと言う会社と、油田を世界に幾つも持っている世界の富豪ですよ。確かこの大会の実行委員長とブラジル代表監督を兼任していた筈です」

財前：「残念ながらこのF F Iが始まつてから、国同士のいがみ合いが増えていてね。だが私はサッカーの持つ力を信じている。人々に夢や喜び、希望を与え国籍や人種を問

わず皆を笑顔にしてくれるスポーツだとね。おつ、始まるみたいだよ」

司会：「お待たせしました。それではこれよりブラジル代表「ザ・キングダム」とコトアール代表「リトルギガント」の記者会見を行います。先ず最初にブラジル代表監督ガルシルド・ベイハンさん宜しくお願いします」

ガルシルド：「皆様、本日はお集まり頂き真にありがとうございます。このFFIは、私の愛するサッカーを通じて、「世界平和」を目指し開催した物です。これからの試合も、選手と選手の真剣勝負を楽しんで頂ければと思います」

司会：「ありがとうございます。続きましてブラジル代表キャプテン「マック・ロニージョ」選手、お願いします」

ロニージョ：「はいー」

記者：「ロニージョ選手、貴方はブラジル史上最高、「キング・オブ・ファンタジスタ」の異名を持っていますが、これについてはどう思いますか？」

ロニージョ：「たいへん榮譽ある異名だと思います。しかし、何も俺は自分一人の力でここまでの選手になれた訳ではありません。支えてくれた家族、苦楽を共にしたチームメイト、そしてファンの皆様の応援があつて今の俺がいます。これからの試合も皆様や破つて来たチームの方々に恥じぬ様全力で闘い抜くので応援宜しくお願いします!!」

千歌：「？ キャプテン？ どうしたの？」



円堂：「見てるだけで分かる。アイツ・・・何かスゲエ!!」  
司会：「ありがとうございます。尚コトオール代表ですが、欠席のため会見を終了させていただきます」

海未：「ブラジル代表、凄そうでしたね」

円堂：「ああ。俺たちも必ず勝ち上がるぞ!!」

イナズマジヤパン：「おう!!」

？：「おい!! そっちには居たか!？」

？：「いや居なかった。向こうを探そう!!」

ことり：「ん？ 何か騒がしいね？」

円堂：「あのスミマセン、何かあったんですか？」

？：「子供には関係無い!! 黙ってる!!」

龍也：「ああ!?! なんだとテメエ!!」

おじさん1：「止しな君たち!! ガルシルド氏のSPはいつもあんな感じだよ」

おじさん2：「最近じゃあ、石油の値段が上がり続けているのはガルシルドのせいだって噂もあるし、ピリピリしてるのかも」

SP：ギロツ

おじさん1：「おっと、君たちも早く帰ったほうが良いよ？」

穂乃果：「ねえ、もう帰ろう？ 何かヤダよ」

あんじゅ：「そうねえ」

綱海：「そうだな。帰ろ帰ろ」

そして俺達が会場を出ると、

？：「おお、お前さん久し振りだな」

円堂：「あーっ！っ！！ イギリス戦の時スタジアムで会った赤キャップのおじさん！！」

吹雪：「キャプテン、この人誰？」

円堂：「エドガーのシュートが止められなくて焦ってた俺にアドバイスしてくれたんだよ。あの言葉が無ければ「イジゲン・ザ・ハンド」は思い付かなかった」

赤キャップのおじさん：「なに、結果的にそうなたただけだ。それより聞きたいことがあるんだが……」

円堂：「何ですか？」

赤キャップのおじさん：「出口はどっちだ？」

円堂：「あつちです。一緒に行きますか？」

赤キャップのおじさん：「おお、ではお言葉に甘えんとするかな」

くくくくくくくく

？：「上手く逃げられてしまいましたねえ」

? : 「やはりあの方の周りを探っているのでしょうか?」

? : 「あの男の正体が我々の想像通りならそうでしょうね。内密に事を進めなさい」

? : 「ハッ!」 シュンッ

そしておじさんと別れイナズマジャパンは宿舎に戻った。

— 続く —

## 第4 2話：予選リーグ最終戦に向けて

〽 オルフエウス side 〽

システイ：「えっ!? キャプテンが帰って来る!？」

ブラージ：「本当かフィデオ!!」

フィデオ：「ああ。それで日本戦までの練習メニュー何だが・・・」

オルフエウス：「!!!?」

トニー：「本当にキャプテンがそんなメニューにしると?」

ユリウス：「一体どんな意味が?」

アンジェロ：「でもやろうよ!! キャプテンが、意味の無い事を言った時なんて無かつ

たじゃないか」

鞠莉：「そうね。やりましょう!!」

〽 オルフエウス side out 〽

鬼道：「不動行くぞ!!」

不動：「ああ!!」

鬼道・不動：「「キラールズ・V3」!!」

二人の挟み込むようなボールに対するインパクトで発生した衝撃波でDFを吹き飛ばし、

鬼道：「南！」

ことり：「行きます!!」「イカロスフオール・V3」!!

ジュオオオオオオ

円堂：「イジゲン・ザ・ハンド・改」!!

ドゴオオオオオ シュンシュン ギューン

ことり：「止められちゃったかあ……」

龍也：「まだ一段階進化しただけなのに凄く強くなったな「イジゲン・ザ・ハンド」

円堂：「ああ!」「真」まで進化した時が楽しみだぜ!!」

果南：「私も行くよ!!」「激流ストーム・G5」!!

円堂：「イジゲン・ザ・ハンド・改」!!

今度は果南がシュートを放つ。円堂も「イジゲン・ザ・ハンド」で対抗。果南のシュートはドーム状のバリアの上を滑りゴールの枠の外へと逸れて行った。

龍也：「へえ?」 果南のシュートも止めたか

ツバサ：「じゃあ次は私ね!!」「真・ゴッドノウズ」!!

円堂：「イジゲン・ザ・ハンド・改」!!

今度は最終進化しているツバサの「ゴッドノウズ」。しかしこれも枠外へと逸れて飛んで行った。

ツバサ：「止められた……」

龍也：「じゃあ次俺な。」「剣撃乱舞・V3」!!」

ドガアアアアアアン!!!

円堂：「止める!!」「イジゲン・ザ・ハンド・改」!!」

今度は俺のシュート。円堂も三度「イジゲン・ザ・ハンド」を放つが、ドーム状のバリアは叩き割られる、シュートはゴールに突き刺さった。

円堂：「大海のシュートはまだ無理か」

穂乃果：「キャプテン、次私もお願い!!」「プロミネンスドライブ・G5」!!」

円堂：「イジゲン・ザ・ハンド・改」!!」

今度は高坂のシュート。燃える太陽のシュートが激突するが、「プロミネンスドライブ」はコースを逸らされ飛んで行った。

海未：「じゃあ次は私です!!豪炎寺さん、吹雪さん!!」

海未・豪炎寺・吹雪：「「スペースペンギン・V2」!!」「」

ドガアアアッ!!

円堂：「ネオジャパンの時の!?」「イジゲン・ザ・ハンド・改」!!」

一体いつの間に練習していたのか、豪炎寺と吹雪をパートナーにした「スペースギン」が円堂に襲い掛かるが、円堂はこれもコースを逸らして止めて見せた。

海未：「止められましたか……」

龍也：「なあ？　今思い付いたんだけどさ、ネオジャパン見たいに他の選手の技を習得するとかどうだ？　渡辺に「激流ストーム」とか、高海に「ライトニングアクセル」とか教えてさ。その方が戦術の幅も広がると思うんだよ」

曜：「私が果南ちゃんの技を？」

龍也：「ああ。渡辺の水に対する理解とイメージ、そしてキック力があればできると思うし、何より渡辺はシュート技を持つてないだろ？　高海もスピードとボールコントロール力あるから「ライトニングアクセル」できると思うし、何よりMFなのにドリブル技が無いのは致命的だろ？」

千歌：「なるほど」

龍也：「各自自分に足りない技術を持っている選手から教わって、後は自分の技のレベルアップだな。イタリア戦まで時間無いんだから気合い入れて行くぞ!!」

イナズマジャパン：『『オオooooooooooooッ!!!!』』

そうして渡辺は果南から「激流ストーム」

高海と高坂は綺羅から「ライトニングアクセル」

鬼道、不動、野坂は鹿角から「氷の矢」

矢澤は豪炎寺から「爆熱スクリュー」

果南と南と吹雪は風丸から「スピニングフェンス」

綱海は果南から「ウオーターベール」

鹿角は吹雪から「オーロラドリブル」

豪炎寺は矢澤が新たに会得した「スーパーエラシコ」

佐久間は野坂から「スカイウオーク」

黒澤は高坂から「ダンス・オブ・サラマンダー」

を教わることになった。

— 続く —



## 第43話：特訓だ!!

ツバサ：「千歌さん、穂乃果さんもつとスピードを意識して!! 尚且つこぼさない様  
ボールコントロールは的確に!!」

千歌・穂乃果：「はい!!」

風丸：「複数の竜巻を壁にするイメージだ。まずはそのイメージを形にする所から始めよう」

ことり・果南・吹雪：「「分かった!!」「」

にこ：「豪炎寺、この技は空中での高度なボールコントロールと足さばきが要求されるわ。後は空中で左右への重心移動を滑らかかつスピーディーに!!」

豪炎寺：「分かった。矢澤は跳ぶ時の体の捻りをもう少しだけ抑えろ。あまりに回転が速すぎると上手く蹴れないぞ。後は炎を足を中心に体にも纏わせるイメージだな」

にこ：「了解よ」

聖良：「ボールに冷気を込めて凍らせより鋭くすることが出来なければこの技は成立しません。まずはそこから始めましょう」

鬼道・不動・野坂：「「分か（りました。）った。」」

龍也：「皆頑張ってるなあ・・・」

あんじゅ：「大海くんは良いわよね。一度見ただけで使えるんだから」

龍也：「うるさいなあ・・・だから俺は新技作ってるだろ!？」

円堂：「大海ー!! 来い!」

龍也：「分かったー!! 行くぞー!!」

俺がシュート体制に入ると空に雷雲が出現。そして「エターナルブリザード」の要領で凍らせたボールは雪の竜巻に乗り上空へ。そのボールを跳んだ俺がオーバーヘッドで蹴った瞬間ボールめがけて雷雲から雷が直撃し凍ったボールに雷属性をプラスする。

龍也：「フリーズゲイザー」!!」

ドツギユオオオオオオン!!

円堂：「イジゲン・ザ・ハンド・改」!!」

ドゴオオオオツ パキパキパキ

ボールがバリアに激突した瞬間、氷がバリアのエネルギーの流動そのものを凍らせて脆くなった所を雷のパワーが叩き割った。

バリエイイイイイン!!

円堂：「くつそ!! 無進化でこれかあ・・・」

龍也：「よし。これなら行けるだろ!!」

立向居：「龍也さん、俺も受けてみたいです。お願いします!!」

龍也：「行くぞ立向居!!」「フリーズゲイザー!!」

立向居：「魔王・ザ・ハンド・G2!!」

俺が必殺シュートを放つと、立向居は魔王のオーラを呼び出して両腕をシュートに突き出す。立向居も必死に堪えるが……

ギャルルルルルル バチイイイイン!!

シュートは立向居を弾き、ゴールに突き刺さった。

円堂：「凄いやないか立向居!! 半分止めかけてたぞ!?!」

龍也：「多分技の性質上の相性が良かったんだと思う。たぶん「フリーズゲイザー」に限れば「イジゲン・ザ・ハンド」より「怒りの鉄槌」の方がいいと思う。氷属性のエネルギーを叩き割って雷属性のパワーを押さえ込む感じだな」

円堂：「なるほど」

穂乃果：「出来たー!!」

龍也：「お? もう出来たのか!!」

円堂：「高坂、「ライトニングアクセル」出来たのか?」

穂乃果：「うん!! 自分でもビックリだよ!!」

龍也：「やるじゃん」

豪炎寺：「俺も出来たぞ」

立向居：「豪炎寺さん「スーパーエラシコ」出来たんですか!？」

豪炎寺：「ああ。俺は矢澤の指導に専念するよ」

風丸：「南も出来たぞ。でも松浦と吹雪はまだだ」

聖良：「不動さんが一番先に「氷の矢」を習得しましたよ?」

龍也：「さすがだな不動!!」

不動：「へっ、当然だろ?」

曜：「うーん? もう少しな気がするんだけどなあ?」

ダイヤ：「穂乃果さん、出来たなら私に「ダンス・オブ・サラマンダー」教えてください  
い!!」

穂乃果：「あっ、うん。分かった!!」

そして4日間の練習の末、全員の技伝授そして伝授技の一段階のレベルアップが完了し、その日の夜のミーティングで……

久遠：「特訓の成果は在った様だな。では明日のイタリア戦のスタメンと登録メンバーを発表する。」

F W 大海 豪炎寺

M F 矢澤 鬼道 松浦 渡辺

## 園田

D F 不動 鹿角 風丸

G K 円堂

控えは立向居、優木、南、綺羅、高坂で行く」

久遠：「不動はボールを取ったら習得した「氷の矢」で迷わず前線に繋げ。鹿角と高坂はパスが難しいなら新たに覚えたドリブル技で持ち込め。渡辺はやや下がりがみだがチャンスだと思えば迷わず攻める。今のお前はシュート技を持っているイタリアの度肝を抜いてやれ。そしたら豪炎寺と大海は出来る限りのシュートチェイン、そして園田は後方支援。お前は誰とでも「エボリューション」や「スペースペンギン」を合わせられるよう練習を積んで来た。期待している」

イナズマジヤパン：『『はい!!!』』

久遠：「豪炎寺、高坂、高海に突破力。矢澤、渡辺に決定力。南、松浦、にディフェンス技と言う手札が加わり更に闘い易くなった筈だ。ここぞと言う場面では迷わず技を使え。イタリアは強い、だがここで勝てなければ決勝トーナメント進出は難しい。勝つぞ!!」

イナズマジヤパン：『『はい!!!』』

そして次の日、イタリア戦の朝を迎えた。

—  
続  
く  
—

## 第44話：数日前に遡り・・・

） 数日前 ）

） ファイデオ side ）

ファイデオ：「キャプテンから送られてきたビデオ：「日本vsロシア」？ 日付は：

50年前？」

俺は取り敢えずビデオを見る事にした。

ファイデオ：「・・・？ ・・・!? なんだこの選手は!? 日本にこんな選手が

居たのか!? 名前は・・・「影山東吾（かげやまとうご）」？ 影山って・・・」

このプレーをマスター出来れば、ミスターK貴方を闇の中から救えるかもしれない!!

） 次の日 ）

ミスターK：「次」

ドンドンドン

マシンからボールが連続で不規則に打ち出される。俺たちはドリブルしながらボールの雨を掻い潜り突破する練習をしていた。

ダンテ：「くっ！」 ドカアッ

ダンテ：「ぐわあっ!!」

ミスターK：「次」

ドンドンドン

システイ：「くっ、ふっ!! もう少s・・・」ドガアツ

システイ：「キャアア!!」

ミスターK：「次」

ファイディオ：「はい！」

ドンドンドン!

ファイディオ：「ふっ、はっ、くっ!!」

ブラーヂ：「行けそうだぞ!!」

ミスターK：「・・・んん？」

ドカアツ!!

ファイディオ：「ぐあっ!!」

ミスターK：「もういい。ここ迄だ」

ユリウス：「おい待てよ!!」

ミスターKは黙ってその場を後にした。

トニー：「何なんだアイツ!! こんな訳の分からない練習して一体何になるって言う



んだ!!」

ルミア：「システイ大丈夫？」

システイ：「ええ・・・」

ファイディオ：「俺はもう少しやるよ。マシンを頼む」

ブラージ：「本気かファイディオ!!? この練習になんの意味があるって言うんだ!! も

しかしたら、俺たちを潰す為かもしれないんだぜ!」

ファイディオ：「アンジエロ、ダンテ、頼む」

アンジエロ：「わ、分かった」

ダンテ：「仕方無いな」

ブラージ：「一体どうしたって言うんだ・・・ファイディオ・・・」

く く く く く く

く 日本代表練習グラウンド く

果南：「明後日はいよいよイタリア戦だけど・・・システイ達大丈夫かな」

龍也：「何だ果南、ファイベルと仲良くなったのか？」

果南：「うん。でも友達って言うよりライバルって意味合いが強いと思う」

龍也：「? それを言ったら他の国だって・・・サツカーのライバルじゃないよ・・・」

へ?」

果南：「はあ。本当に他人の気持ちには鈍感なんだね」

龍也：「はい？」

果南：「1つ言えるのは、システイだって女の子だって事だよ」

龍也：「そりやそうだろうどっから見ても女の子だし」

果南：「そういう意味じゃない!!」ゴチン!!

龍也：「痛つてえ!! 急になんだよ!!」

果南：「凄く殴りたくなつた。まつたく!! 乙女心を弄ぶ男は馬に蹴られて死ぬと良いよ!!」

龍也：「何だよまつたく・・・でも、確かにそんな男は痛い目を見た方が良いと思うけどな」

果南：「ハア・・・ダメだこりや。じゃあ龍也に聞くけど、龍也は私のこと好き？」

龍也：「大好きだ」

果南：「そこはブレないんだ・・・。じゃあその好きはチームメイトとして？ 一人の女の子として？」

龍也：「一人の女性として」

果南：「っ!?! / /」ボツ!

龍也：「どうした果南？ 照れてんのか？ 可愛いヤツめ。」ウリウリ

果南：「う、煩い!! とにかく、ここまで言えば分かるでしょ!」

龍也：「? あつ、もしかしてフィーベルって・・・」

果南：「やつと気付いた?」

龍也：「好きな男子がいるから男目線のアドバイスが欲しいから協力してくれって事か!!」

バシイイーーン!!

龍也：「へぶうっ!!」

果南：「もういい!! (システイゴメン。正々堂々勝負しようって言ったのにウチのバカが・・・)」

ことり：「大海くん?」

龍也：「へ? おおう!? 女子全員揃ってそんな怖い顔してどうした?」

イナズマジヤパン女子：「「「「「「「最っ低!!」」」」」」」

龍也：「何で!?!」

鬼道：「大海・・・」

龍也：「あつ? 鬼道タスケテ!!」

鬼道：「あれは無いと思うぞ。誰が見てもお前が悪い」

龍也：「え!?!」

それから試合までの間、俺に対して女子が凄く冷たくなった。

龍也：「何で——————!？」

—— 続く ——

## 第45話：闇からの解放

く コンドル島・コンドルスタジアム く

実況：「お待たせしました!! いよいよ日本代表イナズマジャパン vs イタリア代表  
オルフェウスの試合が始まります!!」

円堂：「フィディオ……」

フィディオ：「……」

果南：「システイ……」

システイ：「手加減はしないよ!! 果南!!」

果南：「っ! うん!! 真剣勝負だよ!!」

く く く く く く

ミスターK：「試合が始まったら、大海龍也と松浦果南を潰せ」

システイ：「ふざけないで!! そんなこと出来る訳ないでしょ!？」

ブラージ：「言っておくが、イタリア代表にそんな卑怯なやり方に加担する様な奴は一人も居ない!!」

フィディオ：（ミスターK……そんなことをせずとも、俺が何とかします）

〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

審判：「それでは試合を始めます!!」

フォーメーション

イタリア

G K

ブラーヂ (男)

D F

ルミア (女)

システイ (女)

鞠莉 (女)

オットリ (男)

M F

アンジェロ (男)

ダンテ (男)

ユリウス (男)

マルコ (男)

F W

トニー (男)

フィディオ (男)

日本

F W

豪炎寺 (男)

大海 (男)

M F

矢澤 (女)

鬼道 (男)

松浦 (女)

渡辺 (女)

ボランチ

園田 (女)

D F

不動 (男)

鹿角 (女)

風丸 (男)

G K

円堂 (男)

ピーーーーーー!!

試合開始のホイッスルが鳴った。するとフィディオは誰も予想していなかった行動

に出たんだ。

ミスターK：「な、何だこれは!？」

ファイディオ：「思い出してくださいミスターK!! 貴方はサッカーを、誰よりも愛している筈だ!!」

影山：「このプレーはまさしく私の父のプロ時代のもの。私が憧れた父のプレーそのものだ。」

そしてファイディオの狙いは、かつて影山にサッカーを教えられ何度もビデオを見せられたこの男には直ぐに分かった。

鬼道：「まさかファイディオは幼い頃、影山が憧れていた父のプレーを再現することで奴の中に眠るサッカーへの気持ち呼び起こそうとしているのか……。ファイディオ!

その行動、俺にも手伝わせてくれ!!」

ファイディオ：「鬼道?」

鬼道：「甘い事は分かっている。だがそれでもあの人は俺にサッカーの楽しさを教えてくれた恩師なんだ!!」

ファイディオ：「分かった!! 頼むよ鬼道!!」

それから鬼道とファイディオの鏖迫り合いが始まった。ボールを奪つては奪われオフェンス、ディフェンス交互の繰り返し、フェイクと先読みの応酬。しかしそれは影山

の一言で終わった。

ミスターK：「止めろ!! どういうつもりだファイデオ!! 私は言った筈だ。どんなことをしても勝てと!! 私は・・・勝ちたいのだ・・・」

響木：「泣いているのか・・・あの影山が・・・」

影山：「ファイデオ、私の父の真似はもういい」

ファイデオ：「ミスターK?」

影山：「私も・・・久し振りに、「サッカー」がやってみたくなくなった。勝つための指示を出す。着いてこいオルフェウス!!」

ファイデオ：「はい!!」

鬼道：「それが本当の貴方なのですな。影山総帥」

影山：「フフフしかし、それでも私は勝てるぞ? 鬼道お前に私が越えられるかな?」

鬼道：「越えて見せます!!」

トニー：「どうなってるんだい? ミスターKのヤツ、別人の様に生き生きとしてないかい?」

ルミア：「もしかしたら、これがミスターKの本来の姿なのかも」

システイ：「そしてファイデオだけは、それに気づいてたのね」

響木：「影山にかかった呪いが解け、奴は真に勝利を求める本物の戦士となった・・・」



これは手強いぞ。全力で迎え撃て!! 大海!! 鬼道!! 円堂!!」

龍也・鬼道・円堂：「「はい!!」」

システイ：「ダンテ!!」

にこ：「行かせないわ!!」

ダンテ：「エコー・・・」

影山：「ダンテ!! 逆サイドのマルコがフリーだ!! パスを出せ!!」

マルコ：「こつちだ!!」

ダンテ：「面白い!! マルコ!!」

マルコ：「つと! ナイスパス!!」

果南：「行かせない!!」 「スピニングフェンス・改」!!」

マルコ：「うわっ!? それは風丸の!!」

そこからは監督の指示のもと激しい攻防が続き前半は同点のまま残り時間はあとわずか。

久遠：「松浦!! 渡辺がフリーだ!!」

果南：「曜!!」

そしてここでボールは渡辺に繋がる。

システイ：「ブラーッ!! その子はシュート技を持ってないわ!! 止めて!!」

ブラージ：「任せろ!! 来な!!」

曜：「ふっ!! はあああああ!!」

渡辺がシュート体勢に入ると、渡辺の回りを激しい水の竜巻が包みぐんぐん上昇。その水流エネルギーを纏ったボールをイタリアアゴールめがけて蹴り落とした。

曜：「激流ストーム・G2」!! ヨーソロオオオオオオオオ!!」

ドツパアアアアアア!!

システイ：「そんな!? それは果南の!?!」

ブラージ：「くっ!!」「コロッセオ・・・」うわああああ!!」

バシユウウン

相手の不意を突いた渡辺のシュートは相手の反応を送らせ、キーパー技が完全に発動しきる前にゴールに突き刺さりここで前半終了。

イナズマジヤパン1ー0オルフェウス

ー 続く ー

## 第46話：覚醒のイタリア。キャプテンの帰還

前半終了のすこし前……

？：「……だよ」

？：「ここにKのおじさんとファイディオ兄ちゃんが居るの？」

？：「ああそうだよ。さあ、入ろう」

く　ファイールド　く

？：「皆、ただいま!!」

オルフェウス：『『あつ、キャプテン!!』』

実況：「おつと？　あれはイタリア代表キャプテン「ヒデ・ナカタ」です!!　ヒデは日本人ながらイタリア代表のキャプテンに選ばれた天才プレイヤーです!!　これは後半もますます見逃せなくなるぞお!!」

影山：「ナカタ、キサマ今までどこに行っていた？」

ヒデ：「片付けなきやならない用がありましたね。ほら、おいで」

影山・ファイディオ：「!?　ルシエ!!」

ルシエ：「その声!!　ファイディオ兄ちゃんとKのおじさんだ!!」

フィディオ：「ルシエ!! ひよっとして見えるのか? 手術を受けたのか!」

ルシエ：「うん!! 手術成功してね。お兄ちゃんたちの試合も観れるよ!!」

フィディオ：「良かった・良かった」

影山：「・・・帰れルシエ。ここは君の居るべき場所ではない」

ヒデ：「貴方とルシエの間にあったことなら、もうルシエ本人も知ってますよ」

影山：「!! 何だと!!」

ヒデ：「貴方は以前自分の企みに、なんの関係もない彼女を巻き込んでしまった。彼女はサッカーとはなんの関係もないのに。そして貴方はルシエが生まれつき目が見えないことを知った。手術すればもしかしたら見えるようになるかもしれない。ただ、手術にはとてもお金がかかることも。だから貴方はルシエの家族に少しずつお金を振り込む事にした。それが自分のルシエに対するせめてものケジメだと」

フィディオ：「・・・・・・・・」

影山：「お前はそんなことを調べる為に今までチームを離れていたのか?」

ヒデ：「いえ、旅の途中で偶然知ったんです。俺はそんなお人好しじゃありません。それに貴方は三年前、あの円堂守という少年に出会ってから、サッカーに一筋の希望を見出し始めていた。貴方がどれだけ卑怯な手を使ってもそれを真正面から正々堂々戦って打ち破る彼らの姿を見て。貴方はもう、自分の犯した罪から逃げる事はない」

ルシエ：「おじさん！ 私、ファイデオ兄ちゃんやおじさんのサッカーが見たいよ！！ 私まだ少しだけど、サッカーのお勉強したんだよ！！」

影山：「……ルシエ、最後までしつかり見ていきなさい。私の最後のサッカーを……私が……生涯をかけて憎み、愛したサッカーを。」

ファイデオ：「それで、キャプテンは試合に？」

ヒデ：「ああ。久し振りに思い切りボールを蹴りたい気分なんだ。相手は日本代表、不足は無い！！ 勝つぞ……皆！！」

オルフェウス：「『はい！！』」

円堂：「俺たちだって敗けるもんか！！ 行くぞ！！」

イナズマジヤパン：「おう！！」

フオーメーションチェンジ

イタリア

G K                      ブラージ (男)

D F   ルミア (女)   システイ (女)   鞠莉 (女)   オットリ (男)

ダンテ (男)

M F                      アンジェロ (男)   ヒデナカタ (男)   ユリウス (男)

F W                      トニー (男)   ファイデオ (男)

審判：「それでは後半戦を始めます!!」

ピーーーーー!!

審判のホイッスルと共に後半戦開始。すると開始直後にヒデにボールを奪われてしまふ。

ヒデ：「もらつた!!」

豪炎寺：「何!?!」

龍也：「行かせねえ!!」

やばいと直感し急いで俺がディフェンスに入る。するとヒデは動きを止めて……ヒデ：「大海龍也、君との対決を楽しみにしていた。行くぞ!!」

龍也：（ルーレットか！ もらつ……）スカッ !?

実況：「抜いたあああああ!!!」 あの大海龍也が抜かれたあああ!!!」

果南：「止める!! 鬼道くん!!」

ヒデ：「……」 クンツ スルツ ギユンツ!!

鬼道：「なに!?!」

海未：「止めます!!」 「エアバレット・V3」!!」

ヒデ：「必殺技か……だが!!」 ギユン!

海未：「嘘です!! 幾らなんでも速すぎます!?!」

ヒデ：「行くぞ！」

圧倒的なテクニックで俺を含む四人をあつという間に抜き去ったヒデ。そのまま必殺シュートの体勢に入る。

円堂：「来い！」

ヒデ：「はああああああ!!」 「ブレイブショット・改」!!」

ドツガアアアアアアン!!!

風丸：「嘘だろ!?」 「なんだこのパワー!?!」

聖良：「止めます!!」 「スノーマウンテン・V3」!!!

ドガアアアアアアツ!!!

聖良：「ぐううううう!!」

鹿角が必殺技でシュートブロックに入るが今にも吹き飛ばされそうだ。

不動：「風丸!!」 「鹿角を支えろ!!」

風丸：「分かった!!」

ガシ!!」 「ガシツ!!!」

鹿角を後ろから風丸と不動が支えて堪える。鹿角の後退は何とか止まった。

聖良・不動・風丸：「「はああああああ!!」!!」!!」

ビシツ!」 「バキヤアアアアン!!」

聖良・不動・風丸：「「うわあああああ!!!」」

しかし技の方に限界が来て「スノーマウンテン」は粉々に砕かれてしまい、シュートは尚も突き進む。

円堂：「止める!」「イジゲン・ザ・ハンド・改!!」

円堂も現時点での自身の最強技、「イジゲン・ザ・ハンド」を放つ。しかし明らかに止めるには出力が足りない。

円堂：「そんな!! 威力が落ちて、まだこんなパワーが!?!」

そして「ブレイブショット」は「イジゲン・ザ・ハンド」を叩き割り、ゴールネットに轟音と共に突き刺さった。

実況：「ゴオオオオオオオオオオ!! イタリア同点!!」

豪炎寺：「どうする? ヒデを止めるとか、ちよつと思いつかないぞ!?!」

龍也：「はあ、これだけはやりたくなかったんだけどこんな状況じゃあ仕方無いか」

果南：「!? 何か方法があるの!?!」

龍也：「ああ。あくまで俺個人だが、ヒデと対等に渡り合える方法がひとつある。けどそれでも駄目ならもうどうしようもない」

鬼道：「その方法というのは?」

龍也：「スプリントワープオーバーフロー」つまりスプリントワープの常時解放だ」



果南：「!? そんなこと出来るの!？」

鬼道：「理論上は可能だ。だが・・・」

龍也：「ああ。体力の消耗が激しすぎるんだ。それに・・・」  
にこ：「まだ何かあるの?」

龍也：「前に別の技で同じようなことをしたことがあるんだけど、そのチームのやつらは俺の力に絶望して一人残らずサツカーを辞めた。それも原因なんだ。俺が「お前とやりたくないって」言われ始めたのは。もしかしたらこの試合は勝てるかもしれない。でも・・・また!!」

果南：「ていつ!!」ピシッ

龍也：「っ痛。な、何?」

果南：「前にも言った筈だよ? 私たちはそんなに柔じゃないって。もつと私たちを信じてよ?」

鬼道：「ああ。どれだけお前が力を出しても、俺たちは全員それに答える覚悟は出来ている」

イナズマジャパン：コクッ

龍也：「皆・・・ありがとう!!」

この仲間たちを絶対に俺の手で世界の頂きへと連れていくんだ!!

—  
続  
く  
—

## 第47話：イタリア戦クライマックス!!

1 1 1の同点になりイナズマジヤパンボールで試合再開。

鬼道：「大海!!」パスッ

龍也：「!よし。」

ファイディオ：「おっと!! 君を自由にさせるわけないでしょリユウヤ!!」

龍也：（シザースから右!!）

ファイディオ：「おっと・・・!!」ガクンッ

俺はファイディオをフェイントで左右に揺さぶりファイディオの重心が左足に乗った瞬間逆方向に切り返し「アングルブレイク」を起こさせた。

ファイディオ：「くそ!!」

ヒデ：「まだだ!!」

龍也：（? 左に隙があるな・・・）

俺はダブルダッチでヒデを抜いた。が・・・

システイ：「甘いです!!」

龍也：「やはり罠か!!」

曜：（今ヒデさんから見て右後方から味方のディフェンスが来てたのを分かかって敢えてぬかせた。上手い）

システイ：「キャプテン!!」

ヒデ：「ナイスだシステイ!!」

ギユンツ!!

オルフェウス：『『!?!?』』

ヒデ：「また勝負かい？ 大海」

ファイデオオ：（でも、さつきとリュウヤの雰囲気全然違う……。それにあのスピード・・・）気をつけてくださいキャプテン!!」

ヒデ：「行くよ!!」

ギユンギユン！ クンツッ！ ギユン！ ガッ！ ザザアッ!!

ヒデ：「ほう？ まだ速くなるか。俺が抜けないなんてな」

龍也：「……………」 ユラアッ ギユン!!

ヒデ：「くっ!! ……!! ボール!!」

アンジェロ：「キャプテンがボールを奪われた!?!」

ルミア：「皆!! デイフェンス!!」

龍也：「……………」 パスッ

鞠莉：「!? この方向は!!」

パスは豪炎寺に繋がり、ルミアがディフェンスに入る。

豪炎寺：「大海!!」パスッ

しかし豪炎寺は俺へパスをリターンする。

龍也：「喰らええええええええつ!!」「フリーズゲイザー・V3」!!」

ドツギユオオオオオオオオオン!!!

ブラージ：「コロッセオガード・改」!!」

ドガアアアアアアアッ パキパキパキ

ブラージ：「ぐぐぐぐぐ．．．．!!」

ブラージのコロッセオはどんだん凍りついていき、

バリイイイイイイン!!

ブラージ：「うわああああああ!!」

実況：「ゴール!! 日本勝ち越しーーーーー!!」

イタリアボールで試合再開。

鞠莉：「ヒデ!!」

ヒデ：「ナイスだ鞠莉!!」

龍也：「オーバーフロー解放!!」

ヒデにボールが渡り、俺はすぐさまディフェンスに入る

ヒデ：「オフフェンスはさっき失敗したからな。やり返させて貰う!!」

龍也：（集中しろ!! 気を緩めるな!! 一瞬でも油断すれば一気に持つていかれる!!）

ギユン！ ザツ！ ギユングルンツ！ ザツ！

目にも止まらない技術と技術、スピードとスピードの応酬に日本もイタリアも全員が着いていけなかった。

システイ：（キャプテンも龍也さんも凄すぎる。私のレベルじゃあとてもじゃないけど着いていけない!!）

果南：（私じゃあ一生龍也には追い付けないのかもしれない・・・。けど、それでも私は、貴方の隣に並び立ちたい!!）

果南：「スピニングフェンス・改」!!」

ヒデ・龍也：「!?!」

果南は風の壁を俺の横に発生させた。ヒデの進路を少しでも限定するように。

ヒデ：「くっ!!」

龍也：（ありがとう果南!!）ギユンツ!!

俺はヒデからボールを奪った。

ファイデオ：「まだだ!!」

イナズマジヤパン：『『何!?!』』

ファイディオ：「キャプテン!!」

ヒデ：「助かったファイディオ!! 行くぞ!!」 「ブレイブショット・改」!!」  
ドツゴオオオオオオオオオ

聖良：「止める!!」 「スノーマウンテン・V3」!!」

ヒデのシュートを、鹿角がシュートブロックする。が、  
ガカアアアアアアアツ!! バリイイイイイイン!!

聖良：「きやあああああああ!!」

鹿角は呆気なく吹き飛ばされ、シュートは尚も進む。

円堂：「今度こそ止めてやる!!」 「イジゲン・ザ・ハンド・改」!!」  
ガカアアアアアツ!!

シュートは「イジゲン・ザ・ハンド」に激突。円堂も必死に耐えるが、  
バリイイイイイイン!!

円堂：「うわあああああつ?!」

ザシュウツ

シュートは、日本ゴールに突き刺さった。

実況：「ゴオオオオオオオオオオ!! イタリア同点!!」







して止まった。

ピツ、ピツ、ピーー!!

実況：「ここで試合終了のホイッスル!! 2 1 2!! 引き分けです!!」

― 続く ―

## 第48話：決着!!

イタリア戦終了のホイッスルが鳴り、俺は得点板を見た。

「日本2ー1 2イタリア」

龍也：（くそ……、最後のカウンタースhoot、あれさえ決めていれば……!!）

イナズマジヤパン：「龍也!!（大海!!）（大海くん!!）」

ドカドカドカツ!!

龍也：「へぶっ!! つつ、きつついな。まさかそこまで責められるとは思ってなかったわ」

円堂：「へ？ 責める？ ハイタッチじゃないの？」

龍也：「え……？」

鬼道：「なにをシケた顔してるんだ？ お前が居なかったら引き分けにすら出来なかつたことは皆分かってるよ。」

にこ：「つて言うか敗けた訳じゃ無いし。」

果南：「せいっぱいやった結果だもん。何一つ不満は無いよ!!」

龍也：「ああ……そうだな」

曜：「最後のカウンタースhoot、「ブレイブショット」の勢いに圧されて打ち返したあと体が後方に飛ばされてた。きつと狙いをつけて打ち返す余裕が無い程すごい威力だったんだね」

パチパチパチパチパチパチパチパチ

両チーム：『「?????」』

実況：「両チーム譲らないこの歴史に残るであろう激闘を讃え、観客から両チームの選手たちへ惜しみ無い拍手が贈られています!!」

イタリアサポーター：「スゴかったぞ日本!!」

日本サポーター：「イタリアもよく頑張った!!」

実況：「相手国のサポーターが相手国の選手へとエールを贈っています!! それだけ国籍を問わず会場を1つにした名勝負であったと言えるでしょう!!」

円堂：「アルゼンチンvsアメリカ戦の結果いかになっちまったけど勝負はお預けだ」

ファイディオ：「ああ。日本の決勝トーナメント進出を祈ってるよ!!」

円堂とファイディオは固い握手を交わした。

影山：「引き分けか・・・」

すると鬼瓦さんを初めとした警察官が入ってきた。

警察：「ミスターK！ いや、影山零治！！ 署まで同行願おうか！！」

影山：「ああ。分かった。だが、その前に、鬼道、ファイディオ、お前たちは本物だ。もしかしたら、私もずっとなりたかったのかもしれない。お前たちのように。」

鬼道：「総帥・・・カチャ

鬼道はゴーグルを外した。

影山：「ん？ 久し振りだな。お前の素顔を見るのは」

鬼道：「このゴーグルは、貴方がくれた物でしたね」

影山：「そうだったな、お前には、もう必要無いか・・・」

鬼道：「いえ、これはこれからも使わせてもらいます。俺のトレードマークですから」  
影山：「ふつ、そうか。それもそうだな。それと、ファイディオ、何故私の為に彼処までしたんだ？」

ファイディオ：「俺の父もプロの選手で、才能の壁に苦しみました。今はもう引退していますが、それでも父さんは俺の自慢でした。もしかしたら、俺もミスターKの様になつてしまっていたのかも知れないと思つたら、放っておけなかつたんです」

影山：「・・・私が、この言葉を言うことなど一生無いと思つていたのだが、鬼道、ファイディオ、「ありがとう」」

ファイディオ：「ミスターK、今の気分はどうですか？」

影山：「勝てた訳では無いと言うのに、今まで得たどの勝利よりもスッキリしている。不思議なものだ・・・」

警察：「そろそろ、」

影山：「ああ。行くか」

響木：「すまん。本当に最後に1つだけ影山に聞きたい事がある。影山！ 40年前、お前を唆したのは誰だ!! お前は私たちがかつての雷門イレブンと我々の監督であり円堂の祖父「円堂大介」監督が乗ったバスに細工して不戦勝を手にした。だが当時のお前はまだ中学生。1人でそんなことを出来たとは思えん!!」

影山：「そんな事を今更聴いてどうする? ..ん?」

赤キヤップのおじさん：「.....」

影山：「良いだろう。教えておいてやる。確かに私には協力者がいる。そしてその者の手引きで、今まで行動を起こしてきた」

響木：「誰なんだソイツは!」

影山：「その者の名は「ガルシルド・ベイハン」!!」

響木：「ガルシルド!?! FFI運営委員長のガルシルドか!?!」

影山：「ガルシルドには気をつける。奴の闇は底知れぬ」

警察：「行くぞ!!」

そうして影山は連行されていった。

く 後日 く

俺たちは宿舎でアメリカvsアルゼンチン戦を見ていた。

実況：「アメリカvsアルゼンチン、後半残り僅かで得点は1ー1!! このまま引き分けかあ!」

デイラン・マーク：「真・ユニコーンブースト」!!」

ドツゴオオオオオオン!!

テレス：「真・アイアンウォール」!!」

ガガガガガガガアツ!! バチイン!!

ピッ、ピッ、ピー!!

実況：「ここで試合終了のホイッスル!! 引き分けにより、グループA決勝トーナメント進出チームは1位イタリア、2位日本となりました!!」

久遠：「よし。では此より決勝トーナメントに向けた練習を始める」

イナズマジヤパン：『『はい!!』』

果南：「龍也、行く?」

龍也：「ああ」

決勝トーナメント進出が決まり、更に気合い入れて練習しないとな!!

—  
続  
く  
—



## 番外編：システイと龍也、約束のデート回

日本の決勝トーナメント進出が決まった日の夜、知らない番号から電話がかかってきた。

龍也：「もしもし?」

?：「あつ、大海龍也さんのケータイでお間違いないですか?」

龍也：「はい。どちら様ですか?」

システイ：「龍也さん今晚は。イタリアの「システイーナ・フィーベル」です。」

龍也：「ああ、フィーベルか。何で俺の番号知ってるんだ?」

システイ：「果南さんに聞きました。」

ああ。この間の俺がよく分からない理由でお仕置きされた日か。そう言えば果南に「デートしてあげてくれ」って言われてたっけな。

龍也：「フィーベル、ちよつと聞きたいんだけど明日つて暇か?」

システイ：「えっ!?は、ハイ。ヒマですけど・・・?」

龍也：「じゃあこの間の果南に言われてたデート明日にしないか?明日イナズマジャパン練習休みだし。」

システイ：「本当ですか!? オルフエウスも休みです!! と言うよりそれをお願いしよう  
と電話したんですよ。」

龍也：「じゃあちょうど良かったな。」

システイ：「っ! はい! 嬉しいです!!」

龍也：「じゃあ明日の朝10時にセントラルパークのオブジェ前で。」

システイ：「はい!! ふつつ、楽しみだなあ／＼」

そして通話を終え、明日に備えて早めに寝る事にした。

— 次の日・セントラルパーク —

龍也：「こんなので良いかな? 女の子とデートなんてアジア予選の時に果南と行った  
一回だけしか無いからなあ。」

システイ：「龍也さん!!」

龍也：「おつ、来た・・な・・。」

俺はフイーベルの私服姿があまりにも可愛くて思考がフリーズしてしまった。

龍也：「はっ!?! イカンイカン!! 不埒な事は考えるな!! 俺は果南一筋なんだから!! . . .  
でもデートで女の子の服装を褒めるのはマナー見たいな所あるし、そのくらいは良  
い・・・よな?」

システイ：「?、どうかしましたか?」

龍也：「いや、その・・・服、似合ってるな。可愛くて見とれてた。」

システイ：「!?／／／あ、ありがとうございます・・・。／／／（やったー！！昨日の夜必死に選んだ甲斐があつたー！！／／／）」

龍也：「じゃあ、行くかフィーベル。」

システイ：「は、ハイ。あ、あの!!私の事は、システイって呼んでくれませんか?その方が・・・その・・・嬉しいので。」

龍也：「わ、分かった。じゃあ行くか。」スツ

システイ：「え?」

龍也：「無いとは思うけどさ、はぐれたりすると大変だから手、繋がらないか?それにほら、折角のデートだし。」

システイ：「!?／／／ハイ!!」ギユツ

そして、二人のデートが始まった。

システイ：「アルゼンチンエリアにお肉が美味しいお店があるらしくて。そこに行きませんか?実は私お肉大好きで・・・。」

龍也：「オツケー。俺も肉好きなんだよね。」

「アルゼンチンエリア」

俺とシステイはお店に入りステーキを頼んだ。しかし一人前（通常サイズ）が1ポ

ド（約480グラム）もあった。俺は完食したがシステイが・・・

システイ：「うう、もうお腹いっぱい。」

龍也：「しようがないな。システイ、皿貸せ。」

システイ：「へ？」

龍也：「俺が喰う。」

そしてシステイが残してしまつた肉を食べ進めその分は五分で完食。

システイ：「すごい、流石男の子・・・でも・・・、龍也さん？その、間接キス見たいな物ですよ？／／／／／」

龍也：「あ！あああ／／／／／」

そして店を出て、

システイ：「私デザートが食べたいです。ほら！甘いものは別腹って言うじゃないですか？」

龍也：「良いけど俺もう本当に軽い物しか無理だからな？」

そして、俺達は世界的なブランドチョコレート有名国ベルギーの代表滞在エリア、ベルギーエリアにやって来た。

龍也：「ベルギーのチョコレートって言えばゴダイバとか？」

システイ：「はい！だからそのチョコソースを使ったチョコレートパフェが食べたく

て。ほら、ココアとかもあるみたいですし龍也さんはそれにしたらどうですか？」

龍也：「じゃあ俺はココアで。」

そして二人で暫くベルギーエリアを散策していると、

子供：「えーっ！ママー！どこーっ！？」

システイ：「迷子ですかね？」

龍也：「他の人は見て見ぬふりだし俺行ってくる！！」

システイ：「あつ、私もいきます！！」

龍也：「ねえ君？どうしたの？」

子供：「グスツ。ママとはぐれちゃったの。」

龍也：「どこら辺ではぐれたか分かる？」

子供：「はぐれたときに回りを見たら、イギリス代表の服を着てる人がいっぱいいた。」

システイ：「じゃあきつとイギリスエリアだね。ここから近いし間違いないと思う。」

龍也：「よし。ねえ君、お兄ちゃんとお姉ちゃんと一緒に行く？ママのところ連れて

てつてあげる。」

子供：「本当!？」

システイ：「本当よ。」

子供：「ありがとう！お兄ちゃん！お姉ちゃん!!」

そして俺達はこの子を連れてイギリスエリアに向かった。

龍也：「そうなんだ。君ロシアの子なんだね。」

子供：「うん！そう言えばお兄ちゃん名前は？」

龍也：「大海龍也。」

子供：「ええー！?!日本代表の大海龍也選手!?!」

システイ：「因みに私はイタリア代表オルフェウスのシステイーナ・フィーベルよ？」

子供：「え？違う国の代表なのに一緒にいるの」

システイ：「前にちよつと約束しててね？デートしてたんだ。」

子供：「へー。じゃあお兄ちゃんとお姉ちゃん付き合ってるんだ!!」

ブフオツ

龍也：「付き合って無いよ？」

システイ：「そうだね。付き合っていないね。」

子供：「えー？つまんない。あつ、喉渴いた。」

龍也：「ちよつと買ってくるよ。システイ、待っててな？」

システイ：「分かった!!」

子供：「ねえお姉ちゃん？付き合っていないって言ってたけど、お姉ちゃんはお兄ちゃん

のこと好きでしょ?」

システイ：「ふえっ?!?!／／／な、何でそう思ったのかな?」

子供：「お姉ちゃんからはお兄ちゃんにお父さんとお母さんみたいな感じがするのにお兄ちゃんからは照れる感じはするけどそんなに感じないから。」

システイ：「す、鋭いね・・・。」

龍也：「おーい!システイ!!」

システイ：「あつ、戻ってきた。ん?女の人と一緒にだね。」

子供：「え?、!?ママ!」

母親：「レックス!!」

龍也：「やつぱりそうだったみたいですね。」

母親：「ありがとうございます!!なんとお礼を言えば良いのか!!」

龍也：「気にしないで下さい。良かったですね。」

子供：「お兄ちゃん!ありがとうございます!!」

龍也：「おう!!」

それからしばらくガルシアさん親子と話し、

龍也：「じゃあ俺達はこの辺で。」

母親：「本当にありがとうございます!!」

子供：「お兄ちゃん、お姉ちゃんまたね！」

システィ：「バイバイ。」

龍也：「はあくく。デートだったのにゴメンなシスティ？」

システィ：「ううん。寧ろ彼処で迷わずあの子に声をかけた龍也さんが誇らしかったです。」

龍也：「そつか。ありがとう。」

システィ：「送ってくれてありがとうございました。」

龍也：「じゃあ次会うときは決勝戦で。」

システィ：「はい！決勝で!!」

そしてシスティが宿舎に入るのを見届けてから俺もジャパンエリアに戻った。

— 日本代表宿舎 —

果南：「システィとのデートは楽しかった？」

龍也：「まあ楽しかったけど、大変な事もあったな。」

果南：「ふーん？」

龍也：「・・・今日一緒に寝るか？」

果南：「パアアア「うん!!」」



そしてその日は約束通り果南と一緒に寝て終わった。

― 続く ―

## 幕間章：天界・魔界編

### 第49話：天界と魔界

曜：「果南ちゃん買い物付き合ってくれてありがとう」

果南：「ううん。いい気分転換になったよ」

謎の老人A：「そこのお嬢さん方、アクセサリーを見て行かんかね？」

曜：「果南ちゃん!! ちよつと見て行こうよ!!」

果南：「良いよ。うわくどれもキレイだねえ」

曜：「この白いブレスレット良いかも!!」

果南：「じゃあ私はこの紫色のブレスレットで。おじいさん、これ幾らですか?」

謎の老人B：「いえいえ、お代は結構じゃよ。可愛いお嬢さん方に儂らからのプレゼン  
トじゃ」

果南：「いいんですか? じゃあ遠慮なく」

そして私と曜は宿舎に戻った。でもこの時はまだこのブレスレットのせいであんな  
目に遭うなんて思ってたんだ・・・

— ジャパンエリアグラウンド —

円堂：「鬼道!!」

鬼道：「豪炎寺!!」

鬼道から豪炎寺へセンチタリングが上がる。しかしそのボールを何かがカットした。

龍也：「ん? 何だ・・・あつ!! お前ら!」

デイルン：「久しぶりだね!! イナズマジヤパン!!」

絵里：「穂乃果!! ことり!! 海未!! にご!! 久しぶり!!」

にことほのうみ：「「「絵里(ちゃん)!!」」」

マーク：「さつきそこで会ってな。後は・・・」

フィディオ：「マモル、リュウヤ!! いきなり悪いね」

鞠莉：「果南く! ダイヤく!!」ハグツ!

ダイヤ：「鞠莉さん!!」

果南：「アハハ。どこに居ても鞠莉は相変わらずだねえ」ハグツ

システイ：「龍也さん!!」

龍也：「おつ、この間ぶり」

エドガー：「大海、久しぶりだな。私の「エクスカリバー」をあまりポンポン使わないで欲しいと思いつながら日本の鬨を見ていたぞ」

龍也：「エドガー!! 後テレス」

テレス：「後って何だ後って!! でも実際決勝トーナメントに勝ち上がったのは日本とイタリアだ。マジ凄えよ。お前ら。」

今まで闘い競いあつてきた好敵手（ライバル）達が勢揃いしていた。絢瀬のいるロシアは予選Bブロックを1位で通過したので決勝トーナメント一回戦でグループA2位通過の日本と当たる事になっている。そんなことを考えていたら空が曇り暗くなってきた。

龍也：「何か雲行きがあやしいな」

するといきなり突風が吹き、果南の近くにいた不動が何かにぶつかられよろけた。

不動：「ぐわっ!! な、何だあ!?!」

果南：「ちよっ!! なに貴方!?!」

果南の声がした方を見るとまるで悪魔の様な姿をした男が果南を抱えて立っていた。

龍也：「テメエ!! 果南に何しやがる!!」

? :「煩せえぞ人間!! 魔界の民の血を引く「魔界軍団Z」のリーダー、このデスタ様に逆らをうつてののか!?!」

ブワアッ!!

立向居：「!?! 今度はなんだ!?!」

曜：「ええっ!?! なにこの人!?! 空を飛んでる!! 誰か助けてえ!!」

千歌：「曜ちゃん！」

見ると渡辺を抱えているのは果南を抱えている男とは対称的な、まるで天使の様な姿をした男だった。

？：「煩いぞ。黙っている」ポワァッ

曜：「!?」ガクンッ スウスウ

千歌：「曜ちゃん！ 曜ちゃんに何したの!？」

？：「黙れ人間。この方はこの島を、ひいては世界をも救うお方だ。邪魔は許さんぞ」

デスタ：「来やがったか。天界の民「天空の使徒」が!!」

？：「我が名はセイーン！ 魔界の民よ、魔王の復活など絶対にさせん!! 必ず阻止してやる!!」

デスタ：「やれるものならやって見やがれ!! 「マグニード山」のく千年祭で決着を付けてやる!!」

そして天使?と悪魔?は忽然と姿を消した。果南と渡辺とともに。

絵里：「なんなの!?! 今の奴ら!!」

鬼道：「天界の民とか魔界の民とか言ってたな」

ツバサ：「まさか本物の天使と悪魔?」

豪炎寺：「分からない。だが何れにしろ速く二人を助けに行かないと」

穂乃果：「だけど行き先が分からないよ？」

龍也：「・・・マグニード山だ」

風丸：「？ 何でそんなことが分かるんだ？」

龍也：「さつきあの悪魔野郎が言ってただろ 「マグニード山の千年祭で決着を付ける」って」

円堂：「よし。二人を助けに行くぞ」

ファイディオ：「守!! 俺たちも行くよ!!」

エドガー：「ああ。放ってはおけない」

テレス：「俺も行くぜ!!」

デイラン：「ミーとマークも行くよ!!」

マーク：「ああ。勿論だ」

システイ：「私と鞠莉も行きます」

鞠莉：「Yes!! 果南も曜も今はチームが違っても私の大事な友達です!! 助けに

行かない何て選択肢はナッシング!!」

絵里：「もちろん私も行くわ!!」

龍也：「皆ありがとう!! 行こう!!」

― マグニード山 ―

ファイディオ：「結構険しい山だな」

野坂：「待っててください!! 分かれ道です!!」

円堂：「どつちが正解何だ?」

ダイヤ：「どちらかが天界でもう片方が魔界に続いているとか」

?・?・?：「その通り!!」

奥から二人の老人が出てきた。

龍也：「誰だ? あんたら?」

謎の老人A：「儂らのことは良い。拐われた娘を取り返すのじやな?」

エドガー：「ああ。当然だ」

謎の老人A：「よろしい。では教えよう。右は天への道「ヘヴンズガーデン」

謎の老人B：「左は魔界への道「デモンズゲート」

龍也：「分かった。よし、二手に分かれるぞ」

ヘヴンズガーデン組

南、ファイディオ、エドガー、吹雪、佐久間

高坂、高海、野坂、園田

優木、絢瀬、綱海、風丸

円堂

デモンズゲート組

龍也、デイラン、豪炎寺、綺羅、黒澤

マーク、鬼道、不動、矢澤

システイ、鹿角、テレス、小原

立向居

円堂：「じゃあまた後でな」

龍也：「ああ!!」

龍也：（待ってろ果南!! 絶対に救い出す!!!）

千歌：（私の親友を拐うなんて!! 待っててね曜ちゃん!! 必ず助けるから!!!）

龍也・千歌：「やってやる!!!」



|  
続  
く  
|

## 第50話：天空の使徒

～ 千歌 Side ～

私たちは拐われた曜ちゃんを助ける為マグニード山へやって来た。そこで二人のおじいさんに分かれ道のどちらが天界でどちらが魔界への道なのかを聞き二手に別れ私たちは曜ちゃんを拐った天界側へ向かい山を登っていた。

ことり：「もう相当上まで来たよね？」

フィディオ：「あつ、皆ストップ!! あれじゃないか？」

ふと見ると山の頂上に神殿らしき建造物があった。

― ヘヴンズガーデン神殿内 ―

セイン：「……………」

？：「セイン、どうした？ またその壁画を見てるのか？」

セイン：「ウイネルか。いや、前から気になっていたのだがこの壁画……なぜ我らの千年前の祖先は、魔界の民とサッカーで決着を付けたのかと思つてな」

ウイネル：「なぜって、それはサッカーが人間達にとって、戦いで勝利者を決めるための手段だったからだろ？」

セイン：「しかしそれならば私が言うのもおかしいが、武力で制圧しても良かったのではないか？ 現に人間は戦争で勝利国を決める事も幾度となくあった」

ウイネル：「それはそうだが」

セイン：「ん？ エルフエルか、どうした？」

エルフェル：「セイン、お客さんだぜ？」

~~~~~

千歌：「この何処かに曜ちゃんか！」

セイン：「何をしに来た!! 下界の人間共よ!!」

千歌：「曜ちゃんを返して!!」

セイン：「それは出来ん」

?：「離してっ!! 離してよ!!」

千歌：「曜ちゃん!!」

曜：「千歌ちゃん!! 皆も助けに来てくれたの!? 助けて!! 私花嫁何かになりたく

ない!!」

風丸：「花嫁？」

セイン：「左様。千年祭にて復活せし魔王。この方には再び魔王を千年の眠りに着かせるための花嫁になってもらう」

あんじゅ：「そんな!?　じゃあ果南は!!」

セイン：「魔界の民が拐った娘は生け贄だ。野蛮なる魔界の民は復活した魔王の力をより強める贄としてあの娘を拐ったのだ」

絵里：「野蛮って、結果が違っただけで貴方たちもやってることは同じじゃない!!」

セイン：「あんな奴等と一緒にするな!!　分かったらさっさと立ち去れ!!」

千歌：「私の親友を封印の生け贄にされるなんて聞いて「ハイそうですか分かりました。」なんて言えるわけ無いでしょ!!」

円堂：「渡辺は必ず連れて帰る!!」

エルフェル：「やれやれ、これだから人間は」

セイン：「我らに逆らうとどうなるか思い知らせてやる」

謎の老人A：「それではこれより、花嫁の運命をかけた儀式を執り行う。すなわち、サツカーで決着を付けるべし」

曜：「ああつ!!　さっきのおじいさん!!」

謎の老人A：「久しぶりに見ごたえのある試合になりそうじゃのう」

曜：「ふざけないで!!　誰のブレスレットのせいでこんなことになったと思ってるの!?」

フォーメーション

天空の使徒

G K エノレル (男)

D F エカデル (男) ネネル (男) ゲネル (男) エルフエル (男)

アイエル (女)

M F サキネル (男) ウイネル (男) エヌエル (男)

F W セイン (男) ギュエール (女)

世界連合 A

F W ファイディオ (男) エドガー (男)

M F 高坂 (女) 野坂 (男) 高海 (女)

園田 (女)

D F 優木 (女) 絢瀬 (女) 綱海 (男) 風丸 (男)

G K 円堂 (男)

ピーーーーーー!!!

試合開始のホイッスルが鳴りボールは穂乃果さんに。

穂乃果：「私たちの仲間を生け贄になんか絶対にさせない!!」

セイン：「アイエル!!」

アイエル：「りよ〜かい!!」グツ、ダンツ、スルツ

相手はまるでバネの様な軽い身のこなしであったという間に穂乃果さんからボールを奪い、

アイエル：「セイン!!」

あんじゅ：「止めるわ!!」

セイン：「人間共よ下界へと墜ちるがいい!!」「ヘブンドライブ!!!」

相手のシュートは天高く昇っていき天の晴れ間から神々しいエネルギーを纏いながらゴールめがけて墜ちてきた。その光景はまるで天罰。

あんじゅ：「なにこのパワー!! でも、仲間の為に引く訳にはいかない!!」「真・アステロイドベルト!!!」

あんじゅさんの必殺技の隕石が相手のシュートに次々直撃していく。しかしその威力はほとんど衰えなかった。

円堂：「絶対に止めてやる!!!」「イジゲン・ザ・ハンド・改!!!」

ドガアアアアアアッ

円堂：「ぐううううう!!!」

円堂も必死に耐えるが、バリアには次々と亀裂が入っていき・・・、

ビシィツ バリイイイイイン!!

相手のシュートはゴールに突き刺さった。

セイン：「ふん。自分たちの身の程が分かったか」

円堂：「まだだ、今度は止めてやる!!」

セイン：「ふん」

人間ボールで試合再開

セイン：「何度やっても同じだ!! アイエル!!」

アイエル：「ふっ!」 ダンツ、バツ!

再びアイエルがバネのような軽い身のこなしでボールを奪いに掛かる。しかし、

穂乃果：「ふっ!!」 スルツ

天空の使徒：「!? 何(ですって)だと!!」

高坂は2度目でタイミングを見切り、アイエルを突破した。

セイン：「止める!! ネネル、ゲネル!!」

相手のデیفエンスが二人がかりでデیفエンスにくる。

穂乃果：「ハアアアアアア!!」 ドガアアアアアッ

エカデル：「シュート!?! . . . いや違う!! パスだ!!」

エドガー：「ナイスパスだ穂乃果!!」

セイン：（シュートに見せ掛けてボールに右方向へのカーブをかけて裏を狙っていたのか!!）

ボールは完全フリーでエドガーへ。エドガーは必殺シュートの体勢に入る。

エドガー：「レディは私がこの足で救う!!」「真・エクスカリバー!!!」

ギシャアアアアアアン ズドドドドドドドド!!

エドガーの「エクスカリバー」が、フィールドを切り裂きながらゴールを襲う。

曜：「よし!! 同点だ!!」

エノレル：「ホーリーゾーン!!!」

相手キーパーも必殺技をはつど。技を発動するとゴールの真上に巨大な光の円が現れ、その光の真下に入ったシュートの威力を徐々に弱めていき、

バシツツ!!

エドガーの「エクスカリバー」は、簡単に止められてしまった。

千歌：「嘘・・・止められた?」

エドガー：「くっ!!」

曜：「コラー!! エドガーさん何が「この足で救う」よ!! 止められてんじゃん!!」

エルフェル：「へえ? シュートまで持つていくなんて結構やるじゃん。まあ最もあの程度のパワーじゃあ「ホーリーゾーン」は破れないだろうけどね」

セイン：「やはりこんなものか．．．エノレル!!」

エノレル：「セイン!!」

エノレルから前線のセインに向かってゴールキック。ボールが飛ぶ。

セイン：「よし．．．させないっ!!」なっ!!」

しかしここで絢瀬がインターセプト。ボールをカットして上がっていく。

絵里：「穂乃果!!」

穂乃果：「よつと！ 海未ちゃん!!」

ボールは流れるように繋がりボールは園田へ。そこにアイエルが止めに来る。

アイエル：「そこまでだよっ！」

海未：「抜きます!!」

アイエルがしなやかな身のこなしで奪いに掛かるが、園田はそれらにすべてついて行き、一瞬の綻びを見逃さずに突破した。

アイエル：「ウソでしょ!?!」

セイン：「(さつきから一体どうなってるんだ!?) デイフェンス、止める!!」

園田にデイフェンスが襲い掛かる。が、

海未：「千歌!!」

サイドを駆け上がったいた高海にパスが飛び落ち着いてトラップ。急いでエルフェ

ルが止めに来るが、それよりも速くセンタリングを上げる。

ファイディオ：「ナイスパスだチカ!!」 バツ!

エカデル：「なに!?!」

高海のセンタリングが、抜け出したファイディオの足元にドンピシャで収まり、ファイディオは必殺シュートを放つ。

ファイディオ：「喰らえ!!」 「真・オーディンソード!!!」 ズギャアアアアン!!

エノレル：「ホーリーゾ・・・!?!」 ズバアアアアン!!

ファイディオさんのシュートは圧倒的なスピードで技が発動しきる前にゴールへ突き刺さり前半終了。

世界連合A 1 1 1 天空の使徒

— 続く —

第51話：V S 「天空の使徒」 決着!!

フィデイオさんのシュートが決まり同点でハーフタイム。

エルフェル：「信じられないや。僕たちから点を取る何て」

エノレル：「すまん。あのシュート、思った以上に手元で伸びて来た」

セイン：「少々悔り過ぎたか。だが後半は力の差と言うものを教えてやる」

くくくくくくくくくくくく

ハーフタイムが終わり、両チームフィールドに出る。

謎の老人A：「後半開始!!」

oooooooooooo!!

審判の笛と共に、天空の使徒ボールで後半開始。ボールはセインからいったんウイネルに戻される。

穂乃果：「止める!!」

すぐに高坂がディフェンスに入る。すると相手は前半は使っていなかった必殺技を使用してくる。

ウイネル：「エンゼルボール!!」

相手がボールを軽く空中に蹴るとボールに天使の様な羽と輪っかが生え、穂乃果さんの周りを嘲笑うかのように飛び回り、穂乃果さんを通りすぎていた相手の足元に戻り突破した所でボールは元に戻った。

穂乃果：「なに!? 今の技!!」

ウイネル：「ギューエル!!」

ウイネルからのパスはフォワードのギューエルに飛ぶ。ボールをトラップしたギューエルはノーマルシュートを放ってくる。

ギューエル：「ナイスパスよウイネル!! ハアアアアツ」ドガアアアツ

ノーマルシュートではあるが、必殺シュートに匹敵するすごい威力のシュートだ。しかし円堂も、全く臆さず止めに入る。

円堂：「止める!!」「怒りの鉄槌・V3」!! くっ!!」ドグシャアアアツ!!

シュートの勢いが強すぎた為に弾かれた円堂。こぼれ球にセインが詰めてきたが、急いでボールを抱きかかえて失点は阻止した。

セイン：「ちっ、命拾いしたな」

円堂：「野坂!!」

円堂のゴールキックからボールは野坂くんに渡る。すると相手のディフェンスが必殺技を使ってくる。

エカデル：「ゴー・トウ・ヘブン」!!

相手のDFが足を降り下ろすと野坂くんの足元が光り、次の瞬間その光から天へと光の奔流が上がり野坂くんを吹っ飛ばした。

エカデル：「アイエル!!」

アイエル：「任せて!!」

ボールはアイエルに繋がり、ドリブルで攻め上がってくる。そこに高坂がディフェンスに入る。

野坂：「成る程・・・確かに強力な技だ。だが・・・」

アイエル：「エンゼル・・・」

野坂：「対処しきれないレベルじゃない!!」

穂乃果：「ダンス・オブ・サラマンダー・G5」!!!

ボオオオオオオオ!! ドバアアアアアン!!

アイエル：「きやあっ!?!」

穂乃果さんのディフェンス究極奥義は、天空の使徒の技を撃ち破り、ボールを奪い取った。

天空の使徒：「なに!?!」

穂乃果：「フィディオさん!!」

ファイディオ：「ナイスホノカ!!」「真・オーディンソード」!!!
ズギヤアアアアン!!!

ファイディオの必殺シユートが再びエノレルに襲い掛かる。

エノレル：「させません!!」「ホーリーゾーン」!!!
バシイツ!!

しかし2度目は完璧にタイミングを測られてしまう。

ファイディオ：「くそツ!!」もうタイミングを見極められたか!!!

エノレル：「エヌエル!!」

エノレルのゴールキックからボールはエヌエルへ。

エヌエル：「ナイス!!」行くよ〜?」

千歌：「真・フレイムダンス」!!!

ボオアアツ!!

エヌエル：「熱っ?!!」

しかし今度は高海の必殺ディフェンス。ボールをまたしても奪い返す。

千歌：「曜ちゃんは絶対に渡さない!!」

曜：「千歌ちゃん・皆……。頑張つて千歌ちゃん!! 皆!!!」

世界連合：『『『おう!!!』』』

ゴオオウツ!! ビリビリ

天空の使徒：『『!?』（なんだ!?このプレッシャーは?）』』

ギユエール：「セイン!! こっち!!」

セイン：「っ!」ダッ

ギユエール：「セイン!?!」

仲間が呼ぶが、セインは構わず一人でドリブルで上がっていく。

セイン：（私が臆したと言うのか!! 人間ごときに!!）

絵里：「スノーエンジェル・改!!」

バキイイイイイ!!

絵里さんの必殺技は相手を氷漬けにしてボールを奪い取った。

絵里：「野坂くん!!」

ネネル：「ゴ・トウ・・・、」

野坂：「高坂さん!!」パスッ

穂乃果：「野坂くん!!」パスッ

穂乃果さんと野坂くんはキレイなワン・ツーパスで相手を抜き去った。

野坂：「行くぞ!!」
「キングスランス・V3!!!」

ズバアアアアン!!

人間 2 | 1 天空の使徒

千歌：「勝った……。勝った——————!!!」

穂乃果：「これで曜ちゃんは助かった!!」

円堂：「おいエドガー大丈夫か!？」

エドガー：「足が痺れてはいるが少し休めば問題ない。うまくいって良かった」

すると解放された曜ちゃんがエドガーさんに駆け寄った。

曜：「良かった……。何であんな無茶したの!？」

エドガー：「自分のすぐ目の前で窮地に陥っている女性一人助けられない様では、騎士である前に男としての恥だと思つてますから」

曜：「っ!」 ギュウツ

エドガー：「!？」

曜：「あり、がとう……」

セイン：「何故だ？ 何故敗けたんだ？ 力では圧倒的に上回っていたはずだ。コイ

ツらは何も卑怯な手は使っていないなかったのに、なのに真正面から戦つて我らが敗けた？

一体何故……?」

曜：「何故って、そんなことも分からないから敗けたんだよ!! サッカーって言うのは、ただの手段なんかじゃない!! 「魂と魂のぶつかり合い」なんだよ!! どちらが上とか、優れているとか、そんなもの端から関係無いんだよ!!!」

セイン：「魂と魂の・・・ハツ?!・・・そう言う事だったのか。どうやら君たちには礼を言う必要がありそうだな」

円堂：「礼?」

セイン：「私にはずっと分からない事があった。何故我らの千年前の祖先は魔界の民とサッカーで決着を着けたのか。サッカーは魂と魂のぶつかり合い。我らの祖先はその全てをぶつけ合う事で高めた己達の熱き魂の力で魔王を封印したんだ」

ウイネル：「じゃああの壁画は・・・」

セイン：「ああ。その事を描いていたんだ。円堂くん、と高海さんと呼んでも良いかな?」

円堂・千歌：「もちろん!!」

セイン：「君達のお陰で我らの気持ちは固まった。我らも祖先と同じく魔界の民とはサッカーで決着を着け魔王を封印する!!」

円堂：「ああ!! お前らなら絶対出来るさ!!」

セイン：「それから、高海さん、渡辺さん、済まなかった」

天空の使徒：「ご免なさい!!」

曜：「私は無事だったから良いけど、また千年後も同じ事が起こるなら今あなたたちが学んだ事をちゃんと後世にも伝えてね？」

セイン：「分かった!! だが、こうしている間にも魔界側に向かった君達の仲間が心配だな。急いでデモンズゲートに向かおう」

フィディオ：「あくそれなだけで、あまり心配要らないと思う」

ギユエール：「え？」

エドガー：「彼方には、我々が全員束になっても勝てるか分からない1人の人間がいる。それも完全にぶちギレた状態で」

ウイネル：「なっ!! 君たちが束になっても勝てるか分からない!! そんな人間いるはずが・・・」

千歌：「多分今頃、魔界の方が袋叩きに遭ってるんじゃないかなあ？」

その頃、デモンズゲートでは、

DESTA：「バ、バカな・・・!!」ドサツ

龍也：「ふん、もう終わりか？」

テレス：「嘘だろオイ・・・人間の域を越えてるぞどう見ても・・・」

デイラン：「ミーたちと闘った時は本気じゃ無かったのか？」

マーク：「いや、あの気迫は本気だった筈だ。だがもしかしたら、本気ではあつたけど全力では無かつたのかも」

果南：「龍也・・・何か怖い」

誰もが予想しなかつた大海龍也の真の力。それは、前半だけで魔界の民「魔界軍団乙」を7点差で圧倒する程だった。

世界連合B 8 | 1 魔界軍団乙

| 続く |

第52話：「魔界軍団Z」

（ 龍也 Side ）

時は少し遡り、円堂たちと別れた俺たちは果南を拐った魔界へと向かっていた。

鬼道：「あそこの洞窟だな」

システイ：「待ってて果南」

龍也：「よし、行くぞ!!」

洞窟の内部はとても広い空洞になっており、俺たちが注意深く辺りを見回している
と、

？：「人間共!! こんなところまで追い掛けて来たか!!」

果南：「龍也、システイ、皆!! 来ちゃダメ!!」

見ると果南は鉄球のついた鎖で足を縛られ逃げられなくなっていた。

システイ：「果南を離しなさい!!」

デスタ：「そうは行かねえ。この娘は魔王様復活の為の大事な生け贄だ」

ブチッ!!

龍也：（生け贄だと？ そんな下らない理由で果南をこんな目に遭わせたのか？）

鞠莉：「生け贄ですって!!」

アラクネス：「そうよ? 魔王様が復活なされれば地上の文明は崩壊し地獄の千年が幕を開ける。そして世界は悪が支配するのよ? 貴女はその為の大事な生け贄。嬉しいわよねえ?」

果南：ビクツ「ヒツ・・・!」

その瞬間俺のなかにドス黒い何かがマグマのように煮えたぎるのを感じた。コイツらだけは、絶対に許さない!!

龍也：「・・・その汚い手を退ける。糞野郎」

アラクネス：「あ? なんですって?」

龍也：「聞こえなかったか? その汚い手を退けると言ったんだ。これは命令だ。今なら半殺し程度で許してやる」

アラクネス：「人間ごときが調子にのってんじや無いわよ!!」

ダイヤ：「こんなに怒っている龍也さんは初めて見ますわ。本気で殺しに掛かるかもしませんわね」

龍也：「果南を生け贄になんかささせねえ!! テメエらは俺が叩き潰してやる!!!」

デスタ：「はっ、やれるものならなあ!!!」

謎の老人B：「それでは此より、生け贄の運命をかけた儀式を執り行う。すなわち、

デスタ：「恐怖しろ人間共!! 必殺タクティクスくブラックサンダー>!!」
相手がそう宣言した瞬間ボールを持った相手の姿が忽然と消えた。

鬼道：「なに!?! どこへいった!?!」

龍也：「!? 立向居!! 後ろだ!!」

立向居：「えっ!?!」

バスッ

ピピーー!!

不動：「バカな!?! 何が起こった!?!」

俺が試合時間の時計を見ると約30秒が経過していた。

龍也：（俺たちの体感ではまだ試合が始まって8秒程度だ。なのにこんなに経過していると言うことは時間を止めるや、高速移動の類いではない。恐らく俺達だけの時間を止めたんだ。だが、俺たちに直接何かをしなければ、そんなことは不可能だ。ブラッ
ク・・・サンダー・・・雷・・・まさか?）

人間ボールで試合再開。

龍也：「鬼道!! こっちだ!!」

鬼道：「大海!!」パスッ

ベルゼブ：「潰してやるよ!!」
「ゴー・トゥ・ヘル!!」

龍也：「甘い!!」「スプリントワープ・G5」!!! ビュンツ ビュンツ ビュンツ

相手が必殺技を発動するために振り上げた足を降り下ろした瞬間俺は超加速でDFを抜き去った。すると次の瞬間さつきまで俺が居た場所に上から下に向かって黒光のエネルギーが降り、地面に穴が空いた。

ベルゼブ：「ちっつ、しくじったか!!」

龍也：（危ね〜。咄嗟に加速して正解だったぜ）

そして俺とキーパーの1 vs 1になった。

アスタロス：「ふん。人間ごときにやられる俺ではない!!」

龍也：「喰らいやがれ!!」「スサノオブレード・G5」!!!

ドツギユオオオオオオオオオオ!!!

アスタロス：「ジ・エンド」!!」

相手が右手を付きだし手のひらを下から上に向けて徐々に捻る。するとシユートが周りの空間ごと捻曲がっていき最後に腕を肘から体の方に引くとシユートは消滅した。

龍也：「ふくん。．．．．．そんなもん?」

するとシユートが消滅した場所から空間が開きスサノオブレードが飛びだしキーパーごとゴールに突き刺さった。

アスタロス：「何だとおっ!？」

俺の「スサノオブレード」がゴールに突き刺さり1―1の同点になり、魔界軍団乙ボールで試合再開。

デスタ：「はっ、結構やるじゃねえか!!」

サタナトス：「我らに怯えぬ強い魂を持つている様だ・・・」

デスタ：「だが、この技が有る限りお前たちに勝ち目は無え!! 必殺タクティクスくブラックサンダー>!!」

全員の動きが止まり、デスタが攻め上がるとする。・・・一人を除いて。

龍也：「それはどうかかな？」

ザザアツ!!

魔界軍団乙：「『何!?!』」

デスタ：「バカな!? 何故動ける!!」

龍也：「さあな? お前らの足りない頭で考えな!!」

デスタ：「ふざけやがって!! 『デビルボール』!!」

相手がボールを空中に軽く蹴るとボールに悪魔の様な翼と尻尾が生え俺の周りを飛び回り突破していた相手の足元に戻った所でボールももとに戻る。

龍也：「オーバーフロー!!」

ギユンツ!!

俺はすぐさまオーバーフローを解放してデスタの前に回り込む。

デスタ：「何!!」

龍也：「『ゴー・トウ・ヘル・V3』!!!」

ドガアアアアアンツ!!

デスタ：「ぐわあああつ!?!」

サタナトス：「デスタ!!」

〈ブラツクサンダー〉の発動者であるデスタがやられた瞬間、皆の硬直状態が解除された。

アラクネス：「よくもデスタを!!」

俺はクモっぽい女の股を抜きさり、DFがプレスに来た。

アビゴール・グラシーシャ：「調子に乗るな!!」

龍也：「『デビルボール・V3』!!!」

ベルゼブ：「バカな!! (さっきから何なんだこいつは!!)」

龍也：「喰らいな!!」 「フリーズゲイザー・V3」!!!」

氷と雷、2つのエネルギーを持ったシユートがゴールに迫る。

アスタロス：「やらせるか!!」 「ジ・エンド」!!」

グニャアアアッ グッ グッ グンツ ドガアアアアン!!

アスタロス：「くっ!!」「ジ・エンド」!!!

ズバアアアアアアン!

エクスカリバーは空間ごと相手の技を叩き斬りゴールに吸い込まれた。

3 ー 1 魔界ボールで試合再開。

グラーシャ：「バルバトス!!」

龍也：「させるか!!」「ゴー・トウ・ヘル・V3」!!!

ドグシャアアアツ!!

グラーシャ：「ぐぎゃあつ?!!」

グラーシャがパスを出す寸前で「ゴー・トウ・ヘル」を返してボールを力付くで奪い取る。しかし直ぐにベルゼブとアビゴールがカバーに入ってくる。

ベルゼブ：「止める!!」アビゴール!!

アビゴール：「おう!!」

龍也：「スーパージェラシコ・V3」!!」ギウンツ クンツ ギヤンツ!!

ベルゼブ・アビゴール：「馬鹿な!」

しかし二人を圧倒的なテクニックでいとも簡単に抜き去ると、俺はシュート体勢に入る。

龍也：「喰らえ!!」「真・ダークマター」!!!

第53話：龍也の怒り!! 「ラストリゾートD」!!

4 ー 1。世界連合Bチームリードで、悪魔ボールで試合再開。

メフィスト：「『デビルボール』!!」

相手は必殺技でマークを抜いた。だが……

システイ：「真・ストームウオール!!」

風が相手の身体に絡まり、動きを封じてボールを奪ったシステイ。好かさず黒澤にパスを出した。

ダイヤ：「行きます!!」 「ダイヤモンドレイ・V3」!!」

シュオオオオオン

白銀に輝く光の奔流となったシュートがゴールに迫る。

アビゴール：「バーバリアンの盾」!!」

ガガガアツ!!

相手のシュートブロックによって「ダイヤモンドレイ」は止められた。

アビゴール：「この程度か? グラーシャ!!」

グラーシャ：「バルバトス!!」

龍也：「ぐっ、舐めるなああああああああああ!!!」

ドガアアアアアアンツ!!

アビゴール：「ぐわあああっ?」

誰が見ても相手が有利と分かる体格差の相手を俺はフルパワーで逆に吹き飛ばした。

魔界軍団Z：『『馬鹿な!?(あり得ない!!)』』

龍也：「黒澤!! 行くぞ!!」

ダイヤ：「はい!!」

俺と黒澤が二人でシユート体勢に入る。俺が右足に闇のオーラを、黒澤が左足に輝く光のオーラを込めて同時のツインシユート。するとプラスとマイナスは混ざりあいゼロのシユートとなる。

龍也・ダイヤ：「[ゼロマグナム・G5]!! 行けええええええつ!!!」

ドツギユオオオオオオオオオン!!!

アスタロス：「光と闇が混ざりあったシユートだ!? [ジ・エンド]!!!」

グニヤアアアツ!!

龍也・ダイヤ：「決まれえええええええええ!!!」

ドガアアアアアアンツ!!

バシユウン!!

俺と黒澤のシュートは魔界軍団Zゴールに突き刺さり5-1。たかだか人間如きにまさかここまでやられるとは微塵も思っていなかった為焦る悪魔共。何とかFWにボールを繋いでも……

デスタ：「くそがあつ!! 喰らいやがれ!! 「ダークマター」!!!」

テレス：「真・アイアンウオール」!!!」

ガガガガガガガガアツ!!! バチイン!!

デスタ：「なに!? 俺のシュートを止めただと!?」

テレス：「マーク!!」

テレスからのパスがマークに繋がり……

龍也：「マーク!! デイラン!! 三人であの技だ!!」

マーク：「あの技? ……まさか!? 出来るのか!?」

龍也：「任せろ!!」

デイラン：「OK!! 日本とアメリカのビッグサブライズだ!!」

そして俺達三人はシュート体勢に入る。マークの背後に魔狼が出現し、蹴ったボールを俺とデイランがツインキックで上へと蹴り、跳んでいたマークが止めの一撃。

マーク・デイラン・龍也：「「グランフェンリル・G5」!!!」

ワオオオオオオオン!!!

魔狼の遠吠えとともに連携シュートがフィールドを駆ける。

アスタロス：「魔界のプライドにかけて、これ以上入れさせる物か!! 「ジ・エンド」!!!!」

グニャアアアッ グッ ドガアアアアアンツ!!

アスタロス：「ぐわあああつ!」

またしてもシュートが決まり6-1。魔界ボールで試合再開。

デスタ：「ハア、ハア、く、くそ!!」

ダイヤ：「隙だらけですわ!!」

デスタ：「しまっ……!?!」

もう精神的にも肉体的にも疲労困憊で判断力も精彩を欠いている魔界軍団Z。黒澤が弾いたボールは……

ポスッ

龍也：「……ナイスパス」

デスタ：「っ!! 止めろー……っ!!!」

俺はボールに極大のエネルギーを纏わせて空中から下に落とし、その先に先回りし左足の回し蹴りでボールにスピンをプラスしボールに風の膜をコーティングする。その計り知れないエネルギーを秘めたボールを左足で思い切りシュートした。

龍也：「ラストリゾートD (ドラゴン)・G5」!!!」

俺のシュートと共に暗黒の邪龍がゴール目掛けて突き進む。

アラクネス：「何!?! この強大な力は!?!」

シュートはフィールドの地面を破壊しながらゴールめがけて突き進み邪龍がその大口を開ける。

グララーシャ：「く、喰われる!?!?」

グシャアアアアツ!!!

魔界軍団乙：『『うわああああああああつ!!!』』

アスタロス：「ひっ!! 『ジ・エンド』!!!」

アスタロスも苦し紛れに必殺技で応戦するが空間ごと食いちぎられる。そして……アスタロス：「く、喰われる!! ぐわあああつ!!?」

シュートはまたもや魔界軍団乙ゴールに轟音と共に突き刺さり、7-1。魔界軍団乙ボールで試合再開。だが……

龍也：「まだやるか?」

デスタ：「当たり前、前だ……ゼエ、ゼエ、魔王様が……ッハア、復活なされれば……

ハア、ハア、お前……なんぬ!!」

デスタ：「『ダークマター』!!!」

もう冷静な判断など出来な!?! なったデスタがキックオフシュートを放つて来るが、も

うそのシュートに大した威力は無かった。

龍也：「馬鹿が」

俺はデスタのシュートをダイレクトで下に落とし、左足でスピンをプラスし、左足で思い切りシュートした。

龍也：「ラストリゾートD・G5」!!!

俺のカウンターシュートの「ラストリゾートD」と共に暗黒の邪龍が、魔界軍団Zに止めを刺そうと襲い掛かる。

魔界軍団Z：『『ひっ!? うわあああああああつ!!!』』

ボールは悪魔共を片っ端から薙ぎ倒し、キーパーを吹き飛ばしてゴールに吸い込まれた。

世界連合B 8 1 魔界軍団Z

デスタ：「く、くそが・・・あっ!!」ドサツ

システイ：「龍也さん・・・」

果南：（龍也・・・何か怖い）

8 1 1。世界連合Bチームのリードで、前半終了のホイッスルが鳴った。

|
続
く
|

第54話：ダークエンジェル

前半を終了しハーftimeに入った。だが魔界軍団乙はベンチに戻る力も無く地面に横たわっている。

謎の老人B：「ふむ、魔界軍団乙、試合続行不可能と見なしこの儀式、人間チームの勝利とする!!!」

すると宣言と同時に果南を捕らえていた鎖が外れ、自由になった果南が此方に走ってくる。

果南：「皆!!!」

鞠莉・ダイヤ：「果南(さん)!!!」

ギユウウウウウウウツ!!!

今はイタリアと日本の代表に分かれてはいるが、元は小さい頃から同じ学校の仲良しな三人は抱き合い涙を流しながら喜んでいた。俺はそれをさつきまでの雰囲気は何処へやら、優しい目で見守っている。

マーク：「良かったな。リュウヤ」

龍也：「ああ……」

システイ：「果南!!」

果南：「システイ!!」

ハグウツ!!

果南とフィーベルも抱き合つて喜ぶ。果南は感謝の気持ちをフィーベルに精一杯ぶつける。

果南：「ありがとう・・・!! 助けに来てくれて!!」

システイ：「ライバルでしょ? こんな勝ち方嫌だもん。当然でしょ? ほら、龍也さんが待つてるわよ? 今は譲るから!!」

果南：「わっ!! え、えっと・・・ありがとうシステイ」

友達同士の話が一段落着いたのか果南は俺のところへ駆け寄ってきた。

果南：「龍也・・・・・・・・・・」

龍也：「ゴメン果南。怖かったよな?」

俺の優しい口調に、籠が外れた果南は綺麗なアメジスト色の瞳に涙を浮かべて俺に抱きついてきた。

果南：「龍也!! 龍也あつ!! 凄く、凄く怖かった!! でも、きつと龍也が助けてくれるって思ってた!!! けど、試合中の龍也はそれ以上に怖かった・・・私のために必死になってくれてるのは分かってたけど・・・いつもの優しい龍也が帰ってこないか

もって・・・思った・・・」

果南の瞳からは次々大粒の涙が溢れてくる。それだけ果南を不安にさせてしまったのだろう。

龍也：「ゴメンな。あいつらがどうしても許せなくて。果南を生け贄になんかさせてたまるかってそればかりか考えてたから」

果南：「じゃあ、いつもの・・・私が大好きな龍也に戻ってくれる?」

果南が上目遣いで、どこかで不安を混じらせた目で見つめて聞いてくる。俺は果南の目を見て笑顔で、

龍也：「もちろん!!」

と返した。すると果南に笑顔が戻り俺に抱きつく力を強めてきたので俺も力を少し強めて頭を優しく撫でる。するとその時・・・

?：「おーーーーーい!! 皆ーーーー!!」

「ヘヴンズガーデン」に向かった円堂達が渡辺を連れて合流した。何故か渡辺をさらった奴らも一緒に。

鬼道：「円堂無事だったか!! って何故そいつらも一緒に?」

高海：「鬼道くん、今のセインさん達は大丈夫だよ? ちゃんと分かってくれたから!!」

鬼道：「そうか」

セイン：「しかし、これは・・・」

〔世界連合B 8 ー 1 魔界軍団乙〕

エカデル：「凄まじいですね・・・。話を聞いた時はまさかと思いました。魔界の民が8点も取られたあげく7点もの大量リードを許すとは・・・。流星の私たちも引きましますね」

ギユエール：「あそこで魔界の民もウンウン唸ってるし、少し力を見てみたい気もするわね」

セイン：「そうだな。大海龍也と言ったか？ 我々のキーパーに技を撃つてくれないか？ 無論、加減はいらん」

龍也：「分かった。ちよつと彼処のクモ女が倒れてると場所に邪魔だから退かしてくるな。オラ、邪魔だ」ドガッ

アラクネス：「ぐふっ・・・」ゴロゴロ ドサッ

俺はクモ女を蹴飛ばして無理矢理スペースを空けた。

龍也：「よし、準備良いぞ？」

天空の使徒・人間：『『『『『うわく・・・』』』』』

果南も含めて全員ドン引きしていた。果南に酷いことしたんだからこのくらい当然

だろ？ 解せん。そして天空の使徒のキーパーエノレルがキーパーに入る。

エノレル：「良いですよ」

龍也：「行くぞ？」「スサノオブレード・G5」!!

ドツガアアアアアアアアン!!!

エノレル：「ホーリーゾーン」!!

ホーリーゾーンは俺のシユートの威力を徐々に殺していき、完全に勢いを殺し……
されるわけも無く、あっさりとゴールに突き刺さった。

天空の使徒：『『『!?!?』』』

セイン：「済まない、ちよつとキーパーをやつてくれないか？」

龍也：「はあ、まあ良いけど」

セイン：「行くぞ!!」「ヘブンドライブ」!!

ドツガアアアアアアアアン!!!

セインの天罰とも言える破壊力のシユートが俺に襲い掛かる。しかし俺は冷静
に……

龍也：「ホーリーゾーン・V3」!!

天空の使徒：『『『!?!?』』』

俺はホーリーゾーンをコピーして最終進化で放つ。そしてヘブンドライブの勢いを

完全に殺し、ボールは手のなかに。

アイエル：「話は聞いたけど……」

サキネル：「冗談だとばかり……」

エカデル：「驚きましたね……」

龍也：「んで？ ソコで伸びてる悪魔共をどうにかしなくて良いのか？」

セイン：「ハッ!? そうだった!!」

人間：『『『『『いや、忘れてたんかー』』』』』』い!?『『『『『』』』』』』

セイン：「スマンスマン。では早速……? 魔界の民が居ない!」

グワアアアアアアアアアン!!!

セイン：「ぐっ!? 何だこの力は!」

ギユエール：「ぐううう……!! 心が黒く塗り潰されていく様な!」

天空の使徒のメンバー。だが、セイン、ギユエール、ウイネル、エルフェル、ネネルの五人だけが突如苦しみ出した。だが、他の六人は何が起こっているのか分からず、セイン達に声をかけ続けていた。

アラクネス：「感謝するわ人間共!!」

DESTA：「お前たちのお蔭で、魔王様は目覚められた」

龍也：「何だと!」

セイン：「……………」

エノレル：「ま、まさか!?」

デスタ：「そのまさかだ!! 真の魔王とは俺たち魔界軍団Zの精鋭とお前ら天空の使徒の精鋭の混成チーム「ダークエンジェル」なんだよ!!」

円堂：「ダークエンジェル!?!」

セイン：「ぐっ、悪に意識を支配されるとは……なんたる事……止めてくれ円堂くん!! 我らの手が、汚れぬ内に!! つ……ふふふふふ!! お前たちの魂、寄越すがいい!!」

龍也：「円堂!! 多分セインたちは魔王の力に操られてるんだ。試合で勝てばもとに戻せるかもしれない」

円堂：「分かった!! やるぞ皆!!」

世界連合：「おう!!」

デスタ：「大海龍也って言ったか? テメエだけは絶対に許さねえ!! 人間の分際で俺たち魔界の民にあんな屈辱を味合わせた事、仲間共の魂を頂いて最高の絶望を味合わせてから殺してやるよ!!」

龍也：「殺れるものならな!! 返り討ちにしてやるよ!!」

フォーメーション
ダークエンジェル

G K アスタロス (男)

D F エルフエル (男) ベルゼブ (男) ネネル (男) ヘビーモス (男)

M F ウイネル (男) アラクネス (女) ギュエール (女) メフィスト (男)

F W セイン (男) デスタ (男)

世界連合・真

F W 大海 (男) エドガー (男)

M F 松浦 (女) 鬼道 (男) デイラン (男)

ボランチ マーク (男)

D F 不動 (男) テレス (男) 吹雪 (男) システイ (女)

G K 円堂 (男)

控え 絢瀬 (女)、フィディオ (男)、立向居 (男)、豪炎寺 (男)、高坂 (女)

謎の老人 A：「それでは正真正銘、最後の儀式を始める」

ピーーーーーー!!

試合の幕はきつておとされた。

—
続
く
—

テレスが自信の最強ディフェンス技でシュートブロックに入る。が・・・
ガガガガガガ!! ドガアアアン!!

テレス：「うわあああああああ!!」

相手のシュートは世界トップクラスのディフェンスと言われるテレスのアイアンウォールをあつさりと突き破りゴール目掛けて突き進む。

円堂：「止める!!」「イジゲン・ザ・ハンド・改!!!」

ドガアアアアアアアアアア!!!

セイン：「無駄だ!! 魔王のシュートが人間ごときに止められるものか!!」

バリーイイイイイイイ!!

円堂：「うわあああああああ!!!」

シュートは、円堂の「イジゲン・ザ・ハンド」をあつさりと突き破り、ゴールに突き刺さった。

エドガー：「あのシュート、なんて威力だ・・・」

龍也：「エドガー、ボソボソ」

1-1の同点。世界連合・真のボールで試合再開

龍也：「エドガー!!」

エドガー：「大海!!!」

デスタ：「ふざけやがってえええええ!!!」

アスタロス：「ぐっ、痛てえ」

何とか相手キーパーは起き上がる。2-1。世界連合・真リードで、ダークエンジェルボールで試合再開。ダークエンジェルはパスを繋いでボールはアラクネスに。そこから前線のセインとデスタに縦のセンタリングを上げる。

セイン・デスタ：「シャドウ・レイ!!!」

ドギユウウン!!!

再びセインとデスタの超破壊シュートが襲い掛かるが、そこに吹雪がシュートブロックに入る。

吹雪：「エアバレット・V3!!!」

ガガガアツ!!!

吹雪が作り出した空気の弾丸を「シャドウ・レイ」に思い切りぶつける。しかし威力は殆ど下からず……

テレス：「真・アイアンウォール!!!」

ガガガガガガ!!! バゴオオオオオン!!

テレス：「ぐわあああああ!!!」

今度はテレスがシュートブロックに入るが、やはり「アイアンウォール」もあつさり

と破られる。

円堂：「絶対に止めてやる!!」「イジゲン・ザ・ハンド・改!!」

二回シュートブロックが入り威力は確かに落ちている。が・・・

バリエイイイイイイン!! ザシュウウツ!!

やはり「改」では、シャドウ・レイは止められなかった。

2―2の同点になり、世界連合・真ボールで試合再開。此方も相手の合間を縫ってパスを繋ぎ、ボールは俺に。そして鬼道と不動とシュート体勢に入る。

龍也：「鬼道、不動!!」

鬼道：「いくぞ!!」

鬼道・不動・龍也：「[[「皇帝ペンギン3号・G5」!!!]]」

ドツゴオオオオオオオオオオオオオオ!!

俺達三人の最終進化したシュート究極奥義が、ダークエンジェルゴールに迫る。

アスタロス：「そう何度もやらせるか!!」「ジ・エンド・V3」!!」

相手の必殺技も進化しボールごと空間を捻曲げ「皇帝ペンギン3号」は止められてしまった。

鬼道：「止められたか・・・」

龍也：「まだだ!! 絶対勝つぞ!!」

世界連合・真：『『おう!!』』』』

DESTA：「人間風情が調子に乗るな!! 必ず貴様らの魂を頂いてやる!!」

前半残り10分

世界連合・真 2 1 2 ダークエンジエ

1 続く 1

第56話：激闘!! vs 「ダークエンジェル」!!

相手のゴールキックから試合再開。

アスタロス：「ウイネル!!」

ボールはウイネルに渡り、そこに果南と鬼道がディフェンスに入る。

果南・鬼道：「行かせない!!!」

ウイネル：「無駄だ!! 「エンゼルボール・V2」!!!」

相手の進化したドリブル技は進化前と比べキレとスピードが格段に上がり果南と鬼道をあつさりと抜いき、セインとデスタにパスを出した。

セイン：「行くぞデスタ!!」

セイン・デスタ：「「シャドウ・レイ」!!!」

ドギウウオオオオオオン!!

円堂：「何としても止めてやる!! 「イジゲン・ザ・ハンド・改」!!!」

天使と悪魔の力が込められた強烈な必殺技と円堂の必殺技が激突する。しかし明らかに威力はシャドウ・レイのほうが上。イジゲン・ザ・ハンドはあつさり砕かれボールはゴールに吸い込まれた。

円堂：「くそおおおおおつ!!」

セイン：「思い知ったか人間共!!」

2 ー 3と逆転され、世界連合・真ボールで試合再開。だがここで此方は選手を二人交代する。

エドガー out ↓ 豪炎寺 in

デイラン out ↓ 穂乃果 in

鬼道：「大海!!」

試合再開され、ボールは鬼道を経由しボールは俺に渡る。すると今までのフラストレーションを晴らそうとここぞとばかりに俺を潰しに来るダークエンジェル。

アラクネス：「死にな!!」

ドガアアアツ!!

龍也：「甘めえ!!」

ドガアアアアアアツ!!

アラクネス：「グギヤアツ!!」

俺を潰そうとタツクルを仕掛けて来たクモ女をあつさりと吹き飛ばし返り討ちにす。そして俺がシュートしようかと思っていたら・・・

鬼道：「大海!! こっちに戻してくれ!!」

龍也：「分かった!!」パスッ

鬼道にボールを戻すとキーパーの円堂がゴールから前線へと上がって来た。

マーク：「円堂!? ゴールはどうするんだ!?!」

鬼道がボールを上に乗るとボールに闇のオーラがまとわり更に落雷により雷の破壊力がプラスされる。

鬼道・円堂・豪炎寺：「[[「イナズマブレイクCG（コールグレイト）」!!!]]」

ドガアアアアアアアン!!

三人の新たな「イナズマブレイク」がダークエンジェルゴールに襲い掛かる。

アスタロス：「その程度の技で破れるものか!!」「ジ・エンド・V3」!!!」

相手キーパーは空間をねじ曲げてシュートの威力をボールごと押し潰して消滅させようとする。しかしイナズマブレイクCGに内包されたエネルギーが反発し空間歪曲場をはね除けゴールに突き刺さった。

アスタロス：「馬鹿な!? 一体何故!!」

3―3の同点に追いつき、ダークエンジェルボールで試合再開。ボールはメフィストに渡り……

メフィスト：「[[「デビルボール・V3」!!]]」

高坂を必殺技で抜き去るメフィスト。そしてそのままドリブルを仕掛ける。

穂乃果：「あとちょっとで見切れる!!」

ドリブルで上がるメフィスト。しかしファイベルがデイフェンスに入ると、デスタとセインにセンタリングを上げる。

デスタ：「また突き放してやる!!」

デスタ・セイン：「「シャドウ・レイ」!!!」

ドガアアアアアアン!!!

またもや、光と闇の力を併せ持った魔王のシュートが円堂に襲い掛かる。

龍也：「止める円堂ー！ー！ー！っ!!!」

円堂：「今度こそ止めてやる!! 「真!イジゲン・ザ・ハンド」!!」

ついに最終進化し、威力が極限まで高まった「イジゲン・ザ・ハンド」と「シャドウ・レイ」が激突する。驚くことに最終進化した「イジゲン・ザ・ハンド」は、「シャドウ・レイ」のパワーを全て受け流して止めきった。

円堂：「やったー！ー!! 遂に止めたぞー！ー！ー!!」

デスタ：「バカな!?! 魔王のシュートが人間風情に止められただど!?!」

ダークエンジェル全員に動揺の色が見られた所で前半終了。

— ダークエンジェルベンチ —

デスタ：「糞があああああっつ!!」

ガシヤアアン!!

アラクネス：「デスタ!! 落ち着きなさい!!」

デスタ：「煩え!! 虫けら共があああ、後半タダじや置かねえぞ!!!」

― 世界連合・真ベンチ ―

マーク：「ひとまず、収まったみたいだな」

吹雪：「やつぱり悪魔はキレ方もひと味違うね」

テレス：「うっせえだけじゃん」

龍也：「な? それより円堂、ゴールは任せたぞ?」

円堂：「ああ。任せろ!!」

くくくくくくくくくくくく

謎の老人A：「後半戦開始!!」

ピーーーーー!!!

審判のホイッスルと共にダークエンジェルボールで後半戦開始。ボールはアラクネスからメフィストに渡りメフィストがドリブルで攻め上がって来る。

穂乃果：「止める!!」

メフィスト：「何度やっても同じ事だ。」「[デビルボール・V3]!!」

ボールに悪魔の様な翼と尻尾が生えて高坂の周りを飛び回り突破して相手の足元に戻ろうとした瞬間、

穂乃果：「そこだあああああつっ!!」

バシッ!!

メフィスト：「何い!?!」

デビルボールをカットした高坂はドリブルで上がり豪炎寺にパスをだし、豪炎寺と俺、そして高坂の三人でシュート体制に。

豪炎寺・穂乃果・龍也：「[[「グラウンドファイア・G5」!! 行けええええええつ!!」]]」
火砕流のような爆炎を纏ったシュートがフィールドを焼きながらゴールに迫る。

アスタロス：「止める!!」「[ジ・エンド・V3]!!!」

相手はまたシュートを空間ごとねじ曲げようとするが、ボールが押し潰された瞬間炎の力で熱せられた空気が大爆発を起こしてキーパーを吹き飛ばしてシュートはゴールに突き刺さった。

デスタ：「くそっ!! 何で人間ごときのシュートが止められねえ!?!」

4 1 3、世界連合・真リードで、ダークエンジェルボールで試合再開。しかしこ

ここでまた選手を交代する。

豪炎寺 out ↓ ファイディオ in

| | | | |

メフィスト：「[デビルボール・V3]!!」

ボールが飛び回り高坂を抜いた。が、

高坂：「そこっ!!」バシィッ!

メフィスト：「!? さっきのはマグレじゃなかったのか!?!」

穂乃果：「大海くん、マークさん、ファイディオさん!!」

高坂からのパスを受け取った俺たちは三人でシユート体制に入る。ボールに次々強

烈なスピンを掛けていき止めに三人のトリプルシユート。

龍也・マーク・ファイディオ：「[[「ペルセウスオーヴ」!!]]」

神話の勇者、ペルセウスの剣が地を切り裂きダークエンジェルゴールに襲いかかる。

アスタロス：「[ジ・エンド・V3]!!!」

相手も必殺技で対抗するが、剣は相手の技を容易く打ち砕きゴールに吸い込まれた。

5 | 3、世界連合・真リードで、ダークエンジェルボールで試合再開。だが、D

Fの吹雪を下げて代わりにそのポジションに絢瀬を投入する。

吹雪 out ↓ 絢瀬 in

そして試合再開のホイッスルと同時に攻め上がるダークエンジェル。ボールはアラクネスに渡るが、鬼道がボールを奪い取り果南にボールを託す。

果南：「絵里さん、システイ!!!」

果南がシュートし、そのボールを後押しするように絢瀬が蹴りそのボールを更にシステイが蹴り次に果南と次々蹴りを叩き込みシュートを加速させていく。

果南・絵里・システイ：「『ソード・オブ・ダルタニアン』!!!」

三銃士の1人、ダルタニアンの剣を冠したシュートがダークエンジェルゴールに襲いかかる。

アスタロス：「『ジ・エンド・V3』!!!」

相手は技を発動しようとするが、果南たちのシュートは超スピードで技が発動する前にゴールに突き刺さった。

1 1 1 1 1 1 1 1

6-3。ダークエンジェルボールで試合再開し、見方からのパスを受け取ったセイんとデスタがシュート体制に入る。

セイン・デスタ：「喰らいやがれ!!!」 「シャドウ・レイ!!!」

円堂：「止める!!」 「真・イジゲン・ザ・ハンド!!!」

シャドウレイは進化はしていないが、先程よりパワーが上がっていた。が、それでも

最終進化のイジゲン・ザ・ハンドを破るには足りず、流しきられて止められた。

セイン：「何故だ!? 何故魔王のシユートを、人間ごときが止められる!?!」

円堂：「大海、ファイディオ!!!」

シユートを止めた円堂のゴールキックからのパスを受け取った俺とファイディオは、久し振りにあの技の発射体制に入る。空中で上からファイディオが「オーティンソード」、下から俺が「スサノオブレード」で併せる。

龍也・ファイディオ：「『ダブル・ゴッド・ブレード・V3』!!!」

ドツギユウオオオオオオオオ!!!

ギリシヤ神話の神と日本神話の神、2つの神の剣は1つに融合し、全てを貫く神剣へと姿を変える。

アスタロス：「やらせるものか!!!」 「ジ・エンド・V3」!!!」

相手は必殺技を発動。しかし、俺とファイディオのシユートは空間ごと相手の技をあつさり貫いた。しかし・・・

セイン・デスタ：「まだだああっ!!!」

ドガアアアアアア!!!

何とここで前線から戻って来ていたセインとデスタがツインキックで「ダブル・ゴッド・ブレード」をブロック。しかし明らかに押されているのはセインとデスタの方だ。

第57話：千年祭決着!!

俺とフィディオが「ダブル・ゴッド・ブレード」をゴールに叩き込み、7―3と更にリードを広げる俺達。ダークエンジェルボールで試合再開になる。が、試合は前半とは売って代わり、流れを完全に引き込んだ人間チームペースで進んでいた。

穂乃果 out ↓ 吹雪 in

ここで選手交代。高坂に代わり吹雪がフィールドに戻る。

そしてボールはギユエールに渡り、そこに絢瀬がディフェンスに入る。

ギユエール：「人間ごときが調子に乗るな!! 大人しく魂を寄越しなさい!!」
「エンゼルボール・V3」!!!

絵里：「真・スノーエンジェル」!!!

絢瀬がタイミングを見切り、ボールが足元に戻った瞬間氷漬けにしてボールを奪った。

絵里：「システイナさん!!」パスツ

絢瀬は相手の技が発動される寸前でパスアウト。ボールはシステイに渡り……

ヘビーモス：「行かせるか!!」
「ゴー・トウ・ヘル・V3」!!!

システイ：「マークさん!!」パスッ

システイに対してデیفエンスに入ったヘビーモスが必殺技を放つ。相手が技を發動する寸前でシステイはパスを出し、相手の技をかわす。しかしボールを受け取ったマークにデیفエンスが迫って来る。

ネネル：「ゴー・トウ・ヘヴン・V3!!!」

マーク：「絢瀬!!」パスッ

マークも相手が技を發動した瞬間絢瀬にバックパスを出し、絢瀬と吹雪が二人でシュート体制に入る。

絢瀬が絶対零度の氷エネルギーをボールに込めて吹雪にシュート紛いのキラークラス。それを吹雪は自身の氷エネルギーを込めた右足をボールに振り抜きぶちこんだ。

絵里・吹雪：「氷結のグングニル!!!」

二人のシュートはフィールドにとてつもない冷気を撒き散らし地面を氷らせ突き進む。

ベルゼブ：「グラビティション・改!!!」

相手のシュートブロックが入ったが、それを物ともせずシュートは突き進む。

アスタロス：「これなら止められる筈だ!!」 「ジ・エンド・V3!!!!」

相手がシュートごと空間をねじ曲げてシュートを消し去ろうとする。が、二人の

シュートはその歪曲した空間を氷らせて脆くなった所をシュートの威力で叩き割りゴールに突き刺さった。

アスタロス：「なっ!? くそおおおおおっつっ!!」

8-3、世界連合・真リードで、ダークエンジェルボールで試合再開。そしてここでファイデオがベンチに下がり、エドガーが再びフィールドへ戻る。

ファイデオ out ↓ エドガー in

セイン：「こうなったら貴様ら全員二度と戦えぬ身体にしてくれる!!」

デスタ：「お前たち全員を試合続行不能にすればたとえ点数で負けてても俺達の勝ちだ!!」

果南：「なっ!? 皆気をつけて!!」

デスタ：「無駄だ!! このラストシュートで貴様らはおしまいだ!!! せいぜい後悔しながら潰れて行くがいい!!」

セイン・デスタ：「「シャドウ・レイ・V3」!!」

ただでさえ凶悪な威力を誇っていた「シャドウ・レイ」はこの場面で最終進化。フィールドを削り取りながら猛スピードで突き進んでいく。

鬼道：「何だこのとんでもないパワーは!?!」

絵里：「こんなシュート止められる訳無い!! どうすれば・・・、つて大海くん!? エ

セイン：「この!! よくも私達を!!」

ギユエール：「セイン、こんな奴等に構ってないでさっさと魔王を封印しましょう!!」

セイン：「・・・そうだな。取り乱して済まない」

謎の老人B：「その必要は無い。先ほどの人間と魔王の戦いで魔王が敗れ、魔王は再び深い眠りについた」

セイン：「そうですか」

龍也：「じゃあこれで一件落着かな？」

セイン：「ああ。君たちには本当に迷惑をかけた、済まない。それと、ありがとう!!」

鬼道：「じゃあ俺たちは帰ろう。セイン、悪魔共の処分は任せたまぞ」

円堂：「いつかまた一緒にサッカーやろうぜ!!」

セイン：「ああ、勿論だ!! 私の・・・人間の友人たち!!」

—————

そして俺たちはジャパンエリアに戻り皆と別れて解散した。去り際に絢瀬と決勝トーナメントで本気で闘おうと約束して、

そしてその日の夜、果南は俺にべったりくっついて離れず、俺は煩惱と必死に戦いながら果南にハグされた状態で一緒に就寝した。

| |
| 天界・魔界編
| 続く
|
| E
| n
| d
|

第三章：F F I 世界大会決勝トーナメント

第58話：ロシア戦に向けて

マグニード山での戦いを終えた私たちは次の日、決勝トーナメント一回戦のロシア戦に向けてミーティングをしていた。

久遠：「ロシア代表『パーフェクトスパーク』の恐るべき点は、選手全員が大海と同じキーパーを含めた全ポジションをこなすことが出来る。パーフェクトオールラウンダーであるという所だ。よって、誰がどのポジションで来るのか予想が難しい。そして、シユート、ドリブル、ディフェンス、セービング、どれを取っても高水準であることは間違いない」

千歌：「でも大海くん程のレベルの高さは感じないよね」

果南：「そうだね。技をコピー出来るって訳でも無さそうだし」

久遠：「その通りだ。よってロシア戦までの間、大海を相手に個人技能の底上げと、連携の確認をしながら練習していく。大海には負担をかけるが、頼んだぞ？」

イナズマジヤパン：「『分かりました!!!』」

そして俺たちはグラウンドに出て練習を始めた。だが皆俺に良いようにやられ少し

息が上がっている。だが高坂との1vs1のとき……

穂乃果：「ふっ、ほっ!!」

左右のフェイントで俺を抜きにかかる高坂。だが、その程度で抜かれる俺ではない。

龍也：「そこだあっ!!」

ブロックに入った俺の右足がボールに触れようとした瞬間、高坂は俺も反応しきれない速さで左に切り返し、ルーレットで俺を抜いた。

穂乃果：「えっ? 抜いたの……?」

円堂：「スゴいぞ高坂!!」

ことり：「穂乃果ちゃん凄い!!」

穂乃果：「えっ……、ああうん。(今の何?)」

龍也：(今の高坂の動き、まさか……)

俺は休憩時間に高坂の所に話を聞きに行った。

龍也：「高坂、さっきのは何だったんだ? 何か信じられない速さだったけど、」

穂乃果：「実はさっきね、大海くんがブロックしようとした瞬間、景色がいきなり白黒になって、まるで時間が止まったように皆が遅くなっていたの。ゾーンかと思っただけど、もしそうなら時間が止まったように見えるのはおかしいよね?」

そう。ゾーンに入ると極端に視野が広がり反射神経、身体能力が向上しはするが、そ

んな時間が止まったように見える事はない。となると……

龍也：「《加速世界（アクセルワールド）》か」

穂乃果：「《加速世界（アクセルワールド）》？」

龍也：「ああ。何かの本で読んだんだが、自分に流れる時間を加速させて、周りの時間とのラグを作る事でまるで周りの時間が止まったように見える現象があるらしい。だが、出来る人間は今の地球上で5人居るか居ないかと言われているんだが。言っておくが俺にも出来ない」

穂乃果：「そんな凄い能力なの？」

龍也：「高坂、その力を自分の意思でコントロール出来るようになれ。俺も協力してやる」

穂乃果：「うん!! 分かった!!」

ツバサ：「大海くん、キーパーお願い!!」

龍也：「分かった!!」

そして位置につくとツバサの周りが宇宙空間に変わり、シートと同時に無数の流星となつてゴールに降り注ぐ。

ツバサ：「スターゲイザー・G3」!!」

龍也：「ホーリーゾーン・V3」!!」

ツバサの新たな必殺シールドが放たれる。しかし俺は、天空の使徒のキーパーから盗んだ「ホーリーゾーン」を発動。流星の力を徐々に弱めていき、遂に流星は全て墮とされボールは手の中に。

ツバサ：「やつぱりダメか」

龍也：「でもキーパー技が守備範囲の狭い技なら間違いなく入ってたよ。こういう技は向かって来るの全て止めないとダメだからな」

果南：「龍也、私たちもお願ひ!!」

果南・ダイヤ・吹雪：「行くよ!!」「グランドウェーブ・G5」!!!」

龍也：「ジ・エンド・V3」!!」

今度は魔界軍団乙のキーパーから奪い取った「ジ・エンド」を使う。俺の「ジ・エンド」は、グランドウェーブを空間ごとねじ曲げて完全に消し去った。

吹雪：「まさか悪魔のキーパー技まで使えるなんて・・・」

聖良：「吹雪くん、私と「氷結のグングニル」やってみませんか?」

吹雪：「僕が絢瀬さんとやった技か。うん、やってみよう!!」

果南：「私も新しいドリブル技作る」

ことり：「私も新技作らないと!!」

そして四人はそれぞれ新技の開発に入り、

豪炎寺：「大海、俺もお前の「ラストリゾートD」を参考にした技を作ったんだが受けてくれないか？」

龍也：「ああ。いゝぞ。」

豪炎寺は空中のボールにエネルギーを纏わせて下に落として左足で回転をかけてボールに風の膜をコーティングしていき、最後に左足でシュート。動きはラストリゾートDと同じだが結果が違っていた。

ラストリゾートDはボールに闇の龍の禍々しいオーラを纏わせるが、豪炎寺のラストリゾートは地面の欠片が岩のように集まり、その塊が集合して龍の姿を形どっている。

シュートはフィールドに潜り出てきては潜りを繰り返してフィールドを風ぎ払いながらゴール目掛けて突き進む。

豪炎寺：「ラストリゾート」!!!」

龍也：「ジ・エンド・V3」!!!」

俺のキーパー技と豪炎寺の「ラストリゾート」が激突する。しかし豪炎寺のシュートは俺の技を突き破りゴールネットを揺らした。

不動：「へえ？ やるじゃん」

龍也：「凄い威力だな今の技。これなら決勝トーナメントでも通用するだろ」

そして円堂がキーパーの練習をしたいと言うので俺と不動が昔やってたシュート技

を受けてもらう事にした。

俺は右から不動は左からボールを挟み込む様に上空へと蹴りあげ俺は左回転、不動は右回転に跳び上がり二人同時に黒いエネルギーをまとった足で蹴り落とした。

龍也・不動：「真・デスメテオ」!!!」

円堂：「真・イジゲン・ザ・ハンド」!!!」

ガカアアアッ!!!

2つのエネルギーはぶつかり合い、押され押し返されを繰り返すパワーは互角だった。まさか円堂がここまで強くなるとは……。

そしてイジゲン・ザ・ハンドはデスメテオを受けきり止めた。

円堂：「危ねー。本の少しでも気を抜いたら間違はなく押しきられてた」

そしてしばらく俺は円堂、立向居、豪炎寺、鬼道、不動、野坂、綺羅、高海、渡辺の練習に付き合い他のメンバー、特に音ノ木坂組は、

穂乃果：「絵里ちゃんやんのデیفエンスを破るには、もつと強力な技と連携が必要だね」

海未：「パスやドリブルなどの基本的な技術もレベルを上げておいて損はないと思います」

ことり：「後、ロシアのデیفエンス技には空中にも影響のある技が無いから私のイカロスフオールは有効だとも思う」

「ここに、そうね。試合は状況によって最善が変わるけど、バックパスとかで意表をつくのも良いかもしれないわね」

海未：「忘れてはいけないのは絵里はDFではなくリベロだと言うこともですね。故にチャンスがあれば絵里はどんどん攻めてシュートを撃つて来ますよ」

「ここに、兎に角！練習してレベルアップするしか無いってことよ。情報は後で集めて置くとして・・・、今は練習しましょう」

音ノ木坂組は仲間との闘いだけあって、敗れたくないと気持ちを高めていた。

（ 続く ）

第59話：完全なる電光石火（パーフェクトスパーク）

ロシア戦前夜、俺と高坂は高坂が使った特殊技能《加速世界（アクセルワールド）》の制御練習をしていた。

龍也：「どうした高坂!?! 能力使え!!」

穂乃果：「それが発動出来ないんだよね。前みたいに景色が白黒にならないし……、何かトリガーがあるのかな?」

俺は高坂が初めて《加速世界》を発動したときの話を聞くことにした。

穂乃果：「あの時は今のままじゃダメだつて焦ってたよ。決勝トーナメントは一度敗けたら終わり……、このメンバーで世界一になりたいの!!」
つて。その後だよ。発動したのは」

龍也：「そうか。なんだろうな」

穂乃果：「もう今日は終わりにしない? 明日はロシア戦だし、疲れが残っちゃおうよ?」

龍也：「分かった」

結局、高坂の《加速世界》は完成せずに、ロシア戦を迎えた。

— オオカミ島・オオカミスタジアム —

実況：「いよいよF F I 決勝トーナメント一回戦第3カード、日本代表「イナズマジヤパン」vs ロシア代表「パーフェクトスパーク」の一戦がここ、オオカミスタジアムで始まろうとしています」

解説：「決勝トーナメント一回戦は各ブロック同時にヤマネコ島でイタリアvs コロンビア、コンドル島でチリvs ブラジル、クジヤク島でベルギーvs コトアールが行われます。さあ、両チームスターティングメンバーが発表されます。」

ロシア

G K

ユーリ (男)

D F

絢瀬 (女)

カルル (男) アレクセイ (男)

ラビ (男)

M F

グエンナデイ (男)

ルース (男) ヴイクトル (男)

マール (男)

F W

マリク (男) フロイ (男)

日本

F W

吹雪 (男)

豪炎寺 (男) 南 (女)

M F

松浦 (女)

鬼道 (男) 園田 (女)

D F

鹿角 (女)

大海 (男) 風丸 (男) 優木 (女)

G K

円堂（男）

審判：「試合開始!!」

ピーーーーーーッ!!!

審判のホイッスルと共に、いよいよ決勝トーナメント初戦が幕を開ける。イナズマジャパンボールで試合開始し、鬼道がボールを持つと相手のMFが二人がかりでプレスに来た。

鬼道：「園田!!」

ボールは園田に渡り相手のサイドが止めに入る。ロシアは選手がやや右に寄っている。

園田：「かかりましたね。「ストライクアロー・改」!!!」

弓で射た矢の様な鋭いボールがグラウンダーで飛んでいく。

マール：「シュート!? いや違う・・・パスだ!!」

園田のパスは一撃必中の矢の如く、相手のディフェンスラインの裏を取った左サイドの吹雪へと渡った。

カルル：「しまっ!?!」

吹雪：「豪炎寺くん!!」

吹雪・豪炎寺：「「クロスファイア・改」!!!」

豪炎寺と吹雪の、炎と氷が混じり合った超威力のシュートがロシアゴールを襲う。

ユーリ：「ツッ・マンデ・ゴラン・V2」!!!」

相手キーパーの後ろに巨大な右手が現れ親指と人差し指でシュートを摘み潰した。キーパーは、右拳と左拳で挟み込む様にして止めていた。

ユーリ：「絵里!!」

キーパーのゴールキックからボールは絢瀬へ。そこに果南がディフェンスに入る。

果南：「行かせない!!」

絵里：「ホワイトブレード・V3」!!!」

絢瀬が技を発動すると絢瀬の周りを氷の輪っかが囲みパチンと指を鳴らすと氷の輪が砕け鋭利な刃物の様な礫となり襲いかかった。

果南：「キャアアアアッ!」

龍也：「果南!!」

絵里：「フロイ、マリク!! 行くわよ!!」

そして前線へと攻め上がった絢瀬と、フロイ、マリクが三人でシュート体勢に入る。すると、全てを凍らせてしまうような絶対零度の猛吹雪がボールを凍らせ纏わり付く。

絵理・フロイ・マリク：「「トリプルブリザード・G4」!!!」
「」

ロシアの超強力な連携シュートが放たれる。しかし俺がシュートブロックに入

り……

龍也：「真・アイアンウォール」!!!」

ガガガガガガガガ!! バチイイイン!!

テレスの技を使い、「トリプルブリザード」を止めた。

マリク：「今のはアルゼンチンの……」

フロイ：「やっぱりそう簡単に点は取れないね」

そしてボールを持った俺はロングシュートを放つ。ボールに極大のオーラを纏わせ、それをオーバーヘッドで下に落とし、先回りして左足の足払いでボールに回転力をプラスし空気の幕をコーティングする。

龍也：「お返しだ!!」 「ラストリゾートD・G5」!!!」

俺の放ったシュートと共に、黒い邪竜が地を這いながらロシアゴールを強襲。

ユーリ：「ツー・マンデ・ゴラン・V2」!!!」

ガガガガガガアアツ!!!

ユーリ：「ぐううううううう!!!」

ロシアのキーパーも必殺技を発動。必死に堪えるが、明らかに押されている。

ドガアアアアアアン!!!

ユーリ：「ぐわあああああつ!？」

そして俺のシュートはキーパーを吹き飛ばし、ロシアゴールに轟音と共に突き刺さった。

実況：「……………ゴ、ゴー………日本先制………!!!」

解説：「何ですか……………？　今のシュート……………とてつもないパワーでしたよ？」

1-0と日本リード。ロシアボールで試合再開。

ヴィクトール：「マール!!」

相手がドリブルで上がってきたので優木がディフェンスに入る。が……………

マール：「ルース!!」

大きな横のパスで一気に中に入れてきて俺との1vs1になる。

ルース：「真・イナビカリダツシュ!!」

龍也：「何?」

ルースは俺を抜き、フロイとマリクにパスを出す。

フロイ・マリク：「真・ダブルヘッドイーグル!!!」

双頭の鷲から放たれたシュートがイナズマジャパンゴールを襲う。

円堂：「真・イジゲン・ザ・ハンド!!!」

ガガアアアッ!!!!

円堂：「うおおおおおおああああっ!!!」

バリイイイイイン!!

何と魔王のシュートを止めた「真・イジゲン・ザ・ハンド」をロシアのシュートは粉砕し、日本ゴールに突き刺さり1ー1の同点に。試合はまだ始まったばかりだ。

く 続く く

第60話：天空の力を持ちし龍

1 1の同点になりイナズマジヤパンボールで試合再開しボールは園田に。
海未：「ことり!!」

園田は南にパスを出し、受け取った南は背中に翼を顕現させ空高く飛翔しシュート体制に入る。

ことり：「イカロスフォール・V3」!!!

ドツガアアアアアアン!!!

太陽光が収束され熱線化したボールがとてつもないパワーと速度で急降下してくる。しかしキーパーは冷静に対処し……

ユーリ：「ツー・マンデ・ゴラン・V3」!!!

グシャアアアアツ!!!

進化した技は、南の「イカロスフォール」を押し（摘まみ）潰して止めた。

ユーリ：「アレクセイ!!!」

アレクセイ：「行くぞ!! 必殺タクティクス!!」

パーフェクトスパーク：「<オーロラウエーブ>!!!」

イナズマジャパンの周りをオーロラが包み視界を遮断し孤立させる。オーロラが晴れたときにはすでにボールはゴール前に。

ヴィクトール：「フロイ!!!」

日本のゴール前でロシアキャプテンのフロイが完全フリーでシュート体勢に入る。

フロイ：「行くよ!!」「イノセントドライブ・改!!!」

ステンドグラスが割れるエフェクトから、日本ゴールに白銀のイカズチが落ちる。

円堂：「真・イジゲン・ザ・ハンド!!!」

ガガアアアツ!! ギュルルル ギューーン!

円堂も負けじと必殺技で対抗。ボールはドーム状のオーラの上を滑りゴールの枠から外れていった。

フロイ：「やるね!」

円堂：「何てパワーだ・・・」

そして円堂のゴールキックからボールは前線にオーバーラップしていた風丸に。渡り、そのまま吹雪との連携シュートの体勢に入る。

風丸：「吹雪!! 行くぞ!!」

吹雪がエターナルブリザードの要領で氷漬けにしたボールは渦巻くブリザードに乗り上昇していき、それを風丸が突風を纏った跳び蹴りでシュート。

風丸・吹雪：「「ザ・ハリケーン・V3」!!!」

ブリザードを越えたブリザードが、ロシアゴールを襲う。

カルル：「マトリョーシカプリズン」!!」

しかしロシアもただでは通さないとシュートブロック。シュートの上と下から巨大なマトリョーシカが現れシュートの中に閉じ込める。が、シュートはブロックを突き破り尚も進む。

ユーリ：「ツォ・マンデ・ゴラン・V3」!!!」

ブロックにより、威力が減衰していたシュートはあつさり止められてしまい……
ユーリ：「絵里!!」

キーパーのゴールキックから、ボールは絢瀬に渡った。

絵里：「必殺タクティクス!!」

パーフェクトスパーク：「<オーロラウエーブ>!!」

龍也：「またか!!」

ロシアの発生させたオーロラのカーテンが俺達の視界を遮り孤立させる。オーロラが晴れると、日本のゴール前で絢瀬、フロイ、マリクの三人がシュート体制に入っていた。

絵里・フロイ・マリク：「「トリプルブリザード・G4」!!!」

ギユオオオオオオオオオオオン!!!

襲い掛かるロシアのシュート。円堂は一步も退かずに必殺技で迎え撃つ。

円堂：「止める!!」「真・イジゲン・ザ・ハンド」!!!

ガガアアアツッ! パキパキ バリイイイイイン!!!

しかしシュートは、ドームオーラに激突した瞬間にオーラを凍らせ、脆くなった所をそのパワーで叩き割り、そのまま日本ゴールに突き刺さった。

実況：「ゴーーーーーボール!! ロシア逆転!!」

解説：「三人の息の合った素晴らしい連携シュートでした。日本ここから建て直せるか」

2 ー ーと逆転され、日本ボールで試合再開。ボールは鬼道から俺に渡る。

鬼道：「大海!!」

フロイ・マリク：「行かせるか!! (ない!)」

龍也：「エンゼルボール・V3」!!!

ボールに天使の羽と輪っかが生え二人の周りを飛び回り攪乱。俺が突破したところで足元に戻りボールも元に戻る。

フロイ：「な、なんだ!?! この技は!!」

マリク：「あれはまさかこの間絵里が言ってた!?!」

第61話：果南と高坂のW（ダブル）覚醒!!

俺の「ヘブンドライブ」がロシアゴールに突き刺さり2―2の同点になり、ロシアボールで試合再開。

く く く く く く く

龍也：「果南にボールを？」

果南：「うん。私が高1の時から研究してた技が一昨日ようやく完成したの。私に任せて!!」

龍也：「分かった」

く く く く く く く

キックオフからボールはルースに渡りそのままドリブルで攻め上がって来る。そこに果南と鬼道がディフェンスに入るが……

ルース：「行くぞ!!」

果南と鬼道が二人がかりでディフェンスに入るが、「イナビカリ・ダツシュ」の圧倒的なスピードの前にあっさり抜かれた。が、発動終了直後の一番無防備な所を狙い……

龍也：「ゴー・トウ・ヘル・V3」!!!

ドゴオオオオオン!!!

ルース：「くっ!!」

俺はボールを奪い取り、果南にパスを出した。

果南：「行くよ・・・」ダッ!!

果南がすごい勢いでドリブルで上がって行く。ロシアは二人で止めに来るが、ここで果南の新たな力が発動する。

果南：「《属性付与：雷》!!!」

果南：「マーメイドダイブ《雷》・V3!!!」

果南の水中機動に雷のようなスピードと鋭さがプラスされ、抜いた瞬間、ディフェンスに対し放電^{スパーク}。感電したディフェンスを置き去りにし抜き去った。

今までのデータに存在しない果南の力に焦るロシア。絢瀬がディフェンスに入ることが・・・

絵里：「止めるわ!!」「真・スノーエンジェル!!」

果南：「《属性付与：炎》!!!」

果南：「ウォーターベール《炎》・V3!!!」

果南の水柱に火柱が混ざりスノーエンジェルの冷気を炎の熱で相殺し、残ったパワーで絢瀬を吹き飛ばした。

絵里：「きやあああつ!!」

そしてゴールキーパーとの1vs1になり、

ユーリ：「来い!!」

果南：「《ダブルエンチャント・サンダー・雷・闇》!!!」

果南：「《激流ストーム・サンダー・雷・闇》・G5」!!!」

果南の激流ストームに雷のスピードとパワーがプラスされ、そして闇の力が全体のパワーを押し上げる。

ユーリ：「ツー・マンデ・ゴラン・V3」!!!」

ドガアアアアアアアアツ!!!

ユーリ：「ぐっ!! 何だ!! このパワー!!?」

今までのデータを遥かに凌駕する威力の果南の「激流ストーム」。キーパーも必死になつて押さえ込むが……

バギアアアアアアアアンツ!!!

ユーリ：「うわあああああつ!!!」

相手キーパーを吹き飛ばし、シユートはゴールに突き刺さった。

3―2と逆転し返し、ロシアボールで試合再開。

フロイ：「必殺タクティクス!!」

パーフェクトスパーク：「くオーロラウェーブ>!!」

キックオフと同時にロシアはこの厄介なタクティクスを発動。オーロラが日本の選手の視界を遮り孤立させ、晴れたときには既にボールはゴール前。

フロイ・マリク：「真・ダブルヘッドイーグル」!!」

円堂：「真・イジゲン・ザ・ハンド!!」

ロシアのシュートが円堂に襲い掛かる。円堂も必殺技で対抗するが、やはり威力に押されてしまい……

ドガアアアアアアッ!!!

シュートはバリアを叩き割ってゴールに突き刺さった。

円堂：「くそっ!!!」

く イナズマジヤパンベンチ く

ツバサ：「ダメね。せっかく決めてもあのタクティクスで直ぐに決め返される。」

不動：「あとひとつ、何か決定打が足りねえ」

久遠：「……高坂、行けるな?」

穂乃果：「えっ!?!でも……」

千歌：「監督!! 穂乃果さんの《加速世界》はまだ未完成なんですよ!?!」

久遠：「未完成？ だったら試合中に完成させればいい。実戦以上の環境は存在しない」

穂乃果：「分かりました。行きます!!」

久遠：「よし、選手交代!! 南ことりに代わり、高坂穂乃果!!」

out 南 ↓ in 高坂

ことり：「ごめん。何も出来なかった」

穂乃果：「何言ってるの!! ことりちゃんのシュートスゴかったよ。後は任せて!!」

絵理：「穂乃果・・・出てきたわね」

久遠：「全員高坂にボールを集める!! この試合中に、《加速世界》を完成させる!!」

海未：「はあ、監督も無茶を言いますね」

龍也：「俺はああいうの好きだぜ?」

円堂：「よし、行くぞ皆!!」

日本ボール、3 ー 3で試合再開。

鬼道：「高坂!!」

穂乃果：「つ!!」

ヴィクトール：「行かせませんよ!!」

高坂にボールが入り、そこにヴィクトールがディフェンスに入る。

穂乃果：「ライトニングアクセル・V3」!!!

ギユン ギユンツ!!

ヴィクトール：「その程度ですか!!」

穂乃果：「うそ?!」 「ライトニングアクセル」に着いてきてる!! やっぱり《加速世界》しか・・・)

すると高坂は何と目を閉じた。

日本・ロシア：『『『『『?!?!?!?!?!』』』』』』

ヴィクトール：「隙だらけです!!」

穂乃果：「そこっ!!」

海未：「抜いた!!」

高坂は何とかヴィクトールを抜いたが、すぐ後ろに控えていたアレクセイに捕まってしまう・・・

アレクセイ：「真・マトリョーシカプリズン」!!!

ドゴオオオン!!

穂乃果：「キャアツ!!」

高坂はボールを奪われてしまう。

アレクセイ：「お前に我らのディフェンスは破れない!!」

穂乃果：(やつぱりダメだ!! 今のままじゃ!!)

アレクセイ：「フロイ!!」

海未：「させません!!」

しかし園田は相手の隙を突き、ボールを奪い高坂に戻した。

穂乃果：「海未ちゃん!?!」

海未：「フオローは私たちに任せて下さい!! 貴女が《加速世界》を完成させるまで私たちがフオローします!!」

穂乃果：「でも!! 私の力じゃ!!」

海未：「穂乃果は自分のやるべきことに集中してください!! それとも、そんなに私たちは頼りないですか!?!」

穂乃果：「そんな訳! 「だったら!!」!?!」

龍也：「お前は自分を信じて突き進め!! お前の長所は、どこまでも前に向かって突き進める所だろ!!」

円堂：「そうだけ高坂!!」

吹雪：「高坂さん!!」

ことり：「穂乃果ちゃん!!」

海未：「穂乃果!!」

穂乃果：（そうだ……。私は一人で戦っている訳じゃない。こんなにも頼りになる皆と……。仲間と一緒に戦ってるんだ!!）ダツ!!

龍也：「高坂!!」

穂乃果：「龍也くん!! サポート宜しく!!」

龍也：「っ!?フツ、ああ任せろ!! 穂乃果!!!」

カルル：「行かせない!」

穂乃果：クツ ギュンツ!!

カルル：「なっ、速い!!」

ヴィクトール：「行かせませんよ!!」

ギュンツ!

ヴィクトール：「貰います!!」

穂乃果はボールを奪われるが、直ぐに俺が奪い返してボールを穂乃果に戻す。

龍也：「返して貰うぜ!!」

ヴィクトール：「くっ!!」

龍也：「穂乃果!!」パスツ

穂乃果：「ありがとう龍也くん!!」

この様子を、絢瀬は焦った様子で見っていた。

絵里：(さつきより調子が上がってきている!! このまま調子に乗せるとマズイ!!)

穂乃果：「行くよ絵里ちゃん!!」

絵里：「絶対に行かせないわ!!!」

龍也：「行けええええええええつ!! 穂乃果ああああああ!!!」

穂乃果：(跳ぶんだ!! どこまでも!! 世界の頂きまで!!!)

その瞬間、私を見る景色は色を失い、私の意識は時間が止まったような空間に落ちた。

穂乃果：「行くぞおおおおおおお!!!」

ギョーンツ!!!

絵里：「えっ!? 穂乃果!? どこいったの!!」

マリク：「絵里!! 後ろだ!!!」

絵里：「なっ!?(速いとかそんな次元じゃない!! まるで時間が飛んだみたいに!!)」

ユーリ：「止めてや・・・!!」

シュンツ!!

ユーリ：「・・・は?」

ボールは、気づいた時には既にゴールに吸い込まれていた。

そしてここで、前半終了のホイッスルが鳴った。

） 日本
続く 4
） 1
3
ロシア
前半終了。

第62話：激闘!! 後半戦!!!

穂乃果が《加速世界》に入り一点を決めて4　―　3になった所でハーフタイムに入る。

海未：「穂乃果!!　ついに出来たじゃないですか!!」

ことり：「うん!!　穂乃果ちゃん凄い!!」

穂乃果：「うんっ!!　よくし!!　ガンガン行くよ!!」

龍也：「あく、その事なんだけどな、あまり連続発動はしない方がいいと思うぞ?　俺の《完全無欠の模倣》や果南の《属性付与》そして穂乃果の《加速世界》は技じやなくて特殊技能っていうのに分類されるんだけど、身体への負担が大きいんだ。あまり連続すると身体を痛める可能性がある」

穂乃果：「そうなの?　果南ちゃんも?」

果南：「そうだね。私もまだ、2と3発の連続発動を1試合に5回が限度かな。単発で1発毎に3分位のインターバルを入れれば1試合は使い続けても持つと思うけど・・・」

龍也：「俺は小さい頃からこの力があつたから必然的に耐えられる身体になつたんだよ。身体の防衛本能っていうのかな?」

穂乃果：「そっか……。じゃあここぞと言う場面で使うよ。教えてくれてありがとう
！龍也くん!!」

龍也くん、穂乃果が俺をそう呼ぶと果南がジト目で睨んできた。

龍也：「な、何？」

果南：「別に？　ただ、穂乃果ちゃんと急に仲良くなったなと思つて」

千歌：「分かった!!　果南ちゃん嫉妬しゅ……」

果南：「いちいち言わなくていい!!」

龍也：「なんだ。果南は可愛いなあ。そんな心配しなくても大丈夫だよ」

俺は果南を優しくハグして頭を撫でてやると果南は顔を真っ赤にして「うるさい……」

／／／と、ヤバイめっちゃ可愛いお持ち帰りしたい。つてそれはマズイな。

女子は微笑ましい物を見るような、男子は呆れたような目で見てくる。

久遠：「まあ大海と松浦の夫婦漫才がおwっ」「まだ夫婦じゃない!!」「喧しい。後半は

園田と不動、吹雪と黒澤、交代だ。後の細かい指示は鬼道に任せる。行つてこい」

イナズマジヤパン：『『はい!!』』

o u t 園田 ↓ i n 不動

o u t 吹雪 ↓ i n 黒澤

審判：「後半戦開始!!」

ピーーーーーーーーー!!!

審判のホイッスルと共にロシアボールで後半戦が始まった。ボールはフロイに渡り、必殺タクティクスの構えに入る。

フロイ：「必殺タクティクス!!」

パーフェクトスパーク：『『オーロラウエー．．．!?!?』』

相手がくオーロラウエーブを発動しようとした瞬間、穂乃果は《アクセルワールド加速世界》を発動してボールを奪った。

マリク：「バカな!?! 幾らなんでも速すぎる!?!」

穂乃果：「《アクセルワールド加速世界》解除!!」 龍也くん!!!」

龍也：「上出来だ!! 行くぞ穂乃果!!」

オーバークラップしていた俺がボールを受け取り穂乃果と二人でシユート体制に入る。

まずは穂乃果が「サンシャインストーム」の様にボールに超高温の炎を纏わせそれが俺が「ラストリゾートD」の様に回転と闇のオーラを込めてオーバーヘッドで下に落とす。そして穂乃果の炎を纏った左足の足払いで更に回転と火力をプラスし、最後に二人

ドツギヤアアアアアアアン!!!

相手のシユートは最終進化しイナズマジヤパンゴールを襲い掛かる。

あんじゅ：「止められなくても!!」 「真・アステロイドベルト」!!!

ドガガガガガガ!!!

無数の隕石の大群が次々シユートにヒットし威力を削いで行く。しかし尚もシユートは突き進む。

風丸：「エアーバレット・V3」!!!

ガカアアアツ!!!

今度は風丸の作り出した空気の弾丸がシユートにヒット。更に威力を削ぐがまだ突き進む。

円堂：「ナイスだ二人共!!」 「怒りの鉄槌・V3」!!!

ドグシヤアアアアアツ!!!

二重のシユートブロックと怒りの鉄槌でシユートを叩き潰して止めた。

円堂：「松浦、黒澤!!」

そして円堂のゴールキックからボールは前線の果南と黒澤に渡り二人はシユート体勢に入る。

果南：「つと、ダイヤ!!」 行くよ!!

ダイヤ：「はい!!」

黒澤がイギリスのドリブル技、ウルトラムーンの宙返りに似た動きでボールを上に乗せるとボールの背後に綺麗な満月が出現。其を果南が《属性付与：光》エンチャントライトを宿した右足でオーバーヘッドキック。

ダイヤ・果南：「「ムーンライトブラスタ」!!!!」

ドツギユウオオオオオオオオン!!!

満月から夜のエネルギーが込められた光線が放たれロシアゴールを襲う。しかしそこに再びアレクセイとカルルの二人がシュートブロックに入る。

アレクセイ・カルル：「「クレバスウォール・V2」!!!!」

ドガアアアアアアアツ!!

シュートは氷の峡谷に激突し威力を削がれたがそれでも突き破り進む。

ユーリ：「ツォ・マンデ・ゴラン・V3」!!!」

ドグシャアアアアアツ!!!

そして、シュートブロックプラス、キーパーの必殺技で、「ムーンライトブラスタ」は仕留められてしまう。

果南：「そんな!?!止められた!?!」

ユーリ：ふん、このくらいで点はやらん!! (あつ危ね〜!! 何てパワーだ!? ブロッ

クがあっても、もし「マトリョーシカプリズン」だったら完璧にきめられてた!!」

ユーリ：「フロイ!!」

キーパーのゴールキックから、カウンターで前線のフロイにボールが飛ぶ。

龍也：「しまっ!? 戻れ!!」

フロイ：「よしフリーだ!!」 「真・イノセントドライブ!!!」

フロイの最終進化の必殺シュートがノーブロックで円堂に襲い掛かる。

円堂：「絶対に止める!!」 「真・イジゲン・ザ・ハンド!!!」

ドガアアアアアアッ!!!

円堂：「ぐううううううう!!!」

シュートが「イジゲン・ザ・ハンド」のオーラn激突する。円堂も必死に抗うが……
バリーイイン!!!

改の状態では止められた「イノセントドライブ」も、最終進化されてはさすがに止め
きれず、無情にもシュートはゴールに突き刺さった。

日本 5 ー 4 ロシア

― 続く ―

第63話：タイムアップ!!

フロイのイノセントドライブが突き刺さり5　ー　4だが、尚も日本リードで日本ボールで試合再開。

豪炎寺：「鬼道!!」

審判の笛と同時に豪炎寺はボールを鬼道に預けゲームメイクを任せる。鬼道は相手のスライディングをジャンプで躲して果南へパスを出す。しかし絢瀬がディフェンスに入り……

絵里：「行かせない!!」「真・スノーエンジェル!!!」

ガキイイイん!!!

絢瀬は果南を氷漬けにしてボールを奪いヴィクトールにパスを出す。

龍也：「させるかよ!!!」

中盤まで上がって来ていた俺はパスボールを空中で奪い、穂乃果にパスを出す。パスを受けとった穂乃果はドリブルで攻め上がるが……

ラビ・アレクセイ：「ツンドラドーン・改」!!!」

ロシアのディフェンスに捕まり、穂乃果を囲うように地面から巨大な氷柱が生え、

段々と動ける範囲を狭めるように次々生えていき最後に足元からドカン!と極大の水柱が生えて穂乃果を吹っ飛ばした。

ラビ：「ルース!!!」

ルースが見方からのパスを受け取る直前に鹿角の「スノーマウンテン」でのパスブロックでボールを奪い取る。

聖良：「果南さん!!!」

絵理：「何度でも止めるわ!!」「真・スノーエンジェル」!!」

果南：「《属性付与：雷》!!!」
エンチャント サンダー

果南：「マーメイドダイブ《雷》・V3」!!!」
サンダー

雷の特性がプラスされた果南の「マーメイドダイブ」は絢瀬の氷の包囲網を突破して抜き去った。

果南：「ダイヤ、穂乃果さん!! 行くよ!!!」

果南、黒澤、穂乃果の三人は黒い三角形のエネルギを形成しながら天高くジャンプして成層圏まで到達すると黒いレーザー光線とともにボールを蹴り落とした。

果南・ダイヤ・穂乃果：「「ラスト・デスゾーン・G3」!!!」

遙か上空から、物凄い威力のシュートが、落下の影響を受けてどんどんパワーとスピードを増しながら降って来る。キーパーも必殺技の体勢に入るが……

ユーリ：「ツ・マンデ・ゴラン・V3」!!!
ドガアアアアアアアツ!!!

ユーリ：「ぐううおおおおおお!!」

ユーリは必死に堪える。しかしどんどんゴールの方に押し込まれて行き……
フロイ：「止める!! 何としても!! ここで入れられたら終わりだぞ!!」

ユーリ：（くっ、駄目か……）

ユーリが勢いに押され、ダメだと誰もが思った瞬間!!

絵里：「アレクセイ!!!」

アレクセイ：「おう!!」

ガシッ! ガシッ!!

ユーリ：「二人とも!？」

絢瀬とアレクセイの二人が後ろからユーリの身体を支える。

絵里：「絶対に止めるわよ!!!」

ユーリ：「……ああ!!」

ユーリ・絵里・アレクセイ：「ハアアアアアアアアアア!!!」
「」

バシイイイイッ!!! シュルルル

三人で協力し、「ラスト・デスゾーン」を見事止めた。

実況：「止めたーーーーー!!! 三人がかりのキャッチで、「ラスト・デスゾーン」を見事止めましたーーーーー!!!」

ダイヤ：「そんな!？」

ユーリ：「フロイ!!!」

そしてカウンターのゴールキックから、ボールは前線のフロイへ……

フロイ：「任せろ……!？」

後半残り僅か、何とか同点にして延長戦に持ち込めるかもしれない。微かな希望が見えた瞬間……、「絶望^{龍也}」がやって来る。

フロイ：「っ!? 止めろーーーーー!!!」

フロイがトラップする瞬間を狙い龍也は一気にインターセプトしボールを奪い取る。ロシアは全員で俺を止めに来るがそのすべてを弾き返し、受け流し、躲し、あつという間にゴール前に。

ユーリ：「くそ!! 来い!!!」

龍也：「フリーズゲイザー・V3」!!!」

ドガアアアアアアン!!!

そして、俺の必殺シュートが放たれる。ロシアキーパー、ユーリも必殺技で対抗するが……

ユーリ：「止める!!」「ツー・マンデ・ゴラン・V3」!! つ、うわああああああ
!？」

ザシユウツ!!

そんな物は五秒も持たずに、シュートはゴールネットに突き刺さった。

ピッ、ピッ、ピイイイイイ!!

実況：「ここで試合終了のホイッスル!! 6 | 4で、イナズマジヤパンがロシア代

表「パーフェクトスパーク」を下したoooooooo!!!」

絵里：「負けちゃったか・・・」

穂乃果：「絵里ちゃん・・・」

絵理：「まったく、勝ったんだからそんな顔しないの。この大会が終わったら私は音ノ木坂に戻るから卒業までには一緒にやりましょ? でも、もしかまた闘う事があつたら次こそ私たちが勝つ!! だから、またやりましょ?」

穂乃果：「!! うん!!!」

そしてロシア代表はフィールドを後にした。

| ロシア side |

フロイ：「絵里・・・。あんな見え見えのやせ我慢じゃあ綺麗でも役者は無理だね」

ボンボン

絵里：「うつ、ひつぐ!! 勝ちだがつた……。わだじ、皆と勝ちだかつたあ……。!!!」
グスツ ウウウ ヒツグ

ユーリ：「絵里……。」 ポンポン

ヴィクトール：「クソツ!!」

マリク：「敗けた……。っ!!」

こうしてイナズマジャパンは準決勝へと駒を進め、ロシアは決勝トーナメント一回戦で姿を消した。

— 続く —

第64話：「ザ・キングダム」の闇

決勝トーナメント一回戦の4戦が終わりベスト4が出揃った。

1つはイタリアvsコロンビアの勝者イタリア代表「オルフェウス」

2つめはベルギーvsコトアールの勝者コトアール代表「リトルギガント」

3つめ、チリvsブラジルの勝者ブラジル代表「ザ・キングダム」

そして4つめ、日本vsロシアの勝者日本代表「イナズマジヤパン」。

そして準決勝でイタリアvsコトアール、日本vsブラジルが激突する。そして一回戦の次の日の早朝、俺は朝ごはんまで少し身体を動かそうとグラウンドに出るところだった。

龍也：「ふわぁ、よく寝た〜!! 少し身体を動かすか」

？：「すまない、少しいいか？」

声のした方を見るとパーカーのフードで顔を隠した男が立っていた。

龍也：「あん？ 何だお前？」

？：「ああ悪い。これでいいか？」

男がフードを脱いで顔を表す。

龍也：「!? マック・・・ロニージョ!?」

ブラジル史上最強、「キング・オブ・ファンタジスタ」と呼ばれる男が立っていた。

ロニージョ：「すまない。ミスター円堂と話をしたいんだ。呼んできてくれないか？」

龍也：「あ、ああ。分かった。裏の海岸で待っていてくれるか？」

そう言つてロニージョに待ってもらい、俺は円堂を呼びに行った。

円堂：「悪い!! 待ったか!」

ロニージョ：「ああ・・・良いよ・・・」

円堂：「? どうした?」

ロニージョ：「イナズマジャパンはとても強いチームだ。本当なら、全力で闘いたかったけど・・・」

そして、ロニージョは信じられない言葉を口にする。

ロニージョ：「イナズマジャパン、今度の試合・・・敗けてくれ」

円堂・龍也：「え?」

ロニージョ：「勿論タダでは言わない。俺たちが優勝したら、優勝賞金から金を・・・」

龍也：「ふざけるな!! お前は仮にも代表のキャプテンだろ!? そんなお前が、八百長

を頼みにくるなんて、ふざけるのも大概にしろ!!」

円堂：「まさか、これまでの試合もそうやって勝ってきたのか？」

ロニージョ：「それは違う!!! 今までの勝利は、俺たちが自分たちの力で勝ち取った物だ!!!」

円堂：「だったら、俺たちは全力で闘う!! 負けていい試合何て無いからな」

ロニージョ：「・・・そうだよな」トボトボ

円堂：「ロニージョ!!!」

ポーン!!

円堂はボールをロニージョに投げて渡した。

円堂：「ロニージョ!! 撃ってこい!!」

ロニージョ：「つ!! ・・・ハアアアアアア!!」

ドガアアアアアアアン!!!

ロニージョのまるで弾丸の様な鋭いシュートが円堂に迫る。円堂はそれを正面から受け止める。

バシイイイイイツツ! ギャルルルル ドカアツ!!

円堂：「うわあつ!?!」

ロニージョ：「・・・」

そして、ロニージョは無言で帰って行った。とても悲しそうな瞳をしながら……
龍也：「まさか世界最高とまで言われてる奴が八百長頼みに来る何て……」

円堂：「でも、ロニージョのボールは本気だった。あいつも本気で闘いたいと思ってるんだ」

龍也：「ザ・キングダムに、何かあったのかもしれないな」

そして俺と円堂は朝ごはんの時にロニージョの事を皆に話すと、八百長を頼みに来たことは怒っていたが、それと同時に何かおかしいと言っていた。実際俺もおかしいと思ってる。そして俺と円堂、果南と鬼道でブラジルのデータを調べる事にした。

円堂：「キーパーのセーブ成功率91.2%!?」

龍也：「ボール支配率は94.1%もあるぜ?」

果南：「おまけに得点率は88:6%って、」

龍也：「普通じゃないな。こんなチームが八百長頼みに来るなんてやっぱり変だぞ?」
鬼道：「これを見てくれ。ブラジルがこんなデータラメなチームになったのは、ガルシルドが監督になってからみたいだ」

龍也：「ガルシルド……あいつか」

円堂：「なあ? ブラジルエリアに行ってみないか?」

そして俺たち四人はブラジルエリアに向かった。

果南：「ロニージョは・・・居ないね」

？：「返して!!!」

ん？ 何だ今の声？

黒服の男：「これはガルシルド様が与えたものだ!! 役たたずの弟には必要無い!!」

？：「そんな!? お願ひします!! もう一度だけ、チャンスを下さい!! 今度こそ役に立ちます!! だから!!」

黒服の男：「チャンスか、お前たちのデータは全てチェックしている。分かっているな?」

？：「はい!! もう二度とミスはしません!!!」

円堂：「おい!! 何やってる!?!」

黒服の男：「チツ、余計なことは喋るなよ?」

謎の黒服の男達はその場を去っていった。

龍也：「何なんだ? アイツら?」

子供：「ちくしょう!! ガルシルドめ!!!」

? : 「よせ!!」

龍也 : 「あんた、ブラジル代表のDF「ラガルート」だよな? 弟くん、何か変だぜ? 自分たちの国の監督をそんな風に言うなんて。ロニージョが八百長頼みに来たこととか関係があるのか?」

ラガルート : 「何だって!?! アイツ・・・そこまで思い詰めて・・・」

果南 : 「ねえ? どういうこと?」

子供 : 「兄ちゃん達が苦しい思いをしてるのは、みんなガルシルドのせいなんだ!! 皆騙されたんだよ!!」

鬼道 : 「騙された?」

ラガルート : 「君たちは、ブラジルの財政状況が、どんなことになってるか知ってるかい?」

果南 : 「授業で習った範囲なら。まだまだ開発途上で決して裕福な国では無いってことくらいは」

ラガルート : 「だいたい合ってるよ。俺たちザ・キングダムは、皆貧しい生まれなんだ。けどサッカーが好きで、毎日ベコベコのボールを蹴ってたよ。そんなある日、ガルシルドが現れたんだ。アイツは俺たちにサッカーが出来る場所と設備、ボールを与えてくれて、家族には仕事まで与えてくれた。あの時は本気で神様かと思ったよ。でもアイツ

は、突然本性を表したんだ」

龍也：「本性？」

ラガルート：「ああ。試合で俺たちがミスしたり、動けなくなれば、酷い罰を受けるようになったんだ。最近は家族にまで……」

龍也：「そんな……そんなの、家族を人質に取られてる様なもんじゃねえか!!!」

ラガルート：「その通りだよ。それに既に、オーバーワークで潰れてしまった者も居るんだ。このままじゃあ次に誰がサッカーが出来なくなるか分からない。ロニー・ジョーは、君たちが確実に勝てるとは言えない強いチームだと認めたからそんなことを頼んだんだと思う。家族や仲間を、守るために」

円堂：「そう……だったのか」

ラガルート：「行くぞ」

子供：「う、うん……」

そう言つて去つて行つたラガルートの顔はとても悲しそうで、辛そうに見えた。そして、話を聞いた俺達四人は、怒りではらわたが煮え繰り返っていた。

円堂：「許せない……」

龍也：「ああ」

果南：「私もぶちギレたよ」

鬼道：「危険だが、手がない事もない。ガルシルドの屋敷に、もしかしたら悪事の証拠が残ってるかもしれない。それを手に入れられれば」

龍也：「忍び込むって事か？」

果南：「私はやるよ。ロニー、ジョたちをこのままになんかしておけない」

円堂：「俺もだ」

龍也：「よし!! 行くぞ!!」

— 続く —

第65話：潜入!! 「ガルシルド邸」!!

俺たち四人はザ・キングダムをガルシルドの手から解放するため、「悪事の証拠」を手に入れようとガルシルドの屋敷に潜入しようとしていた。

鬼道：「何処かに入れる場所があればいいんだが・・・」

龍也：「ああ・・・。ん？ おい、この窓ガタガタいつてる。開かねえかな？」

果南：「・・・・・・」

円堂：「開けくっつ!! この!!」

果南：「・・・・・・」

く　く　く　く　く　く　く　く　く　く

ジリリリリリリリリリリ!!!

手下：「侵入者です!!!」

龍也：「果南!! お前どんだけ馬鹿力なんだよ!!!」

果南：てへぺろっ

円堂：「アジア予選一回戦のオーストラリアの奴らが言ってた「雌ゴリラ」ってあながち間違ってたなかったんだな」

果南：「ちよつと!? ヒドイよ!!」

手下：「いたぞ!!!」

龍也：「やべっ!! 此方だ!!!」

そこから手下と俺たちの鬼ごっこが始まり、俺たちはなんか立派な扉の部屋に逃げ込んだ。

龍也：「ふうつ。．．．っ、おい!! これって!!」

鬼道：「間違いない!! メインコンピュータだ!! 待ってろ、今データを吸い出す」

龍也：「おい円堂、果南!! 扉を押さえろ!!!」

手下：「開けなさい!! 逃げられませんよ!!」

ガンツ！ ガンツ！

龍也：「鬼道!! まだか!!」

鬼道：「もう少しだ．．．よし!! 終わったぞ!!」

龍也：「よし、せうので放すぞ!!」

ガンツ！ ガンツ！ ガンツ！

龍也：「せうのっ!!」

ガンツ！ バタンツ!!

手下：『!?!?』ドサドサッ

龍也：「今だ!!」

手下：「追いかけてなさい!!」

手下共が鬼の形相で追いかけてくる。このままじゃあ捕まるぞ・・・!!

?：「こつちだ!!」

果南：「え?」

?：「こつちから逃げられる!! 速く!!」

龍也：「アイツは!! よし、行くぞ!!」

円堂：「お、おい!! もし罠だったら!!」

龍也：「大丈夫だ!! アイツはガルシルドの仲間じゃない!!」

果南：「えっ!?!」

そして俺たちはその少年と泊めてあった船で逃走し逃げ切った。

円堂：「ハア、ハア、・・・た、助かった。ありがとな・・・。えつと・・・」

龍也：「コトアール代表「リトルギガント」キャプテン「ロココ・ウルパ」さん

ロココ：「僕のこと知ってるんだ。大海龍也くん」

円堂：「えっ!?! コトアール!?!」

ロココ：「じゃあ僕はこの辺りで失礼するよ」

果南：「あ、あの!! 助けてくれてありがとうございます!!」

そしてロココは帰って行った。

鬼道：「とりあえず宿舎に戻ってデータを確認するぞ」

そして俺たちが宿舎に戻ると鬼瓦刑事と響木さんがいた。

響木：「おつ、帰ってきたな。つたくお前ら無茶しやがって」

久遠：「鬼瓦さん、響木さん、とりあえずデータを見てみましょう」

そして俺たちは全員でデータを確認した。するとそこには、ガルシルドの恐ろしい野望と計画が記録されていた。

吹雪：「これ、ガルシルドの石油会社が保有している油田のデータだね」

ことり：「でも残りの石油埋蔵量がほとんど無いよ?」

ツバサ：「それにこっちのデータも・・・おなんて戦車とかミサイルとかこんな兵器を大量に作ってるの?」

響木：「そうか・・・ガルシルドは起こそうとしてるのか・・・「戦争」を」

全員：『『戦争!?!』』

鬼瓦：「石油の価格が高騰する幾つかの理由で、大きな理由が戦争だ。戦争には、兵器の製造から火薬の製造まで、石油のエネルギーを大量に使う。そのため買い漁ろうとするから価格が上がるんだ」

響木：「だから戦争が起これば、残り少ない石油を求めて、各国はこぞってガルシルド

を訪ねるだろう。更に、戦争で使う兵器まで、自分で提供しているとすれば・・・」

鬼道：「ガルシルドは考えられないほどの富を手にかつることになる!! おまけに自分で起こした戦争を自分の手でコントロール出来るとなれば、ガルシルドは世界を手にしたも同然!! 世界はガルシルドの物になる!!」

龍也：「ふざけるな・・・そんなくだらない事のために、俺達のサッカーを利用したのか・・・!?!」

果南：「利用?」

龍也：「前のブラジル代表の記者会見の時、財前総理が言っていただろ? このFFIが始まってから、国同士のいがみ合いが増えたって」

イナズマジヤパン：「!!?!?!」

俺たちはいつかのガルシルドの会見を思い出した。

ガルシルド：「このFFIは、私の愛するサッカーで、世界平和を目指し開いた物です・・・」

くくくくくくくくくく

綱海：「なにが私の愛するサッカーで世界平和だ!! 全然やってること真逆じゃねえか!!」

曜：「ヒドイ・・・」

千歌：「サッカーを使って戦争を起こそうだなって・・・」

円堂：「そんなこと!! させてたまるか!!」

龍也：「ああ。鬼瓦さん!! その証拠を、国際警察とかに提出出来ませんか!!」

鬼瓦：「ああ。俺にツテがある。任せろ」

そして証拠を持って、鬼瓦さんは出ていった。

豪炎寺：「これで一安心か？」

龍也：「そうだな。とりあえずこの事をブラジル代表のやつらに伝えに行くか」

果南：「そうだね」

そして俺、果南、円堂の三人で、ザ・キングダムの実習場に向かった。

― 続く ―

第66話：一安心？

俺と円堂、果南と鬼道のガルシルド邸への潜入により、ガルシルドの恐ろしい計画を知った俺たちイナズマジャパン。

鬼瓦刑事に頼みこの事を国際警察に届けてもらう事にした俺たちはその事をロニー達に知らせるためにブラジルエリアに戻って来ていた。

ー ブラジルエリア・グラウンド ー

ラガルトト：「ロニージョ!!」パスツ!

ロニージョ：「ハアアアアア!!」ドガアアアツ!!

ザシユウツ!!

ガト：「ナイシユ!!」ロニー「お〜い!!」ジョ?」

果南：「お〜い!!」

ファルカオ：「あれ? イナズマジャパン?」

〜

ロニージョ：「えっ!? ガルシルドの屋敷に!」

龍也：「おう」

ラガルトト：「何でそんな危険なことを・・・捕まったら何されるか分からないの!!」
円堂：「だって俺、サッカー好きだから!!」

ロニージョ：「えっ？ 好き・・・？」

円堂：「ラガルトトからロニージョたちの話を聞いて、放っておけなくて。ザ・キングダムとは本気で何にも縛られずに全力で闘いたかったから」

レオナルド：「お前ら・・・」

龍也：「まあとにかくだ!! ガルシルドの屋敷のパソコン調べたら、バッチリ証拠が残ってるよ。今警察に届けてるから、ガルシルドが捕まるのは時間の問題だと思うぜ？」

ザ・キングダム：「!!!」

ガト：「じ、じゃあ、俺たち好きにサッカー出来るのか？ もう、何にも怯えず・・・全力で・・・」

果南：「うん!!」

ガト：「やった・・・!! 俺たちのサッカーが出来るんだー!!!」

ファルカオ・モンストロ：「やったー!!!」

レオナルド・ガト：「俺たちのサッカーが出来るんだ!!!」

フォルミガ・ボルボレタ：「ざまあみろ!! ガルシルド!!!」

ロニージョ：「イナズマジヤパン・・・本当にありがとう!!!」
 ラガルート：「ああ・・・グスツありがとう!!」

円堂：「皆!!」 今度の試合は正々堂々、最高の試合にしようぜ!!」
 ザ・キングダム：『『おーーーーー!!!』』

そして俺と果南、円堂の三人はジャパンエリアに帰った。

龍也：「いや、見たか? あいつらの嬉しそうな顔!!」

円堂：「良いことした後って気持ちいいな!!」

果南：「本当だねっ!!」

— ジャパンエリア・グラウンド —

そしてイナズマジヤパンの練習中、穂乃果から高海へとセンターリングが上がり、

穂乃果：「千歌ちゃん!!」パスッ!

千歌：「よっ!! はあああああ!!」ドガアアアアアッ!!!

円堂：「止める!!」バシィッ ギャルルルルル バチィン!!!

ザシユウツ!!

高海のボレーシュートは円堂の正面だったのにも関わらず、円堂の手を弾いてゴールに吸い込まれた。

ドガアアアアアンツ!!!

円堂：「真・イジゲン・ザ・ハンド」!!!」

ドガアアアアアアツ!! バリイイイイン!!

ザシュウツ!!

二人の新たな必殺シュートは、円堂の「イジゲン・ザ・ハンド」を粉砕し、ゴールネットに突き刺さった。

円堂：「す、凄え……」

龍也：「これならブラジルにも通用するだろ」

そしてブラジル戦までの3日間の間に基礎体力強化に技の熟練度上げ、基本戦術の見直し等を行い、いよいよブラジル戦当日を迎えた。

― 続く ―

第67話：ブラジル戦前

（ ウミガメ島・ウミガメスタジアム ）

後30分ほどでブラジル戦が始まる。だがスタジアムの空はどんよりした重苦しい天候で会場の空気はとても不気味だった。

果南：「何・・・、この天気」

ことり：「なんか怖い・・・」

するとどこからか会場にプロペラ音が響きわたり俺たちが空を見上げると巨大な飛行艇が現れた。

そして飛行艇の下部からスタジアムに大きな階段が降りてきた。そして、階段を下りて来たのは・・・

イナズマジヤパン／ザ・キングダム：「『ガ、ガルシルド!?』」

実況：「おっと、ブラジル代表のガルシルド監督、ド派手な登場です!!」

ガルシルド：「ヘンクタツカーくん? この試合、我々は勝てるのかな?」

ヘンク：「勿論です。この試合、既を買ってありますゆえ」

そしてガルシルドはブラジル代表ベンチに歩いていき、

ガルシルド：「諸君？ 準備は済んだかな？」

ザ・キングダム：「『つ!!』……」

ヘンク：「返事は!? ガルシルド様が準備は良いかと聞いておられるのですよ!」

ロニージョ：「は、はい!!」

ガルシルド：「うむ。結構」

く イナズマジャパンベンチ く

鬼道：「どういうことだ!? 何故ガルシルドが!」

久遠：「今警察に問い合わせたが、その様な証拠は受け取っていないようだ」

龍也：「まさか……警察にも仲間がいたのか?」

円堂：「そんな……皆アイツが何をしようとしているのか分かってるのか!」

豪炎寺：「円堂、鬼瓦さんは今日の試合を見に来ると言ってたよな? 鬼瓦さんなら何

か知ってるんじゃないか?」

円堂：「そうだな。試合開始時間までまだある。手分けして探そう」

く ウミガメスタジアム・エントランス く

円堂：「いた!! 鬼瓦さん!!」

鬼瓦：「円堂スマン!! 警察に持っていった証拠だけでは証拠不十分だと門前払いを食らってな。」

円堂：「そんな・・・」

鬼瓦：「円堂、この文章を見て思ったんだが、何かまだ続きがありそうな気がするんだ」

円堂：「そんな事言われても今からじゃあ・・・」

龍也：「円堂、ちよつと待て・・・、ロココだ!!」

円堂：「コトアールのアイツがどうかしたのか?」

龍也：「あの時、何でアイツはあんなところにタイミング良く居たんだ? もしかしたら、俺たちとは別の証拠を手に入れて、逃げる途中だったんじゃないか?」

風丸：「そうか!! イタリアvsコトアールは明日だ。もしかしたら、今日の試合を見に来てるかもしれない!!」

龍也：「よし、ロココを捜そう!!」

そして俺たちはロココが今日の試合を見に来ていることにかけて必死に探した。そして読みは当たっており、ロココは女の子と一緒に船着き場辺りに居た。

円堂：「あーあーあーっ!! 夏未!!」

夏未：「あら? 円堂くんこれから試合じゃないの?」

龍也：「だれ?」

豪炎寺：「俺たち雷門サッカー部のマネージャーの1人だ。FFIの代表選抜の少し前に海外に留学していたんだが何故ロココと？」

夏末：「だって私この大会中はコトアールのマネージャーだもの」

雷門メンバー：『!?!』

龍也：「そんなことはどうでもいい!! なあロココ、お前もしかしてガルシルドの屋敷で悪事の証拠を手に入れてないか? もし手に入れていたら頼む!! 俺たちに渡してくれ!!」

夏末：「大海くん? まずはおちゃんと理由を言いなさい?」

龍也：「ああスマン。実は・・・」

— 理由説明中 —

龍也：「と言う訳なんだ」

夏末：「そう言うことなのね。ならロココ、彼らに渡しませよう」

ロココ：「えっ? いいの? これはボクたちがガルシルドを追い詰めるための切り札なのにな」

夏末：「大丈夫。彼らなら上手く使ってくれるわ」

ロココ：「信用してるんだね。分かったよ」

そして俺たちは更なる証拠を手に入れて急いで鬼瓦さんの所に戻った。

鬼瓦：「来たな。よし!! 今度こそお前たちが安心してブラジル代表と闘えるようにしてやる!!」

— グラウンド —

久遠：「全員揃ったな。では登録メンバーを発表する。

F W 大海 綺羅

M F 松浦 鬼道 渡辺 高海

D F 風丸 鹿角 綱海 不動

G K 円堂

控え 立向居 優木 野坂 吹雪 高坂 だ。」

イナズマジヤパン：「はい!!」

スターティングメンバー

ブラジル

G K ファルカオ (男)

D F モンストロ (男) アウラ (女) フォルミガ (男) ラガルト

M F ボルボレタ (男) レオナルド (男) ウエンデイ (女)

F W アルトゥール (男) ロニージョ (男) ガト (男)

日本

F W 大海(男) 綺羅(女)

M F 松浦(女) 鬼道(男) 渡辺(女) 高海(女)

D F 風丸(男) 鹿角(女) 綱海(男) 不動(男)

G K 円堂(男)

審判：「キックオフ!!」

oooooooooooo!!!

そして審判のホイッスルと共に、試合の幕は切って落とされた。

— 続く —

第68話：開戦!! 「ザ・キングダム」!!

ピーーーーーーッ!!

ロニージョ：「っ!!」

試合開始のホイッスルが鳴った瞬間ロニージョは超スピードでボールを奪った。

アルトウール：「ロニージョ!! こっちだ . . . ロニージョ?」

ロニージョは仲間を無視して自分1人で攻めてきた。ディフェンスに入るイナズマジャパンはなす続べなく抜かれていく。 . . . 1人を除いて。

龍也：「ロニージョオオオオ!!」ズザザアツ!!

龍也：「どういうつもりかは知らねえが来な!!」

その瞬間始まる激しい攻防。俺でも着いていくのがキツかったが異変に気付いた。ロニージョの汗だ。まだ試合が始まって間もないとは思えない汗の量。ロニージョは完全に抜ききるのは無理だと判断し、高速サイドステップからシュートを撃ってきた。

龍也：「円堂!!」

円堂：「はあああああ!!」バシイイイイッ!! ギャルルルルルル!!!

円堂：「そんなんっ!? パワーが!!」ドガアアアアアッ!!

ロニージョのシュートのあまりのパワーに、円堂は吹き飛ばされてシュートは、日本ゴールに突き刺さった。

実況：「ゴーーーーーール!!! 先制点はザ・キングダム!!!」

円堂：「悪い!!」

鬼道：「いや、あれはロニージョが凄すぎたな」

龍也：「・・・あれが本当の力ならな」

果南：「っ!? どういうこと?」

龍也：「とにかく今は試合だ。ロニージョは俺に任せてくれ」

ホイツスルと共に、日本ボールで試合再開。

ピーーーーーッ!!

ロニージョ：「っ!!」

ツバサ：「千歌ちゃ・・・ギョんッ!」

曜：「マズイ!! ロニージョだよ!」

果南：「嘘でしょ!?!この速さ・・・この間のダークエンジェル何かとは比べ物にならないくらい速いよ!?!」

ツバサの高海へのパスを一瞬でカットしたロニージョ。そのまま攻め上がろうとするが・・・

ザザアツ!!

ロニージョ：「……………」

龍也：「行かせる訳無えだろ!!」

ガト：「ロニージョ!! こつち……ロニージョ!?」

ロニージョはまたしても仲間を無視して一人で突っ込んで来る。俺はいい加減頭に来て思い切りタツクルをぶちかます。

龍也：「目え覚ましやがれ!!」ドガアアアアアアアアアツ!!

ロニージョ：「つ!! グ……、グア……、」

龍也：「うらああああああああああ!!!」ドガアアアアアアアアアツ!!

ガルシルド：「何!?!」

ヘンク：「バカな!?!」

ロニージョが約3m程宙を舞い吹き飛ばされる。って言うかベンチのガルシルド達の反応で確信したよ。ロニージョに何か細工しやがったな!!

そして俺はシュート体勢に入る。俺が一回転し、左足を振り上げると長大な聖剣が出現。俺はそれを踵落として思い切り振り下ろした。

龍也：「喰らいやがれ!!」「真・エクスカリバー!!!」

ギシヤアアアアアアアアン!! ズドドドドドドドドドドドドドドド!!!

フィールドを真つ二つに斬り裂きながらシュートがブラジルゴールに襲い掛かる。キーパーファルカオも必殺技で止めようとするが……

ファルカオ：「カポエイラスナツチ」!! ぐぐ……うわあああああ!!」

シュートを受け止め切れずにシュートはゴールに突き刺さった。

実況：「ゴーーーーーール!!! 日本同点!!!」

果南：「ナイス龍也!!」

ガツ!!

果南：「?」

ガト：「おいロニージョ!! さつきから何なんだお前!!」

ラガルート：「止めろガト!!」

ガト：「だけど……!!」

レオナルド：「ロニージョ、お前まさか【RHプログラム】を受けたんじゃ……」

ザ・キングダム：「『!?!?』」

ロニージョ：「……仕方なかったんだ!! 俺が【RHプログラム】を受ければ、家

族だけは見逃してくれるって言うから!!」

ボルボレタ：「いつの話だ!!」

ロニージョ：「イナズマジヤパンがガルシルドの屋敷に潜入する少し前だよ。そのあ

とで、ガルシルドの悪事を警察に提出したって話を聞いて、安心してたのに・・・」
 アルトウール：「つたく。それならちゃんと言えよな? 1人で抱え込みやがって。水臭えぞ」

レオナルド：「俺たち仲間だろ? 俺たちがサポートするからお前は好きに暴れる!!」

ロニージョ：「皆・・・ありがとう!!」

1 ー 1、ブラジルボールで試合再開。ボールはセンターハーフのレオナルドへ。

ロニージョ：「っ!!」

実況：「おつと? これはどうした? ザ・キングダムのFWガトとアルトウール、ロニージョが飛び出さないようふたりがかりで見方をマークしているぞ?」

アルトウール：「ロニージョ!! お前の役目はもう少し後だ!!」

レオナルド：「必殺タクティクス!!」

ザ・キングダム：「くアマゾンリバーウエーブ>!!」

横一列になって激流とともに突っ込んで来るブラジル。アマゾン川の激流がイナズマジャパンディフェンスを洗い流していく。

レオナルド：「ロニージョ!!」

ロニージョ：「っ!!」ドガアアアアアアッ!!

そして一気に飛び出したロニージョはシュートを放つ。

龍也：「円堂!! 止めろ!!」

イナズマジヤパン：「円堂! (円堂くん!!) (キャプテン!!)」

円堂：「絶対に止めてやる!!」 「真・イジゲン・ザ・ハンド」!!!

ロニージョのシュートが「イジゲン・ザ・ハンド」に激突する。だが……

ドガアアアアツ!! バリイイイイイイン!! ザシューウツ!!!

ロニージョのシュート威力は凄まじく、シュートはゴールに突き刺さった。

実況：「ゴーーーーー! ー! ー! ー! ブラジル勝ち越し! ー! ー! ー! ー!」

ヘンク：「ほう。【RHプログラム】を受けたロニージョとくアマゾンリバーウエーブの併せ技とは……考えましたな」

ガルシルド：「面白いではないか。少し様子を見るとしよう」

日本 1 ー 2 ブラジル

ー 続く ー

第69話：暴かれる陰謀

1 ー 2、ブラジルリードの日本ボールで試合再開。

oooooooooooo!!

ロニージョ：「っ!!」

龍也：「綺羅!! こっちだ!!」

ツバサ：「大海くん!!」パスツ

ボールを受け取った俺にロニージョが物凄い勢いで迫って来る。そしてロニージョの身体と俺の身体が激突!! . . . が、

ユラアツ!

ロニージョ：「!?!」

ロニージョはなんと俺の身体とボールをすり抜けた。

千歌：「えっ!?! 何!?!」

フォルミガ：「!?! こいつ何時の間に!?!」

全員が気付いた時、俺は既にMFまで抜いており、残すはディフェンスラインだけだった。

龍也：「真・幻影」!!」

ヘンク：「まだあんな技を・・・」

そして俺はシュート体制に入る。空中でエネルギーを纏わせたボールを下に落とし、左足の足払いでボールに更に回転をかけて風の幕をコーティングし、それを左足で思い切りぶっぱなした。

龍也：「ラストトリゾートD・G5」!!!」

ドツガアアアアアアアアアアン!!!

ファルカオ：「カポエイラスナ・・・っ!! ぐわあああああっ!!!」

実況：「ゴーーーーー!! 日本同点!!! 決めたのはまたしてもこの男、大海龍也ー!! おっと、ここで前半終了のホイッスル!! 日本vsブラジルは、同点で折り返しです!!」

くくくくくくくくくく

マネージャー：「ああもう悔しい!! 何でガルシルドはまだあそこに座ってるの?!!」

ガルシルド：「ふん。私を捕まえるなど出来るものか」

?：「それはどうかな!!」

するとフィールドに大勢の大人が入ってきた。先頭の鬼瓦刑事を始め、日本の財前総理に、アメリカのケイン大統領などの各国の首脳陣が勢揃いしており、顔を見るか

らに全員カンカンにぶちギレているのが分かった。

円堂：「鬼瓦さん!! それに財前総理まで!!」

龍也：「それだけじゃない!! アメリカのケイン大統領やその他の国の首脳の皆さんまで!!」

ケイン：「ガルシルド!! これ以上貴方の好きにさせる訳にはイキマセーン!! 大人しくお縄につきなサイ!!」

風丸：「鬼瓦さん!! どういうことですか!?!」

鬼瓦：「実はなお前たちが追加で持ってきた証拠に、とんでもないことが書かれてたんだ」

財前：「ガルシルド!! お前はロニージョの身体を、酷いプログラムの実験台にしていたそうだな!! 人間の身体を人為的に強化し、限界を越えた力を強制させる、強化人間プログラムの実験台に!! 見ろ、ロニージョの身体を!! お前のせいでボロボロになっている!!」

円堂：「何だって!?! 本当なのかロニージョ!?!」

ロニージョ：「済まない・・・君たちが俺たちの為に手を尽くしてくれたのに、家族を人質に取られて嫌だと言えず、俺は・・・それを裏切ったんだ」

龍也：「ロニージョ・・・ガルシルド!! 貴様何てことを!! お前がそんなことをしな

くても、ロニージョたちは既に十分強い選手だというのに!!」

ガルシルド：「ふん、力を与えてやって非難される覚えは無いわ」

鬼瓦：「そうかな？ この会話はこのスタジアムの観客全員が聞いている。彼らはどう思うかな？」

ガルシルド：「何？」

ザワザワ ザワザワ

強化人間だって？

ロニージョたちの家族が人質に取られてるですって？

ザワザワ ザワザワ

ロニージョがボロボロだ。

アイツが変なことをしたせいだ。あいつのせいで。

ザワザワ

ブー! ブー! ブー! ブー!!

引っ込めー引っ込めー!! ガルシルド引っ込めー引っ込めー!!

インチキは止めろ!! 俺たちは、日本とブラジルの真剣勝負を観たいんだー!!

ワー ワー ワー!

引っ込めー引っ込めー!! ガルシルド引っ込めー引っ込めー!!

ブー！ ブー！ ブー！ ブー！ ブー！！

財前：「お前はサッカーを利用して、国同士を仲違いさせたかった様だがそうはいかん！！ サッカーとは、人の心と心を繋ぐスポーツなんだ！！」

警察：「ガルシルド・ベイハン！！ 貴方を逮捕します！！」

ガルシルド：「ふん。良からう・・・私にたてつくなど、愚かな奴だ」ボソツ

鬼瓦：「ブラジル代表の君たちと観客に言っておく！！ ロニージョ達の家族を人質に取り、監視していた悪者は、既に日本代表諸君の持ってきた証拠を足掛かりにすべて逮捕した。もう心配はいらない」

ザ・キングダム：「っ!? 本当に・・・」

龍也：「良かったじゃねえか。ロニージョ」

ロニージョ：「うっ、ぐ、うわああああああ！！」

ロニージョはボロボロと大粒の涙を流して泣き始めた。観客の皆は、そんなロニージョを誰一人責めようとはしなかった。強化人間プログラムのインチキは、全てガルシルドが悪いと分かっていたからだ。

龍也：「ロニージョ！！ ここからが本当の勝負だ！！」

ロニージョ：「ああ！！ 望むところだ！！ 行くぜ、イナズマジヤパン!!!」

2 1 2、本当のサッカーでブラジル代表と激突する後半戦が始まる。

― 続く ―

「イジゲン・ザ・ハンド」に激突したシュートは、何とか逸らせる事は出来たが、一目で分かるほどにとてつもなく重いシュートだった。

ロニージョ：「やるな!! 円堂!!!」

円堂：「何て重いシュートだ・・・もう少しで決められてる所だった」

そして円堂のゴールキックから果南にボールが渡り・・・

果南：「激流ストーム・G5」!!! 龍也、シュートチェインお願い!!!」

龍也：「任せろ!! 「剣撃乱舞・V3」!!!」

ドツギユオオオオオオオン!!!

俺と果南が連携チェインシュートを放つが・・・

ファルカオ：「止める!! 「カポエイラスナッチ・V2」!!!」

ギヤルルルルルルル!!!

ファルカオ：「ぐぐぐ、はああああ!!」バシイイイイツ!!!

何と、俺達のシュートが止められてしまった。

果南：「う、嘘!! 止めた!?!」

龍也：「おいおい・・・ガルシルドのやつロニージョ達を強くするどころか弱くしてたんじゃないか? つつてもその枷が外れた瞬間これとか、勘弁してほしいぜ」

ファルカオ：「レオナルド!!」

鬼道：「行かせるか!!」

ファルカオのゴールキックからボールはレオナルドに直ぐに鬼道がディフェンスに入る物の、

レオナルド：「スーパーエラシコ・V3」!! ロニージョ!!」

鬼道はあつかりと抜かれ、パスはロニージョに繋がり・・・

ロニージョ：「行くぜボーイ!!」 「ストライクウ・・・サンバアアアツ・V2」!!」

綱海：「進化した!?!」

聖良：「止めます!!」 「スノーマウンテン・V3」!!」

ドガアアアアアアツ!!」

鹿角が寸前でシュートブロックに入る。スノーマウンテンの雪の冷気がストライクサンバのオーラを凍結し山による物理的なブロックが入る。だがそれでもストライクサンバはブロックを突き破った。

円堂：「今度も止める!!」 「真・イジゲン・ザ・ハンド」!!」

ドガアアアアアアツ!! ギュルルルル!! ギューーン!!」

鹿角のブロックが挟まれたお陰で、何とかシュートを止めた円堂。ゴールキックからボールは渡辺に飛ぶ。ボルボレタがディフェンスに入るが、

ボルボレタ：「止める!!」

曜：「スプリントワープ・G5」!! 千歌ちゃん、行くよ!!」

ボルボレタを抜いた渡辺が、高海と共にシユート体勢に入る。渡辺と高海それぞれの両足、合計四本の足それぞれに違う属性オーラが宿り、その足でボールを乱打乱打。4つの属性をボールに込めていき、とどめのツインシユート。

曜・千歌：「『エレメントプラスター・V2』!!!」

ドツギヤアアアアアアアン!!!

二人の超破壊力のシユートがブラジルゴールに迫る。が・・・

ファルカオ：「止める!!」 「カポエイラスナッチ・V3」!!!

ツバサ：「進化した!?!」

バシイイイイツ!!

何とまたしても技が進化し、「エレメントプラスター」は止められた。

千歌：「そんな!!」

ファルカオ：「アウラ!!」

ツバサ：「っ!止めるわ!!」

ファルカオのゴールキックから今度はアウラにボールが入り、ツバサとの競り合いになるが、

アウラ：「はあああああつ!!」 ドガアツ!!

ツバサ：「くっ!?」

アウラ：「ロニージョ!!」

ツバサとの競り合いでツバサを弾き返してボールを確保したアウラからロニージョにパスが繋がる。

ロニージョ：「ナイスアウラ!!」 「ストライクウ・サンバアアツ・V3」!!!

綱海：「嘘だろ!?」 また進化しやがった!!

聖良：「止めます!!」 「スノーマウンテン・V3」!!

ガキイイイイ!!

聖良：「ぐううううううう!!!」

バキヤアアアアアアン!!!

聖良：「きやああああああつ!!!」 キャプテンツ、お願いします!!!

円堂：「止める!!」 「真・イジゲン・ザ・ハンド」!!!

ガカアアアアツ!!

円堂は「イジゲン・ザ・ハンド」で「ストライクサンバ」を迎え撃つ。円堂も渾身の力を込めるが……

円堂：「うおおおおお!!!」

バリイイイイイ!! ザシューウツ!!

シュートは日本ゴールに突き刺さった。

実況：「ゴーoooooooooooooール!!! ブラジル勝ち越しooooooooo!!!」

円堂：「くそっ!!」

龍也：「残り6分でか……ヤバいな」

日本ボールで試合再開。

円堂：「大海にボールを集めろ!!」

龍也：「こつちだ……!!」

モンスター口：「お前は最重要警戒に決まってるだろ!!!」

果南：「そんな!! 龍也が振りきれない!？」

龍也：「なら!! 果南、ツバサにパスを出せ!!」

果南：「でも!! ツバサさんのシュートじゃあ!!」

龍也：「大丈夫だ!! パスを出せ!!」

果南：「わ、分かった!!」パスッ!

ボールは綺羅に渡った。

龍也：「綺羅、あの技だ!! 行け!!」

ツバサ：「了解!!」

綺羅がシュート体制に入ると周りが宇宙空間にかわりシュートが無数の流星となり、

ゴール目掛けて降り注ぐ。

ツバサ：「スターゲイザー・G4」!!」

ファルカオ：「!? ちよっ! 待っ!!」

ザシユウツ

実況：「ゴーーーーー!!!!!! 日本同点!!」

果南：「そうか!! ああのキーパー技は、一個のボールにのみ有効な技。あれだけ大量の雨に変化するシュートには対応出来ない!!」

残り時間は後二分。ブラジルボールで試合再開。

ロニージョ：「必殺タクティクス!!」

ザ・キングダム：「<アマゾンリバーウエ・・・!?!」

シユンツ!

龍也：「オーバーフロー解放!!」

俺は相手がタクティクスの体制に入る直前にオーバーフローを解放。ボールを奪い取り、超スピードを維持しながら駆け上がる。

ロニージョ：「マズイ止めろ!!」

レオナルド：「クソツツ!! 速過ぎて追いつけない!!」

そしてDFまで振り切り、GKとIvs1だ。

龍也：「行くぞ!!」「ラストリゾートD・G5」!!!

ドガアアアアアアツ!!

俺の渾身のシュートがブラジルゴールに襲い掛かる。ファルカオも必殺技で応戦する。

ファルカオ：「止める!!」「カポエイラスナツ・・・ぐあああああつ!!」

ザシユウツ!!

しかし俺のシュートはブラジルゴールのネットを揺らした。

実況：「ゴーーーーー!!!!!!」ここで試合終了のホイッスル、4ー3でイナズマジャパンの勝利だーーーー!!!!!!

ロニージョ：「敗れたか・・・けど、こんな気持ちよくサッカー出来たのは久しぶりだ」

龍也：「おう!! 機会が合ったらまた戦ろうぜ? 今度は最初っから全力でな!!」

ロニージョ：「ああ!! 次は敗けない!!」

そしてザ・キングダムは観客の拍手に見送られスタジアムを後にした。

— 続く —

第四章：最悪の黒幕 世界VSガルシルド

第71話：へコトアールエリアへ・・・

ブラジルに勝ち、世界大会決勝に駒を進めた俺たちイナズマジャパン。その翌日、俺たちは決勝戦に向けての練習をしていた。

にこ：「そろそろね。イタリアvsコトアール」

果南：「うん。でも勝つのはイタリアでしょ。また鞠莉やシステイさんと闘いたいな」

龍也：「監督!! 観に行っても良いですか?」

久遠：「終わったら直ぐに帰って来いよ?」

監督の許可を取り、俺たちはイタリアvsコトアール戦が行われているコンドルスタジアムへ向かった。

く コンドル島・コンドルスタジアム く

ワー ワー ワー ワー!!

円堂：「おお盛り上がりしてるな!!」

龍也：「ん?、お、おい!! あの得点板見る!!」

イタリア 0 ー 9 コトアール

ドガアアアアアツ!! バゴオオオオオオオン!!!

ブラーじ：「うわああああああつ!!」

そして、必殺技を使ったにも関わらず、ただのノーマルシュートすら、止める事が出来なかった・・・

実況：「ゴーール!!! ここで試合終了のホイッスル!! 0ー10でリトルギカントの勝利!! 決勝進出決定です!!」

鞠莉：「そ、そんな・・・」ガクツ

システイ：「龍也さんや・・・果南と・・・もう一度・・・闘いたかった・・・」グスツ
ファイデオ：「マモル・・・リユウヤ・・・ごめん・・・」

俺たちが急いでイタリア代表のもとへ向かおうとしていたらロココと夏未さん、そして赤キヤップのおじさんがいた。

円堂：「おじさん!? どうしてここに!?!」

赤キヤップのおじさん：「言ってなかったか? ワシがリトルギカント監督の「アアヤ・ダイスケ」だ」

円堂：「!?!」

ロココ：「マモル!! 次のイナズマジヤパンとの試合、楽しみにしてるよ」

風丸：「円堂!!」

円堂：「どうした？ 風丸？」

風丸：「今、病院と警察から連絡があつて、ガルシルドを護送していた車が事故に遭つて、鬼瓦さんが大怪我して病院に運ばれたつて!! もうすぐ手術が始まるそうなんだ!!」

ダイスケ・イナズマジヤパン：「『『『?』』』」

龍也：「それでガルシルドは!？」

風丸：「現場に警察の救援が到着したときにはどこにも居なかつたつて!!」

ロココ：「!？」

円堂：「とにかく、病院「ワシも行く!!」へ？」

そして俺たちとダイスケさんはロココたちと別れて病院へ向かった。

く く く く く く く く く

鬼道：「どう思う?」

龍也：「偶然にしては出来すぎてる。十中八九ガルシルドの仕業だろうな」

ダイスケ：「鬼瓦、無茶しやがつて・・・」ボソツ

そして俺たちが病院のロビーへ移動するとTVで何か言っていた。

ダイスケ：「ん？」

アナウンサー：『突如現れた謎の集団に、コトアールエリアが襲撃されています!! 現在、コトアール代表と世界各国の代表チームが協力して住民の避難に当たっている模様!! キヤアツ!!』

円堂：「コトアールエリアが!？」

ダイスケ：「ガルシルド・・・どうやら奴はワシを本気で怒らせた様だな」

円堂：「待つて!! 俺も連れていつてくれ!!」

ダイスケ：「・・・足手まといになるだけだ」

円堂：「サツカーがこんなことに使われる何て耐えられないんだ!! だから、俺も連れていつてくれ!!」

イナズマジヤパン：『!!?!? じゃあこの人が!! 「円堂・・・大介」!!!』

大介：「言つても聞きそうにないな。自分の身は自分で守れよ?」

円堂：「っ!! ああ!!」

龍也：「円堂!! 俺たちも行くぜ!!」

円堂：「皆・・・」

龍也：「それに、俺たちだけじゃないみたいだぜ?」

円堂：「え?」

?：「「円堂」・・・!!」

今、最後の戦いが始まる。

― 続く ―

第72話：打ち砕け!! ガルシルドの野望!!

俺たちと大介さん、そして今まで競いあつてきたライバルたちは全員で襲撃を受けているコトアールエリアへ向かった。するとそこには建物が破壊され瓦礫の山になったコトアールエリアと、逃げ惑う人々や逃げ遅れた人を救助する、コトアール代表と世界の代表選手たちがいた。

シシリー：「アリスさん、リンさん!! この子達をお願いします!!」

アリス：「任せて!!」

ヴィクトール：「フィリップさん行きますよ!! せくのっ!!」

ズドオオオオオオン!!

フィリップ：「さあ!! 速く!!」

母：「あ、ありがとうございます!!」

娘：「ありがとう!!」

エドガー：「皆さん!!」

各国選手：「キャプテンたちだ!!」

ロココ：「ダイスケ!! 他の国の人たちが、助けに来てくれたんだ!」

大介：「ああ。皆、礼を言う」

？：「来たようだね諸君」

ロココ：「この声は・・・」

龍也：「やつぱりテメエか・・・ガルシルド!!」

ガルシルド：「ふん。大海龍也、私の計画最大の誤算はお前だな。だがお前・・・いや、お前たちとそこの男には消えてもらう。アラヤ・ダイスケ・・・いや、円堂大介!!」

円堂：「つ!! やつぱりじいちゃんだったんだ!!」

大介：「ワシ一人を誘きだす為になんの関係もない人たちを襲ったのか？ いつも人を使い、自分は安全な所から見ているだけだったお前が、余程焦っている見える!!」

ガルシルド：「ふん、貴様に言われたくないわ!! 40年もの間、私の事をこそこそと嗅ぎ回っていたお前が!!」

大介：「当たり前だ!! ワシの教え子だった影山を唆し、狂気の道に走らせ響木たち、いや、大勢の人間の運命を狂わせた!! サッカーを汚し続けるお前をワシは許すことはできん!!」

ガルシルド：「円堂大介!! 貴様のサッカーを全て破壊し、私が王座につく!! 最後の勝負だ!!」

大介：「良かろう。お前たち!! ワシと共に戦ってくれるか!」

各国選手：『『『『『はい!!!!!!』』』』』』

ガルシルド：「さあ!! チーム・ガルシルドよ、奴等を徹底的に叩き潰せ!!」
ヘンク：「ハイ!! ガルシルド様!!」

スターティングメンバー

チーム・ガルシルド

G K フォクス(男)

D F デインゴ(男) バファロ(男) ヘンク(男) ジャツカル(男)

M F クロウ(男) マンティス(男) ヘッジ(男) オウル(男)

F W スコーピオ(男) コヨーテ(男)

世界チーム

F W エドガー(男) 大海(男) フィディオ(男)

(イギリス) (日本) (イタリア)

M F 松浦(女) マーク(男) フロイ(男)

(日本) (アメリカ) (ロシア)

D F システイ(女) ドモン(男) テレス(男) 絢瀬(女)

(イタリア) (アメリカ) (アルゼンチン) (ロシア)

G K

円堂(男)

(日本)

控え：鬼道(男)(日本)

高坂(女)(日本)

リン(女)(アルゼンチン)

アリス(女)(アルゼンチン)

ロニージョ(男)(ブラジル)

レオナルド(男)(ブラジル)

ブラーヂ(男)(イタリア)

ユーリ(男)(ロシア)

ディラン(男)(アメリカ)

ヘンク：「ガルシルド様の為に!!」

チーム・ガルシルド：『『ガルシルド様の為に!!』』

そして審判のホイッスルと共に試合が始まる。だが、あのエドガーがボールを奪われた。

エドガー：「なにつ!?!」

果南：「このっ!!」スカッ

クロウ：「コヨーテ!!」

果南がエドガーのフオローに入るがあっさりと躲されパスがFWへと繋がる。

コヨーテ：「喰らえ!!」「ガンシヨット・改!!」

ギュルルルル!!

チーム・ガルシルドの必殺シュートが世界チームゴールに迫る。ドモンがシュートブロックに入るが、

ドモン：「させるかよ!!」「ボルケイノカット・V3!!」

ガカアアアアツ!!

シュートはあっさりとブロックを貫通し、円堂に襲い掛かる。

ドモン：「ぐっ!?!」円堂、頼む!!」

円堂：「任せろ!!」「真・イジゲン・ザ・ハンド!!」

ガカアアアアツ!! バリイイイイイン!!

円堂：「何っ!?!」

しかし、「イジゲン・ザ・ハンド」はあっさりと破壊されてしまう。? 何かオーラが暴走ぎみだったぞ……? ?

ヘンク：「まずは一点ですね」

テレス：「どうした円堂!! お前ならあの位楽に止められるだろう!」

円堂：「分からない。「イジゲン・ザ・ハンド」のオーラを上手く制御出来なかった。こんなこと初めてだ」

するとフィールドの外から大介さんが声を掛ける。

大介：「それはお前が成長した証だ!! 片手ではオーラを制御仕切れなくなっている。片手でダメなら両手で、両手でダメなら全身でコントロールしろ!!」

0-1とチーム・ガルシルドにリードを許してしまい、世界チームボールで試合再開すると、俺がボールを持って攻め上がる。

ヘンク：「如何に貴方であろうと無駄です!! 「デーモンカット」!!」

龍也：「マーク!!」パスッ

マーク：「フィディオ!!」ドッ!

フィディオ：「行くぞ!! 「真・オーディンソード」!!!」ドガアアアアアアン!!

息の合ったパスワークからボールはフィディオに渡り、フィディオは必殺シュートを放つ。

フォクス：「フッ、「ビッグスパイダー・V2」!!」バシイッ!!

しかしフィディオのシュートはあっさり止められてしまう。

フィディオ：「止められた!」

龍也：「やっぱりか。チーム・ガルシルドは全員が強化人間だ!! 生半可なプレーは通
用しないと思え!!」

マーク：「強化人間!? 例の「RHプログラム」か!?!」

果南：「何でそんな事を・・・そんなことしたら、貴方たちの身体がボロボロに!!」

ヘンク：「ふふふふ。私達がそんな不完全だと思ってるんですか? チームKのデ
モーニオ、そしてザ・キングダムのパニージョ!! 彼らは副作用を起こさない完璧な「R
Hプログラム」を作るための実験台だったのですよ!! そして生まれたのが私たち、一
切の副作用や拒絶反応を起こさない、そしてスペックは数段上の究極の強化人間。
「チーム・ガルシルド」なのです!!」

ロニージョ：「ツ!!」 ギュウウウツ

今の台詞を聞き、ロニージョは悔しさに唇を噛む。

龍也：「コイツら!! エドガー、アレをやるぞ!!」

エドガー：「確かにアレならゴールを破れるかもしれないな!!」

フォクス：「バファロ!!」

キーパーフォクスのゴールキックからボールはバファロに飛ぶ。が・・・

バファロ：「おう!! ・・・!!?」

エドガー：「もらった!!」

エドガーがインターセプトし攻め上がる。しかしチーム・ガルシルドは余裕の構えだ。その余裕、いつまでもつかないかな?

ヘンク：「撃たせて構いません!! どうせ入りません「どうか」!!」

俺とエドガーは二人同時に「エクスカリバー」の体制に入る。すると2つの聖剣は融合し、長大な神剣へと姿を変える。

エドガー・龍也：「「真・エクリプスカリバー」!!!!!!」

ギシャアアアアアアアン!! ズドドドドドドドドドド!!!!!!

かつて、最大火力の魔王のシユートを打ち返した神の斬撃が、チーム・ガルシルドゴールに襲い掛かる。

チーム・ガルシルド：「!!!!!!?!?!?」

フォクス：「くつ、「ビッグスパイ・・・、ぐわああああああつ!!」

ザシユウツ!!

シユートはいとも簡単に、究極の強化人間の守るゴールに突き刺さった。

世界チームーチーム・ガルシルド

ー 続く ー

第73話：闇に染まる龍也

「エクリプスカリバー」が決まり1―1の同点に追い付き、ガルシルドは啞然としていた。

バファロ：「冗談だろ・・・今のシュート・・・」

ジャツカル：「信じられないパワーだった・・・」

ヘンク：「ふむ。大海龍也、やはり彼は危険ですね。この試合で潰れてもらいましょうか」

1―1、チーム・ガルシルドボールで試合再開。ボールはマンティスに渡りドリブル突破を仕掛けて来る。そこに俺がディフェンスに入る。

マンティス：「バファロ!! 行くぞ!!」

龍也：「させるか!!」

俺がディフェンスに入った瞬間、相手の口角が上がったのを果南は見逃さなかった。

果南：「まさか!?!」

バファロ・マンティス：「「地獄車・改」!!!」

果南：「龍也!! 危ない!!」 ドンツ!!

龍也：「え……?」

果南に突き飛ばされ、何が起こったか分からないまま吹っ飛ぶ俺。俺には、倒れていく時間がまるでスローモーションの様に感じ、その途中でさつきまで俺が居た辺りから「バキヤアツ!!」と鈍い音がしたのを聞きそちらを見る。

すると俺の前には、俺の身代わりになり、相手の技をモロに受け足を押さえて横たわる果南の姿があった。

龍也：「か……果南?」

果南：「あ……足が……!!」

果南の声には普段の明るさは欠片もなく、酷い痛みと苦痛に侵されているのが一目でわかった。

審判：「レフェリータイム!!」

大介：「駄目だな。骨に異常があるかもしれない」

龍也：「っ!」「ざっけんな!! わざとやりやがったな!!」

ヘンク：「我々が狙ったのは貴方ですよ? 自分は助かったのですからむしろホツとする所ではないですか? まあ《属性付与》^{エンチャント}を潰せただけ良しとしますか」

そう言い果南を嘲笑うチーム・ガルシルド。その瞬間、俺のなかに以前「魔界軍団乙」に抱いた以上の「殺意」という名の感情が溢れた。

大介：「選手交代だ。ロニージョ、行けるな？」

ロニージョ：「はい!! ガルシルド・・・お前だけは絶対に許さない!!」

世界チームボールで試合再開。……………フウ、あまりの怒りで逆に頭が鮮明だ……………

こいつらを……………殺す!!!!

マーク：「フロイ!!」パスツ!

フロイ：「ナイスパス!! ファイデオ!!」

見事なパスワークでボールを繋ぎ、ボールはファイデオに。俺はファイデオにパスを要求する。

龍也：「ファイデオ……………こつちだ……………」

ファイデオ：「リュウヤ!」ゾクツ!

ファイデオ：「何だ? リュウヤから発せられるこの圧力は!」わかった!! リュウヤ!!」

フオクス：「来なさい!!」

龍也：「ふんつ!!」ドゴオオオオオツ!!

俺はただのノーマルシュートを放つ。しかし……………

フオクス：「!? ボールが消えた!? どこ……………へ?」

相手が気づいたとき、ボールは既にキーパーの眼前にあり……………

ドグシャアアアッ!!!

ボールは相手キーパーの顔面に直撃しボールはゴールの中に。ボールがゴールに入ったため得点が認められ2ー1。そして相手キーパーは、ピクリとも動かない。ヘンク：「フォクス・・・？ フォクス!! これはいけません・・・脳震盪を起こしてるかもしれません!!」

スコープオ：「っ!」「貴様!!」

龍也：「ただのノーマルシユートだろ？ 取れなかったソイツが悪いんだよ!!」

見方も相手も息を飲んだ。脳震盪は下手をしたら意識障害や身体障害等の後遺症を起こしかねない危険なもの。相手をそんな状況にしてしまうシユートを放ち、龍也は・・・笑っていたのだ。とても邪悪な、笑みを浮かべて。

その瞬間全員が悟った。大海龍也は、未だかつてない程にぶちギレている。チーム・ガルシルドは、決して怒らせてはならないものを激昂するほど怒らせてしまったのだと。

チーム・ガルシルドはキーパーを控えのゴライアスと交代し、チーム・ガルシルドボールで試合再開。

オウル：「コヨーテ!!」

ボールはFWのコヨーテに渡り、そこに絢瀬がデイフェンスに入る。

絵里：「真・スノーエンジェル」!!

コヨーテ：「甘い!!」

絢瀬の必殺技を相手はジャンプで躲わしてシュート体制に入る。

コヨーテ：「ガンショット・改」!! ドツ!!

円堂：「全身でオーラをコントロール・・・これでどうだあああああ!!!」

すると、以前見た「マジン・ザ・ハンド」のマジンよりも威厳と威圧感のある魔神が現れ、シュートを両手で軽々とキャッチした。

コヨーテ：「な、何?」

ガルシルド：「バカな!? 究極の強化人間のシュートを止めただと!」

大介：「これが「マジン・ザ・ハンド」の進化系にして最強のキーパー技、「ゴツドキャッチ」だ!!」

円堂：「よし!! ロニージョ!!」

円堂のゴールキックからボールはロニージョへ。

ロニージョ：「任せろ!!」

クロウ：「ボールを寄越せ!!」

ロニージョ：「スーパーエラシコ・V3」!! 大海!!」

クロウを抜いたロニージョは俺にパスを出す。

龍也：「・・・ナイス」

ヘンク：「くっ、ボール!!」

普通なら、相手を抜いてシュートを撃つと誰もが思うだろう。実際全員そう思っていた。しかし・・・

龍也：「おらあああつ!!」ボグツ!!

ヘンク：「ぐおっあああああつ!!? オオオエエエツ!!」

先程の殺人シュートが溝落ちに直撃し、胃の内容物が押し出され、フィールドで嘔吐するヘンク。それを冷徹な眼差しで見下す龍也に皆息を呑む中、ここで前半終了のホイッスルが鳴った。

2 ー 1、世界チームリード。

く 続く く

第74話：闇を照らす2つの光

ハーftimeに入りベンチに戻る世界チームとチーム・ガルシルド。俺はベンチに戻ると、大介さんからげんこつを貰った。

龍也：「痛つつ!! 何すんだ!!」

大介：「何をするでは無いわ!! ボールは人を傷つける為の物ではない!!」

龍也：「人を傷つける? 違うね、ただのゴミ掃除ですよ。あんな奴ら、この程度では済まさない!!」

大介：「お前!! まさか・・・相手を全員松浦と同じ目に遭わせる気か!」

龍也：「いいえ? それ以上の目に遭わせてやるんですよ!!」

俺と大介さんが言い争っている、突然システイが俺を止める様にしがみついていた。

龍也：「っ!! システイ離せ!!」

システイ：「嫌だ・・・絶対に離さない!! 龍也さん・・・もう止めて!! 果南は復讐なんて望んで無い!!」

龍也：「ッ!! そんな・・・こと・・・最初から分かってるっ!!」

俺の目からは大粒の涙がボロボロとこぼれ落ちる。それを見た皆の目は俺を恐れる目から、優しい目へとだんだんと変わっていく。

システイ：「龍也さん……泣いてるんですか？」

龍也：「果南が復讐を望んで無い事なんか、初めから分かってる!! けど……俺の感情が!! 怒りが収まらないんだよ!! こうでもしないと、頭がおかしくなりそうで……そして何より、相手の策略に気づかず、果南を身代わりにさせてしまった俺自身が……許せない……っ……っ……」

果南：「龍也……っ」ハグッ!

果南はうなだれる俺に飛びついてハグしてきた。骨に異常がある筈の足にムチを打ってまで。

龍也：「っ! 果南、足!!」

果南：「痛っつ!! ……アハハ……これが限界だね」

龍也：「果南っ……」

果南は俺を自分の胸に抱き込む様にしてハグしてきた。この、彼女の温もりが、これまで何度も俺を奮い立たせてくれた……暖かい。

果南：「アイツらが許せないのは私も一緒だよ。けどね? それでやり返したら、アイツらと同じなの!! 例えそれでアイツらを叩き潰して勝てたとしても私はずっと後悔

すると思う。「私がケガなんかしたせいで！」って」

龍也：「……………」

果南：「私を本当に思うなら、この試合堂堂々戦って、そして勝って欲しい!! 貴方を心から信頼し、想いを寄せている、私と……システイの為に!!」

龍也：「!? つ、システイが……俺を?」

システイ：コクツ／／／／

世界選手：『『へえ〜?』』ニヤニヤ

龍也：「それが……二人の望みなんだな?」

システイ：「はい!! 私と果南に、龍也さんの信じるサッカーを見せて下さい!!」

果南：「この足じゃあ、間違いなく私は決勝戦には出られない。けど、私の想いは、龍也たちと一緒にフィールドで闘うから!!」ニコツ

龍也：「つ!／／……ああ、分かった!!」

大介：「……………もう大丈夫な様だな」

龍也：「はい!! すみませんでした!!」

俺は大介さんに頭を下げる。

大介：「よし!! では後半の作戦を伝える。エドガーとフィデイオ、交代だ。代わりに右サイドトップに「リン・ヒューズ」、左サイドトップに「アリス・コーナー」を入れ」

リン・アリス：「はい!!」

円堂：「よし、行くぞ!!」

審判：「後半戦を始めます!!」

oooooooooooo!!

後半戦が始まり相手FWスコルピオがドリブルで攻め上がってくる。

スコルピオ：「どけ!!」

アリス：「退かないよ!!」 「ジグザグフレーム・V3」!!」ボオオオオ!!

スコルピオ：「何っ!？」

アリス：「リン!! 行くよ!!」

リン：「OKアリス!!」

そしてアルゼンチンの女子FWコンビが連携シュートの体勢に入る。二人が交互に矢のような鋭い蹴りをボールの下部に加えボールに強烈なスピンをかけ着火。それを二人のツインシュートで蹴飛ばした。

アリス：「私たち「ジ・エンパイア」の最強シュート!!」

リン：「喰らいなさい!!」

アリス・リン：「インフェルノファイア・G5」!!!」

ボオガアアアアアアアアン!!!

とてつもないという比喻表現すら生温い地獄の業火を纏ったシュートが、チーム・ガルシルドゴールに襲い掛かる。

ゴライアス：「女に決められる俺ではない!!」「ビッグスパイダー!!」

クモの巣がインフェルノファイアを絡め取ろうとするが、そんなものは一瞬で灰塵と化しシュートはゴールに突き刺さった。

ヘンク：「何!？」

大介：「選手交代!! フロイ・ギリカナンに代わり『デイラン・キース』!!」

3 ー 1、世界チームリードのチーム・ガルシルドボールで試合再開。

スコープオ・コヨーテ・マンティス：「『ダークフェニックス・V2』!!」

チーム・ガルシルドも必死にパスを繋ぎシュートまで持ち込むが、

ドモン：「ボルケイノカット・V3」!!」ガカアツ!

円堂：「ナイスだ土門!!」「ゴッドキャッチ」!!」

バシイツ!!

DFとGKのコンビネーションディフェンスでいとも簡単に止められ・・・

円堂：「マーク!!」

マーク：「デイラン、龍也!!」行くぞ!!」

龍也・デイラン：「OK!!」

マーク・テイラン・龍也：「「グランフェンリル・G5」!!!」
「ワオオオオオオン!!!」

ゴライアス：「くそっ!!」
「ビッグスパイダー」!!」ガカアツ!!

ゴライアス：「な、なんだ!?」
「このパワーは!!」

ドガアアアアアアアアン!!

ザシュウツ!!

ただの人間のシュートすら止められず……

そしてシュートはゴールに突き刺さり4 ー 1。

世界チームリード。

ー 続く ー

第75話：40年の戦いの終幕

4-1、世界チームリードで試合再開する。俺達なんかには4点も取られた挙げ句に自分たちのシユートは決まらず3点の大量ビハインドに焦るチーム・ガルシルド。

ヘツジ：「オウル!!」

相手のパスが繋がったところにすかさずデイフェンスに入るリン。

リン：「止める!!」 「ジグザグフレイム・V3」!!!」ボオアアツ

オウル：「熱っ!!」

リンがボールを奪い攻め上がっていく。そこにすぐさまフォローに入るヘンク。

ヘンク：「させません!!」 「デーモンカット」!!!」

リン：「キヤアツ!!」

ヘンク：「マンティイス!!」

ボールがマンティイスに繋がりに、マークがデイフェンスに入るが、

マンティイス・デインゴ：「『ジャツジスルー3・改』!!!」ドカドカドカツ!!

マーク：「ぐわっ!?!」

デインゴが「イリユージュオンボール」を使い3つに増えたボールをマンティイスがマ

鬼道・龍也：「真・ブロックサーカス」!!」

鬼道：「ロニージョ!!」

そして鬼道からのパスはロニージョへと繋がり……

クロウ・マンティス：「止める!!!」

ロニージョ：「スパーエラシコ・V3」!!!」ギョングョんツ

空中での卓越した足さばきで相手を一気に二人まとめて抜いたロニージョはそのままシュート体制に。

ロニージョ：「ストライクウ・サンバアアアツ・V3」!!」ドツガアアアアアアアアアア!!!

ロニージョのシュートが、チーム・ガルシルドゴールに襲い掛かる。キーパーも必殺技で対抗するが……

ゴライアス：「ビッグスパイダー」!!」ガガガガガガ!!

ゴライアス：「ぐううおおおおお!!!」

シュートの威力に圧されどんどん後方へ引き摺られていく相手キーパー。そして……

ドガアアアアアアアア!!!

ゴライアス：「ぐわあああああ?!?!」

ザシユウツ!!

シユートはゴールに突き刺さり6―1。そして……

ピツ、ピツ、ピーーーー!!

試合終了のホイッスルが鳴った。

円堂：「やった!! 勝ったぞ!!」

俺たちや試合に出ていなかった各国の選手たちが集まって喜んでいる中、チーム・ガルシルドはこの結果を受け入れられない。

ヘンク：「そ、そんな……我々は究極の力を手にしたのではなかったのか……?」

ガルシルド：「ふざけるな!! 敗けたのはヘンク、全て貴様らのせいだ!!」

チーム・ガルシルド：「!!?!」

ガルシルド：「私は最強の力を与えてやった!! なのに敗けた貴様らが全て悪い!!!」

どこまでも醜い男だった。皆怒りと呆れの籠った白い目でガルシルドを見ていた。

ヘンク：「ガルシルド様!! 我々を見捨てるのですか? これ程までに尽くしてきた私たちを!!」

ガルシルド：「消えろ!! 役立たずに用は無い!!」

ヘンク：「そうですか……分かりました」

次の瞬間、チーム・ガルシルドはガルシルドを包囲した。

ガルシルド：「な!? 何のつもりだ貴様ら!!」

マンテイス：「ガルシルド、どうやら貴方は世界を支配する器では無かった様です」
ヘンク：「消えるのはガルシルド、貴方です!!」

ガルシルド：「ぐ、ぐぎぎぎぎぎぎ!!! 貴様らあああああゝゝゝゝ!!!」

龍也：「どうするんだガルシルド? コイツらはお前の命を狙ってくるみたいだぞ?」
大人しく捕まって刑務所入った方が命があるだけマシだと思うが?」

ガルシルドは悔しそうに歯噛みしながら警察に連行されていった。みつともなく喚きちらしながら。

龍也：「終わったな」

円堂：「ああ」

風丸：「皆!! 今、病院から連絡があつて、鬼瓦さんの手術が無事に成功して意識が戻つたつて!!」

円堂：「本当か!? 悪い皆、俺達は病院h・・・「ワシも行く。」へ?」

大介：「鬼瓦はワシの親友だ当たり前じゃろ?」

円堂：「!! うん、一緒に行こう!!」

そして俺を除いたイナズマジヤパンメンバーと大介さんは病院へ、コトアール代表と他国の代表は破壊されたコトアールエリアの片付けのため残り、俺はシステイと二人で

話そうと、イタリアアエリアへ向かった。

— 続く —

第76話：勝利の代償と想いの決着

ガルシルドとの戦いが終わり鬼瓦さんの意識が戻ったと連絡を受けた俺たちイナズマジャパンとじいちゃんは病院に来ていた。

— 果南 side —

西木野：「ふくむ。こりや骨にヒビが入ってるね。最低でも1ヶ月は絶対安静。それから完治まで更に1ヶ月って所だね」

真姫：「パパ、じゃあ果南の選手生命は大丈夫なの？」

西木野：「ああ。ケガが治れば、またサッカー出来るよ」

果南：「分かりました・・・スママセン。1つお願いが・・・」

— 円堂 side —

円堂：「久遠監督!! 響木さん!!」

久遠：「お前たち無事だったか!! よく戻ってきたな」

響木：「終わったんだな。本当に・・・」

風丸：「それで、鬼瓦さんは？」

鬼瓦：「俺ならここだ」

声のした方を振り向くと、頭に包帯を巻き、松葉杖を付いた鬼瓦さんが立っていた。ツバサ：「鬼瓦さん！ 良かった生きてて！」

鬼瓦：「嬢ちゃん、俺はそう簡単にはくたばらんよ．．．心配かけて悪かったな」

大介：「良かったな。鬼瓦．．．」

鬼瓦：「大介!!」

響木：「大介さん!?!」

じいちゃんはそう言つて病院から去つて行くのを、俺は追いかける。

— セントラルパーク —

円堂：「じいちゃん!!」

大介：「守．．．」

ギユツ!

円堂：「じいちゃん!! 生きてたなら．．．何で連絡くれなかつたんだよ!! 皆、どれだけ心配したと思つてるんだ!!!」

大介：「スマンな。ワシの娘、つまりお前の母さんに危険が及ぶ可能性があつてな、出来なかつたんだ。国外に逃亡し、何度か日本に帰ろうと思つたときもあつた。だがコトアールで暮らしてる内に、だんだん楽しくなつてきてしまつてな。あと一年、あと一年と思つている内に、あつという間に40年だ!!」

円堂：「ぐっ、何だよ……それ!! 皆、どれだけ悲しんだと思ってるんだ!!」

大介：「守、決勝戦は、ワシは全力でお前たちイナズマジャパンと闘う。果たして今のお前たちに、リトルギガントが倒せるかな?」

そう言っただけじゃないちゃんが悪戯っぽい笑みを浮かべると、

響木：「大介さん……円堂たちは強くなりましたよ? 今のコイツらなら、きつとりリトルギガントにも負けませんよ」

大介：「はっ、バカを言うな響木!! リトルギガントの選手は、地区予選も世界大会も全試合20kgの重りを付けて試合していたんだぞ? 外したのは一度だけ、先程のイタリア戦の後半のみだ。更に全試合、全ての必殺技を封印してきた」

響木：「な!! 何ですと!! その状態であれだけのプレーを!!」

大介：「リトルギガントの選手たちは、ワシのサッカー人生の集大成だ。今のイナズマジャパンでは、大海龍也の《完全無欠の模倣》パーフェクトコピーか、高坂穂乃果の《加速世界》アクセルワールド位しか張り合える要素などありませんよ。本来なら、松浦果南の《属性付与》エンチャントと闘うのも楽しみにしておったんだがな」

円堂：「それでも、俺たちだって負けられないよ!! 「勝利の女神は諦めない奴が好き。」だろ?」

大介：「よう言うた!! 流石ワシの孫じゃ!!」

そうしてじいちゃんはコトオールエリアに戻っていった。決勝戦までもう特訓だ!!

— 龍也 side —

ガルシルドとの戦いが終わり俺とシステイは皆とは別行動でイタリアエリアの公園に来ていた。

龍也：「……………」

システイ：「……………」

龍也・システイ：「あ、あのっ！　っ！」

き、気まずい……………」

システイ：「さ、先になんぞ……………」

龍也：「じ、じゃあ…………」。システイの気持ちはさつき聞いたけど…………。いつから？

んなに接点無かったと思うんだけど…………」

システイ：「チームK戦の時からです。試合前に私がデモーニオから攻撃されて、けど、龍也さんが守ってくれたの…………。覚えてます？」

龍也：「覚えてるけど…………。えっ？　まさかそれで？」

システイ：「私にとつては重大なことだったんです!!　敵のハズの私たちの為に、自分たちのチームを犠牲にする事になってしまった事、本当に申し訳なく思ってるんです」

龍也：「別に気にして無いし、俺は他国の代表チームを敵だとは思って無いよ……ライバルだとは思ってたけどね。それにこうして決勝トーナメントには進めた訳だし」

システイ：「それでもです……龍也さん……私は龍也さんの事が好きです!!! 私と、付き合って下さい!!!」

龍也：「……………」

俺は、答えられずにいた。迷っている訳では無い。答えは決まっている。ただ、どういえばこの子を一番傷付けずに済むのか、分からなくて。

システイ：「龍也さん、龍也さんの本心を教えてください」

龍也：「ゴメン。俺は……………」

システイ：「……………分かってました。「え？」龍也さんは、ずっと果南の事を見てた。いつも果南の為に、あんなに必死になって。きつと私じゃあ……あそこまで必死になつてはくれない。龍也さんの……特別には……なれ……ないんだって」グスッ ヒッ
グ

龍也：「システイ……………」

システイ：「でもっ!! それっ、でもっ!!」

ガバッ!

システイは、俺の胸に顔を埋めて泣き始めた。だが、抱き締める事は出来ない。ここ

でそんな事をすれば、この子の心の傷を、より深くしてしまう。だから俺はシステイが泣き止むまで、そのまま胸を貸した。

システイ：「ぐすつ。スミマセン」

龍也：「良いよ。システイは何も悪いことしてないだろう？」

システイ：「はい」

龍也：「決勝戦、応援してくれるか？」

システイ：「っ!! グスツ はいっ!!」

システイは目に涙を浮かべながら笑顔でそう言ってくれた。そしてシステイと別れ、果南の入院した病院へ向かった。

―― 病院 ―

ガラガラ

果南：「あつ、龍也」

龍也：「システイと話してきた。もう大丈夫だ」

果南：「そっか・・・」

龍也：「じゃあ、俺は行くよ・・・」龍也っ!!「？」

果南：「頑張つて。私の分まで」

龍也：「っ!! . . . 勿論!!」
そして俺は宿舎に帰った。

― 続く ―

最終章：世界一の栄冠は誰の手に

第77話：最終決戦前日

あれから4日が過ぎ、いよいよ明日世界大会決勝戦で大介さん率いる「リトルギガン」と激突する。昨日までの3日間はアメリカにイギリス、アルゼンチンにロシア、ブラジルとイタリア、世界大会で闘ったライバル達が練習に付き合ってくれたおかげで、この短期間に俺たちの実力ははね上がった。

そして今日は明日の試合に疲れを残さない為に午前中で練習切り上げとなった。

く 日本代表宿舎内 く

久遠：「お前たち、今日までよく頑張ってきた。明日で全てが決まる。必ず勝利し、世界一の座を勝ち取るぞ!!」

イナズマジャパン：『『はい!!!』』

久遠：「では、明日の決勝戦を闘う16名を発表する。

F W、左、大海龍也

右、豪炎寺修也!!」

龍也・豪炎寺：「はい!!!」

久遠：「続いてMF、

左サイド、高坂穂乃果

左センター、矢澤ここ

右センター、鬼道有人

右サイド、綺羅ツバサ!!」

穂乃果・ここ・鬼道・ツバサ：「「「はい!!!」」」

久遠：「続いてポランチ、不動明王!!」

不動：「はい」

久遠：「そしてDF、

左、風丸一郎太

センター、鹿角聖良

右、優木あんじゅ!!」

風丸・聖良・あんじゅ：「「「はい!!!」」」

久遠：「最後にGK、円堂守!!」

円堂：「はい!」

久遠：「以上の11名がスタメン。続いて控えを発表する。

立向居勇氣、

綱海条介、

園田海未、

渡辺曜、

吹雪士朗。

以上の16名で挑む」

ことり：「落ちちやつたか……。穂乃果ちゃん、海未ちゃん、にこちゃん!! 頑張つて!!」

穂乃果・海未・にこ：「うん!! (はい!!) (任せなさい!!)」

野坂：「鬼道さん、不動さん、頼みました」

鬼道：「ああ。任せろ」

佐久間：「不動、頼んだぞ」

不動：「へっ、任せな」

千歌：「曜ちゃん頑張つてね!! 私たちの思いだけは、一緒に闘ってるから!!」
ダイヤ：「曜さんが浦女の代表です。頼みましたよ?」

曜：「ヨーソロー!! 力の限り闘うであります!!」

そしてミーティングが終わり俺が外出しようとする時、

ダイヤ：「あら? 大海さんどこかへ行かれるのですか?」

龍也：「うん。果南の病院」

ダイヤ：「でしたら私と千歌さんと曜さんも一緒に行くので待つてもらって良いですか？」

龍也：「分かった」

そして俺たち四人で果南の入院している病院へ向かった。

201room—Kanan Matuuraと書かれている部屋に入ると足を吊り具で固定した果南がTVを見ていた。

龍也：「果南？」

果南：「あつ、皆!!」

千歌：「具合はどう？」

果南：「さすがに4日位じゃあ何も変わらないってば」

ダイヤ：「果南さん・・・」

果南：「それで決勝戦はどのメンバーで行くことになったの？」

龍也：「俺、豪炎寺、高坂、矢澤、鬼道、綺羅、不動、風丸、鹿角、優木、円堂がスタメン。控えに立向居、綱海、園田、渡辺、吹雪だな」

果南：「そつか。千歌とダイヤは選ばれなかったんだね」

ダイヤ：「ええ」

果南：「曜!! しっかりね? 私たちの分も浦の星魂見せてきてね!!」
曜：「了解であります!!」

そしてしばらく皆で話していると果南が、

果南：「ねえ、ちよつと龍也と二人だけにしてくれない?」

ダイヤ：「えっ!?! し、しかし・・・」

黒澤はチラチラ俺と果南を交互に見ながらしどろもどろになっている。ああ。二人にして俺が果南に何かするんじゃないかと思ってるのか。

果南：「お願い。ダイヤ」

千歌：「分かった!! ほら行くよダイヤさん!!」グイグイ

ダイヤ：「ちよつ、千歌さん!」

曜：「ほらほら!! 行くであります!!」グイグイ

ダイヤ：「曜さんまで!」

そして三人が退室し二人きりになった。

果南：「実はね? チームドクターの西木野先生にお願いして、決勝戦はコートベンチには入れることになったの。車椅子だけどね。」

龍也：「!? 本当に!?!」

果南：「もちろん西木野先生が側に居るけどね」

龍也：「分かった。元より敗けるつもりは無いけど、尚更敗けられなくなったな」

果南：「うん．．．ねえ？ オーストラリア戦の後の二人で遊びに行った時のこと、覚えてる？」

龍也：「うん。忘れる筈が無いよ。あの約束があつたから、俺は今まで頑張つてこれたんだから．．．．．果南」

果南：「ん．．．」

チュツ

今までも、一緒に寝たりしたときにキスはしたことあつたが、全て頼っぺにだった。この日俺と果南は、初めて唇同士を重ねるキスを交わした。

龍也：「絶対勝つから」

果南：「うん、信じてる。龍也!!」

そして俺と高海たち四人は宿舎に帰り次の日、決勝戦当日の朝を向かえた。

いよいよ今日、世界一が決まる。

— 続く —

へ矢澤にこへ 誕生日編：仲間との1日先生

私たちイナズマジャパンが世界を制して翌年の7月、私は妹のこころとここあにあることを頼まれた。

にこ：「二人の通ってるサッカースクールの臨時コーチになってほしい？」

ここあ：「そうなの!! コーチってばぎっくり腰になっちゃって。」

こころ：「それで監督と父母さんたちがどうしましょう? ってなったときに「そう言えばここあちゃんところちゃんのお姉さんって世界一のイナズマジャパンのメンバーでしたよね?」って話になったんです。」

にこ：「そうなのね。私はいいけど虎太郎がなく。まだ年長だし家で待たせておく訳には行かないからなく。」

こころ：「それは大丈夫です。監督さんたちに弟も連れてきて良いか聞いてOK貰ったので!!」

しゅ、周到ね。まあそれならいいか。

にこ：「わかったわ。それでいつ?」

こころ：「来週の水曜日の午後5時からですお姉さま!!」

来週の水曜日と言うと7月22日、私の誕生日じゃない。皆で集まろうって約束したのは午前中だから大丈夫ね。あつ、そうだ。何人か一緒に来てもらおうかしら。

にこ：「分かったわ。こころ、こころ、ここあ、他のメンバーにも声かけて大丈夫？」

こころ・ここあ：「ぜひ!!」

その日の夜、私はチームの監督さんに電話して臨時コーチの話OKという連絡と詳細の打ち合わせをした。

監督：「それじゃあ矢澤さん水曜日宜しくお願いしますね？」

にこ：「分かりました。」

皆驚くぞく。フフフ。

そして水曜日の二人のチームの練習時間になり、私は虎太郎も連れてきてこころ、ここあと四人でグラウンドに来ていた。

監督：「それじゃあ今日臨時コーチに来て貰った元イナズマジャパンMF矢澤にこさんだ。皆挨拶!!」

スクール生：「宜しくお願いします!!」

にこ：「はい宜しく!あと、サプライズで三人イナズマジャパンのメンバーに来てもらってまっす!!」

監督：「えっ!? 聞いてない!」

にこ：「サプライズですから!! 三人とも来て!!」

そしてその三人がでてきた瞬間、監督さんも含めてチームの子たち全員の顔が驚愕で染まった。

円堂：「こんにちは!! 元イナズマジヤパンキャプテンの円堂守だ。ポジションはゴールキーパーだ。」

龍也：「大海龍也。宜しくな。パーフェクトオールラウンダーとか《完全無欠の模倣（パーフェクトコピー）》って言えば分かるかな?」

穂乃果：「高坂穂乃果です!! ポジションはフォワードだよ。宜しくね?」

ドワアアアアアアアアアア

女子1：「龍也さんだー!!」

男子1：「円堂さくん!!!」

女子2：「穂乃果さくん!!」

男子2：「可愛いー!! 彼氏にしてー!!!」

穂乃果：「今言ったの誰!? 流石に年下過ぎるよ。」

にこ：「ちよつと!? にこの時より歓声が大きいじゃない!」

穂乃果：「まあにこちゃんだし。」

龍也：「だな。」

にこ：「どうおおういう意味よ!!!」

監督：「ゴホン！すごいメンバーに来ていただいて私も大変緊張しているが、今日はこの四人の方々に教えて貰う。挨拶!!」

スクール生：「「宜しくお願ひします!!!」
!!!」「」

そして練習が始まり、

男子3：「龍也さん!!」「エクスカリバー」教えて下さい!!」

男子4：「あつ！ズルい！俺にも「スサノオブレイド」教えてください!!!」

龍也：「分かったから皆順番に!!」

男子5：「円堂さん!!」「イジゲン・ザ・ハンド」教えて下さい。」

円堂：「分かった。じゃあまずは……」

女子3：「穂乃果さくくん!!」必殺技教えてー!!」

穂乃果：「分かったってば!!」キャアッ!?今お尻さわったの誰?」

女子2：「男子最低く。」

男子6：「さわったの俺たちで確定なのかよ!」

女子4：「羨ましい……」

穂乃果：「羨ましく無いよ!?悪い事だからね!」

「こころ：「なんか皆お姉さまの所に来ませんね。」

「こ：「まああの三人はにこと違って目立ってたからね。」

「ここあ：「そんなこと無いよ!!お姉ちゃん格好よかったもん!!」

「こ：「ありがとう。じゃあ私たちも練習しましょうか。」

「こころ・ここあ：「はい!!」

そして練習が終わり、私と三人は監督さんと話していた。虎太郎たちは話が終わるまで待っている。

監督：「ありがとうございました皆さん。」

円堂：「いや、俺たちも楽しかったですよ?」

監督：「ありがとうございます。皆はどうでした?」

龍也：「結構上手い子が多くてビックリしましたね。あれなら少年サッカーなら努力しだいで大大会の東京代表になれると思いますよ?」

監督：「本当ですか!?!皆に伝えておきます。」

穂乃果：「でもオーバーワークには気をつけて下さいね?小学生は身体が出来上がって無いですから。怪我したら元も子もありませんし。」

監督：「はい。そこはちゃんと注意して見ておきます。」

にこ：「じゃあ私はこころたちを待たせてるので帰りますね。お疲れ様でした。」

監督：「お疲れ様でした。」

円堂：「じゃあそろそろ俺たちも。」

龍也・円堂・穂乃果：「「お疲れ様でした!!」」

監督：「お疲れ様でした。」

そして皆で帰り道を歩いていると、

穂乃果：「にこちゃん！誕生日おめでとう！これ私たちから!!」

袋の中には「にこ」、「こころ」、「ここあ」、「こたろう」と刺繍してあるリストバンドが入っていた。

にこ：「ありがとう三人とも!!」

龍也：「矢澤には大会中世話になったからな。」

にこ：「へ？」

龍也：「矢澤、大会中はあまり目立たなかったって言ってたけど、普段メンバーを支えてくれたのはマネージャーを除けば矢澤だったからな。」

こころ：「!!」

穂乃果：「それにさ、優れた選手は必ず目立つかって言うそうじゃないでしょ？にこちゃん試合になると相手を引き付けて味方を動きやすくしたりカバーに的確に入っ

たり、痒い所に手が届く？みたいな感じにいるだけで闘いやすかったからね。」
にこ：「皆……。」グスツ

私のやって来たことは間違つてなんかいなかった。ムダじゃなかったんだと、心の底から思ったあまり試合に出られなくて、要らないと思われてるんじゃないかと感じたことも少しあつたけど、そんなことはなかったんだ。

にこ：「皆！ありがとう!!」

私は幸せな気持ちになり、姉弟四人で家に帰った。

） にこちゃん Happy Birthday ）

第78話・決勝戦vs「リトルギガント」!! キックオフ

!!

— タイタニックススタジアム —

あともう少しで決勝戦が始まる。スタジアムの熱気は最高潮に高まっていた。

実況：「お待たせしました世界の皆さん。いよいよFFI世界大会決勝戦、日本代表「イナズマジヤパン」vsコトオール代表「リトルギガント」の一戦が、始まろうとしています!!」

解説：「両チーム共に今大会が始まるまで全くの無名。実力未知数のスタートでした。そんな2つのチームが、世界大会の決勝まで来たのです!!」

く フィールド く

大介：「守・・・お前がワシの意思を継ぎ、サッカーをやっていたことはとても嬉しく思う。だが、それと試合は別の話だ。ワシはこの試合全力でお前たちを倒す。戦士の意地と誇りにかけてな。」

!!
円堂：「俺たちだつて負けるつもりは微塵も無い!! 勝つのは俺たちだ!! 行くぞ皆!!」

イナズマジャパン：『『おう!!』』

アナウンス：「それでは決勝戦に先立ち、選手の紹介を行います。緑のユニフォーム、リトルギガント、

G K キャプテン「ロココ・ウルパ」。

D F 「ウインディ・ファスタ」

D F 「ウォルター・マウンテン」

D F 「ジニー・ゲイノ」

D F 「マロン・イアン」

M F 「シンティ・ハンパ」

M F 「ユーム・リンジー」

M F 「マキシ・クウ」

M F 「キート・ライアンド」

F W 「ドラゴ・ヒル」

F W 「ゴーシュ・フレア」。

アナウンス：「続いて青のユニフォーム、イナズマジャパン、

G K キャプテン、「田堂守」

D F 「風丸一郎太」

D F 「鹿角聖良」

D F 「優木あんじゅ」

M F 「不動明王」

M F 「高坂穂乃果」

M F 「矢澤にこ」

M F 「鬼道有人」

M F 「綺羅ツバサ」

F W 「豪炎寺修也」・・・」

龍也：「行ってくる!!」

果南：「頑張ってる!!」

アナウンス：「F W 「大海龍也」。」

アナウンスが俺の名を呼んだ瞬間、割れんばかりの歓声に包まれた。そして選手整列し相手チーム、審判と握手。コイントスの結果、コトアールのキックオフで試合開始となった。

選手がいちにつき大型ビジョンにカウントダウンが写し出される。

観客：「5!、4!、3!、2!、1!・・・」

長かった闘いも最終戦。絶対に勝つ!!

体制に。

鬼道：「行け大海!! シュートを決める!!」

龍也：「ああ!! 喰らえっ!!」 「フリーズゲイザー・V3」!!」

猛吹雪と落雷の高圧電流を内包したシュートがキーパー目掛けて飛んでいく。するとロココは、地区予選も含めて、この大会中初となる必殺技を発動する。

ロココ：「真・ゴッドハンドX」 エエエックス!!」 ガガアツ!!

シューウウウウ・・・

ロココは、俺のシュートを軽々と止めてしまった。

実況：「と、止めたーーーーー!! キーパー「ロココ・ウルパ」!! 世界のキーパーが

誰も止められなかった大海龍也を、ついに完璧に止めたーーーーー!!!」

穂乃果：「そんな!? 龍也君のシュートをあんなに軽々と!?」

俺のシュートを止めたロココはシンティにパスを出す。

にこ：「止めるわよ鬼道!!」

鬼道：「ああ!! 行くぞ!!」

シンティ：「遅いよ!! ギュンツ!!」

にこ：「なっ、速っ!!」

穂乃果：「《加速世界》!! ハアアアアツ!!」 バシイツ!!

シンテイ：「うわっ!?」

ツバサ：「ナイス穂乃果さん!!」

穂乃果：「豪炎寺君!!」

ボールは豪炎寺に渡り、豪炎寺はドリブルで上がって行く。

ウオルター：「真・グランドクエイク!!!」ドッガアアアアアアン!!

ウオルターが地面を思い切り殴り付けると地面から土が分厚い壁のように吹き出し豪炎寺をドシヤット。ボールを奪った。

ウオルター：「ドラゴさん!!」

前線へのロングパスでボールはFWのドラゴに渡り、

ドラゴ：「行くぜ!!」[ダブル・ジョー・V2]!!」

竜の顎から鋭い牙のようなシュートがジグザグな軌道で放たれる。

円堂：「ゴツドキヤッチ・G2」!!」ガガアアアツ!!

シュウウウウ!!

しかし円堂も負けてはいない。自身の集大成とも言える現時点での最強のキーパー技、「ゴツドキヤッチ」で、「ダブル・ジョー」を止めた。

ドラゴ：「止めただど!?!」

円堂：「俺はこの3日間、エドガーとフィディオに協力してもらって、大海と一緒に」エ

クリプスカリバー」や「ダブル・ゴッド・ブレード」相手に練習してたんだ!! 舐めるな!!」

遂に火蓋が切られた最終決戦。勝つのはどちらだ。

イナズマジヤパン 0 ー 1 リトルギガント

― 続く ―

第79話：1つのことを極め抜け

円堂が相手の必殺シュート「ダブル・ジョー」を「ゴッドキャッチ」で止め、ゴールキックで試合再開。

円堂：「風丸!!」

ボールは風丸に渡り、ゴーシュとキートがプレスに来る。

風丸：「真・風神の舞」!!」ビュゴオオオツ!!

激しく荒れ狂う嵐の舞でディフェンスを吹き飛ばし突破。

風丸：「アルゼンチンのディフェンス相手に練習してて良かったぜ。鬼道!!」パスツ

ボールは鬼道に渡りマキシとシンテイがディフェンスに来る。

鬼道：「矢澤!!」

鬼道・にこ：「キラールフィールズ・V3」!!」ドガアアアアアン!!

二人の挟み込むようなインパクトの衝撃波でディフェンスを突破した。

鬼道：「今の俺たちは誰とでも連携技を合わせられる!!」

そしてパスは豪炎寺に渡り、シュート体制に入る。

豪炎寺：「真・爆熱スクリュー」!!」ドガアアアアアアン!!!

ロココ：「真・ゴッドハンドX」エエエックス!!!」ガガアアアッ！
 シュウウウウウ……。

ロココは豪炎寺のシュートも完璧に止めてマロンにパスを出した。

マロン：「キートさ……、「アクセルワールド《加速世界》!!」!?」

穂乃果は一瞬の隙を付きボールを奪い俺にパスを出した。

龍也：「ナイス穂乃果!!」

ボールを受けとった俺はシュート体勢に入る。空中でボールにエネルギーを溜めてオーバーヘッドで下に落として足払いで回転を更にプラスし風の膜をコーティング。

龍也：「ラストリゾートD（ドラゴン）・G5」!!!」

雄叫びとともに思い切りシュートを放った。ロココも必殺技で応戦する。

ロココ：「真・ゴッドハンドX」エエエックス!!!」ガガアアアッ!!

ロココ：「ぐうううおおおおああ!!!」

パワーはほぼ互角に見えた。しかしどういいう訳か、急にロココのパワーが上がった様に見えた。そして……。

シュウウウウ……。

俺は、何が起こったかを理解できなかった。会場も見方も静まりかえっている。

実況：「……な、何と「ロココ・ウルパ」!! 今まで何人ものキーパーを風

ぎ払ってきた「大海龍也」の最強シュート、「ラストリゾートD」までも止めてしまつた——!!」

龍也：「う……嘘……だろ……?」

穂乃果：「龍也君の最強のシュートが……」

円堂：「止め……られた……?」

ロココ：「ユーム!!」

龍也：「っ!? 戻れ!! カウンターだ!!」

ツバサ：「ジャツジメントレイ・G5」!!」

いち速く立ち直っていたツバサが相手のカウンターを止めてボールを奪い返した。

ウインディ：「行かせないよ!!」 「分身ディフェンス・V3」!!」

ウインディが2体の分身を作り三人がかり（1人）でボールを奪い返す。

ウインディ：「ゴーシュ!!」

ウインディからのパスがゴーシュに飛ぶが、

聖良：「真・スノーエンジェル」!!」ガキイイン!!」

鹿角はゴーシュがパスを受け取った一瞬を狙い氷漬けにしてボールを奪った。

聖良：「絵理さんから技を託されたんです!! これ以上進ませません!! 鬼道くん!!」

パスツ

鬼道：「矢澤、大海!! 行くぞ!!」

鬼道・龍也・にこ：「「皇帝ペンギン3号・G5」!!!」「ドガアアアアアン!!」

俺達は最強の「皇帝ペンギン」を放つが……

ロココ：「真・ゴッドハンドX」エエエックス!!」ガガアアアツ!

シユウウウウ!

鬼道：「これも駄目か!」

一体どうすれば点が取れるんだ……俺達が必死に考えを巡らせていると……

ツバサ：「皆!! 一本だけでいい、私に撃たせて!!」

にこ：「えっ!? 破れるの!」

龍也：「分かった。「ちよつ、大海!!」どのみち俺のシユートは通じないんだ。少しでも可能性があるなら賭けたい。心配しなくても俺だつてこのまま引き下がるつもりは

無いさ」

円堂：「よし!! 綺羅にボールを集めるぞ」

ロココ：「ジニー!!」

ジニー：「よし。マキシ!!」パスッ

ロココからのパスがジニーに飛び、そこからマキシに繋がる。

マキシ：「やっと来たね……《加速世界》!!」くつ、本当に厄介な技だね……」

穂乃果はボールを奪いツバサにパスを出した。

ツバサ：「ナイスパス!! 行くわよ!!」

ツバサはジャンプしてシュート体勢に入る。

鬼道：「つておい!!」

にこ：「流星ブレードじゃあ破れないわよ!」

あんじゅ：「大丈夫よ」

にこ：「え?」

私は代表選考試合の前、初めて大海君に勝負を挑み、負けた時からずっと考えてきた。どうすればより上手になれるか、どうすればより強くなるか、けど技術をあれもこれもと習得しようとするとうとうどうしても1つ1つの内容が薄い物になってしまう。

ツバサ：「今のやり方じゃあ駄目だ。」

私はやり方を変える事にした。いろいろな技術を習得しようとするのではなく、今ある技術を、極限まで極める。広く浅くではなく、狭く深く。技1つ1つの練度を極限まで上げて一点突破の必殺にする。そのためにとにかく、思考と改良を重ねてきた。

龍也：「？　おい、「流星ブレード」って、あんなに高くジャンプしてたっけ？」

ツバサ：「絶対に決める!!!　これが・・・私が修練の先に行き着いた、「流星ブレード」の進化系にして、私の最強のシュート技「天空落とし」だあああああああ!!!」
ドツゴオオオオオオオオン!!

ツバサがボールを蹴った瞬間、宇宙が堕ちてきた。そのすさまじいパワーで、コト
アールゴールを脅かす。

ロココ：「くっ!!　「真・ゴッドハンドX」エエエックス!!!」ガガアアアッ!!!!

ロココ：「ぐうううおおああ!!!」ビリビリ

「ゴッドハンドX」と「天空落とし」が激突する。パワーは拮抗する処か、明らかに「天空落とし」が押している。

ツバサ：「決まれええええええ!!!」

ロココ：「そんなんっ!?　パワーが・・・うわあああああっ!?」

ザシユウツ!!

ツバサは、龍也でも破れなかった技を、自分1人の力で破り、ボールをゴールネットに叩き込んだ。それは・・・ツバサの成長、「進化」の証しに他ならなかった。

日本　1　1　1　コトアール

—
続
く
—

第80話：前半戦終了

リトルギガントは動揺していた。まさか本気の自分たちが点を取られる、ロココの「ゴッドハンドX」が破られるとは思っていなかったからだ。

マキシ：「そ．．．そんな．．．」

ドラゴ：「ゴッドハンドX」が、破られるなんて．．．」

大介：く、くくくくく、ワーツハツハツハ!! 面白い!! やはり世界一を決める試合はこうでなくては!!」

ロココ：「ダイスケ．．．」

大介：「ロココ!! あの技を解禁だ!! 次は止める!!」

ロココ：「つ!! ああ、分かった!!」

コトアールボールで試合再開。

ピーーーーーー!!!

鬼道：「全員でシュートコースを塞げ!!」

俺達は自分の身体を盾にシュートコースを塞いだ。

ゴーシュ：「おっと!! 危ない危ない。じゃあ、マキシ!!」

円堂はこのシュートも完璧に止めた。

ユーム：「止めましたか。やりますね」

シュートを止めた円堂は穂乃果にパスを出し、

穂乃果：「行くよ!!」

キートン：「させるかよ!!」「真・フェイクボンバー!!」「《アクセルワールド加速世界》!!」つつ!! まる

で時間が止まったみたいいな速さだ!!」

穂乃果：「ツバサさん!!」

キートを抜いた穂乃果からツバサにパスが通る。もう一度「天空落とし」の構えだ。

ツバサ：「ナイスパス!! もう一度喰らいなさい!!」「天空落とし!!!」ドツガアアア

アアアアアアン!!!

ロココ：「もう点はやらない!!」「タマシイ・ザ・ハンド・G2!!!」

ロココは自身の心臓部分に莫大なオーラを集め、それを巨大な手として一気に放出。

先ほどの「ゴッドハンドX」とは比べ物にならないパワーのその技は、ツバサの「天空

落とし」を軽々と止めた」

ツバサ：「そんなんっ!! 何よあの技!?!」

そして、ここで前半戦終了のホイッスルが鳴った。

前半戦終了。

日本 1 1 1
コトアール

― 続く ―

〈高海千歌〉誕生日編：笑顔のち災難ときどき笑顔

FFIが終わり翌年の8月1日。今は学校が夏休みで普段はインターハイに向けての調整をしている時期なのだが、今日は私の誕生日なので浦女サッカー部恒例の「部員の誰かが誕生日の日は皆で紅白戦!!」をしていた。

現在、点差は3 - 2で私のチームが勝っており、善子ちゃんがむっちゃんからボールを奪った。

善子：「曜!!」パスッ

ボールは曜ちゃんに渡り新年のAちゃんがディフェンスに入る。

曜：「マーメイドダイブ・V3」!!!

曜ちゃんは去年の秋、今は卒業した果南ちゃんから教えてもらった水中高速機動のドリブル技でAちゃんを抜き私にパスを出した。

花丸：「Bちゃん、梨子ちゃん!!シュートコースを塞ぐズラ!!」

B・梨子：「分かりました!（了解!!）」

千歌：「甘いよ!!」ダンッ!!

私は空高くジャンプし上からシュート体制に入った。地上でディフェンスを固めて

も、頭の上を抜いてしまえば関係ない!!

私は太陽の光と私自身の炎のオーラをボールに注ぎ込みそれを圧縮。凄まじいエネルギーを充填されたボールをゴールめがけて蹴り落とした。

千歌：「サンシャインフオール!!!」

まるで本物の太陽の様な眩い輝きと高温を纏ったシュートがゴールを襲う。

花丸：「くっっ!」「シュートイーター・G5」!!ズラアアアアア!!!」

ガガガアツ!!!

花丸ちゃんの生み出したエネルギーボールが私のシュートの威力を弱めていくがあまりの威力にエネルギーボールはぼろぼろと崩れていき技を突き破ってゴールネットを揺らした。

そして4ー2私のチームの勝利で試合終了。

梨子：「はい終わり!!じゃあ一年生は、コーナーフラッグとベンチ、二年生は飲み物のタンクとコップ、三年生はボールを片付けて!!」

部員：「「はい!!!」(分かりました!!!)」「」

ボールを片付けていると曜ちゃんが、

曜：「千歌ちゃんすごいね!今日の紅白戦ハットトリックじゃん!!」

千歌：「そりゃ気合いも入るよ!!1月の選手権のリベンジもしたいし!!」

そう。1月の選手権全国大会準決勝で私たち浦の星女学院サッカー部は龍也くんがいる神奈川の「竜星学園」に5-1でぼろぼろに負かされたのだ。私たちは去年のインターハイ優勝校。そして選手権でも穂乃果さんやことりさんのいる音ノ木坂、立向井くんのいる陽花戸、綱海くんのいる大海原、聖良さんのいる函館聖泉にも勝つて来たのにその自信は呆気なく打ち砕かれてしまった。

梨子：「千歌ちゃん、曜ちゃん!!後片付けは?」

千歌：「やってるよ。」

曜：「このボールで最後であります。」

最後のボールを片付けたところで更衣室に戻り練習着を脱いでジャージに着替えて皆揃ったところで、私の家「十千万（とちまん）」へ移動する。

十千万

志摩：「皆いらつしやい。大浴場空いてるから入ってきて良いわよ?」

千歌：「やったあ!ありがと志摩姉え!!」

そして皆で温泉に入っていると、

C：「曜先輩って胸大きいですね。」

曜：「えっ?ちよつ、何言つて・・・?」

A：「ちよつと触らせて下さい!!」

千歌：「は・・・は・・・は・・・。」「グツタリ

梨子：「ありがとうございませす志摩さん!!」「ツヤツヤ

A・B・C：「ありがとうございませす!!!」「ツヤツヤ

梨子：「じゃあ皆グラス持った?」

部員：「は・い!!」

梨子：「じゃあ、千歌ちゃん!お誕生日おめでとう!!」

部員：「おめでとう!（おめでとうございませす!）」

盛大にクラッカーが鳴り、私は笑顔で、

千歌：「ありがとう皆!!」

そのあと料理を食べながら皆でお喋りして今日は解散した。

— 千歌ちゃん Happy Birthday —

第81話：絶望

1-1の同点でハーフタイムに入りベンチに戻る両チーム。しかし俺は浮かない顔だった。

風丸：「やつぱり強いなコトアールは。何か弱点は無いのか・・・？」

円堂：「俺は見つけたぜ？ コトアールの弱点」

イナズマジヤパン：『『本当か（に）！？』』

円堂：「じいちゃんのチームは強い。強すぎるんだ。だから自分たちと闘うチームは強くて当然と思ってる。最高のプレーを期待してるんだ」

風丸：「そうかもしれないな。だが、それが何故弱点になるんだ？」

円堂：「じいちゃんはきつと、これまでの俺たちの試合から俺たちが次にどういう動きをするかイメージして、それに対抗するプレーをロココたちに指揮してるはずだ。そのイメージを崩す事が出来れば!!」

豪炎寺：「さすがのコトアールも、動揺して隙が出来るかもしれないな」

鬼道：「緩急のあるプレーでリズムを崩すということだな」

にこ：「でも、リズムを崩すってどうやって？」

響木：「どうやってだと？ お前たちまだ気付かないのか？」

聖良：「えっ？」

響木：「お前たちは今までの試合で、試合中にどんどん進化し続けて来た。それは時に相手にとつて、自分たちのイメージを崩す脅威となった。大介さんも、そんなお前たちの底力までは見抜ききれていないはず。ずっとお前たちと共に闘ってきた俺と久遠以外にはな」

そして、監督が俺たちに出した最後の指示は、自分たちの好きなようにやれと言うものだった。そして本当のサツカーを、全力で楽しめと。しかし俺は・・・、

龍也：（なんとしても俺の力で点を取らないとダメなんだ!! 「ねえ!!」楽しんでる余裕何て・・・「ねえってば!!」）

龍也：「うわっ!!」

俺がビックリして声のした方を見ると、果南が真剣な表情で俺を見ていた。

果南：「龍也、もしかして「自分1人の力で点を取らないとダメだ」と思ってる？」

龍也：「そんなの・・・当たり前e 「ていつ!!」 ゴチン!! 痛って、何を・・・？」

果南：「龍也がまだ私たちを信用してなかった罰だよ」

龍也：「なっ!! 信用ならして・・・「信用してたら「自分1人の力で」何て思わないよ」え？」

審判：「ハーフタイム終了です。」

皆がフィールドに戻る中、「最後に、」と果南が声をかけてきた。

果南：「龍也が答えを見つけれなければ、イナズマジヤパンは敗けるよ。最後にヒントね？」 私たちは龍也を必要だと思ってる。けど龍也は皆を必要だと思ってる？」

龍也：「……………」

そして俺はフィールドに出て、イナズマジヤパンボールで後半戦となった。

くくくくくくくくくくくくくくくく

ロココ：「イナズマジヤパンは前半よりも更にチームの心が一つになったみたいだ。そんなチームはどんどん進化して、強くなるから手強いんだ!! そうだよねダイスケ

!!

大介：「ああ、こつちも奥の手をだすぞ!! コトアールの超攻撃型フォーメーション

!!

円堂：「なっ!! ロココがFW!？」

アナウンス：「選手の交代をお知らせします。コトアール、「ドラゴ・ヒル」君に代わりFWにGKの「ロココ・ウルパ」君が入り、GKに「ケーン・サイトー」君が入ります」

そしてイナズマジヤパンボールでキックオフ。しかし、

円堂：「何てパワーだ・・・。」風丸!!」

ボールを受け取った風丸は「風神の舞」でディフェンスを抜き矢澤にパスを出す。
にこ：「大海!!」

そしてボールは俺に繋がりシュート体制に入る。

龍也：「絶対決める!!!」 「ラストリゾートD・G5」!!!」 ドツガアアアアアアアアアアア
アン!!!

黒い邪龍が地を破壊しながらゴールに迫る。

ケーン：「真・ゴッドハンドX」 エエエックス!!!」 ガガアツ!!!

ギヤルルルルルルルルルル!!!

ケーン：「ぐうおおおおあああ!!!」

シュルルルルルル

龍也：「な、何っ!?!」

実況：「何と「ケーン・サイトー」までもが「大海龍也」を止めてしまったー!!!」

豪炎寺：「大海、ディフェンスだ・・・。大海?」

龍也：「俺じゃあ点は取れない? ブツブツ・・・じゃあ俺がこのチームにいる価値は

? ブツブツ・・・価値が無くなれば、皆離れていく・・・ウ、うあああああああ

あああああああああああああああああ

!!!!!!!

にこ：「大海!! しっかりしなさい大海!!」

ロココ：「精神が崩壊したか。」

曜：「監督!! 大海君の交代を!!」

久遠：「駄目だ。今そんなことしたら逆効果だ。フィールドにいる仲間には任せるしかない」

曜：「そんな・・・」

果南：（龍也、お願いだから早く気づいて!!）

日本1ー1コトアール

ー 続く ー

第82話：希望の光

ロココに「ラストリゾートD」を止められ、控えのキーパーにまで止められ、俺の視界は絶望で真っ暗になった。

龍也：（・・・もう俺が「大海・・・」チームにいる価値は無い。早く「大海！」交代してくれ・・・「大海!!!」）

パアアアアアアン!!!

龍也：「っ!？」

俺が気づいたときにはコトアールに二点目を取られていた。俺、矢澤にひつ叩かれたのか・・・。

にこ：「いつまでメソメソしてんのよ!! まだ試合は終わってない!!」

龍也：「でも・・・!! もう・・・」

にこ：「ふざけんじゃないわよ!! ただ、「自分一人の力じゃ敵わない」相手が現れた、それだけじゃない!! 寧ろそれが当たり前!! それがサッカーでしょうが!!!」

龍也：「っ!!」

にこ：「自分一人の力で勝てない相手に勝つ為に、「仲間」が居るんでしょ!! なのに

あんたはいつも1人で抱え込んで・・・もつと私たちを、仲間を頼りなさいよ!!!」

龍也：「仲間を・・・」

にこ：「アンタ・・・もしも私たちがアンタを受け入れたのが「そうすれば勝てるから」とか打算的な理由だと思つてたんなら、本気でぶん殴るわよ!! 私たちは全員、アジア予選の時からアンタを仲間だと思つてるし、アンタを信じてるのよ!!? 私たちのエースは、こんなところで終わる人じゃない!! 1人で立ち上がれないなら、私たちが手を貸す。1人で点を取れないなら、仲間と一緒に取ればいい!! そんな当たり前のことで気付かないのよ!!」

龍也：「・・・・・・・・・・」

にこ：「次の私の・・・私達のシユートを見てなさい。ツバサ、鬼道!! あれをやるわよ!!」

ツバサ・鬼道：「分かった（わ）」

豪炎寺：「ほら、試合再開だ」

豪炎寺に手を貸して貰い立ち上がり自陣に戻る。そしてイナズマジヤパンボールで試合再開。

ゴーシユ：「貰った!!」

穂乃果：「《加速世界》!!! シュンツ! シュンツ!

ボールをゴーシユに奪われ掛けるが、穂乃果が《加速世界》アクセルワールドで何とか振り切りキープする。

にこ：「穂乃果！こっち!!」

穂乃果：「にこちゃん!!」パスッ!

そしてボールは矢澤に繋がる。

にこ：「ナイスパス!! ツバサ、鬼道!! 行くわよ!!」

ツバサ：「ええ!! やりましょう!!」

鬼道：「大海に仲間の素晴らしさを教えてやらないとな。本当に世話の焼ける奴だ……」

そして鬼道と綺羅が連続で交互にボールを上蹴り矢澤が踵落としてボールを落とす。ボールには今にも大爆発を起こしそうなエネルギーがチャージされ、ボールの周りに1つの銀河が生み出され、それを三人同時にシュートする。そのシュートの名は：

にこ・ツバサ・鬼道：「「ビッグバン」!!!」

ドツゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

銀河すら揺るがす程の超越的な破壊力のシュートがケーンに襲い掛かる。

ロココ：「な、何だこのパワーは?」

ケーン：「止める!!」「真・ゴッドハンドX」エエエックス!!!「ガガアアッ!!!」

ビリビリビリ!!

ケーン：「ぐうううおおああああ!!」 ミシミシ

「ゴッドハンドX」と「ビッグバン」が激突する。しかし勝敗は一瞬で着いた。

ケーン：「ぐっ!! 押しきられ・・・ウワアアアアッ?」

矢澤達三人のシュートは、「ゴッドハンドX」を破り、轟音と共にコトオールゴールに突き刺さった。

実況：「ゴーーーーール!! 日本同点に追い付いたー!!」

龍也：「凄え。本当に・・・点を取りやがった・・・」

解説：「おや? キーパーのケーン君、手首を押さえてますね」

大介：「選手交代!」「ケーン・サイトー」にかわり「ロココ・ウルパ」がキーパーに戻る。FWには「リユー・スケール」が入る」

久遠：「選手交代!」「矢澤にこ」にかわり、「渡辺曜」!!」

実況：「おっと、ここで日本とコトオール1人ずつの選手交代です」

曜：「大海君!! 果南ちゃんからの伝言」

龍也：「果南からの?」

曜：「私たちはまだ1人じゃあ龍也に敵わないけど、皆の力を合わせれば龍也に着いていける。龍也の本当にやりたいサッカーをして!」だつてさ?」

龍也：「果南……」

にこ：「大海!! ここからはアンタの番よ、しっかりやりなさい!!」

龍也：「っ!! ……そう……だよな」

何で忘れちまつてたのかな。俺にはもうこんなに、信じてても大丈夫な仲間が居たのに

!!

曜：「大海君!!」

龍也：「よし、行くぞお前ら!! 俺1人じゃない。全員で勝つぞ!!」

イナズマジヤパン：「『もちろん!!』」

2-2の同点。コトアールボールで試合再開。

マキシ・シンティ：「「エアライド・V3」!!!」

龍也：「穂乃果!頼む!!」

穂乃果：「任せて!! 《アクセルワールド加速世界》!!」 シュンツ!バツ!

マキシ：「うわっ!?!」

穂乃果：「龍也君!!」

穂乃果のパスは俺に繋がる。

龍也：「豪炎寺、曜!! 行くぞ!!」

龍也・豪炎寺・曜：「「「グランドファイア・G5」!!!」」

ドツゴオオオオオオオオオオオオン!!!

今までを遥かに越えた、火砕流の様な爆炎のシュートが、ロココを襲う。しかしDFのウォルターが、シュートブロックに入る。

ウォルター：「通さないっス!!」「真・グランドクエイク!!!」

ドガアアアアッ!

シュートブロックが入るが俺たちのシュートはウォルターを吹き飛ばし、ブロックを突き破り尚も進む。

ロココ：「ウォルター!! くっ、」
「タマシイ・ザ・ハンド・G2!!!」

ガガアアッ!! ギャルルルルルルルル!!!

ロココ：「な!! 何だこのパワー!」

「タマシイ・ザ・ハンド」と「グランドファイア」が激突。しかしロココは「グランドファイア」のパワーを受けきり防いで見せた。

実況：「止めたー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!!! キーパーロココ、ナイスセーブ!!!」

大介：「厄介なことになったな。だがそれでこそ面白くなると言うものだ」

日本 2 ー 2 コトアール

|
続
く
|

第83話：決勝戦決着!! 世界一は・・・

俺、豪炎寺、曜の「グランドファイア」を止めたロココのゴールキックで試合再開。

ロココ：「ウインデイ!!」

ボールはウインデイに渡りツバサがデイフェンスに入るが、

ウインデイ：「分身フェイント・V3」!!」シュババツ!!

ウインデイは2体の分身を生み出し、3人（1人）のパスワークと連携でツバサを抜いた。

ウインデイ：「ユーム!!」パスッ

不動：「甘めえ!!」

相手のパスを不動がインターセプト。そのまま鬼道にパスを出す。

ロココ：「甘い!!」

しかしゴールをがら空きにして攻め上がって来たロココが鬼道へのパスをインターセプト仕返しそのままシュート体制に。

ロココ：「Xブラスト・V2」!!!」

ドツギユウオオオオオオオオオオオン!!!

龍也：「聖良!! シュートブロックだ!!」

聖良：「任せて下さい!!」「スノーマウンテン・V3」!!!ガガガアツ!!バゴオツ!!

聖良がシュートブロックに入るがロココのシュートは「スノーマウンテン」を軽々粉砕しゴールめがけて突き進む。

円堂：「任せろ!!」「ゴッドキャッチ・G4」!!!「ガガアアツ!!」

更に進化した円堂の「ゴッドキャッチ」とロココの「Xブラスト」はほぼ互角のパワーで押し押されを繰り返す。

円堂：「ハアアアアアアアアアアア!!!」

バシイツ!! シュルルル

実況：「止めたーーーーー!! 円堂今度は「Xブラスト」をがちりキャッチ!!」

円堂：「カウンターだ!!」 ドツ!!

円堂のゴールキックからボールはあんじゅへ渡りあんじゅから不動、不動から鬼道、鬼道から曜へとパスが繋がる。

曜：「行くよ穂乃果さん!! 不動くん!!」

3人が黒い三角形のエネルギを形成しながら成層圏まで跳び上がり遙か上空から漆黒のオーラを纏ったシュートを蹴り落とす。

曜・穂乃果・不動：「「ラスト・デスゾーン・G5」!!!」「ドツギユウオオオオオオ

オオン!!!

鬼道：「大海!! シュートチェインだ!!!」

龍也：「任せろ!!」 「剣撃乱舞・V3」!!! ドツギユウオオオオオオオオオオン!!!

「ラスト・デスゾーン」に18連撃の後押しを叩き込みボールは威力を増して突き進む。

ロココ：「タマシイ・ザ・ハンド・G3」!!! 「ガガガガガガ!!!」

進化したロココの「タマシイ・ザ・ハンド」。これは楽々止められた・・・と思ったのだが、

ロココ：「ぐうううおおあああああ!!!」

ギヤルルルルルルルルルルルルルルル!!!

中々回転が収まらないへチエイン「ラスト・デスゾーン」。しかしロココも必死に止めようとする。そこでロココは「タマシイ・ザ・ハンド」の手でシュートを握り潰した。

ドガアアアアアアアア!!!

爆風とともに粉々になった「タマシイ・ザ・ハンド」。しかし爆風が晴れると、ゴール手前でボールをキャッチし、何とか堪えるロココの姿があった。

ロココ：くっ、何なんだ？ さっきとは比べ物にならないくらい「大海龍也」のパワーが上がってる!!!

ロココのゴールキックで試合再開し、ボールはマロンへ。

マロン：「シンテイさん!!!」

ボールを受け取りそのまま攻め上がるシンテイ。しかし曜が立ちふさがる。

シンテイ・ジニー：「[エアライド・V3]!!!」

ボールをサーフボードの様に空中波乗りを見せるシンテイ。

曜：「それを待ってた!!」 [ウォーターバレット・V2]!! ヨーソロー!!!」ドン

!ドン!ドン!ドン!

曜の周りに大粒の水の塊が大量に出現し、それを相手目掛けて一斉射撃。次々相手に命中し相手はボールから転落、そのままボールを奪った。

龍也：「いいぞ曜!!」

曜：「ブイツ!!」 [シユンツ!]「へ?」

油断した隙にまたゴールからとびだしてきたロココがボールを奪いシユート体制に入る。

ロココ：「[Xブラスト・V3]!!!」

ドツギユウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

円堂：「止める!!!」 [ゴツドキャッチ・G5]!!!」ガガガガガガアアアッ!!!!

お互いに最終進化し、先程よりも強力なパワー!で拮抗する両者。

鬼道：「円堂が止めたこのボールを!!」パスッ

ツバサ：「絶対ゴール前まで!!」バツ

曜：「繋いで見せる!!」バシィッ

曜：「大海くん!!」

実況：「ここでボールは大海に渡ったー!ー!ー!!」

ウオルター：「ムダっス!! アンタじゃロココさんは破れない!!」

龍也：「いいや? 俺一人で決められないなら、仲間と決めればいいんだ!! 豪炎寺、

円堂!! 来い!!」

実況：「ここで円堂がゴールを捨てて上がって行くぞー!ー!」

そして俺たち三人でシュート体制に。ボールの周りをぐるぐると反時計回りでダツシュすると風圧で上昇気流の竜巻を生み出し3方向から同時シュート。

円堂・豪炎寺：「ジエツト!!」

龍也：「ストリィィィム」!!!」

竜巻はゴールへと伸びる風の道となり、シュートは竜巻の目を沿いながらゴールめがけてどんどん威力を増しながら突き進む。

ロココ：「くっ、これだけは止めるんだ!! 「タマシイ・ザ・ハンド・G4」!!!!」

ドガガガガガガガガガアアッ!!!!!!

日本 3
1
2
コト
アール

― 続く ―

最終話：世界大会閉会。そして新たな伝説へ・・・

ピッ、ピッ、ピーーーーーー!!!

試合終了のホイッスルが鳴り、俺たちが得点板を見ると、

日本3ー2コトアール

円堂：「・・・勝った・・・くくくっ!! 勝ったぞおおおっ!!!」

円堂が雄叫びを上げた瞬間、スタジアムは大歓声に包まれる。そして世界一の決定を祝う火花が上がる。

マキシ：「敗れた・・・」

ゴーシユ：「俺たちが・・・」

大介：「あーくそ!! 悔しい悔しい!! いいかお前たち、この悔しさを忘れるな!! また明日からみっちり特訓だ!!!」

ロココ：「ダイスケ・・・」

リトルギガント：「『はい!!!』」

豪炎寺：「俺たち、本当になつたんだな!!」

鬼道：「ああ、世界一にな!!!」

歓声や花火が鳴りやまない中、俺はベンチの果南の元へと駆け寄った。

龍也：「果南!!」

果南：「龍・・也っ!?!?!?!?!」

ハグッ!

俺が果南を思い切り抱き締めると果南もギュッと俺を抱き締め返してくる。

龍也：「勝ったよ・・?」

果南：「うん・・おめでとう龍也っ、皆!!」

円堂：「監督!!」

俺たちは監督の前に並ぶ。勿論俺は果南の車椅子を押して二人で並ぶ。

久遠：「俺から言わせれば、まだまだ欠陥だらけだがお前たちは今、世界で一番マシなプレーが出来るチームになった」

円堂：「えっ?」

久遠：「んっ、コホン。よくやった」

円堂：「監督くっッ!!」

俺たちは監督の周りに集まり皆で喜びを分かち合う。

そして表彰式、閉会式を終了しF F I 世界大会は幕を閉じた。

そして次の日家族へのお土産をたくさんバッグに詰めた俺たちは母国への帰国のた

め空港にやって来た。

そして世界大会で共に競いあったライバル達との挨拶を済ませ、また機会があったら一緒にサッカーしようと約束し、皆は帰っていった。因みにロシア代表だった絢瀬とイタリア代表だった小原はそれぞれ音ノ木坂と浦の星に戻る為、俺たちと同じ飛行機で日本に戻る事になっている。

― 帰りの飛行機の中 ―

果南：「ねえ、龍也？」

龍也：「どうした？」

果南：「私、内浦に戻る前に龍也の家に寄つてもいい？ お義父さんとお義母さんに挨拶したくて」

龍也：「凄い気が早い字だった気がするけどまあいいか。良いよ？ それと、言つてなかったけど俺父さんいないんだ。俺が中一の時病気で亡くなって・・・それから母さんは一人で俺を育ててくれて。本当に感謝してるよ」

果南：「っ!? そうだったんだ・・・ゴメン。お母さん優しいの？」

龍也：「優しいよ？ 俺がサッカー出来なくなつた時も何とか出来ないか必死になつてくれたり・・・」

果南：「いいお母さんだね？」

果南：「お義母さん!? 頭を上げてください!!」

見ると母さんは泣いていた。そしてひとつひとつ話してくれた。自分が一人親で育てたせいで、俺に寂しい思いをさせているのではと悩んでいたこと。俺がサッカーを捨てたときになにもできなかった事を悔やんでいたこと。そんな時、F F I 世界大会の代表の話が舞い降り、果南が俺の側に居てくれたお陰で、久しぶりに俺がサッカーで心から笑ってる顔を見ることができ、とても感謝していたこと。

母：「果南さんと龍也の噂や、試合中継での2人の様子で、龍也の笑顔を取り戻してくれたのはこの人なんだとすぐに分かりました。ですから果南さん、これからも龍也の側においてあげてくれませんか?」

果南：「そんなに心配しなくて大丈夫です。今の龍也には私だけじゃない、大勢の仲間がいますから」

龍也：「そうだよ。それに俺は母さんに感謝してるんだ。だからさ、そんなに自分を責めないでよ。それにさ、俺と果南、「世界一になる」って約束を果たしたから付き合い始めたんだよね。// // // //」

母：「本当に!?!」

果南：「アハハ・・・// // // 神奈川と静岡の遠距離恋愛にはなりますけど、毎日連絡取るつもりです」

母：「ありがとう・果南さん・・・。グスツ、龍也!! 今日貴方の好きな麻婆豆腐作ったから一杯食べてね? 果南さんも是非ご一緒に!!」

龍也：「マジ!!?」母さんの麻婆豆腐最高なんだよね」

そして俺たちは果南も一緒に3人で俺の家に行き、一緒に夕飯を食べて今晚は果南がウチに泊まることになった。

龍也：「果南／＼／＼」

果南：「龍也、大好きっ♡／＼／＼／」

チュツ

そしてこの日、俺はこの彼女を自分の生涯をかけて幸せにすると誓った。

日本代表、イナズマジヤパンが世界の頂点に立ち月日は流れ

―― 6年後 ―

俺と果南は高校卒業後同じプロチームに入り4年間一緒にプレーし、俺との結婚を期に果南は現役を引退。そして、

果南：「あつ、動いた!」

龍也：「本当だ!!」

果南：「この子にも幸せになってもらいたいね？」

龍也：「ああ。俺たちの手で、この子を絶対幸せにしよう」

このお腹の子を、大切に育てようと、二人で誓いあった。

） fin ）

— それから更に16年後 —

月日が流れここ静岡にこの春高校入学を迎える1人の少年がいた。

？：「父さん、母さん、行ってきます!!」

龍也：「行ってらっしゃい。今日から東京で1人暮らしか・・・」

果南：「秋ちゃんが管理してるアパートだよね？ 迷惑かけないでね？」

？：「分かってる!! 行ってきます!!」

龍也・果南：「行ってらっしゃい」

最強の2人の遺伝子を受け継ぐ1人の少年と・・・

— 東京某所 —

秋（元イナズマジャパンマネージャー）：「天馬く？ 今日から天馬の隣の部屋に新し

い子が入ってくるから仲良くしてね？」

天馬：「秋ネエの知り合い？」

秋：「昔の仲間の息子さん。今年から高一で雷門に入るんですって」

天馬：「同じ年!?! 分かった、サッカーやるのかな? 楽しみだなく」

後に革命と言う名の風を起こす、松風天馬の2人が織り成す新たな物語が、始まろうとしていた。

— E n d —

龍也：『分かったから泣くな!!いつ行けば良いんだ?』

穂乃果：「来週の月曜日。ふたりとも学校夏休みでしょ?」

龍也：『来週の月曜日と言うと8月3日か。分かった、協力するよ。』

穂乃果：「ありがと〜〜!!」

〜 8月3日・和菓子屋穂むら

穂乃果母（以降：母）：「二人とも今日は宜しくね?」

穂乃果父（以降：父）：「……………」

龍也・円堂：「よ、宜しくお願いします。（この親父さん怖ええー!!）」

母：「それで二人は料理って出来る?」

円堂：「俺は……………」

龍也：「俺は家が母子家庭で普段は俺が飯作ってるんで出来ます。」

母：「へえ?」キラン

な、なんか嫌な予感が……………」

母：「じゃあ大海君だっけ?君はお父さんと厨房をお願いね?円堂君は穂乃果と一緒に店番宜しく。私は配達行ってくるから。」

龍也：「へ……………」

そして俺は親父さんに引き摺られて連行されていった。

円堂：「大海・・・お前の死は無駄にしないぞ。」

龍也：「ぎけんな円堂!! てめえコノヤロー!!!」ズルズル

— 厨房 —

龍也：「あの・・・？俺は何をすれば？今日は何を作るんですか？」

父：「・・・・・・・・・・。」

親父さんは無言で紙を指差した。

龍也：「大福（豆・こし餡）、だんご（みたらし・こし餡）か。分かりました。」

親父さんが小豆と豆を茹で始めたのを見て俺は餅を二つに分けてそれぞれだんご用大福用としてまずは大福用の餅の練り上げから開始した。10分位練ったところで親父さんに豆茹でに入れる塩を渡した。

父：「!？」

大福用の餅の練り上げを終了し、次はだんごに取りかかる。もちを一口サイズにちぎり3つを一本の串に指す。

龍也：「だんごと大福の下ごしらえ終わりました！後10分で寝かせ終わります！」

父：コクツ

俺は茹でた小豆を取りだしザラメ砂糖を入れてすり鉢ですっていき最後に親父さんに越しの作業をしてもらう。

龍也：「大福から入ります。」

父：こくつ。

そして作業を終えると一時を過ぎていた。

母：「配達行つてきたわよ〜？つてあら〜？お父さんたちもう終わったの!？」

父：「・・・大海くん、作業スピードは速いし、これから俺がやろうとしてることの下

準備をやつておいてくれるし凄くやり易かった。」

母：「!?あ、あのお父さんがここまで言うなんて!!」

穂乃果：「大海くん!!いったい何したの!？」

龍也：「何もしてないよ!!」

く　く　く　く　く　く　く　く

そして手伝いが終わり俺と円堂が帰り仕度をしていると、

母：「二人とも今日はありがとう。これバイト代ね？」

龍也：「あざす。」

円堂：「ありがとうございます。」

母：「それと大海君？うちに婿に来ない？お父さんがあんなに絶賛するなんて私たち

も今まで見たことないのよ？」

穂乃果：「お母さん!?!何言ってるの!!大海君には彼女いるよ!?!」

母：「あら、そうなんだ。」

龍也：「まあ一応。」

父：「・・・・・・・・・・。」

母：「あらら、お父さんシヨック受けちゃった。」

円堂：「あはは、では俺たちはこれで。」

龍也：「そうだな。じゃあ。」

穂乃果：「今日はありがとねー！！！！」

龍也：「あつ、そうだ、高坂！」

穂乃果：「？」

龍也：「誕生日おめでとう。」

穂乃果：「っ！うん！ありがとう！！」

母：「はあ、立派な子ね。私が独身でもう20年若ければアタックしてたわね。」

穂乃果：「お母さん・・・。」

けど今日は龍也君呼んで正解だったね！！あ、あと円堂くんも。

〈 穂乃果ちゃん Happy Birthday 〉

After Story：プロへの挑戦！ 静岡選手権

編

After Story：プロ入団

イナズマジャパンの世界制覇から二年後の4月、俺は今年から静岡県沼津市を拠点とするJ3リーグの「ア○ルク○沼○」に入団するため静岡の内浦に住んでいる彼女、「松浦果南」の実家に一緒に住む。

果南とはFFI代表選抜で出会い、それから恋仲になった。因みに果南は俺より学年はひとつ上で、果南は一足先に「ア○ルク○沼○」所属のプロ選手として活躍していた。

— 横浜駅 —

大海母：「龍也、果南さんの家の人に迷惑かけたら駄目だからね？」

龍也：「分かってる。じゃあ母さんも元気でね？ 連絡もするし、時々二人で会いに来るよ」

大海母：「ええ。楽しみにしてるわ」

そして電車に乗り込むとドアが閉まり電車は走り出す。母さんは俺を乗せた電車をずっと見送っていた。

大海母：「龍也……、元気だね……」

—— 静岡県・沼津駅 ——

私は今年からウチのチームに入る私の恋人、龍也を迎えに沼津駅に来ていたのだが、私はチームの中でも名が知られている上に人気もあるらしく、あつという間に周りにバレて子供たちに捕まってしまった。

少年：「あの!! 松浦選手ですよね!? サイン下さい!!」

少女：「ずるい!! 私もお願ひします! 握手も!!」

果南：「あ、アハハ……。 (こんなことしに来た訳じゃ無いんだけどなあ……)」
すると駅の階段から私の大好きな男の子が、龍也が降りてきた。

龍也：「……果南、大変そうだな……?」

果南：「アハハハ……。助けて龍也?」

すると、俺と果南の様子を伺っていた子供たちや周りのファンたちが声を荒げた。

男ファン：「何だお前!! 松浦選手に馴れ馴れしく!!」

少女：「そうよそうよ!!」

ちよつとカチンと来た。コイツらに現実つて物を教えてやるか・・・。

龍也：「何が？ 自分の彼女と話すくらい普通だと思えますけど？」

男ファン：「か、彼女!？」

女ファン：「う、嘘y・・・「本当だよ？」っ!？」

果南が俺の腕に自分の腕を絡めて、「この人は私の恋人だ」とハッキリと言ってやる
と、周りの人たちは皆絶望した表情になっていた。

果南：「じゃあ行こつか？ 内浦行きバス来てるし・・・」

龍也：「おう。行くか」

呆然と俺たちを見ている人たちをスルーして、俺たちは内浦行きのバスに乗った。

— 内浦・淡島 —

龍也：「こんにちはお義母かあさん。今日からお世話になります!!」

松浦母：「はいよろし・・・「帰れ」貴方・・・？」

うゝむ・・・やはりお義父とうさんはまだ認めてくれないかあ・・・。

龍也：「お義母さん、因みに俺は用具室かどつかで寝れば良いですかね？」

松浦母：「何言つてるの!?! 大事な義息子むすこにそんなことさせられません!! 果南の部屋で一緒に寝ちやいなさい。2人共もう社会人なんだから問題ないでしょ？ なんなら美味しくいただきますちやつても良いわよ？」

龍也：「っ!?／／／／／」ボシユゝ

果南：「お、おとおお お母さん何言ってるの!?／／／／／」

松浦母：「後でゴム3つ程渡しておくからっ☆」

果南：「余計なことしないでえーっ!!／／／／／」

その日の夜、俺と果南は一緒に寝たが鋼の理性で踏みとどまった。

本当はめちやくちややりたかったけどね？

— 次の日 —

俺と果南はチーム本部に行き、他の同期の入団選手やチームの先輩選手と顔合わせをし、新歓パーティーとなった。

?：「おい!!」

龍也：「はい? 貴方は・・・」

?：「GKの上原うえはらかずき一輝だ。入団して今年で4年目になる」

龍也：「上原先輩ですね? 宜しくお願いします」

上原：「ああ。宜しく・・・ってそんなことよりお前!! 松浦と付き合ってるって本当

か!？」

龍也：「はい!! 果南は俺の彼女です」

上原：「!? おい! 松浦は先輩だぞ!!」

龍也：「ああ・・・、果南に「今まで通りタメ口で宜しく」って言われてるんで」

それを聞いた上原先輩はいきなり暗くなりいじけ始めた。

上原：「羨ましい・・・俺だって可愛い女の子と・・・」

果南：「先輩!! 私の彼氏を困らせないで下さい!! そんな僻みっぽいからモテないんですよ!!」

それを聞いた先輩はさらに落ち込み負のオーラを漂わせまくっていた。

龍也：「果南・・・言い過ぎじゃね?」

果南：「良いの!!」

監督：「皆注目!!」

その声で部屋の人たちの視線が監督に集まる。

監督：「明日、先輩も交えて新人の実力を見る為の紅白戦を行う。尚、この試合はプロ歴8年以上の選手は除外してある。では発表する。」

Aチーム、上原一輝、渡慎治、宮間まどか、木村明日香、動山岳志、木山ケン、松浦果南、春咲美穂乃、斉刀研真、小木真、大海龍也

Bチーム、木野夏人、岩崎明美、宮倉豪、飯田里志、桜井和也、高橋レイジ、小南アリス、リリアンアーネット、烏丸匠、久瀬元礎、夏川涼音

以上」

龍也：「Aチームの今日から入団の新人は誰ですか？」

宮間：「私です」

春咲：「ハイ☆!!」

小木：「俺もだ」

龍也：「改めて自己紹介な？ 俺は大海龍也。ポジションはキーパー含めてどこでも

できる。宜しく」

宮間：「えつ、凄い!! あつ、宮間^{みやま}まどかです。ポジションはDFです」

春咲：「ハイハイ!! 春咲^{はるさき}美穂^{みほ}乃^のです!! ☆ ポジはMFヨロシクねっ♡」

小木：「小木^{おぎまこと}真。ポジションはFW。宜しくな？」

そして先輩たちも自己紹介をはじめ

上原：「上原^{うえはらかずき}一輝^{いっけい}プロ4年目、GKだ」

渡：「渡^{わたりしんじ}慎治^{しんじ}。プロ5年目のDFだ。宜しく」

木村：「木村^{きむら}明日香^{あすか}です。プロ2年目のDF。宜しくね？」

動山：「動山^{どうざん}岳志^{たけし}プロ3年目、DFだ。宜しく」

木山：「木山^{きやま}ケン。プロ6年目のMF」

果南：「松浦果南。プロ2年目、MFだよ。因みに龍也とは高校生のときにイナズマ

ジャパンで一緒に世界一になったチームメイトだよ」

木村：「えっ?! 大海くんってあの《完全無欠の模倣》の大海龍也なの!?!」

龍也：「はい!! 今の俺の力がどこまで通用するか・・・不安ですけど同じくらい楽しみです!!!」

斉刀：「じゃあ最後だな。俺は斉刀研真プロ4年目、MFだ」

龍也・宮間・春咲・小木：「「「宜しくお願ひします!!!」」」

その後、明日の紅白戦のポジションや作戦の打ち合わせをしてパーティーも終了し、果南と一緒に松浦家に帰った。

帰る間際に皆さんと一緒に住んでいること、恋人であることを話したら独身男性陣からの怨念が凄かった。

果南、人気あるんだな・・・

— 番外編続く —

After Story : 紅白戦!!

新人歓迎パーティーの次の日、新人と先輩方を交えて紅白戦を行うということで、俺と果南は「○スルク○口沼○」の練習場にやって来た。皆大方は既に集まっていた。そしてウォームアップを済ませ、試合を始める為整列する。

監督：「それではこれより紅白戦を始める。礼!!」

両チーム：『宜しくお願いします!!!』

フオーメーション

B チーム

G K 木野

D F 岩崎 宮倉 飯田 桜井

ボランチ 高橋

M F 小南 リリア 烏丸

F W 久瀬 夏川

A チーム

F W 大海 小木

M F 齊刀 松浦 春咲

ボランチ 木山

D F 宮間 渡 動山 木村

G K 上原

ピイイイイーツ!!

Aチームボールで試合開始。ボールは果南が持ちドリブルで相手陣内に切り込んで行く。

アーネット：「行かせません!!」

アーネットがディフェンスに来るが、果南はルーレット一本でスルツと抜き去り、先輩の力を見せつけた。

高橋：「おつと松浦、通行止めだ」

そこにプロ歴6年のBチームチームキャプテンの高橋先輩がディフェンスに入る。

果南：「レイジさん・・・なら!!」美穂乃ちゃん!!

果南が左に抜くと見せかけて右足のアウトサイドでノールックでパスを出し、ボールは春咲へ。

春咲：「ナイスですセンパイツ!!」

ボールを持った春咲へ同期の桜井と先輩の飯田さんが2人掛かりでディフェンスに

入る。

春咲：「行きまーす☆ オラアツ!! 「クレイモア・V3」!!」
フェイスリー

春咲が地面にボールを蹴りこむと地面から剣山のように鋭利な何本もの針になったボールが地面から突き出してきて二人をズタズタにして突破。エグツ!?

春咲：「小木くーん!!」

ボールは小木に渡り、小木はシュート体勢に入る。

小木が空中でボールを両足で力強く挟み込み、右足を上、左足を下に勢いよく振り抜きボールに強烈な回転をかけて撃ち出す。

小木：「真・ガンシヨット」!!」
しん

ゴールへと飛んでいくボールに、俺が追撃のシュートチェインを叩き込む。

龍也：「剣撃乱舞・V3」!!」

ドガアアアアツ!!

更に勢いを増した「ガンシヨット」を、木野先輩が迎え撃つ。

木野：「止める!!」
ほのお
 「炎の鉄槌・V3」!!」

ドゴオオオオオオンツ!!、

木野先輩は炎の魔神を出現させ、左手でシュートを叩き潰そうとする……が、

木野：「ぐううううううっ!?! (何だ!! このパワーは!?!)」

ドガアアアアンツ!!

シュートは木野先輩を吹き飛ばし、ゴールへと突き刺さり1-0。

監督：「ほう．．．？」

Bチームボールで試合再開。

小南：「久瀬さん!!」

小南先輩からFWの久瀬先輩にパスが通る。それを渡先輩と宮間が2人で止めに行く。

久瀬先輩が渡先輩を躲わした瞬間を狙って宮間がカット。完全に味方と敵、2人の動きを読んでいた。そしてパスは果南に繋がる。

龍也：「果南!! 久し振りにあれをやろうぜ？」

果南：「今は私は先輩でしょ？ もう．．．いいよ！ やろう!!」

俺と果南が2人でシュート体勢に入ると、俺たち2人を水の竜巻が包みぐんぐん上昇。そして溢れんばかりの水流エネルギーが龍の形に変化する。

龍也・果南：「海龍の咆哮・G5」!!!

全員：「合体技!?!」

木野：「くっ!!」「太陽のギロチン・V2」!!

空から超高温の光のギロチンが降ってくる．．．が、

ドツ、パアアアアアアンツ!!!

水エネルギーが弾けてシュートは木野先輩を吹き飛ばしてゴールへと突き刺さる。

飯田：「っ！ あのと2人のイナズマジャパン時代の合体技か!!」

高橋：「まだだ!! 試合は始まったばかりだぞ!!」

しかし、俺と果南の連携や他の皆の必殺技に対応しきれず、紅白戦は結局Aチームが5-0で勝ったんだ。

烏丸：「く、くそ!!」

高橋：「あの2人に掻き回されたな・・・」

夏川：「私、1本もシュート撃てませんでした・・・」

監督：よし、今日の結果を元に、今シーズンのレギュラーを決定する。各自ちゃんとストレッチしておけよ?」

全員：『はい!!』

春咲：「大海くくん!! シュートスゴかったね? ☆」

龍也：「春咲はオフエンス技エグかったな?」

春咲：「えくく!? ヒドゥい!!」

果南：「はいはい、分かったから」

春咲：「あつ、果南先輩嫉妬ですか?」ニヤニヤ

果南：「そうだけどそれが何か?」

春咲：「か・・・隠しもしないんですね・・・」

小木：「おーい、大海、春咲!! 今、夏川や宮間と「新人8人でこのあと焼き肉行かないか?」って・・・」

龍也：「あー、行く!! じゃあ果南、なるべく遅くならない様に帰るから」

そして同期の小木、宮間、春咲、宮倉、桜井、アーネット、夏川の7人と一緒に焼き肉を食いに行き交流を深めた。

― 番外編続く ―

〈南ことり〉誕生日編：幼馴染

私たちがイナズマジャパンが世界を制して翌年の9月12日、私たちが音ノ木坂サッカー部は絵理ちゃんたち卒業生が抜けた穴を埋めるべく、海末ちゃん指導のもと一年生たちを鍛えていた。

海末：「はい次!!」ピッ!

海末ちゃんが笛を吹くと同時に私や穂乃果ちゃんの三年生、真姫ちゃんたち二年生、そして今年からの一年生がターンして走って20メートルの距離を走って戻る。

海末：「はいラスト!!」ピッ!!

海末ちゃんの最後の笛と同時にターンして走って戻る。そして全員がラインを越え、海末：「ピーーッ」「はい、五分休憩したら次はパス練習です。」

穂乃果：「も、もう足が動かない・・・。」プルプル

ことり：「ハア、ハア、こんなに練習して大丈夫なのかな・・・?」

穂乃果ちゃんの足が生まれたての子鹿みたいにプルプルしてる。かくいう私は海末ちゃんの最近の練習はオーバーワークなのでは?と感じていた。だって・・・、

真姫：「ねえ海末? やっぱり無茶じゃないかしら。」20mシャトルラン100本を5

セツト」なんて……。」

海未：「大丈夫です!! 熱いハートがあれば!!」

凜：「海未ちゃん怖いにや〜。」

海未：「皆だつて分かつてる筈です! 音ノ木坂は女子高。つまりわたしたちも女子しかいない。そんな私たちが男子と渡り合い全国の頂点に立つには、このくらいやらないと駄目なんです。」

真姫：「だから!! 今のペースでやり続ければ、上手くなる以前に身体を壊すつて言つてるの!!!」

花陽：「そ、そうだよ……。一年生が可哀想だよ。」

一年生：「花陽先輩……。グスツ ウルウル」

それを聞いた海未ちゃんは「ならば」と真姫ちゃんにじゃあ真姫はどうしますか? と問いかける。

真姫：「そうねえ……。ここ最近の練習メニューを考えると1週間くらい休みをあげた方が良くわよ。このままやってたら、皆の身体がもたないわよ。ここら辺で身体をしつかり休ませてあげないと。」

海未：「1週間も!?!」

真姫：「休息とサボりは違うわよ。パパにも話したけど、今の海未の練習は女子高校生

の限界を超えてる。つまり「オーバーワーク」だって言ってたわよ？」

穂乃果：「オーバーワーク!?海未ちゃん私たちを潰す気だったの!」

海未：「ち、違います!!」

皆海未ちゃんを恐れを抱いた目で見てたので私がここで話を打ち切った。

ことり：「じゃあ今日はここまでにしようか。明日から9日間休みにするから皆しっかり休んで?」

一年生：「やったああああ!!」

そして部活の後片付けをして私、海未ちゃん、穂乃果ちゃんの三人は穂乃果ちゃんの家を集まった。

― 穂乃果の家 ―

ことり：「海未ちゃん、最近変だよ?やる気なのは分かるけど皆の身体の事も考えないと。」

海未：「……スミマセンでした。実は、」

海未ちゃんが言うには、この間アキバスタジアムで行われたインターハイ準決勝、東京都代表「雷門高校」vs神奈川県代表「竜星学園」の試合を見に行ったらしく、イナズマジヤパンメンバーが四人もいる円堂君たち雷門は、大海くんがいる竜星に4―2で敗れた。

海未：「それを見て、今よりももっと練習しないと大海くんに勝つことも、ましてや日本一なんて無理だと焦ってしまっただんです。」

ことり：「そうだったんだね。でも皆の事もちゃんと考えないと。あんなことしてたら、そのうち「辞めます。」って言う子も出てたと思うよ?」

海未：「スミマセン……。」グスツ

ことり：「これからは練習メニューを作るのを真姫ちゃんのお父さんに手伝って貰わない? 前に真姫ちゃんが「パパはスポーツ医学にも精通してる。」って言ってたからきつと手伝ってくれるよ。」

海未：「そうですね。そうしましょうか。」

そして私は真姫ちゃんに電話をかけて事情を説明すると真姫ちゃんは快く了承してくれたので三人で真姫ちゃんの家に向かい、真姫ちゃんのお父さんである西木野先生にも事情を話すと簡単にOKしてくれた。西木野先生が海未ちゃんの練習メニューを咎めて注意して海未ちゃんがへこんだのを穂乃果ちゃんが笑って海未ちゃんがキレかけたのは別の話。

― 帰り道 ―

穂乃果：「ねえ? ちよつと三人でプリクラ撮りたいんだけどダメ?」

海未：「私は構いませんが?」ニコニコ

ことり：「わたしも良いけど急にどうしたの？」キョトン

海未：「ふふっ。ことり？本気で言ってるんですか？」

ことり：「へ？」

穂乃果：「よーし!!」じゃあレッツツゴー!!

そしてゲームセンターでプリクラを撮り、

プリクラ機械：『じゃあ写真に好きに落書きしてね。』

穂乃果：「ことりちゃん！わたしと海未ちゃんに任せてくれない？」

ことり：「う、うん。分かった。」

何だろー一体？

そして二人が機械から出てきて私にプリクラを渡してきた。そこには、

「ことりちゃん誕生日おめでとう!! by 穂乃果」

「いつも皆を助けてくれてありがとうございます!! by 海未」

と書かれていた。

ことり：(そう言えば今日わたしの誕生日だった!!)

穂乃果：「誕生日おめでとう!!ことりちゃん!!」

ことり：「穂乃果ちゃん・・海未ちゃん・・ありがとう!!」ハグツ!!

穂乃果：「これからも三人一緒にいようね!!」

ことり・海未：「うん!! (はい!!)」

— ことりちゃん Happy Birthday —

After Story : 休日

新入団選手の実力を見る為の紅白戦が行われた次の日、1日の休日となり、俺は果南の家がやってているダイビングショップを手伝っていた。光熱費や食費はもちろん払うがそれだけと言うことにする訳にはいかないしする気もない。

果南は今インストラクターとしてお義父^とさんとお客様と一緒に船で海へ出ている。俺は次のお客様が来たときの受け付けとお帰りの際の会計を任されていた。今は特に仕事が無いので備品庫で備品の点検と残量チェックをしていた。

龍也：「お義母^{かあ}さん、酸素ボンベの空気圧これでいいですかね？」

母：「どれどれ？ うん、これでいいわ。中々スジが良いじゃない」

良かった・OK貰えたみたいだ。

母：「いや、果南本当に良い人見つけたわねえ・・・」

龍也：「お義母さん、恥ずかしいです・・・／／／／／／／／／／」

母：「照れないの誉めてるんだから。そろそろお父さんたちが戻って来るから受付の方に戻ってね？」

龍也：「分かりました」

そう言いお義母さんは備品庫から出ていき、俺も扉にちゃんと鍵をかけて受付に戻る。

果南：「戻ったよ？」

龍也：「お帰り果南」

お客様が更衣室で着替え終えて出てきたので会計作業に入る。

龍也：「3, 500円になります」

客：「5, 500円でお願います」

俺はしつかり「5000円札1枚」と「500円玉1個」を受け取り、レジスターから「1000円札2枚」を取り出してお客様に渡す。

龍也：「2, 000円のお返しになります。ありがとうございます!! またの来店を御待ちしています!!」

俺がお客様を見送ると背後から・・・

果南：「隙ありっ!! ハグウツ!!」

フニヨン

ダイビングスーツ姿の果南が後ろから手を回してハグしてきた。果南の2つの大きな双丘が俺の背中押し付けられて形を変える。そんなことをされたらどうなるか男性の皆様なら分かる筈。当然俺の息子は大変な事に。

めて後片付けをして俺と果南は果南の部屋で一緒にいた。

果南：「龍也くっ♡」スリスリハギユウツ

果南は自身のベッドの上に俺を押し倒して首に手を回して俺にスリスリと頬擦りし、おまけにクンクン匂いまで嗅いでいた。何か恥ずかしい／＼／＼／＼

龍也：「果南？ 臭くないか？」

果南：「ぜんぜん!! もっと龍也成分を補給しないと!!」

龍也：「な、何それ？」

果南：「私が生きる上で欠かせなくなった成分」

果南が可愛い（意味は良く分からない）事を言い、俺の首筋にこれでもかかとキスマークを付けてくる。

龍也：「か、果南・・・くすぐったいよ・・・」

チュウくくくパツ!!

やつと果南は唇を離してくれた。すると果南は顔を赤くし笑顔を浮かべ、

果南：「龍也は誰にも渡さないんだからっ」

龍也：「俺だつて・・・果南を誰にも渡さないよ?」

果南：「ウレシイ・・・♡」

そして俺たち二人の唇は重なり、濃厚なディープキスを繰り返す。そして俺の右手

は果南の胸に、

果南：「んっ……♡、良いよ？ 龍也なら幾ら触っても♡」

その言葉を聞いた瞬間俺の理性のダムは決壊し、両手で果南の両胸を鷲掴みに。すると果南は凄くエロい喘ぎ声を上げる。

果南：「アンツ……♡／／ウツ、アツ……／／龍也あく／／ツ♡」

俺と果南は夢中になるあまり夕飯を呼びに来たお義母さんの足音に気付かずに見られて2人して赤面し、恥ずかしい思いをするハメになるのだった。

ハア、もつと紳士的な態度を取らねば……。もつと理性を……。

— 続く —

After Story：始動!!

俺と果南を含めた「〇スル〇ラロ沼〇」のメンバーは、今日は練習日の為チームの練習場に来ていた。

監督：「よし、全員揃ってるな。では、一昨日行った紅白戦を元にゲームメンバーから除外されたベテランメンバーも含めて今シーズンのレギュラー16名を決定した。時々入れ替える事もあるので今回選ばれなかった者も諦めずに練習を積んで欲しい」

選手：『『はい!!』』

監督：「では発表する。」

GK、「木野夏人」、「上原一輝!!」

2人：「はい!!」

DF、「宮間まどか」、「桜井和也」、「木村明日香」、「飯田里志」、「新条海人!!」

5人：「はい!!」

DFに呼ばれた新条さんは、紅白戦で除外された8年以上のベテラン選手だ。読み合いに優れ、相手オフエンスの嫌がるディフェンスを得意としている。

続けてMF、「松浦果南」、「高橋レイジ」、「烏丸匠」、「春咲美穂乃」、「久我新太!!」

しい音を立てて粉々に吹き飛びシュートはゴールに突き刺さった。

龍也：「よし!! ……ん?」

周りを見ると、果南以外の皆が唾然とした顔で口をポカーンと開けている。

山本：「な、何なんだ? 今のシュート……」

木野：「信じられないパワーだった……」

久瀬：「上原さん大丈夫ですか?」

上原：「ああ……平気だ。何なんだ今のシュート?」

すると今の様子を見ていた監督がこちらに来た。

監督：「大海、私が言うのも何だがなんでウチに来たんだ? ウチとしては助かるがこ

のチームはJ3リーグで年俸もあまり良くない。お前ならJ1とかのもっと良い報酬

が貰えるチームでもやれたと思うが?」

龍也：「そんなに大した理由は無いです。ただ、自分の彼女と……果南と一緒にやり

たかっただけです」

監督：「お前が松浦の彼氏だったのか?」

果南：「そうです」

果南が俺の腕に自身の腕を絡めてくる。可愛い／＼／＼／＼

果南：「と言うか皆さんFFI見て無かったですか? 龍也は「日本最強」なんて言

われてたのに……」

監督：「実力は聞いてたが、ウチには来ないと決めつけてノーマークだったんだよ……」

果南：「じゃあ私がこのチームにいたのが幸運だったって事ですね」

監督：「そうだな。そのお陰で大海はウチに来てくれた訳だからな」

コーチ：「監督……!! 次の相手決まりました……!!」

龍也：「確かコロナウイルスのせいでJリーグの開幕の目処が立たないし、県外のチームと試合できないから静岡県内での最強を決める大会が開かれるんですよ？」 J1、

J2、J3、社会人、大学生、高校生交えて……」

監督：「そうだ。相手は？」

コーチ：「J1リーグの、「清水フアルコンズ」です!!」

龍也：「フアルコンズ……」

果南：「ダイヤ……」

く その頃 く

？：「ねえダイヤ？ 次の相手沼○だつて。J3なんか楽勝でしょ!!」

ダイヤ：「……そう思っていると、痛い目に遭いますわよ？」

？：「？ なんがある訳？」

ダイヤ：「ええ……（龍也さんと果南さんを同時に相手しないといけないと言うこと

がどんなに厳しいことか、このチームに理解している者は私以外にはいませんわね・・・」

― 続く ―

After Story：開始！沼○vs清水

あれから1週間後、いよいよ静岡選手権開幕の日を迎え、今日は1回戦の清水ファルコンズ戦だ。

監督：「よし、ではスタートメンバーを発表する。

GK、木野

DF、宮間、桜井、新条、木村

ボランチ、高橋

MF、春咲、松浦、久我

FW、山本、大海 以上だ」

そして、両チームの選手入場の時、

熊谷：「はあ、なんでこんな格下とやらなきやいけないのよ」

荒船：「そう言うな熊谷。サクッと終わらせようや」

ん？ 腹立つ奴らだなコイツら。自分たちはJ1だからって下位リーグを見下してやがる。よし、ボコボコにするか!!

龍也：（果南、果南。）コソコソ

果南：(何?) コソコソ

龍也：(コイツらボコボコにしようぜ?)

果南：(OK)。ダイヤには悪いけど、それ以外の奴らは正直頭にきたからね)

そして選手入場し、コイントスの結果清水ボールのキックオフで試合開始となった。

フォーメーション

清水フアルコンズ

G K 照屋

D F 柿崎 熊谷 村上 来間

ボランチ 那須

M F 半崎 笹森 荒船

F W 黒澤 ☆諏訪

○ス○クラ○沼津

F W 大海 山本

M F 久我 松浦 春咲

ボランチ ☆高橋

D F 木村 新条 桜井 宮間

G K 木野

ピイイイーッッ!!

試合開始のホイッスルが鳴り、ファルコンズボールで試合開始。ボールが那須に渡ったところで俺が奪いにいく。

那須：「どうせ雑魚でしょ？」

那須は単純な左右のフェイントで俺を抜きにかかる。確かにJリーグの選手だけあつてただのフェイントも練度が高い。だが俺に言わせればそれだけで大したスピードは無い。

龍也：「もらつた!!」

俺は那須からボールを奪いドリブルで攻め上がる。

熊谷：「へえ？ 少しはや・・「今すぐ止めて下さい!!」　ダイヤ？」

ダイヤ：「絶対その人にシュートを撃たせないで下さい!!　撃たれたら間違いなく失点します!!」

村上：「!?　黒澤!!　どういうことだ!？」

相手が戸惑っている隙に俺はシュート体勢に入る。ボールに極大のエネルギーの塊を纏わせて右足で下に右回転の旋風をボールにかけながら撃ち下ろし、先回りして今度は左足の足払いで左回転の旋風をかけて、逆回転の風の膜をコーティングする。

龍也：「ラストリゾート・乙」!!」

体勢に入る。

ダイヤ：「ダイヤモンドレイ・A」!!」

ガキンガキン ドゴオオオオオオオン!!!!

新条：「タダでは通さん!!」「アトランティスウォール・Gx」!!」

ガガアアアアアアッ! バゴオオオオオオン!!!

新条：「木野! 後は任せた!!」

木野：「はい!!」「太陽のギロチン・V4」!!!」

ズギヤシャアアアアッ!!

空から超高温の炎のギロチンが降ってきてボールを真つ二つにして完璧に止めた。

木野：「よし!! 桜井!!」

ボールは桜井からレイジさん、レイジさんから果南に渡る。

那須：「これ以上やられてたまるもんですか!!!」

果南：「「マーメイドダイブ・S」!!!」

果南がデیفエンスに來た那須を水中高速機動のドリブル技で抜き去り、

果南：「《属性付与・雷》!!!」

《属性付与》により雷を帯びた果南がシュート体勢に入ると果南を荒れる水の竜巻が包

みぐんぐん上昇していき、ありつたけの水流エネルギーと纏っていた雷エネルギーの2

After Story：前半終了。

果南の《エンチャント属性付与・サンダー雷》からの「激流ストーム」が決まり2-0で沼津リードの清水ボールで試合再開。

ピイイイーーツ!!

ファルコンズのMF笹森を起点に次々パスを繋いで沼津陣内へと攻めこんでくる。

笹森：「諏訪さん!!」

パスはファルコンズFWの諏訪に繋がり諏訪はシュート体勢に入る。

諏訪：「よくやった日佐人!!」吹っ飛ばす!! 「絶・破壊散弾」!!!」ズドドドドドドツ

!!

空中のボールに諏訪がボレーシュートを叩き込むと蹴ったボールが十数個に分裂し

一斉に飛んでくる。

桜井・宮間：「止めろ!!」

宮間がフィギュアスケートのスピンの要領で高速回転してその勢いから右足のフルスイングで竜巻を起こし、それに併せて桜井が竜巻と同方向に回転する竜巻を突風としてぶつける。2つの竜巻は融合し、より強力な暴風嵐へと進化し、「破壊散弾」を全て巻

き込む。

桜井・宮間：「アルティメットストーム「究極暴風撃」!!!」

シューウウウウウウ・・・

その凄まじい暴風が晴れると、ボールは宮間の足元だった。

諏訪：「何だとい?」

宮間：「レイジさん!!」

そこから反撃に転じる俺たち。ボールはレイジさんから春咲に渡り、春咲はドリブルで攻め上がる。

来間：「止めるっ!!」

春咲：「キャハツ☆ 「爆・サザンクロスカット」!! ウラアアアツ!!」

春咲が一瞬の加速で来間を抜くと同時に十字の炎が来間を中心に発生し焼き付くす。

春咲：「龍也く〜ん! 果南センパ〜イ!!」

ボールは俺と果南に渡り2人でシュート体勢に入る。

龍也：「パーフェクトコピー《完全無欠の模倣》「激流ストーム・GX」!!」

果南：「エンチャントサンダー《属性付与・雷》「激流ストーム《雷》・GX」!!」

2人の「激流ストーム」は融合しより強力な技へと姿を変える。

龍也・果南：「かいりゆう「海龍の咆哮《雷》・GX」!!」

桜井：「俺たちがレギュラーになってから2人で練習してたんです」

宮間：「中々技を併せるタイミングが合わなくて、苦労しましたけど」

高橋：「諏訪の「破壊散弾」は2人の「究極暴風撃」アルファメットストームでなんとかなるとして、新条さ

ん、黒澤は頼みましたよ」

新条：「任せろ!!」

清水監督：「なんだこの成績は!!」

清水選手：「『ビクウツ』」

清水監督：「J3相手に大したチャンスも作れずリードどころか3点の大量ビハインド・・・やる気があるのかお前たちは!!」

ダイヤ：「だから言ったのですわ・・・2年前までの沼津ならともかく、果南さんと龍也さんが揃ってしまった今の沼津になめてかかるのは自殺行為だと・・・」

清水監督：「黒澤、あの2人はいったい何者だ?」

ダイヤ：「あの15番、大海龍也さんと9番の松浦果南さんは、私が高3の時に出場し

たF F I世界大会で共に闘い世界一になった仲間です。中でも龍也さんはイナズマジャパンの中でも格が違って、私たちの誰よりも強かったですわ」

半崎：「何でそんな奴がJ3に!？」

ダイヤ：「果南さんが沼津にいたからですわ。龍也さんは海外のチームからもスカウトが来てたらしいですが、果南さんと離れたくないから沼津に行っただんです。あの二人は恋仲ですから……」

那須：「確かにあの2人だけ格が違うわ……一体どれ位のレベルなの？」

ダイヤ：「クラブワールドカップで何度も世界一になってるバ○セ○ナやレ○ルマ○リー○でも普通にレギュラーになれるくらいには恐らく……」

荒船：「そんなバケモノが2人もいるチームに俺たちは舐めてかかっていたのか……」
清水監督：「よし、反省した所で後半戦の作戦を伝える」

次回後半戦

― 続く ―

綱海：「だくかくらく!! 大海と松浦とダイヤと高海と渡辺を呼んで来てくれて言ってるんだよ!! 選手以外入れないんだろ!」

係員：「そう言われましても・・・」「どうした?」あつ、委員長、実は・・・」

委員長：「竜星の大海くんと浦の星の松浦さんと黒澤ダイヤさんと高海さんと渡辺さんを呼んでくれ?」・・・あつ! そう言えばあなたたちは・・・」

聖良：「分かって頂けましたか? 今日私たちの仲間の・・・ダイヤさんの誕生日でして、試合が始まる前にお祝いしておこうかと」

ツバサ：「終わったら直ぐに帰っちゃうから今しかチャンスが無いのよ・・・」

委員長：「そう言うことなら。おい、今すぐ5人を呼んでこい!!」「えつ! 良いんですか?」良いから「分かりました・・・」

風丸：「スママセン。無理を言ってしまった・・・」

委員長：「いえいえ。イナズマジヤパンの皆さ・・・「あれ?お前ら」おつ、大海さんが来ましたね」

＼ 龍也 side 〵

竜星の控え室に係員が俺を呼びに来て何かと思えばイナズマジヤパンの仲間（浦の星

はこれから来るらしい)が勢揃いしていた。皆見に来てたのか。

立向居：「大海さん！ ご無沙汰してます!!」

龍也：「おう立向居、皆見に来てたのか？」

あんじゅ：「それもあるけど今日ダイヤちゃんの誕生日でしょ？ 試合が始まる前に

お祝いしておこうかと思って」

成る程。確かに試合の後だと勝ってれば問題ないけど負けた後だと気まずいしな。今のうちにしとくか。

千歌：「お〜い！ 皆〜!!」

ダイヤ：「私たちを呼んでたのは皆さんだったんですね」

果南：「龍也〜♪」ハグッ！ スリスリ

龍也：「おいおい・・・これから闘うんだぞ？」

果南：「うん!! 負けないからね？」

曜：「で？ 皆は私たちに何？」

鬼道：「そうだな、先に要件を済ませるか。黒澤、これ俺たちからだ」

豪炎寺：「マネージャーに教えてもらいながら作ったミサンガだ。着けてくれると嬉しい」

ダイヤ：「皆さん・・・」

ことり：「これ私たちから」

にこ：「ウインドブレーカーね。寒い時に使って」

あんじゅ：「これUTX組から。F F Iの時の各選手ベストショットセレクション」

ツバサ：「今プレミア付いてたからGETするのに苦労したわ。大切にしてね？」

ダイヤ：「はい！ もちろん!!」

綱海：「これ俺から。沖縄名産、ハイビスカスを型どった髪飾りだ。黒澤に似合うかと思ってるな」

聖良：「私からはこれですペンダントを。中にルビイさんの写真でも入れればと」
ダイヤ：「大切にさせていただきます」

そして他の皆からもダイヤにプレゼントが渡された。前に黒澤が誕生日が元旦だから中々友達から祝って貰えないって言ってたけど、今の黒澤は誕生日に友達に祝ってもらってとても嬉しそうだった。

竜星キャプテン：「お〜い大海〜？ 時間だぞー!!」

鞠莉：「4人共〜？ 時間よ〜？」

5人：『はーい!! 今行きまーす!!』

龍也：「じゃあ試合観ていってくれな？」

穂乃果：「うん!! もちろん!!」

野坂：「楽しませて貰います」

そして俺たち5人はそれぞれの仲間の元へ行き選手入場。そして試合が始まり結果は、

竜星 5 | 1 浦の星

ダイヤ：「ボコボコじゃないですか!？」

こうして、私の高校サッカーは終わりました。次はいよいよ、私はプロの舞台でプレーします。これからも決して、鍛練を怠るつもりはありません。

| ダイヤちゃん Happy Birthday |

After Story：決着!! 沼○vs清水!!

ハーフタイムが終わりいよいよ後半戦。沼○ボールからスタートだ。

ピイイイーッ!!!

後半戦開始のホイッスルが鳴りボールは果南に渡りドリブルで攻め上がる。しかしそこにMF笹森がディフェンスに入り激しいチャージングを仕掛ける。しかし……
笹森：(倒れない!? 女子なのになんてフィジカルしてるんだ!?)

果南は笹森を振り切り切りさらに中へと侵入。そこに那須と村上がフォローに入る。
那須：「これ以上好き勝手なんかやらせないわ!!」

村上：「止める!!」

しかしディフェンス二人が前に出たことで右前方にスペースができ、そこにパスをだす果南。ボールは山本さんへ。

山本：「ナイスだ松浦!! 喰らえ!!」 「爆・ゴッドウインド」!!!

山本さんの荒れる暴風を纏ったシュートがファルコンズゴールを強襲。キーパー別役は必殺技の構えに入る。

別役：「ビームこぶし・改」!!!

別役の構えた右拳からボール目掛けてレーザーが照射される。ボールはレーザーの熱量に耐えきれずに破裂。シュートは止められた。

別役：「こんな物ですか？ 那須さん!!」

ボール是那須に渡りレイジさんがデیفエンスに入る。しかし那須はドリブルの必殺技、「ビューティフルフープ」を発動しレイジさんを突破。そこに新条さんがヘルプに入るが、今度は此方のゴール前にスペースができ、走り込んできたダイヤにパスをだす。

ダイヤ：「絶対に決めます!!」「ダイヤモンドレイ・A」!!」

ガキングアキング ドゴオオオオオオオオオオオオ!!!

白銀に輝く奔流となったシュートが沼○ゴールを襲う。

木野：「止める!!」「太陽のギロチン・V4」!!」

空から灼熱のギロチンが降ってきてボールにぶち当たる。しかしそんなものは歯牙にもかけずに、シュートはゴールに突き刺さった。

3-1、沼○ボールで試合再開。ボールは春咲に渡りドリブルで攻め上がる。しかし那須がデیفエンスに入り、必殺技を発動する。

那須：「鳥籠・G3」!!」

那須の周囲にエネルギー弾が数十個発生。それが様々な弾道を引きながら前、後ろ、左右、斜め、上と360度立体的に全方位から襲いかかる。

|
続
く
|

〈鹿角聖良〉誕生日編：久々の再開

俺と果南が結婚して2年。俺と果南はGWを利用して1才になったばかりの息子と娘を連れて北海道へ1泊の旅行に来ていた。

初日は旭川の動物園や小樽を周り美味しい物を食べて周りの景色を楽しんだ。そして夜は札幌のビール園でジンギスカンを食べて近くのホテルに泊まった。

そして2日目、俺たちは函館に来ていた。五稜郭タワーや函館山に上り風景を楽しんだ後、帰りの飛行機まで時間があるため少しお茶にしようと昔の仲間の鹿角姉妹の家が経営している”茶房菊泉”に向かっていた。

果南：「聖良さんたち元気かな・・・？」

龍也：「久しぶりに会うからな・・・」

俺と果南は当時の事を思い出す。FFIで共に代表として闘った聖良さん。代表に選ばれこそしなかったが、高い実力と可能性を秘めていた理亞ちゃん。

聖良さんは、果南がプロを引退するより2年早くプロサッカーの舞台から姿を消し、現在は旦那さんと今年3才になる娘さんを育てながら、更に妹の理亞ちゃん夫婦一緒に実家のお店を経営している。

因みに理亞ちゃんも高校卒業後プロに進み、果南の引退と同じ年に結婚して現役を引退。今は旦那さんと1才の娘さんを育てながら、聖良さんたちと助け合いながらお店を経営している。

しばらく歩くとお店が見えてきた。幸い「営業中」と札が出ている。俺が店の扉を開けて中に入ると、

龍也：「すみませ〜ん．．．って誰も居ねえ．．．」

果南：「営業中の札出てるのに居ないなんてことある？」

俺達がどうしたものかと考えていると、奥から長い紫紺の髪を横に結った女性と体格の良い男性店員さんが出てきた。

?：「すみません!! いらっしやいま．．あっ!？」

男性：「聖良? どうしたんだ？」

聖良：「果南さん! 龍也さん! お久し振りです!!」

果南：「久しぶり聖良さん!!」

龍也：「久しぶり!」

?：「ママ．．パパ．．誰?」ヒョコッ

すると2人の足の陰からひよつこりと顔を覗かせる可愛い女の子。すると聖良さんはその女の子を抱き抱えて、

聖良：「良子、この人たちはママと理亞お姉さんのお友達だよ？　大海龍也さんと松

う・・・大海果南さん」

龍也：「こんにちは。良子ちゃん」

果南：「こんにちは」

俺と果南は良子ちゃんを目線の高さに顔を合わせる。すると良子ちゃんはニッコリ笑って・・・

良子：「こんにちは!!」

まだ舌足らずで”に”が言えなかった良子ちゃん。にしても母親の聖良さんそっくりだな。

夫（聖）：「その子供たちはお二方の？」

聖良さんの旦那さんが俺たちの子供を見る。

龍也：「そうです。男の子が「竜太」、女の子が「果北」です」

俺たちが子供たちを見せ合っていると、奥からもう一組の夫婦が出てきた。

理亞：「姉様？　どうし・・・あっ!？」

龍也：「おっ、理亞ちゃん久しぶり」

理亞：「こ、こんにちは。ひよっとしてGWの旅行で？」

果南：「そうだよ？　昨日は旭川と小樽を周って札幌に泊まったんだ。で、さつき五稜

郭と函館山見てきて帰りの飛行機まで時間があるなつてなつたから、「じゃあ聖良さんの実家のお店でティータイムにしようか？」って」

龍也：「あつ、そう言えば忘れてたけど今日5月5日、聖良さん誕生日か」

良子：「そだよ〜？ さつきママのおいわいしてたの〜!!」

龍也：「じゃあ邪魔しちやつたなあ・・「営業中」の札が出てたから大丈夫かと思つたんだけど・・今度にするか？」

聖良：「あつ、よろしければぜんざいでも食べていってください。久々に会えて嬉しかったですし」

龍也：「良いんですか？」

聖良：「はい!! どうぞお好きな席へ。パパッと作っちゃいますから!!」

そして聖良さんたちと色々話しをして俺と果南と息子と娘たちは飛行機に乗り沼津へと帰った。

↓ 聖良さん Happy Birthday ↓

After story : 清水戦の翌日・・・

静岡選手権1回戦でJ1リーグのファルコンズを破り2回戦に駒を進めた俺たち沼○。2回戦は1週間後に予定されており、今日はOFFとなっている。しかし不要不急の外出は控える様にと指示が出ている為、俺と果南は淡島神社の階段でトレーニングをしていた。

龍也：「結構キツイなこの階段・・・コレ毎日やってたらそりゃあ体力付くわな・・・」
因みにこのトレーニング、今日初めて果南に教えて貰いました。浦の星のサッカー部はこの階段で鍛える事が多いらしい。

果南：「フフツ・・・気に入ってくれた？」

龍也：「おう!! 文句無しだ!!」

果南：「良かったっ!! でも龍也やっぱり凄いな・・・この階段初めての人はほぼ全員が音を上げるのに・・・」

だろうな・・・俺も因みに少しばかり息が上がってるし・・・。

龍也：「そう言うけど果南は息が乱れてもいないじゃん・・・何歳からコレやってたんだ？」

果南：「んくと・・・小2位かな？」

・・・・・・言葉が出ないや。

龍也：「まあ揃つと終わつて降りるか？ もうすぐ昼だろ」

果南：「んく・・・そうだね。でも家だとお父さんがうるさいから今の内に・・・」

龍也：「ん？」

果南：「ハグッ!!」

フニヨン

果南が真正面から俺にハグしてくる。果南の柔らかい双丘が俺の胸に当たつてフニヨンと形を変える。当然当たっている感覚は俺にもある為俺は少し興奮状態に・・・。そのこの読者の皆さん、変態とか言わない。貴方方だつてこんな美女に抱きつかれたら絶対なるから。

果南：「ハグウくく♡」

龍也：「か、果南・・・俺のアレが暴走しそう何だけど・・・」

男性読者の方なら分かる筈。そう、アレだ。

果南：「んく？ あつ、なんか当たつてる・・・変態／＼」

龍也：「抱きついといつてそりゃ無いでしょ!?! つていうか普段の貴女見てたら貴女も大概だからね!」

果南：「私は違うもん……………／＼／＼」

龍也：「いや、それは無い……………」ギユウツ」ゴメンナサイ痛いので脇腹摘まないで下さい……………」

果南：「……………クスツ」

果南は微笑むと……………」

果南：「家で続きやろっ?」

ああ、やっぱりこの子も変々……………」ん!!。(言)「何この子!? 心読めるの!」

少し恐怖を覚えながらも階段を降りて家に戻る。汗をかいたのでシャワーを浴びた
いのだが果南に「先にどうぞ?」と譲ったら……………」

果南：「一緒に浴びよっ♡」

この瞬間、もう既に限界近くまで来ていた俺の理性のダムは決壊し、一緒にシャワーを浴びる中で、俺は果南をセメまくった。果南はエロい喘ぎ声を上げながら時折反撃して来て、1時間近く風呂場にいた。

― 果南の部屋 ―

龍也：「あ……………のぼせた……………」

果南：「そうだね……………」

すると部屋の扉が開き、

松浦母：「2人共々ご飯出来たわよ〜?」

龍也・果南：「は〜い・・・」

松浦母：「あらあら、随分お楽しみだったみたいね☆」

龍也・果南：「ボシユ〜ツ／＼／」

俺と果南は恥ずかしさから顔を真っ赤にしながら、互いに顔を合わせる事も出来ずに昼飯を食べるのだった。

― 続く ―

After story : 浮き彫りになってくる実力

静岡選手権の2回戦の相手が”浜松総合専修大学”に決まり、今日も練習に励む俺たち。今日はまずは走り込みからのメニューだった。

果南：「ハツ、ハツ、龍也やっぱり速いね!!」

龍也：「果南・・・こそつ、すげえ体力だなやっぱ!!」

沼○選手：『『お前ら速すぎーっ!!?!!?!!』』

俺と果南のハイペースについて来ようとした結果ゼエゼエと肩で息をし、ペースがガタ落ちする同期&先輩方。

監督：「うくむ・・・」

コーチ：「監督? どうしました?」

監督：「いや、大海だがな・・・余りにもステータスが高すぎてどう扱ったら良い物かな・・・」

コーチ：「それはどう言う・・・」

監督：「いやな、別に特別扱いしようって訳では無いんだ。ただ、どのポジションをやらせてもそのポジションを専門にやつてる他のどの選手よりもパフォーマンスレベル

が高いんだ。だからどうやって使おうかとな．．．

コーチ：「あく．．．それは確かに悩みますね．．．」

監督：「うむ．．．走り込み終わりました!!」 なっ!! もう終わったのか!!? 他の奴らはまだ走ってるぞ!」

果南：「えくと．．．大体9回位抜きましたけど．．．ねえ?」

龍也：「うん」

こ、こいつらどう言う体力をしてるんだ!? また私の悩みが増えてしまった．．．。そして他のメンバーも走り込みが終わり、5分休憩の後パス練。

龍也：「アーネット!!」 ドツ!!

リリア：パスツ 「!! (取りやすい!!) 美穂乃ちゃん!!」 ドツ!!

春咲：「ホツ! まどかちやくん!! ドツ!!」

宮間：「っ! (強いなく．．．) 大海くん!!」

龍也：ホツ!! ガツ スルツ トン 「ナイスパス」!!

リリア・春咲・宮間：「あんたどう言うテクニクしてんだよ．．．」

俺がやったのは放物線を描いて飛んできたボールを利き足の左を使わずに軸足で空中に跳ねてトラップし、落ちてきた所を右で軽く上げて瞬時に右足をボールの上を回して、左右で軽くりフティングしたんだが．．．

） 果南 Side ）

果南：「むむむ、龍也のグループ女の子しか居ない・・・!!!」

久我：「ま、松浦!! そんなに踏みつけたらボールが破裂する!!」

高橋：「凄まじい嫉妬だな・・・」

） ） ） ） ） ）

そしていよいよポジションに分かれて俺たちFW陣はシュート練習。

木野：「来いっ!!」

小木：「行きます!! 「爆・ガンショット」!!」

小木のジャイロ回転させる事で貫通力を高めた弾丸の様なシュートがゴールに迫る。

木野：「止めてやる!! 「炎の鉄槌・乙」!!」 ドグシャアアアッ!!

シュートは木野先輩の炎の魔神に叩き潰された。

龍也：「行きます!!」

俺の背後に大型の両手剣を持った武神型の魔神が出現。そして剣を振り被った魔神が思い切り剣を振り下ろすと同時にシュートをボールに叩き込んだ。

龍也：「スサノオブレード・G5」!!」

木野：「なっ!!」「太陽のギロチン・乙!!」

天そらから灼熱のギロチンが降って来てシュートを直撃。真つ二つにしようとする……しかし、

ズバアアアアアアアンツ!!

木野：「何っ!!?　ぐわあああああっ!!?」

シュートは逆にギロチンの方を一刀両断し、ゴールネットに突き刺さった。

上原：「ヤバイな……」

監督：「う……む……」

そして夕方になり、今日の練習は終了。俺は後片付けをした後、果南と一緒に帰宅する。

龍也・果南：「お疲れ様でした!!」

く　メンバー　Side　く

監督：「皆に集まって貰ったのは他でもない。大海の事をどう思う?」

全員が顔を見合わせ、口を開く

沼○メンバー：『『『化け物です!!!』』』

あつ、ヤツパリ同じ事を思ってたんだな・・・と、監督は安堵し、

高橋：「ただ、決してそれを誇示しようとはしないしちゃんど他のメンバーに敬意を持つている事も分かるので、俺達からは“頼もしい”と言う位です」

木野：「そうなんだよなあ・・・あそこまで上手いとプライド高い奴多いけど、アイツ謙虚だからなあ・・・」

春咲：「松浦先輩に任せておけば大丈夫じゃないですか？」

監督・選手：『『『異議なし!!!』』』

龍也：「果南・・・今日は・・・どうすんだ？」

果南：「今日もやるっ♡」

他のメンバーがそんな事を話している等気付いてすらいない2人だった。

ー 続 く ー

After story: 2回戦開始!!

あれから数日が過ぎ、今日は静岡選手権2回戦の”浜松総合専修大学”との試合だ。試合は無観客で行われるが、TV中継は来ていた。

監督：「よし、ではスターティングメンバーを発表する。

GK 上原

DF 木村、飯田、桜井、宮間

ボランチ 高橋、烏丸

MF 久我、松浦、春咲

FW 大海

以上の11人で行く。」

メンバーがザワつく。そりやそうだ、プロとして経験値が高い新条さんと山本さんがスタメンから外れてしまったんだから。

だが、

監督：「取り敢えず試すだけだ。危なくなったら直ぐに投入するから準備はしておけよ？」 山本、新条」

山本・新条：「はい!!」

監督：「よし、行つて来い!!」

そしてフィールドのセンターラインに選手が並ぶ。

審判：「これより、浜松総合専修大学 v s ア○ルク○口沼○の試合を行います!! 礼
!!」

両チーム：『宜しくお願いします!!』

スターティングメンバー

浜松総専

G K 八重樫

D F 二宮 赤月 吉井

ボランチ 倉瀬

M F 時永 長谷川 峰岸 宮司

F W 神峰 メイ

ア○ルク○口沼○

F W 大海

M F 久我 松浦 春咲

ボランチ 高橋 烏丸

DF 木村 飯田 桜井 宮間

GK 上原

各選手がポジションに付く。そして……、

審判：「試合開始!!」

ピイイイイーーーーーッ!!!

開始のホイッスルと同時に浜松総専がパスでボールを繋いで攻め込んでくる。

倉瀬：「長谷川!!」

ボールは浜松の2年生、長谷川に渡り、そこにレイジさんが止めに入る。

高橋：「行かせんぞ!!」

長谷川：「っ! 峰岸!!」

すぐに隣の峰岸さんにパスしてレイジさんを躲す長谷川。今度は烏丸さんが止めに入る。

峰岸：「神峰くん!!」

浜松総専の女子MF峰岸さんからボールはFWの神峰へ。神峰はややゴールから遠い位置でシュート体勢に入る。

神峰：「決める!!」 「バリストショット・V4」!!

神峰の背後に固定式の巨大ボウガンが出現。神峰のシユートと共に矢が発射され、鋭いシユートが飛んでくる。

桜井：「宮間!!」

桜井の呼び掛けで急いで宮間が桜井の元へ。そして合体ディフェンス技でシユートブロックを挟む。

桜井・宮間：「アルティメットストーム究極暴風撃」!!」

2人の「シユートینگカット」と「サイクロン」が融合し、フィールドに爆風が吹き荒れる。「究極暴風撃」は「パリスタシヨット」を飲み込み、完璧に止めた。

神峰：「っ！ やっぱりプロは上手いな・・・」

宮間：「松浦先輩!!」

そこからロングパスでボールは果南へ。しかし倉瀬がディフェンスに入る。

倉瀬：「絶対に負けない！ ここまで止める!!」

果南：「行くよ!!」

すると、果南の周りが水中に変化。突如として自由が効かなくなった相手を、果南は見事なドルフィンキックでの高速機動で抜き去った。

果南：「マーメイドダイブ・S」!!」

倉瀬を突破した果南。ドリブルで攻め上がる。

吉井：「私が行く!!」

そこに浜松総専のDF、吉井さんが止めに入る。果南がフェイントで抜こうとするが、吉井さんも必死に食い下がる。

果南：「中々スジは良いけど、まだまだだよ!!」

果南はフェイントに緩急をつけたチェンジオブペースで吉井さんのリズムを崩して突破。シュート体勢に入る。

果南：「激流ストーム・G5」!!」

果南の必殺シュートが、ゴール目掛けて撃ち落とされる。

八重樫：「くそっ!!」「ハイビーストフアング・G2」!!」

獐猛な野獣の牙がシューとに突き立てられる。しかし果南のシュートはそれでもパワーで打ち勝ち、キーパーごとゴールに叩き込まれた。

沼○ 1 1 0 浜松総専

1 続く 1

After story : 力の差

果南の「激流ストーム」が浜松総専ゴールに叩き込まれ1-0。浜松総専ボールで試合再開。キックオフからボールは倉瀬に渡り一気にパス回しと走力で切り込んで来る。

時永：「長谷川先輩!!」

サイドハーフの時永からセンターの長谷川への斜めのパスが通り、長谷川と烏丸先輩が1vs1になる。

烏丸：「止める!!」「(スペースが空いた!!) フロoram!!」っ!?

しかし烏丸先輩が前に出た事で背後に空きスペースができてしまいそこに走り込んだ留学生の女子FW、「メイ・フロoram」さんにパスが通る。

桜井・宮間：「行かせない!!」

メイ：「(掛かった!!) 神峰さん!!」

しかしフロoramすらもただの囷に過ぎず内方向への斜めのパスが転がる。それに……

神峰：「おらあああああつ!!」

転がって来たボールに神峰がスライディングで軌道を変えてシュートする。

上原：「クソっ!!」

咄嗟に上原先輩が反応して手を伸ばす。しかしわずかの差で手は届かずにボールはゴールの中に転がり込んだ。

上原：「くそつたれ!!」ガッツ!

飯田：「スマン上原・・・少しでもコースを限定すれば防げたな・・・」

沼津ボールで試合再開。ボールは果南に。

神峰・メイ：「止める(ます)!!」

相手のFW2人が前線からプレッシャーを掛ける。しかしその程度・・・果南には通用しない!!

果南：「ウォーターボール・A」!!」

果南がボールを地面に踏み込むと水柱が発生。どんどん相手に迫って行き、2人を吹き飛ばした。

果南：チラッ

龍也：コクッ

流石に俺のことを知っているのか浜松総専は赤月と二宮の2人を俺のマークに付けて来ていた。

果南：「龍也!!」

しかしパスは俺の真正面に飛んでくる。

赤月・二宮：「貫つ……!!」

しかしボールには強烈なスピンの掛かっておりボールは凄い勢いでカーブ。気付かれぬように2人の背後から裏に走っていた俺の足元にドンピシャのタイミングで渡った。

二宮：「しまっ!?!」

俺はシュート体勢に入る。俺がボールにサイドスピンを掛けると、ボールは氷漬けになりぐんぐん上昇。跳び上がった俺がオーバーヘッドキックを叩き込むと、同時に上空に発生していた雷雲から雷がボールに直撃氷と雷の2つのエネルギーを宿したシュートがキーパーに襲い掛かる。

龍也：「フリーズゲイザー・乙」!!」

八重樫：「何っ!?!」「パワーシールド・V4」!!」

八重樫の作った衝撃波の壁がシュートを阻む。しかし「パワーシールド」はパキパキと音を立てて凍りつき、脆くなった所を膨大なパワーで叩き割られた。

バリーイイイインツ!!!

そして弾丸の様な勢いとスピンでゴールネットに突き刺さった。

龍也：「よし!!」

そして、そこから試合は一方的な展開になり、後半終了間際・・・、

果南・龍也：「『海龍の咆哮・G5』!!」

相手キーパーは一步も動けずにシュートはネットに突き刺さり・・・結果、111

1の大差で俺達が勝利して3回戦進出を決めた。

1 続く 1

After story : 果南の選手としての人気。そしてファンの恐ろしさ

選手権2回戦も問題無く勝ち上がった俺たち沼〇。次の相手は明日の「浦の星女学院 vs 静真高校」戦の勝者と5日後に当たる。もしも浦の星が勝てば、果南にとつては自分の後輩達との闘いになるため、果南はやる気に燃えていた。

因みに浦の星にはまだダイヤの妹のルビィちゃんや花丸ちゃん、善k : 「ヨハネ!!」っ!?
・・ちゃんが3年生で在席している。

ー 練習場 ー

果南・龍也 : 「「海龍の咆哮・GX」!!」

俺と果南のシュートがゴールに一直線。

ザシュウツ!!

弾丸の様なシュートがゴールに突き刺さった所で、監督からの号令が掛かり、今日の練習は終了になった。

俺たち新入り組は練習の後片付け、グラウンド整備を行った後で各自男子と女子それぞれ別の更衣室で着替えて帰宅する。

龍也：「お疲れ様でした!!」

高橋：「おつかれ」

飯田：「お疲れ〜い・・・」

先輩方に挨拶して練習場の門に走る。・・・もう待ってるかな？

俺が門に着くと、まだ果南は来ておらず「良かった」と思いながらしばらく待つ。そして5分ぐらい経ったら果南が走ってきた。

果南：「ゴメ〜ン!! お待たせっ♡」

来るやいなや早速俺の腕に自分の腕を絡める果南。はあ・・・／／／／／可愛い／／／

果南：「?」ニッコツ

俺がジツと見ていることに気づき天使の様な笑顔を向けてくる。

・・・アカン／／／ もう俺顔真っ赤やん／／

思考の中で謎の関西弁が入ったが、それは置いておいて、家に戻るので内浦行きノバスに乗るため、沼津駅まで歩く俺と果南。道中果南はずつと俺にベツタリだった為、通行人達（特に男性）から人を殺しそうなくらいに嫉妬の籠った目で睨まれた。

果南が人気のある選手だと言うことを改めて痛感させられた・・・俺、そのうち刺されるんじゃないか・・・?

果南：「・・・? どうしたの?」

果南が俺が黙っていることを疑問に思ったのか問い掛けてくる。

龍也：「……………周りの視線が痛い」

もう周囲から物凄い殺気を感じてます。ハイ…………。

果南：「……………じゃあ、ちよつと周りの人達に教えてあげようか？」

へ？　なんか嫌な予感がしたと同時に、俺の正面に回って少し背伸びをした果南の唇

が俺の唇を塞いだのに気付くことに数瞬要し…………、

龍也：「……………？……………ツ／＼／／／／」

その瞬間、途轍もない悪寒を感じ果南の手を掴んで全速力でその場から逃げた。

走りながら後ろを向くと……………、さつき周りにいた人が、とても一般人とは思えな

い物凄いスピードで呪詛の様な、怨念の様な、嫉妬と恨みが籠もっていると一発で分か

る叫びを上げながら追いかけて来た。

何あの人たち!?　恐いんだけど?!!??

そして、気がついたらバスではなく、ダッシュで内浦まで戻って来ていたので、急い

で連絡船に乗って淡島の果南の家に戻った…………。

……………これから1人じゃ出掛けられないんだけど…………。

俺が遠い目をして白くなっていると、果南が「ごめんね？」と謝ってきたが、もうど

うすれば良いかが俺には分からなかった。

1
続
く
1

After story : メンバーの危機!!

監督：「3回戦の相手は、「浦の星女学院」に決まった。相手は高校生とはいえ、何度も日本一になった事がある学校だ。油断しないように!!」

沼○メンバー：『『はい!!』』

監督：「よし、早速練習だ」

そして練習に入るが、今日はフィジカル・身体能力UPの基礎トレニングらしい。全員重さ5キロの重りを担いで腕立て20回をインターバル20秒の3セット。

腹筋20回を上体を起こした時に足を胸に引きつける様にしてインターバル20秒の3セット。

7キロの重りを担いでジャンプスクワット10回。ただし10回目は沈み込んだ状態を10秒キープしてからジャンプしてフィニッシュ。をインターバル20秒の3セット。

皆これを顔色一つ変えずにやる。まあこれくらいはな・・・。

そしてそれが終わったら、5分の休憩の後グラウンドの外周を10分間ラン。普通ならそんなにきつくは無いがあの筋トレをやった後だと結構来る。

それも終わったたら10メートルの短距離ダッシュを50本。終わったたらストレッチして終了。

これが結構効くんだよな……。

因みにコレをやった日は皆チームの整体師さんのマッサージを受ける。でないと次の日地獄の痛みが……考えるのやめよう。

そしてマッサージも終わると、ロッカールームでシャワーを浴びて（中にはシャンブーやボディーソープ持ってきている人も多数）着替える。

龍也：「お疲れ様でした〜」

烏丸：「おつかれ」

久瀬：「おつかれさん」

俺がロビーに出ると、ベンチにアーネットが座っていた。アーネットは果南ほどでは無いが綺麗な金髪を持つ十分可愛いと言える見た目をした女の子だ。……？なんか様子が、

龍也：「アーネットお疲れ」

リリア：「ふえ!? あ、ああ大海くん……お疲れさまです……」

……何かな〜?

龍也：「お前なんか悩んでる?」

リリア：「!?」

凶星か・・・。

リリア：「じ、実は・・・ここ最近誰かにつけられてる感じがして・・・」

まさかストーカーか? まあコイツの見た目ならあり得ない話では無い・・・。

リリア：「それで・・・今朝、パシャッってカメラのシャッター音までして・・・」

あ、コレ確定だわ。ストーカーだわこれ。

リリア：「それで・・・怖くて・・・」

アーネットは母国であるイギリスの高校を出て直ぐに単身日本に来たって言うってた。女の子がなれない土地でたった一人で。それなのに・・・。こんなの黙ってられるか!! 果南もきつと同じ事を言うだろう。ならば!!

ピッピッピッ プルルル

龍也：「あつ、果南? ちよつと今日アーネットと一緒に帰るわ。詳しい理由は後で話す。・・・うん。遅くなるかもしれないから宜しく ピッ」

リリア：「あの・・・? 何を?」

龍也：「アーネット、お前は家まで普通に帰れ。俺はその後ろ20メートル位離れてついていくから。行動を起こした所を捕まえてやる」

リリア：「!? そんなの危ないですよ!!」

龍也：「仲間がこんな思いしてるの黙って見てるのに比べたら平気だよ」ニヤツ

リリア：「あつ・・・」ポロツ

アーネットは涙を流した。よっぽど怖かったんだな・・・。

リリア：「分かりました。お願いします!!」

そしてアーネットには普通に帰って貰い、その後方を距離を取ってついていく。すると案の定ストーカーが行動を起こそうとしているのが見えたのでダッシュで近づき背負い投げで投げ飛ばしてやった。

警察に連行された男の持っていたカメラからはアーネットの盗撮写真がポロポロ出てきてもう確定。牢屋行きになった。

後日・・・

リリア：「この度はありがとうございます!!」

龍也：「大丈夫だって」

果南：「リリアちゃんが無事で良かったよ」

リリア：「・・・・・・・・／／／／」

果南：「(ん?) あゝコレは・・・」リリアちゃん?」

リリア：「は、はい!! 「龍也は渡さないよ?」っ! だったら奪い取るまでです!!」

果南：「へえ?」

リリア・果南:ゴゴゴゴゴゴ!!

龍也:「なあ? さっきから何の話?」
この唐変木は気付かないのだった。

┆ 続く ┆

After story：新たなる時代の幕開け

・・・なんだ？　アーネットをストーリーカーから助けた日辺りから妙に果南とアーネットがバチバチしてると言うか、威嚇してると言うか・・・、気のせいかな？

まあ今日は3回戦の浦の星女学院戦の日。果南はとても楽しみにしていたからな・・・。

監督：「では、スタメンを発表する。

GK上原、

DF木村、新条、飯田、

ボランチ高橋、

MF久我、松浦、春咲、烏丸

FW久瀬、大海

以上の11人で行く!!」

沼○：「はい!!」

審判：「それではこれより、3回戦、「アールク○口沼○vs浦の星女学院」の試合を行います!!」

両チーム：『『『宜しくお願いします!!!』』』

フォーメーション

浦の星女学院

G K 花丸

D F 葉桜 善子 朝野

M F 上杉 成瀬 奥村 東雲

F W 中多 ルビィ 森嶋

ア○ルク○口沼○

F W 久瀬 龍也

M F 久我 果南 春咲 烏丸

ボランチ 高橋

D F 木村 新条 飯田

G K 上原

そして浦の星のキックオフから試合開始し、ボールは津島へ。津島は日本代表には選ばれなかったが、F F Iの代表候補には入る位の実力者だと言うことは俺と果南はよく知っている。

善子：「奈々未!!」

ボールはサイドハーフの東雲へ。そこに烏丸先輩と春咲がデیفエンスに入るが、

善子：「奈々未!! 新時代の力を見せてやりなさい!!」

東雲：「ハイ!!」

は？ 新時代の力？ 何だ・・・

すると東雲さんの背後から見たことの無い黒いオーラが揺らめき、そのオーラから緑色の狼のような何かが現れた。

東雲：「迅狼リユカオン!!」

果南：「な、何コレ!?!」

俺たち全員が驚く。こんな物は今まで1度も見たことない!!

東雲：「行きますよ!!」

東雲さんが技を発動する。しかし技の威力が俺たちの常識からは考えられなかった。

東雲：「1 疾風迅雷 1!!」

東雲さんが狼のようなものの背に乗り、それがボールを啜えて雷の如くスピードでこちらのデیفエンスを置き去りにして、デیفエンスラインまであつという間に突破した。

龍也：「嘘だろ!?! 速すぎる!?!」

そして東雲さんはシュートを放つ。

東雲：「行つけええええええええっ!!!」

東雲さんのシュートはノーマルシュートとはとても思えないパワーでゴールに迫る。

上原：「止める!!」「ミリオンハンズ・S」!!」

上原先輩の最終進化したキーパー技がシュートを阻む。しかし明らかに押さされているのは先輩の方だ。

バリーイイイイインツ!!

上原：「なっ!? ぐわああああああっ!!!」

そして、シュートはゴールに突き刺さり、先制を許してしまった。

果南：「な、何アレ!? なんてパワーしてんの!?!」

善子：「これがこれからの時代の力、【化身^{けしん}】よ!!」

は? 化身……って何だ? でも、とにかくヤバいつてのは確かだな……。

龍也：「皆気をつけろ!! もしかしたら他にもその【化身】つて言うのを使える奴がいるかもしれない!!」

全く……とんでも無い猛者がいたもんだ……!!

|
続
く
|

After story : 飛び立つ火龍

浦の星女学院の8番、東雲さんの使った謎の力、「化身」によっていきなり先制点を許してしまった俺たち。沼○ボールで試合を再開する。

ボールはレイジさんに渡り、そこからパスを繋いで浦の星陣内中盤で果南にボールが渡る。そして果南に対して前から善k・・「ヨハネ!!」、後ろから成瀬さんと奥村さんが3人で挟撃する。しかし果南は視野の広さを生かしてコツソリとヘルプに走っていた春咲と連携してワン・ツーで3人を抜いた。

果南：「行くよ花丸ちゃん!!」【激流ストーム・G5】!!」

上空へと跳んだ果南から、水流エネルギーが凝縮されたシュートが降る。ゴールキーパーの花丸ちゃんは身構えると、

国木田：「ずらあああああつ!!」

なんと花丸ちゃんからも化身のオーラが発生。中から狐の獣人様な姿をした女性型の化身が出現した。

花丸：「妖狐ダツキ」!! 「ーシキガミラインズー」!!」

【ダツキ】の合図から式神が次々と縦に並んでシュートの勢いを受け止めてゆく。勢い

はドンドン失速していき、「激流ストーム」は止められてしまった。

春咲：「はあ!? 嘘でしょ!! 果南先輩のシユートを止めた?」

花丸：「ハア、ハア、今のマルには通用しないぞ!!、ルビイちゃん!!」

花丸ちゃんのスーパードロウングスローからボールは一気に前線のルビイちゃんへと飛ぶ。しかし、

新条：「させるかっ!!」バツ!!

しかし空中でボールを新条先輩がインターセプト。カウンター返してボールは俺に。

沼○：『『大海、行けええええええええええっ!!』』

龍也：(っ!! ったく、プレッシャーかかるな・・・)

正直、俺のシユートも止められたらもう打つ手は無い。だがやるしかない。

龍也：「行くぜっ!!」

俺はボールに極大のエネルギーの塊を纏わせてオーバーヘッドで下に落とす。そこに左足の足払いで空気の膜をコーティング。そして・・・止めのシユートの時に、「フア イアトルネード」で撃ち出した。

龍也：「ラストトリゾート F^{フレイドラゴン} D」!!」

俺の新必殺シユートと共に、炎の龍が浦の星ゴールに襲い掛かる。

花丸：「何度やっても同じぞら!! 必殺技じゃあ化身には勝てないぞら!! 【妖狐ダッ

キ】!!」

そして花丸ちゃんは化身必殺技の体勢に入る。

花丸：「ー シキガミライズ ー!!」

俺のシュートを式神が次々と受け止める。しかし、炎の特性を持った俺の必殺技は花丸ちゃんの式神に次々引火して焼却し、丸腰の【ダツキ】を弾き飛ばして花丸ちゃんごとボールはゴールに叩き込まれた。その瞬間、フィールドは静まり返った……。

沼〇ーー浦の星

ー 続く ー

After story：白熱する前半戦!!

俺の新必殺技、「ラストリゾートフレイドラゴンFD」が花丸ちゃんけしんの「化身」をぶち破って浦の星ゴールに突き刺さった。フィールドは静寂に包まれるが、真っ先に我に返った果南が俺に駆け寄ると同時に、メンバーが駆け寄ってくる。

実況：『ゴ、ゴオオオオオオオオオオ!! 大海龍也の新必殺シュート、「ラストリゾートFD」が、浦の星ゴールに突き刺さったああああああつ!!! サッカーにおける新たな力【化身】を、炎の龍が食い破ったああああああつ!!!』

果南：「龍也やったね!!」

果南が俺に抱きついてくる。しかしこれで俺は徹底的にマークされるのは目に見える……。

龍也：「ああ……だけど俺はもう一度撃つチャンスを作らないとな……」

高橋：「そうだな。間違いなくこれで大海は徹底マークに遭う。俺たちで点を取って「他にも選択肢がある」と思わせないとな……」

そして浦の星ボールで試合再開。ボールは化身を持っている事が分かっている東雲さんに渡ると、化身を出してっ込んでくる。

東雲：「迅狼リユカオン」!! 行つくぞーっ!!

突っ込んでくる東雲さんにデیفエンスに入る果南。必殺技で対抗する。

果南：「敗けてたまるかっ!!」「超・スプラッシュカット」!!

「スピニングカット」と同じ要領で果南が横薙ぎに足を振るい地面に青い「弧」が直撃すると、そこから水が弾けて壁を作り進路を塞ぐ。しかし化身を発動した東雲さんはノーマルドリブルでそれを突き破り尚も進む。

東雲：「ぐっ! ハアツ ハア」

龍也：「?」

果南を突破した東雲さんに飯田先輩とレイジさんが2人掛かりで止めに入る。しかしここで化身技を発動される。

東雲：「ー シップウジンライ ー」!!

化身の背に乗り超スピードでデیفエンスを突破する東雲さん。そして化身シュートを放つ。

東雲：「行つけええええええええっ!!」

ドガアアアアアアッ!!

ん? さつき程の威力が無い・・・。

それは皆が感じ取っていたようで、上原先輩は必殺技で対抗する。

上原「[ミリオンハンズ・A]!!」

無数の手のオーラが集合してバリアを作る。そして今度は化身シユートを弾き返した。

・・・もしかして!!

龍也：「皆さん!! 化身は恐らくパワーと引き換えに発動者の体力を削るんです!! 後、発動後のワンプレー毎に化身自体のパワーは少しずつ落ちるんじゃないでしょうか!!」

上原：「確かにそれなら辻褄が合うな・・・。さつきとはパワーがまるで違った・・・」
善子：「もう気付かれたの!? ・・・流石は大海さんね・・・。観察眼がハンパじゃないわ・・・」

そして、上原先輩の必殺技で弾かれたボールは果南に渡る。そこに善・「ヨハネだつてば!!」がデイフェンスに来るが、フェイクからの高速ターンで抜き去る。

善子：「やっぱり果南さん上手いわ・・・!!」
そして花丸ちゃんと果南の1vs1。

花丸：「止めるぞら!! 【妖狐ダツキ]!!」

花丸ちゃんは化身を発動して体勢を整える。そして果南の右足でのシユート!!

花丸：「貫つたぞら!!」

花丸ちゃんが果南のキックに反応して横っ飛び。すると、

果南：ピタッ！ ドガアアアッ!!

全員：『『『『?』』』』

何と果南は寸前でキックフェイント。花丸ちゃんが釣られて飛んだ瞬間逆方向に思い切りシュートを叩き込んだ。

ザシュツ!!

果南：「流石にプロが高校生に負ける訳には行かないよ!!」

果南の鮮やかなフェイクシュートがネットを揺らし、俺たちは勝ち越しに成功した……。

沼○ 2 1 1 浦の星

1 続く 1

After story : vs 浦の星 前半終了

花丸：「まさかフェイントでくるとは思わなかったぞら・・・」

化身を発動した花丸ちゃんを、キックフェイントで釣って逆方向にシュートを叩き込んであのとんでもないパワーの化身からノーマルシュートで点を取ってしまった果南。

いやあ・・・流石先輩だね!!

龍也：「ナイシユ!!」 スッ

果南：スッ

龍也・果南：パアアアアアッ!!

俺と果南がハイタッチする。すると先輩方が集まった来て、

春咲：「果南先輩凄すぎますよ!!」

高橋：「ああ、どうやら上がるのはパワーだけで、テクニクや思考力は上がらないみたいだな・・・」

「まあそんな物まで上がったらヤバ過ぎるが・・・」と呟いていたのを忘れない。

久我：「よし、取り敢えずテクニクを活用したトリックプレーとフェイク主体で攻めてみるか」

新条：「そうだな。行くぞ!!」

沼○：「『おう!!』」

そして浦の星ボールで試合再開。ボールは中多さんに渡ると、ルビィちゃんと連携しながらパスを繋いで攻め込んで来る。

木村：「行かせないよ!!」

明日香先輩がディフェンスに入ると中へのパスコースを身体で塞ぎながら相手を走らせてフィールドの角へと追い込む。そしてそこへレイジさんが加わり二人で囲んでボールを奪い取る。

プロが2人掛かりで高校生を囲んで奪い取って字面がヤバいな．．．www

ボールを奪ったレイジさん。しかしそこに後ろからフォローに向かっていた上杉さんがスライディングタックルでボールを狙う。

高橋：「おっと!!」

しかしレイジさんはジャンプでアツサリと躲して一気にサイドからドリブルで攻め上がる。

そこへ浦の星サイドバックの葉桜とセンターハーフの成瀬が2人でディフェンスに来るが、レイジさんは素早くドリブルを切り返し、進行方向とは逆方向に急に切り替えされたことで勢い余って重心が浮いてしまった葉桜と成瀬の隙間を中央突破して中へ

After story : vs 浦の星 後半開始!!

新たな力、化身を使う浦の星相手に2点をリードしハーフタイムに入る。リードはしてるけど、想像以上に厄介だな……。

前半の立ち上がりで花丸ちゃんの化身に果南の最終進化の「激流ストーム」が楽々止められている。つまり、あれを真正面から破るには果南の「激流ストーム」を軽く上回る威力のシュートを叩き込むか、後の2点の様に完全に意表と不意を付くしかない。

しかし、前者の場合は俺のシュートと、連携技の「海龍の咆哮」くらいしか無い。

ん? 「グランドウェーブ」? あれは俺を入れてもダイヤか吹雪がいないと撃てないから除外。

高橋ととにかく、俺が中心になってチャンスメイクするから、サイドバック2人は「イケる!!」と思ったら迷わずにオーバーラップしろ。何とかしてサイドから相手のディフェンスを崩すんだ!!」

沼○:『『ハイ(分かった)!!』』』

そして、いよいよ後半戦の開始。

ピイイイイイイッ!!!

浦の星ボールで後半戦が始まった。ボールは成瀬さんに渡ると、右と左のセンター
ハーフコンビのパスワークで攻め上がってくる。

春咲：「貰っ・・・!?!」

春咲が奥村さんにディフェンスを仕掛けたが、奥村さんはパスをスルー。ボールは東
雲さんへ。

春咲：「だああああっ!! くっそ!!」

龍也：「慌てんな美穂乃!! 烏丸先輩とすぐに追え!!」

春咲：「分かってるよ!!」

春咲と烏丸先輩が東雲さんにダブルチームを掛ける。するとやはりと言うべきか、東
雲さんは化身を発動する。

東雲：「来なさいっ!! 【迅狼リユカオン】!!」

雷を纏った翠色の狼の化身が三度現れる。

東雲：「ー シップウジンライ ー!!」

東雲さんの電光石火のドリブル技が牙を剥く。

春咲・烏丸：「超・ダブルサイクロン!!」

何とここで2人の連携ディフェンス技が発動。荒れる強風が、化身ごと東雲さんを吹
き飛ばし、東雲さんは上空へと舞った。

ドシャアツ!!

東雲：「ガハツ!! 痛つゝツ!!」

春咲：「よし!!」

ボールを奪った春咲。するとその瞬間、サイドから飯田先輩がオーバーラップして来る。

春咲：「飯田センパ〜イ!!」

先程とはまるで違う女性らしい声で呼び、飯田先輩に斜めのパスを出す。

飯田：「よし!!」

パスを受け取った先輩がドリブルで上がると、浦の星のサイドバックの朝野さんがデイフェンスに来る。しかし飯田先輩は小刻みなボールタッチで細かなフェイクを入れ続けて焦れた相手が足を出した瞬間に突破。そしてゴール前、

花丸：「もうやらせないぞら!! 【妖狐ダツキ】!!」

花丸ちゃん化身を発動、守りを固める。

すると飯田先輩はゴールのほんの2メートル手前で中へとボールを転がす。そこに果南が走りこみシュート。

善子：「やらせないわ!!」

しかし善子さんがシュートの瞬間に足を伸ばす。しかし、それを果南はスルー。

そこにいたのは、

久瀬：「行けええええっ!!」

久瀬先輩が走り込んでスライディングシュート。軌道が変わったボールは何とか反
応し腕を伸ばす花丸ちゃんの手の中の数センチ先を転がり、「ポスト」と擦れる音を立
ててネットを揺らした。

久瀬：「よっし!!」

先輩のゴールで、更にリードを広げる事ができたのだった……。

沼○ 4 1 1 浦の星

1 続く 1

After story : 武神の新たな武器

久瀬先輩の追加点によりリードを2点から3点に広げて勢いに乗る俺たち沼○。

浦の星のキックオフから試合を再開してボールは成瀬さんへと渡る。

そこに久瀬先輩と果南が2人でプレスを掛けるが、上杉さん、中多さんとのパスワードで何とか抜き去るが、直ぐ様レイジさんがフォローに入る。

高橋：「行かせん!!」

すると突破は難しいと判断した成瀬さんは斜めに走っていたルビイちゃんにパスを出す。

成瀬：「黒澤先輩!!」パスッ

ルビイ：バシッ「! ナイスパス!!」

ボールを受け取ったルビイちゃん。何としても点が欲しい筈だ。 . . . 何か嫌な予感がする。

その瞬間、俺はダッシュでディフェンスに向かった。

.

新条：「ディフェンス守りを固めろ!!」

木村・飯田：「はい!!」

2人がディフェンスを固めると、ルビィちゃんの背から黒いオーラが現れる。

っ!! やっぱり持ってたか!!

ルビィ：「【紅玉聖獣レッドユニコーン】!!」

ルビィちゃんの背から、額に巨大な真紅のルビーが埋め込まれた美しく（紅い一角獣）が現れる。

新条：「ここで化身だっ!!」

ルビィ：「まだルビィ達は諦めません!! 行きます!!」

ルビィちゃんがシュート体勢に入る。するとルビィちゃんがボールに蹴りを何発も叩き込むと、「レッドユニコーン」も蹴りと同じ方向から同じ回数、角でボールを切り払う。

ルビィ：「ー クリムゾンデイストラクション ー!! 行つけえええええええええええええ!!」

そして止めのソバットキックと共に「レッドユニコーン」が角でボールを一突きすると、恐ろしい破壊力でシュートが飛ぶ。

新条：「っ!! 止める!!」 「極・ザウオール!!」

スサノオのオーラが剣から槍に武器を変えてシユートに槍を突き立てると、カウンターで弾かれたボールは槍と共に一直線にアイツの足元に渡った。

果南：バシイッ!!「!?!」

ルビイちゃんの化身シユートを防ぎ、前線の果南に絶好のカウンターでボールが渡った。

果南：(スゴイね・・・やっぱり。なら、その期待に答えなきやね!!)

果南のプロとしてのプライドを掛けた化身破りが始まる!!

ー 続く ー

After story : 海原の女神

俺の新技「武神の槍」からのカウンターパスが絶好のカウンターチャンスで果南の足元にビタツと吸い込まれるように繋がった。

果南：「っ!!」

龍也：「果南!! 行けえええええええっ!!」

果南が一気に走り出す。ディフェンスは2人とキーパーの計3人のみ。

善子：「朝野さん!! 行きなさい!!」

朝野：「っ! はいっ!!」

まずは朝野さんがディフェンスに入る。朝野が自分の身体を高速回転させると、風圧で複数の竜巻が発生。果南の行く手を阻む。

朝野：「スピニングフェンス!!」

激しい竜巻が果南を襲う。しかし、

果南：「絶対に決めるんだ!! はああああああつ!!」

すると果南の周囲が暗い空の大海原に変わり、吹き荒れる嵐が「スピニングフェンス」の竜巻とぶつかり合う。

果南：「サイクロンズ・バミューダ!!」

果南の竜巻が相手の技の根こそぎ海の中へと沈め、無防備な相手を突破した。

春咲：「果南センパイの新しい必殺技!」

善子：「くっ!! 止める!!」

そして津島がデیفエンスに入る。

善子：「聖魔の翼・改!!」

津島の背に片方が天使の様な純白の、もう片方が悪魔の様な黒い翼が生え飛翔し、翼を地上目掛けて振るうと、光と闇の色のエネルギーの刃がドリブラーの果南目掛けて降り注ぐ。

龍也：「果南!!」

果南：「行くよ善子ちゃん!!」「ヨハネ!!」「サイクロンズ・バミューダ!!」

再び果南のドリブル技が発動される。果南の発生させた嵐は天魔の刃を絡め取りそのまま海の中に沈める。そして果南は津島を突破した。

花丸：「勝負すら果南さん!!」「妖狐ダツキ!!」

花丸ちゃんが化身を発動させる。しかし度重なる化身の発動で花丸ちゃんの体力はかなりの量が失われている。

果南：「絶対に決めて見せる!!」

果南はまずは「サイクロンズ・バミューダ」を発動。辺りを大嵐の海域に変え、巨大なサイクロンを出現させる。

果南：「行くよ!!」

すると果南はそのサイクロン目掛けて跳躍し突っ込み、竜巻の「目」の部分にたどり着いた所で「激流ストーム」を放つ。すると、サイクロンにより海面から吸い上げられた莫大な量の水がボールに凝縮。更にサイクロンの風圧により後押しされるシュートを撃ち出した。

果南：「海神の裁き」!!」

果南の「激流ストーム」を遙かに上回る威力の必殺シュートが花丸ちゃんに撃ち落とされる。花丸ちゃんも化身技で対抗し、

花丸：「止めるぞら!!」「ーシキガミラインズー」!!」

【ダツキ】の合図でシュートに対して式神が一直線に並ぶ。そしてねずみ算式に次々シュートを受け止めていく。・・・が、

果南のシュートの暴風が全てなぎ払い、シュートはゴールに突き刺さった。そして・・・、

ピッ、ピッ、ピイイイーッッッ!!

ここで試合終了のホイッスルが鳴り、5ー1で俺達は勝利を納めた・・・。

沼
○ 5
| 1
| 1
浦
の
星

1 | 沼
続 | 試
く | 合
| 終
| 了
| 1
浦
の
星

After story : 俺を誘惑する果南が可愛い

浦の星との試合を勝利し、いよいよ準々決勝に駒を進めた俺たち。浦の星が出る前に、果南が浦の星OBとして後輩たちにアドバイスを送っていた。後輩達も強くなるために、この偉大な先輩のアドバイスを受けて更に特訓する事だろう。

そして俺と果南は家がすぐ近くなのでこのまま帰る事になり、淡島連絡船に乗って帰る。

ー 淡島 ー

俺たちが帰ると果南のお母さんが迎えてくれた。試合に勝ったことを伝えると、「TV中継見てたから知ってるわよ?」と言い、俺たちはシャワーを浴びることに。

果南は自宅の風呂場、俺は店のシャワールームを使ってシャワーを浴びることになったのだが、俺がシャワーを浴びていると・・・、

果南：「隙ありっ!! ハグッ!!」フニヨン

背後からここにはいない筈の果南がいきなり首に腕を回して抱きついてきた。背中に当たる果南の柔らかな双丘の感覚で俺は顔を真っ赤にして焦る。

龍也：「か、果南!? 何でここにいるんだ!？」

果南：「別々に入ろうなんて私が我慢できる訳無いじゃん・・・」

果南がジト目で言ってくる。さすがにたまには我慢できると信じたかったよ・・・。

龍也：「か、果南：：／／／ 分かったからそろそろ離し：「やだっ!! ムギユツ」っ!!」

果南の抱きつく力が強まる。胸だけでなく肌と肌が密着し、果南の女性らしい柔らかい身体が俺の背に押し付けられる。

ヤバイ・・・理性が・・・、

すると果南はあろう事か自分の身体を密着させたまま自身の身体を小刻みに上下に動かす。するとどうなるか、果南の胸が俺の背でプルンプルンと感触を残して時折かたい部分が当たる。・・・もう、無理!!

俺はクルツと果南に向き直ると、果南を正面から抱きしめる。

俺が急に動いたので果南はビックリしたようだがそれも一瞬。すぐに俺に抱きつく力を戻す。

果南：「龍也・・・♡」

龍也：「果南・・・♡」

果南：「今日、夜ダメ？」

もう完全に乙女の顔の果南の上目遣い。・・・この可愛さ反則だろ・・・好きな

娘にこんな事をされて反応しない男などいない。それをこんな美女がやったら・・・うん。他の男共には知られない様にしないと。知られたら殺されるから。

龍也：「分かった。でも当然避妊はするからな？　まだ果南と一緒にサッカーやりた
いし。」

果南：「ありがとっ!!」

そしてその日のダイビングショップの手伝いを終えて風呂に入った後でお楽しみでした。内容は伏せますが、ただ・・・お互いに攻めて攻められただけ言っておきます・・・。

ー 続く ー

After story：アジア予選の約束 龍也の内 浦での初ダイビング

浦の星との試合の翌日、俺たちは1日のオフとなり今日は果南の家のダイビングショップが休みの為俺と果南が個人的にダイビングすることになった。

ダイビングか・・・初めてだな・・・。

俺が水着に着替えた後ダイビングスーツを着て船に向かうと、果南が既に準備を終えて船を出す準備をしていた。

果南：「あつ!! 遅いよ龍也!!」

龍也：「悪い、初めてで準備に手間取った・・・」

俺は素直に果南に謝意を示すと、果南は「もう・・・」と頬を膨らませるがすぐに笑顔になり俺の手を引いて船に乗る。

龍也：「果南、船の操船免許持ってたんだな・・・。てつきりいつもはお義父さんが操船してるとばかり・・・」当然!! これでもダイビングショップの看板娘だからね!!」つ
!／／／

果南が「どうだ!!」とでも言いたげに胸を張る。うん・・・目のやり場に困る・・・。

龍也：「俺もちよつと楽しみにしてたんだ。立場が逆だけどエスコート頼める？」
果南：「アハハ、確かにね。じゃあ今日は初心者龍也のために、私がエスコートしてあげようかなん？」

そして果南の操船で船は出港し、果南お気に入りのダイビングスポットに到着した。

果南：「じゃあまずは私が入るからゆっくり入ってね？」

そして船の固定具を海に落とした後、果南が海に飛び込む。

果南：「良いよ!!」

龍也：「よ、よし!!」

そして俺も海に入る。海水はまだ初夏の為にだいぶ冷たいが、何とか動ける。

果南：「じゃあ息を大きく吸って潜るよ。私が手を引くからね？」

そして果南と一緒に息を吸って海に潜る。俺は目を瞑っていたが、果南が手を引いてきたことに気づき目を開けると・・・

龍也：「(!?)」

海の中は、上から日差しが海水に屈折しながら差し込み、更に海自体の透明度から、幻想的かつ美しい光景が広がっていた・・・。少し深く潜つてみると、海底の岩場に魚が集まっており、俺たちに近寄ってきた。

果南が手で魚たちを突つくと、遊んでくれたと思ったのか、周囲を泳ぐと、そのまま

何処かへ行ってしまった・・・。

マジで海が庭みたいなんだ・・・。ここの海の魚達は果南の友達なんだ・・・!!
隣に目をやると、果南が優しい表情で魚たちの泳いでいった方向を見詰めていた。

果南：(ちよつと海面上がるよ)

果南が俺の手を引き海面上に浮上する。ああ、息継ぎか・・・。

そして海面に顔を出して息継ぎすると、果南が沖の方を指差す。

果南：「ほら、来るよ?」

龍也：「え?」

俺がそつちに目をやるが何も見えない。しかし数秒後、遠くの海面に何かが跳ねているのが見えた。かなり大きい・・・って!!!

龍也：「イルカ!?!」

遠くから泳いできたのはイルカの群れだった。果南は「おーい!!」と手を振っている。まさかイルカまで友達なのか・・・いや、イルカはメチャクチャ頭が良いって聞いたことがあるしひよつとして人の言葉も理解できるのか?

そんなことを考えている間にイルカの群れが俺と果南の所に泳いできた。そのうちのまだ小さい恐らく子供のイルカが果南に擦り寄る。

イルカ：『キュウウ〜ッ』

果南：「アハハハ、くすぐったいってば!!」

果南も優しく子イルカを撫でると、親イルカもそれを見守っている。完全に野生動物に心を許されてるじゃねえか……。すげえな……。

すると子イルカが俺の方をチラッと見る。すると、

果南：「私の恋人だよ？ 優しいから大丈夫っ!!」

!?! まさかイルカの言葉分かるの!?! 俺が驚いていると子イルカが恐る恐る擦り寄ってきたので俺も果南がやったように優しく撫でてやる。

イルカ：『キュウ〜キュツキュツ!!』

すると子イルカは嬉しかったのか「ペロツ」と俺の頬を舐めてきた。

果南：「アハハ、龍也凄いな!! もうこの子達に気に入られちゃったよ?」

龍也：「そ、そうなのか?」

すると親イルカ達も俺と果南に擦り寄ってきたので優しく撫でてやる。

すると皆嬉しそうに跳ね回り、何処かへ行ってしまった。

果南：「皆龍也のこと気に入ったみたいだね。じゃあそろそろ帰ろうか?」

龍也：「おう!!」

そして果南の操船で淡島に戻る最中、

龍也：「果南：…、今日は連れてきてくれてありがとうかな？俺も、この海大好きになつたよ!!」

果南：「うん!! 良かった!!」

そしてその日は、果南と今日の海での話で盛り上がりながら、二人共疲れで眠りに落ちた……。

― 続く ―

After story : 苦戦の予感

3回戦から4日後、いよいよ準決勝だ。今日は磐田中央工業高校との試合となる。磐田中央は昨日ビデオで見たが、ここまでの試合で大学生や実業団チームを相手に守りは多くて1失点、攻めは最低3点以上の得点で勝ち上がってきたとても高校生とは思えない実力のチームだった。

監督：「よし、それではスタメンを発表する。」

FW・山本、大海、久瀬

MF・烏丸、高橋、松浦、久我

DF・新条、桜井、宮間

GK・木野

以上の11人で行く。」

上原：「スゲエな・・・大海またスタメンか・・・」

木村：「まあウチの最大火力選手だからね・・・オマケにディフェンスまでトツプクラスだし、寧ろ入れない理由が見当たらない・・・」

何か先輩たちからそのうち風当たり強くなりそうだな・・・。

俺が少しばかり気持ちが悪くなる、果南がさり気なく俺の耳に顔を近づけ……、

果南：「……大丈夫。私は絶対見捨てないから」ボソッ

龍也：「!?」

ハア、果南には見抜かれてたか……。まあ俺の過去知ってるから……。ほんとはFFIの代表候補が果南や円堂達で良かったとつくづく思うわ……。

高橋：「よし、整列だ。今日も勝つぞ!!」

沼○：『『オオオオオツツ!!!』』

そしてフィールドで選手が整列する。

審判：「両チーム、礼!!」

沼○・磐中工：『『宜しくお願いします!!!!』』

スターティングメンバー

磐田中央工業高校

3 | 1 | 4 | 2

G K 盾川

D F 南守 風間 東条

ボランチ 三波

M F 西沢 本田 北野 倉橋

F W 剣崎 槍川

沼○

F W 山本 大海 久瀬

M F 烏丸 高橋 松浦 久我

D F 新条 桜井 宮間

G K 木野

両チーム、メンバーが自身のポジションに就く。

主審：「キックオフ!!」

ピイイイイーッ!!!

試合開始のホイッスルが鳴り、いよいよ準々決勝が始まった。

まずは磐中工のキックオフから試合が始まり、ボールはボランチの三波へ渡る。そこへセンタートップの俺がボールを奪いに掛かる。

龍也：（パスか？）

パスするかと思ったが、何と相手のとつた行動は「勝負」。俺と三波の1vs1になる。

龍也：「奪る!!」

俺の動きに合わせて三波もフェイクや技の動作を入り混ぜてコチラを揺さぶる。

・・・コイツメチャクチャ上手いんだけど!?

そして相手がパスのモーションに入ったことで詰めに掛ると、それは囷の動作であり、一気に最高速のスピードドリブルで抜かれてしまった。

龍也：「やべっ!?!」

高橋：「なっ!?! 大海が抜かれただど!! 「私が行きます!!」っ! 頼んだ!!」

すぐさま気持ち切り替えて果南がディフェンスに入る。レイジさんと烏丸先輩、久我先輩はそれぞれパスコースをケアする。

果南：「行かせないよ!!」

今度は果南がディフェンスに入るが、ここでディフェンスの合間を縫う斜めのスルーパスがグラウンダーで入り、ボールはサイドラインギリギリに走っていた剣崎に渡る。

新条：「!? クソ!!」

三波の中央突破に、サイドの警戒を僅かに緩めてしまっていた新条先輩。その隙きを突かれてしまい、剣崎はボールを受け取ると、新条先輩を外に引き付けてからゴール前に浮き球のセンタリングを入れる。

すると中には本田、北野、楢川の映像で見た限り特に攻撃力の高い3人が走り込んでいた。

桜井と宮間は相手の実力をいち早く察知したのか、「自分たちがディフェンスに入っても恐らく抜かれる」と判断。急いでシュートブロックの構えを取る。これならば自分たちの技は破られてもキーパーが止めてくれるという判断だろう。

本田・北野・槍川：「「ガイアブレイク・V3」!!」

ボールに大きな無数の岩が集まる。それを3人が連携シュートすると、岩が砕け、インパクト時のパワーが岩の内部で反響・増大し、より大きなパワーを得たシュートが飛んでくる。

しかし、こちらでも2人の連携ディフェンス技でブロックする。

宮間・桜井：「「究極暴風撃・G3」!!」

2人のディフェンス技のオーバーライドから更に強力なディフェンス技を発動。巨大なサイクロンがシュートを巻き込み、シュートの向き、回転方向と完全に逆回転の風圧をぶつけて威力を削ぐ。しかし、

桜井・宮間：「ぐぐぐうううっ!!? うわああああっ!!」

だいぶ威力を削がれたものの、2人の技を貫通。残るはキーパーの木野さんのみ。

木野：「任せろ!! 「太陽のギロチン・A」!!」

木野先輩の技で、空から高温のギロチンが降ってくる。威力を弱められたシュートは、多少の抵抗はしたもののギロチンに両断され、勢いを失った。

おい、コレ間違いないマジでヤバい相手だぞ・・・。

沼○ 0 1 0 磐田中央工業高校

1 続く 1

After story : 果南の頭をよぎる龍也の過去

磐中工の必殺シュートを桜井と宮間のシュートブロックと木野さんのキーパー技で止めることに成功し、木野先輩のゴールキックからボールは果南に飛ぶ。

果南：「よっし、行くよ!!」

果南がカウンターで一気に攻め上がるが、磐中工も戻りが速い。すぐにこちらの攻撃に備えて戻っていた。

果南：「なら力付くで突破する!!」

ドリブルで攻める果南に対して三波がディフェンスに入る。俺は急いでパスを受け取れる様に動く。

龍也：「へい!!」

果南：（っ！ ナイス!!）バツ!!

三波：「!?」

俺がコースを作ったことで、三波はパスを警戒してそちらの方に身体をきつた。その瞬間、果南は逆方向に切り返して突破。三波を突破した。

風間：「っ！ させん!!」

三波が突破されたことにやや焦ったのか直ぐにセンターバックの風間がディフェンスに来る。サイドから山本さんと久瀬さんが駆け上がることで相手のサイドバックを釣り上げる。するとゴール前の俺のマークが完全に外れる。

風間：「大海にパスは出させんぞ!!」

D Fの風間は果南にしつこく執拗にディフェンスし時間を稼ぐ。するとその隙にどんどんディフェンスが戻ってくる。

果南：「っ！ 龍也!!」

果南は左に抜くと見せ掛けてボールを置いておき、身体に相手が反応した瞬間、左足のインサイドでディフェンスの脇を抜いた。

果南：「龍也!!」

龍也：「ナイス果南!!」

そしてフリーで俺にボールが渡り、シュート体勢に入る。

ボールに極大のオーラを纏わせてそれをオーバーヘッドで下に落として左足払いでボールに空気の膜をコーティングする。

そしてそれを「ファイアトルネード」で蹴り飛ばした。

龍也：「ファイアトルネードFD!!」

炎の龍がフィールドを焼きながら突き進む。盾川は必殺技で防御の構えを取る。

盾川：「プロキオンネット・V4」!!!」

相手キーパーの周囲が宇宙に変わり、三角形に並んだ星から三角の網が広がってシュートを受け止める。しかしそんなものは圧倒的な火力の前に焼き尽くされボールはゴールの中に叩き込まれた。

龍也：「っしやああああっ!!」

久瀬：「やっぱ凄えわアイツ・・・」

宮間：「わたしたちとは完全に格が違う・・・」

果南：「っ!?! (何か皆の様子がおかしい・・・、このままじゃあ取り返しのつかないことになる気がする・・・)」

一抹の不安を感じた果南。その不安は思い過ぎしか、はたまた現実になるのか・・・、そして、1点をリードして試合を再開する。

沼○ 1 1 0 磐田中央工業高校

1 続く 1

After story : 再点火!! 心の灯火!!!

〈 果南Side 〉

静岡選手権準々決勝、磐田中央工業高校との試合で今までに無い程の苦戦を強いられた私達。

正直な話1回戦で戦ったダイヤたちよりも強いんだけど・・・どうなってるの？

何とか私のフェイクからのパスを受け取った龍也が先制点を決めてくれたけど・・・、今度はチームメイトの様子がおかしい。龍也の力に皆が今になって実力の差を感じ始めている。このままじゃあ龍也が昔みたいに思いきりサッカーできなくなってしまうかもしれない。

この試合の確実な勝利を取るか、ギリギリだけど、他の人にボール回して時間を稼いで試合を終わらせて今以上に状況が悪くならない様にするか・・・。でも・・・そんなことできるほど甘い相手じゃない。

・・・ならチームメイトとファンの皆には悪いけど、例えばプロ失格と言われようと、私
は!!

〈 果南Side out 〉

龍也のシュートが決まって私達が1点をリードして磐中工のキックから試合再開。ボールはあの厄介なゲームメイカーの三波に渡る。多分だけど、彼はもう1つ”眼”を持つてる。

高橋：「行かせん!!」

レイジさんがデイフェンスに入るが、細かなボールタッチの連続フェイントで揺さぶられて身体の軸が僅かに浮いた瞬間逆方向にパスを出されてしまう。ボールはサイドの西沢くんに飛ぶ。

果南：「烏丸さん!! 新条先輩!! そっち行きます!!」

烏丸・新条：「!!」

急いで2人が西沢くんを挟んで2対1で競り合う。何とかボールを奪い取り、私はボールを要求する。

果南：「烏丸さんこっちです!!」

烏丸：「!! 松浦!!」

ボールが私に繋がる。「果南!! こっちだ!!」っ! 龍也が要求してくるが、このゲーム、とりあえず前半が終わって皆に話ができるまではあなたにだけは渡すわけにはいかないの!!

たとえそのせいで点差が開いても、私はっ・・・”これ以上あなたに辛い思いはさせた

くない!!”

東条・三波：「貰った!!」

三波君とサイドバックの東条さんがデیفエンスに来る。恐らくスペースが空いた右サイドに出すと全員思ってる筈……。

果南：「山本さん!!」

山本：「!?」

味方も相手も完全に逆を突かれた果南のスルーパス。フリーで受け取った山本さんはシュート体勢に入る。

山本：「おっし、新技のお披露目行くか!!」

!! 新技!?

山本さんが右足を後ろにしならせる様に大きく振り上げ、自身の体重とパワーを全てキックに乗せて蹴りを叩き込む。するとそのインパクトの瞬間、背後に、まるでライオンと虎を混ぜた様な風貌の威圧感のある野獣が視えた。

山本：「ライガーマグナム・改」!!」

ドッ、ゴオオオオオオオオオオツツ!!

空気を揺さぶるような強烈なインパクトの音と、発生した風圧で全員一瞬身構える。

シュートはダツシユで獲物に向かっていく野獣と共に、強烈なジャイロ回転が掛かり

ながらゴールに向かっていく。

盾川：「なっ!! こんなシュートを!?」 「プロキオンネット・V4」!!」

盾川君の三角形の網がシュートを受け止める。しかし野獣のオーラに食い破られ、シュートはゴールに突き刺さった。

果南：「!?」

なっ・・・いや、失礼だけど・・・山本さんあんなパワー前には無かったのに・・・。

山本：「松浦、ナイスパス。「あっ、・・・ハイ」ん?」

果南：「いや・・・何か山本さん、凄いパワーアップしてるなど思つて「パワーアップしたのは俺だけじゃないぜ?」え?」

山本：「俺と久我、新条の3人は、今季の新人のレベルが高すぎたせいで、長年チームに貢献してきたのにスタメンを一時的とはいえ降ろされた。悔しくないと思うか?」

果南：「・・・いえ、私だったら悔しくてたまらないです」

山本：「だろ? だから俺たちは3人で特訓してたんだ。今チームの精神状態があんまし良く無くなってるのは経験で分かる。大海が孤立する前兆を感じてるんだろ?」

心配すんな、取り敢えず前半は俺たち3人を頼れ。お前ら程じゃねえが前よりは強くなってるはずだぜ?」仲間を守るのが先輩の役目だ!!絶対着いて行ってやるよ!!」

久我・新条：「おう(そうだぜ)!!」

いつの間にか久我先輩と新条先輩が側に来ていた。

果南：「っ!!」

私は流れた涙を拭い、「ハイッ!!」と心の炎を再度燃やし、決意を胸に返事した。

・・・何で気づかなかったんだろ？ あんな頼りになる先輩たちに・・・!!

沼○ 2 1 0 磐田中央工業高校

1 続く 1

After story : vs 磐田中央工業 前半終了

山本先輩がゴールを決めて2-0と更にリードを広げる。しかし前半の間、私達4人は龍也にパスを出せない。

新条：「なるべく俺たち4人で闘おう。前半が終わるまでは」

久我・山本・果南：「「分かった（りました）」」

そして磐中工のキックオフから試合再開。ボールはまたしても三波くんに渡り、そこに龍也がディフェンスに入ってしまう。

果南：（ゴメン！ お願いだから抜かれて!!）

く 龍也 Side く

くそつ、こいつ俺の動きを完全に読んでやがる・・・!! なんとか食らいついてはいるがそう何度もやられちゃあな・・・”オーバーフロー”を使うか？ いやこの時間じゃあ体力が持たない。

俺が必死に思考を巡らせていると三波は大きく右足を振りかぶりロングパスの体勢を取る。

龍也：「っ!! （罨か？ だけど行かなさきや確実にパスを繋がれる、嫌らしい奴だな）」

俺と三波の距離的にカットに入らずフェイク読みをすれば、後出しで確実にパスを撃がれてしまったため急いで足を伸ばしてカットに入る。しかし三波は身体を反転する勢いでインサイドで本田さんにパスを出す。

本田：「三波先輩ナイスパスです!!」

龍也：「っ!! マジか!!」

龍也 Side out

龍也がまたしても裏を掛かれてしまった。今の状況を考えれば安堵するべきなのだが、何あの三波君って子？ いくらなんでも上手すぎない？

新条：「桜井!! レイジと挟んで挟み撃ちにしろ!!」

桜井：「分かりました!!」

ボールを受け取った本田さんに、レイジさんと、指示を受けた桜井くんが挟み撃ちにする。前に出た桜井くんのスペースを埋める為に私が下がってスペースに入る。

高橋・桜井：「貰っ・・・!!」

何と本田さんはボールをスルー。大外から走ってきた西沢さんに渡っ・・・

新条：「読んでたぜ!!」バシッ!

何とスルーを読んでいた新条先輩が渡る寸前でカット。西沢くんが走ってきている事に気づいて桜井くんに行かせたんだ・・・。そしてその空いたスペースに気づいた

私とそのフォローに入ることも読んでたんだね・・・

新条：「山本!!」

サイドから前線の山本さんへと縦のロングパスが飛ぶ。ディフェンダーの南守くんと山本さんの競り合いになるが、

山本：「まだ小僧には負けん!!」 ドガアッ!!

南森：「っ!? くそっ!!」

ボールを胸でトラップし、着地からすぐにゴールの方を向いた山本さんはすぐにシュート体勢に入る。そして背後に野獣のオーラが顕現する。

山本：「ライガーマグナム・改!!」

空気を震わせる程の威力の蹴りがボールに叩き込まれ、物凄い勢いでゴールに再び牙を剥く。

風間：「させん!!」

しかしディフェンダーの風間がブロックに入る。風間が手を地面に叩きつけると・・・

風間：「爆・グラビテーション!!!」

重力場が発生し、シュートを地面に押し潰す。しかし多少威力は弱まったものの、ほとんどの威力は死んではない。

盾川：「もう点は入れさせない!!」 「ムゲン・ザ・ハンド・Gx!!!」

果南・龍也：「!?!」

何と盾川くんは立向居くんの技を発動。千手観音の様な無数の手がボールに次々と抑え込み、「ライガーマグナム」は止められてしまった。

そして、ここで前半戦終了のホイッスルが鳴った。

― 続く ―

After story : ハーフタイム

準々決勝、磐田中央工業高校戦も前半を終えてハーフタイムに入る。皆の雰囲気はやはり龍也に対してなんかよそよそしくなっている。

よし、言おう!!

果南：「皆ちよつと良いかな?」

私の声で皆が私の方を見る。龍也・・・ゴメン!!

果南：「龍也は昔今のチームみたいな雰囲気になったせいでサッカーを辞めてるの。だから一旦止まってくれない?」

龍也：「果南!?!」

龍也がビククリして声を荒げるが、私は言わなければならぬ。

果南：「龍也は、自分が周りとのレベルが違いすぎたせいで仲間から孤立してサッカーから離れてるの。今の皆の雰囲気だとまたそうなるかもしれない・・・」

沼○：『!!』

皆思うところがあつたのだろう。バツが悪そうな顔をして俯く者もいればポリポリと頭をかく者もいる。

果南：「皆が嫉妬するのは分かるけど、今までの龍也を思い出してよ!! そんなに嫌な奴だった?！」

春咲：「いや、大海くん・・・確かに才能もスゴイけど、陰でスゴイ努力してた。休日の日にも、海岸を走ってるのを見ました・・・」

リリア：「私は大海くんに助けてもらいました・・・!! なのにその人を孤立させるよ
うな事はしません!!」

2人の声に1人ずつ俺に「スマン」、とか「ゴメン」と声を掛けてくる。

果南・・・まったく・・・

龍也：「果南・・・勝手に言うなよな? まあ、結果的に良かったから良いけど」

果南：「ごめんなさい。けど放っておけなくて・・・」

俯いて誤ってくる果南。はあ、怒って無いっての。

俺は果南をギュツと抱きしめると、「ありがとう」と声を掛ける。

果南は顔を真っ赤にして俺の胸に自身の顔を埋めた。

監督：「お二人さん、後半に向けての作戦伝えるぞ?」

監督の声でハッと我に返った俺たち。皆が俺たちを見てニヤニヤと笑っている。恥

ずい・・・／／

そして監督から作戦の内容が伝えられる。だが、その内容は、

果南：「私と龍也の2人で三波くんを抑える？」

高橋：「そして俺たちは2人の動きに連動して周りのディフェンスフォローに入れ？」

監督：「ああ。さっきまでは無理だったろうが、今ならできるはずだ。お前たちが本当にお互いを認めた仲間ならな!!」

っ!! そんなこと言われたらな!!

高橋：「そんなことを言われたらやるしか無いでしょ!! なあ!!」

沼○：『はい!!』

俺たちが気持ちを新たに、後半戦の準備を整え、

審判：「後半戦開始です!!」

監督：「よし、行ってこい!!」

そして選手がフィールドにでる。だが、ここでフォーメーションを変える。

沼○フォーメーションチェンジ

F W 山本 久瀬

M F 鳥丸 大海 松浦 久我

ボランチ 高橋

D F 新条 桜井 宮間

G K

木野

高橋：「絶対に勝つぞ!!」

沼○：『おおっ!!』

そして、審判のホイッスルと共に後半戦がキックオフ。

沼○ボールで開始し、ボールはレイジさんに。そこに剣崎と槍川がディフェンスに来るが、俺たちはパスを回して攻め上がる。

そしてボールは山本先輩に渡り、山本先輩に対して南守がディフェンスに入る。

南守：「止めるてやる!!」 「スピニングカット・V3」!!」

南守が左足を横薙ぎに振ると、エネルギー波が飛び、着弾と同時に壁となってせり出しボールを奪った。

南守：「三波!!」

高橋：「行つたぞ!!」

そして三波にボールが渡る。そこへ・・・、

龍也：「行くぞ果南!!」

果南：「うんっ!!」

後の世代まで語り継がれる最強のコンビ、松浦果南と大海龍也が、若き天才に立ち塞がる!!

↓
続
く
↓

After story：準決勝決着

ハーフタイムも終わり後半戦開始。早速相手の司令塔である三波とマッチアップした龍也と果南。果たして軍配はどちらに挙がるのか？

三波（抜くっ!!）

三波はディフェンスに入った龍也の動きを読んで左側に抜く素振りを見せる。しかし龍也も何とか食らいつく。

三波（抜けないか……パスは……?）

三波はパスターゲットを探すが、こちらは三波封じのフォーメーションを敷き、パスを出す相手をガツチリとマンツーマンでマークする。

三波（出せないか……なら!!）

三波はここでドリブル突破を仕掛けてくる。右にスライドし、龍也の軸足がそちらに乗った瞬間に逆方向に切り替えした。

ガクッ!!

龍屋（っ!?)

龍也はアングルブレイクを起こして倒れる。が、

三波（っ!?） 待て…何でそこにいる!!）

果南「貰ったよ!!」

ディフェンスの後衛に控えていた果南が三波の進路に先回りして意表をついてボールを奪った。

高橋「行くぞ攻撃だ!!」

果南「久我先輩!!」

久我「承知仕った!!」

ここでボールは右サイドの久我先輩に渡る。久我先輩は得意のドリブルでぐんぐん上がっていく。

倉橋「止める!!」

東条「行かせない!!」

倉橋と東条が久我さんにプレッシャーをかけるが、巧みなドリブルテクニクで突破した。

久我「後は頼むぞ…!!」ドガアアッ!!

久我さんからセンタリングが入る。久瀬先輩と山本さんは突っ込むがギリギリ届かなかった。

宮間「ダメ届かない!!」

久我「いくや？俺が狙ったのはその向こうの…18番!!」

三波「その二人は囷だ!! 大海が走ってるぞ!!」

久我「このチームのエースはお前だ…決める!!」

龍也「うおおおおおおおおああああつ!!」ドゴオオオオツ!!

龍也の放った弾丸ボレーが、磐中工のゴールに突き刺さった。

龍也「おっしやああああつ!!」

果南「ナイスシュート龍也!!」

龍也「果南、皆もサンキュ!!」

チームメイト『おう!!』

一方、

三波「くそつ……」

本田「まさか三波先輩が取られるなんて……」

風間「悪い…ディフェンスがもつとしっかり警戒してれば……」

三波「いえ……今の流れは正直向こうが凄いです。さすがプロというべきでしたね」

風間「まだ時間はあるんだ。絶対に逆転するぞ!!」

岩中工『おおつ!!』

しかし、今の沼津相手に高校生が3点を取り返すのは重すぎた。徐々に点差が開き始

め、試合終了間際、

高橋「決めろ!! 松浦、大海!!」

果南「行くよ龍也!!」

龍也・果南「「海龍の咆哮・G5」!!」

盾川「止めてやる!!」「ムゲン・ザ・ハ……ぐわあああつ!!?」

俺と果南のシュートがゴールに叩き込まれ、結果としては5-0で沼津が勝利したのだった。

審判「整列!! 礼!」

両チーム『『ありがとうございました!!』』

そして俺たちの帰りのバスの中で、

龍也「あの三波ってやつ、絶対にプロに来るな……」

果南「うん。まだ2年生だけど、卒業して再来年は絶対にくるよ。私達も練習しないとね」

その時、先頭座席の監督が俺達選手全員に話しかけてきた。

監督「全員聞け、もう一つの準決勝が終わって結果はライバス磐田が決勝進出を決めたってさ。試合は明後日、ヤマハスタジアムで決勝だ」

龍也「磐田か……」

果南「確かにこさんが入ってた筈だよ？」

龍也「にこさんか……決勝の相手に相応しいな」

奇しくも選手権決勝は、俺たちのイナズマジャムパン時代のチームメイトである”矢澤にこ”と激突することになった。

┆ 磐田 side ┆

にこ「大海、果南……来るなら来なさい!! 返り討ちにしてやるわ!!」

┆ 続く ┆

田
After story : 静岡選手権決勝 沼津vs磐

準決勝の磐田中央工業高校戦に勝利し、決勝戦にコマを進めた俺たち沼津。

昨日1日休憩日を挟みいよいよ今日、最後の相手であるライバス磐田と激突する。

サッカー激战区静岡の最強が決まるだけあって、スタジアムは無観客だがTVの前には大勢の人が張り付いていた。

審判「それではこれよりライバス磐田とアール〇〇口沼津の試合を行います！」

両チーム『『お願ひします!!』』

そしてキャプテン同士が握手する。そして他の選手も向き合った選手同士で握手する。

にこ「負けないわよ？」

龍也「俺たちだって負けねえよ！」

コイントスの結果、沼津ボールからスタートだ。試合開始前、俺達は円陣を組み気合を入れる。

高橋「皆ここまで良く戦ってきた…。これに勝てば俺たちが静岡で最強だ。ここまで

来た後は勝つだけだ！全力でぶつかって行くぞ!!」

沼津『おう!!』

そして両チーム所定の位置に着く。

フォーメーション

ライバス磐田

G K ロベルト

D F ロイス 支倉 大川 無方

M F 桐生 にこ 瀬波

F W 月宮 澤村 菅原

アール○○口沼津

フォーメーション

F W 龍也 山本

M F 果南 春咲

ボランチ 高橋 久我

D F 木村 新条 桜井 宮間

G K 木野

そして、審判の笛が鳴り沼津ボールで試合開始。開始直後に龍也はドリブルで攻め上がる。

月宮「行かせんぞ!!」

澤村「止めるわ!!」

龍也「果南!!」

俺は後ろの果南にバックパス。ボールを受けた果南は逆サイドにパスを出す。

果南「美穂乃ちゃん!!」

果南から春咲にパスが飛ぶ。

春咲「オツケーですす!」「甘いわっ!! バシイッ!」 ああっ!!」

パスルートを読んでいた矢澤がここでパスをカット。そのままドリブルで攻め上げる。

久我「行かせんぞ!!」

ここ「押し通るわ!!」「スーパーエラシコ・V3」!!」

ここで矢澤は必殺技を発動。久我さんをアツサリと抜き去る。

高橋「くっ、止め:」菅原、決めなさい!!」マズイ止める!!」

ここでボールは菅原に渡る。菅原はシュート体勢に入る。ボールを上空に蹴り上げ、自身も跳躍し足でボールを挟み込むとドリルのような回転を掛ける。するとボールは

赤黒い槍となりゴールを襲う。

菅原 「[「デススピアー・V2」!!]」

アルティメットストーム

桜井・宮間 「[「止める!!」「究極暴風撃・G3」!!]」

二人が連携して巨大竜巻を巻き起こす。風はボールを呑み込み威力をドンドン奪っていく。

しかし「究極暴風撃」は突き破られ、シュートはゴールに到達する。

木野 「ナイスだ二人共!」「太陽のギロチン・A」!!」

空から灼熱のギロチンが降ってくる。ギロチンはボールに直撃し高熱で焼き切りシュートは停止した。

木野 「オフエンス、上がれ!!」

木野さんのスローからボールはレイジさんへ。そこに桐生がディフェンスに入る。

桐生 「止める!!」

高橋 「成長してるのは俺たちもだ!!」「スプリントワープ」ッ!!」

ここでレイジさんは龍也の技である「スプリントワープ」を使用。超スピードで桐生を抜き去った。

龍也 (レイジさん練習してたもんな……完成してたのか)

レイジ 「松浦!!」

ここでボールは果南に飛ぶ。果南がボールをトラップしてドリブルを仕掛ける。

ロイス「止める!!」 「ボルケイノカット・乙!!」

果南「きゃあっ!!」

ここで果南はボールを奪われてしまいそのまま磐田の速攻。ボールは矢澤に渡る。

高橋「っ!」 行かせん!!」

にこ「なら力づくで通るわ!!」 「スーパーエラシコ・V4」!!」

ここで進化した矢澤の「スーパーエラシコ」。先程よりも動きにキレが増し、レイジさんを突破した。

にこ「月宮!!」

ここで矢澤はサイドラインを駆け上がりつてきていた月宮に斜めのパスを入れる。明日香先輩が慌ててディフェンスに入るが、

月宮「中ががら空きだ!!」 トツ!

中にボールをリターン。澤村がフリーで飛び込んで来ていた。

木野「っ!!」 止める!!」

木野先輩は慌てて前に出てシュートを撃たれる前にキャッチを試みる。が、

澤村「……………」 スルッ

何とここで澤村はボールをスルー。そこにファーサイドから菅原が走り込んで来た。

菅原「ナイススルー!!」ドガアアアツ!!
ザシユウツ!!

菅原のノーマルシュートは、ガラ空きのゴールに突き刺さった。

実況「ゴールツ!! 磐田が先制ゴール!!

矢澤にこを起点に、素晴らしい攻めを見せたぞおっ!!」

桜井「すみません、菅原のマークを外してしまいました……。」

宮間「私達のミスです……」

山本「大丈夫だ。俺と大海ですぐに取り返してやる!! な?」

龍也「はい!!」

高橋「よし、ここから勝負だ。反撃行くぞ!!」

沼津『オオooooooooツ!!』

にこ「そう来なくちゃ面白く無いわ!!」

沼津 0 ー 1 磐田

ー 続く ー

After story : 技術 (わざ) と技術 (わざ) の ぶつかり合い

サイドから低空^{グランド}パスで入ったセンタリングに澤村が反応。しかしスルーし、キーパーを釣り出した所にファーサイドから走って来た菅原がガラ空きのゴールにシュートを叩き込み磐田が先制。

沼津ボールで試合再開。ボールは一旦戻され春咲へ。そこに菅原が追ってくる。

春咲「久我先輩ツ!!」

春咲は久我先輩にバックパスして自身は上がる。ボールが転がった久我先輩は大きく前に蹴り出し、縦のワン・ツーで菅原を抜いた。

瀬波「行かせるかっ!!」

しかしそこに瀬波が止めに入る。春咲は必殺技を発動し、

春咲「行くくよくよ!!」「クレイモア・乙!!」吹っ飛ばオラアあっ!!」

春咲の必殺技で地面からボールが変質した剣山が飛び出し瀬波を足元からズタズタにして突破。山本さんにパスを出す。

春咲「山本さん!!」

山本「よし：「させるかつ!!」っ!!」

しかしディフェンスの大川がパスカット。そのままボールを前線に蹴り出す。ターゲットは勿論、

にこ「ナイスパス!!」

ボールを受け取った矢澤がドリブルで攻め上がる。今度はレイジさんと久我先輩が2人掛かりで止めに入る。

にこ「無駄よ!!」「スーパーエラシコ・V4」!!」

矢澤の必殺技でまたしても突破されてしまいそのまま攻められる。

にこ「菅原!!」

ボールは菅原に渡り跳躍。そこからシュート体勢に入ると、キーパーの木野先輩は身構える。

菅原「「デスス：と、見せかけて、月宮!!」

新条「何っ!? 逆サイドだ!!」

菅原はシュートと見せかけて逆サイドへ大きくパス。MFの桐生が上がってきており、FW3人は中へと詰める。

木村「これ以上やらせないっ!!」

桐生「行け!!」

桐生から中へのセンチタリングが入る。それに併せたのは、

月宮「もらった!!」ドガアアアツ!!

月宮がヘディングでシュートを放ってくる。幸い新条先輩の正面だったため、先輩もヘディングで弾き返す。

にこ「貰った!!」

しかしボールが転がった先には矢澤が詰めていた。撃たれる!!そう思ったが、

果南「甘いよ!! 奪取!!」ジャッカルバシイッ!!

にこ「っ!! 果南!」

何と、不味いと思った果南が急いでディフェンスに戻って身体を使ってボール確保。ピンチを救った。

果南「龍也!!」

今度は沼津のカウンター。ロングボールは龍也に渡り、ドリブルで攻め上がる。

ロイス「くっ、行かせないぞ!!」

支倉「ここで止めるわ!!」

龍也に対してディフェンスが2人掛かりで止めに入る。

龍也「点を決めるのは、必ずしも俺じゃなくても良い!」山本さん!!」

ここで龍也は山本さんにパス。磐田ディフェンスは完全に龍也を警戒して左サイド

に寄っていたため、山本さんのシュートコースが大川と無方の間を完全に捉えていた。

山本「（これならイケる!!）」「ライガーマグナム・V2」!!」

ドゴオオオオオオオオオオおんっ!!

ボールを蹴るインパクト音が特大の爆音を鳴らし、ライオンのようなトラのような肉食獣と共にシュートが凄まじい勢いでキーパーのロベルトに襲い掛かる。

ロベルト「止める!!」「真・ガラティーン」!!」

ロベルトの左手に出現した光剣がシュートに叩きつけられる。シュートは完全には止まらなかったが弾かれてしまい、飛んだ先は……、

春咲「よっし!!」

ロベルト「マズイ止めろ!!」

すると、一瞬だが春咲がこちらを見た気がした。

春咲「行くよーっ!! うらあああっ!!」

春咲の強烈なシュートがゴールに迫る。が、

ロベルト「止めるっ……?」

ガアアアアアアアアアアツ!!

シュートはクロスバーに当たり跳ね返る。

支倉「コントロールが無くて助かったわね……いいや? 狙い通りだよ!!」っ!!」

跳ね返ったボールに、デイフェンスラインの裏へと抜け出した龍也が併せる。そして龍也が併せた直蹴撃弾は、完全にキーパーの意表を付いて無防備な磐田ゴールに叩き込まれた。

龍也「よっし!! 春咲ナイスパス!!」

春咲「良く私の意図が分かったね?」

龍也「一瞬チラツと見た気がしたからな」

俺と春咲はお互いにサムズアップする。

果南「むくくっ!!」「か、果南……?」何か良い雰囲気……」

龍也「大丈夫だから、嫉妬しないで……試合中なんだから」

果南「じゃあ試合終わったらね?」

龍也「ああ………」

ロベルト「あんなの止められねえよ………」

にこ「まさか果南以外ともあんな連携ができるなんてね………」

瀬波「もう以前の沼津じゃないみたいだな。大海が入ってから数ヶ月で、以前とは実力的にも纏まり的にも全く別のチームだ………」

にこ「でも私達は負けないわ!! 行くわよ皆!!」

磐田『おう!!』

龍也「絶対に勝つぞ!!」

沼津『おお!!!』

磐田ボールから試合再開。ボールは矢澤に渡りドリブルで攻め上がってくる。

山本「俺が行く!!」

そこに山本さんがディフェンスに入る。だが、

にこ「あなたじゃ止められないわよ!!」「スーパージェット・V4」!!」

矢澤が必殺技で山本さんを突破する。が、

龍也「甘いっ!! 奪取!!」ジャッカル バチンッ!

にこ「っ!!」

技の発動直後の無防備なタイミングを狙って龍也のショルダーチャージ背肩奪取。相手を抑えながら春

咲にパスを出す。

春咲「オツケーだよ!!」

ボールを受け取った春咲がグングンドリブルで攻め上がっていく。瀬波と無方が止めに入るが、春咲のドリブルテクニックが上回りごぼう抜きした。

無方「嘘だろ!?!」

瀬波「マジか!？」

磐田のディフェンスラインが春咲を止めに来る。しかし春咲はフワリとしたボールを軽いタツチでゴール前に上げた。

ロベルト「なんだとっ!？」

ロベルトは急いでボールを取ろうと前に出るが、

果南「甘いよっ!!」

中に走り込んでいた果南が、キーパーがまさに取る寸前で届き、軽く上に蹴り上げてトラップでキーパーを躲す。

ロベルト（しまっ!!）

果南「ハアあああああっ!!」ドガアアアツ!!

ザシユウツ!!

ボールが落ちてきた所を、無人のゴールに果南のシュートが叩き込まれ龍也達は逆転した。

沼津 2 1 磐田

1 続く 1

After story：決勝戦 前半終了

果南のテクニックで2点目を取り逆転した沼津。磐田ボールで試合を再開する。

にこ「月宮!!」

ボールは矢澤に渡り、サイドの月宮にボールを蹴り出す。

果南「行かせないよっ!!」

果南が走り月宮との競り合いになる。男と女の筈なのに果南はフィジカルで勝り、ボールを確保した。

果南「よし、もう1点を……」「甘い!!」っ!!」

しかし果南が勝つであろうことを見透かしていたのか、桐生が走ってきてスライディングでボールを弾く。

月宮「ナイスカット! 行くぞ!!」

月宮がドリブルで攻め上がってくる。そこに、レイジさんがディフェンスに入る。

高橋「行かせんぞ!!」

月宮「来たな……にこさん!!」

ここで矢澤にボールを戻す。

にこ「澤村!!」

ここで澤村にボールを入れる。しかし背後から桜井と新条さんが二人で身体をぶつけて奪いに掛かる。

澤村「っ！ 女の子に大の男が2人掛かり!? でももう少し粘れば……」来た！ 菅原さん!!」

ここでキープしていたボールをサイドから走って来た菅原に入れる。しかしすぐに宮間がチェックに入る。

菅原「抜く!!」[ライトニングアクセル・V4]!!」

菅原の閃光の如きスピードのドリブルで抜かれた宮間。キーパーの木野先輩と1対1だ。

木野「っ!! 来い!!」

菅原「行くぞ!!」

ここで菅原がシュート体勢に入る。辺りが極寒の地に変わり、ボールが凍りつく。それをソバットキックで撃ち出し、氷の弾丸シュートが飛んでくる。

菅原「[ノーザンインパクト・GX]!!」ドゴオオオオオオオオオ!!」

木野「止めてやる!!」[太陽のギロチン・Z]!!」

最終進化の「太陽のギロチン」を放つ木野先輩。天から超高温の炎の刃が降ってきて

シュートに直撃。威力を削り取る。

ガアアアアアッ!!

木野「ぐっ!!」

しかし完全には受け止めきれずにシュートはゴールポストに直撃して跳ね返る。急いで新条先輩がキープするが、

月宮「ボールを奪う!!」

澤村「パスは出させないわよ!!」

新条「なっ!! コイツら!!」

二人がかりのプレッシングに捕まってしまった新条先輩。これには流石に奪われてしまい、澤村がシュートを放ってくる。

澤村「決める!!」ドガアアアッ!!

澤村の速度の速いシュートが迫る。木野先輩は何とか反応してパンチングでボールを弾き、ボールは浮き上がる。

久我「よし! クリアだ: 「甘いわよ!!」っ!?!」

しかし浮いたボールに対して、反応し跳躍した矢澤がヘディングでシュート。

木野先輩は体勢を立て直すことができずにシュートはゴールネットに吸い込まれた。

ここで、前半戦終了のホイッスルが鳴り、ハーフタイムで両チームベンチに戻る。

龍也「ふう、さすが決勝だな……」

春咲「向こうのちっこいMF、矢澤さんが司令塔なんですねぇ?」

果南「攻め方を見るにそうだろうね。確かにここにちゃんは観察眼は鋭いから性分に合ってるかも」

龍也「アイツは一緒に戦ってるだけで味方は動きやすいからな……」

山本「? アイツのこと知ってるのか?」

果南「はい。私と龍也と同じイナズマジャパンのメンバーですから」

木村「果南それ本当なの?」

果南「本当だよ?」

山本「高校生の大会とはいえ世界一の名は伊達じやないということか……」

監督「とりあえず矢澤を止めないと相手に好きに攻められてしまうな……なら久我、小木と交代だ。そしてボランチに大海が入れ。空いたFWに小木を入れる」

果南「中盤の守備強化ですか……」

監督「そうだ。大海、相手に隙があつたら「エクスカリバー」を放て」

龍也「分かりました」

メンバーチェンジ

久我 out ↓ in 小木

フォーメーションチェンジ

F W 小木 山本

M F 松浦 春咲

ボランチ 高橋 大海

D F 木村 新条 桜井 宮間

G K 木野

監督「よし、行って来い!!」

沼津『はい!!』

いよいよ後半戦が始まる。

沼津 2 1 2 磐田

1 続く 1

After story : 沼津 vs 磐田 後半開始!!

沼津はメンバーとフォーメーションを変更して後半戦に臨む。両チームフィールドに出て、磐田ボールで後半開始。

審判「後半開始!!」

ピイイイイーツ!!

審判の笛と共に磐田はボールを矢澤に渡し、ゲームを組み立てる。

ここ「大海を中盤のラインまで下げてきたわね・・・、どう攻めるか・・・瀬波!!」

ボールをサイドに振る矢澤。そこに山本さんと春咲がディフェンスに入る。

山本「行かせん!!」

春咲「ボールは貰うよ!!」

二人が連携してディフェンスを掛けるが、瀬波はディフェンスラインまでボールをバックパス。ボールは無方へ。

無方「全員上がれっ!!」ドツ!!

大きく前線へとボールを蹴り出す無方。ボールは逆サイドのFW月宮に渡る。

キック力ヤバいなあのDF・・・。

ボールを持った月宮に明日香先輩がディフェンスに入り、新条さんは中のケアに入る。

月宮「澤村さん!!」

ボールは澤村に渡り、シュートを放ってくる。が、

桜井「させるかつ!!」ガッ!

桜井が足を伸ばしてシュートブロック。ボールがこぼれる。

菅原「貰った!!」

今度は菅原がゴールの反対サイドを狙って鋭角にシュートを放ってくる。木野先輩は横っ飛びして腕を伸ばし、パンチングで何とか弾く。しかし体勢を大きく崩されてしまう。

にこ「貰ったわ!!」

そしてこぼれ球に詰めていた矢澤。シュートを放とうとした・瞬間!

大海「させつか!!」ドガアッ!!

戻ってきていた龍也が両足でボールを抑え込むようにシュートブロック。矢澤は吹っ飛ぶ。

にこ「くっ!!」

龍也「危ねー・・・」

沼津監督「大海!! カウンターだ!!」

ベンチから監督のゴーサインが出る。

龍也「オツケー!! 果南!!」ドツ!!

今度は龍也が前線に大きくボールを蹴り出す。ボールは果南に渡り、果南がドリブルで攻め上がる。

にこ「まづいわ! 皆戻って!!」

尚も攻め上がる果南。そこに支倉とロイスがとめに入る。

ロイス「止める!!」

支倉「行かせないですよ!!」

果南「押し通る!!」 「サイクロンズ・バミューダ!!」

果南の周囲が、いくつもの竜巻を抱えた大荒れの海原に変わる。相手デイフェンスを竜巻が飲み込み、そのまま海の中へと落とす。相手のデイフェンスを吹き飛ばして果南はアツサリと突破。果南はシュート体勢に入る。

果南がシュート体勢に入ると、果南の周りが大荒れの海へと変わり、竜巻が包んで上昇。竜巻の風が海の水を根こそぎボールに集約して、果南はそれを蹴り落とす。

果南「海神の裁き」!!」

ドゴオオオオオオオオオオ!!

巨大な水の塊が降ってくる。相手キーパーも必殺技で対抗する。

ロベルト「爆・ガラティーン」!!

ガカアツ!!

相手キーパーが右腕に発生させた光剣でシュートを叩き斬ろうとするが、シュートに飲み込まれて弾き飛ばされた。シュートはそのままゴールに突き刺さった。

果南「よしっ!!」

龍也「果南ナイスシュート!!」

にこ「やるわね・・・こっちも負けてられないわ!!」

磐田ボールで試合再開。

ボールは矢澤から桐生に渡し、そこに果南がとめに入る。

桐生「ウルトラムーン・S」!!

果南「!!」

桐生はキレイな宙返りで果南を突破。中の澤村にボールを出す。

高橋「大海止めるぞ!!」

龍也「はい!!」

龍也とレイジさんが止めに入る。しかし澤村はボールを菅原に振る。

菅原「ナイス!!」

宮間「止めるわ!!」

宮間がディフェンスに入るが、

菅原「ライトニングアクセル・V4!!」ギョオンッ!!

高速移動のドリブル技で抜かれてしまい、キーパーと1対1に。

近くにいた桜井が急いで止めに走るが距離が離れすぎている。

菅原「……にこさん!!」トツ!

しかしここで菅原は中の矢澤へとパス。矢澤にフリーで繋がってしまう。

にこ「ナイスパスよ!!」

矢澤がシュート体勢に入ると、炎を纏って回転して飛び上がる。そしてボールに爆炎

と超回転を掛けてシュートした。

にこ「超・爆熱スクリュー!!」

世界大会の時に、豪炎寺から教わった「爆熱スクリュー」。それを最終進化させて放つ

てきた。

木野「なっ!?! 止めっ……、ぐあああっ!!」

木野先輩が必殺技を出す暇まもなく、シュートはゴールネットに突き刺さった。

にこ「よしっ!!」

龍也「やるな・・・!!」

果南「まだまだ!! これからだよ!!」

木野「痛つつ・・・何だよ今のシュートは・・・?」

高橋「凄い威力のシュートだったな・・・」

新条「悪い・・・今度は止める」

そして沼津ボールで試合再開。ボールはレイジさんに渡り、そこに月宮がボールを奪いに掛かる。

高橋「抜くっ!!」

レイジさんは右に躲した。

高橋「甘いな!!・・・甘いのはそっちよ!!」何っ?!

しかし、今の月宮のプレッシングは誘導。敢えて矢澤のいる方に抜かせて奪い取るためだったのだ。

にこ「もう1点頂きよ!!」

矢澤がドリブルで攻め上がり必殺シュートを放とうとする。

木野「デイフェンス!! コースを塞げ!!」

新条・桜井「分かった(りました)!!」

二人が矢澤にツインスライディングを仕掛ける。矢澤は跳躍して躲すが体勢を崩されたため、必殺シュートは撃てない。

ここ「くっ!! でも!!」

苦し紛れの矢澤のシュート。だが、キーパー正面で木野先輩がガツチリとキャッチした。

木野「もう1点もやらないぞ!!」

沼津 3 1 3 磐田

1 続く 1

After story：静岡選手権決着　そして再び

木野先輩がディフェンスと連動して矢澤のシュートを止めた。ゴールキックから一気にも前線へとボールを蹴り出す。

木野「オフエンス上がれ!!」

飛んだボールは春咲へ。そこに瀬波が止めに来る。

春咲「どきやがれ!!」「真・ジャツジスルー2!!」オラオラオラあつ!!」

春咲の蹴りがボール越しに相手の腹に何発も叩き込まれる。最後に両足で蹴り飛ばし、ディフェンスは吹っ飛んだ。

・・・性格悪っ!!　なんてえげつねえ・・・。

春咲「山本せんぱーい!!」パスッ!!

春咲から山本さんにパスが通る。今更可愛子ぶつてももう遅いとおもうけどなあ・・・。

ボールを受け取った山本先輩はシュート体勢に入る。足を大きく振りかぶり、渾身の力でボールを蹴り飛ばす。

山本「ライガーマグナム・改」!!

ズドオオオオンツ!!

山本先輩の必殺シュートが物凄い勢いでゴールを襲う。ロベルトも必殺技を発動し、

ロベルト「爆・ガラティーン」!!

バチイツ!!

しかしボールは弾かれ、飛んだ先には支倉が。

支倉「オーライ・・・させないよっ!!」(っ!) なんてフィジカル!」

しかし果南がルーズボールの競り合いに打ち勝ち、ボールを確保する。

果南「小木くん!!」

そして果南は後ろから走って来た小木にノールックでバックパス。ボールを受け取った小木はシュート体勢に入る。

小木「極・ガンショット」!!

小木のドリルのような回転が掛かった必殺シュートが上空からゴールに襲い掛かる。

ロベルトは急いで体勢を立て直し、必殺技で対抗する。

ロベルト「爆・ガラティーン」!!

バチインツ!

しかしこれも弾かれ、飛んだボールはサイドラインを割って外に出た。

沼津ボールのスローインから試合再開。宮間の投げたボールは春咲に渡り、瀬波と無方がプレッシングを掛けると、春咲はボールをパスする。受け取ったのは……、

龍也「ナイスパス!!」

にこ「行かせないわよ大海!!」

しかしすぐに矢澤がデフエンスに入る。お互いの実力をよく知っているため、最初から全力で挑む。

先手を取ったのは龍也。いきなり最高速のドリブルで抜きに掛かるが、読んでいたのか矢澤もすぐに並走する。

にこ（恐らくここらへんでターンして躲すはず!!）

龍也は相手のスピードを利用してターンして距離を取ろうとする。が、

にこ（大当たり!!）貫うわ!!」

矢澤の足がボールに伸びる。が、

龍也「よつと!!」

しかしターンをすると見せかけて途中でストップ。そのままドリブルを再開する。

にこ（!! このスピードでなんでそんなことできるのよ!?!）

矢澤を抜いた龍也はシフト体勢に入る。ボールを軽く上に上げ、両足で挟んで身体を捻ってスピンを掛けて空気摩擦で着火。そのまま身体を回した勢いでソバットキッ

クを叩き込む。

龍也「絶・デスファイア」!!」

死の業火を纏ったシュートがゴールキーパーに襲い掛かる。キーパーは必殺技で対抗するが、

ロベルト「爆・ガラティーン」!!」

光剣がシュートを両断しようとするが、逆に剣のほうドロドロに溶けていき、シュートはゴールに突き刺さった。

龍也「よし!!」

果南「やった!!」

ここ「やられたわね・・・」

そして磐田ボールで試合再開。ボールは矢澤へ。

ここ「澤村!!」

澤村「ナイスです!! 菅原さん!!」

澤村は菅原にパスをだすが、

宮間「甘い!!」

宮間がパスカット。そのまま前線へとボールを蹴り出す。

春咲「ナイスだよ!! 大海くん!!」

龍也「よし、行くぞ・・「持たせる訳ないでしょ!」っ!」

しかし読んでいた矢澤がカット。ボールを月宮に蹴り出す。

木村「甘いです!!」

しかし明日香先輩が空中で胸トラップしてカット。果南にパスする。

果南「よしっ、小木くん!!」

小木「オーライッ!」

支倉「させませんよっ!!」

しかし、トラップの瞬間を狙って支倉にスライディングでカットされる。

お互いに一歩も引かない攻防に、時間だけがどんどん過ぎていく。

ここ「(このままじゃあ・・) 桐生! こっち!!」

桐生「にこさん!!」

ボールは矢澤へと渡り、ドリブルで攻め上がってくる。

高橋「っ!! 止める!!」

ここ「アンタじゃ無理だって言ったでしょ!! 「スーパーエラシコ・S」!!」

ここで矢澤のドリブル技は最終進化。アッサリとレイジさんを抜き去り、シュート体

勢に入る。

にこ「ここで決めるわ!!」 「超・爆熱スクリュー」!!」

凄まじい業炎を纏い、超スピンの掛かったシュートがゴールを襲う。

新条先輩は飛び上がり、身体を張ってシュートブロックする。

新条「止め・る!! 絶対に勝つ!!」

しかし多少の威力は削いだ物の吹き飛ばされてしまい、ボールは更に突き進む。

桜井「新条先輩ナイスです!! 後は俺たちが!!」

宮間「止めます!!」

桜井・宮間「アルティメットストーム「究極暴風撃・G4」!!」

ここで進化した「究極暴風撃」が「爆熱スクリュー」に襲い掛かる。シュートの威力はどんどん減衰する。しかしそれでも突き破られてしまう。

試合終了まで後僅かだ。

木野「これだけブロックすれば止められる!!」 「炎の鉄槌・乙」!!」

ドグシヤアあああああっ!!

木野先輩は炎の魔神を呼び出し跳躍。魔神と共に、燃える右拳でシュートを上から叩き潰した。

ピッ、ピッ、ピイイイイーッ!!

そしてここで試合終了のホイッスル。4-3で沼津の勝利。

と同時に、俺たちの静岡選手権優勝が決まった。

小さな物かもしれないが、沼津初のタイトル獲得に先輩たちは皆大喜び。俺と果南も嬉しかった。

そして表彰式が終わり、今日の夜は……、

監督「諸君!! 今日チームの優勝を祝って、スポンサーの方達が祝勝会を開いて下さったぞ!! 感謝して頂こう!! それでは? 肉を食う準備はいいか——っ!!」

沼津『うおおおおおおおおおお!!』

そして俺達は肉を次々と注文し焼いていく。皆美味そうに食べていく。

高橋「ほら大海、もつと食え!! お前が立役者なんだから!!」

龍也「いや、先輩たちが食べるべきでは……」

山本「良いから!! これからの沼津をプレーで引っ張ってもらわないと!!」

この酔っ払い共め……、

新条「松浦も食って良いぞ?」

果南「もう食べてます」モグモグ

春咲「今日の試合、果南先輩と大海くんスゴかったよね!!」

リリア「うん!! ベンチで見てたけど、私も出たかったなあ……」

上原「木野さん、お疲れ様です……」

A f t e r S t o r y : プロの舞台で!! W杯編

A f t e r s t o r y : 日本A代表結成!!

静岡選手権に優勝してから数日後、龍也と果南はサッカーの道具を持って東京の日本A代表合宿所に来ていた。

龍也「ここか……」

果南「き、緊張する……」

時計を見ると、代表の監督との約束の時間までは30分くらいある。今日は全員が顔を合わせた後、代表メンバー決定の記者会見が行われるらしい。

すると……、

? 「あれ? 龍也さんと果南さんですか?」

? 「やっぱりお前たちも選ばれていたか」

声のした方に顔を向けるとそこには見知った顔が。

龍也「立向居! 鬼道! 久しぶり。元気そうだな?」

立向居「ご無沙汰してます!」

果南「二人共久しぶり!!」

鬼道「ああ。お前たちもな……おっと、噂をすれば……」

鬼道が見た方向を見ると、俺たちが知っている顔が結構いた。

にこ「この間ぶりね果南、大海！」

聖良「お久しぶりでず皆さん」

吹雪「やつぱり皆も選ばれたんだね？」

不動「よっ!!」

佐久間「俺たちも呼ばれたよ。鬼道、またお前と一緒に闘えることを嬉しく思うよ」

鬼道「ああ。俺もだ佐久間」

風丸「おっ、海外組の到着みたいだぜ？」

風丸の視線の方に目をやると、俺たちの見知った3人が歩いてきた。

ツバサ「ヤッホ！」

円堂「よっ！ みんな久しぶり！」

豪炎寺「やつぱりお前たちは選ばれたか……だが、高坂や高海、渡辺はいないようだ

な……」

龍也「そりゃあそうだろ？ あの3人はそれぞれ実家を継いだり小さい頃からの夢叶

えたりしてサッカーから離れたからな……」

ツバサ「綱海くんは？ 確か日本リーグにいたでしょ？」

果南「多分選ばれてると思うけど……遅刻じゃない？」「だくっ!! 間に合ったぁー!!」あつ、噂をすれば」

息も絶え絶えといった感じて綱海が走ってきた。

龍也「久しぶり。間に合ったぞ？」

綱海「おう!! お前から久しぶりだな!!」

龍也「つていうか、イナズマジヤパンから14人か……」

すると、合宿所の扉が開き、日本代表の監督さんが出てきた。

？「揃ってるな？ 私が監督の森島だ。早速だが、これから残りの代表メンバー5人と対面してもらおう。付いて来い」

そして監督と一緒に俺たちは中に入る。すると大きな扉の前に止まり、監督が話し始める。

森島「ここはミーティングルームだ。他のメンバーはこの中で待っている。入れ」

そして監督が扉を開けたので全員中に入る。

すると中にいたのは……、

？「おつ、来たな……」

？「監督も凄い人選するよな……」

あつ、あの人たちは……

日本代表ゴールキーパーの権代ごんだいさんに、

ミッドフィールダーの三河みかわさん。

ミッドフィールダとフォワード両方できる東野ひがしのさんに、堂峯どうみねさん。

後はキャプテンでディフェンダーの吉川よしかわさん!!

森島「今ここにいるメンバーが日本代表の19人だ。これから開催されるアメリカW杯を共に戦っていくことになる。じゃあまずはお互いに自己紹介から」

そしてお互いに一人ひとり自己紹介していく。そして全員が終わり、

森島「では代表ユニフォームを渡すので着替えてこい。30分後に記者会見を行う」

日本代表『はい!!』

そして各自男子更衣室と女子更衣室に別れて代表ユニフォームに着替える。そして会見を待っていると……、

吉川「最初にお前らに言っておく。プロの舞台の世界のサッカーは、高校生の時とは全く違う。甘く見てると予選突破すら不可能だ……全員、普段の練習から死ぬ気で掛かれ。いいな!!」

俺たちは顔を見合わせ、

元イナズマジヤパン組『はい!!』

そう、しつかりと返事をした。

そして会見が始まり……、

パシャ　パシャツ!!

記者「えー……、監督はどういうコンセプトでこのメンバーを選んだのでしょうか？」
森島「はい、選抜のコンセプトは日本の新世代への継承です。現役の代表のメンバーから、新世代の強力な選手へと技術とチームのタスキを継承し、渡すことをコンセプトにしました」

そして監督が答えると、司会が次の質問のある記者を探す。手を挙げた記者に言葉を促す。

司会「ではこの質問を最後にさせて頂きます。どうぞ……」

記者「えー……、今回日本リーグの、しかもJ3の選手を2人も起用したことについて、世間からは“大会を捨てた”との見方もありますがどのようにお考えですか？」
は？　そんなこと言ってる奴らがいるのか……。

見ると果南は平静を装っていたがこめかみがピクピク動いていた。

龍也（あつ、ちよつとキレてる……）

森島「えー……結論から言つて、“大会を捨てる”などということは全く考えていま

せん。それどころか優勝するために2人を起用しました。優秀な選手はJ1か海外にしかないと思っっているのなら、その方はサッカーにおける見識が狭いも良いところですよ」

数人の記者が驚いたような表情に変わる。その記者たちは思ってたんだな……。

森島「私がこのメンバーを選んだ目的はW杯での”優勝”、それしか眼中にはありません。それを履き違えないでいただきたい！」

記者「しかし実績もない選手を入れるというのは中々納得できませんよ!？」

森島「ならば大会が始まってからの選手たちのプレーで判断していただきたい!! 私は、大会が終わったあと、”間違っていたと”想うのはあなた方だと確信しています!!」
言ってくれるなこの監督は……なら、その期待を裏切るわけには行かないな!!

果南（龍也……）ボソツ

龍也（?）

果南（絶対にアイツラにギャフンと言わせてやろうね?）

龍也（……ああ!!）

そして、記者会見は終わった。この後どう転ぶのか、今はまだ神のみぞ知る……。

― 続く ―

A f t e r s t o r y : アジア予選開幕！ v s ベト ナム（その1）

新たな日本代表が結成され、記者会見を行なった数日後、いよいよ今日からアメリカW杯のアジア予選大会が開幕する。

予選はリーグ戦形式で行われ、上位2チームが本大会に駒を進める。

今日は日本代表の最初の試合、日本 v s ベトナムの試合が行われる。試合が行われる、神奈川にある横浜サッカースタジアムには大観衆が詰め掛けていた。

王将『お聞きくださいこの歓声を！ いよいよアメリカW杯アジア地区予選大会の日本代表の初戦が始まるうとしています！ 森島監督の選んだメンバーが、果たしてプロの世界にどれだけ通用するのか!? 注目したいところです!!』

解説「そうですね：おつと、今両チームスターティングメンバーが発表されました!!」

スターティングメンバー

ベトナム

G K

アルマ

く。

豪炎寺と堂峯さんがセンターサークルに入ると、審判の笛が鳴った。

審判「キックオフ!!」

ピイイイイーッ!!

試合開始の笛がなり、日本ボールのキックオフから試合開始。ボールはまずは吉川さんに渡り、ボールを回してチャンスを伺う。

吉川「不動!!」

不動にボールが渡った所に、リーマが止めに入る。その後ろにはセリがすぐにフォローに行ける位置に陣取っている。

不動「このくらい!!」

不動は細かいボールタッチのフェイントを仕掛けてリーマを抜き去る。しかし当然セリがフォローに来る。

不動「()は戻すか……」吉川さん!!」

ここで不動はボールを横に出すと、上がってきた吉川さんが受け取りドリブルで上がっていく。

吉川「よく見てたな!! 松浦!!」

今度は吉川さんから逆サイドの果南に横回転パスが飛ぶ。果南がトラップしたところに、DFのナハトウとボランチのアイルが2人で挟みに行くが……、

果南「ここはキープだね……」

果南は2人を相手にボールをキープすることを優先する。ベトナムディフェンスは果南から中々ボールを奪えない。

ミーセル「速く奪え!! 右サイドもつと中に絞れ!」

ベトナムの右サイドの選手が中央に寄ってくる。

果南(そろそろかな?) パスッ!

果南はここでサイドライン目掛けてバックパス。ボールが外に出る寸前で……、

風丸「ナイス!」

ディフェンスラインからオーバーラップしてきた風丸がボールを受け取りそのまま上がる。ナハトウは急いで風丸を追いかけるが風丸の俊足に振り切られる。

ハルクス「くそっ!!」

ベトナムの最終ラインのハルクスが止めに入るが、ここで風丸はパスを選択。中に
インサイドスピン
 内回転のセントリングを上げる。

豪炎寺「ナイスだ風丸!!」

豪炎寺が炎を纏いながら跳躍する。そしてスピント爆炎を纏わせ、必殺の直蹴撃弾ダイレクトシュート

!!

豪炎寺「超・ファイアトルネード」!!」ドゴオおおおっ!!」

豪炎寺のシュートが至近距離でベトナムのキーパーに襲い掛かる。

アルマ「止めてやる!」「爆・ジャングルガーデン」!!」

アルマの必殺技で背後に密林が出現。その中にシュートが吸い込まれると、入り口が閉じてシュートは閉じ込められる。そして森が暗れると、シュートはキーパーの手に収まっていた。

王将『止めたあつ! キーパーナイスセーブ!!』

豪炎寺「(やはりファイアトルネードではダメか……) スマン! 次は決める!!」

そしてキーパーのゴールキックからボールはレマに飛ぶ。しかし鬼道がすぐに落下地点に駆け付けて身体をぶつけ合って競り合う。

ドガアアアツ!

鬼道「よしっ!」

ボールを確保した鬼道は果南にパスを出す。すると果南にナハトウが止めに入る。

果南「抜く!」「マーメイドダイブ・S」!!」

果南とナハトウの周囲が海の中に変わり、果南はボールを足で挟んでドルフィンキックの高速機動を展開。ナハトウを抜き去った。

ハルクス「この!!」

ザナ「止める!!」

ザナとハルクスの2人が果南に向かってくる。しかしここで果南は、

果南「……堂峯さん!!」

果南は豪炎寺ではなく堂峯さんにパスを出す。マークを振り切つて上がつて来ていた堂峯さんは完全にフリー。大チャンスだ。

堂峯「よく見てた!!」ドガアアアンツ!!

果南のパスに合わせた、堂峯さんの必殺シュート並みの威力の直蹴撃弾ダイレクトシュートがゴールを襲う。

アルム「クソっ!!」バツ!!

バチンっ!!!

技を出す暇など無かったキーパーは横つ飛びして何とかボールに触るが、余りの威力に弾かれてボールはゴールに突き刺さった。

その瞬間、日本サポーターからの大歓声がスタジアム中に沸き起こる。

王将『ご、ゴーリーール!! 日本先制ーーっ!!』

解説「松浦もよく見えてましたね……背後から来ていた堂峯に素晴らしいタイミング

でパスを出しました」

王将「さあ、ベトナムのキックから試合再開です!!」

ミーセル「まずは1点返していくぞ!!」

ベトナム『おう!!』

ピイイイイーーツ!!

そして再開のホイッスルが鳴り、ベトナムはボールを中盤のセリに戻すと様子を伺いながらパスを繋いで着実に攻め込んでくる。

リーマ「ミーセル!!」

リーマからミーセルへの縦のパスが転がる。すると、

不動「甘めえ!! 奪取!!」ジャッカル ドガアッ!

不動がボールを受け取ったミーセルに背肩奪取。ショルダーチャージ ボールとミーセルの間に身体を入れて妨害し、相手の背後のスペースにパスを出す。

三河「よく見てたな!!」パシッ!!

不動の背後からオーバートラップしてきていた三河さんがボールをトラップし、得意のドリブルで駆け上がる。一気にトップスピードに乗りベトナム陣地に切り込んでいく。

カエリ「止めるぞ！」

ザナ「おう!!」

ベトナムディフェンスの2人が、連携して三河さんにプレッシャーを掛けるが、三河さんの細かいタッチとドリブルリズムの緩急、そして巧みな腕ハンドワークの使い方を組み合わせた緻密なドリブルは、呆気なく個人技のみでそれを崩して突破した。

これがプロの世界レベルのドリブルか!!

三河「決めろよ!!」ドガアツ!

三河さんから中へのセンチタリング。豪炎寺がそれに合わせて回転し、炎を纏いながら跳躍する。しかし先程とは熱量も回転数も比べ物にならない。

豪炎寺「超・爆熱スクリュー!!」ドガアアアアツ!!

FFIの頃とは明らかにパワーの桁が上がっている豪炎寺の”直接ダイレクト「爆熱スクリュー」”。キーパーは当然必殺技で対抗する。

アルマ「爆・ジャングルガーデン!!」

アルマの必殺技で再び密林が出現。シュートは中に突入すると密林の入り口が閉じる。

だが……、

ボオオオオアアツ!!

密林が森林火災を起こしたように燃え上がると、豪炎寺のシユートはアルマを弾き飛ばしてベトナムゴールに突き刺さった。

日本 2 1 0 ベトナム

1 続く 1

After story : アジア予選開幕! vs ベトナム (その2)

三河さんの華麗なドリブルテクニクによるディフェンスのゴボウ抜きからの豪炎寺の必殺技で点差を2点に広げた日本代表。

ベトナムのキックから試合再開する。

ミーセル「1点ずつ着実に返していくぞ!!」

ベトナム『おう!!』

ピイイイイーツ!!

審判の笛が鳴り試合再開。ボールはアイルに渡りレマとカトウムがすぐにお互いにフオローに行ける三角形の位置取りをしてパスを回して攻め上がってくる。

ボールはレマに。

果南「私が行きます!!」

ボールを持つレマに対しての果南が止めに入る。しかし、

レマ「アイル!」

アイル「カトウム!」

パスでボールを繋いで果南を躲す。カトウムにボールが渡ると鬼道と風丸が止めに入るが、

カトウム「レマ！」

ここでカトウムはボールを一旦戻し、ゆつくりと組み立てる。ボールを持ったレマに鬼道がプレスを掛けに行くと……、

ミーセル「チャンス!!」

空いたスペースにミーセルがダイアゴナルランで走り込んでくる。聖良と綱海は急いで追い掛けるが左サイドのディフェンスが手薄になってしまう。

レマ「ほら決めろ！」パスッ!

しかしボールはミーセルではなく誰もいない左サイドに……すると、

アイル「ナイスだ!!」

何とボランチのアイルがミーセルと交差するように二発目のダイアゴナルランで走り込んできた。ボールは完全にフリーで渡り、ベトナムに決定的なチャンスを与えてしまう。

聖良「しまっ?!」

アイル「喰らえ!」 「サウザンドアロー・乙」!!」

アイルのシュートで、千本近い雨の様なシュートが降り注ぐ。

権代 「くっ!!」

しかしこんな完全なフリーで間髪入れずに撃たれては技を出す暇などなく、権代さんは弾き飛ばされてシュートは日本ゴールに突き刺さってしまった。

王将 『ゴー—ールツ!! 入ってしまったあ!! ベトナム一点を返したあっ!!』

解説 「ベトナムのダイアゴナルランに振り回されましたね……。場数の少なさが出てしまいましたかね……」

聖良 「……スミマセン」

綱海 「すんません権代さん……」

権代 「もう少し周りを見る。デیفエンスラインでスペースを開けてしまうことはそこを突かれたら失点の可能性が一気に高まる事を意味している。世界レベルの試合では特にな……。切り替えろ! もう一点もやらんぞ!!」

聖良・綱海 「はい!!」

今度は日本ボールのキックから試合再開。ボールは鬼道に渡ると、ドリブルで攻め上がる。

すると右サイドの果南が走る。パスを察知したアイルは果南を追う。

アイル 「読めてんだよ!!」

しかし、人間の目は全く方向の違う2方向を同時に見ることは不可能。アイルがボールの位置を確認するためにボールの方に意識を向けた瞬間、

果南（ここっ!!）

果南はアイルの死角を取って反対方向にステップ。次にアイルが果南の方を見たときには果南はいなかった。

アイル「っ！ こっちか!!」

アイルは急いで果南のいる方を見るが、視線の向きを察知した果南は、

果南（今だっ!!）タンツ!

ここで更に逆方向へと切り返す。完全に果南を見失ったアイルを置き去りに、鬼道からのパスが果南に通る。

アイル（っ！ コイツ俺の死角を突いて!!）

ザナ「何やってんだ!!」

ナハトウ「止める!!」

急いで陣形を立て直すベトナム。ザナとナハトウの2人が止めに入るが、

果南「堂峰さん!」

果南は堂峰さんにパスを出す。しかしベトナムの最終ライン、ハルクスが走り袋小路に追い込まれる。

ハルクス(よし、シュートは撃てないハズ!)

堂峯(ここだ!) トツ

ここで堂峯さんはゴール手前でゴール前に低空^{グラウンダー}パス。走り込んできたのは、

豪炎寺「決める!!」ドガアツ!

至近距離で豪炎寺の直蹴^{ダイレクトシュート}撃弾がゴールの右隅に放たれ、アルマは反応したがボールは伸ばした手の10cm遠くを通過。ゴールに突き刺さった。

王将『ゴールつ!! ベトナムの得点からわずか2分で日本追加点!! 点差を2点に戻したぞおつ!!』

解説「いや、鬼道からのパスを受け取る前の松浦の動き出しが素晴らしかったですね。巧く相手の死角を突いてフリーでボールを受けとってチャンスを作りました。あれでJ3だというのだから信じられませんよ……」

解説も果南を大絶賛していたらしい。

アイル「わ、悪い……」

ミーセル「いや、アレは相手が巧すぎたな……。松浦にはカバーに行ける様に最低2人で止めに入れ」

ベトナム『はい!!』

王将「さあ前半も残り時間が少なくなってきた……。果たしてベトナムが1点差に追い

上げて前半を終えるか？ それとも日本が突き放して3点差にして前半を終えるか？
はたまたこのまま2点差で終えるか？」

ピイイイーッ！！

ベトナムボールのキックから試合再開。

ボールはカトウムに渡り、ドリブルで攻め上がってくる。

カトウム「なんとしても1点差で前半を終えてやる!!」

果南「行かせないよっ!!」

果南がすかさずデیفエンスに入る。しかしサイドバックのナハトウがオーバードラップしてきて縦のパスがナハトウを通りそのままサイドラインに沿って駆け上がる。

風丸「行かせるか!!」

ここで風丸が止めに入る。ゴール前へのドリブル・パスコースを身体で塞ぎながらプレッシングを掛けて袋小路へと追いやるようにデیفエンスを掛ける。

カトウム（っ！ クソっ！）クルッ

カトウムは切り替えしていったん後ろに戻す。ボールはアイルに。

アイル「ミーセル！」

アイルからの大きなサイドチェンジパス。ここでボールはミーセルに渡り、三河さんとの1vs1になる。

ミーセル「(よし) リーマー! レーマー!

ここで後衛の2人が再び交差するようにダイアゴナルラン。しかし、

吉川「レマには俺が着く! 鹿角はシュートのケア!!」

聖良「っ! はい!!」

ボールはレマでもリーマでもなく、中に入ってきたカトウムに渡り、必殺シュートを放ってくる。

カトウム「爆・ダブルショット」!!」ドガアアアッ!

キック2発分の威力を一つに凝縮したシュートが飛んでくる。しかし、

聖良「これ以上は入れさせません!!」超・スノーマウンテン」!!」ガキイイイインッ

!!

聖良の呼び出した雪山がシュートのオーラを凍結。その後で壁によるブロックが入りシュートは完全に停止した。

聖良「よしっ! 不動くん!!」

聖良から不動へとパスが飛ぶ。だが、

ピッ、ピイイイーッ!!

王将『ここで前半終了のホイッスル!! 日本代表、2点差のリードで折り返しです!!』
解説「日本も1点は失いましたが、自分たちのペースは作れてたと思いますね。後は

若い世代が、”プロの世界レベルにどれだけ速く適応するか”が鍵になってくると思いますね！」

ー 日本ベンチ ー

龍也「皆お疲れ様……」

鬼道「ああ……」

不動「リードしてるとはいえ、レベル高けえな……やっぱり」

聖良「相手のダイヤゴナルランに2度も引つ掛かる所でした……吉川さん、ありがとうございます」

吉川「ああ。だが、いずれは自分で対処できるようにならないとダメだからな？」

聖良「はい！」

森島「よし、前半はいい感じだったと思うぞ。後半はメンバーを変える。豪炎寺、大海と交代だ。不動も東野と交代。前半以上に点を取って行くぞ！」

日本代表『はい!!』

日本メンバーチェンジ

F W 大海 堂峯

O M F 東野 松浦

D M F 吉川 鬼道

D F 三河 鹿角 綱海 風丸

G K 権代

審判 「後半の開始です！」

吉川 「行くぞ!!」

日本代表 『おう!!』

いよいよ、後半戦が始まる。

― 続く ―

After story：ベトナム戦 後半戦

前半を終了し、3ー1と日本が2点差でリードでいよいよ後半戦が始まる。両チームプレイヤーはフィールドに出る。

龍也「よし……」「龍也！」 果南……」

果南「……頑張ろうね!!」

龍也「……おう!!」

選手がそれぞれ位置に付き、審判が笛に口を当てる。

審判「後半戦開始!!」

ピイイイイーッ!!

ベトナムボールで後半戦の開始。ボールはリーマに渡り、リーマは大きくボールを前線に蹴り出す。

リーマ「行けっ!!」 ドツ!

ボールは大きな放物線を描き、聖良と綱海の間辺りに落ちてくる。

綱海「俺が行く!」 鹿角はフォロー頼む!!」

聖良「分かりました!!」

センターバックの2人がキチンと声を掛け合ってどちらが行くかの意志を伝え合う。そして綱海とカトウムが競り合う。

カトウム「っ！ おらっ！」

ガツ！

綱海「くっっ！」

しかし綱海は競り負けてしまい、カトウムはヘディングでボールを下に落とす。そこにレマが走ってきてボールを受け取る。

レマ「よし：「させん!!」っ！」

鬼道がレマの後ろからプレッシングを掛けに行く。レマが辺りを見回してパスターゲットを探す、全員ピツタリとマークされていた。

レマ「っ！ パスは出せないか……なら自分で突破だ!!」

レマがドリブルで攻め上がる。その間に鬼道が後ろから前に回り込んで対峙する。

レマ「抜く！」

レマはシザースやダブルダッチ等のフェイントを仕掛けて抜きに掛かる。しかし鬼道のディフェンスは一向に崩れない。

レマ（くっ、抜けない!!）

すると、

吉川「そこっ!!」バチインっ!!

吉川さんが駆け付けてボールを弾き、こぼれ球を綱海が抑える。

綱海「よし……東野さん!!」ドッ!

綱海がボールをカウンターで大きく前線へと蹴り出す。ボールはサイドを駆け上がった東野さんに飛び、ライン際で柔らかいキルトラップでボールの勢いを殺して足元にも収める東野さん。

東野「よしっ!! 行くぞ!!」

その瞬間、龍也は走り出す。デイフェンダーのカエリが並走して追い掛けるが、やはりボールの位置は確認しなければならない。

龍也（ここっ!）

龍也は果南と同様に相手の死角に回り込む。相手が龍也に視線を戻したときにはそこから側にはおらず……

カエリ「っ! 反対側か!」

カエリが逆方向に視線を向けると、

龍也「（今だ!）ヘイ!!」

龍也が相手を完全に振り切ってフリーでボールを要求する。東野さんは迷わずに龍也にパスを出す。

東野「いい動きだ大海!!」ドツ!!

パスを受け取った龍也。しかしハルクスが止めに入る。

ハルクス「(ゴールまでは30メートル近くある。まだ撃てないハズ……) 止める!!」
だが、

龍也「おらあああつ!!」

ドゴオオオオツ!!

ゴール前30メートル付近からの右足の豪快なミドルシュート。ボールは凄まじい威力と速度でベトナムゴール右上隅に飛んでいく。

アルマ「っ!? このっ!!」バツ!

キーパーのアルマは龍也のシュートを止めようと手を伸ばして跳躍するが、緩やかなカーブを描いて飛んできた龍也のシュートは撃つてからゴールまでに殆ど速度も衰えずに、キーパーの手を素通りしゴールネットに突き刺さった。

王将『……………っ! ゴ、ゴオオオオオオオオオオ!! 30メートル近い距離をミドルシュート一閃!! 凄まじい威力でベトナムゴールをこじ開けたあつ!!』

解説「何ですかね今のシュート? ノーマルシュートであんなの世界でも数えるほどしかありませんよ? (苦笑)」

解説の方もあまりの弾丸つぷりに逆に言葉が出なかった。

龍也「おっしやあああああああああつ!!!」

果南「龍也ナイスシュート!!」

鬼道「さすがだな大海」

堂峯さんたちは……、

堂峯「なんだよ今の……」

三河「堂峯のノーマルシュートと同じくらいの威力……いやそれ以上か?」

東野「驚いたな……」

日本代表の反応も様々だったが、やられたベトナムはそれどころではない。

ミーセル「なんだよ今のシュート……」

カトウム「狂ってる……。あれでノーマルシュートだと……?」

カエリ「悪い……アイツを見失っちゃった」

ミーセル「松浦のときのアイルもそうだが、アイツらひよつとしてコチラのディフェンスの死角を狙って?」

カエリ「ああ。ボールの位置を確認しようとして視線をずらした間に逆方向に回り込まれた」

アイル「松浦もそうだ。俺もそれでやられたんだ……」

ミーセル「とにかく、ボールを持つていないときの動き出しを警戒すること。油断しているとまだ死角を突かれるぞ！」

ベトナム『ああ（おう）……』

そしてベトナムボールで試合再開。ボールはアイルに渡り、堂峯さんが前線からディフェンスを掛ける。

レマ「アイル!!」

アイルが走る。しかし果南はピッタリとマークについて並走する。

果南「出させないよっ!!」

果南がボールの位置を把握するために視線を外す。

アイル（今だっ!）

アイルはお返しとばかりに反対側に回り込む。しかし、

果南「ジューツ」

アイル（っ!? ボールから視線を外さない!?)

なかなかボールから視線を戻さない果南。そのせいで折角死角に入った……と思ったのだが、自分からまた視線の範囲に入ってしまった。

しかも最悪なことにレマは、アイルがマークを外せたと早とちりし、ボールを蹴り出

してしまう。

アイル「くっ!!」

果南「貰ったあ!!」パシッ!

ボールをカットした果南。果南はボールを龍也にパスする。

龍也「ナイス!」

その瞬間ベトナムディフェンスは警戒レベルをMAXまで引き上げる。

カエリ「止める!!」

龍也とカエリの1vs1。しかし龍也の三河さんにも劣らない練度のドリブルテクニクにカエリは抜かれてしまった。

カエリ「くそっ!! 止めてくれえっ!!」

必死に止めようと、ザナとハルクスが2人で止めに入る。

ザナ「止めるっ!」

ハルクス「撃たせんっ!!」

2人がディフェンスに入るが、

龍也「甘いな……」トッ

龍也は二人の間に軽くボールを蹴って転がした。そこに走り込んできたのは……

果南「ナイスパスっ!」

1 日本
続く 5
1 1
1
ベトナム

After story : 決着! ベトナム戦!!

果南の必殺シュートがベトナムゴールに突き刺さり、5-1と日本代表がリード。ベトナムボールから試合再開し、ボールはカトユムに。

堂峯「行かせねえ!」

堂峯さんがすぐにプレッシャーを掛けに行く。するとカトユムはレマにバックパスする。

レマ「よし……ミーセル!!」ドツ!

レマから逆サイド前線へのロングパス。ボールは大きな放物線を描いて飛んで行く。

東野「させるかつ!!」

ミーセルと東野さんが跳躍して競り合う。パワーは互角でお互いに弾かれたが、セカンドボールを三河さんが抑えた。

三河「行くぞ……!」

三河さんがドリブルで攻め上がる。リーマとセリが止めに入るが、三河さんの鮮やかなドリブルテクニクに抜かれる。

そのまま一気に駆け上がり、あっという間にセンターラインを越える。

カエリ「行かすかつ!!」

カエリが急いで止めに入る。しかし、

三河「……………」トツ

カエリの大きく空いた股下にボールを転がして抜いた。股抜きだ。

カエリ「っ?!」

三河「中走れ!! っ!!」

しかし、センターバックのザナが不意についてスライディング。三河さんは倒されてボールは外に出る。

審判「レフェリータイム!!」

審判が三河さんに「大丈夫か?」と声を掛ける。三河さんは立ち上がるが痛そうだ。

結果、日本はフリーキックを獲得。キッカーの位置には東野さんと龍也が立った。

ベトナムも選手を壁にしてフリーキックに備える。

ピイイイイーッ!!

審判の笛と共に東野さんと龍也が走り出す。ここで東野さんがスルー。蹴ったのは

……

龍也「フツ!!」ドガアアアアツ!!

龍也の右足から蹴られたボールは、壁の頭上を越えそこから突然の急降下。そして

キーパーから逃れるように外側へと逃げていく。

龍也「無揚力蹴弾!!」
ジャイロシュート

アルマ「っ! クソつたれ!!」バツ!!

ゴールの反対側に立っていたアルマは急いでボールに向かうが、龍也の超速度のシュートはアルマがボールに手を伸ばして跳躍する前に、既にゴールの内サイドネットに突き刺さっていた。

王将『ゴオオオオオオオオオオ!! 日本、フリーキックからの大海の右足一閃! 後半から途中出場の大海、2点目だあつ!!』

解説「……………」

解説も言葉を失っていた。

ミーセル「くそ! 6ー1か…………」

アルマ「スマン…………」

ベトナムの雰囲気はかなり悪くなってきていた。

一方…………、

果南「龍也ナイスシュート! 筋力とフィジカルアップの基礎トレーニング、足回りのテクニク向上の練習を1からやり直したかいがあったね!!」

龍也「おう!! 今度こそロココをぶち抜いてやりたいからな!!」

この間、ワールドカップの他国の代表チームを見たらコトアール代表に「ロココ・ウルパ」の名前があった。F F Iで、龍也はロココに一人では歯が立たなかつた。試合には勝利したものの、龍也はそれを良しとせずリベンジに燃えていた。

吉川「ナイスシュート！」ポンッ

龍也「ありがとうございます！」

吉川さんが軽く肩を叩いて労いの言葉を掛けてくれた。龍也は素直にお礼を述べる。

吉川「よし、この試合……点、取れるだけ取るぞ!!」

日本『オオオーツ!!』

そして、日本は勢いに乗って攻め続けて8ー1。そして後半終了間際……、

果南「龍也!!」

果南からのパスが龍也に渡る。

アルマ「ハア、ハア……くっ、来い!!」

龍也は背後に武士型のマジンを出現させて跳躍。マジンの刀の一振りとタイミングをシンクロさせ、左足を振り抜いた。

龍也「「スサノオブレード・G X」!!」ドッゴオオオオツ!!

凄まじい威力のシュートがベトナムゴールに襲い掛かる。

アルマ「っ!! コレがアイツの必殺シュート!? うわああああっ!!」

!?!?!?!

アルマは技を出す暇もなく弾き飛ばされ、シュートはゴールに突き刺さった。そして
「……」

ピツ、ピツ、ピイイイーッ!!

王将『ここで試合終了のホイッスル!! 9-1の大量得点で日本がベトナムを撃破!!
大海龍也はハットトリックだあッ!!』

解説「日本は松浦と大海がとても良い動きをしていましたね。大海はシュートも強烈
でしたし……コレは本大会に進める可能性はかなり高いのではないでしょうか?」

王将『そうですね……日本の次の試合は3日後にオーストラリア戦です! オースト
ラリアは今日のようにはいかない相手ですね』

解説「はい。日本、油断せずに戦って欲しい所です」

― その頃・J3リーグ沼津クラブハウス ―

春咲「……………」

リリア「……………」

木野「……………」

宮間「……何? アレ?」

全員で試合を見ていたアール○○口沼津のメンバーたちは、呆然と試合を見ていた。

― 続く ―

After story : 予選リーグ2戦目に向けて

ベトナム戦に勝利した翌日、俺たちは2日後のオーストラリア戦に向けて練習に励んでいた。

ツバサ「行くわよ果南!!」

果南「抜かせないよっ!!」

今はそれぞれ個別で練習をしており、果南とツバサが勝負している。

監督「松浦と大海をどこで使うかな……」

コーチ「確かに、ベトナム戦で凄く動きが良かったですもんね。シュートの破壊力も

抜群だし……」

監督「ああ……」

監督とコーチは次の試合で誰を先発させるか、どのタイミングで切り札を投入するかを考えていた。

円堂「来い大海!!」

龍也「行くぞ円堂!」ドッゴオオオオンッ!!

龍也のノーマルシュートがゴール左下に凄まじい勢いで飛んでいく。

円堂も反応はしたものの、あまりのスピードに一瞬遅れてしまい、シュートはゴールネットに突き刺さった。

円堂「あゝっ!! くっそ!!、もう一回だ!!」

龍也「相変わらず負けず嫌いだな……」

堂峯「次は俺の番だ。行くぞ!!」

円堂「お願いします!!」

堂峯さんのシュートがゴールの右上隅に飛んでいく。円堂も何とか反応し跳躍するが、コーナーギリギリに狙いをつけられたボールは円堂の手の僅か数センチ先を通りゴールネットに吸い込まれた。

豪炎寺「流石堂峯さんだ……」

吹雪「うん。ノーマルシュートの威力からもう僕たちとは違う。大海くんが同じくらいだろうけど……」

にこ「負けてられないわ!!」

三河「おい、行くぞ!!」

にこ「っ! お願いします!!」

三河さんがにこにドリブルを仕掛ける。にこは半身の姿勢を取ってディフェンスを

掛けるが、不規則なドリブルリズムにやり辛そうだ。

にこ(何このドリブル? 凄くディフェンスし辛い……)

三河(………) クンッ!

にこ(しまっ!?)

細かな崩しからの急な切り返しに反応が遅れ、にこは抜かれてしまった。

三河「ディフェンスが甘いぞ!! 崩しをされてもできる限り自分の体勢を崩さなくて済むように身体運びも考えてやるんだ」

にこ「はいっ!!」

鬼道「あのドリブル技術……この大会の間に修得してやる」

不動「三河さんから技術を見て盗むか。俺もやってみようかね」

東野・吉川「行くぞ?」

聖良・綱海「お願いしますっ!!」

2対2の練習、まずは東野さんのドリブルに対して聖良さんがディフェンスに入る。綱海は吉川さんのマークを続けながら、裏への飛び出しを警戒する。

綱海(東野さんは……) チラッ

ボールを持つ東野さんの位置を確認する綱海。この瞬間、
吉川（ここだっ!!）ダッ!

吉川さんが綱海の背後に小さくダイアゴナルランを仕掛る。その瞬間パスを出した東野さん。パスボールは聖良と綱海の間を転がりゴール正面で吉川さんに。

吉川「貰った!!」ドガアアアッ!

吉川さんのシュートがゴール右下に進む。しかし、

立向居「させるかっ!!」バシッ!

これはなんとか立向居がキャッチした。キーパーが止めてくれたから良いような物の危なかった。

東野「ディフェンスしっかり声を掛け合え! 連携できないディフェンスなんか怖くもなんとも無いぞ!!」

綱海「はい!!」

聖良「スミマセン! 次注意します!!」

日本代表の練習は、現役の代表の5人が監督が選んだ新世代の代表を指導して鍛えるという様な感じになっていた。

コーチ「しかし、やはりまだ円堂たちは先発では出せないですね」

監督「ああ、まだ見て学ぶ段階だと思うが……、実践よりも優れた練習は無い事も事実だからな。賭けだが次のオーストラリア戦、円堂をGK、DMFに矢澤、FWに綺羅を先発してみようと思う。勿論危なくなったらすぐに代えるが……」

コーチ「そうですね。良いと思います……あつ監督、終了時間です」

監督「そうか……全員そこまで!! 今日練習は終了だ!!」

その声で皆の動きが止まり、選手は監督のもとに集まる。中には「疲れた〜っ!」と、伸びをしている者もいる。

監督「明後日はオーストラリア戦だ。よって、明日はオーストラリアの試合ビデオを観るので朝9時にミーティングルームに来るように。では解散!!」

日本代表『ありがとうございました!!』

そして俺たちは練習に使った用具の後片付けを始める。新人はこういう仕事もあるからな……。

そして用具を片付け終わったあとシャワーを浴びて夕食の時間。食堂で俺が刺し身定食を食べていると……

果南「隣良いかなん?」

龍也「もちろん。座れよ」

果南が「えへへ」とハニカミながら龍也の隣に座る。果南はやはり焼き魚を注文した

様だ。

龍也「果南、練習キツくないか？」

果南「う〜ん、確かに沼津の練習よりはハードだけど……それでも私には軽いかな？」

龍也「流石体力オバケ……まあ俺もそこまで疲れて無いんだけどさ？」

多分、俺たちが異常なんだと思う。

果南「……ねえ？ 後でロビーで話さない？ 大会中はそれぞれの部屋に行けない

からさあ……」

龍也「ん、良いぞ？」

龍也が返答すると果南は「やった！」と小さく呟き、急いで食事を平らげて、

果南「じゃあ、8時ね？」

と、言い残し行ってしまった。カワイイ奴め。

そして食事を終え、約束の8時。龍也がロビーに行くとき既に果南がソファアームに座って待っていた。

果南「時間ピッタリだね？」

龍也「おう……」

龍也が果南の隣に腰掛ける。お互いに話題が出ないが、どちらがともなく、
スツ

お互いの手が重なり合う。果南と龍也はお互いに見つめ合うと照れ笑いする。

果南「えへへ……／＼／＼ ダメだなあ…、私……／＼／＼「ん？」ハグツ!!」

龍也「おわっ!？」

果南にソファアームに押し倒される龍也。果南は龍也の胸に顔を埋めて身体をギュッと抱きしめる。

龍也「果南……」 ナデナデ

龍也は倒されながら、果南の頭を撫でて優しく果南を呼ぶ。

果南「……名残惜しいけど、あまり長く部屋を空けると怪しまれると悪いし…ね？」

龍也「ん…チユツ」

果南と龍也はキスしてお互いの温もりを感じ合い、数秒の後離れ、部屋に戻った。

果南・龍也（今日はよく眠れそう（だな）!!）

そんなことを二人して考えていたのを、お互いに知る由もなかった。

― 続く ―

After Story：オーストラリア戦前日

俺たち日本代表は、明日のオーストラリア戦に向けてオーストラリアの過去の試合映像を見ていた。

oooooooooooo

オーション『ジョーズ!!』

オーションからFWのジョーズへと鋭いパスが通る。

ジョーズ『決める! 「絶・メガロドン」!!』

オーストラリアの巨漢FW、ジョーズの必殺技が対戦相手のキーパーを吹き飛ばし、ゴールに突き刺さった。

実況『決まったあ!! "ジョー・ジョーンズ"、3試合連続ゴールだあつ!!』

その他にも……、

相手『くそっ!!』ドカアツ!!

相手のシュートも、

ジンベイ『「極・グレートバリアリーフ」!!』チャポン

そして次の日……

ー 名古屋スタジアム ー

王将『今日はここ、名古屋スタジアムからアメリカW杯アジア予選2戦目、日本対オーストラリアの試合をお送り致します!!』

解説『TVの前の皆さんも恐らくお分かりの通り、日本とオーストラリアの間の実力差はほぼ互角。拮抗した見応えのある勝負になりそうです!』

王将『そうですね! おっと、そうこう言ってる間に選手が入場して来ました! 日本とオーストラリアの注目選手は誰だと思えますかね?』

解説『そうですね……オーストラリアはやはりキャプテンの”マイク・オーシャン”、日本はこの間のベトナム戦で注目度が飛躍的に上がった大海龍也、次点で松浦果南では無いでしょうか?』

会場のボルテージが上がる中、スクリーンに両チームのスタメンが表示される。

オーストラリア代表

G K ジンベイ

D F ケイン コール ビーチ アクア

D M F オーシャン ドルフィン

O M F フライ アングル

FW ハミラス ジョーズ

日本代表

FW ツバサ 吹雪

OMF 鬼道 果南

DMF 吉川 にご

DF 三河 聖良 綱海 風丸

GK 円堂

王将『両チーム位置に着きました!』

ツバサ「吹雪くん、最初から飛ばして行くわよ!!」

吹雪「うん! 僕たちでオーストラリアのゴールをこじ開ける!!」

鹿角「皆さん! オーストラリアのタクティクスには注意していきましょう!!」

果南「今日も決める!!」

そして、元イナズマジャパンメンバーは気合十分の中、いよいよオーストラリア戦が始まった。

元イナズマジャパンメンバー((((((((絶対勝つ!!))))))))

l
T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
u
e
:
:
:
l

After story : vs オーストラリア 試合開始 (キックオフ) !!

審判の笛と共に、オーストラリア戦が始まった。日本ボールでスタートし、ボールは鬼道へ。

鬼道「よし、行くぞ!!」

ドリブルで攻め上がる鬼道と共に日本オフェンス陣がオーストラリア陣内へと斬り込んでいく。鬼道へまず初めにフライがデイフェンスに入る。

フライ「その程度のドリブル!」超・スプラッシュカット!!」

フライの振るった足から放たれた衝撃波が着弾し、水飛沫が壁の様に弾けて行く手を阻む。だが、

鬼道 (抜ける!) ギュン!

鬼道は着弾する前に速度を上げて水飛沫の内側に入ってやり過ぎ、フライを抜いた。

フライ「あり!?! (速っや!!)」

オーシャン「ほう? ならばお前たち! 進化したオーストラリアのタクティクスを

見せてやるぞ!!」

オーストラリア『はい!!』

すると、鬼道をオーストラリアの選手5人が取り囲み、連携してコースを塞ぎディフェンスする。

鬼道「これは!？」

オーシャン「必殺タクティクスへペンタゴンロックディフェンス!!」

鬼道はボールを奪われてしまい、オーシャンから前線のジョーズへとボールが飛ぶ。

ジョーズ「よし、決めてやる!!」

ジョーズがドリブルで上がる。そこに風丸と綱海が連動して止めに入る。

綱海「風丸止めるぞ!」

風丸「ああ!!」

まずは風丸がジョーズにディフェンスに向かう。相手のボールの位置や体勢に注意を払い、相手との間を上手く使う。

風丸「(2、1……)ここだっ!!」

相手が詰まった瞬間に風丸が迫る。これでもうジョーズはパス以外に選択肢が無くなり、仕方無くハミラスにパスを出す。

ジョーズ「くっっ!! (コイツ嫌な間合いを!!)」パスッ!

選択肢が無くなったジョーズは堪らずパス。だが、

綱海「読めてんだよ! ここだっ!!」パシッ!

ジョーズ「っ! クソっ!」

綱海「ごちそうさん!! 矢澤!!」ドッ!

にこ「ナイスよ綱海!!」

ボールをカットした綱海からにこにボールが繋がる。にこがドリブルで攻め上がる
と、ドルフィンがデフエンスに来る。

ドルフィン「日本:F F Iの時のリベンジをさせてもらおうぞー!」

にこ「やれるものならやってみなさい!!」

にことドルフィンの一騎打ちが始まる。にこはチェンジオブペースを織り交ぜた
フェイントを左右に散らして相手の体勢を崩すのを狙う。

ドルフィンも付いていくが、足が動いた所に……

にこ(ここっ!) トッ!

にこはドルフィンの股下にボールを転がし、股抜きで抜き去った。

ドルフィン「っ!?!」

にこ「ツバサ! 決めなさい!!」ドッ!

にこからツバサへのパスがゴール前に飛ぶ。ツバサは構えを取って大きく跳躍し、上空からボールを宇宙と共に蹴り落とした。

ツバサ「ナイスパスよにこ!!」「極・天空落とし!!」ドツゴオオオオンツ!!

上空から直蹴撃弾で急降下してくるツバサのシュート。ジンベイは必殺技を発動する。

ジンベイ「止める!!」「極・グレートバリアーフ!!」チャポンツ!

ツバサのシュートはジンベイの作り出した水の壁の中に突入。勢いを全て吸収され、ボールはジンベイの手に収まった。

ジンベイ「こんな物か……」

ツバサ「ツ?!」嘘でしょ!?!「天空落とし」はロココから単独で点を取った技なのよ!今はあの時とは違って最終進化してる。何で止められたの!?!」

ジンベイ「何、特訓を重ねて強くなったのはお前たちだけでは無いと言うことだ!オーシャンさん!!」ドツ!

ジンベイのゴールキックからボールはオーシャンに渡る。吉川さんがディフェンスに入るが、

オーシャン「良いのか?」俺の間合いで……「ウォーターボール・S!!」ドツパアアアンツ!

吉川 「くっ！」

吉川さんは相手の必殺技で弾き飛ばされる。これは不味いと聖良さんがディフェンスに向かう。

ハミラス 「オーシャンさん!!」

オーシャン 「よく見てたハミラス！」 ドツ!

オーシャンからハミラスへのパスが通る。綱海が空いたスペースのカバーに入り、空いたスペースへと風丸が中に絞る。

ハミラス 「掛かった! 行け!」 ドツ!

ハミラスはサイドへと低空横回転クロス。グラウンドスピン 風丸が絞ったときにスペースが空いたが、

そんなところ誰も……っ!?

風丸 (っ!! なんて居やがる!?)

ジョーズ 「ナイスパス!」

円堂 「マズいフリーだ!!」

風丸 「クソっ!!」

風丸がスピードを活かして止めに入る。行け!!

風丸 (俺のスピードならトラップしたところを狙える! 間に合う!!)

だが、

ジョーズ「ならば直接ダイレクトで撃つまでだ！」「絶・メガロドン」!!」ドツゴオオオおおおんっ!!」

直蹴撃弾ダイレクトシュートで撃った事により威力が上がった「メガロドン」。巨大サメと共に、シュートが円堂に襲い掛かる。

円堂「止める！」「怒りの鉄槌・乙」!!」ドグシャアアアアアッ!!」

円堂が呼び出したマジンと共にシュートを拳で地面に叩きつける。「カオスブレイク」を止めた技だしさすがに大丈夫だろう……と、思っていたら……、

円堂「ぐっ、うううう……（そんなんっ!! 威力が!!）うわあああっ!!」

円堂は跳ね飛ばされてしまい、シュートは日本ゴールに突き刺さった。

王将『ゴオオオオオオオオオオ!! 入ってしまったあっ!! オーストラリア先制点!!』

円堂「くそおっ!!」

風丸「嘘だろ……」「怒りの鉄槌」で「メガロドン」が止められないのか？」

龍也（コレは……思ったよりも速く出番が来るかもしれないな……）

予想以上の実力を見せるオーストラリア。この試合、どうなるか分からないかも知れない。

↓	日本
続く	0
↓	↓
	1
	オーストラリア

A f t e r s t o r y : 壁

オーストラリアの先制ゴールが決まり、日本ボールで試合再開。審判の笛と共に、ボールは果南へ。

果南「よし、行くよっ!!」

果南がドリブルで攻め上がる。そこにアングルとドルフィンが2人で止めに入る。

アングル「行かせるかよ!」

ドルフィン「止めるっ!!」

果南「この程度ならっ!!」

果南は二人の間に手を入れて掻き分けるように、自身のパワーと馬鹿げたフィジカルから産まれる”突進力”を使って強引に掻き分けて突破した。

ドルフィン「っ!?!」(M.S. 松浦、FFIの時とは違う……。腕ハンドの使い方が巧い!!)」

アクア「このっ!!」

すぐさまディフェンダーが止めに来る。空いたスペースに吹雪が走り込み、ビーチが吹雪を追う。ケインとコールはゴール前のスペースを埋める様に絞ってくる。

果南(っ!! コースが!!)

オーシャン「そこだっ!!」バチッ!

果南が止まった瞬間にオーシャンがスライディングでボールを弾き、ボールはタッチラインを割って外に出る。

果南「っ!」

オーシャン「まだまだだなお嬢さん……」

オーストラリアのスローインから試合再開。アングルのスローインからボールはドルフィンに飛ぶ。が、

にこ「させないわっ!」パシッ!

にこがドルフィンとボールの間に身体を割り込ませて背肩奪取。シヨルターチャージボールをキープし、

逆サイドにボールを振る。

ドルフィン「くっ!」(この子供!こんな小さな体で!!)

にこ「ビキッ!」子供じゃないわよ!! 鬼道!

ここからの内回転パスは鬼道に渡り、そのままドリブルで攻め上がる。そして鬼道と吉川さん、ツバサの三人でお互いにフォローできる距離を保って攻め上がる。

フライ「俺が行きます!」

フライが鬼道に迫る。すると鬼道はすぐに吉川さんにパスする。

鬼道「吉川さん!」トッ

吉川「ツバサ！」パスッ！

3人で連携できる距離を保ちつつ、パスを回して相手の選手を動かす。相手の連携も少しずつ、僅かにズレが生じてくる。次第にズレは積み重なり、大きなスペースを産む！

吉川「鬼道！」ドッ！

鬼道（来た!!）

コール「っ、まずい!! 中に3人フリー!!」

鬼道「行くぞツバサ！ 到此！」

にこ「やつと来たわね!!」

ツバサ「待ちくたびれたわ!!」

にこが前へと駆け上がり、三人でシュート体勢に入る。ボールを3人で次々と上空へと蹴り上げ、ボールにエネルギーを溜めていく。それを鬼道は踵落として下に落とすと、莫大なパワーが内包されたボールを3人で蹴り飛ばした。

鬼道・ツバサ・にこ「「ビッグバン・Gx」!!」ドッゴオオオオオオオオ

!!!

宇宙の誕生を思わせる必殺シュートがオーストラリアゴールに迫る。ジンベイも負けじと必殺技で対抗する。

ジョーズ「むっ!! (コイツか……)」

しつかりと声を掛け合って連携し、風丸が止めに入る。

巧く相手との間合いを使い、ボールが離れた瞬間を狙って距離を詰める。

風丸「同じパターン、ゴチです!!」バツ!

ジョーズ「っ! くそっ!」パスッ

ジョーズは先程のカットが頭をよぎって今度はバックパス。しかし、

にこ「貰うわ!!」パシッ!

背後から迫っていたにこがパスカット。

にこ「果南!!」ドッ!

果南「よし!!」

ボールはサイドラインを駆け上がった果南に飛ぶ。果南はトラップすると、勢いに

乗ってどんどん攻め上がる。

アングル「させるかっ!」

アングルの鋭いスライディング。しかし果南は跳躍して難なく躲す。

オーシャン「デイフェンスを固めろ!」

オーストラリア『はいっ!!』

ゴール前を固めてきたオーストラリア。コレではパスも難しそうだ。

果南（パスは……ムリだね。なら!!）

果南はドリブルで突っ込む。が、果南のドリブルの動きが今までに見たことのない動きをしている。まだ完成してはいないようだが、この状況で試すのか？

ビーチ（ドリブルのコースが不規則すぎる！ 味方を目隠しにしたり、ステップが予想外の方へと向かったり……だが、）

ズザアアアアアッ!!

果南（っ!!）

ビーチにスライディングされ、果南は転倒する。

ビーチ「動きに鋭さが全然足りない。未完成な動きがプロで通用するか!」

果南「くっ!!（あともう一つ、何かが足りない!!）」

ビーチ「アングル!」

ここから一気にオーストラリアのカウンター。ボールはアングルに飛び、トラップしたアングルはドリブルで上がる。

アングル「このまま切り崩してやる!!」

ここ「っ! 行かせないわっ!!」

ここが急いで走って戻る。しかしグングン引き離されてしまう。

ここ（っ!! 相手はドリブルしてるのよ!?!）

アングル「ジョーズ!!」

ジョーズへの縦パスが通り、先程同様に風丸がディフェンスを掛ける。

ジョーズ「行け!!」ドッ!

インサイドスピン

しかしジョーズから中への内回転クロスが上がる。ボールはハミラスへと飛ぶ。

聖良「読んでますよ!」ドカツ!!

聖良さんがハミラスに身体をぶつける。ハミラスの体幹軸がブレ、強烈な直蹴撃弾ダイレクトシュートは撃てないだろ!!

円堂「ナイスだ鹿角!」

ハミラス「(くっ、だが!!) オラツ!!」チョンツ!

ハミラスは思い切りパワーシュート!と、見せかけて、つま先でループシュートを撃つて来た。完全に予想を外された円堂は、思い切りジャンプして手を伸ばす。

円堂「なっ!! 届けえっ!!」

しかしボールは無情にも円堂の手の上を通ってゴールの中に転がり込んだ。

果南(っ!!) そんな……っ、アタシのせい?

それを、果南は愕然とした表情で…眺めているしかできなかった。

日本 1 1 2 オーストラリア

↓
続
く
↓

A f t e r S t o r y : 松浦果南 ゴールへの道筋

オーストラリアに勝ち越しゴールを決められ再びのリードを許してしまった日本。オーストラリアのカウンターの始まりとなった、ボールを奪われてしまった果南は焦っていた。

果南（私のミスだ……私が取り返す!!）

ピイイイーッ!!

審判の笛と共に日本ボールでゲーム再開。ボールはここへ。

にこ「よっ、どうするか……」「こっち!!」果南？ 分かった！お返ししてやりなさい!!」ドッ!

ボールはにこから果南に渡る。

果南「よし、行くよ!!」

果南がドリブルで攻め上がる。しかしそこにアングルとドルフィンが2人で挟んで止めに入る。

果南（私の武器はフィジカルの強さとパワー……。でも、それとあと一つ何か決め手が足りない!!）

果南は先程の不規則なドリブルであと一つ足りないピースが何か分らなかった。ボールをキープしながらも必死に思考するが中々思いつかない。

ガッ　グイッ　ガッ!!

果南(くっ!!)

アクア「悪いなお嬢さん!」

ドルフィン「貰った!!」バチッ!

ここでドルフィンが足を伸ばしてボールを弾く。溢れたボールはアングルの足元に転がり、そのままドリブルを仕掛けてくる。

アングル「よし……ジョーズ!」させるわけないでしょ!!」っ!!」

しかしここでにこがナイスフォロー。ジョーズへのパスコースを塞ぐ。

にこ(ジョーズへの縦パスは身体で塞いで……。ドリブルしか出来ないでしょ!!)

アングル「くっ!」なら自分で行く!!」

ドリブルで攻めるアングル。そこに風丸が止めに入る。

風丸「止める!」[超・スピニングフェンス]!!」

風丸は5人に分身。それぞれが巨大竜巻を纏って襲い掛かり、アングルを吹き飛ばしてボールを奪った。

アングル「クソツタレ!」

風丸「よし「貰うぞ!!」っと!」

風丸にジョーズがプレスを掛ける。しかし風丸は軽快なフットワークでボールをタッチしながらフェイントを掛けて抜き去った。

果南（風丸くんのあのフットワーク……あれができれば）

風丸「上がるぞ! 走れお前ら!!」

ドリブルで上がる風丸。ドルフィンが止めに入るが、風丸は高速で横にスライドして抜き去った。

果南「あの足さばきなのに凄い凄い安定感……!!（待って? フットワーク……安定感……身体の重心……）もしかして!!」

アクア「させるかっ! バチツ!!」

しかしここでアクアがスライディングで風丸からボールをカット。タッチラインを割って外に出る。

風丸「くそっ……「ねえ風丸くん!! ちよつといい?」松浦?」

果南「風丸くんはフットワークを使ったりフェイントを掛けるときってどういう重心移動してる?」

風丸「へ? 身体の軸がバタつくと上手くスピードに乗れないし安定感が無くなるから走りながらも軸ってというか重心は動かさない意識でやってるけど……松浦?」

果南は風丸の話を聞いて考えていた。

果南（スムーズに動くための重心不動……フィジカル……パワー……）

果南の頭の中で、自分がパズルのピースのように崩れていく感覚。そして新たに見つけた^武ピースをはめ込み再構築。

果南（そうか……これなら!!）

オーストラリアのディフェンスを突破する為の、己の武器を掛け合わせた方程式が完成した。

王将『オーストラリアのスロインから試合再開です!!』

アングルのスロインからボールはオーシャンへ。しかし、

果南「そこっ!!」バシッ!!

オーシャン「あっ!？」

果南がカットした。

王将『松浦が、カットしたあああっ!!』

オーシャン「だが、何度やっても同じ事だ!!」

オーストラリアが連携してディフェンス体勢に入る。しかし果南は構わずに突っ込む。

ツバサ「果南こつち!…果南!?!」

アングル「? 俺が行く!!」

アングルがディフェンスに行くが……、

果南「……………」バチツ! ギユンツ!

果南は捕まる寸前でアウトサイドでボールを外側に弾いてコースを変えて躲す。すると躲した直後にほぼ直角にドリブルコースを曲げてゴールへ向かう。

アングル「こいつ!! チョップ・フェイント 弾いて躲した!?!」

ビーチ「任せろ!! アクア!!」

アクア「オツケー!!」

ディフェンス二人が連携して止めに入る。
が……、

ユラアツ バチツギユン バチツギユンツ!!

果南はまたしてもボールを弾いて躲し、今度は二人の合間を縫い、味方を目隠しにしながら直角どころかほぼUターンするかのような超鋭角にドリブルで切り返す。

あまりの不規則かつ鋭いフェイントのドリブルで、オーストラリアのディフェンスは一気に崩壊。

果南に突破を許してしまった。

ドルフィン「あっ!!」

アクア「クソっ! (ドルフィンの身体を障害物にに使われた!! あれじゃあ反応しても追いつけない!)」

果南 (コレだ! これが私の、ゴールへの方程式!!)

果南組み立てた方程式、それは、

「フィジカル」×「重心不動」∥「鋭角突進ドリブル」

待ち構えていても、ほぼ180°。コースが変わる果南ドリブルの変化は、ディフェンスが極めて困難。果南はオーストラリアの防衛ラインを突破し、ゴール前に躍り出た。

ジンベイ「っ!! 来い!!」

果南「行くよ!!」

果南の周囲が嵐で大荒れの大海原に変わり、巨大な竜巻が渦を巻く。果南は跳躍して竜巻の中に突っ込むと、莫大な風のエネルギーと海のエネルギーをボールに凝縮。それを思い切り空から蹴り落とした。

果南「海神の裁き・V2」!!」ドッゴオオオオオオオオオオ!!

上空から凄まじい勢いでシュートが降ってくる。ジンベイも必殺技で対抗する。

ジンベイ「止める!!」「極・グレートバリアリーフ!!」チャポンツ!

水の壁の中にシュートが突入、力がぶつかり合う。

ジンベイ「ぐっ、うおおおおああああつ!!!(クソがあつ!!)」

しかしボールに纏わりついた暴風に、水の壁は吹き飛ばされ水飛沫を上げて霧散。ジン

ンベイを吹き飛ばしてゴールに突き刺さった。

果南「いよっおおおしっ!」グツ!!

果南の渾身のガッツポーズと共に、日本は同点に追いつき、ここで前半戦終了のホイッスルが鳴った。

日本 2 ー 2 オーストラリア

ー 続く ー

After story : 天才 (エゴイスト)

果南が一段回上のステージへと上りゴールを叩き込み同点に追いついた日本。ここで前半戦終了のホイッスルが鳴り、両チームベンチに戻る。

豪炎寺「ナイスシユート松浦。凄かったぞ……」

不動「風丸となにか話してたけど、何話してたんだけ？」

果南「ん……、オーストラリアのデイフェンスをぶち抜くのに、私に足り無い武器を持つてるのが風丸くんだったからその武器を扱うコツを聞いただけだよ」

風丸「重心を動かさないってやつか？ それだけであんなヤバいドリブルできたのか
お前……」

日本の雰囲気はかなり良い。ここで監督が口を挟む。

森島「松浦のように、自分の持ちうる武器を掛け合わせて突出させる。それは世界を戦う上での最低条件だ。では、後半戦の戦い方を伝える。ツバサ、大海と交代だ。キーパーも円堂、権代と交代する」

日本『はい!!』

審判「それでは、後半戦を始めます!!」

日本メンバーチェンジ

ツバサ out ↓ in 龍也

円堂 out ↓ in 権代

龍也「さあ、行こうか!!」

日本『おう!!!』

そして、両チームフィールドに出る。

王将『両チームポジジョンに着きました。日本は2人メンバーを代えてきた様です。

これが果たしてどう影響するのか!!』

龍也「やることは変わらん……」

そして審判の右手が上り……、

ピイイイイーッ!!

笛と共にオーストラリアボールのキックオフから後半戦開始。ボールはフライに渡り、そこに鬼道が止めに入る。

フライ(どうしよっかな……) チラッ

前線にはハミラスとジョーズの2人、中にはアングルが入ってきていた。FW2人にはそれぞれ吉川さんとこが、アングルには果南がピッタリとマークに付き、吹雪がパスコースのケアに入る。

フライ(うげっ……コース無えじゃん……なら、突破だ!!)

フライはそのままドリブルで鬼道の突破を図る。しかし鬼道も距離を詰めて迎え撃つ。

フライ(時間は掛けらんないな……)「ウオーターボール・V4!!」バシャアアアッ!

鬼道「くっ!」

フライが必殺技で鬼道を抜く。すると吉川さんがハミラスのマークを解いてヘルプに入る。

フライ(よしマーク解けた!)ハミラスさ……!?)

龍也「読めてんだよ!! 奪取!!」ドガッ!!

フライの背後から迫った龍也が、ボールとフライの間に自身の身体を割り込ませて背中をフライを押しさえつけて奪い取る。

王将『大海の背肩奪取だあっ!! オーストラリア、ボールを奪われた!!』

フライ「うげっ!?(どっから湧いた!?)」

大海「甘めえぞオーストラリア!!」

鬼道(大海……フライが後ろを気にして無かったから、味方の位置が把握できてないと踏んで後ろへのパスは無いと考えたな……)

ボールを奪った龍也がそのままドリブルで上がる。

オーシャン「舐めるな若造!!」

オーシャンが龍也にプレスを掛けるしかし、

鬼道「こっちだ!!」

にこ「大海こっち!!」

二人が龍也の脇から駆け上がりパスを要求する。するとディフェンスの意識が二人に向き、吹雪のマークが一瞬手薄になる。

龍也(!!) ドツ!!

龍也はゴール前右サイドに斜め後方から横回転スピンセンターリングを上げる。緩やかなカーブを描いて飛んだボールは、相手の裏を取って吹雪の足元に……

吹雪「任せて!! ……?」

吹雪は、蹴られたボールに何か違和感を感じた。

ビーチ「クソっ!」「大丈夫だ俺が間に合う!!」っ、頼むアクア!!」
深く守っていたアクアが落下予測点に入る。が、ここで吹雪が感じた違和感に気づく。

アクア(？)……っ! デカ過ぎる! コレは吹雪へのパスじゃない!!)

龍也の蹴ったボールはアクアの頭上も素通りしてライン際に。当然待つのは……、

果南「私だよね!!」パシッ!

果南がダツシユで駆け上がりフリーでトラップする。瞬間、上げられるであろうクロスボールを叩き込むためにオーストラリアゴール前になだれ込むように攻め込む日本。一方で、不意を突かれたオーストラリアは慌ててゴール前を固め、果南に対してアクアがプレッティングを掛ける。

アクア(クソっ! 間に合え!!)

アクアが急いで走る。が……、

果南「残念。その距離じゃあ間に合わないよ!!」ドツ!!

果南の中へのセンチタリング返し。内回転クロスがゴール前へと飛ぶ。インサイドスピン

アクア「タダで通すかあっ!!」バツ!

チッ!!

何とアクアは全力で跳躍し果南の蹴ったボールにかろうじて頭で触れた。接触した

ボールは上空へと浮き上がり、龍也の方へと落ちる。

ケイン「ナイスだアクア!! (落ちてきたボールを処理すれば!!)」

オーシャン(クリアだ!!)

オーストラリアのディフェンスがボールを包囲するように、距離を保ちながら殺到する。が、

龍也「オツケーだ!!」

コール「何がオツケーだ! 背面でしか取れない。貰った!!」

オーシャン「囲め!!」

ケイン「了解!!」

今龍也は、背中をゴールに向けた状態で、更にコールを後ろに背負った状態でボールを待っている。

更にそこに殺到するオーストラリアディフェンス。トラップして止めれば即座に取られるし、仮に取られなかったとしても振り向くこともできない状態で、全員がダイレクトでのパスだと考える。

ドルフィン「シユートは無理だ! パスを警戒しろ!!」

龍也は「はあ、無理? それは誰が決めた……」

すると龍也は跳躍し後方に一回転。そして

龍也「不可能だ!!」
ドラゴンインパクト
 龍也・蹴撃破<>!!!」

ドツガアアアアアアッ!!

何と龍也は背面からのオーバーヘッドキック一閃!!

オーストラリアは完全に不意を突かれた。

ジンベイ(何っだよ……それ!?)

ジンベイは反応できず、ただボールを見送る事しかできなかった。

ザシユウツ!!

龍也の放ったシュートは、ゴールに叩き込まれた。

会場が静まり返る。だが、ポツポツと誰かが口を開き、

ドワアアアアアアアアッ!!!!

王将『ご、ゴオオオオオオオオオオ!! 日本、大海龍也のスーパーゴールで勝ち越

したあっ!!』

会場が大歓声に変わる。スーパーゴールを決めた龍也に日本の選手が駆け寄り喜び

を上げる。一方、決められてしまったオーストラリアは……、

ケイン「何だよアレ……」

オーシャン「あんな……ニンゲン生命体があるのか?」

ドルフィン(FFIの時とは次元が違う……!!) 後半、こんなのを相手にしないとい

けないのか？
)

日本 3 | 2 オーストラリア
| 続く |

After story : 代表の意地 (プライド)

龍也のオーバーヘッドシュートがオーストラリアゴールに突き刺さり3-2と逆転した日本代表。消沈するかに見えたオーストラリアだが、その目はまだ諦めていない。

オーシャン「行くぞお前らあ!!」

オーストラリア『はい!!』

ピイイイイーーツ!!

審判の笛と共にオーストラリアボールで試合再開。ボールはフライに渡り、そこに鬼道が止めに入る。

フライ「(コイツに時間を掛けちまうと大海が来るからな……) 悪りいけど速攻で抜かせてもらうぜ!!」

鬼道「やれるものならやってみろ!!」

するとフライは必殺技で一気に抜き去る構えを見せる。空中で一回転し、ボールを地面に蹴り込む。

フライ「ウオーターボール・V4!!」バツシャアアアンツ!!

鬼道「くっ!!」

鬼道が抜かれ、サイドから攻め上がるオーストラリア。

これ、鬼道が単独ディフェンス技を使う間合いを潰しに来てるな……。

鬼道の個人ディフェンス技、「スピニングカット」はオーストラリアの「スプラッシュカット」とモーションが全く同じ為に、対策が容易なのだろう。

吉川「俺が行く!!」

吉川さんが鬼道のフォローに入る。だが、

ケイン「フライこつちだ!!」

オーシャン「こつちもオツケーだ!!」

フライの右サイド、ライン際ギリギリからサイドバックのケインがオーバーラップ。

左側の中からはオーシャンが駆け上がる。

吉川（つ!!）

フライ「（つ!!）迷った!!」ケイン!!」パスッ!

ここでフライは中のキャプテンではなくサイドを選択。ボールを受け取ったケインはそのままドリブルで攻め上がる。

三河「（つ!!）行かせるか!!」

しかし三河さんがディフェンスに走り、中へのパスコースを潰しながらライン際に追いつく。

聖良 (よし、あの角度じゃあシュートコースは無い!!)

ここで聖良が動き、三河さんの援護に向かう。が、

ケイン 「ここだ!!」 ドガアアアアアアッ!!

三河・聖良 (?!?)

何とここでケインは右足の外^{アウトサイドスピン}回転クロス。中に蹴り込まれながらもゴールの方へ

と向かっていくボールを蹴ってきた。日本^{ディフェンス}は相手のマークを確認するも、完全な数的不利だった。

権代 「(?!?) ファーサイド! ジョーズだ!!」

ファーサイドからジョーズが飛び込んでくる。だが、

ギョルンツ!!

ここでボールは回転の影響で急カーブ。直接ゴールに向かってきた。

権代 「(?!?) クソっ!!」 バチッ!!

何とか腕を伸ばして跳躍する権代さん。ボールは権代さんの手に当たり跳ね返る。だが、

風丸 「ヤバイアングルが後ろから来てる!!」

大外からアングルが溢れたボールの正面に走ってきている。権代さんは体勢が整っていない。今シュートを撃たれたら!!

アングル「おらっ!!」ドガアアアッ!!

アングルのゴールの左上を狙ったシュート。しかし、

綱海「させるかっ!!」バチッ!!

綱海が自慢の身体能力を活かして跳躍し足を伸ばす。足に当たってまたしてもボールは弾かれる。

オーシャン「こぼれ球頂き!!」

にこ「マズイ!!」バツ!!

にこがスライディングでボールを狙う。しかしオーシャンはボールを浮かしてにこを躲し、そのままボレーシュート放ってきた。

オーシャン「喰らえっ!!」ドゴオオオオッ!!

猛然と迫るシュート。だが、

聖良「追い付きましたよ!!」

ここで聖良が戻ってきており必殺技でシュートブロックする。

聖良「「超・スノーマウンテン」!!」ガキイイイインッ!!

氷漬けになって勢いを失ったボールは聖良の足元に。

聖良「日本カウンター!!」ドッ!!

聖良が大きく前線へとボールを蹴り出し、ボールは龍也の方へ。オーストラリアの

デイフェンスはキーパー含めて4枚。日本のオフフェンスは吹雪、龍也、果南の3枚。

コール「行かせるかよ!!」

ビーチ「これ以上は決めさせない!!」

守るオーストラリア。味方が戻るまで凌ぐつもりだな。

オーシャン「お前ら!! 戻るまで持ちこたえろ!!」

オーストラリアは全員で戻ってくる。それと一緒に日本のオフフェンス陣も走ってくる。

にこ「大海パス!!」

鬼道「こつちだ!!」

両脇からにこと鬼道が走ってくるそのお陰でデイフェンスの意識が僅かにそちらに割かれた。

龍也(っ!!) ダツ!!

にこ「大海!？」

ここで龍也は味方を待たずに自分で仕掛けた。一瞬迷ったせいで反応が遅れたオーストラリア。コールとビーチの2人で止めにかかる。

龍也(……………) ザッ、

龍也はゴール前23メートル付近からシュート体勢に入る。

果南(?! シュートコースは完全に塞がれてるよ!?)

龍也「おらっ!!」ドガアアアアアッ!!

龍也の放ったシュートは高く浮かび上がりディフェンスの頭上を越えていく。

オーシャン「バカが!! あれじゃあゴールの枠を越える!! 外に出てゴールキックだ!!」

しかし、

ドルフィン「(? 何だ、あの軌道……急に落下しながら外側に逃げてく……っ!!)」

キーパー止めろ!!」

ジンベイ「何っ!?)」

龍也「遅せえよ!!」

外れたかのように見えた龍也のシュートは急降下し枠を捉え、キーパーの手から逃げるように外側へと向かっていく。

龍也「無揚力蹴弾!!」

ジンベイ「クソがあっ!!」バツ!!

ボールに向かって腕を伸ばして横つ飛びするキーパー。だが、無常にも龍也の放ったシュートは、ゴールの内側サイドネットに突き刺さった。

王将『ゴオオオオオオオオオオ!! 日本追加点!! またしても大海が決めたあつ

!!
』

龍也「よおおおおしっ!!」グッ!

果南「す、凄い……………」

にこ「ホントに……………味方で良かったとつくづく思うわね……………」

黙り込むオーストラリア。「諦めたか?」と、思ったが……………

オーシャン「…ま…だだ……………」

ん?

オーシャン「まだだ! まだ試合は終わって無え!! オーストラリア代表 お前ら!! この試合、最後の

1秒まで死んでも喰らいつくぞ! 諦めたら、俺たちに夢を託した…国の全選手に合わ

せる顔がないと思え!!」

オーストラリア『オオオオオオオオオツ!!!』

これまで以上に気迫が高まるオーストラリア。

龍也(ハハッ! 良いねえ!!!)

オーストラリアボールで試合再開。ボールはドルフィンに渡り、そのままドリブルで

攻め上がってくる。

果南「行かせないよっ!!」

にこ「ここで止めるわよ! 果南!!」

2人で連動してディフェンスに入るが、二人の間合いに入る一歩手前でドルフィンは必殺技を使ってきた。

ドルフィンがボールを足で潰すと、ボールがサーフボードのような形になる。すると背後から10メートルはあろうかというビッグウェーブが起こる。

にこ「なっ、なななっ!?!」

果南「これはっ!?!」

ドルフィンはサーフボードの様にしたボールに乗り、ビッグウェーブをサーフィンするようになりこなす。

ドルフィン「「ライド・ア・ウェーブ」!!」

2人は、巨大波に飲み込まれ吹っ飛ばされた。

龍也「果南! っこ!!」

風丸「行かせない!!」

すぐに風丸がフォローに入る。だが、ドルフィンはここで中にクロスボールを上げた。

ドルフィン「行けえっ!!」

ボールには内回転インサイドスピンが掛かり、ゴールからやや逃げるようにカーブして中に向かってくる。ターゲットは……

吉川「(この状況……) オーシャンキャブテンだろ!!」

吉川さんの読み通り、ボールはオーシャンの足元に、

オーシャン「分かってたよ。お前吉川なら読むってな」スルツ

ここで何とオーシャンはボールをスルー。ボールはライン際に転がり、

ケイン「おっしやあ!!」パシツ!

オーバートラップしてきたケインがトラップ。そしてそのままゴール前へとボールを蹴り込む。

ケイン「死んでも決めろおらあつ!!」ドツ!!

ゴール前にボールが落ちてくる。権代さんが前に出てキャッチしようとするが、

ジョーズ「取る!!」バツ!!

ジョーズが跳躍し、ヘディングで競り合う。が、

権代(っ!? コイツ、最高到達点に達するのが異常に速い!!)

後から跳んだはずのジョーズに高さで先回りされ上を取られ、ジョーズは思い切りヘディングを地面に叩きつけた。

ジョーズ「おらあつ!!」ドガアアアツ!!

叩きつける様に放たれたボールは、権代さんの上から、日本ゴールに突き刺さった。

1 日本
続く 4
1 1
3
オーストラリア

After story : vs オーストラリア 試合終了

オーストラリアが日本に必死に食らいつき、4-3と点差を1点に戻す。

オーシャン「よし！ 良くやったジョーズ!!」

ジョーズ「はい!!」

オーシャン「もう2点とって絶対勝つぞ!!」

オーストラリア『おう!!』

一方、点を取られた日本代表は、

権代「悪い……」

吉川「いや、俺たちこそスマンな……。にしても、」

三河「ああ……あのフワードジョーズ、なんて瞬発力してんだよ……」

風丸「切り替えてもう1点取るしか無いですね」

果南「うん。絶対に勝つよ!!」

日本『おう!!』

にこ「……………」

龍也「ん、どうしたにこ？」

にこ「何でも無いわ……」

そして日本のキックオフから試合再開。ボールは果南に渡る。そこにオーストラリアディフェンスが2人で潰しに掛かる。

アングル「ドルフィン！ 何としても止めるぞ!!」

ドルフィン「はい!!」

一気にプレスを掛けるオーストラリア。しかし果南は安全な間合いの内^{セーフテイゾーン}に一気に仕掛る。

果南「^{チョップ}弾きフェイント!!」

バチツ! ギュンツ!! バチツ! ギュンツ!!

果南が^{チョップ}弾きフェイントを連打しつつ、^{イナズマドリブル}鋭角突進で突き進む。

果南はオーストラリアの包囲網を突破。ゴール前に躍り出る。

王将『松浦抜け出した!! 狙うか!?!』

果南「当然狙うよ!!」ドガアアアアアアアツ!!

果南のシュートがオーストラリアのゴール右上隅に突き進む。しかしディフェン

ダーのビーチが跳躍ダイビングヘッド頭突でクリアする。

ドルフィン「こぼれ球!! っ!」

しかしボールは運悪く龍也の方へと転がる。オーストラリアの絶体絶命のピンチだ。

龍也「貰った!! 「させるかつ!!」 っ!!」

オーシャン「奪取!!」ジャックカル ドガアアアアアアアッ!!

キャプテン 主将の気迫の籠もった背肩奪取でボールを奪ったオーストラリア。ボールを一気に前線に蹴り出す。

オーシャン「行けえエエエっ!!」

ドガアアアアアアッ!!!

一気に前線へと飛ぶボール。ボールはサイドを駆け上がったフライに渡り、そのまま右サイドを駆け上がる。

鬼道「行かせるかつ!!」

しかしすかさず鬼道がディフェンスに入るが、

ケイン「フライこつち!!」

ハミラス「逆もいるぞ!!」

両脇から味方が駆け上がる。そちらに意識を割かれた鬼道は、フライの反応リアクションに対応が遅れてしまった。

龍也「すみません……俺の一步目がもう少し早ければ決められてた……」

吉川「いや、ディフェンスも完全に油断してた。あそこでフリーになるやつを作らなければ防げてた」

三河「とにかく時間は後少した。もう1点取って勝つぞ!!」

日本『はい(おう)!!』

次の1点を決めた方がこの試合の勝者なのは誰が見ても明らかだった。

ピイイイイーッ!!

そして審判の笛と共に試合再開。ボールは鬼道に渡り、ドリブルで攻め上がる。

フライ「行かせるかっ!!」「超・スプラッシュカット!!」

フライの放った衝撃波が鬼道に迫る。

鬼道「大海!!」

龍也「おう!!」

ここで龍也が走る。そして鬼道とボールを挟み込む様に思い切り蹴り合う。

龍也・鬼道「「キラーフィールズ・S」!!」「ドッゴオオオオンッ!!」

二人蹴りで生まれた衝撃波に吞まれ「スプラッシュカット」は霧散。そのまま鬼道はドリブルで上がる。

にこ「っ!!」ダッ!!

ドリブルで上がる鬼道。そして龍也にパスを出す。

龍也「よし、「お前にだけは撃たせるか!!」っ!!」

オーシャンとドルフィンのだブルディフェンス。くっ、凄え圧力!!

しかし中々取れない事に焦ったオーストラリアはディフェンスのビーチがカバーに走ってきた。

龍也「(っ!!) 吹雪!!」

龍也は吹雪にパス。だが、

コール・アクア「貰った!!」

2人で挟み込むように競り合うオーストラリア。ヤバい!!
するとここに、

にこ「吹雪こっち!!」

吹雪「っ! 矢澤さん!!」パスッ!

吹雪はヘディングでにこにボールを落とす。だが、
ドルフィン「トラップしたところを取ってやる!!」

アングル「貰った!!」

二人が左右から滑り込むようにボールを狙ってくる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
 ここ（：私はF F Iで世界一になってから、少し慢心してしまっていた。プロになっても日本リーグなら充分通用したし、負けることもあつたけどそこそこ戦えてた。けど、）

実況『試合終了!! ライバス磐田3ー0で敗北!!』

ここ（去年、初めて交流戦で海外のチームと戦って負けてレベル差を知って、これがプロの世界なんだと：私は井の中の蛙だったんだって知った。高校生の世界一なんて、プロにとってはお遊びみたいな物。だったら、ここで世界に私の名前を刻んでやる!!）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

オーストラリアのディフェンスが迫る。するとここは、

ここ（瞬間吸収）ピタッ!

ドルフィン「っ!？」

ここはトラップして足の上でピタリとボールの勢いを殺して止めてドルフィンを躲した。からの、

ここ（叩弾球上）

そしてボールを足の上に固定したまま後に振り上げてボールが落ちた所を叩きつけ、

そして、オーストラリアがボールを蹴った瞬間、

ピッ、ピッ、ピイイイーッ!!!

王将『ここで試合終了のホイッスル!! 5-4で、日本代表の勝利!! 日本2連勝だあ

ああっ!!』

ドルフィン「くそっ……」

オーシャン「敗けたか……」

審判「5-4で日本! 礼!!」

日本・オーストラリア『『ありがとうございました!!』』

そして、オーストラリアは退場していった。

果南「はあ、滅茶苦茶疲れる試合だったね……」

龍也「ああ……次にやるときは、下手したら負けるのは俺たちかもな」

にこ「何言ってるの! 次も勝つわよ!!」

日本、2戦2勝0敗0分

― 続く ―

After Story：日本代表 3戦目前の練習風景

オーストラリア戦に勝利し、予選開幕2連勝の龍也たち日本代表。次の相手は中東の国、イラク代表に決まり、練習を続ける日本代表の面々。イラク戦を明後日に控えた練習後……

佐久間「俺、試合に出られるのかな……」

鬼道「大丈夫だ。お前の実力ならいずれ必ず必要になるときがある」

佐久間「鬼道……」

すると、

森島「佐久間、鬼道、ちよつと監督室に来てくれ!!」

話をしていた2人が監督に呼ばれついて行き監督室に入る。すると早速監督が本題を話し始める。

森島「よし。本題を話す、明後日のイラク戦、佐久間……出る。ただし、センターバックでだ」

鬼道・佐久間「!?!」

驚く2人。なぜなら……

佐久間「俺がセンターバックですか？ でも、俺のポジションは……」

そう。佐久間のポジションはフォワード。攻めと守りで役割が正反対なのだ。

森島「分かっている。だが、俺はお前の視野の広さとその頭脳はディフェンスでこそ活きると思っている。鬼道、お前はイラク戦ボランチで出す。2人のコートビジョンと視野の広さを組み合わせて、中盤を支配しろ」

顔を見合わせる2人。答えは……

佐久間「はい！ 分かりました!!」

鬼道「期待に応えられるよう精一杯やらせてもらいます」

森島「ありがとう、話は以上だ」

二人は「失礼しました」と監督室を出る。

佐久間「まさか俺がディフェンスなんてな……」

鬼道「いや、正直に言うとな俺も学生時代に少し考えたことがある。だが、ディフェンスに優秀なやつが多かったから攻めの力もあるお前はフォワードに置いていたんだが、お前の頭脳と視野の広さは確かに高レベルだ。監督の判断は正しいかもしれない」

佐久間「鬼道……」

鬼道「だが初めてのディフェンダーだ。ミスすることもあるだろうが……その時は俺

たちがフォローする。思いつきりやれ」

佐久間「っ、ああ!!」

ー 次の日 ー

森島「明日のイラク戦に出場するメンバーを発表する。今日はそのメンバーの連携練習なので呼ばれなかったメンバーは自身も出られるようにすり合わせをしつつ相手を頼む」

日本『はい!!』

森島「それでは発表する!!」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

果南「にこちゃん!!」パスッ!

果南がにこにパスを出す。

綱海「行かせるかっ!!」

綱海が足から滑り込んでカットに入るが、

にこ（瞬間吸収!!）ピタッ

にこがトラップでボールの勢いを完全に殺して勢い余った綱海を躲す。そして後ろ

足でボールを叩きつけ、

にこ「跳躍蹴弾!!」ジャンピンボレー ドガアアアアアツ!!

立向居「くっ!!」

しかし、咄嗟の事に反応できなかった立向居の脇を素通りし、ボールはゴールに突き刺さった。

にこ「よっし!!」

| | | | | | | | | | |

堂峯「松浦!!」

果南「よっと!!」「行かせないぜ!」「止める!」不動くん、ツバサさん!!」

不動とツバサの2人が連携してプレスを掛ける。

果南「弾きフェイント!!」チョップ

バチツギユンツ バチツギユンツ!!

しかし果南は鋭角突進でフィールドを縦横無尽。イナズマドリブル 2人を抜き去る。

果南「龍也!!」ドガアツ!

果南から龍也への横回転クロススピンが飛ぶ。

龍也「ナイスツ!!」バツ!!

龍也は果南のセンタリングに合わせて跳躍し直接で跳躍蹴弾ダイレクト・ボレーシュート。そしてボレーで縦回転シュートを放った。

龍也「へ龍也・直下蹴弾<!!」ドゴオオオオンツ!!

凄まじい勢いで飛びながらデイフェンスの頭上を越えて急降下してくるシュート。

権代さんは腕を伸ばして跳躍するが届かず、ボールはゴールに突き刺さった。

龍也「おっしやああああああつ!!」

これを見ていたメンバーは、

堂峯「マジかよ……」

三河「嘘だろ? ボレーで縦回転ドライブ……」

そしてその日の練習が終了。次の日、イラク戦の当日を迎えた。

― 続 く ―

After story : イラク戦開始!

イラク戦の当日、会場となる福岡の博多スタジアムには、今日の対戦を観ようと大勢の観衆が詰めかけていた。

現在日本は予選開幕2連勝。今日も勝てるかどうか、観客の興味はそこに尽きる。

王将『日本とイラクの皆さんお待ちせしました!! コレより、ワールドカップ W杯アジア予選』日

本vsイラク”間もなくキックオフです!!』

解説「森島監督はベトナム、オーストラリア戦と大活躍した大型ルーキー、大海龍也を開始からセンターフォワードで起用してきました。この選択が果たして吉と出るか凶と出るか、楽しみですね!」

そして選手がピッチに入場してくる。両国の国歌を順番に歌い、お互いに握手してフェアプレーを誓い合う。

龍也「行くぞ!!」

日本『おお!!』

そして両チームがポジションに着く。

ピイイイーッ!!

審判の笛と共にイラクボールで試合開始。

ボールはティラムに渡り、ティラムはドリブルで仕掛けてきた。

龍也「行かせるかっ!!」

早速龍也がプレッシャーを掛けに行く。だが、

ティラム「……………」パスッ

ティラムはジダバウにパスアウト。そこからパスを繋いで攻めてくる。

ボールはメドフアルに。

堂峯「貰った!!」

堂峯さんがスライディングタックルを仕掛ける。だが、メドフアルは跳躍して躲し、そのままアルマディにパスを出してくる。

メドフアル「アルマディ!!」ドツ!

アルマディへの横回転クロス。だが、

佐久間「ここだっ!!」バシッ!

佐久間が相手の位置取りから最警戒すべき場所を予測。そこに飛んできたパスを

カットした。

メドフアル「何っ!？」

佐久間「よし、鬼道!!」ドツ!

鬼道 トツ「ナイス読みだ佐久間!! その調子で頼む!!」

佐久間から鬼道へのパスが繋がる。ボールを受け取った鬼道はそのままドリブルで攻め上がる。

ルコリム「クソっ!!」バツ!

しかしイラクも黙って攻められはしない。ルコリムが鬼道とボールの間に自身の身体を割り込ませてカットを試みる。

鬼道「っ! させるかっ!」グイッ!

しかし鬼道も腕ハンドワークの使い方を巧く使ってルコリムの身体を押しつけてボールをキープ。突破する。

ジダバウ「っ! 俺が行く!!」

今度はジダバウが鬼道に襲い掛かる。しかし鬼道の両背後から果南とにこの2人が上がってきた。

にこ「鬼道こっち!!」

果南「こっちもいるよ!!」

ジダバウ「っ!?!」

これによりジダバウは“鬼道自身のドリブル突破”か、“2人のどちらかへのパス”

かの2択で迷ってしまい、その瞬間を見逃さずに鬼道は果南にパスを出した。

鬼道「松浦!!」パスッ!

果南「よつと!」パシッ ナイスパス!!」

ボールを受け取った果南。しかしそこにアツパカとマナスが二人がかりで止めに入る。

アツパカ「マナス、囲むぞ!!」

マナス「おう!!」

だが、

果南「行くよ!!」

果南はそのままドリブルで突っ込み、セーフティゾーン完全な間合いが崩れる寸前に必殺技で仕掛けた。

果南「サイクロンズ・バミューダ」!!」

果南の周囲が暴風が吹き荒れる大海原に変わる。デIFエンスに入った二人を竜巻が絡め取り、海の底に沈めて吹き飛ばしてデIFエンスを突破。ゴール前に躍り出る。

王将『松浦果南がチャンスメイク!! 日本ゴール前だあっ!!』

果南のプレーで日本オフェンスがイラクのゴール前に怒涛のごとくなだれ込む。イラクは完全にデIFエンスの数が足りない。

ムスファ「クソっ！」

ハツサク「決めさせるかよ!!」

残ったデイフェンス二人がゴール前へと絞りに行く。さて、果南のシュートか、それともパスか？

果南「龍也!!」ドッ!

果南はゴール前への内回インサイドスピン転クロスを上げる。ボールはゴール前に走り込んだ龍也の方向へ。

ムスファ「やっぱりお前か!!」

ハツサク「盗る!!」

トラップしたところを狙おうと2人が龍也に襲い掛かる。だが、

龍也「バクカ。コレは俺に対してのパスじゃねえよ」

ムスファ「? ……っ!?!」

ボールは龍也の頭上を素通りし、相手の意識の外側、更に外から走っていたにこの足元に。

にこ「ナイスよ果南!!」

にこはクロスボールに対して跳躍してダイレクトで合わせる。そして、思いつきり右足を振り抜いた。

にこ「跳躍直蹴撃弾!!」

ドゴオおおおんっ!!

にこのシュートは凄まじい勢いでイラクゴール右上隅に襲い掛かる。キーパーモハ
マドは何とか反応して手を伸ばすが、

モハマド「くっそおおおおっ!!」バツ!!

ザシユウツ!!

ボールはモハマドの手のずつと先を通過し、ゴールネットに吸い込まれた。

にこ「うらあああああああああああっ!!」

にこが吠えて感情を爆発させると、スタジアム中から大歓声が沸き起こる。

王将『ゴオオオオオオーッ!! 日本先制ーッ!! 大海龍也を囷に使って更に

外側からの矢澤にこのダイレクトボレー!!』

解説「今大会の日本は凄いですよ……!! 驚くプレーばかりです!!」

果南「ナイシュにこちゃん!」

にこ「果南こそナイスパス!」

ペアアアンっ!!

二人がハイタッチして喜びを分かち合う。

龍也「俺を囿にするなんてな……果南も成長したじゃん」

果南「今の龍也はどここの国も警戒してる。なら、最強クラスの囿になるんじゃないか
と思っただの」

龍也「っ！ ……ナイス判断!!」 スッ

パアアアンっ！

果南と龍也もハイタッチする。龍也は、果南の選手としての成長を確かに感じていた。

日本 1 1 0 イラク

1 続く 1

After story : 日本 次世代のストライカー

にこのダイレクトボレーシュート跳躍直蹴撃弾がイラクゴールに突き刺さり1点を先制した日本代表。イラクのキックから試合再開。

アルマデイ「まずは1点！ 追いついてからそつからだ!!」

イラク『おう!!』

ピイイイイーーツ!!

審判の笛と共に試合再開。ボールはジダバウに渡り、そこから組み立てる。

ジダバウ（どうすつかな……!）

しかし考える暇を与えずに龍也が迫る。ジダバウは咄嗟に空いてる味方にパスする。

ジダバウ「メドファル!!」ドッ!

ジダバウからの前線のサイドへと大きく蹴り出したボール。メドファルに対して風丸が向かう。

メドファル「行くぞ!!」

ドリブルで仕掛けてくるメドファル。しかし風丸は相手との間を上手く使って相手に抜かせない。相手も不用意に仕掛ければ取られると感じ取り中々仕掛けられない。

メドファル（くそっ！ これ以上時間を掛けちまうと……「風丸くんナイス！ 今い
くよ！」松浦!! なら……!）

メドファルはイチかバチかで必殺技での突破を仕掛る。

メドファル「「絶・サザンクロスカット」!!」ドゴオッ!

メドファルが抜いた瞬間、十文字に爆発が起こり風丸を吹き飛ばす。

佐久間（不味い！ 行くべきか……、パスを警戒するべきか……）

しかし佐久間が考えている間にメドファルは余裕を持つてパスを出す。内回転が掛

かったボールは、緩やかなカーブを描いてテイラムの元へ。

佐久間「しまっ!?!」

テイラム「貰った!! 「バリスタショット・A」!!」ドゴオオオオンッ!!

センターリングに合わせて直接ダイレクトで合わせて必殺シュートを放ったテイラム。その影響

で勢いが増し、一直線にゴールに襲い掛かる。

円堂「止める!!」

円堂の周囲に金色のオーラが溢れ出し、背後に威圧感のある魔神が出現。そして両腕
をシュートに突き出した。

円堂「「ゴッドキャッチ・Gx」!!」ドガアアアアアアッ!!

渾身の力をシュートにぶつける円堂。シュートは少しずつだが勢いを失っていき、最

後には円堂の手の中で停止した。

王将『止めたあああああああつ!! 円堂ナイスセーブ!!』

立向居『やった! さすが円堂さん!!』

ベンチでも立向居が大喜びだ。

円堂(さすがに直接で何発も撃たれるとキツイか……、凄いパワーだった)

佐久間「クソっ……、止めたから良かったものの、俺のせいだ」

鬼道「佐久間!」「! 鬼道…… 昨日も言ったはずだ。お前はデیفエンダーは初めてなんだ。ミスをするのは当然だ! 失敗を恐れずに何度でもトライしろ!! それで点を取られたら俺たちが取り返してやる!」

佐久間「鬼道……」

円堂「そうだぜ佐久間!」

果南「佐久間くん、何度もあたって行こうよ!!」

にこ「佐久間!」

佐久間「……ああ、分かった!!」

皆の言葉で、佐久間の覚悟は決まったようだ。

円堂「よし、行けえっ!!」ドツ!

円堂のゴールキックからボールは右サイドの三河さんへ。三河さんは一気にスピードに乗り、得意のドリブル突破を仕掛ける。

シエルリム「行かせるかっ!!」

ジダバウ「止める!!」

イラクも2人掛かりで止めに入る。しかし三河さんのボールタッチと緩急に翻弄され、どんどん連携を崩されていく。

ハツサク「ここだ!!」

しかし既すんでのところではツサクがカバーに入る。これは流石に取られるか?

三河「仕方ない!!」「パルクルドライブ・Gx!!」

ここで三河さんは必殺技を使用。跳躍し空中を、まるで足場があるかの様にボールを蹴りながらアクロバティックな動きで駆け回り包围を突破した。

王将『出たあああああつ!! 海外リーグで猛威をふるう、三河のドリブル必殺技「パルクルドライブ」だあつ!!』

龍也「生で見るともの凄えテクニクだ……こんなやべえのか!!」

三河「決めてみろ!!」ドツ!!

ここで三河さんからゴール前、龍也へのセンチタリングが入る。ゴール前にはムスファ

モハマドがその右拳をシュートに叩きつけると、オーラの拳も正面からシュートに向かい迎え撃つ。正面からぶつかるパワーとパワー。しかし、

モハマド「(？)だろっ!? なんてパワーしてやがんだっ?!) うわあああああつ!!」

しかし、モハマドはシュートごとゴールに叩き込まれてしまい、日本は龍也の必殺シュートで2点目を奪い取った。

龍也「おっしやあああああああつ!!!」

龍也が雄叫びを上げると、スタジアムが大歓声に包まれる。

王将「ゴオオオオオオオオオオオオオオ!! 日本追加点!! 大海龍也が決めたあつ!!」

シュートを決めた龍也が自陣へと戻ろうとすると三河さんが近づいてきて、

三河「……ナイスシュート。よく合わせたな」

龍也「ありがとうございます。三河さんこそナイスボールです!!」

三河「……フツ」スツ

三河さんが右手を上げる。

龍也「っ!」スツ

パアアアあああんっ!!

二人がハイタッチ。チームの雰囲気も上がる中、ここからさらに追加点を上げられる

か？
| 日本
| 2
| 1
| 0
| イ
| ラ
| ク

After Story：イラク戦 前半終了

三河さんからのセンターリングを龍也が直蹴撃弾ダイレクトシュートの「スサノオブレード」でゴールに叩き込んで2-0と日本がリードを広げる。イラクボールでのキックから試合再開だ。

龍也「まだまだ！ もう1点取るぞ!!」

日本『おう!!』

ティラム「これ以上点はやれない！ 挽回していくぞ!!」

イラク『オオオオオオオオオオ!!』

イラクはまだまだ気合充分だ。

ピイイイイイイイッ!!

審判の笛で試合再開。ボールはジダバウに渡り、すかさず龍也が前線から激しい追跡奪取チェイスンック。

ジダバウ「っ！ ティラム！」パスッ！

ジダバウは捕まる前にティラムにパスアウト。しかし龍也はまだ追い掛ける。

ティラム「っ!! くそっ…：「にこ！ 挟むぞ！」っ!!」

しかし龍也とで挟む形でにこがプレッシングに来ていた。

テイラム「(っ！) 取られる……「テイラムこつちだ！」っ！ シェルリム!!」

しかしここでサイドからシェルリムがカバーに入る。一旦シェルリムにパスを出し、ボールを受け取ったシェルリムはディフェンスラインまでボールを戻す。

ハツサク「オツケー！ ムスファア！」パスッ

ムスファア トツ「よし、アツパカ！」パスッ！

ディフェンスの最終ラインでパスを回して一旦落ち着かせ組み立てて日本の隙を伺うイラク。

流石にこれを追跡奪取すると体力をゴツソリ削られるため、龍也は様子見に切り替える。

アツパカ「!! ルコリム！」

ここでイラクが動く。ボールを前線のルコリムに蹴り出すと、鬼道がすぐに落下地点に入ってルコリムと競り合う。

ルコリム「おらっ!!」ドカッ！

鬼道「ぐっ?!」

フィジカルで負けてしまった鬼道。ボールはルコリムが確保し、そこからイラクが攻勢に転じる。

メドファアル「こつちだ!!」

テイラム「こつちもいるぞ!!」

ここでルコリムの両サイドからメドファルとテイラムの二人が攻め上がる。どちらかにパスを出すか、それとも自分でドリブル突破か？

デیفエンスの聖良、佐久間、風丸は迷ったが、

佐久間「ええい！ 当たって砕けるだ!!」鹿角はテイラム、風丸はメドファルにマークに付け！

風丸「!! 分かった！」

聖良「分かりました!!」

二人がそれぞれマークに付きパスターゲットを消失させる。さすがにマークがピツタリ付いてるのに堂々とパスはしないだろう。

ルコリム「っ!! なら!!」

ルコリムはここで聖良がいた場所にパスを出す。そこにフォワードのアルマデイがダイアゴナルランで走り込んでくる。

アルマデイ「ナイス！ 貰っ……「させるかっ！ バチッ！」っ!!」

しかしこれは三河さんが読んでおり、スライディングで弾く。弾かれたボールは佐久間の足元に転がり、佐久間は即座に果南にパスを出す。

佐久間「松浦!!」ドッ！

放物線を描いてボールが飛ぶ。しかし落下地点にジダバウが競りに入る。

ジダバウ「盗る!!」

果南「……………トツ スルツ」

ジダバウ「!?」

しかし果南は胸でトラップするとき、身体を流すように反転させて落とし、そのまま背後にいたジダバウを躲す。そしてそのままドリブルで攻め上がる。

王将『松浦躲したあああつ!! 見事に相手ディフェンダーを受け流したあつ!!』

観客から歓声上がる。果南のフイジカルならできても不思議じゃないんだよ!!

佐久間「ナイス松浦!」

果南「佐久間くんもさつきはナイスコーチングだよ!!」

声を掛け合いながらもドリブルで攻め上がる果南。しかしアツパカとマナスが止めに入る。

アツパカ「クソっ!」

マナス「行かせるかっ!!」

二人で連携してディフェンスを掛けるイラク。だが、

果南「弾チヨツきフェイント!!」

バチッ!ギユンツ バチッ!ギユンツ!!

果南が鋭角突進でフィールドを縦横無尽に駆け回る。イラクはディフェンスをアツサリと崩され、果南はゴール前に躍り出る。

モハマド（どう来る？ パスカ？ 自分でか？）

果南 チラツ

ムスファア（!!） 今大海を見た！ パスだ!!）

ムスファアとモハマドが果南の視線に気づきパスを出すであろう龍也に意識を向けた。次の瞬間……

果南「龍也！」ドガアアアアアアツ!!

果南は龍也の名前を読んで完全にパスだと偽装フェイクを入れ、隙だらけのゴールに直接自分のシュートを蹴り込んだ。

モハマド「っ?! クソっ!!（引っ掛けられた!!）」

キーパーは必死に腕を伸ばして跳躍するが、果南のシュートに触れることすらできずにシュートはゴールネットに突き刺さった。

王将『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!! 松浦の目線と声での偽装フェイクを入れてパスに意識を向けさせたところを不意打ちで決めたあっ!!』

果南「よしっ!!」

日本の3点リードに観客は大盛り上がり。日本代表も果南の所に集まってくる。

鬼道「ナイスシュート松浦。あんな手で相手を欺くとはな……」

龍也「やるじゃん！」

果南「うん！ 私だつてゴール決めたいしね。良いところにいるないとパスなんか出さな
ないからね？」

果南が珍しく挑戦的なことを言う。

龍也「上等だよ。パスを出したくしてやる！」

にこ「アタシだつて!!」

3人で笑い合う。

東野「堂峯、俺達も負けてられないぞ」

堂峯「だな！」

日本が3点の大量リードを奪ったところで、前半終了の笛が鳴った。

日本 3 ー 0 イラク

ー 続く ー

After story：イラク戦 後半戦開始!!

イラク戦も前半が終了し、3-0で日本がリードしハーフタイム。後半戦に備える。ツバサ「大海くんと果南とにこちゃんトライアングルの三角形の得点力がスゴいわね……。ハッキリと世界に通用する武器になってるわ」

不動「ああ……。危ない場面もほとんど無かったしな」

権代「円堂もナイスセーブだったぞ?」

円堂「ありがとうございます!」

選手同士で会話していると、監督が口を開く。

森島「よし、前半の試合運びは完璧だった。佐久間もちゃんとトライして止めてたし、コーチングで味方を動かして止めたのも良かったぞ?」

佐久間「ありがとうございます」

森島「後半もこのメンバーで行くが、控えもいつでも出れる様に準備しておけよ?」

日本『はい!!』

審判「後半始めます!」

そして選手が再びフィールドに立つ。ポジションは先程と変わらず。選手交代もお

互いに無しだ。

審判「それでは始めます！」

ピイイイーッ!!

審判の笛と共に日本ボールで後半戦開始。ボールは鬼道に渡り、鬼道がゲームを組み立てる。

鬼道「(大海と矢澤と松浦はマークが厳しいな……。左サイドはさつきなので三河さんは警戒されてる。なら!) 右サイドからだ! 堂峯さん!」ドッ!

鬼道からサイドの堂峯へとボールが入る。しかしそこにメドファルとルコリムが二人で挟みに掛かる。

風丸「っ!」ダッ!

二人を相手にキープする堂峯さん。しかしなんとかキープし続ける。

メドファル「くそっ、取れない!」

ルコリム「どうなってるんだ!」

しかし堂峯さんもキープはできているが抜きに掛かるには余裕がない。だが、

堂峯(来てるんだろっ!) トッ!

ここで堂峯さんは踵ヒールでサイドライン目掛けてバックパス。そこへ、

風丸「ナイスパスっ!!」 トッ!

風丸がオーバーラップしてきておりボールを受け取ってそのまま右サイドを自慢の俊足で駆け上がる。

メドファールとルコリムは完全に意表を突かれてしまう。

ルコリム「っ！ クソっ！」

急いで追い掛けるが、風丸のスピードに全く追い付けない。寧ろ引き離されている。

マナス「止める！」

しかし相手のサイドバックのマナスが止めに入る。タイミングを合わせて横からボールに足を伸ばす。

風丸「俺のスピードに、付いてこれる物ならやってみろ!!」ドギョーンツ!!

何と風丸はここから更に加速。マナスは完全にタイミングが遅れてしまい抜かれてしまう。

龍也「ナイス!!」ダツ!!

龍也がボールを受け取って直接で狙えるようにニアサイドにダイアゴナルラン。果南は相手の意識が龍也に向いてる内に相手の死角を通り裏街道からファーサイドに走り込む。

風丸「っ！ スゲエ良いところいるじゃん！ でも、見えてるぞ。ゴール前から一步引いた位置に…矢澤がフリーだ!!」行けっ！」ドツ！

風丸が蹴ったボールはやや戻り気味に中へと入りにこの足元へ。相手がしまったと
ディフェンスに向かうがもう遅かった。

にこ「喰らいなさいっ!!」ドガアアアアアッ!!

にこの直蹴撃弾がゴールを襲う。しかし、

モハマド「させるかっ!!」バチッ!

キーパーが何とか触り弾かれる。だがボールは果南の方へと転がる。

果南「貰っ……」「させんっ!!」っ!!」

しかし果南が撃つ一歩手前でムスファがボールを確保。直ぐ様前線へと蹴り出した。
ムスファ「行けえっ!!」ドッ!!

今度はイラクのカウンター攻撃。ボールはティラムに渡り、パスを繋いで攻め上がっ
てくる。

ティラム「シエルリム!」パスッ!

シエルリム トッ「よっ! アルマデイ!」

アルマデイ「ティラム、戻すぞ!」トッ!

三人がトライアングルを形成してボールを回してディフェンスを崩しに掛かる。し
かしあまり悠長にしていると日本もディフェンスが戻ってくる。

鬼道「今行く!」

聖良「ここは通しません!!」

ボールを持つティラムに対して佐久間も加わり3人で囲いに行く。しかし、ティラム「(スペースが空いた!) 行けっ!」ドッ!

空いた佐久間の担当エリアにボールを転がすティラム。そこにアルマデイが走り込む。

佐久間「しまっ!?!」

アルマデイ「貫つた!!」

アルマデイが直接で必殺シュートの構えに入る。

アルマデイが右足に炎を纏わせてボールを真上に蹴り上げる。上に上がったボールは大爆発を起こし、噴煙の中から無数の噴石がゴール目掛けて降り注ぐ。

アルマデイ「絶・メテオレイン」!!」

しかし円堂も負けてはいない。必殺技で迎え撃つ。

円堂「ゴッドキャッチ・GX」!!」ガカアアアツ!!」

円堂の呼び出した魔神と必殺シュートが激突する。両者のパワーは互角かに見えたが、円堂がやや押されている。

円堂「ぐっ! うおおおおおつ!!」

円堂も根性で粘る。しかし限界が訪れ、

A f t e r S t o r y : 得点ラツシユ

アルマデイの必殺シュートが日本ゴールに突き刺さり3ー1。まだまだ日本がリードしているものの、油断はできない。

龍也「また突き放すぞ!!」

日本『おう(うん)!!』

ティラム「こつからだ1点ずつ返していくぞ!!」

イラク『おう!!』

そして日本ボールのキックで試合再開。ボールは鬼道に渡り、そこからゲームを組み立てる。

鬼道「松浦!!」

鬼道が果南にパスする。ボールを受け取った果南はドリブルで攻め上がる。

ルコリム「行かせっか!!」

ルコリムが果南にプレッシャーを掛けてくる。すると果南は必殺技で一気に抜きに掛かる。

果南「サイクロンズバミューダ・V2」!!」ゴオオオオツ!!

果南と相手の周囲が暴風吹き荒れる大荒れの海に変わり、竜巻がルコリムを空中に巻き上げたあとで下降気流に乗り海中へと引きずり込む。

そして吹っ飛んだルコリムを果南は突破。だが、必殺技後の着地の隙を狙ってジダバウが足を伸ばす。

ジダバウ「貰った!!」バツ!

ボールに足が伸びる。だが、

果南「弾きフェイント!!」バチツ!!

しかしボールが落下するコンマ数秒前に足が着地した果南はそのままボールを弾いてジダバウの足を躲した。そして軸足を弾いた方に向けて踏み込みボールに追いつく。

ジダバウ(っ!! ? だろ!?)

まさかあの体勢から躲されるとは思っていなかったジダバウ。思考が停止しそのまま棒立ちになり突破を許した。

アツパカ「何やってんだジダバウ! 追いかける!!」

ジダバウ「ハッ! ツ!!」ダツ!

ジダバウは急いでダツシュで追いかけるが、もうかなり距離が開いている。追いつけないだろう。

そして果南はゴール前20メートル付近から右足のミドルシュート一閃!!振り抜か

れた右足から放たれたシュートはゴール目掛けて飛んでいく。

モハマド「止める！ ……？」

キーパーも身構える。しかしボールの違和感に気付いた。

ボールは細かくブレながら飛んでくる。そしてキーパー近くになると急激に右斜め下に向けて落下した。

モハマド（っ！ 無回転^{ナックル}シュート!?）

果南「決まれえっ!!」

しかしモハマドはボールに必死の勢いで反応して足を伸ばす。すると足に当たってボールは上空へと跳ね上がる。

王将『惜しいーっ!! 松浦ゴールならず!!』

会場から「あゝ…」とため息が漏れる。だが、上に上がったということはアイツのシュートゾーンだ。

ムスファ「よしっ、落ちてきたボールを確保して…。「甘いなっ!!」バッ！ ツ!!」

何とここで龍也が上空のボール目掛けて跳躍。背後には武神のオーラが具現化している。そしてボールの高さまで到達した龍也は、直接^{ダイレクト}で左足を振り抜いた。

果南「そりやあそうだけどさあ……」ブツブツ

堂峯「ナイスシュート。お前からホントに凄えな……」

東野「アジア予選位ならお前らと矢澤の3人で点取って勝てるような気がしてきた

……」

龍也「いや、それは無理でしょ……」

三河「松浦も必殺技の直後よく躲したな……」

果南「はい！」

龍也「よし、まだまだ行きますよ!!」

日本『おう!!』

日本 4 ー 1 イラク

ー 続く ー

After story : イラク戦決着!!

果南の無^{ナックル}回転シュートが弾かれ、それを龍也が「スサノオブレード」で押し込み点差を再び3点に戻した日本。

試合終了が刻々と迫る中、イラクボールで試合再開。

ティラム「少なくとも引き分けに持ち込むんだ!!」

イラク『ああ……』

龍也「もう一点取ってトドメ刺すぞ!!」

日本『おう!!』

審判「試合再開!!」

ピイイイイーッ!!

審判の笛と共に後半戦再開。ボールはティラムに渡り、そこからパスを繋いで組み立てる。

ティラム「ルコリム!!」パスツ!

ルコリム「ほっ! アルマデイ!!」

アルマデイ「っ! ティラム!!」

テイラム、ルコリム、アルマデイの3人で三角形トライアングルを形成。パスを回してコチラのデイフェンスを崩しに掛かる。

聖良「私が行きます!!」

聖良さんがテイラムにプレッシャーを掛けに行く。するとゴール前左にスペースができる。

テイラム「(スペースが空いた!!) アルマデイ!!」

空いたスペースにパスが飛ぶ。そのスペースにアルマデイがダイアゴナルランで走り込んでくる。

アルマデイ「貰った……「させるかつ!!」 ツ!？」

しかしこれは佐久間が読んでおり、空中で胸トラップしてカットする。

佐久間「鬼道!!」

佐久間から鬼道へのパスが飛ぶ。しかし鬼道ボールを受け取る寸前で、

ジダバウ「やらせないっ!!」パシッ!!

ここでジダバウがパスカット。そのままドリブルで攻め上がる。

にこ「行かせないわっ!!」

ここでのこがデイフェンスに入る。しかしジダバウはメドファルにパスを出す。

メドファル「オーラ……「甘いっ!」っ! くそっ!」

しかしこれは風丸がカットする。そのまま果南にボールを蹴り出す。

果南「よつと!! 行くよ!!」

果南がドリブルで攻め上がる。しかしアツパカとジダバウが止めに入る。

果南「弾チヨツプきフェイント!!」

バチツ! ギユンツ!! バチイッ!! ギユンツ!!

しかし果南は連続の鋭角突進イナズマドリブルで躲す。そして右足を振り抜く。

果南「行けえつ!!」ドガアアアアアアアッ!!

果南のシュートが放たれる。が、

マナス「やらせないっ!!」バチツ!!

マナスが足を伸ばしてシュートブロック。こぼれ球はルコリムの足元へ。

ルコリム「アルマデイ!!」ドツ!!

アルマデイにパスが飛ぶ。

佐久間「ここっ!!」パシッ!

しかしこれも佐久間は読んでおりパスカット。だが、

アルマデイ「渡すかつ!!」バチツ!

アルマデイの執念のブロック。ボールは弾かれてテイラムの足元へ。

テイラム「中入れるぞ!!」ドツ!!

テイラムから中へのセンタリング。ボールはアルマデイへ……。

佐久間「(? 何か高いような……っ!!) そっちだ!!」パシッ!!

ルコリム「ツ!!」

しかしアルマデイを囷にしたルコリムへのパスは佐久間がカット。

両チーム一進一退の攻防にスタジアムの熱気は最高潮^{ボルトージ}。試合も残り時間は後わずかだ。

佐久間「鬼道!!」

パスが鬼道に飛ぶ。

テイラム「止める!! ここは死守だ!!」

一気に雪崩れ込む日本攻撃陣。パスを回して攻め上がり、ボールは果南へ。

ジダバウ「止めるぞ!!」

アツパカ「おう!!」

二人が連携してディフェンスに入る。だが、果南は必殺技で突破を図る。

果南「[サイクロンズバミューダ・V3]!!」

果南の周囲が暴風吹き荒れる大荒れの海に変化。竜巻が二人を絡め取り海の底に沈めて吹き飛ばして突破する。

そこへ龍也が近寄ってくる。

龍也（果南………）チラッ

果南「（っ！ もう………） 久しぶりだからって足引つ張らないでね!!」

そして二人でシュート体勢に入る果南と龍也を水の竜巻が包み込み、ぐんぐん上昇。溢れんばかりの水流エネルギーが獐猛な龍へと姿を変える。

果南・龍也「〔海竜の咆哮・GX〕!!」ドガアアアアアッ!!

解き放たれた海竜がフィールドを抉りながらゴールめがけて突き進む。キーパーも必殺技で対抗する。

モハマド「〔極・オリハルコンの堅壁〕!!」ガチィッ!!

キーパーの必殺技で発生した、伝説の金属“オリハルコン”で出来た壁がシュートを阻む。だが、

ビシッ!

モハマド「っ!?!」

ビシッ! ビシッビキィッ!! ビシビシッ!!

壁には次々と亀裂が入っていき、そして……

バゴオオオオオオオオッ!!

シュートは壁を粉々に打ち砕き、ゴールネットに叩き込まれた。

王将『ゴオオオオオオオオオオッ!! 日本追加点!! 決めたのは大海と松浦だあッ!!

そしてここで……!!』

ピツ、ピツ、ピイイイーッ!!

王将『試合終了のホイッスル!! 5ー1!! 日本勝利だあつ!!』

スタジアムが大歓声に包まれる。イラク代表は悔しそうな表情を浮かべてスタジアムを後にした。

日本 5 ー 1 イラク

日本、三連勝!!

ー 続く ー

After story : アジア予選4戦目に向けて

日本代表がイラク戦に勝利した翌日、次の相手が韓国に決まり、龍也たちは今日も練習に励んでいた。

龍也「果南、行ったぞ!!」

果南「オツケー!! よつと!」パシッ

龍也から果南にパスが通る。そこにディフェンス役の鬼道が味方に指示を出す。

鬼道「風丸、不動と挟んで止めろ!」

風丸「分かった!」

不動「もらうぜ!!」

鬼道の指示で2人が一気にプレッシャーを掛けに来る。

果南「にこちゃん!」パスッ!

しかし果南はにこにパス。そこに鬼道が距離を詰めに来る。

鬼道「貰った!!」

にこ「……………」トンッ

しかしにこは、突っ込んできた鬼道の上を通り背後に落ちる軽いループボールを蹴っ

て鬼道を躲して抜く。

吉川「甘いぞ!!」

しかしそれを読んでいた吉川さんが跳躍して胸でトラップしようとする。
が、

龍也「ホイッ!」パシッ

吉川さんがトラップする寸前で龍也が横取り。そのままサイドに走りゴール目掛けてシュートを放つ。

体勢が不十分なシュートではあった……、

立向居「止める!」
「ムゲン・ザ・ハンド・G X」!!
「バシバシバシッ! シュルル

……

龍也のシュートはキャッチされた。しかし、

シューウウウウ……

ボールからする摩擦で焼け焦げた様な音が、威力の凄まじさを物語っている。
立向居（これ、必殺技使わなかったら俺ごと叩き込まれた……）

森島「……………」

それを見ていた監督は、

森島「立向居!」

立向居「は、ハイ！ 何でしょう監督？」

森島「韓国戦、先発キーパーはお前で行く。お前はこれまで試合に出てないからな。プロの世界を知って来い。それに、お前が密かに練習してる技もあるしな」

立向居「!? 監督：気づいてたんですか？」

森島「ああ。偶然目にしてな。だが、未完成なんだろう？」

立向居「はい。「魔王・ザ・ハンド」よりもさらに多くの気を集めてパワーを上げる技なんですけど、それほど多くの気を扱うと気が巧く扱えなくて……」

森島「なるほどな……」

すると監督は、

森島「離れてコントロールできないなら、離れられないくらい近くでコントロールすれば良いのかもな」

立向居「え？」

森島「まあ自分で考えるのも大事だ」

そして監督は行ってしまった。

立向居「離れられないくらい近くで……」

そして午前中の練習を終え、夕方以降は自由時間になったのだが、それまでの間に韓国の試合映像をチェックする。

森島「コレが今の韓国代表だ」

龍也「あの細目……やっぱりいたな」

韓国代表の中に、かつてのライバルの姿を目にした。

鬼道「ああ……韓国の天才ゲームメーカー”チエ・チャンスウ” F F I アジア予選では散々苦しめられたな」

果南「あとアフロデイさんもいるよ？ 涼野くんと南雲くんはいないけど……」

不動「まあアイツらは日本人だからな。国籍を変えてないとプロではダメだろ」

龍也「だな……まあ「カオスブレイク」が飛んでこないってだけで救いだろ」

そして数時間のビデオを見終わりに、ミーティングで対策等を立てる。チームとしてもそうだが、マッチアップする個人同士での対策を立てるのも忘れない。

そして午後4時になり、

森島「よし、今日は解散だ。明日の練習は9時からとする」

そして全員ミーティングルームを出ていく。

龍也「果南、良いか？」

果南「何？」

龍也「今日これから街に行かね? 数少ない休みだし」

果南「! 行く!!」

龍也「よし、行こうぜ?」

そして俺と果南は職員に声を掛けて街に遊びに行った。まあ門限の夕食迄には帰るけどな。

龍也「どこ行く?」

果南「東京久しぶりだからなあ……でも色々見て回りたいな?」

龍也「まあこの時間だし、じゃあカフェとか入るか?」

果南「うん!!」

そして合宿所近くのカフェに入った龍也と果南。パンケーキやコーヒー、サンドイッチに紅茶などを注文して舌鼓を打っていると店員さんが色紙を持って訪ねてきた。

店員「スママセン……もしかしてサッカーの日本代表の大海龍也さんと松浦果南さんですか?」

俺たち「そうです」と答えると店員さんは緊張の面持ちでサインを戴けないかと言って来た。

まあ良いかと龍也と果南は了承。サインを書いて手渡す。

すると店長まで来て記念撮影も……。

聞くところによるとここの店長さんは大のサッカーファンであり、これまでの試合で俺と果南、今はこの場にはいないがにこのファンになったらしい。

会計して握手し、店を出るときに……

店長「これからの試合も頑張ってください！」

と、応援のメッセージも頂いた。

龍也「……果南」

果南「何？」

龍也「応援ってやっぱり力出るな」

果南「だね！」

そして、その日は門限も近かったので合宿所に帰った二人だった。

ー 続く ー

After story : 韓国戦前日練習

果南と二人で遊びに行った日から数日後、今日は韓国戦の前日。

チーム練習で連携力を高める練習をしていた。

なにやら、今の韓国はF F Iの時の「パーフェクトゾーンプレス」とは別の……、同じくらいヤバイディフェンスフォーメーションがあるらしい。

タクティクスでは無いらしいが、それでもここまで韓国の失点数は0だ。

龍也「つーかデータ無いのかよ……」

ボールを足で弄りながら龍也がボヤク。

鬼道「ああ。これまでの試合、韓国はそれらしいプレーを見せなかった。もしかしたら一度や二度はやってたのかもしれないが、それがそうだと気付かないくらい意図して劣化させて使っていたか、ただ単に使った回数が少なすぎてそうだと思わなかったか……」

龍也「なるほどね……」

確かにそんな使い方をしていれば多くのチームには気付かれないか。

龍也「でも、じゃあなんでそんなフォーメーションがあるってウチは知ってるんだ？」

龍也が疑問をぶつけると、

鬼道「それらしい動きのパターンが数通り見受けられたんだが、どれがそうなのか分からなかったんだ。たまたま良いところにいた味方がフォローに入っただけに見えたり、近くにいたメンバー同士で、多対一で潰して奪っただけに見えたり、ただパスカッ トしただけだったり……」

龍也「なるほどね……。強力だけやってることは凄く地味とか、基本的な事の可能性がある訳か」

鬼道「恐らくな……」

ふむ、どんなフォーメーションなんだろうな……。

森島「交代だ！ 次、大海と鬼道、不動と矢澤に代わって入れ！」

あつ、順番来たか……

龍也「行くか……」

鬼道「ああ……」

そしてメンバー交代。にこと不動は休憩に入る。

にこ「あゝ……つん！」ゴクッ

にこがボトルに入った水を飲むと、それを不動に渡す。

にこ「はい不動……」

不動「サンキュ……。んん…」グビッ

にこ「にしても、相変わらず大海はいい動きね。大会始まってからどんどん動き出しオフ・ザ・ボールが良くなってきてるわ……」

不動「まあアイツだからな……」

二人が話していると、果南が寄って来た。

果南「不動くんは龍也と幼馴染なんだよね？ 昔の龍也もこんなだったの？」

不動「ああ……。昔からアイツは周りとは別格の強さだったぜ？ それでアイツは孤立してたが、あれだけ上手いやつに喰らいついてればそれを辞めた奴らとは俺もいい方向に差をつけられると思っただけからな。アイツと一緒に練習してたんだ。俺は損得感情ありきの打算だったんだが、アイツは気にしてなかったみたいだしな」

果南「まあ昔の龍也なら一緒にやってくれただけで有り難かつただろうしね。利用されてても利害は一致してたわけか」

にこ「随分歪な関係ね……」

不動「まあ昔は俺も荒れてたからな……。円堂たちと出会ってしばらく経つまでは」
不動は昔を思い出して感慨に拭ける。果南とにこは「きつと色々あつて変わったんだろうな……」と、不動を優しく見つめていた。

にこ「あつ、大海が決めたわ」

龍也が権代さんからゴールを奪い取りここで監督が集合を掛ける。

森島「よし、今日は練習終了。明日の韓国線に向けてゆつくりと休む様に！」

日本『はい!!』

そして片付けをした後、夕飯を食べて皆早めに就寝した。

明日、いよいよ韓国戦!!

― 続く ―

After story : 韓国戦開始!

今日はいよいよ韓国戦当日。会場となる磐田スタジアムには大勢の日本サポーター、そして韓国サポーターが詰め掛けていた。

王将「日本と韓国の皆さんお待たせいたしました！ これより、アメリカW杯アジア地区予選第4戦、日本対韓国の試合が始まります!!」

解説「日本と韓国は同じアジア地区で長年のライバル同士。既に観客席でもサポーターの応援合戦が繰り広げられていますね！」

そう。観客席では、既に日本の応援団と韓国の応援団が旗を振りながら応援合戦を繰り広げている。

試合が始まったら、益々ヒートアップしそうだ。

王将「さあ、両チームスターティングメンバーの発表です!!」

韓国

G K

ジョンズ

D F

ドヒョン

ヨナク

ヨンハ

ソクン

D M F チャンスウ

O M F ゴンウ アフロデイ ハオ

F W ソンチュン ウンビヨク

日本

F W 龍也 豪炎寺

O M F 堂峯 果南 にご

D M F 鬼道 不動

D F 吹雪 聖良 風丸

G K 立向居

両チームスターティングメンバーが発表され、試合前の国家斉唱、チーム同士・審判団への挨拶を終え、フィールドの持ち場に立つ。

韓国ボールから試合開始だ。

そして審判が時計を見て笛を口に持って来て右手を上挙げる。

ピイイイーツ!!

審判の試合開始のホイッスルが鳴り、韓国ボールから試合が始まる。

ボールはチャンスウに渡り、ドリブルで攻め上がってくる。

龍也「豪炎寺！ 囲んで奪うぞ！」

豪炎寺「分かった！」

日本はFWの二人が前線から連携してプレスを掛ける。流石にこれはチャンスウはパスを選択。

ボールはゴンウに渡る。

堂峯「行かせるかつ！」

堂峯さんが直ぐにゴンウに対してプレッシング。しかしここで相手は必殺技を使用した。

ゴンウ「フレイムボール・S」!!」

ボン！ボンボン！ ボオアアアアツ!!

ゴンウが空中からボールを地面に蹴り込むとその場から火柱が発生。堂峯さんに迫って行きふっ飛ばして突破した。

堂峯「ツ!! やるな！」

ゴンウ「ソynchun!!」

ここでボールはFWのソynchunへ。すかさず鬼道がマークに着く。

ソynchun（っ！ 抜くのは無理か……？）

そこは流石の鬼道。抜かれないことを徹底し、適切な間合いを保つディフェンス。相手は完全に攻めあぐねていた。

アフロディ「こつちだ!!」

そこへアフロディが脇から、ゴール前へと走る。すかさずパスを出すソynchun。

アフロディ「まずは1点頂くよ!!」

アフロディがシュート体勢に入ると、アフロディの背に金色の天使の様な翼が顕現し、ボールとともに上空へと飛翔する。そしてボールが黄金色の雷に包まれると、それを身を翻し、思い切り踵落として叩きつけた。

アフロディ「ゴッドブレイク・Gx」!!」

以前とは比べ物にならないアフロディのシュート。個人の素の実力が上がっている為、F F Iの時の「カオスブレイク」よりもパワーが出ている。

聖良「通しません!」 「超・スノーマウンテン」!!」ガキイイイインツ!!

しかし聖良がシュートブロックを挟む。雪山の冷気がシュートのオーラを凍結し、その後物理的なブロックが入る。

しかし、

ピシッ、ピシピシ……ッ!!

次第に雪山に亀裂が入って行き、

バギヤアアアアアアアアンツ!!

雪山は音を立てて崩れ去り、シュートは尚も突き進む。しかしかなりパワーは奪えた

筈だ。

立向居「よし、これなら!! ハアあああああつ!!」

立向居の周りに「魔王・ザ・ハンド」の暗黒のオーラが集まる。しかし立向居は更にオーラの量を上げて出力を跳ね上げる。

立向居「止めるっ!!」バシィッ!!

しかしオーラはオーラのまままで身体を包むように展開された。俺にも分かる。あれでは折角のパワーが垂れ流されておりエネルギー効率にムダだらけだ。

立向居「ぐうううっ!!」

立向居も思ったよりも力が入らないのか徐々に押されていく。

吹雪「不味い!」ダッ!

立向居も必死に耐えるが、

立向居「ぐっ、うあああああつ?!」バチィンッ!

立向居は弾かれてしまい、ボールはそのままゴールに……

吹雪「させるかっ!!」ドカァッ!!

しかしここで立向居が止めきれないと判断しゴールに走っていた吹雪が入る寸前でナイスクリア。

ボールを前線に向けて蹴り飛ばす。

果南「よつと！ 吹雪くんナイス!!」

ボールを受け取った果南はドリブルで攻め上がる。すると、

ハオ・チャンスウ「!!」ピタッ!

韓国は2人掛かりで止めに来た。“弾きフェイント”で抜くには、いかんせん相手の位置取りが巧い。無理に抜けば逆に取られるだろう。

果南「なら……にこちゃん！」パスッ!

ここで果南はパスを選択。にこにボールが渡る。が、

アフロディ・ウンビョク「……」ピタッ!

しかし同様に二人で止めに入る。しかもまたさつきと状況が変わらない。

にこ「っ!! こっちもダメ!!」パスッ!

ここでにこは鬼道にボールを下げる。

鬼道はドリブルではなくパスを使って組み立てようとする。

鬼道「松浦!」

果南「っ! 豪炎寺くん!」

豪炎寺「矢澤!!」

右ラインの三人がトライアングルを形成。パスを繋ぎながら攻め上がっていく。

すると、

ススッ……

韓国ディフェンスはコチラの選手と距離を取り始め。パスカットを狙う動き。下手にパスは出せなくなった。

にこ「チャンス！ ……ッ！」

しかし距離を取ったディフェンスとは別働隊のディフェンスが2人にこを阻む。

にこ「あくもう！ 鬱陶しい!!」

するとにこは必殺技で強引に抜きに掛かる。

にこ「スーパーエラシコ・S」!!」

韓国ディフェンスを突破したにこ。が、

ソクン「地走り火炎」!!」

必殺技発動直後の無防備な隙を狙い、韓国の必殺技が襲いかかり、ボールを奪われてしまった。

コイツラの動き………っ!! そうか!!

龍也「皆！ コイツラのディフェンスは”エイト8ウエーブ”とディフェンス&フォロー

を組み合わせた物だ!! ドリブルで突っ込めば二人で止めに入って、パスを回せば距離を取ってドリブル勝負に引き摺り込んで、強引に突破すれば一瞬の隙を必殺ディフェンスで狙う気なんだ!!」

鬼道「っ!! やはりか!!」

不動「だが、だとすると厄介だぞ？」

今の日本に、このチームディフェンスを破れる選手は……恐らくアイツしかない。

ソクン「チャンススウ!!」

ソクンからチャンススウへとパスが飛ぶ。

龍也「させるかっ!!」バチツ!

しかし前線から戻った龍也が空中でカットする。そのまま着地して攻め上がろうとする。

ヨナク「行かせんっ!!」バチツ!

しかし着地の瞬間を狙いヨナクがスライディングでボールを弾き、ボールはラインを割って外に出る。

チャンススウ「アナタは最重要警戒に決まっているでしょう? 以前の教訓は徹底させていただきますよ!」

くそっ……! この試合、下手すりゃあ1点も取れないなんてこともあり得るぞ……。

― 続く ―

After story : 韓国戦前半終了

ボールがタッチラインを割り、日本ボールのローインから試合再開。堂峯さんの投げたボールはショットで鬼道へ。しかしすぐにとゴンウとソynchunが二人で止めに入る。

相変わらず抜かれてもすぐに奪えるフォロ位置にアフロデイがいる。

鬼道「くっ！ 不動!!」パスツ

鬼道からボールは不動へ。不動はパスボールをマークに着かれる前にダイレクトで果南に出す。

果南「ナイス!!」

ボールを受け取った果南。しかしすぐにアフロデイとチャンスウが止めに入る。

果南「くっ！ なら!!」

果南が必殺技の体勢に入る。果南がボールを小さく蹴るとボールがサーフボードのように変化。背後から大津波が巻き起こる。

果南「ライド・ア・ウェーブ!!」

大津波をボール製サーフボードで波乗り。デイフェンス二人に波が打ち付け吹き飛

ばす。が、

ヨンハ「地走り火炎・改」!!」ボオアアツ!!」

果南「あつ!!」

しかしここで韓国のスปีド重視の必殺デイフェンス。ボールを奪われた。

ヨンハ「チャンスウ!!」

ここから韓国のカウンター攻撃。ボールはチャンスウへ。

チャンスウ「ハハハッ! 幾らやっても無駄ですよ!!」

チャンスウがドリブルで突っ込んで来る。そこに鬼道が止めに入る。

鬼道「止め…っ!?!」

チャンスウ「絶・奈落落とし」!!」グシャアツ!

しかしチャンスウは冷静に必殺技で対処。空中から地面に叩きつけられたボールが

鬼道の顔面に直撃し、鬼道は吹っ飛ぶ。

不動「鬼道!!」

鬼道「俺に構うな! 止めろ!!」

チャンスウ「アフロデイ! 決めなさい!!」ドツ!

ボールはチャンスウからアフロデイへ飛ぶ。

アフロデイ「今度は決めるよ!」ダンツ!!

アフロデイが猛然とドリブルで向かってくる。

聖良「っ!! 来ますよ! デイフェンス!!」

吹雪・風丸「「おう!!」」

すると、アフロデイは必殺技の構えに入り、アフロデイが指を鳴らす。

アフロデイ「「絶・ヘブンスタイム」」パチンツ

するとフィールド場の時間が停止。止まった時間の中をアフロデイは歩いて3人を突破する。

アフロデイ スツ

すると時間が再び動き始める。目の前から急にアフロデイがいなくなった様に感じた3人は急いで周囲を見渡すが!

ブワアツ!!

聖良「後っ!? キヤアアアアアツ!!」

風丸「くっ、うわあああっ!!」

吹雪「うあああああっ?!」

突然突風が吹き三人を吹き飛ばす。そして残すはキーパーのみとなり、アフロデイはシュート体勢に入る。

アフロデイ「行くよ……」

立向居「っ！ 来いっ!!」

アフロデイの背に黄金色の翼が顕現し、ボールとともに天高く飛翔。ボールに金色の神の雷を纏わせる。

アフロデイ「『ゴッドブレイク・G X』!!」ドガアアアアアッ!!

回転踵落としによるアフロデイのシュートが立向居を襲う。

立向居「止めるっ!! ハアあああああっ!!」

再び立向居はオーラの総量を跳ね上げて身体に纏わせる。しかし今度はオーラ量はそのままに範囲を縮小させ密度を高める。

バシィツ!!

立向居「(っ！ さっきよりはイケる!!) うおおおっ!!」

立向居も粘る。だが足は徐々に引きずられていく。

立向居「だっ、ダメだ…っ!! うわあああああっ!!」

アフロデイのシュートは轟音と主に日本ゴールに突き刺さった。

王将「ゴオオオオオオオオオオオオオオオ!! 入ってしまった韓国先制ーっ!!」

瞬間、韓国サポーターが湧く。それとは対照的に日本サポーター側は静まり返ってしまふ。

にこ「不味いわよ……………。ただでさえシュートまで行けないのに…………」

豪炎寺「くそっ、どうすれば良いんだ……」

龍也「こうなったら一か八かだが……」

果南「っ?! 何か策があるの?」

龍也「いや、賭けみたいな物なんだが……次のキックオフでの開幕から俺と吹雪と果南で「グラントドウェーブ」撃ってみないか? あの技なら、ブロックが入ってもブロックごと押し流せる」

果南「確かに賭けだけど、もうそれくらいしか打つ手が無いか……」

吹雪「でも、威力が大分落ちるよ?」

龍也「だから賭けなんだよ……プロになってからの俺たちの成長が勝つか相手の実力の向上が勝つか……」

不動「だが他に手が無い。やるぞ」

そして日本は再開の位置につく。

王将「おや? これはどうした? 日本、センターサークルに松浦、大海、吹雪の三人入っています」

解説「センターサークルに3人……何かする気でしょうか?」

そして、審判が笛を鳴らす。

果南「行くよ!!」

進化した必殺技により、シュートは弾かれた。

ジョンス（っ！ あれだけブロックしたのになんてパワーだ!!）

龍也「…？」

その様子を龍也は見ていた。そしてここで、前半終了の笛が鳴った。

日本 0 ー 1 韓国

前半終了。

ー 続く ー

A f t e r S t o r y : 立向居の覚醒

韓国戦、前半を0-1の日本1点ビハインドで終了し現在はハーフタイム。なんとかしてシュートまで持っていきたいところだが、その前にデフエンスで止められてしまう。

龍也「どうするかな……」

果南「シュートまで行けないもんね……」

するとここで監督が話し始める。

森島「確かに韓国のデフエンスは脅威だが、最後のお前らのロングシュート、入りはしなかったが確実に相手は焦っていた。初見をぶつけ続けて意表を突ければいつかは綻びが生じる。そこを突け」

日本「はい!!」

森島「よし、じゃメンバーを代える。豪炎寺、綺羅と交代だ」

豪炎寺「分かりました。頼むぞツバサ！」

ツバサ「ええ!!」

森島「それと立向居、どうしても上手く行かなければ、魔王を飲み込んでしまえ」

立向居「えっ? どういう……」

審判「後半始めます!!」

森島「行つて来い!!」

日本『はい!!!』

立向居「……………」

そして両チームフィールドに戻ってくる。韓国はもう勝ちムードだ。今に見てろよ………?

王将「おっと、日本はFWを一人代えて来ましたね。豪炎寺に代わって綺羅ツバサが入った様です」

解説「綺羅のプレースタイルは豪炎寺よりも対応力がありますからね。そこに注目したいところです!」

そして日本ボールで後半開始のため、龍也とツバサがセンターサークルに入る。

龍也「行くぞ……」

ツバサ「ええ!!」

そして、ピイイーンツ!!

審判の笛と共に後半開始。ボールは果南に渡り、パスを繋いで攻めていく。

ツバサ「(相変わらず大海くんはキツチリマークしてるわね……なら!!) こっち!!」

そして弾かれたボールはアフロデイへ。

アフロデイ「行くよ……」

風丸「止める!! 吹雪!!」

吹雪「うん!!」

今度はディフェンスに変化をつけ、風丸と吹雪が時間差でディフェンスを掛けに行く。まずは風丸だ。

風丸「絶・スピニングフェエ…」「絶・ヘブンスタイム」パチンツ」

しかし風丸が必殺ディフェンスを仕掛けるがアフロデイは「ヘブンスタイム」を使用。風丸を突破する。そして時間がまた流れ始める。

風丸「っ!! 後ろ…うわぁっ!!」

突風が風丸を吹き飛ばす。が!!

吹雪「超・スノーエンジェル」!!」ガキイイインツ!!

アフロデイ「っ!! バカな!」

しかし時間差で来ていた吹雪が「ヘブンスタイム」の一連の動作の終了直後を狙い必殺ディフェンス。ボールを奪い取った。

吹雪「やっぱり…その技には、連続発動できないっていう欠点があるんだね」

アフロデイ「っ!!」

風丸「恐らく、一度打つと次に打つまでに数秒のインターバルが必要なんじゃないか？」

アフロデイ「見破られた!？」

吹雪「松浦さん!!」ドッ!

吹雪が前線にボールを蹴る。ボールは果南へ……

果南「よし、速k……」「させませんよっ!」っ!!」

しかし戻っていたチャンスウにカットされる。

チャンスウ「ソンチュン!!」ドッ!

またしても韓国の攻撃。ボールはソンチュンへ。

吹雪「マズい!!」ダッ!

吹雪がダツシユで止めに入る。だが

ソンチュン「中入れ!!」ドッ!

ソンチュンの右足による内回インサイドスピン転センターリング。ボールはゴールからやや逃げていく

ように中へと入って行く。

併せるのは、

アフロデイ「貰うよ!!」

鬼道「っ! 止めろ!!」

アフロデイが背に翼を顕現させて飛翔。飛んできたボールに金色の雷を纏わせ、
直蹴撃弾ダイレクトシュートで叩き込んだ。

アフロデイ「ゴッドブレイク・Gx」!! ドゴオオオオオオオオオオッ!!

向かってくるアフロデイのシュート。立向居も迎え撃つ構えを取る。

アフロデイ「君にボクのシュートは止められない! ボクたちの勝ちだ!!」

森島（上手く行かなければ、魔王を飲み込んでしまえ……）

立向居「っ!! そうか! 何も技の発動は身体の外だけでするわけじゃない!! 内側

でオーラをコントロールできなきやダメなんだ!」

すると、立向居は更にオーラの量を跳ね上げる。しかし今度はそのオーラを全て自身の身体の内側で…体内で爆発させる。

立向居「感じる…今までは比喩物にならない力を!!」

すると立向居の身体に黒く禍々しい鎧の様なパーツが顕現し装着される。そしてそのまま立向居はシュートに両手を突き出した。

立向居「『デビルズアーマー』!!」ガシィィィィィッ!!

シユルルル…!!

「ゴッドブレイク」と立向居の新技がぶつかり合う。そして段々と威力を失っていく
 「ゴッドブレイク」。そして完全に停止した。

立向居「止めた……止めたぞおおーっ!!」

日本サポーターが歓声を上げる。韓国サポーターは“入った!”と思っていたため動
 揺している。

円堂「スゲエ立向居!!」

権代「ああ……やるなアイツ!!」

立向居「行けえ! 反撃だあっ!!」

そして、立向居は前線にボールを大きく蹴り出した。

日本 0 1 韓国

1 続く 1

After story : 韓国戦決着!!

ついに立向居が新たな技を完成させ「ゴッドブレイク」を単独で止めた。そこからゴールキックで一氣にカウンターで攻勢に転じる日本。

にこ「果南！ 行ったわよ!!」

果南「よつと!! 一氣に行くよ!!」

果南がドリブルで攻め上がる。そこに韓国もデイフェンスに入る。

ヨナク・ヨンハ「っ!!」ピタッ!

デイフェンスに入った韓国。だが人数が足りていない。

果南「抜くのはムリだね……でも! にこちゃん!!」パスツ!!

果南からにこへの斜めのパス。にこはフリーで受け取るがソクンがすぐに止めに入る。

にこ「やつと崩れたわね!!」「スーパーエラシコ・S!!」

にこは必殺技を発動。ソクンを抜いた。フォローには誰も来れていない。

にこ「チャンス!!」

にこは必殺シュートの体勢に入る。炎を纏って回転しながらボールとともに跳躍し、

爆炎と超回転を纏ったシュートを蹴り落とす。

にこ「超・爆熱スクリュー!!」ドゴオオオオンツ!!

にこの必殺シュートがジョンスに襲いかかる。相手も必殺技で応戦する。

ジョンス「絶・大爆発張りて!! ハイハイハイイイイーッ!!」ドガアアアアンツ
!!

しかしにこのシュートは弾き返されてしまう。弾かれたボールの落下地点にはチャンスウがおり、今度は韓国のカウンター。

鬼道「止める!!」

チャンスウ「絶・奈落落とし!!」ドガアアアアアツ!!

チャンスウが空中から地面に叩きつけたボールが跳ねて鬼道の顔面に直撃。鬼道は弾き飛ばされた。

不動「今だ!!」

技の終了直後の隙を狙い不動がスライディングを仕掛ける。しかしその前にチャンスウはパスを出した。

チャンスウ「アフロデイ!!」パスツ!!

そしてボールはアフロデイへと渡る。

アフロデイ「今度は決めるよ!!」

アフロデイがドリブルで攻め上がって来る。しかしこちらも吹雪と風丸が時間差で止めに入る。

吹雪「超・スノーエンジェル!!」ガキイイインツ!!

吹雪の技がアフロデイを氷漬けにしようと襲いかかる。

アフロデイ「くっ!!」バツ!!

しかしアフロデイはサイドにズレて技を躲す。しかし今度は風丸が来る。

風丸「超・スピニングフェンス!!」

今度は風丸のブロック技。巨大な竜巻がボールを奪おうと襲いかかる。

アフロデイ「絶・ヘブンズタイム!」パチンツ!!

アフロデイの必殺技が発動。止められた時間の中をアフロデイは悠然と突破する。

アフロデイ「決めるよ!!」

再び時間が動き始めると、アフロデイがシュート体勢に入る。背中に金色の翼を顕現させ、ボールとともに飛翔。黄金の雷を纏わせ、回転踵落としを叩き込む。

アフロデイ「ゴッドブレイク・GX!!」

ドゴオオオオンツ!!

アフロデイのシュートが日本ゴールに迫る。立向居も必殺技で対抗する。

立向居「今度も止める!!」

立向居が莫大なオーラに包まれる。そしてそのオーラを全て体内に取り込んで凝縮。身体に溢れんばかりのパワーがみなぎる。すると立向居の身体にオーラが漆黒の鎧となつて全身に装着される。

立向居「『デビルズアーマー』!!」ガチイイイイイイツ!!

そして、再び立向居は「ゴッドブレイク」を止めてみせた。

アフロディ「!!」

だが、試合はまもなく終了を迎える。このままでは負けてしまう。ここまで来たら引き分け狙いでやるしかねえ!!

龍也「ツバサ! 俺と一緒に戻れ!!」

ツバサ「えっ!? 何で: 「良いから戻れ!!」 わ、分かった!!」

ツバサと龍也は大急ぎで自陣に戻っていく。

龍也「立向居! ツバサにパスしろ!!」

立向居「っ! はい!!」ドッ!!

そして、自陣のゴール前でツバサがボールを持ち、立向居の前に龍也が立つ。

龍也「ツバサ! 「天空落とし」を全力で俺に向けて撃て!!」

ツバサ「えっ!? 何で!? 「良いから撃て!!」 このままじゃ負けるぞ!!」分かったわよ

!!」

られた。

ジョンス「っ!!」「絶・大爆発張りて…っ!!ぐわああああっ?!」

しかし、シュートはキーパー吹き飛ばし、ゴールネットに突き刺さった。

王将「ゴオオオオオオオオオオオ!! 日本同点に追いついたあっ!!」

解説「何ですか今の…? あんなに離れていたのに威力が全く落ちていなかった…

というよりむしろ上がっていたような…? そんなことあり得るんでしょうかね?」

チャンスウ「くっ、クソっ!!」

日本が同点に追いつきイー。韓国ボールで試合再開。だが、

ピッ、ピッ、ピイイイーッ!!

王将「ここで試合終了のホイッスル!! 日本vs韓国の試合は、引き分けに終わっ

たあー!!」

韓国サポーターは最初にリードしただけに煮え切らない表情。日本サポーターは負

けなかった事に安堵している者が多くいた。

龍也「っ!!」

果南「龍也、足……」

龍也「平気だ……後でちゃんとアイシングしとく」

鬼道「とにかく、負けずにすんだことを良かったと思うべきか……」

不動「だが、同じような戦術を使うチームが他にもいたらまずいな……」

龍也「だな。もう少しチーム練習を積むべきか……」

堂峯・吉川「……………」

その様子を、堂峯さんと…ベンチから吉川さんが見ていた。

― 続く ―

A f t e r S t o r y : 再会

韓国戦を何とか引き分けに持ち込んだ日本代表。次はカタールとの試合になる。そしてその後のサウジアラビア戦が最終戦となる。

韓国戦の反省を踏まえて、今日は俺たちはチームの連携練習を主体でやっていた。

ツバサ「果南!!」パスッ!!

果南「ツバサさんナイス!! ハアアアアアッ!!」ドガアッ!!

果南のシュートがゴールネットに吸い込まれ、ひとまず休憩時間になった。

龍也「ふう……」「はい龍也!」ああ、ありがとう果南」

果南からドリントクを受け取り口の中を潤す龍也。

にこ「そういえばこの後の話だと何かあるのよね?」

龍也「ああ、監督はそう言ってたな……」

すると、

ドガアアアアアアアアアアッ!!

日本代表『!?!』

突然どこからともなく龍也に向けてすごい勢いでボールが飛んできた。

龍也「っ!!」ドガアアアアッ!!

龍也が咄嗟にそのボールを蹴り返すと人影が1つ跳躍し、ボールを地面に叩きつけた。その衝撃で、フィールドに砂煙が舞う。

果南「ゲホツゲホツ……何っ!？」

そして砂煙が晴れると、

龍也「ああーっ!!」

そこには、F F I で共に戦った仲間たちや、プロリーグに進まなかった故に代表には呼ばれなかった者。しかし間違はなく実力は日本でもトップクラスの選手たちが勢ぞろいしていた。

穂乃果「やつほ! 久しぶりの挨拶、どうだったかな?」

龍也「穂乃果!! 園田に南!」

果南「千歌に、曜、ダイヤに善子ちゃんも!!」

ここ「凜もいるわよ!! それに希も!!」

ツバサ「あんじゅに英玲奈まで!!」

果南「何で皆が……」「私が呼んだんだ」監督?」

そして、監督から説明がされる。

森島「今後の戦いに備えて、彼女たちの中から追加招集メンバーを決定する」

日本代表『?!』

ウソだろ……? それってつまり!!

果南「また、世界の舞台で曜や千歌たちと一緒に戦えるかもしれないってこと!!」

俺たちの中の大多数が喜ぶ中、吉川さんや三河さんたちは……、

三河「監督! 彼女たちはプロの選手じゃないですよ!! なのに何故?」

森島「何も考えてない訳じゃない。今の日本のサッカーに足りない力を持った選手たちを集めた。それだけだ」

吉川「しかし、プロの舞台で頑張ってる選手たちがなんというか……」

森島「それは大丈夫だ。お前たちの知らないところで彼女たちと日本の全プロチームで試合を行っていた。もちろんお前たちの所属チームともだ。その結果、彼女たちは1点も取られずに全勝だ。納得するしか無いだろう?」

堂峯・東野「!?!」

なるほど、力づくで認めさせた訳ね。まあ実力を示すのが一番手っ取り早いか。(つてか、レイジさんや春咲たち負けたんだ……)

森島「そして今日は彼女たちとお前たちで今後の試合に向けての調整試合を行う。彼女たちにとつては追加招集メンバーに選ばれるための選考試合となる。全力で挑むように」

日本代表・女子『(は、) はい!!』

森島「それでは試合は20分後に行く。各自準備をしておくように」

そして監督は建物の中に戻っていった。

穂乃果「えへへ、ビックリした!」

にこ「そりゃあ驚くわよ……けど、楽しみでもあるわ!!」

龍也「だな!!」

鬼道「実力は鈍ってないんだろな?」

あんじゅ「何言ってるの? もっと進化してるに決まってるじゃない?」

英玲奈「プロの道には進まなかったが、練習は続けてたからな」

果南「そっか!!」

円堂「またお前らとやれるかもしれないなんて嬉しいぜ!! 負けないからな!!」

千歌「私達だって負けないよ!!」

曜「私達の成長を見るであります!!」

ダイヤ「果南さん、負けませんわよ!!」

果南「臨むところ!! ところで鞠莉は?」

希「ああ……鞠莉ちはイタリア、エリチはロシアの代表に呼ばれたみたいやよ?」

FFIメンバー『は!』

これは、これから激戦の予感がする……。

┆ 続く ┆

A f t e r s t o r y : 選抜戦開始

穂乃果たちと再会し、再び共に戦えることが分かりそのメンバーの選考試合が始まるうとしていた。

メンバーは以下の通りだ。

選抜メンバー

G K 英玲奈

D F 善子 希 あんじゅ

D M F 千歌 ダイヤ

O M F 曜 海未 ことり

F W 凛 穂乃果

日本代表

F W 龍也 ツバサ

O M F 東野 果南 堂峯

D M F 鬼道

D F 三河 吉川 聖良 風丸

G K

権代

選手が位置に付き、選抜チームのキックオフから試合開始だ。

コーチ「それでは、キックオフ!!」

ピイイイーッ!!

審判を務めるコーチの笛で試合が始まる。選抜チームはパスを繋いで一気に攻め上がってくる。ボールは海未が持つ。

果南「行かせないよっ!!」

果南がすぐに止めに入る。しかしここで海未は必殺技の構えに入る。

海未「スプリントワープ・Gx!!」ビュンツビュンツビュンツ!!

陸上のスプリンターも真つ青な超加速で一気に果南を突破した海未。そこから曜にパスを出した。しかしかなり前に転がり届くか微妙な距離だ。

三河「パスミスだ! 届かない!!」

曜「全速前進く…ヨソソ口おおおーっ!!」ドギユンツ!!

掛け声からの超加速で一気に走り抜ける曜。届かないと思われたボールに追いついた。

三河・吉川「!?!」

そして一気に深くまで攻め込んだ選抜イレブン。三河さんが曜を止めに入る。

三河「プロじゃない者がW杯など不可能だと教えてやる!!」

曜「プロじゃなくても上手い人は五万といるであります!!」

そして曜も必殺技の体勢に入る。一気に急加速しアクロバットな動きからの上をとって突破した。

曜「「絶・イナビカリダツシユ」!!」

堂峯「!? 三河が抜かれた?!」

吉川「くっっ!! FWを警戒しろ!!」

こちらがディフェンス体勢を整える間に穂乃果と凛がゴール前に入ってくる。

曜「いけええええっ!!」ドツ!!

曜が中に向けて回転スピンクロス。しかしボールは凛と穂乃果の真上を通って更に奥へ。

吉川「っ!! FWが囷?!」

ボールは二人の陰から裏街道を通ってファーサイドに走っていた園田に渡る。急いで風丸が止めに行くが……

海未「頼みましたよことり……」トツ

海未はシュートを撃たずに中に転がす。するとそこにはことりが走り込んでいた。ダイアゴナルランか!!

ことり「行くよっっ!!」

ことりがボールを天高く蹴り上げる。するとこどりの背に純白の翼が顕現し、それを羽ばたかせぐんぐん飛翔していき遙か上空へと到達する。

ことり「イカロスフオール・S」!!」ドゴオオオオオオオツ!!

遙か上空から蹴り落とされたシュートが、落下の勢いと空気摩擦で火炎弾のようになつてゴールに降ってくる。

権代さんはさすがにまずいと思つたのか必殺技で対抗する。

権代「シュートブレイク・A」!!」

権代さんがボール目掛けて蹴りやパンチを連打する。だが、

権代「っ!! 何だこの滅茶苦茶なパワーは……っ!? うわあっ?!」

こどりのシュートは、ゴールネットに突き刺さつた。

ことり「よっし!!」

穂乃果「ナイシュことりちゃん!!」

それを見ていた三河さんたちは、呆然としていた……。

堂峯「何だよあれ……」

東野「余裕でトップレベルのプロクラスだぞ……」

吉川「何であいつらプロにならなかつたんだ……?」

権代「すまん、次は止める」

三河「俺たちもディフェンスしつかりと行きます。少し舐めすぎましたね」

そして代表ボールで試合再開。ボールは果南に渡り、そこに千歌とダイヤが止めに来る。

千歌「行かせないよ果南ちゃん!!」

ダイヤ「止めますわ!!」

果南「《弾チヨッキフェイント》!!」バチッ!ギョんッ!バチッ!ギョんッ!!

しかし果南はボールを足で弾いて縦横無尽にドリブルで駆け回る。二人は協力してディフェンスをかけようとするが、追い掛けているうちにぶつかってしまった。

千歌「痛いっ!!」

ダイヤ「くっ!!」

果南「堂峯さん!!」パスッ!!

果南はここで堂峯さんにパスを出す。するとあんじゆが止めに入る。

あんじゆ「「絶・アステロイドベルト」!!」ドガンドガンドカント!!

あんじゆの周囲が宇宙空間に変わり隕石が周りを漂う。するとあんじゆの合図でそれが一斉に堂峯さんに襲いかかって弾き飛ばした。

あんじゆ「よし、ダイヤさ…「させないわっ!!」っ! ツバサ!!」

ツバサがスライディングでカット。ボールを確保する。

ツバサ「ここから撃つわ!!」

するとツバサはシュート体勢に入る。ツバサがボールと共に天高く跳躍しボールを思い切り蹴り落とす。

ツバサ「超・天空落とし!!」ドゴオオオオオオオオツ!!

宇宙そらがボールと共に降り注ぎ、英玲奈を襲う。

英玲奈「止めるぞ善子、希!!」

善子「ええ!!」

希「行くよっ!!」

三人が構えを取り必殺技を発動する。

英玲奈・善子・希「[[「極・無限の壁」!!]]」ガチィィィィッ!!

ツバサのシュートは、呆気なく地に落ち止められてしまった。

ツバサ「っ!! 嘘でしょ!？」

龍也（思った以上にやるな……。楽しくなりそうだ!!）

選抜チーム 1 ー 0 日本代表

ー 続くー

After story : 巻き返し?

ついに始まったかつての仲間との試合。この試合はプロに進まなかった皆の代表選考を含めた試合であり、久々にみんなとの試合に心を踊らせていた。

しかし、日本代表はことりに先制ゴールを許してしまい、更にはツバサの「天空落とし」は英玲奈、善子、希の「無限の壁」に阻まれゴールならず。

全員が相当にレベルを上げており、俺たちの中には危機感を抱く者もいた。

英玲奈「千歌!!」

英玲奈のロングスローからボールは千歌へと飛ぶ。しかし近くにいた果南が競り合う。

果南「貰うっ!!」バツ!!

二人が落下地点で跳躍し競り合う。が、

千歌「……………」スルッ

なんと千歌は寸前で空中で身体を回転させて果南を受け流した。ボールはそのまま地面に落ち、先に着地した千歌が追いかける。

果南「っ!! やるね千歌!!」

千歌「負けない!! 曜ちゃん!!」ドッ!!

ここで千歌から曜へのパスが飛ぶ。パスは曜に繋がり、そこに三河さんが止めに入る。

三河「止める!!」

曜「っ!!」

曜がフェイクを織り交せて抜こうとするが、三河さんは適切な距離を保ったままそのフェイクに全てついて行く。曜は技を出そうか考えているが、その間合いのせいで技を出せば発動直前に取られると分かっていた。

曜（っ!! さすが……だね!）パスッ!

ここで曜はパスを選択。サイドラインギリギリから、善子が上がってきていた。

善子「ナイスっ!!」パシッ!!

パスを受け取った善子は三河さんを置き去りに深くまで攻め上がる。その間に曜も中へと斬り込んでいく。

三河「っ! くそっ!!」ダッ!

三河さんが追いかける。しかし善子は急停止して三河さんの身体を振る。

三河（っ!!）ガクンッ!!

善子「中!!」ドッ!!

権代さんの右手に聖なる光りがやどり、それが十文字に広がる。そしてそれをシュートに叩きつけた。

権代「ぐううううううううっ!!!」

しかしそれでも二人のシュートは止まらない。権代さんは押し切られてしまい、シュートはゴールに叩き込まれた。

バシユウウウウウンツ!!

曜・「よしっ!!」

千歌「曜ちゃんやったね!!」

パアンっ!!

二人のハイタッチ。ヤバいなこれ……。

権代「クソっ!! (何なんだ彼女たちは? あんな娘たちが日本のどこにいたんだ

!!)」

三河(また俺のところから崩された! くそっ!!)

龍也「……ちよつと調子に乗り過ぎかな?」

そして日本代表ボールで試合再開。ボールは果南に渡り、そのままドリブルで攻め上がる。

千歌「通さないよ!!」

果南「抜く!」サイクロンズ・バミューダ・V3」!!」

果南がドリブル技で千歌を抜いた。

果南「(さて、どうしようかな…「果南!!」龍也?) 分かったよ!!」パスツ!!

果南はゴールの斜め前に浮き球のパスを出した。

善子「トラップして撃つ気ね! 振り向かせないわよ!!」

しかし背後から善子がプレッシャーをかけ、龍也を振り向かせないようにする。

しかし、龍也は浮き球にジャンプするとゴールを背面で見もせずに直接ダイレクトオーバーヘッ

ドで蹴り飛ばした。

龍也「ドラゴンインパクト龍也・蹴撃破<>!!」ドゴオオオオオオオオ!!

振り向けないから撃つてこれないと思っていた英玲奈はビックリ。急いで必殺技を

出そうとするが、

英玲奈(っ! 速っ?!)

バシユウウウウウウ!!

シユートは、凄まじい速さで轟音と共にゴールネットに突き刺さった。

凜「振り向けないのに…しかもあんな体勢で何で撃てるにや?」

穂乃果「しかもそれで決めるんだから凄いよね……」

龍也「よっつし!!」グツ!

前半残り20分。

選抜チーム 2 ー 1 日本代表

ー 続く ー

After story : 同点

龍也のミラクルゴールで1点を返した日本代表。だがまだ1点差で敗けている。前半終了までには何とか同点には行きたいところだが……………、

森島「交代枠を使うか……………」

ここで監督は交代を使う宣言。この試合、代表にとっては実践練習の意味を持っているため交代も使える。

この試合の目的は勝ち負けでは無い。あくまでも選考と練習だ。

コーチ「分かりました。誰を使いますか？」



果南「龍也ナイスゴール!!」

龍也「ああ!! もう1点取るぞ!! ん、誰か交代みたいだな」

出された番号は8番。東野さんだった。

東野「つ……………」

そして東野さんはフィールドの外に出る。

東野「相手、結構な連携レベルだから気をつけるよ？」
にこ「はい!!」

そして、にこが投入される。

選手交代

東野 out ↓ in にこ

鬼道「矢澤、相手マークつくの速いから注意な」
にこ「分かったわ!」

にこが味方と軽い打ち合わせを交わす。

吉川（東野……くそっ！俺達が足を引っ張ってしまったてるじゃないか!!）

三河（このまま終わってたまるかよ!!）

権代（なんとしても止めてやる……!!）

堂峯（俺が決める……!!）

そして選抜チームのキックオフから試合再開。

ピイイーツ!!

蹴られたボールは海未に渡り、ドリブルで攻めながら様子を伺いゲームを組み立てる。

海未「穂乃果!!」ドツ!!

パスは前線の穂乃果に飛ぶ。

吉川（この距離、シュートまでは遠い。パスを出す筈だ!!）

吉川さんはフィールドを見渡す。

吉川（風丸のスピードなら南は抑えられる。となると一番ミスマッチで有利を取れそうなのは……、星空か!!）

吉川さんは凧の元へと走る。

聖良「行かせませんよ!!」

穂乃果「来たね!!（トラップは無理だし、ダイレクトでパスするしか無いか……なら!!）凧ちゃん!!」

パスは凧に飛ぶ。

凧「もらったにやあつ!!」「いや、読みどおりだ!!」ツ!!」

凧がパスに触れる前に、吉川さんが空中胸トラップでカットした。

穂乃果「?! 読まれたの!」

三河「ナイス吉川さん!! こっち!!」

瞬間、一気にサイドを三河さんが駆け上がる。

吉川「三河!!」ドツ!!

パスが三河に渡る。そこに曜がディフェンスに来る。

曜「行かせないでありますっ!!」

三河「認めよう。俺達がお前たちを見くびっていた事を、お前たちの実力を!! だからここからは本気で相手だ!!」
「バルクールドライブ・G X」!!」

三河さんは必殺技を発動。跳躍し、なにもない空中を軽く足場にアクロバティックな高速ムーヴ。

曜を突破した。

曜「くっ!!」

善子「(まずいっ!!) 止めるわ!!」

三河さんを止めようと、善子が前に出る。

希「善子ちゃん釣り出されたらアカン! 戻って!!」

善子「えっ!？」

三河「遅えよ! 大海!!」

パスが龍也に飛ぶ。龍也はそれを直蹴撃弾ダイレクトシュートで撃とうとする。

希「させへんっ!!」バツ!!

希が撃つ前にカットしようと足を伸ばす。

龍也「っ!!」

ガッ!! ドシャアッ!!

二人は盛大にクラツシユ。ここで審判の笛が鳴った。

審判「東條希、イエローカード!!」

ここで希にイエローカードが出された。まあ危険なプレーだったしな。

龍也「大丈夫か希?」

龍也が希に手を貸すと希は手を取って立ち上がる。

希「大丈夫、ケガはしてないよ。大海くんこそ大丈夫やった?」

龍也「ああ、俺は平気だ」

◇◆◆◆◆

穂乃果「希ちゃん、ファールだったけどナイスデイフェンスだったよ。行かないや完

全に決められてた……」

希「ごめん、全部視界に捉えて完全に見えてたのに……。堂峯さんがデイフェンスの嫌がる位置に走ってたから、そっちに意識を割かれて判断が遅れてしまったんや」

凜（希ちゃん、そこまで見えてたのかにや……。?）

希「ごめん、次はノーファウルで止める!!」

さて、ペナルティエリア前でフリーキックを獲得。

キッカーには龍也とにこが立つ。

龍也「にこ、ちよつと相談があるんだが……」

にこ「……?」

そして、龍也がボールに向かって走る。が、蹴らずにそのまま逆サイドに向かって走った。

凜「蹴らない?」

あんじゅ「読めてるわよ!! パスでしょ!」

そして、にこはゴールを狙わずに龍也に向かってパスする。

あんじゅ（シュート性の弾丸パス!! 大海くんはふりむいてない。壁は動けないし、

他もマークから離れられない。私が取る!! ダイビングヘッドなら、ギリギリ届く!!) バツ!!

あんじゅは、ダイビングヘッドで飛び込むが……

あんじゅ（嘘でしょ届かないっ!! 私的最终到達点と大海くんの能力のギリギリを狙ったピンポイントパス!?)

大海「おお、一点照準。さすが……」

そして龍也は反転跳躍ジャンピングターンし、その勢いそのままボレーシュートを叩き込んだ。

龍也「へ龍也・直下蹴弾ドラゴンドライヴ!!」ドゴオオオオオオオオオオ!!

善子「嘘でしょ!?! ボレーでドライブシュート!?!」英玲奈!!」

英玲奈「くそっ、止める!!」バツ!!

英玲奈はボールに向けて手を伸ばし跳躍。そして何とかボールに手が届いた。

英玲奈（やった……っ!）

バチンっ!!

英玲奈（っ!?!）グラッ

しかしシュートの威力が高すぎて触れた手が弾かれボールはそのままゴールに突き刺さった。手が弾かれた衝撃でそして空中で体勢が崩れた英玲奈は地面に叩きつけられた。

バシユウウウウウン!!

ドシヤツ!!

英玲奈(ぐっ!!)

穂乃果「英玲奈さん大丈夫!？」

英玲奈「ああ……大丈夫だ」

善子「なんてシユートよ……」

選抜チームは、畏怖の念を込めて龍也を見つめていた。

選抜チーム 2 1 2 日本代表

1 続く 1

After story: VS選抜チーム 前半終了

またしても龍也のシュートがゴールネットに突き刺さり代表チームは同点に追いつく。選抜チームも声を掛け合いセンターサークルからリスタートだ。

ピイイーーツ!!

蹴られたボールは海未に渡る。そこに龍也がプレッシャーを掛けに行く。

海未「(時間をかけてはまずいですね……)ことり!!」

海未はことりにパスを出す。しかしツバサと堂峯さんが二人で潰しにかかる。

ツバサ「ここでカットよ!!」

堂峯「盗る!!」

ことり「んく……なら必殺技かな?」

するとことりは必殺技の体勢に入る。ことりが舞を踊るようにクルクル回ると、周囲を羽根が舞い散り渦を巻く。

ことり「ワンドーフエザー・V4」!!」

ことりの合図で羽根が一斉に二人に向い包み込み視界を奪う。その隙にことりは二人を突破した。

ツバサ「くっ！」

堂峯「クソつたれ!!」

ことり「穂乃果ちゃん!!」

ことりからのパスが穂乃果に渡る。そこに鬼道と聖良が止めに入る。

鬼道「行かせんぞ!!」

聖良「シユートは撃たせません!!」

穂乃果のシユートコースを完全に塞いだ2人。

しかし、

穂乃果「凜ちゃん!!」パスツ!!

ここで穂乃果はこちらのディフェンスの裏にシユート性のキラーパス。

吉川さんも裏を取られるがそもそもこんな凄い勢いのパスに届くのか?

吉川「届くわけ無い! 貰った!!」

凜「(凜のスピードで……) ぶっ千切るにやあああああつ!!」ドンツ!

凜の凄まじいスプリント力は、あっさりと吉川さんを追い抜きボールを確保。ゴール

前にフリーで抜け出した。

聖良「そんなっ!!」

龍也(速ええ!!)

権代「放ったボールを、目で追う事すらできなかった。気付いたときには決められてた……」

堂峯「ウソだろおい……?」

空気が暗くなるが、代表ボールでリスタート。

ピイイイーッ!!

ボールは鬼道に渡る。何とか前半同点で終えたいが残り時間はもう少ない。

穂乃果「守り切って!! リードして前半終えるよ!!」

ダイヤ「分かっていますわ!! 皆さん気を引き締めて!!」

選抜チーム『『ええ!!』』

選抜チームは大きく引いて守りを固める。前半このまま終える気だ。

鬼道「なんとしても崩す!! 松浦!!」

ボールは果南に渡る。

凜「行かせないにや!!」

凜が果南にプレッシャーを掛ける。

果南（さっきの凜ちゃんのスピードを見るに、私じゃあ抜いても追いつかれる……なら!!）

果南は敢えて海未のいる方にドリブルする。なにかあるのか？

海未「わざわざ私の方に来てくれるとは!! 挟みますよ凜!!」

凜「分かったにや!!」

2人で挟むように果南を捉える。

果南「(釣かった!!)」^{チヨッブ}「弾きドリブル!!」バチッ!ギョんッ!!

果南は海未を凜に対する障害物に使うために海未の更に右側に躲す。

凜「っ!!」(反応遅れた!!)」

千歌「行かせないよっ!!」

ダイヤ「通しませんわ!!」

しかしここで千歌とダイヤが2人で止めに入る。

果南「(来てるんでしょ!!)」にこちゃん!!」ドッ!!

果南はここで左サイドのにこにボールを振る。しかし引いて守っていた曜が突っ込んでくる。

曜(トラップした瞬間を狙う!!)

そして、にこがボールに触れる直後を狙い足を伸ばす曜。

にこ「甘いわよ?」トンッ!

曜「ッ!!」

にこはカットされる前に軽くボールを上を蹴って突っ込んできた曜の上を通して突

破する。

曜「ごめんっ！ 止めてっ!!」

善子「何やってんのよ!!」

急いで善子がフオローに入る。そこへ、

龍也「こつちだ!!」

希（っ!! まずい!!）ダツ!!

希が急いで龍也にプレッシャーを掛けに行く。

にこ「仕方ないわね…利子つけて返しなさいよ!!」トツ!!

にこからのパスが龍也に繋がる。

善子「マズっ!!」

善子は急いでターンして龍也に向かう。

龍也「即日返済!!」トツ!

善子（っ!!）

しかしここで龍也はにこにリターン。善子は身体を左右に振られて動きが硬直する。

にこ「そう来る……」

ここで龍也はゴール前に走る。それを希が、遅れて善子が追いかける。にこには先程

躲された曜が追跡^{チェイシング}を掛ける。

曜「絶対に撃たせない!!」

にこ(っ!) ……良いところいるじゃない!) パスッ!

にこはボールを軽く転がす。そこに走ってきたのは、

果南「ナイスっ!!」

果南だった。

善子「果南っ?! クツ!!」ダツ!!

善子が急いでコースを塞ぎつつ追いかける。果南はそのままドリブルで上がっている。
く。

龍也(おいおい……シユート角度ほとんど無いぞ?)

果南はもうゴールラインを割る辺りまで来ている。当然角度が無さすぎる。

英玲奈「っ!! センタリング警戒!!」

シユートは無いと判断した英玲奈が味方にセンタリングを警戒させる。

果南「甘いねっ!!」ドツ!!

あんじゅ「なっ?!」

ダイヤ「シユート!?!」

果南の放った左足^{レフティ}シユートは上に上がり、ゴール上空で一気に急降下してきた。

穂乃果(縦回転直下蹴弾?)

英玲奈「くそおおおおおっ!!」バツ!!

英玲奈は手を伸ばして真上に跳躍するが、ボールは英玲奈の手の上数センチを通過し、逆のゴールポスト内側に当たり、そのままゴールの中に転がりこんだ。

バシユウツ!!

果南「よおおおおおっしっ!!」グツ!!

果南の渾身のガッツポーズ。そしてここで、前半終了の笛が鳴った。

前半終了。

選抜チーム 3 1 3 日本代表

1 続く 1

After story : 覚醒の墮天使

試合を同点で折り返し、ハーフタイムに入る。危ない場面が多く見受けられ、とてもではないが格の違いを見せることはできていない。

果南「参ったね……。まさか皆があんなに強くなってるなんて……」

鬼道「ああ。プロに進まなかったのに、どこであれ程の力を手に入れる事ができたんだ……」

龍也「さあな。だが、実践練習の機会があつたんじやないか？ でなけりや説明つかねえだろ」

試合に出ていたメンバーが話していると、監督が声を掛ける。

森島「よし、じゃあ後半はメンバーを変えていくぞ。権代、円堂と交代だ。ツバサも豪炎寺と交代な？」

権代「はい……」

ツバサ「分かりました……」

森島「よし、行つて来い！」

メンバーチェンジ

権代 out ↓ in 円堂

ツバサ out ↓ in 豪炎寺

審判「後半戦を始めます!!」

そして両チームフィールドに出る。今度は代表ボールで開始だ。

龍也「開始直後の攻め一本決めきるぞ」

豪炎寺「ああ!!」

穂乃果「皆! 絶対勝つよ!!」

選抜チーム『オオoooooooooo!!』

両チーム気合充分。そして審判が増えに手を当てて逆の手を上挙げ、

ピイイoooooooooo!!

後半開始のホイッスルが鳴った。代表チームは果南、にこ、龍也とパスを繋いで一気に攻め上がる。

ボールは前線で龍也に繋がる。

龍也「よし、ここ一本決める!!」

しかし、

善子「行かせないわ!!」

すかさず善子が止めに入る。龍也と善子の一对一だ。

善子「スウウウ……、はああああ……」

善子の集中力が極限まで高まる。

龍也「ゾクッ! (ツ?!)」

龍也の背に、突如薄ら寒いものが走る。

龍也(今までの善子と何か違う!!)

龍也の研ぎ澄まされた感覚は、一発でそれを感じ取る。

龍也(おもしれえ……行くぞ!!)

龍也が一気に攻め込む。ドリブルで深く踏み込もうとした、次の瞬間!!
パンツ!!

龍也「……………え?」

善子「……………」

龍也は、善子にボールをカットされていた。

果南「えっ!! い、今何が起きたの!?!」

鬼道「大海が動く瞬間…、動き出しのタイミングで奪った……」

三河「驚いたな……」

善子「千歌!!」ドツ!

奪った善子は近くの千歌にパスを出した。

千歌「よし!! 良いよ善子ちゃん!!」

ボールを受け取った千歌はそのままドリブルで攻め上がろうとするが、

果南「させないっ!」ズザザアっ!!

千歌「わっ!!」

果南の鋭いスライディング。千歌からボールを奪い取る。

果南「龍也! 今度は決めてね!!」ドツ!!

再びボールは龍也に渡る。しかしすぐに善子が止めに入り一対一に。しかし今度は

先程よりも距離が遠い。約5メートルくらいか……。

龍也（これだけ距離があれば……）ダツ!!

龍也は一気にスピードに乗ろうとする。が、

善子「……………」ユラアっ

バツ!!

龍也「?!」

日本代表『!?!』

しかし、またしても龍也は何もできずにボールを奪われてしまった。

龍也「くそっ!! (どうなってんだいったい!!)」

ボールを持つ善子に果南が止めに入る。

善子「……………」トッ!

善子ここはサイドにパスを出し、ボールは希へ。

希「穂乃果ちゃん! 行つくよっ!!」ドッ!!

希のロングキック。ボールはカウンターで一氣に前線の穂乃果へ。

鬼道「まずい戻れ!!」

代表も戻るが、ゴール前で穂乃果と聖良が対一になる。

あれが来るぞ!!

聖良「くっ! 止めます!!」

穂乃果「無駄だよ!!」アクセルワールド〈加速世界〉展開!!」

その瞬間、穂乃果の中を流れる時間が数十倍に加速。周りとの時間の流れのズレにより、穂乃果には周囲が止まったような感覚に落ちる。

聖良「っ!! くっ、ここですか!!」

気付いたときには聖良は抜かれており、穂乃果と円堂の勝負になる。

円堂「来い!!」

穂乃果がシュート体勢に入る。穂乃果はボールを上蹴り上げて「ファイアトルネー

龍也「善子、なんか前と明らかに違う……アイツの前で、自由に動けるイメージが湧かない……」

日本代表『!?!?』

善子「そうよ？ 今のヨハネの前では如何なる攻めも無意味よ？」

善子が近付いてくる。

善子「今のヨハネの守備の範囲の中では、ドリブルも、パスも、シュートも、モーションに入った瞬間カットできる。集中力と反射速度を極限まで引き上げることによってね？」

果南「そんな!!」

善子「名付けて〈ディフェンドエリア守備聖域〉!!さすがの大海も成す術ないようね!!」

これはまた厄介な力身に着けやがって……

鬼道「だが、そんな事ができる領域は、決して広くは無いはずだ」

善子「そうね。大体半径6メートルってところかしら？」

半径で6メートル!? それ、かなり広いぞ!!

善子が得意げな顔をする。くそっ、絶対にぶち抜いてやる!!

代表チーム 3 | 4 選抜チーム

|
続
く
|

After story : 激戦

3—4。選抜イレブンのリードで試合再開。さて、善子をどうやってぶち抜くか……。

ピイイイーーツ!!

再開のホイッスルと共に鬼道がボールを持つ。フィールド上の選手の位置取りから最善のパターンを逆算し、パスを繋ぐ指示を出す。

鬼道は果南にパスする。

果南「よつと!! ナイスパス!!」

ドリブルで上がる果南。しかし千歌とダイヤと園田が3人で囲い込みにかかる。

ダイヤ「行かせませんわっ!!」

千歌「ここで潰すよ!!」

果南「っ! 寄せが早い!!」

鬼道「松浦! 堂峰さんにパスだ!!」

丁度3人の囲いの間のコースがパスルートになる位置に堂峰さんが走り込んでいた。

果南は迷わずパスを出す。

果南「堂峯さん!!」パスッ!

堂峯「っし!」

パスを受け取った堂峯さん。しかしそこにあんじゆが止めに入る。

豪炎寺(ここだ! 堂峯さんの選択肢になるよう連動して動く!!)

ここで豪炎寺は堂峯さんの周りを、自分へのパスコースを作りながら走り回る。

あんじゆ(っ!!)パス? 自分で? どっち……!?)

堂峯「豪炎寺…感謝する!!」グンッ!!

あんじゆが豪炎寺に意識を割かれた隙に自身で突破する堂峯さん。そのままシュート体勢に入る。

堂峯「喰らえっ!!」ドゴオオオオおおおんっ!!

堂峯さんの弾丸ミドルシュートが炸裂。ボールはゴールの右下隅に飛んでいく。

英玲奈「させるかっ!!」バツ!!

英玲奈は跳躍しパンチングで弾く。ボールはあんじゆの足元に転がった。

ヤバイ!!

龍也「カウンター来るぞ! 戻れえええっ!!」

その瞬間、あんじゆのロングキックからボールは海未へ。すぐに果南が止めに入る。

果南「行かせないっ!!」

園田「っ!!」

果南と海未のマッチアップ。それを鬼道は一步引いた位置で周囲を見渡して最警戒ルートを脳みそアマタマを使って算出していた。

鬼道（考えろ！ 相手と味方の位置、選手のステータス、全ての状況から最適解を見つけ出すんだ!!）

穂乃果は聖良がマークに着いており、南は風丸がマークに着いている上に前から堂座さんが戻ってきている。

凜は裏への飛び出しが再警戒だが、吉川さんと三河さんがチャレンジ&フォローを徹底できる位置取り。

となると……

鬼道（マークのまだ薄い渡辺が中に入ってくる!!）

鬼道はそれらの思考を一瞬で判断すると、曜の走ってくるであろう弱ウィークポイント点を潰しに向かう。

園田「果南、悪いですがあなたに付き合う気はありませんよ!! 曜!!」

海未は、中へと走り込んだ曜に縦のセンチリングを上げる。

曜「ナイスっ!! 貫つ……!」「いや? 読みどおりだ!!」っ!?

しかし、パスを曜が受け取る前に鬼道がカット。完全に読み勝った。曜「ウソ!! 読まれたの!？」

鬼道「今度はこちらの番だ!! メタレジョン〈超越視界〉!!」

瞬間、鬼道は周囲の状況からの情報処理とプレーの組み立ての思考を並列処理。莫大な情報量から、最適なパターンを読み取る。

鬼道「矢澤!!」パスツ!!

ボールはにこへ。にこはそのままドリブルで上がる。

善子(っ!! 曜はまだ戻れない、アタシが行くべきか? でも大海を離しているの?)
しかし、

千歌「善子ちゃんは行かないで! アタシが行く!!」

善子の代わりに千歌がにこを止めに入る。が、
にこ「あんたじゃ私は止められないわよ!!」瞬間縦一閃!!

にこの高速フェイントであつとつ間に抜き去られる千歌。

千歌「(っ!!)でも時間は稼いだよ!!」

曜「ナイス千歌ちゃんっ!!」ズザアアアッ!!

ここで曜が戻りにこと対峙する。

曜「止めるっ!!」

にこ「あなたの相手はアタシじゃないわ！」トンツ
にこはここで中にボールを転がす。ダーゲットは……

果南「ナイスパス!!」

果南だった。ボールを受け取った果南は、そのままドリブルで攻め上がる。

ダイヤ「っ！ 止めますわ!!」

しかしここでダイヤが止めに入る。果南はここで無理は犯さず、

果南「鬼道くんっ!!」パスッ!!

ヒールでバックパス。ボールを鬼道に預ける。

鬼道「よし、^{メタビジョン}〈超越視界〉!!」

再び鬼道は^{メタビジョン}超越視界を発動。マークの薄い堂峯さんとのワンツーパスでダイヤを躲して攻め上がる。

ダイヤ「っ！ ディフェンス止めて下さい!!」

鬼道 チラッ チラッ

龍也・豪炎寺「!!」

ここで鬼道は龍也、豪炎寺の二人とアイコンタクト。龍也と豪炎寺が共に中に走る。

善子「アンタにシュートは撃たせないわよ!!」

龍也「……………」

あんじゅ「豪炎寺くんマークオツケー!!」

豪炎寺「……………」

そして、龍也と豪炎寺が交錯した一瞬を狙って鬼道はパスを出す。

希（っ！）ちよっ!? ボール保持者が見えない!!）

龍也と豪炎寺は、来たボールを相手に見えないように上へと跳ね上げる。

希「っ!! ボールはどこ!?」「希、上だ!!」っ!!」

英玲奈の声に反応した希。だがボールは上空。そこに誰よりも速く跳躍したのは、

果南「ナイスっ!!」

果南は身体をムチのようにしならせて右足のオーバーヘッドで思い切り蹴り落とし
た。

果南「〈海獣尾叩跳弾〉!!」

果南の右足から放たれたオーバーヘッドはまっすぐゴールラインすれすれを目掛けて
勢い良く落下していく。

英玲奈「っ、止めるっ!!」バツ!!

英玲奈がシュートコースを塞ぐように跳躍するが、

ダアンツ!!

地面に叩きつけられ、勢い良く跳ねたボールは、英玲奈の伸ばした手を躲してゴール

ネットに叩き込まれた。

果南「うらあああああああああつ!!!」
鬼道の〈超越メタレジョン視界〉と果南の〈海獣ドルフィン尾叩跳テイル弾〉で、同点に追いついた。

日本代表 4 ー 4 選抜イレブン
ー 続く ー

A f t e r S t o r y : ス ト ラ イ カ ー

果南のゴールで再び同点に追いついた代表イレブン。だが穂乃果たちもこのまま終わるような奴らじゃない。

千歌「ヤバいね……今日の果南ちゃん」

千歌がユニフォームの襟で口元の汗を拭いながらチームメイトに問いかける。

ダイヤ「ええ……。もう3点目、ハットトリックですわよ……」

ダイヤも腕で額の汗を拭いながらどうしようかと問う。

穂乃果「今の果南ちゃんは起点にも決め手にもなれる。フィニッシャー自由にさせたらヤバイよ

……」

希「そうやね。取り敢えず果南ちゃんにはウチが付く。大海くんには善子ちゃん、あんじゅちゃんはウチの果南ちゃんマークのフォローをできる位置に居てくれると助かるよ」

あんじゅ「それはいいけど……豪炎寺くんは良いの？」

希「正直、今の豪炎寺くん単体なら英玲奈ちゃん1人で止められるよ。それプラス堂峯さんもね」

ことり「分かった。崩すなら私の左サイドからだね」

チームの方針が決まり、ポジションに戻る選抜チーム。

穂乃果「さあ行くよ!!」

選抜チーム『おう!!』

そして、審判の笛が鳴る。

ピイイイイーッ!!

笛と共にボールを海未に戻す。それを龍也（俺）は速攻でプレスを掛けに行く。

海未（っ！ 寄せ速い!!）

焦る海未。しかし視界の端にことりを捉え、龍也が届く前にパスを出す。

海未「ことり!!」

パスがサイドに飛ぶ。しかし風丸が上がり、相手との距離を詰めてカットに向かう。

風丸（俺のスピードなら、ボールに触れるのは俺が一瞬速い！ 全速前進!!）ダダダ

ダダッ!!

風丸は一気に急加速。落ちた瞬間を狙いに行く。

ことり（分かっているよ。私じゃあこのマッチアップに勝てないことは海未ちゃんなら分かっている。だからこのボールには、私の方へと転がるバックスピンの掛かっている!!）

そしてボールが着弾。風丸が足を伸ばすが、
ギョルルル ダンッ！

ことり（来たっ!!）

風丸（っ?! バックスピン!!）

ことりの方へと向かったボールを、ことりは左足直接の内^{ダイレクト}回^{インサイドスピン}転クロスで中へとセンタリングを入れる。

ことり「中!!」ドッ！

中へと飛んだボール。そこへ飛び込んできたのは、

穂乃果「うおおおっ!!」

凜「いやあああああっ!!」

2人共それぞれニアとファー両サイドから「自分が決める!!」というストライカーとしての本能剥き出しで突っ込んでくる。

聖良「これどっちですか!？」

吉川「くっ、鹿角は高坂に付け！俺と三河は星空に付く!!」

こちらのディフェンスがそれぞれ判断してマークに付く。

しかし……、

海未（待つてましたよ。そっちの意識が2人だけに集中するこの瞬間、ディフェンス

の死角を通って更に外側の裏街道へ!!)

こちらのディフェンスの死角。意識の隙を付いた海未がゴール前右15メートル地点にまで侵入する。

そして、ことりの放ったクロスはそれを見越していた様に穂乃果、凜の頭上を素通りし海未の足元目掛けて飛んでいく。

吉川「っ!? しまっ!!」

三河「ダメだ! 間に合わない!!」

海未「貰っ……!!」ゾクウツ!

瞬間、海未は背筋に悪寒を感じた。

海未(ちよつと待って下さい……。なんで!? アナタがこんな所に!!)

? 「やつぱここだよな。ことり、海未。この瞬間、ここが1番……ゴールの匂いがする!!」パシツ!!

そしていつの間にか自陣ゴール前まで戻っていた龍也が海未へのボールをカットした。

凜「にやつ!! なんでここに!?!」

ことり「うそ!! 読まれたの!?!」

龍也「反撃開始だ!!」

ボールを奪ってすぐにドリブルで攻め上がる龍也^俺。相手の体勢が整う前に、超速攻で突き崩す!!

曜「くっ! 行かせないっ!!」

曜が急いで追いかける。が、

曜（嘘でしょ!? ドリブルしてる相手に追い付けない!!）

千歌「アタシが行く!! その間に皆戻って!!」

デイフェンスラインに下がっていた千歌が止めに入る。ダイヤも龍也のリアクションに対応できる位置に陣取っている。

にこ「こっち!! 出しなさい大海!!」

果南「後ろもいるよ!!」

豪炎寺「こっちだ!!」

こっちも味方が攻め上がって来る。こっちの攻撃メンバーは俺を含めたこの四人。ここで俺はこの少し前方。善子のデイフェンス領域に浮き球のパスを出した。

善子「くっ! 止めるっ! へ守備聖域^{デイフェンスエリア}!!」

ここで善子は〈守備聖域〉を発動。にこのアクションに構える。

善子（シュートコースは塞いでる。ゴール前へのドリブルコースは無い。トラップした瞬間を狙う!!）

そして飛んでくるボール。その瞬間、善子は前に出た。

善子「貰う!!」

にこ「まだまだ甘いわよ?」トツ!

にこは、なんと背中中でトラップしてボールを善子の上を通して中へと入れ、自身はターンして減速せずボールを拾って中へと斬り込む。

善子(ちよっ、はあ?! 背中!?)

希「くっ!!」

ここで希は仕方なく果南のマークを解き、シユートモーションに入ったにこに足を伸ばしてシユートコースを塞ぎに行く。このまま行けば間違いなくブロックされる。

龍也(だからこそ刺さる。シユートフェイク蹴弾偽装!!)

にこはやはりシユートの偽装フェイクを入れて希を躲す。キーパーと1対1だ。

にこ「喰らいなさいっ!!」ドガアアアアッ!

にこの弾丸シユートが至近距離で放たれる。英玲奈が手を伸ばすと、何とか触ることができ、ゴールポストに当たって弾かれた。

にこ「っ!!」

果南「まだだよ! ルーズボール!!」

このボールに豪炎寺が反応した。

豪炎寺「決める!!」

豪炎寺は炎を纏って回転しながら跳躍。直蹴撃弾を叩きつける。

豪炎寺「超・爆熱スクリュー!!」ドガアアアアアッ!

爆炎と超回転を纏った弾丸シュートが上空からゴールを襲う。

英玲奈「止めるっ!」ドリルスマツシャー・S!!」

英玲奈の必殺技で巨大ドリルが出現。シュートの威力を削り取り弾き飛ばした。

豪炎寺「っ!!」

果南「まだだよ!!」

龍也「決まるまで波状攻撃を叩き込め!!」

果南がボールに飛び付き、直蹴撃弾でゴールに撃ち込む。

シュートは完全に相手の必殺技後の隙を付き、入っ……

善子「ふんぬあああああッ!!」ドガアアアアアッ!

決まったと思われた果南のシュートだったが、ここで善子が身体を張ってヘディングで弾き返す。

果南「はあ!? これでも決まらないの!?!」

しかし、弾かれたボールは上へとフワリと上がる。上空は、龍の支配領域!!

希「不味い! 大海くんが来てる!!」

A f t e r s t o r y : 選抜戦終了

試合時間も残り後僅かの土壇場で代表が勝ち越した。選抜イレブンも焦りの表情を浮かべるが何とか落ち着きボールをセンターサークルにセットする。

穂乃果「(残り時間は本当に少ししか無い。なら!!) 一気にゴールまで行くよ!!」

女子選抜『うん! (ええ!)]』

龍也「来るなら来い! 絶対止めるぞ!!」

日本代表『おう!!』

そして、笛と共に選抜イレブンのキックから試合再開。すると、皆はDFまで全員上がっての総攻撃を掛けてきた。

海未「行きますよ!!」

ボールは海未が持つが、パスを繋いで攻めてくる。

海未「曜!」パスッ!

曜「凜ちゃん!」トッ!

凜「海未ちゃん!」トンッ!

鋭いパス回しでこちらのディフェンスに的を絞らせずに攻めてくる。

そしてボールはことりに渡り、風丸がディフェンスに入る。

風丸「抜かせないっ!!」

ことり「行くよ?」 「ワンダーフェザー!!」

ことりの背中に純白の翼が出現。羽ばたかせると羽が舞い散り、風丸の視界を覆ってことりの姿を隠す。

風丸「っ!!」

気づいたときには風丸は抜かれておりことりはドリブルで更に中に侵入する。

鬼道「くっ!!」

堂峯「挟むぞ鬼道!!」

鬼道と堂峯さんが2人でことりを挟んで奪いに掛かる。

ことり「穂乃果ちゃんっ!!」 ドツ!

しかし捕まる前にことりの左足の内^{インサイドスピン}回転センターリング。ボールは緩やかなカーブを

描いて中に入っていく。

聖良「させませんっ!!」

すかさず聖良が穂乃果に着く。吉川さん、三河さんも凜にマークに着く。

だが、

ギョルンッ!

凄まじい中回転が掛けられていたボールは急激に曲がってやや戻る。そこに走っていたのは、

海未「ナイスことり!!」

吉川「園田!?!」

海未「ストライクア…「させるかつ!」っ! にこ!!」

しかし寸前で追いついたにこがカット。そのままカウンターを掛ける。相手陣地には今キーパー以外誰もいない。大チャンスだ。

千歌「やばっ!! 戻って!!」

にこ「もどる前に決めるわ!!」

にこが全速力で走る。そしてにこはディフェンスに追いつかれることなくキーパーと一対一でシュート体勢に入る。

にこ「はああああっ!!」ドゴオおおおんっ!!

にこのシュートは凄まじい横回転が掛けられてゴール右隅に飛んでいく。英玲奈もそれに飛びつくが、

ギョーンッ!

英玲奈(っ!?! 逆方向!!)

ボールはえぐるように急カーブ。ゴールの反対側に突き刺さった。

そしてここで、試合終了の笛が鳴った。
終わったか……。

穂乃果「はあく、負けた……」

凜「悔しいにや……」

龍也「何言ってるんだ、お前ら強くなりすぎな位だよ……」

果南「うん、びっくりした」

そしてここで監督が全員を集める。

森島「よし、お前たちの力を見せてもらった。ではこれより、合格者を発表する」

穂乃果たちはピツと居住まいを直す。

森島「FW、高坂穂乃果、星空凜」

穂乃果・凜「はい!!」

森島「MF、渡辺曜、南ことり、園田海未」

曜・海未・ことり「はいっ!!」

森島「DF、津島善子」

善子「っ! はい」

森島「以上、6名だ」

ダイヤ「ダメでしたか……」

希「ウチもアカンかった……」

英玲奈「また、ダメだったか……」

あんじゅ「仕方ないわね……」

そして、選ばれたメンバーには今後の日程表とユニフォームが配られる。

穂乃果「皆の分も頑張ってくるよ！」

曜「当然であります!!」

千歌「曜ちゃん、頑張ってるね!!」

ダイヤ「ご健闘をお祈りいたしますわ」

そして、不合格メンバーは解散した。

森島「それでは、明日から今度のカタール戦に向けて練習開始だ！」

日本代表「はい!!」

カタール戦まで、後2日。

― 続く ―

After story : カタール戦開始!!

穂乃果たちが追加招集メンバーとして日本代表に加わり、その後数日間お互いの現在のプレーを把握するための練習を行い、三河さんや堂峯さんたちもみんなのプレイスタイルを理解した。

そしてそこから更に数日後、アメリカW杯アジア予選リーグ、日本対カタールの試合の日になった。

場所は神戸のノビスタジアム。試合開始時刻の夜7時が近づき、会場はお互いのサポートターの応援合戦で埋め尽くされていた。

選手たちはグラウンドで試合前のウォームアップ。すると、FFIの時に戦ったカタール代表のキャプテンだったビヨン・カイルが話しかけてきた。

ビヨン「久しぶりですね。Mr. オオミ」

龍也「おお、久しぶり……ん？」

俺はビヨンの感じに違和感を覚えた。

龍也「お前、あれから相当特訓したみたいだな。前とは雲泥の差と言っていいくらい実力上がってるな……」

ビヨン「ほう、さすがですね。気づきましたか……今日の試合は、今度こそ我々がたどきますよ？」

龍也「やれるもんならな」

ビヨン「ふつ、それでは……」

果南「龍也……？ 大丈夫？」

龍也「ん、ああ……」

果南がなにを話してたか気になったのか聞いてくる。

龍也「今日の試合、一筋縄ではいかなそうだぞ？」

森島「よし、ではスターティングメンバーを発表する」

……

そして選手がエスコートキッズとともに入場し、スターティングメンバーがフィールドに出る。そしてお互いの国歌斉唱し、選手同士・審判団と握手。

そしてコイントスの結果、日本のキックオフから試合開始だ。

スターティングメンバー

カタール

G K ナセル

D F マハジャ ジャメル スライ ビヨン

M F ハーラ ジャリメラ スーロ ラクー

F W ザック マジデイ

日本

F W 龍也 ツバサ

M F 海未 ことり

ボランチ 鬼道 にこ

D F 三河 綱海 佐久間 風丸

G K 権代

そして試合開始時刻になり、選手が位置につく。審判は時計を見て笛を啜えてホイッスルを吹いた

ピイイイーッ!!

試合開始のホイッスルが鳴り、ボールはにこへ。カタールはフォワードが前線からハイプレスを掛け、中盤はやや下がりが気味で位置につく。

マジデイ「寄越せ!!」

マジデイが突っ込んでくる。にこも攻めるために間合いを自ら詰める。

マジデイ「(突っ込んできた? なら!) このまま吹き飛ばしてやる!!」

マジデイが背肩奪取を仕掛けてくる。しかし当たる寸前でにこは素早く横に躲して一気にスピードに乗る。

にこ「瞬間縦一闪!!」

マジデイを抜き去ったにこ。ことりにパスを出す。しかし下がって待ち構えていたスーロとラクーが2人で囲んで止めに入る。

ことり(っ! ちよつとキツイかな……)

スーロが中へのパスコースを塞ぎ、外へのコースはラクーが警戒しながら2人で間合いを詰めてくる。

龍也(あれだけのプレッシングじゃあ、必殺技は出せないな……だけど!)

なんとかキープすることり。だが俺には、オーバーラップしてくるディフェンダーが見えていた。

ことり(っ! キープするだけで……)

龍也「ことり! バックパスだ!!」

ことり「っ!」 トンッ!

俺の声でヒールで後ろにパスを出すことり。すると全速力で上がってきていた風丸

が受け取り、そのままサイドを駆け上がる。

ラクー「っ！このっ!!」

ラクーは止めようと足を伸ばすが、

風丸「(ここは俺の領域だ！テリトリー取れるもんなら……) 取ってみろ!!」ドギユンツ!!

その状態から更に加速する風丸。中盤の守備を置き去りにし、ビヨンがヘルプに来る。

ビヨン「行かせません!!」

ビヨンが間合いを詰めてくる。しかし風丸は接敵する前にゴール前にセンターリングを放り込む。

風丸「行けっ!!」ドガツ!!

風丸の右足、インサイドスピン内回転でゴールから逃げるようにゴール前へと放り込まれたボール。

ツバサにはスライが。龍也にはジャメルとマハジャが2人で潰しにかかる。

ボールは龍也のところへ。

マハジャ「もらった!」

ジャメル「取る!!」

龍也「っ!!」

3人が2対1で跳躍して競り合う。龍也は背後からの圧迫をなんとか耐えるとへ

ディングでボールを下に落とす。

ジャメル「っ！ちっ！だが、そんな所……!?」

しかし、落とされたボールには海未が走り込んでいた。海未はシュート体勢に入ると、足を振り上げて一瞬で振り下ろして超スピードキック。シュートを蹴り飛ばした。

海未「雷光の矢!!」ドギユウウウウンッ!!

ナセル「っ!!」

海未のシュートはナセルに反応すら許さない速度で、ゴールの左上隅に正確にコントロールされて突き刺さった。

GOAL!!!!

JPN 1 1 0 QAT

会場内に日本サポーターの大歓声が沸き起こる。

解説「いやー驚きましたね……」

王将「大海のポストプレーからの園田の右足一閃!!日本代表先取点!!」

ナセル「っ!!（あのシュート……）」

ビヨン 「どうした？」

ナセル 「見えなかった……」

ビヨン 「何!？」

ナセル 「あんな速度のシュート、パワーは分からんが速度は俺の必殺技では間に合わん……」

ビヨン 「なら、マークの配分を変更するか？」

ナセル 「ああ。頼む」

ビヨン 「ハーラさん！」

ハーラ 「なんだ？」

ビヨン 「ソノダにマン・ツー・マンで付いてください。アイツにシュートを撃たれるとナセルでは反応できません」

ハーラ 「分かった」

王将 「さあ、前半開始5分で日本先制!!カタールボールで試合再開です!!」

日本 1 ー 0 カタール

|

つ
づ
く

|

技
After story : 防御不可能!最強のシュート

海未の必殺技がカタールゴールに突き刺さり日本が先制。カタールボールで試合を再開する。

カタールはボールを回してこちらの隙を伺う動き。

ジャリメラ「ハーラ!」トツ

ハーラ「マハジャ!」トツ

マハジャ「行くぞ……ザツク!!」ドツ!

自陣でパスを回すことで日本カタール側にできる限り釣り出して一気に前線へのロングパス。ボールはフォワードのザツクへと飛ぶ。

綱海「させるかつ!!」

飛んでくるボールに対して綱海が跳躍してザツクと競り合う。だが綱海はザツクのフィジカルで弾き飛ばされる。

綱海「っ、くそっ!」

ボールを確保したザツクはそのままドリブルで攻め上がる。そこへ三河さんがフォ

ローに入る。

三河「止めるっ!!」

三河さんは相手との間合いをうまく使い、相手が一番嫌なタイミングで間合いを詰める。これによりパスしか選択肢が無くなったザックはマジデイにパスを出す。

佐久間「させるかっ!!」パシッ

しかし佐久間がパスカットに成功。前を向いてパスターゲットを探そうとする。

マジデイ「遅いっ!!」ドガアッ

佐久間「ぐあっ!!」

マジデイの奪取^{ジャック}でボールを高い位置で奪われた日本。一気にピンチに陥る。

権代「来いっ!!」

マジデイはそのまま切り込みペナルティエリア内に侵入。必殺技を放つ。

マジデイ「絶・ミラーージュシュート」!!」

ボールを蹴る直前に掛けられた砂煙によってボールが2つに分裂した幻影を見せられるこのシュート。本物は1つだけだ。

権代「っ!!」なら一か八かだ!!」バツ!!

権代さんはどちらが本物か分からないなら一か八かで片方に飛ぶ。すると。

ガシイイイイッ!!

運良く本物の方へと跳べた様で、体の正面でキャッチすることができた。

マジデイ「ちっつ、やるな…!!」

権代「今度はこっちの番だ!!」ドツ!

権代さんのゴールキックからボールは海未へ。しかし海未にはハーラがマン・ツィ・マンでマークについており、海未と一対一で跳躍して競り合う。

ドカッ!

ハーラ(っ、コイツ体強い!)

海未「(っ、凄まじい体幹ですね。なら……!) 鬼道くん!」パスツ!

海未はヘディングでボールを落として鬼道にボールを回す。受け取った鬼道はそのままドリブルで攻め上がる。

ジャリメラ「行かせるか!」

スーロ「止めるっ!」

鬼道「「超・イリユージョンボール」!!」

鬼道は必殺技を発動。前に出てきたジャリメラを抜く。

スーロ「甘いつ!」ズザッ!

しかし後ろに控えていたスーロに技の直後の隙を狙われて奪い返される。そしてスーロはそのままボールを左サイド前線へと大きく蹴り出す。

にこ「風丸！」

風丸「任せろ……っ!!」

しかしカターのミッドフィルダー、ラクーが走ってきて風丸と競り合う。風丸はフィジカルで吹き飛ばされてしまった。

佐久間「っ、綱海！矢澤！鬼道！中のケア！」

綱海・にこ・鬼道「「オツケー!!」」

中を堅める日本。しかしここでラクーは後ろから上がってきていたジャリメラにセントリーングを上げる。

鬼道「なにっ!？」

にこ「あいつシュートなんか持つてるの!？」

ジャリメラ「俺の防御不可能の最強のシュートを見せてやる！」

するとシュート体勢に入ったジャリメラ。すると人魂のようなものがボールに集まると、それをジャリメラはシュートした。

ジャリメラ「マボロシショット!!」

人魂を纏って撃ち出されたシュート。そのまま一直線に向かってくる。

鬼道「?」「スピニングカット・S!!」

鬼道の足から衝撃波が放たれ、それが壁となりシュートを阻む。だがここで恐るべき

ことが起きた。

シユン!

鬼道「っ!? なっ?!」

なんとシユートはそのまま障壁を何もなかったかのようにすり抜けてしまったのだ。

綱海「なっ! なら蹴り返してやる!!」

シュートを繰り返そうと今度は綱海がボールに足をぶつける。

が、

シユン!

なんとこれもすり抜けてしまった。まるでボール自体が幻影、そこに存在していない

かのような。

権代「くっ、止める!!」

権代さんはシュートの正面に回ってキャッチ。幸いシュートのスピードはそんなに

早くないので余裕を持って正面に回れた。

だか、

ユラアッ!

しかし人の胴体さえすり抜けたシュート。そのまま日本ゴールに突き刺さった。

日本『なっ?!?!』

GOAL
!!!!

JPN 1 1 QAT

カターの恐るべき必殺シュート、「マボロシショット」が突き刺ささり、日本は同点に追いつかれてしまった。

王将「ゴール!日本追いつかれてしまったあ!! しかしその前のカターシュート……日本ディフェンスを次々とすり抜け何事もなかったかのようにゴール! こんなシュート、果たして止められるのでしょうか?!」

解説「あのシュートを止るか撃たせないようにして突き放さないと、日本は勝てないですよ……」

ツバサ「何なのよ……あのシュート」

海未「あんなシュート、どうやって止めれば……」

にこ「で、でも!大海ならコピーできるんじゃないの!?1度見たし!」

風丸「そうか!大海なら!」

みんなが龍也を見る。

龍也「悪いが、あんなの俺にも無理だ。仕組みが全く分からない!!」

ことり「そんな……………」

綱海「大海でもコピーできないシュートなんて……………」

龍也「仕組みさえ分かればできると思うが、今は肝心のそれが分からない。故にムリだ!」

日本チームが暗くなる。そこへ、

森島「選手交代!」

王将「おっと、ここで日本は選手交代のようです!」

綱海「俺か……………」

龍也「代わるのは鹿角か……………」

そして、綱海と交代で鹿角がピッチに入ってくる。

綱海「任せたぞ?」

聖良「はい!」

龍也「聖良、あのシュートは……………」

聖良 「大丈夫です。私の必殺技で止められます」
日本 『『ええ?!』』

その頃……

カタル監督 「……もうマボロシショットの弱点を見破られたか。中々の智将だな、日本の監督は」

ー つづく ー

After story : マボロシショットの脅威

カターの必殺シュート、「マボロシショット」が日本ゴールに突き刺さり、同点に追いつかれてしまう。日本のキックから試合再開だ。

王将『さあ、同点に追いつかれた日本。巻き返しなるか!!』

龍也「行くぞツバサ」

ツバサ「えええ！」

ピイイイイーっ!!

審判の笛が鳴り、鬼道にボールを預ける龍也。

鬼道「よし、〈超越視界^{メタビジョン}〉!!」

鬼道は視覚情報と試合の状況、敵味方の位置取り、全てを同時に脳内で並列処理。最適なルートを見つけて出す。

鬼道（風丸！）チラッ

風丸（っ！）ダッ！

鬼道「南!!」ドッ！

鬼道はことりにパス。しかしことりにはラクーとスーロが止めに入る。

ラクー「行かせるかつ！」

ことり「〈速度チヤン・オブ・ベース緩急〉!!」ユラアツギンツ!!

ことりは遅いスピードからの一気に急加速。その速度差でラクーを置き去りに、スーロ「ここだっ!!」

しかし後ろに構えてことりが抜いたところをカットに来たスーロ。だが、

ことり「風丸くんっ！」トツ!

右足のアウトサイドで横にボールを払ってサイドライン方面にパスを出したことり。ボールがラインを割る寸前で……

風丸「ナイスパスっ!!」ドギンツ!!

全速力で走って来た風丸に繋がり、そのまま突き進む。

王将『パスが繋がったああ!!さすが日本最速の韋駄天、風丸一郎太あああつ!!』

そのままスピードに乗ったドリブルで攻め上がる風丸。しかしそこにビヨンが止める。
に入る。

ビヨン「抜かせませんよ!!」

風丸「来たな……」

風丸とビヨンが一騎打ちを始める。風丸はスピードで一気に抜こうとするが、ビヨン

のテクニックがそれを阻む。

風丸（っ!!）

ビヨン「抜かせません！」

風丸（なら！）ガクツ！

ビヨン「!?」ガクンツ!!

風丸はいきなりスピードを急激に落として相手のペースを崩す。ビヨンは急な速度変化に体勢を崩された。

風丸「今だっ!!」ドギユンツ!!

その隙に風丸は再び猛スピードでサイドラインを駆け上がり、ゴール前にマイナスのグラウンダーのセントリングを上げる。

ボールはツバサに。

スライ「ジャメル！ オオミを抑えろ！」

ジャメル「おう!!」

スライ（角度の無い右足のシュートは撃たせても良い。だが、左は死んでも撃たせない!!）

ツバサに向かって飛んでくるボール。ツバサはそのボールに反応する。

ツバサ（右足しか無理ねこれは……。なら!!）

すると、ツバサは身体の向きをボールの進行方向と並行にする。

スライ（っ！スルーか…パスか？）

しかし、ツバサは……

ツバサ「シッ!!」ドガアアアアアアッ!!

スライ（っ！右足で!?!）

ここでツバサは右足の外アウトサイドスピン回転シュート。大きくカーブし、カタールゴールの左上隅に向かつていく。

ナセル「くっ！」「ストームライダー・A」!!

しかしキーパーはノーマルシュートに対して必殺技。砂嵐がシュートを飲み込み、シュートを完璧に止めた。

ツバサ「っ！ 止められた……」

ナセル「危ない危ない……ほら行け!!」ドッ!!

そしてボールはカウンターでノーマークのジャリメラへ。

鬼道「っ！ しまった!!」

ジャリメラ「決める!!」「マボロシショット!!」

再びあのシュートが日本ゴールに向かつてくる。しかし、このシュートに聖良が立ち塞がる。

聖良「止めます!! 「超・スノーマウンテン」!!」

聖良の必殺技で、巨大な雪山が出現。シュートの行く手を阻む。だが、シュンツ

聖良「っ!？」

聖良の必殺技までも、「マボロシショット」はすり抜けてしまった。

森島「なっ!?! (まさか、鹿角の必殺技でも厚さが足りないのか!?!)」

カタール監督(ふむ、それなら完全にコチラのものだ!!)」

向かってくるシュート。権代さんは止めようと必殺技を放つ。

権代「っ!」「シュートブレイク・A」!!」

ボールに攻撃が叩き込まれる瞬間、

シュンツ!

それをすり抜け、シュートはゴールに突き刺ささった。

GOAL
!!!!

JPN 1 1 2 QAT

王将『入ってしまったああっ!! 日本、カタルの逆転を許してしまい、1ー2!!
やはり「マボロシショット」は止められないのかあっ?!』

聖良「っ、そんなっ!!」

ピッ、ピッ、ピイイイーっ!!

王将『ここで前半終了のホイッスル!!日本、1点ビハインドで折り返しです!!』

そしてベンチに戻る両チーム。俺達は鹿角を入れた理由を聞くことにした。

鬼道「監督、あのシュートを鹿角の必殺技で止められると思っただけなはずですか?」

森島「あのシュートは、かつて私が学生時代にとある学校の選手が使っていたシュー
トと同じものだ」

日本代表『?!?!?!』

まさか、あんなシュートを使う選手が、かつて日本にいた?!

森島「あのシュートがすり抜けられるのは、厚みのない薄いデイフェンスだけなんだ。
分厚い壁のようなデイフェンスはすり抜けることができず、止められるシュートなん
だ」

ツバサ「分厚い壁……それで聖良を」

森島「だが、あの「マボロシショット」は、想定よりもすり抜けられる範囲が広かつ
たようだ。もっと厚く無ければ、止められない……」

聖良 「……………」

龍也 「……大丈夫ですよ」

森島 「大海？」

龍也 「聖良はこんなところで負けるやつじゃありません。聖良は必ずあのシユートを止めます！」

聖良 「っ!!」

龍也 「それまでは、俺達がなんとか引き離されないように点を取ります」

佐久間 「ああ。鹿角はとにかくあのシユートを止めることに集中だ」

にこ 「頼んだわよ、聖良！」

聖良 「っ! はいっ!!」

森島 「よし、じゃあ後半、行って来い!!」

日本代表 『『はいっ!!』』』

王将 『さあハーフタイムが終わり両チーム出てきました。後半戦の開始です!!』

龍也 「なんとか喰らいつくぞ!!」

日本 『『おう!!』』』

ジャリメラ 「トドメ刺すぞ!!」

カタール代表『おう!!』

そして、カタールがセンターサークル内に立ち、審判の笛と共に後半が始まった。

日本 1 ー 2 カタール

ー つづくー

After story：鹿角聖良

ワールドカップアジア予選、カタール戦もいよいよ後半戦が開始する。

王将『さあ、カタールのキックオフから後半戦の開始です!!』

ピイイイーっ!!

審判の笛と共に後半戦開始。カタールはボールを「マボロシショット」の使い手、ジャリメラに渡す。

ジャリメラ「早速追加点だ!!」

ジャリメラは「マボロシショット」の体勢に入ろうとする。

龍也「させるかあっ!!」

龍也が前線からのハイプレス。シュートを撃たせない。

ジャリメラ「っ! ザック!!」パスッ!

ボールはザックに渡り、そのままドリブルで攻め上がってくる。

鬼道「行かせるか!!」

にこ「止めるっ!」

しかし日本も鬼道とにこが二人がかりで止めに入る。

マジデイ「こつちだ!!」

ザック「っ! 頼んだ!!」パスッ!

マジデイ「よし、ここだっ!!」ドッ!

ここはカタールの上手いワン・ツーパスでデイフェンスを抜き去りボールは再びザックへ。

王将『これはカタール上手い!ワン・ツーパスで鬼道と矢澤を抜いたあっ!!』

ザック「行くぜえっ!!」

ザックがシュート体勢に入ると、足元で砂煙が起き、その砂煙を纏わせながらシュートした。

ザック「絶・ミラージュシュート!!」ドガアアアアッ!!

ボールが2つに分裂したかの様な幻影を発生させながらゴールに向かってくる。

聖良「このシュートは止められる!」超・スノーマウンテン!!」ガキイイイインッ

!!

「ミラージュシュート」は聖良の必殺ブロックで氷漬け。威力を失い地に落ちた。

ザック「くそっ!!」

聖良「海未さん!!」パスッ!

聖良の地を這うようなグラウンダーの鋭いパス。ボールはピンポイントで海未の足元へ。

海未「ナイスパス!」

ハーラ「っ!させるかっ!!」

しかし虚を突かれたハーラも体勢を立て直して海未を追う。そしてガツガツと身体をぶつけてチャージする。

海未「(っ! なら!) 大海くん!」

ボールはここで龍也に飛ぶ。しかしジャメルがボールの落下地点に入り龍也と競り合う。

ジャメル「盗るっ!!」

龍也「うおおあああっ!!」ドガアッ!

しかし龍也は空中で身体をぶつけてジャメルを吹き飛ばす。そしてゴール前でボールを確保した。

ビヨン「っ! 不味い!!」

龍也「喰らえっ!!」

龍也はシュート体勢に入ると、構えから跳躍してボールを下に落として回転をかけ、先回りからの左足の足払いで更に回転を強化。

ボールに空気の膜をコーティングする。

そしてそのボールを、左足で渾身の力で蹴り飛ばした。

龍也「ラストリゾートD・GX!!」ドゴオオオオオオオオオオッ!!

漆黒の邪龍が、地を這いながらカタルゴールに襲い掛かる。

ナセル「っ!! 止めっ……ぐあああああっ?!?!」

しかしキーパーの抵抗虚しく、技を出す暇もなくゴールに突き刺さった。

GOAL!!!!

JPN 2 1 2 QAT

会場は大歓声に包まれる。だが、振り出しに戻っただけ。あのシュートを止めない限り、俺達に勝ちはない。

王将『ゴールール!! 大海の必殺技、「ラストリゾートD」ドラゴンが決まったあああっ!!日

本同点!!」

解説「素晴らしいシュートでした! ここから巻き返して行って欲しいですね!」
王将『さあ、カタールボールから試合再開です!』

ザック「もう1点取ってくぞ!」

カタール『『おう!!』』

ピイイイイーッ!!

そして審判の笛で試合再開。ボールはスーロに渡り、今度はツバサのハイプレス。
スーロ「っ! ラクー!!」パスツ!

ボールはラクーに渡り、ことりがデイフェンスに入る。

ことり「行かせないよっ!」

ラクー「抜くっ!」シザース・ボム・乙!!」

ラクーのシザースのフェイントからボールは大爆発。途轍もない砂煙を巻き上げる。
ことり「きゃあっ!!」

そしてことりの視界を奪い、空中からボールとともに着地してことりを抜いた。

風丸「っ! なら!!」

今度は風丸がデイフェンスに入る。しかしラクーは捕まる前に中へとパスアウト。

ラクー「マジデイ!!」

ボールはマジデイに飛び、佐久間がカットに飛び出す。
しかし、

マジデイ「……………」スルツ

マジデイはこれをスルーした。

佐久間「何っ!？」

そして転がったボールはザックへ。

聖良「止めます!!」

しかし!

ザック「おらっ!」バシッ!

しかしザックはヒールでバックパス。ボールは走り込んでいたジャリメラへと渡つてしまう。

三河「! 不味い止めろ!!」

ジャリメラ「遅い!!」「マボロシ…シヨット!!」

放たれてしまう「マボロシシヨット」。聖良が立ち塞がる。

聖良「何としても止めます!!（私の山では厚さが足りない!もつと厚い何か!!……………考
えてる時間は無いっ!!）「超・スノーマウンテン!!」

聖良は「スノーマウンテン」を発動。しかしすり抜けられてしまう。

権代「くっ!!」バツ!!

権代さんがシュートに手を伸ばす。だがその手をすり抜け、シュートはゴールに突き刺さった。

GOAL!!!

JPN 2 ー 3 QAT

王将『ゴォール!! 決まったあ!! カタールミッドフィールダージャリメラ、ハットトリックだあっ!!』

権代「くそおっ!!」ガンツ!!

権代さんはゴールポストを殴りつける。

聖良「もっと、もっと厚い何か……山の集まり……っ! 山脈……っそうだ!!」皆さん、分かりました!あのシュートは次で仕留めます!!」

日本『!!!』

三河「本当か? 信じて良いんだな?」

聖良 「はい!!」

王将 『さあ、日本のキックから試合再開です!!』

ピイイイイーッ!!

キックからボールはここへ。が、

ジャリメラ 「甘いぜっ!!」

にこ 「しまっ?!

王将 『おおーっつと! ジャリメラ、早速ボールを奪いインターセプト!! 日本、万事

休すかあっ!!』

聖良 「来いっ!!」

ジャリメラ 「何度やつても同じだ!! 「マボロシショット」!!」

「マボロシショット」が飛んでくる。すると聖良は「スノーマウンテン」の構えから、

更にオーラを練り上げる。

聖良 「はあああああああっ!!」

するとフィールドを分断するように分厚い山脈がせり出してくる。その分厚さは、「スノーマウンテン」の比ではない。

聖良 「ヒマラヤウォール!!」 ドガアアアアアアッ!!

聖良の新必殺技、「ヒマラヤウオール」に直撃したボールは、今度はすり抜けることができず、地に落ちて完全に停止した。

聖良「やった……止めたーっ!!」

会場は大歓声に包まれる。しかし一番驚いているのはカタールだ。最強のシユートだと思っていた「マボロシショット」を止められてしまった。それはつまり、カタールにはもうこのリードを守り切るしか勝利の手段が残されていない事を意味していた。

ジャリメラ「嘘だろ?！」

聖良「ここから反撃です!! にごさん!!」

ここからボールはにこへ渡る。そのままドリブルで攻め上がる。

スーロ「っ! 行かせるかっ!!」

にこ「動きが散漫よ!! 「スーパーエラシコ・S」!!」

にこは必殺技でディフェンスを突破する。

ラクー「このっ!!」

今度はラクーが止めに来るが、

にこ「〈瞬間縦一閃〉!!」

左右の動きで散らしてからの素早い縦の動きでいつきに抜き去るにこ。

スライ「シユートは撃たせない!! 「デザートストーム・S」!!」

スライのディフェンス技で砂煙がここへと向かうが、
ここ「大海!!」パスツ!!

受ける寸前でパスアウトするにこ。ボールは龍也に。

龍也「このボール、絶対に決める!!」

ジャメル「させるかつ!!」ズザアツ!!

しかしジャメルの横からのスライディングタックル。ボールを挟んでの力勝負になる。

龍也「負けるかあつ!!」

ジャメル「なつ!!」

ドガアアアアツ!!

ジャメルを吹き飛ばし、ペナルティエリア内に侵入。龍也はシュート体勢に入る。

龍也「喰らええええええええええつ!!」ドゴオオオオンツ!!

ザシュウツ!!

龍也の渾身のシュートは、キーパーに反応させずに、ゴールネットに突き刺さった。

ナセル(……………つ!)ガクツ!

GOAL
!!!!

JPN 3 1 3 QAT

キーパーは膝をつき崩れ落ち、スタジアムは大歓声に包まれた。

日本 3 1 3 カタール

1 つづく 1

After story：カタール戦決着

龍也のシュートがカタールゴールに突き刺さり同点に追いついた日本。スタジアムが日本コールに湧く中、カタールボールで試合を再開する。

王将『さあ、カタールボールから試合再開です!!』

ビヨン「まずは1点を取りますよ!!」

カタール『『おう!!』』

ピイイイイーーツ!!

キックオフと同時に全員で攻め上がるカタール。何としても1点をもぎ取ろうという構えだ。

スーロ「マジデイ!!」

ボールはマジデイに渡り、そのままドリブルで攻め上がってくる。そこへ鬼道とにこが止めに入る。

マジデイ（っ!）

ラクー「こっちだ!!」

マジデイ「ラクー頼んだ!!」パスツ!

ラクー「ほらよっ!」パスツ!

キレイなワン・ツーパーズでこちらのデイフェンスを躲すカタール。マジデイはシュートを放ってくる。

マジデイ「絶・ミラージュシュート」!!」

砂煙を纏い、ボールが2つに分身したように見せながらシュートが向かってくる。

しかしここで風丸がシュートコースに割り込む。

風丸「超・スピニングフェンス」!!」

ここで風丸の必殺技。分身下風丸が複数の荒れ狂う竜巻を巻き起こし、その風圧でシュートを絡め取る。風圧のせいで砂煙を剥ぎ取られ、そのせいでボールの幻影は消滅。

ただのシュートになったボールは風丸の足元に収まった。

風丸「南!!」ドツ!!

ここでボールはことりに飛ぶ。日本のカウンター攻撃だ。

王将『日本カウンター攻撃で一気にカタールゴールを狙う!!』

ジャリメラ「不味い戻れ!!」

急いで戻るカタールデイフェンス陣。ことりにスライが追いついた。

スライ「止める!!」

ことり「っ! (時間をかけたらダメだね!) 大海くん!!」ドッ!!

ここでことりはカタルゴール前にボールを蹴り込む。するとデイフェンダーを置き去りにするスピードで上がってきていた龍也は跳躍してオーバーヘッドシュートでゴールを狙う。

龍也「喰らえっ!!」

ドゴオオオオンッ!!

龍也のシュートが、カタルゴールを襲う。

ナセル「そう何度もやられてたまるかあっ!!」バチインッ!!

しかしキーパーも意地で飛びつき両手でダイビングキャッチ。シュートを止めた。

龍也「っ! やるな!!」

ナセル「行けっ!!」ドッ!

ナセルのゴールキックからボールはジャリメラへ。ボールを受け取ったジャリメラはシュート体勢に入る。

ジャリメラ「マボロシショット」!!」

ジャリメラのシュートがまたしても日本ゴールを襲う。

だが、

聖良「止めます!! 「ヒマラヤウオール」!!」バチイイイイインッ!!

聖良の必殺技で分厚い山脈の壁がせりだして「マボロシショット」をブロックする。

聖良「海未さん!」パスッ!

ここで聖良は相手の隙をついて走っていた海未にスルーパス。パスは海未の足元に
つながつた。

海未「ナイスパスです!よく見てましたね!!」

ハーラ「つ、くそ!!」

急いでハーラが追いかけるが、海未は直ぐに必殺パス。

海未「「極・ストライクアロー」!!」バシユウウウンッ!!

海未の足から放たれたボールは、一撃必中の矢の如く正確にコントロールされ、ツバ
サの足元に。

王将『日本パスが繋がったあ!!残り時間はあと僅かだあつ!!』

ツバサ「絶対に決める!!」

するとツバサは跳び上がると、眼の前に発生した惑星にシュートを蹴り込んだ。

ツバサ「「プラネットブレイク」!!」ドゴオオオオンッ!!

惑星に撃ち込まれたシュートは星を粉々に破壊し、その力を吸収。途轍もない威力で
キーパーを襲う。

ナセル「止める!!」 「ストームライダー・A!!」

ナセルが必殺技で砂嵐を巻き起こしてシュートの威力を削り取る。
だが、

ナセル「ぐううううううつ!! うわああああああつ!!」

ナセルは吹き飛ばされてシュートはゴールに突き刺さった。

GOAL!!!

JPN 4 - 3 QAT

王将『ゴール!!日本逆転!!』

ピッ、ピッ、ピイイイイーツ!!

王将『ここで試合終了のホイッスル!!日本、カタールを下して予選リーグ韓国を抜いてのトップに立ったあ!!』

龍也「え? マジ?」

鬼道「まさか知らないのか? 韓国は、カタールとの試合で引き分けだったんだ。」「マボロシショット」が止められずにな」

龍也「え? まさかあのシュートのこと知ってたのか?」

鬼道「俺は、当然他国の代表の試合データも全員が見てるものだと思ってたんだがな

……?」

龍也「わ、悪い……」

俺達が鬼道に説教をもらっていると……

ビヨン「また負けましたか。さすがですね、日本は……」

鬼道「いや、この試合は展開によつては俺達が負けていた可能性が高かった。ターニングポイントは……」

ビヨン「Ms. カヅノが新技を編み出したことですね」

鬼道「ああ……」

ビヨン「これからのご健闘を祈っています。次にやる時は私たちが勝ちますよ？」

龍也「次も俺達が勝つさ!!」

ビヨン「ふっ、それでは!!」

そして、カタールは退場していった。

いよいよ次はアジア予選リーグ最終戦、サウジアラビア戦だ。

ー つづく ー

After Story : アジア予選最終戦前

カタールに勝利した俺達日本代表。次はいよいよアジア予選リーグ最終戦、サウジアラビアとの決戦だ。今の日本は4勝1分けでリーグ1位。

しかし、ここで負けるか引き分けになってしまうとワールドカップ出場が危うくなってしまう。

俺達は練習の前に、サウジアラビア代表のこれまでの試合映像から作戦を練り、ミーティングでこちらの問題点を洗い出していた。

鬼道「サウジアラビアの中核選手はFWの”アンドレアス・ベゴ”。その強靱な身体能力と身体のパネから、アラブの大鷲と言われる選手だ」

龍也「アラブの大鷲……ねえ？」

果南「映像見ると確かに凄そうだけど、龍也ほどの選手じゃないね……」

穂乃果「いや、でも他のメンバーもなかなかやるよ。そのアンドレアスを中心に、チームでの守りも攻めも……流石に世界レベルって感じだね……」

風丸「だな……」

映像をひとしきり観た俺達は、こちらの作戦を考える。

にこ「取り敢えず、アンドレアスへのボール供給を届く前に摘み取る事でしょ。コイツに起点になられると面倒な感じがするわ」

三河「だな。マークは誰が付く？」

吉川「俺か鹿角だろ。コイツのフィジカルに当たり負けしない体幹を持つてるのは、デイフェンス陣では俺と鹿角だけだ……」

鹿角「じゃあ、吉川さんに付いてもらって、撃ち漏らしたのを私がカバーに入つて止めます」

吉川「頼むぞ？」

取り敢えずデイフェンスの方針は決まった。

森島「では、サウジアラビア戦のフォーメーションを発表する。まずはワントップ、大海！」

龍也「はい!!」

森島「GK、円堂守！」

円堂「はい！」

権代（っ!）

森島「続いて2枚のセンターバック。吉川、鹿角！」

吉川・聖良「はい!!」

森島「続いて両サイドバック、右、風丸。左、南！」

風丸・ことり「はい!!」

森島「続いてチームの心臓。中核として攻守を繋ぐワンボランチ。鬼道！」

鬼道「はい!!」

三河・堂峯（……………）

森島「続いて両ウイング。左、園田。右、矢澤！」

海末・にこ「はい!!」

森島「続いてトップ下、左、高坂。右、松浦！」

穂乃果・果南「はい!!」

森島「以上のスターティングメンバーで挑む！」

龍也・円堂・吉川・聖良・風丸・ことり・鬼道・海末・穂乃果・果南・にこ「……………は

い!!……………」

森島「選ばれなかった者も気落ちせず練習するように。スタメンが欲しければ、努力して勝ち取ってみせろ！ 以上!!」

日本代表『はい!!』

そしてスタメン組を中心にチーム練習や基礎練習を行い続け、1週間後……

森島「では、今日の練習はこれまで！ 皆、明日の試合に備えてしっかり休むように

!!
」

日本代表 『お疲れさまでした!!』

そして、監督は宿舎に入っていった。俺達は用具を片付けてからシャワールームでシャワーを浴びて汗を流してから各自の部屋に戻り……

龍也 「……ふう」

俺は、さつきまでユニフォームの下に身につけて練習していた重厚な金属が入ったチヨツキやアングルを撫でた。

龍也 「今のところ40キロか。世界大会までにもう少し慣れないとな」
そう、人が聞いたら目を丸くしそうな事を呟いていた。

そして食事中……

俺と果南は一緒に食事を取っていた。今日のメニューはカレーライスだ。

果南 「そう言えば、龍也さ？ 最近スピードの上下が激しくない？」

龍也 「えっ？」

果南 「早い日は早いけど、翌日になると遅くなったりさ？ 体調でも悪い？」

龍也 「……いや？ 普通だよ？」

果南「そつか……。思い過しなら良いんだけどね……」
よく見てるなあ……。

にこ「隠れて変な練習してるんじゃないでしょうね？」ヨイシヨ
果南の隣ににこが座った。

龍也「お疲れにこ。無茶な練習なんかしてないから心配すんなよ……」

にこ「なら良いけど……。あんたに倒れられたらアタシたちも困るんだからね？」

龍也「わーってるよ!! ごちそうさん。俺は少し他の国の選手の映像見てプレーの研究するわ。俺は見ただけでもスキルアップできるしな……」

果南「うん。分かった」ニコツ

にこ「ホンつと反則じみた能力よねえ。」パーフェクトコピー「完全無欠の模倣」……」

龍也「おう。んじゃあな……」

そして、俺は部屋でヨーロッパや南米地区の強豪国のプレー映像を見始めた。

龍也 スツ「……………」

そして、頭でイメージを固めてスキルトレーニングしたあと、俺は眠りについた。

龍也（明日勝って、必ずまた世界へ行く!!）

1
つ
づ
く
1

A f t e r s t o r y : サウジアラビア戦 キック・オ フ!

いよいよアジア地区予選リーグ最終戦当日。会場の国立競技場には大勢の日本サポーター、そしてサウジアラビアのサポーターが詰めかけていた。

王将「いよいよアジア予選も最終戦！　今までの対戦成績上位は3位がカタールで4勝1分け1敗。2位は韓国が4勝2分け。そして日本はこの試合の結果次第ですが、勝った場合は5勝1分けで1位！負けの場合は韓国が1位。引き分けの場合日本と韓国が同点のためフェアプレーポイントでの決着となります!!」

森島「よし、ファールなどには気をつけつつ、日本らしく攻めていこう!!」

日本代表『はい!!』

森島「行つて来い!!」

そして両代表がフィールドに出てくる。

王将「さあ、両チームポジションに着きました!!」

そして、審判の笛が鳴った。

K I C K O F F !!

日本代表のボールから試合スタート。まずはボールを鬼道に預ける。

鬼道（敵の配置的には……ここだ!!）

鬼道「園田!!」

ボールは大きな弧を描きながら前線に走る海未の足元に。そこにヒソカがディフェンスに入る。

M A T C H U P !

海未 v s ヒソカ

海未（時間は掛けずに速攻で抜きます!!）

ドラッグシザース
引導挟足!!）

海未は高度な技術テクが要求されるフェイントで一気に相手を抜き去った。

ヒソカ（ボールを動かしながら敵の重心を動かして、一気にトップスピードで抜き去る技……!!）
園田アイトツ、女のクセに、ゴリゴリの近距離選手か!?!）

サミ「くそっ!!」

急いでサイドバックのサミがフォローに入る。だが、

ことり・穂乃果「私たちもいるよ!!」

何と海未の背後からことりと穂乃果が上がってきていた。ディフェンスのことりが

上がる分、ボランチの鬼道が少し位置を下げ、吉川さんと聖良の3人でスリーバックの形を形成する。

すると海未は上空にボールを蹴り上げる。するとことりは風を纏った左足。穂乃果は炎を纏った右足でボールを下に落とす。ボールには風と炎のエネルギーが纏わりつく。

海未「ナイスです2人とも!!」

そして締め、海未の雷の力を纏った右足。パワーシュート。ボールは一気に超加速してサウジアラビアゴールに襲い掛かる。

海未・穂乃果・ことり「「エポリューション・GX」!!!」

弾丸のようなシュートがゴールに迫る。だが、

ガラ「させるかっ!!」バツ!

予めコースを読んでいたガラが足を伸ばしてシュートに触れる。

バチンツ!!

ガラ(っ!!)

ガラは吹き飛ばされたが、シュートの威力は少し弱まった。

ファルコ「ナイス!!」「太陽のギロチン・A」!!」

空から超高温の炎のギロチンが降ってくる。ギロチンはボールに直撃。完全には止

めきれなかったが、弾かれたボールがハルクに渡る。

ハルク「よしっ！ 行く……「甘いよっ!!」っ!？」

しかしこれを果南がインターセプト。ボールを奪い攻め上がる。

ペツカレ「っ！ このっ!!」

ペツカレがデیفエンスに向かう。

MATCH UP!

果南vsペツカレ

果南「甘いよ!! 弾き^{チヨップ}フェイント!!」バチイツ!!

果南はボールを弾いての急な切り返しで、ペツカレの身体を振って躲す。

ペツカレ(っ!!)

そして果南は右足でミドルシュートを放った。

果南「ふっ!!」ドガアッ!!

ドーガ「浮^ふかした! ミスキックだ!!」

ボールはシュートのコースに急いで割り込んだガラの頭上を越えて飛んでいく。

……しかし、ドリルのような回転が掛けられたボールは、急激に落ちて尚且つ右に向かつて逸れていく。

ファルコ「っ!! (まさかオーストラリア戦で大海が見せた!!)」

果南「無揚力蹴弾!!」

ボールは、完全にキーパーの不意を突き、ゴールに向かってまっしぐら。

ファルコ「くそおおおっ!!」バツ!!

ファルコが跳びついた時にはもう遅く、伸ばされた手の数十センチも先をすり抜けてゴールのサイドネットに突き刺さった。

GOAL!!!!

JPN 1 ー 0 SAU

王将「ご、ゴール!!前半開始5分! 松浦の豪快なミドルシュートで日本先

制ooooooooっ!!」

解説「外側に逃げながら落ちましたね……。あのシュートはオーストラリア戦で大海選手が見せた無揚力蹴弾ジャイロシュート。松浦選手も物にしていたんですね」

王将「さあ、先制した日本!! この勢いに乗れるか!？」

ファルコ「悪い……」

アンドレア「すぐに取り返してやる。俺達は超攻撃型のチーム。1点取られたら2点取って勝つチームだ!!」

サウジアラビア『おう!!』

|
つ
づ
く
|

A f t e r s t o r y : カウンター

果南の無揚力就弾ジャイロシュートがサウジアラビアゴールに突き刺さり先制した日本。

サウジアラビアも気持ち切り替える。

アンドレア「まずは1点！ 追いつくぞ!!」

サウジアラビア『おう!!』

そして選手が位置に戻り審判が笛を吹く。

R E S T A R T !!

試合再開してサウジアラビアはボールをアンドレアに渡して攻め上がってくる。龍也が速攻でチェックに行く。

龍也「ボール渡してもらうぜ!!」

アンドレア「っ！」チラッ!

アンドレアは左サイドのシルバを見た。

龍也「っ！こっちか!!」

俺がそれを察知して左に身体を切った瞬間……

アンドレア「……っ！」ドッ!

アンドレアはノールツクで逆のコンドルへパスを出す。
龍也（っ！ コイツ上手え!!）

コンドル「ナイス、ベポ!!」

俺が抜かれたのを見た穂乃果がすぐにフォローに入る。

穂乃果「オツケ、すぐフォロー入れる!!」

MATCHUP!!

穂乃果vsコンドル

穂乃果がスライディングで突っ込む。すると、

コンドル「っ！」クイツ!

コンドルはフェイクで躲し、中へと斬り込んで来る。

穂乃果「っ！ ゴメン!!」

鬼道「バカ！ 簡単に突っ込むな!!」

しかしすかさず鬼道が止めに入る。

MATCHUP!!

鬼道 v s コンドル

鬼道（ここはパスか……？）

鬼道が敵の配置から一番まずい場所を察知する。コンドルは中へと横のパスを出す。

鬼道「松浦!!」

果南「オツケー！ 読めてるよ!!」

しかしアンドレアへのパスを果南が足を伸ばしてカットに入る。

コンドル（釣かった!!）

すると、アンドレアは更に加速する。

龍也（っ！ あのボール!!）

ボールは地面に着くと強烈な縦回転で果南の足を躲す様に更に深部へと進み、アンド

レアの足元に。

果南「嘘!？」

アンドレアがボールを持ってドリブルで攻めてくる。しかし聖良がチェックに入る。

MATCHUP!!

聖良 v s アンドレア

聖良「止めます!!（右には風丸くんがフォローに来てる。左から抜かれたら即シュートコース!!）」

聖良は左を最重要警戒したディフェンス。右は抜かせても左だけは抜かせない構えだ。

アンドレア（っ!! 目と頭の使い方が上手いな……）

ここでアンドレアの動作が数歩遅れる。すると、

鬼道「ナイス鹿角! 挟むぞ!!」

ここで鬼道も援護に駆けつけてくる。

アンドレア（っ! 仕方ないな!!）ドツ!!

ここでアンドレアは逆サイドに大きくボールを振る。そこにディフェンダーのサミがオーバーラップして来てボールを受け取る。

サミ「ナイボ!!」

吉川「っ! 南! 飛び出すなよ!?!」

ことり「はい!!」

MATCHUP!!

ことりvsサミ

ことりは相手の挙動に反応できる適切な間合を保ってディフェンスを掛ける。

サミ（っ！　パス出せないな……なら、自分で突破する!!）

サミは自身で突破しようとして必殺技を放って来た。砂嵐で自身を包み、それを纏ったまま猛進してくる。

サミ「爆・デザートタックル!!」ドゴオオオンッ!!

ことり「きゃあっ!?!」

必殺技でことりを突破したサミ。ヤバいと感じた吉川さんがフォローに入るが、

サミ（中空いた!!）ドッ!!

ここでサミが中へとボールを入れる。ボールはアンドレアへ……。

鬼道「読めてる!!」

聖良「盗る!!」

それを読んでいた二人が挟みにかかる。が、

アンドレア「……………」スルッ!

しかしボールはアンドレアの股下を潜り抜けてスルー。そこに、

シルバ「ナイス!!」

フリーでシルバがシュート体勢に入る。

円堂「っ！ 来い!!」

シルバが必殺技を撃つと、ボールに砂煙が纏わりつき、蹴りとともに砂嵐が槍のように鋭く向かってくる。

シルバ「[ダストジャベリン]!!」

至近距離で向かってきたシルバのシュート。円堂も必殺技で対抗する。

円堂「[ゴッドキャッチ・Gx]!!」ドガアアアアアアッ!!

ぶつかり合う両者の必殺技。円堂も必死に耐えるが、

円堂「ぐううううっ!!」

円堂はどんどん引きずられていき……

円堂（このままじゃ決められるっ!!）

それを察知した円堂は、

円堂「だりやあっ!!」バチィッ!!

破られる前に咄嗟に下からボールを弾き、クロスバーに直撃させて何とか防ぐ。

鬼道「ッ!! セカンドボール!!」

ドーガ「貰った!!」

しかし、このボールにミッドフィルダーのドーガが詰めてきていた。

ゴールまで、ノータッチでのシュートコースが一直線に空いていた。

ドーガ「同点だ！ ゾクッ !?」

しかし、間一髪で何かを察知したのか、ドーガはシュートを撃たずに止めた。その瞬間、

ザッ！

龍也が足を伸ばしてシュートコースに割って入った。

龍也「ありや？ 読まれたか……」

ドーガ（なんてやつだ……あのまま撃ってたら取られてカウンター喰らってた!!）

ドーガはパス相手を探すために周りに視線を向ける。が、

龍也「隙みっけ!!」

俺がその間に一気に間合いを詰める。焦ったドーガは咄嗟に苦し紛れのパスを出す。が、

穂乃果「もうらいつ!!」バシッ!!

穂乃果が読んでカットした。

穂乃果「そんな苦し紛れが通用するわけ無いでしょ!! ことりちゃん!!」

穂乃果はオーバーストップしたことにパスを出す。

アンドレア「ヤバイ戻れ！ カウンター喰らうぞ!!」

ガラ「くそっ!!」

ガラが急いでことりを止めに行く。

MATCHUP!!

ことりvsガラ

ことり「付いてこれるかなっ!?」

ことりの超速シザース。凄まじい速さでフェイントを連打して相手を揺さぶる。

ガラ（っ！ 右だっ!!）

ガラはことりが抜け出した右に身体を切る。

ガラ（よし、盗った!!）

ガラがボールに足を伸ばす。

ことり「残念っ♡」

ことりは左足のインサイドでもう一度切り返し逆に抜け出す。完全に右足に体重が乗っていたガラは、急な切り返しに重心を崩し尻餅をつく。

王将「南が抜け出した!! ゴール前フリーだ!!」

龍也「決めることり!!」

ことりがシュート体勢に入りボールを空高く蹴り上げる。するとことりの背に純白の翼が生え、それを羽ばたかせてぐんぐん飛翔。天から太陽の熱と光を収束した弾丸シュートを撃ち放つ。

ことり「イカロスフオール・S!!」ジユオオオオオンツ!!

天から降ってくる火炎弾。キーパーアルコは必殺技で対抗しようとするが、蹴った力と落下の速度で2重の速度上昇を受けたボールは思った以上に伸びて来て必殺技を撃つ前にワンバウンドしてゴールネットに突き刺さった。

GOAL!!!!

JPN 2 ー 0 SAU

王将「ゴooooooooo!! 南の必殺シュートで日本追加点!!」

解説「日本、カウンターをしつかりと決めきりましたね!!」

大いに沸くスタジアム。サウジアラビア代表は「マジか……」と呆然としている。

龍也「ことりナイスシュート!!」

海未「よく決めてくれましたね!!」

ことり「うん! 穂乃果ちゃんありがとっ!!」

穂乃果「うん。ことりちゃんが良い所にいてくれたからね」

ことり「うん。大海くんが追いついた時に「これは取れたな」と思ったからね！」
龍也「そっか。サンキュなことり!!」

スコアは2ー0で日本リード。だが、油断はできない!!

日本 2 ー 0 サウジアラビア

ー つづく ー

After story : サウジアラビア戦 前半終了

!

点差が2点に広がり焦り始めるサウジアラビア。何とか前半の内に1点は返しておきたい所だ。

アンドレア「まずは1点だ！ 1点返すぞ!!」

サウジアラビア『おう!!』

RESTART!!!

そして審判の笛が鳴り再びアンドレアがボールを持って攻め上がってくる。先程同様、龍也がチェックに行く。

龍也「行かせるかっ!!」

アンドレア「っ!!」パスッ!

しかしアンドレアは俺との距離が縮まる前にパスアウト。サイドのシルバにボールを振る。

そこへ、

にこ「私が行くわ!!」

MATCHUP!!

にこvsシルバ

にこが距離を詰めてデیفエンスに入る。適切な間合を保ち、相手の挙動に備える。

シルバ（っ！ 上手いな……。けど！）

ガダル「こっち居るぞ!!」

ここでサイドハーフのガダルが上がって来る。にこの意識がそっちに一瞬向いた瞬間、

シルバ「今だ!!」

シルバは鋭い斬り込みでにこを抜き去る。

にこ「しまっ!?!」

シルバがドリブルで更に侵入。そこへ、

鬼道「フォロー入るぞ!!」

果南「鬼道くん挟むよ!!」

鬼道と果南の二人が前後から挟んでデیفエンスを掛ける。

シルバ「っ!! コンドル!!」ドッ!!

ここでシルバは逆サイドのコンドルへとサイドチェンジ。ボールを受け取ったコンドルはドリブルを仕掛ける。

コンドル「ナイボ!!」

攻めてくるコンドル。しかしそこへことりがディフェンスに入る。

MATCHUP!!

ことりvsコンドル

ことり「行かせないよっ!!」

無闇に突っ込まずに距離を取ってディフェンスを掛けることり。しかしサウジアラビアもヒソカがサイドラインを駆け上がった。

ことり「っ!! (2対1!!)」

ことりが一瞬、パスかドリブルかの判断を迷った隙にコンドルはヒソカへとパス。パスは通ってしまふ。

ことり「っ!! まだまだ!」

ことりは急いで追いかける。が、

ヒソカ「甘いつ!!」ドギユンツ!!

ヒソカの俊足に振り切られセンターリングを許してしまった。

ヒソカ「決めろ!!」ドツ!!

中へと折り返すセンタリング。しかしボールをは内回転のスピンの掛かっておりゴールから逃げるように緩やかにカーブする。そこへ、

ハルク「ナイス!!」

ハルクが直蹴撃弾ダイレクトシュートで併せる。ボールは凄まじい勢いでゴール右上に飛んでいく。

聖良「させませんっ!!」「超・スノーマウンテン!!」「ガキイイイイッ!!」

聖良が必殺技でシュートブロック。弾かれたボールはふわりと上空へと上がる。すると、

アンドレア「よし来たっ!!」ダントッ!!!

アンドレアが跳躍。上空から自身の身体に炎を纏い炎の鳥のような風貌になる。そして鳥の嘴の一突きに併せ、ヘディングを叩き込んだ。

アンドレア「バーニング火の鳥・V4!!」ドガアアアアアッ!!

円堂「くっ!!」

円堂も反応する。しかし、アンドレアのシュートはゴールから枠内のコーナーギリギリを的確に狙っており、正面に回れず必殺技では取れないと判断した円堂は手を伸ばして跳躍する。

円堂「届けえええええええっ!!」

そして、

ガっ!!

円堂の手がシュートに触れた。

円堂(よし……っ!?)

バチイイイイインツ!!

しかしシュートのパワーに円堂の手は弾かれてしまい、シュートはゴールに突き刺さった。

GOAL!!!

JPN 2 - 1 SAU

サウジアラビアのサポーターの大歓声。日本のサポーターからはため息が漏れるが、まだリードしているからか直ぐに切り替えたようだ。

円堂「くそっ!」

吉川「まだ前半の時間はある!! 前半の内にもう一度2点差にするぞ!!」

日本『はい!!』

そして選手がセットポジションに戻る。

RESTART!!!

審判の笛で日本ボールで試合再開。ボールは穂乃果に渡り、ドリブルで攻め上がる。

穂乃果（前半は残り5分もないし、サウジアラビアはガチガチに引いて守ってるね

……。なら!!）

穂乃果は自身のドリブルで突っ込んで行く。そこへアンドレアがディフェンスに来る。

穂乃果「アクセルワールドへ加速世界!!」ユラアツ!!

瞬間、穂乃果の視界がモノクロに変わり、周囲の選手が止まる。

穂乃果「っ!」ギョーンっ!!

その僅かな時間を、穂乃果は一瞬で駆け抜けて一気にディフェンダーのもとへとたどり着きそこでへ加速世界へは効果切れ。

アンドレア「っ?! もうあんな所に!?!」

ガラ「クソツ!」

ドーガ「挟むぞ!!」

ガラとドーガが前後から挟みにかかる。ここで穂乃果はパスを選択。

穂乃果「頼んだよ!!」ドツ!!

パスターゲットはもちろん龍也……の頭上越えて更に奥へ。相手は、

にこ「ナイス!!」

にこが跳躍して右足のボレーシュートで併せる。
が、

ペツカレ「させるかっ!!」

ペツカレが飛び出し、足を伸ばしてシュートコースを塞ぐ

にこ(っ!! シュートコースが!! なら……撃っ!!)

にこは右足を振り抜いた。

にこ(……的なトラップ!!) チュンツ!!

サウジアラビア『!?』

にこはボールの下ギリギリを振り抜いてボールに回転を掛けるのみに留まりボールを上を浮かす。飛び出した勢いに押されたペツカレを躲し、にこはそのまま着地して一回転。落ちてきたボールを振り抜いた。

にこ「ふんっ!!」 ドゴオオオンツ!!

にこの蹴ったシュートはゴール右上に一直線。ファルコは急いで腕を伸ばして跳躍する。

ファルコ「っ!!」 バツ!!

しかしボールはファルコの腕の数センチ先を通り抜け、ゴールネットに突き刺さった。

GOAL!!!!

JPN 3 | 1 SAU

前半終了間際、日本が再び2点差に戻し大歓声のスタジアム。これにはサウジアラビアも落胆が大きい。

王将「ゴールーール!! 日本、矢澤のスーパーゴラツソで再び2点差ーーっ!!」

解説「矢澤選手は相変わらず凄いトラップ能力ですね……。それを上手くゴールに結び付けられています」

王将「さあ、前半残り僅か、試合再開です!!」

そしてキックからリスタートしたところで、前半終了の笛が鳴った。

日本 3 | 1 サウジアラビア

| つづく |

After story : サウジアラビア戦 後半開始

サウジアラビア戦も前半が終了しハーフタイム。これを乗り切れればいよいよワールドカップ本戦だ。

選手たちがピッチからベンチに戻ってきて水を受け取る。それを飲みながら監督の指示を聞く俺達。

森島「よし、前半はいい出来だったと思うが、ディフェンスラインもう少し声掛けしつかりとな。相手の攻撃陣に仕事をさせないこととフリーにさせないこと。ボランチもミッドフィールダーも相手ボールの時は下がってきてきて良いから、どんどんプレスを仕掛ける。ただし、奪った時は攻守の切り替え早めにな？」

日本『はい!!』

森島「あと鬼道、不動と交代だ」

鬼道「俺ですか？ 分かりました」

不動「やつと出番か……」

鬼道「しつかりな」

鬼道がそう言うとな不動は挑戦的な笑みを浮かべ、

不動「任せときな」

そう答えた。

ふ〜……さてと、

龍也「後半どう攻めるかな……。風丸と南のオーバーラップ含めて攻撃は形になつて
るから良いとして……。もう少し相手の守備を崩したいな。ある程度時間はかけても

……」

海末「もう少しサイドの攻撃ラインを意識してみましよう」

龍也「そうだな。俺はポジション的に右サイドも左サイドも両方絡むと思うけど

……。球出し頼むぞ不動」

不動「おう。任せな」

そして、ハーフタイムも終わる。

森島「よし！ 世界への切符を掴み取ってこい!!」

日本代表『はい!!』

そして選手たちがピッチへと出ていく。

選手交代

鬼道 out ↓ in 不動

王将『さあ！いよいよ後半戦の開始です！！日本、果たしてワールドカップ本戦への切符を掴み取れるか！？ いよいよラスト45分で決まります！！』

そして、選手が位置に付く。

アンドレア「絶対に勝つぞ！！」

サウジアラビア『おう！！』

龍也「俺達だって負けるか！！ 行くぞ！！」

日本代表『『おう！！』』

そして、審判の笛が鳴った。

KICK OFF
!!!!

サウジアラビアボールで後半開始。サウジアラビアはアンドレアを中心にパスを回して攻め上がる。

ドーガ「(この大会で全然見てない選手が出てるな……やり辛い)ベポ!!」

ここでボールは中盤のドーガから前線のアンドレアへと渡る。それを待ち構えるの

は不動。

不動「行くぜえっ!!」

アンドレア「っ!!」

不動はダッシュでアンドレアとの距離を詰めると、蹴りを何発も放ちながらスライディングタツクル。

不動「「絶・キラースライド!!」バキヤアアアアアッ!!」

アンドレア「ぐわっ!!」

アンドレアはふっ飛ばされて日本ボールになる。そこから俺達は素早く攻守を切り替え、反撃に転じる。

ドーガ「くそっ! 俺が行く!!」

ここでドーガが不動にプレスをかける。

不動(さく)てとどつちサイドから崩すかな……。パワーとスピードの
 大海・園田・高坂か…。テクニクとフィジカルの大海・松浦・矢澤か……。まあどつ
 ちにしろ大海は絡むから失敗は確率低いとして……)

不動が考える間にドーガが迫ってくる。

不動「仕方ねえ……。こっちだ!!」

不動がパスを出した先は……、

パシツ!!

果南だった。

果南「オツケー! 右から崩すんだね!! 龍也! にこちゃん!!」

龍也・にこ「オツケー!!」ダツ!!

果南がボールを持った瞬間にこと龍也は相手のデイフェンスの空いてるスペースに向けて同時に走り出す。

果南はにこにパスを出すとパスアンドゴー。自分も空いてるスペースへと走りこむ。にこ(っ!) チラツ) トツ!!

龍也 チラツ トツ!!

果南「いいよ二人とも!!」トツ!

龍也、にこ、果南の3人はアイコンタクトでお互いに意思疎通を交わし自分のボールを欲しい位置に走り、受け取ると相手が欲しい位置にパスを繋ぐ。

そうしてスペースをパスでかき混ぜられるサウジアラビア。空いたスペースを埋めようと次々と守備連携の不和が産まれていく。

そしてボールは龍也に渡る。

龍也「よし、にこ!!」

しかしここでここにボールをパス。そこへやられ続けて痺れを切らしたガダルとペツカレが2人でプレスに行く。

ガダル「くそつたれ!!」

ペツカレ「盗る!!」

ここ「っ! 風丸!!」

なんとここでここはサイドライン目掛けてバックパス。ボールはオーバーラップしてきていた風丸に渡る。

ガラ「っ!! まずいノーマークじゃねえか!!」

サウジアラビアディフェンスは龍也、ここ、果南のトライアングルを止めようとディフェンスしている内に位置を、内側へ、内側へと少しずつずらされてしまっていた。そこに来てこの外側へのパス。気づいた時にはもう手遅れ。風丸はフリーでボールを受け取りサイドラインを駆け上がる。

それと同時に、サウジアラビアゴール前に日本の攻撃陣がなだれ込む。

ガラ「中頼む!! 俺は少しでもセンタリングに圧をかける!!」ダッ!!

そしてガラはまにあわないと分かっているながらも少しでもセンタリングの精度を下げさせようと風丸にプレスを掛けに行く。

その間にサウジアラビアディフェンスも立ち直りゴール前を固める。

風丸「どフリークロス!! 行けっ！」

ガラ「させるかっ!!」

ガラのスライディング。しかし当然間に合わずにノータッチでクロスが上がる。

ガラ「クリア頼む!!」

ハルク「任せろ!!」

ハルクがボールをカットしようと跳ぶ。しかし、

龍也「風丸ナイボ!!」

俺はそれよりも高く跳躍し、身体に炎を纏って火の鳥のような風貌に変わる。

ハルク「!?!」

ファルコ「そ、その技は!!」

龍也「「バーニング火の鳥・A」!!」ドゴオオオオンツ!!

火の鳥の嘴の一突きと共に俺の渾身のヘディングがボールに叩き込まれる。ボールは炎を纏いながらゴールへと一直線。

キーパーは驚くあまり反応できず、ボールはゴールに突き刺さった。

GOAL!!!!

JPN 4 | 1 SAU

王将『決まったあああああつ!! 大海龍也の《完全無欠パーフェクトコピーの模倣》炸裂——!!!』
 スタジアムは日本サポーターの皆さま大歓声に包まれる。しかしサウジアラビアサ
 ポーターはもう負けムードが漂う。

ファルコ「嘘だろ………」

ハルク「アイツ、ペポの技を………」

アンドレア「っ! 切り替えろ!! 最後まで抵抗して1点ずつ返すぞ!!」

サウジアラビア『ああ………』

後半残り31分。

日本 4 ー 1 サウジアラビア

ー 続くー

After story : ドリブラーとストライカー

日本が更に追加点を取り、点差を3点差にした時……。

ー 日本ベンチ ー

森島 「ふむ。よし、立向居、堂峯、三河、交代だ。行くぞ」

立向居 「っ！ はい!!」

堂峯 「分かりました」

三河 「おっし……」

そしてフィールドで、ゴールに入ったボールがセンターサークルに戻されると主神がピピツ！と短く笛を吹く。

王将 『おっと、ここで日本選手の交代のようです。GK円堂に代わって立向居。MFの園田に代わって三河、矢澤に代わって堂峯が入ります!!』

そして3人がベンチの方に戻る。

円堂 「頼んだぞ立向居！」

立向居 「はい！」

選手交代

円堂 out ↓ in 立向居

海未「三河さんお願いします」

三河「ああ。ゆっくり休め」

選手交代

園田 out ↓ in 三河

にこ「頼みます！」

堂峯「後は任せろ」

選手交代

にこ out ↓ in 堂峯

そして、3人がそれぞれピッチに入り持ち場に立つ。

王将『さあ、日本3人の選手交代です！』

解説『立向居選手はこれまでの試合で韓国戦にしか出場していません。恐らく本大会前にもう一度世界大会の空気を経験させることが目的でしょうね、他の二人はその他のメンバーよりも経験がありますからね。頼りになると思いますよ』

王将『なるほど！ おっと、再開のようです！』

そして、審判の笛が鳴った。

RESTART!!!

サウジアラビアボールで試合再開。

ボールはハルクに渡りパスを繋いで攻め上がってくる。サイドのガダル、シルバとの3人でトライアングルを作ってこちらの空いたスペースへとパスアンドゴールを繰り返して徐々に侵入してくる。

果南「くっ、コイツら!!」

堂峯「(なら!) 松浦! ハルクのマークに入れ! 風丸はシルバ!」

果南・風丸「っ! はい!!」ダッ!!

二人が急いで二人にマークに付くと、堂峯さんはガダルにチェックに入る。

MATCHUP!!

堂峯 vs ガダル

ガダル「っ！ なら!!」

ここでガダルはゴール前に斜めのスルーパス。ボールは走り込んできたアンドレアへ……だが、

不動「甘めえ!!」パシッ!

不動が敵と味方の動きからパスコースを読んでカット。堂峯さんの味方を使った上手い誘導だ。

三河「こっちだ!!」

不動「三河さん!!」パスッ!!

ここから日本のカウンター。ボールが三河さんに渡ると、三河さんは得意のドリブルを開始。そのまま攻め上がる。

ヒソカ「させるかっ!」

サミ「挟むぞ!!」

サウジアラビアも選手二人がかりで止めに入る。

MATCHUP!!!

三河 vs ヒソカ&サミ

穂乃果 「三河さん!! 「大丈夫だ! ゴール前に走れ!」 つ! はい!!」

穂乃果は指示通りゴール前に走る。

ヒソカ 「この野郎!」

サミ 「舐めるな!!」

二人の強烈なプレッシャー。しかしその中で三河さんはボールをキープして相手に渡さない。

ヒソカ (どうなってるんだコイツ!)

サミ (取れない!)

二人が焦り始めると、連携に僅かにズレができた。

三河 (ここだっ!!) ドギョーンツ!!

そのズレを三河さんは見逃さずに二人の包围を突破。抜け出した。

ドーガ 「っ! やべえ!!」

MATCHUP!!!!

三河 vs ドーガ

二人が抜かれたことに焦ったドーガが急いでヘルプに向かう。しかしスライディングで突っ込んできたドーガを、三河さんはキックフェイントで躲した。

ドーガ（っ！ しまつ!!）

三河「決めろ!!」ドツ!!

三河さんのセンチタリング。ボールはゴール前に上がり、龍也とガラが同時に跳躍して競り合う。

ガラ「させるかあっ！」ドガアツ!

身体をぶつけて龍也の体勢を崩させるガラ。

龍也（っ！ 体勢が！「大海！こっちだ!!」堂峰さん!!）

龍也「頼みます!!」トツ!

龍也は咄嗟にヘディングでポストプレイ。堂峰にボールを落とす。

堂峰「ナイスだ!!」

堂峰さんはシュート体勢に入る。堂峰さんが落ちてきたボールを踏みつけて地面に叩きつける。踏みつけられた時にボールに電流が流れた。その反動でボールがふわりと浮かぶ。それに併わせて跳躍した堂峰さんはオーバーヘッドでボールに思い切りインパクト。

堂峯「サンダーボルト!!」ドゴオオオオンッ!!

堂峯さんのインパクトと同時にゴールに向かうシュート。しかしその軌道が稲妻のように激しく上下を繰り返しジグザグな起動で鋭く飛んでいく。

あれではコースを読むなど無理だ。

ファルコ「っ! 止めるっ!!」

ファルコはボールの正面に回りキャッチを試みる。しかし、手元で上に鋭くホップしたボールに弾き飛ばされ、キーパーごとボールはゴールに叩き込まれた。

GOAL!!!!

JPN 5 ー 1 SAU

王将『ゴォール!! 堂峯の新必殺シュート、「サンダーボルト」が決まったああああ

ああっ!!!』

解説『素晴らしいシュートでしたね。あれは正面に回れなければ失点は確実にしょう

ね……』

大歓声のスタジアム。サウジアラビアもなんとか気持ちを切り替えてリスタートする。

RESTART!!!

審判の笛と共に試合再開し、ボールはヒソカへ渡りサイドから攻め上がる。

三河「行かせないぜ!!」

MATCHUP!!!

三河 vs ヒソカ

三河さんがディフェンスに入る。突っ込まずに適切な距離を保ってディフェンスをかけているために相手も中々攻められない。

ヒソカ（くそっ!）

龍也「今行きます!!」

ヒソカ「っ!!」

そして攻めあぐねている間に龍也が挟みに行く。

ヒソカ「ダメだ!」パスッ!

ヒソカはディフェンスラインへとバックパス。ディフェンダーがパスを回しながら様子をうかがって組み立てを図る。

すると、

ガラ「ここしか無い!!」ドツ!!

ボールを受け取ったガラが前線へとロングキック。ボールを送り込む。

ボールは一気にこちらのディフェンスライン付近へ。ボールはシルバに渡る。

シルバ「一か八かだ!!」

シルバがシュート体勢に入ると、地面にボールを蹴り込む。すると真っ黒い石油が吹き出してボールを包み飛んでくる。

シルバ「爆・オイルラツシュ」!!

サウジアラビアの必殺シュート。しかしボールはゴールではなくゴールの真上に飛んでいく。

聖良（っ！ まさか!!）

聖良が気づいた時には、ボール目掛けてアンドレアが炎を纏って跳躍していた。そして火の鳥となり、嘴の一突きと共にヘディングでシュートチェインを叩き込む。

アンドレア「バーニング火の鳥・V4」!! ドゴオオオオントツ!!

ゴール隅に的確に迫るサウジアラビアのシュート。立向居は必殺技で対抗する。

立向居「はああああああああつ!!」

立向居の周りに漆黒のオーラが溢れる。そのオーラが立向居の身体に全て吸収されると、立向居の身体に黒いアーマーが具現化する。

立向居「『デビルズアーマー』!!」

悪魔の鎧を装着した立向居は、その強化された身体能力で跳躍。ボールを横からパンチングで殴り飛ばした。

そのままボールはサイドラインを割ってサウジアラビアのスローインとなった。
アンドレア「くっそ！（これでもダメか……）」

立向居「よしっ!!」

後半残り12分

日本 5 ー 1 サウジアラビア

ー 続く ー

After story : アジア予選終幕! W杯へ

立向居がパンチングでフィールドからボールを弾き出し、サウジアラビアボールのスローインから試合が再開する。

するとここで審判が笛を吹いた。

王将『おっと、ここで日本または選手交代のようです。……? おっと、大海と松浦を下げるようです』

解説『これは……世界大会に向けて主力を休ませる狙いでしょうか?』

俺と果南は2人揃ってフィールドから出る。

龍也「頼んだぞ豪炎寺!」

豪炎寺「ああ!!」

選手交代

龍也 out ↓ in 豪炎寺

果南「お願いねツバサさん!」

ツバサ「任せて！」

選手交代

果南 out ↓ in ツバサ

王将『さあ、豪炎寺修也、綺羅ツバサの二人がピッチに入ります！』

穂乃果「ふたりとも……」

豪炎寺「高坂、監督からの伝言だ。あの技で締めろと」

穂乃果「っ！ あれか！ 了解!!」

そして、サウジアラビアボールのスローインから試合再開。

RESTART!!!

ペツカレ「ガダル！」シュツ！

ペツカレのスローインからボールはガダルへ。

しかし、

堂峯「行かせるか!!」ガッ、グイ！

ガダル「っ！」

堂峯さんが激しく身体をぶつけてチャージする。ガダルも必死にボールをキープするが、

ガダル（っ！ 取られっ「こっちだ！」!!）パスッ

ここでペツカレにバックパス。ペツカレは中へと内回インサイドスピン転センターリングを上げる。

不動「鹿角！アンドレアを押しさえる！ 風丸はシルバ！ 吉川さんと南は協力してコンドルを!!」

聖良・風丸・吉川・ことり「「了解!!」」

不動の指示でマークを固める4人。不動自身はボールを追い、とっさの動きに反応できるように備える。

するとボールは鋭くゴールから逃げるように曲がり、ドーガの下へ。それにピッタリと不動はついて行く。

MATCHUP!!

不動 vs ドーガ

不動は突つ込まずに適切な間合いを保ってディフェンスをかける。それにより、ドーガは完全に攻めあぐねる。

ドーガ（っ！）

パスを出そうにも、他のメンバーには三河、穂乃果、ツバサ、堂峯がピッタリと付いて中盤を抑えている。これではパスも出せない。

ドーガ（くそっ！）

ドーガが焦った瞬間、

不動「貰いっ!!」

不動が一瞬の間を突いてインターセプト。そのままドリブルで攻め上がる。

ドーガ「っ！ まずい戻れ!!」

マークが解かれたハルクが急いで止めに入るが、

不動「高坂!!」パスッ！

捕まる前に穂乃果にパスアウト。ボールを預ける。

それを見ると、豪炎寺とツバサがゴール前に走る。

ヒソカ「止めるっ！」

サミ「挟むぞ!!」

二人が前後から穂乃果を挟み撃ちで止めにかかるが、

穂乃果「アクセルワールド〈加速世界〉展開!!」

瞬間、穂乃果の視界がモノクロに落ち、周囲の風景が止まる。その空間を、穂乃果は

一気に走り抜けた。

穂乃果「……………」ユラアツ ギユンツ!!

ヒソカ「っ! どこ行っ……………」

サミ「もうあんな所に!?!」

二人は既に抜かれてだいぶ引き離されており、気づいた時には、豪炎寺にボールが渡り、ツバサと穂乃果の3人でシュート体勢に入っていた。

豪炎寺「行くぞ!!」

穂乃果「「グランド……………」

ツバサ「……………ファイア!!」

豪炎寺「イグニツション!!」

豪炎寺・穂乃果・ツバサ「「…G x」!!!」

3人のキックから、フィールドの横幅を埋め尽くさんという太さの火砕流のような爆炎のシュートがサウジアラビアゴールに襲いかかる。

久しぶりに見たこの3人のシュート。連携レベルはまったく落ちていないようだ。

ガラ「っ! 止めるっ! グツ、うわああああああああつ?!?!」

止めようと身体を張ったガラだったが、火砕流に飲まれて吹き飛ばされる。

残すはキーパーのみ。

ファルコ「っ!」「太陽のギロチン・A」!!」

空から灼熱のギロチンが降ってくる。それがボールに直撃するが、シュートの熱量に焼き尽くされ、キーパーの身体ごとゴールに叩き込まれた。

ファルコ「うわああああっ!!」

GOAL!!!!

JPN 6 ー 1 SAU

王将『決まったあああああああっ!! 豪炎寺、高坂、綺羅のFFIでみせた必殺シュート、「グラントファイア」がサウジアラビアゴールに突き刺さったあ!!」 6ー1”!! またしても突き放したぞお!!』

そして、審判の笛が鳴った。

TIME UP!

日本 6 ー 1 サウジアラビア

王将『試合終了ー!!日本勝利!!ワールドカップ本戦出場を決めたあああああっ!!』
俺達はフィールドに飛び出して喜びを分かち合う。

そしてお互いに礼をしてアジア予選の全試合が終了した。

その夜、日本代表宿舎……

龍也「……………」

俺は、電気の消えた自室のベッドで横になっていた。
すると、

コンコン!

扉が誰かにノックされた。

龍也「はい。どうぞ」

ガチャ

俺がそう言うと、入ってきたのは、

果南「やつほ〜♪」

龍也「果南……どうした?」

果南「なんか眠れなくてさ……」

龍也「そっか……」

俺と果南は2人でベッドに座る。お互いが無言のまま時間だけが過ぎていく。

龍也「果な……」「龍也」なに?」

果南「ありがとう。色々……」

龍也「何が……」

果南「F F Iのときも、プロになつてからも、今回のことも……。龍也と出会えなかつたら、きつと今の私はいない。だから……。ムグツ?!」

チュツ!

俺は、果南の唇をキスで塞いだ。

暫く時が経ち、

果南「プハッ! もう、なに〜? / / / / /」

龍也「……感謝するのは俺の方だよ。この才能のせいで、サッカーを辞めてた俺を……。みんなが初めて必要としてくれた。俺がどんなに本気でやっても、ずっと付いてきてくれた。そんな奴らは、果南や皆しかいなかったんだ。だから……。ありがとう / / / / /」

俺と果南は、暫く見つめ合うと……。、

また、お互いの距離が近づき、0になった。

丨 つづく 丨

After story : 内浦への帰還

アジア予選を突破し、見事W杯本戦への切符を手にした日本代表は、1週間後の出発までにそれぞれが所属するクラブチームや家族に報告を兼ねて地元に戻っていた。

↳ 沼津市・アス○ク○口沼津クラブハウス↳

ハウスに顔を出した俺と果南は監督やコーチ、オーナー、選手から温かく迎えられた。

監督「いやあ……まさかJ3の我がチームからこんな強力な選手が日本代表に出るとは……」

コーチ「驚きですよね……」

上原「頑張つてこいよ松浦、……大海！」

果南・龍也「はい!!」

レイジ「俺達も夢見ていた舞台。きつといい経験になるはずだ。しつかりな」

春咲「大海くん頑張つてね☆」

リリア「頑張つてくださいね!!」

龍也「ああ！」

俺が同期組やレイジさんと話していた。

木村「果南も大海くんも頑張ってるね？」

斎刀「ほんと嫉妬しちゃうよ……でも、応援してる。しつかりな？」

果南「はい!!」

そして……そろそろいい時間になったので、

果南「じゃあ私達は家に顔見せに行くのでそろそろ行きますね？」

龍也「失礼します……」

宮間「龍也くん、果南先輩、しつかりね!!」

そしてクラブハウスを出た俺達はタクシーを拾い、(バスだと騒ぎになる)内浦へと向かう。タクシーを降りると淡島行き船着き場から連絡船に乗り果南の実家のある淡島へ。

果南「んくっ!! 帰ってきたなあ……」

龍也「嬉しそうだな？」

果南「うん! あ……海が恋しいよ……泳いで来ようかな？」

ふむ。

龍也「俺も良いか？」

果南「うん! 一緒に泳ごう!!」

そして果南の実家に戻ると、

松浦母「果南、龍也くんお帰りなさい」

松浦父「お前は帰……「あなた？」ブルツ」

うくん、お義父さんとも仲良くなりたいたいんだけどなあ……。

松浦父「お前にお義父さんと呼ばれる筋合いは無い！」

!?! 地の文読まれた!?!

果南「お父さん……。いい加減認めてよ……。」

松浦父「ダメだ！」

松浦母「全く、何がそんなに不満なのよ？」

松浦父「俺から可愛い娘を奪っていこうと言う奴と仲良くなどできん！」

……それって、

果南「ただの嫉妬じゃん……。」

松浦母「いい加減にしなさいあなた……みつともない」

松浦父「みつともないとはなんだ!!」

果南・松浦母「みつともないでしょうが!!」

2人から渾身の一撃を貰って泣き崩れるお義父さん「お義父さんじゃない!」……

どうすればいいのやら

果南「まったく……龍也、海行こう？」

龍也「おう」

松浦母「あら？ダイビング行くの？」

果南「うん。久しぶりにね」

松浦母「じゃあ私が船出してあげるわ。お父さんにやらせると龍也くんを海に置いてきそうだから」

松浦父「グスン……」

龍也「あ、あはは……」

そしてダイビングスーツに着替えた後、お母さんの出してくれた船でダイビングのスポットに向かう。

果南「行くよ！」ザボン!!

龍也「おう！」ザバァン!!

俺と果南が海に潜ると、内浦の海の魚たちが歓迎してくれた。警戒心もなくこちらに寄ってきて、突ついてやると踵を返して泳いでいく。

俺と果南が息継ぎに海面に顔を出すと、

松浦母「果南！イルカが向かってくるよ！」

果南「ホント!? 龍也、待ってよ?」

龍也「おう!」

俺達がいざらく待っていると、イルカたちが跳ねながらこちらに泳いできた。

果南「あはは……くすぐりたいよ」

イルカたちが果南にすり寄る。俺の方も前に来た時に気に入られていたのか顔を近づけてくるので頭を撫でてやるとキュウキュウと鳴く。

松浦母「我が娘ながら、ほんつと人魚姫だねえ……」

果南と俺はしばらくイルカたちと戯れると、イルカたちは沖へと帰っていった。

果南「……戻る?」

龍也「そうだな」

俺と果南は船で島に戻るとシャワールームでシャワーを浴びる。

シャワールームは個室なので別別に浴びてはいるのだが……、

果南「龍也、一緒に浴びない?♡」

龍也「それは流石に無理!! // // //」

理性が持たないよそんなの……。

果南「むう……」

そして俺がシャワーを浴び終わると、

龍也「じゃあ先出るぞ？」

個室の扉を開けると、

果南「隙ありっ！ハグッ!!」

ムニユン!!

裸の果南が正面から俺に抱きついてくる。当然俺も裸。その上果南の豊満なお胸様が俺に押し付けられる。

そうなると当然、俺のムスコも大変なことに……。

果南「くく♡」

はぁ……

龍也「果南……」ギユツ

仕方ないので、果南を抱きしめてやると、しばらくして満足したのか果南はシャワーームを出て行った。

龍也（……ムラムラするに決まってるおおおおっ!!!）

ー つづく ー

After story : アメリカ到着

内浦へと龍也と果南が帰還してから数日後、舞台を再び東京に移す。

龍也「お待たせ」

果南「みんなもう来てるね」

鬼道「いや、集合時間まではまだあるぞ」

俺達日本代表は、ワールドカップが行われるアメリカに行くために大江戸国際空港にやって来ていた。もう既に空港には報道人が詰めかけており、選手は全員スーツの正装で集まっていた。

ことり「ことりたち注目されてるね」

穂乃果「うん！ そうだね！」

ツバサ「あなたたちは代表に途中加入した選手だからね。私たちは実力を知ってるけど、FBIを見てない人たちからは懐疑的なよ……」

豪炎寺「出番が来たら実力を見せて黙らせればいいさ」

善子「そうさせてもらうわ」

すると、監督が最後に来て全員いることを確認する。

森島「よし、全員揃ってるようなのでアメリカに向けて出発する。行くぞ！」

日本代表『はい!!』

そして報道人がカメラのシャッターを切る中、俺達は搭乗ゲートまで行き日本代表の飛行機に乗る。ここから開会式が行われるアメリカのミシガン州にあるスタジアムの近くのホテルに行き開幕式のあと一泊してから試合のある州のスタジアムへと移動する。

そして、飛行機は12時間のフライトで、アメリカへと飛び立った。

俺達が離陸する飛行機から外を見ると、空港の展望台では日本の旗を振って見送る人たちが大勢いた。

龍也「果南、絶対に勝とうな？」

果南「うん！」

みんなが戦いに備えて眠るものが多い中、俺は大会の参加者名簿を見ていた。

龍也「おっ！」

円堂「んく……？ どうした？」

円堂は眠そうに大あくびをすると、俺に声を掛ける。

龍也「大会の参加選手見てたんだよ。イタリアにイギリス、アルゼンチンにアメリカ、

ロシアにブラジル、コトアール。アイツらとまた闘えるみたいだぞ？」

円堂「!? それってもしかして……!」

龍也「ああ。ファイデオやエドガーたちだよ。知ってるやつほぼ全員メンバーに入ってるぞ」

それを聞いた起きていたF F I組は喜びの声を上げる。権代さんや三河さんには何事かと聞かれたから高校の時のことを話してやった。すると、

三河「そうなのか……。ライバルとの久々の試合になる訳だな?」

龍也「ええ。舐めてかかれる相手じゃないことは俺達に分かっています。全力を持って叩き潰しますよ。向こうも同じ気持ちでしょうし。それが礼儀ですから」

東野「そうか……。なら、いいさ」

森島（……………）

そして飛行機はアメリカの空港に到着。そこからバスに乗り込み宿舎となるホテルへと向かう。

のだが、

森島「よし、あのバスだな……ん?」

すると、バスの前に、他国の代表と思われる1人の男性とロングの銀髪の女性がいた。

あれは……………、

森島「おい、そこで何……」「あつ、監督大丈夫です。ちょっと行ってきます」おい、大海!？」

果南「あたしも！」

円堂「おれも!!」

森島「お、おい!!」

俺達が、その2人に声を掛ける。

龍也「久しぶり。フィディオ、システイ」

俺の声で二人は振り向く。

フィディオ「久しぶりだね。リュウヤ、マモル！」

システイ「果南も久しぶり！」

果南「久しぶり！」

円堂「フィディオ！」

フィディオ「ふっ、相変わらずだね。マモルは。君たちならきつと勝ち上がってく
ると思っていたよ。なら僕たちも負けるわけにはいかないからね」

龍也「ああ。またやれるんだな」

フィディオ「楽しみにしてるよ。リュウヤ」

豪炎寺「挨拶は3人にだけか？」

システイ「あっ、みんな!!」

吹雪「久しぶりだね。ふたりとも」

俺達が久しぶりの再会に会話を弾ませていると、監督から声がかかった。

森島「セリエAで頭角を表している新星、フィディオ・アルデナにシステイナ・フィーベル……お前から知り合いなのか？」

龍也「ええ。FFIのときに」

フィディオ「日本の監督さんですね。はじめまして。フィディオ・アルデナです」

システイ「システイナ・フィーベルです」

森島「これはご丁寧……監督の森島です」

フィディオ「ここで待っていただければ、マモルたちに会えるかと思ひまして。今日到着との事でしたので。日本なら、きっと勝ち上がってくると思っていますので、戦るのを楽しみにしています」

森島「……ずいぶん買ってくれてるんですね」

フィディオ「ええ。マモルやリュウヤ、カンナたちがいて予選敗退はありませんから。俺達は確信しますよ。日本は必ず決勝トーナメントに上がってくるって」

森島「……そうですか」

フィディオ「では、俺達はこれで」

システイ「ばいばーい！」

果南「バイバイ！」

森島「……………ふう、よし。じゃあホテルに向かうぞ」

日本代表『はいー！』

そして、バスはホテルに向かい、荷物を各自の部屋に置いてユニフォームに着替えてからロビーに向かう。

そして全員揃い、

森島「よし、揃ったから開幕式の会場になるミシガンスタジアムに行くぞー！」

娘の大会の開幕式、そして決勝の舞台となるアメリカで最大のスタジアム。ミシガンスタジアムへとバスで向かった。

ー つづく ー

After story : 開幕! ワールドカップ!!

アメリカに到着し、ホテルで準備を終えてからバスで開会式が行われるスタジアムに到着した日本代表。

開会式まではまだ1時間ほどあり、俺は監督に断りを入れてお手洗いに向かう。

龍也「ふうく……」
すると、

? 「調子はどうだ?」

? 「まあお前のことだから絶対調だろうけど……」

龍也「まあ、ボチボチ……!?!」

突然の声に俺が我に返って両隣を見ると、

テレス「久しぶりだな大海」

エドガー「また君と闘えて嬉しく思うよ」

龍也「エドガー! テレス! おお、久しぶり!」

俺達は久しぶりの再会を喜んだ。

テレス「まあ、今大会は絶対に日本に点はやらないからな? 今度こそ完封して完璧

に勝つ！」

エドガー「イギリスも同じだ。FFIの雪辱、晴らさせてもらおうぞ」

龍也「おう、俺達だって負けねえよ。試合ではよろしくな。全力で闘おうぜ！」

テレス・エドガー「もちろんだ!!」

そして俺は皆の所に戻る。すると、

イチノセ「円堂！ 皆！」

円堂「一之瀬！ お前、怪我の影響は……」

イチノセ「ああ、もうすっかり治ったよ！ FFIの時は不完全燃焼だったけど、も

う気にしなくて大丈夫！」

円堂「そつかあ!! 俺、嬉しいよ!!」

イチノセ「俺もだよ！」

豪炎寺「試合では全力でやろう」

ディラン「オーケイ！ 今度こそ勝たせてもらうよ!!」

マーク「この大会こそ、世界一になるのは俺達だ！」

アイツら……！

龍也「それは……」「それはどうかな？」ん？」

俺の後ろから、円堂たちに話しかけた男がいた。

円堂・龍也 「ん? ってああー!」

豪炎寺 「ロニージョ!!」

FFIで闘った、ブラジル至上最強との呼び声高い”キング・オブ・ファンタジスタ”、マック・ロニージョが立っていた。

ロニージョ 「ボーイ、久しぶりだな」

龍也 「ロニージョ!! あのと時の影響はもうないのか?」

ロニージョ 「ああ、あの時に植え付けられたガルシルドのプログラムの影響なら、もうとつくに消えてるよ。今度は、最初から最後まで自分の実力で君たちと闘えるのをたのしみにしてるよ!」

円堂 「ああ! 俺達だつて負けないさ!」

龍也 「円堂、さつきトイレでエドガーとテレスに会ったぞ?」

円堂 「ホントか!」

ロニージョ 「あの2人とは俺は昨日話したよ」
すると、

? 「あつ、日本代表」

? 「穂乃果! 皆!」

穂乃果 「あつ! 絵里ちゃん!! フロイさん!!」

絵里「当たったら今度こそ勝たせてもらおうわよ！」

果南「のぞむところだよ!!」

そうして笑い合う皆。すると、あつという間に開会式の時間が迫って来たので全員各チームに戻っていった。

そして、いよいよ開会式が始まった。ワールドカップの出場チームは計16チーム。それが4つのグループステージに4チームずつ別れて争うことになる。

出場チームは、

ヨーロッパ地区

イギリス、イタリア、ドイツ、スペイン、クロアチア、ロシア

南北アメリカ地区

アメリカ、ブラジル、アルゼンチン、コロンビア

アフリカ地区

コトアール、エジプト、ウガンダ

アジア地区

日本、ウズベキスタン、シリア

だ。ウズベキスタンとシリアはアジア予選では日本と別のリーグポッドに居た為に当たることは無かったが、別リーグを勝ち上がりワールドカップ出場を決めた。

そして選手入場し、開催国であるアメリカサッカー協会、とFIFAのお偉いさんが挨拶し、開会式は無事に終了した。

そしてその日はホテルに戻り何事もなく一泊。

翌日、日本の入ったグループBの試合が行われるオクラホマ州に飛行機で飛んだ。そして2日後、いよいよワールドカップ初戦、クロアチア戦だ。

ー
つづく
ー

After story：本戦グループステージ1戦目 vsクロアチア

開会式の翌日、飛行機でグループBの試合が行われるオクラホマ州に飛んだ俺達日本代表は代表宿舎に入りそれぞれ荷物を置いたあとで練習着に着替えてグラウンドに出る。

練習着はユニフォーム上下セットの上半身に追加でユニフォームの上からジャージを着るスタイルが一般的だ。

練習着に着替えた俺はグラウンドに出る。すると他の皆も何人か既に集まっており、監督と他のみんなを待つ俺達。

そして全員集まり、監督も来ていつもの練習を始める。

龍也（ふう、世界大会までに目標荷重身につけてできるようになって良かった……）俺はみんなにバレぬ様に身体や手足に合計60キロのおもりを付けている。それでも普通に動かせるようになったのだから基礎体力は間違いなく向上しているだろう。

そして明日の試合に備えてその日は早めに練習を切り上げてチームミーティング。クロアチア代表のデータをおさらい。

やはりというか、クロアチアは引いて守ってカウンターのサツカーが強力だ。その分守備は統率が取れており、FWにも決定力のある選手が集まっている。

森島「……………」と、これがクロアチア代表の試合データだ」

穂乃果「いやはや、守りも攻めも苦労しそうだねえ……………」

龍也「でも、守りはアルゼンチン以上ってことはないし攻めもイギリスよりは下だろ……………」

俺の意見にF F I組は同意する。

堂峯「このレベルのプレーをそんなサラツと言うなよ……………」

権代「世界トップの組織力なんだぞ……………」

ベテラン組は俺達の言葉に引いているが、もちろん油断などする気はない。

龍也「でも、もちろん最初から全力で戦いますよ。世界の舞台で舐めてかかったら一気に押し切られて待つのは敗北の二文字ですからね」

果南「うん。それは当たり前」

海未「そうですね。それが勝負の礼儀でもあります」

東野「それが分かかってるなら良いか」

三河「ああ……………」

森島「よし、では明日の先発は……………G K権代！」

権代 「はい!!」

続いてDFが呼ばれる。

森島 「DF、左から綱海、津島、鹿角、吹雪」

綱海 「おう！」

善子 「はい!!」

聖良 「はい!!」

吹雪 「はい！」

次に呼ばれるのはDMF。

森島 「ボランチ、不動！」

不動 「へーい」

お次はOMF。

森島 「MF、左から松浦、鬼道、星空！」

果南 「はい！」

凜 「わかったにゃ！」

鬼道 「分かりました」

そして最後、FW。

森島 「最後はFW、左から大海、豪炎寺」

龍也・豪炎寺 「はい!!」

森島 「以上だ。だが、場合によってはすぐに交代して対応するから気を抜くなよ?」

日本代表 『はい!!』

森島 「では、解散!」

そして次の日、試合が行われるオクラホマ・フォート・スタジアムに行く俺達。ロックールームで準備をし、試合開始が近づいてきたので入場ゲートに行くとクロアチア代表はもう待っていた。

龍也 「ふう……」

果南 「緊張してる?」

龍也 「ああ、ちよつとな」

豪炎寺 「勝つぞ、大海」

龍也 「ああ!」

そして時刻になり選手入場。整列してお互いの国の国歌斉唱。その後コイントスでどちらが先攻かを定める。結果はクロアチアのキックオフからだ。

試合前の円陣……

権代 「いよいよ、ワールドカップ初戦だ。相手は強豪クロアチア。自身の持てる力を

すべて出し切って、勝利をもぎ取るぞ!!」

日本代表 『『おう!!』』

そして、選手がスタートの位置につく。

クロアチア代表

G K

リビッチ

D F ヴイーネ（女） シュタルク サナ（女） スタリッチ

D M F

マイヤー

O M F リーラ（女） モルドリッチ コルニ（女）

F W

ディミル

ピアンカ（女）

日本代表

F W

龍也 豪炎寺

O M F

果南（女） 鬼道 凜（女）

D M F

不動

D F 綱海 善子（女） 聖良（女） 吹雪

G K

権代

選手が位置につくと、電光パネルにカウントダウンが表示され、カウントされていき
……0になった。

審判「試合開始!!」

KICK OFF!!

そして、審判の笛とともにクロアチアボールで試合が開始された。

ー つづく ー

A f t e r S t o r y : 電撃力ウンター

ワールドカップ本戦、グループBグループステージ初戦、日本代表対クロアチア代表の試合が始まった。

試合はクロアチアボールで始まり、ボールは中盤のマイヤーへ。

龍也「行くぜっ!!」

龍也は序盤からハイプレスを仕掛けてボールを狙う。しかしクロアチアはボールをディフェンスラインまで下げてパスを回しながらこちらの出方を伺う。

こうなつて来るとプレッシングをまともに続けているとすぐにガス欠になるのが目に見えているため俺はプレスの勢をかなり弱める。

サナ パシッ「……………」

ボールを受け取ったサナ。しかしこちらが中々奪いにこないなのでパスを繋いで自分たちから攻めることにしたようだ。

ボールはマイヤーへと渡る。

鬼道「取る!!」

鬼道がディフェンスに入る。するとマイヤーはボールをサナに戻し、ボールはサナか

らスタリツチへと渡る。

凜「凜が行こうか?」「いや、俺が行く!」任せるにや」

凜がボールを奪いに行こうかと提案すると、豪炎寺が俺が行くと言いプレスをかける。

するとボールを回すクロアチア。徹底してこちらの最終ラインを上げさせる狙いだ。

不動「お前ら、下手に上がって誘いに乗るなよ?」

聖良「分かってます」

善子「ええ。あからさま過ぎるわよ……」

すると、ここでクロアチアが動く。両サイドハーフのコルニとリーラが突然ダツシュで駆け上がり、それに同期してサナからコルニにロングパスが飛ぶ。

吹雪「僕が行く!!」

ここでこのボールに対応したのは吹雪。ボールの落下地点に入り、コルニと同時に跳躍してヘディングで競り合う。

ゴッ!

吹雪「っ!」

コルニ「ッ!」

コルニのヘディングで弾かれたボールはフォワードのピアンカへ。ピアンカがト

ラップした瞬間を狙い、不動がスライディングで突っ込む。

不動「貰った!!」

ビアンカ「どこがよ!!」クイツ!!

しかしフェイクで不動を躲した。そして聖良と一対一。

龍也「聖良! 突っ込むなよ!!」

聖良「分かってます!!」

しかし聖良は言われたとおりに突っ込まずに相手の挙動にバランスよく対応できる間合いを保ちながらデイフェンスをかける。

ビアンカ(っ!) この子やるわね……なら!) パスッ

ビアンカはもう一人のフォワードのティミルへとパスを出す。斜めに入ってきてこちらの選手の間を縫うようにパスが繋がれティミルは直蹴撃弾ダイレクトシュートの体制に入る。

デイミル「挨拶代わりだ!!」

そして、デイミルの足がボールに振り下ろされる瞬間、
パンツ!!

デイミルの足元から、ボールが消えた。

デイミル「……………えっ、あれ? ボールは?」

綱海「ナイス善子!!」

クロアチア『!?!』

ボールは善子が奪っていた。かつての選考戦で俺も苦しめられたあの技で。

善子「《ディフェンドエリア守備聖域》!! 果南!!」

何はともあれチャンス到来。クロアチアは今両サイドハーフが上がっており両サイド手薄。今のうちに速攻で点を取る!!

リーラ「まずい戻って!」

果南「ナイス善子ちゃん! 行くよ!!」

相手が戻ってくる前にドリブルで突破を試みる果南。しかしモルドリツチとマイヤーが止めに入る。すると、モルドリツチが上えと跳び上がり、マイヤーが下からボールにスライディングを仕掛ける。

龍也「果南! 必殺技来るぞ!」

果南「オツケー!!」

すると果南の周囲が暴風吹き荒れる大荒れの海に変わり、界面から空に向けて登る竜巻が相手のディフェンスごと吸い込んで海の中へと引きずり込んだ。

果南「[サイクロンズバミューダ・G3]!!」

果南の必殺技で中盤を突破。残りはディフェンス2枚だ。

シユタルク「俺が行く! サナはフォロー頼む!」

サナ「分かった！」

ここでシユタルクがディフェンスに向かい、サナが後衛でフォローの体制を取る。

果南（っ！さすがに、上手いね……）

しかし、果南も中々抜くことができない。ここで果南はパスを選択。

果南（良いところ走ってるじゃん！）パスッ！

全員の視線がボールに集まる中、サイドラインギリギリを走っていた凜にパスを出す。

凜はノーマークでパスを貰い、そのままセンターリングを上げた。

凜「中！ 決めるにや!!」ドッ！

凜からのゴールから僅かに逃げるような内^{イン}回^{サイドスピン}転クロス。

選手がゴール前に密集する。

龍也「もらった!!」

龍也がそれをヘディングでダイレクトで合わせる。

しかし、

リビッチ「ふっ！」ガチィッ！

キーパーの跳躍からのガツチリとボールをキャッチ。攻撃は不発に終わる。

リビッチ「行けっ！」

龍也「っ！ まずい戻れ!!」

モルドリツチ。「今更遅いぜ!! リーラ!」

ボールを前線で受け取ったモルドリツチはリーラにパスを出す。急いでディフェンスに入る綱海。

だが、

リーラ「ジグザグスパーク・V4!!」

ジグザグの軌道から電流が流れる必殺技で感電したディフェンス。突破を許してしまい善子がディフェンスに行く。

善子「っ!!」ダツ!!

リーラ「ディミル!!」パスッ!

ここでディミルへとパスが繋がる。

善子「撃たせないわよ!!」

すかさずディフェンスに入る善子。だが、

ディミル「……………」スルッ

なんとディミルはこのボールをスルー。そこにもう一人のフォワード、ビアンカが走り込んでくる。

ビアンカ「ふっ!」ドガアアアアアッ!

ビアンカの直蹴撃弾が日本ゴールに襲いかかる。

完全にこちらのディフェンスの裏をかかれ、シュートブロックは間に合わない。

権代「くそっ！」バツ！

権代さんが体制を立て直して跳躍するがボールは権代さんの手の数センチ先を通過してゴールネットに突き刺さった。

GOAL!!!

JPN 0 - 1 HRV

実況「ゴール!! クロアチア先制ーっ!!」

解説『守りからの攻守逆転、クロアチアらしい攻めでしたね』

実況『さあ、果たして日本は追いつけるか!』

鬼道「切り替える! まだ試合はここからだ!」

日本代表『『ああ(おう)!!』』

日本 0 - 1 クロアチア

前半残り32分

ーつづくー

After story : 激闘

クロアチアのお家芸であるカウンターをFWのピアンカに日本ゴールに叩き込まれクロアチアに先制される。

だが、まだ試合は始まったばかり。立て直すには十分な時間がある。

鬼道「まずは最低でも前半のうちに追いつくぞ！」

日本代表『『おうー！』』

そして日本ボールで試合再開。ボールは鬼道に渡り、そこにクロアチアもFW2人で詰めてくる。

鬼道「(たしかこの二人はディフェンス技は無かったハズ。ならー) 不動！」

不動「オッケー!!」

クロアチアの動きに合わせて、鬼道と不動がボールを挟み込むように蹴る。その衝撃でボールから衝撃波が発生。ディフェンスに入った2人を吹き飛ばす。

鬼道・不動「『キラァーフィールズ・S』!!」

2人を突破した鬼道。さっそくゲームの組み立てを開始する。

鬼道「〈超越^{メタビジョン}視界〉!! 星空ー」

鬼道の指示で凜がダツシユ。そのままボールを取る。

マイヤー「行かせつかよ!!」

鬼道「豪炎寺だ!」

凜「了解にや!」パスッ!

鬼道の指示で凜は少し浮いた球を豪炎寺に出す。しかし豪炎寺は背にサナとスタリツチの2人のデیفエンスを背負っている。

サナ「振り向かせないわよ!」

豪炎寺「っ!」豪炎寺!ヘディングで落とせ!」分かった!」パスッ!

しかし豪炎寺は鬼道の指示でヘディングでボールを返すようにポストプレイ。ボールは再び鬼道。

そして、

鬼道「松浦!」

そのボールをダイレクトで果南に送る。

果南「オツケー!!」

豪炎寺との絡みでクロアチアデیفエンスはやや右サイドに引つ張られており、そこで左サイドに変えるボール。

左サイドのデیفエンスであるヴィーネが急いで止めに行く。

ヴィーネ（突っ込むと抜かれるわね……）

しかし、相手も適切な間合いを保ってディフェンスをかけてくる。

必殺技はモーションに入った瞬間カットでき、技術で抜こうにもそう簡単に置き去りにできる距離ではない。

果南（やつぱり上手い……でも、必殺技は悪手！）

果南は技術の勝負を挑んだ。ボールを細かくタッチして動かしながら相手の隙を伺うが、中々体勢は崩れない。

果南（!! なら……）

果南はシザースで左に抜こうとするが、一瞬隙ができてしまう。しかし、これをクロアチアは見逃さない。

ヴィーネ「っ！ 貫った!!」

すかさず足を伸ばすクロアチア。だが、

果南「引つ掛かったね！」クツ！

しかし果南はこれをボールを止めてフェイクで躲した。

ヴィーネ（っ！ しまつ、釣られた!!）

そして逆に切り替えてヴィーネを抜いた果南。ゴール前に躍り出てシュート体勢に入る。

果南を水の竜巻が包み、それに乗ってぐんぐん上昇。水のエネルギーを込めた弾丸を撃ち落とした。

果南「激流ストーム・Gx」!!」ドゴオオオオンッ!!

果南のシュートがクロアチアゴールに襲いかかる。キーパーリビッチは落ち着いて必殺技を繰り出す。

リビッチ「キャツスルゲート」!!」バチインッ!

しかし、リビッチの前に城門が現れ、鉄格子の門が閉まってシュートを弾き返した。そのままボールは跳ね返されてマイヤーに渡る。

マイヤー「残念だったな! 行くぞ!」

鬼道「不味い! 戻れ!」

ここでもたしてもクロアチアのカウンター。パスを繋いで的を絞らせずに攻め上がってくる。

ビアンカ「リーラ!」

ビアンカからボールは逆サイドから駆け上がってきていたリーラへと飛ぶ。

リーラ「オツケー……「させるかつ!」ドガッ! つ!!」

しかしこれを綱海が飛び出してヘディングでクリア。ボールはタッチラインを割ってクロアチアボールのスローイン。

龍也「ナイス綱海！」

綱海「おう！」



リーラ「ゴメン……」

ピアンカ「いや、あのディフェンダー思い切りがいいね……」

モルドリツチ「ああ。あの状況、まにあわなかったら間違いない点が入ってた……。とんだギャンブル仕掛けてきたな……」

クロアチア代表は、綱海に目を向けていた。

さて、クロアチアボールのスローイン。リーラのスローインからボールはディミルへ。

ディミル「よし！」「させるわけ無いでしょ！」バシツ　っ！」

しかしこれを善子がディフェンドエリア〈守備聖域〉でカット。ボールを不動に渡す。

不動「ナイス！」

不動はそのままドリブルでボールを運ぶ。そこへマイヤーがディフェンスに来る。

マイヤー「行かせるか！」

不動「っ！」

不動とマイヤーの鏝迫り合いが始まる。不動もテクニックで応戦するが、中々抜かせてくれない。

不動「……………」チラッ

龍也「!!」ダッ!

不動と一瞬でアイコンタクトした俺は急いで不動とマイヤーを一直線に挟める位置に移動する。

マイヤー「ほら、抜けないなら渡しな！」

不動「(よし!) 悪いがお前の……………負けだ!」パスッ!

ここで不動は空いたマイヤーの股下を通して股抜きパス。ボールはそのまま俺に渡る。

龍也「ナイス!」

シュタルク「させるかつ!」

ここでシュタルクがデイフェンスに来るが、俺は距離があるうちにシュート体勢に入る。

龍也「くそっ！」

シュートは外れたが、コーナーキックだ。

日本 0 - 1 クロアチア

前半残り18分

ー つづく ー

After story : クロアチア戦、前半終了

ワールドカップ予選リーグクロアチア戦も前半の残り半分を切り、日本ボールのコーナーキックから試合再開。キッカーは不動で龍也には厳しいマークが付いている。

不動（だよなあ……）

不動も龍也へのボールは無理だと判断したのだろう。他のターゲットを探す。

不動（……よし）

そして不動が助走の為にボールから離れる。そして審判の笛が鳴る。

不動は走って行ってボールを右足のインフロントで斜めに擦り上げる様に蹴る。

ボールは内^{インサイドスピン}回転がかかり緩いカーブを描きながらゴールに直接向かって行く。

龍也（っ！）ダッ！

龍也はボールの落下地点とキーパーの間に走り跳んだ。

リビッチ「っ！させるかっ！」

シユタルク（身体をぶつけられれば！）バツ！！

背後からはキーパー。横からはデイフェンスがそれぞれ跳び、シユタルクは横から身体をぶつけてくる。

龍也（っ!! このくらいっ!!）ドカッ!!

しかし龍也は鍛え上げられた体幹で空中戦を制してシュタルクを弾き返した。

シュタルク（っ!?! コイツなんて体幹してるんだ!!）

そしてカーブを描いて向かってきたボールを、

龍也「オラッ!」トッ!

龍也は来たボールをゴールに押し込むのではなく逆に味方にボールを跳ね返して返した。

受け取ったのは……

凜「ナイスだにゃ!!」

ここでボールは日本のスピードストライカー、凜に渡る。

そして、凜からクロアチアゴールの一点まで、シュートコースがボール1、5個分空いていた。

マイヤー「不味い!」

サナ「通させないわ!」バツ!

ディフェンスのサナが急いで足を伸ばしてシュートコースを塞ぎに行く。

凜「遅いにゃ!!」超・ジェットウインド!!」ドゴオオオオッ!!

凜の超人的な脚力から産まれる全スピードをボールに乗せ、超スピードシュートがク

ロアチアゴールに迫る。

ギユオンツ!!

サナ「っ!!」

ボールはサナが急いで伸ばした足よりも早く通過。そのままクロアチアゴールに迫る。

リビツチ「っ! オラツ!!」

日本でのアジア予選の最中に行った選抜戦では権代さんは反応すらできなかったスピードに相手のキーパーはかろうじて飛びつく。

反応できていた。……だが、

バシユウウウウウウツ!!

反応できても、間に合うかは別の話。飛びついたキーパーだが、手を伸ばした時には既にボールはラインギリギリにあり、そのままネットに突き刺さった。

GOAL
!!!!!!

JPN 1 1 HRV

会場の応援に駆けつけた日本サポーターから大歓声が起こる。

逆にクロアチアサポーターからは『アー！』とショックの声。

実況『ゴォーォール!! 日本、星空凜の必殺技で同点ゴォーォール!!』

解説『シュートのスピードが異常に早かったです。これはそう簡単には取れませんよ

……』

実況『さて、クロアチアボールからリスタートです!』



デイミル「やられたか……」

ピアンカ「取り返せばいい話よ」

モルドリツチ「だがあのMF、要注意だな」

そしてクロアチアボールのキックからリスタート。ボールはモルドリツチへ。

モルドリツチ「サナ!」

モルドリツチはボールをサナに戻し、デイフェンスラインでボールを回し始める。

龍也「行くぞ豪炎寺!!」

豪炎寺「ああ!」

龍也と豪炎寺は前線からクロアチアディフェンスラインにハイプレス。

しかし相手も近づく寸前でパスを出して徹底してコチラを走らせてくる。

そしてボールはスタリツチへ……

サナ「そんなハイプレス続けて体力持つと思ってるの?」

相手のディフェンダーが話しかけてきたので返してやる。

龍也「まあ、意味もなく走ってたらただの自滅だろうな。……意味が無ければ、
だけ」

サナ「? ……っ!!」

しかし、気づいた頃にはスタリツチへと出たボールに凜がとんでもないスピードで向
かっていた。あのスピードなら、相手がパスを受け取る寸前でカットできる。

サナ「ウソ!? 何あの子?! 早すぎる!!」

サナは急いで取られたあとのカパーに向かう。

スタリツチ「っ!!」

そして案の定スタリツチがボールを受け取る前に僅かに早くたどり着いてカットす
る。

ベキ！ ベキベキツ！！

リビツチ 「っ！！」

城門の鉄格子は、シュートの勢いに鈍い音を立ててどんどん曲がっていき、バキイイイツ！！

遂に耐えきれずに音を立てて粉碎され、シュートはゴールに突き刺さった。

GOAL!!!!

JPN 2 | 1 HRV

実況 『日本！ 前半終了間際に逆転ゴールーール！！』

解説 『パスを誘導してスピードで仕留める、見事でしたね』

◇◆◇◆◇◆

ピアンカ 「う、ウソでしょ……………？」

モルドリツチ 「チツ くそっ！」

相手も驚いたり舌打ちしたりと様様な反応。格下と思っていたチームにここまでやら

れて戸惑っているだろう。

マイヤー「切り替えろ!!何としても逆転するんだ!」

クロアチア『『おう!!』』

そして、クロアチアボールのキックからリスタート、そして……

ピツ、ピツ、ピイイイーツ!!

ここで、前半終了の笛が鳴った。

日本 2 ー 1 クロアチア

ー 前半終了 ー

ー つづく ー

After story : クロアチア戦 後半開始

ワールドカップ本戦、グループステージ1戦目のクロアチア戦もいよいよハーフタイム。現在2-1で日本がリードしており、監督から指示が出る。

森嶋「前半の最初はヒヤツとしたが、上手く立て直せたな。後半はサイドから相手を崩してからセンタリングを上げてシュートをするシンプルな戦術で行こう。デイフェンダーもシュートブロックに上手く入ってキーパーの負荷を減らすこと」

日本『はいー』

森嶋「よし、選手交代は無いが各自の仕事をしっかりするように。行って来い！」

そして、両チーム選手がフィールドに出てきてポジションにつく。

そしてセンターサークルに龍也と豪炎寺が入る。

豪炎寺「行くぞ」

龍也「ああ」

ピイイイーっ!!

KICK OFF!!!

審判の笛と共に日本ボールで後半開始。ボールは鬼道に渡り、そこからサイドの凜へ

とボールを振る。

凜「よっと！」

ボールをトラップした凜。そこへコルニが止めに入る。

凜「全速前進だにや！」

凜は左右のステップでボールを細かくタッチしながら相手を動かして一瞬の間隙を突いてスピードで抜き去った。

コルニ「っ!! この子早い!!」

凜はそのままサイドから駆け上がると、シュートコースにサナ。サイドラインにスタリツチが立ち止めに入る。

スタリツチ「これ以上進ませない！」

スタリツチはダツシユで凜に近づきスライディングタックル。

凜「にやつ!!」

凜は躲そうとしたが予想以上に早かったため間に合わずにまともに喰らいボールを奪われた。

スタリツチ「よし、マイヤー!!」

そしてボールはマイヤーに飛ぶ。

龍也「不動!!」

不動「任せろ!!」

しかし落下地点に不動が入り込んでマイヤーと競り合いポジションを取り合う。すると、

不動「……………」

クンツ!

マイヤー「!?」

マイヤーは力で不動を外に締め出していたのだがら不動は急に力を抜いて斜めに動いて回り込む。力の受け口が突然無くなったマイヤーはたたらを踏み、不動が中のポジションを取った。

不動「鬼道!!」パスツ!

不動はヘディングでボールを鬼道に落とし鬼道はボールを今度は果南に振る。

果南「オツケー!!」

果南はそのままサイドラインを駆け上がると、シュート体勢に入る。

リビツチ「!! 必殺シュート来るぞ! ブロックだ!」

シュートブロックのためにコースに割り込んでくるクロアチアディフェンス。

だが、

果南「激流ストーム・Gx!!!」

果南の必殺シュートは、ゴールではなくフィールドの内へと飛んでいく。そこへ走り込んでいたのは、

豪炎寺「ナイスだ松浦!!」ドガアアアアアッ!!

果南の「激流ストーム」を豪炎寺が直蹴撃弾で合せてぶつ放す。必殺技の威力とノーマルシュートのクイックネスを併せ持ったライナーシュートがクロアチアゴールの左上隅に飛んでいく。

リビッチ「っ！ これ以上点をやるわけにはいかない!!」うおおおおおっ!!」ガチイッ!!

しかし、リビッチはこのボールに飛び付いてダイビングキャッチ。両手でしっかりとボールを抑えて確保した。

果南「ウソ! マジ……?」

豪炎寺「驚いたな……」

リビッチ「よし、カウンターだ!!」ドッ!!

大きく蹴り出されたゴールキックは、コチラの頭上を超えて前線へと飛ぶ。ボールはサイドのリーラに飛び、そのままドリブルで駆け上がった。

綱海「行かせるか!!」

綱海が急いでマークにつくと、リーラはスピードを活かして細かなフェイクを連続し

て綱海を揺さぶってくる。そして股下が空いた瞬間股抜きで抜き去った。

リーラ「甘いわよ！ デイミル！」パスッ！

ここでボールはデイミルへ飛びシュートを放つ体勢に入る。

善子「このっ!!」

しかし、善子がシュートコースに割り込んでシュートブロックを試みる。

権代「!! 鹿角！ 吹雪！相手の狙いは逆サイドだ!!」

聖良「っ!! やばっ!!」ダッ！

吹雪「釣られた！」ダッ！

2人は急いで逆サイドのシュートコースに割り込む。

ビアンカ「っ!!」

モルドリツチ「やるな！」

デイミル「なら撃つ!!」**「極・グラディウスアーチ!!」**

デイミルのシュートが数本の剣と共に日本ゴールに向かってくる。

善子「止めるわ!!」バチィッ!!

しかし善子も身体を張ってシュートブロック。威力は弱まる。

権代「よしっ！止めるっ!!」ガチィッ!!

しかし権代さんも両手でシュートを受け止めてガツチリとキャッチして止める。

デイミル「っ！ くそ！」

権代「行けっ!!」ドッ!

権代さんのゴールキックからボールは左サイドの果南に飛ぶ。俺と豪炎寺、鬼道、凜も並走して駆け上がる。

シユタルク「逃さねえぞ！」

龍也「……………」

ヴィーネ「止めるわ!!」

そして果南とヴィーネの鏝迫り合いが始まる。そしてシユタルクの視線がそちらを向いた瞬間、相手デイフェンスの意識の外側から更に逆サイドの裏街道へと走り込む。

スタリツチ「!! シユタルク! マーク!!」

シユタルク「っ!! いつの間に!?!」

果南「ナイス龍也!」パスツ!!

ここで果南は龍也にパス。相手のデイフェンスは先程のシュートに備えてデイフェンスを固めてくる。

ならば根こそぎ薙ぎ払う!!

龍也はボールを受け取ると直接オーバーヘッドで下に落として左足で回転を加えて空気の膜をコーティングする。

そしてそのボールを思い切りぶっ放した。

龍也 「ラストリゾート D・G X!!」
ドラゴン

漆黒の邪竜が、地を這いながらクロアチアゴールへと襲いかかった。

シユタルク 「な、なんだこのシュート!?」

サナ 「なっ?!」

ドガアアアアアアッ!!

シユタルク・サナ 「ぐわあああああああつ (きやあああああああつ)!!!!」

2人になぶつかったにも関わらずシュートの威力は全くと言って良いほど落ちずにキーパーへと到達する。

リビツチ 「っ! 「キャツスルゲート」!!」

城門が現れ、上から鉄格子の門が降りてきてシュートをシャットアウト。だが、

ビシッ! ベキベキッ!!

リビツチ 「そ、そんなっ!!」

バキイイイッ!!

「ラストリゾート D」は「キャツスルゲート」をあつさりと食い破りゴールネットに突き刺さった。

GOAL!!!!

JPN 3 | 1 HRV

実況『ゴオオオオオオオオオオ!! 日本、大海龍也の必殺シュートで更に追加点!!』
 解説『恐ろしい威力のシュートでしたね。選手情報ではあれで日本の3部リーグの選
 手だと言うんですから驚きですよ……』

鬼道「よくマーク外したな」

龍也「なぐに。人間の目ん玉のつき方を活かしただけさ」

果南「たしかに。人間はまったくの別方向を複数同時には見れないもんね」

龍也「そういうことだ」

ピアンカ「日本ってこんなに強かったっけ……」

リーラ「そんな記憶ないわよ……」

モルドリツチ「最悪の場合、何としても引き分けに持ち込むんだ。それにはまずは点
 を取らなければどうにもならん。デイミル、ピアンカ、頼んだぞ」

デイミル・ビアンカ「ああ（ええ）……」

日本 3 ー 1 クロアチア
つづく ー